藤樹先生全集

至聖孔子十哲像

藤夫子行狀聞傳並補傳第四十四項參照（藤樹書院藏）

王陽明先生畫像

此畫像は惺軒高瀨博士が大正十四年支那留學中餘姚地方に於て得られたるものにしてその寫眞を藤樹神社に奉納せられたるものなり（藤樹神社藏）

藤樹先生畫像

補傳第三十八項並第四十四項參照

（藤樹書院藏幅）

蕃山先生畫像

（近江　蕃山文庫藏幅）

岡山先生畫像

（舊會津藩領内北川親懿翁
正系七世孫耶摩郡北山村
坂内俊夫氏藏幅）
（据大正七年五月發行雜誌
陽明學第百三十號）

藤樹先生全集

第五（別）册目次（自卷之四十二至卷之五十）

卷之四十二

卷之四十三

卷之四十四

卷之四十五

卷之四十六

卷之四十七

卷之四十八

題

記

碑文

祝文

祝詞

書翰

語　錄

詩

贊

頌詞

和歌

今様歌

俳句

巻之四十九

巻之五十

挿繪目次

第五(別)册目次　終

藤樹先生年譜其の他の内容細目一覽表

藤樹先生年譜

藤樹先生の出自。

慶長十三年戊申三月七日藤樹先生誕生。

元和元年乙卯—八歲
幼時鄕に在りし時の先生。

同　二年丙辰—九歲
先生祖父吉長に從つて米子に行く—書を習ふ。

同　三年丁巳—十歲
先生祖父に從つて大洲に往く—風早へ行く—庭訓式目—祖父悅ぶ。

同　五年己未—十二歲
食に丁りて三省の恩を思ふ。

同　六年庚申—十三歲

藤樹先生行狀

藤樹先生の出自—祖父先生を携へて豫州に移る—幼時の行狀—十一歲大學を讀んで志を立つ—十三經並諸子百家倭國の書—壁書—聖人の人に敎ふる外儀によるべからず—易經を學ぶ。

母堂先生を慕ふ—致仕(二十六歲)(訛)—懷母詩。

豫州の小子先生を慕ひ來學す—學舍—古藤樹。

藤樹先生事狀

藤樹先生の出自。

幼時の恭儉。

十一歲始て大學を讀んで志を立つ。

十三經を通誦す。

弱冠王子の書を讀む。(訛傳)

母堂の爲に祿を辭す—學舍—古藤樹。

易簡明白。

學問の主意頭腦—本體。

藤夫子行狀聞傳

序

系譜

○吉長—事歷。

○吉次—事歷。

○惟命—誕生—祖父に伴はれて伯耆に行く—文字を習ふ—父祖の敎育—天梁和尙—一食三嘆—立志—十三經—諸子百家倭國の書—壁書—易經を學ぶ—母を江州に省す—母を豫州に迎へんとす。母應ぜす—先生の述懷—老母を思ふの詩—致仕致仕書—致仕に關して取りたる先生の處置—若黨—先生命を京師

藤樹先生別傳

藤樹先生の出自—先生の誕生—卒去—祖父に養はる—出羽守泰興に事ふ—辭任願書—釋迦を以て傲慢の人となす—盜賊の來るを豫知す—缺落者を捕ふるの手段—圍棋を學ぶ—馬術を學ぶ—恭敬—盤珪禪師來る(訛傳)—盤珪禪師大洲公を戒む(訛傳)—先生死に至るまで母を忘れず—門弟子諸國より集る—淀舟咄。

(附)

馬術十一ヶ條。

須トの變—先生の勇—大洲に歸る。
同　七年辛酉—十四歲
家老諸士の對話を聞いて之を怪しむ—曹溪院天梁和尙に就いて書並聯句を學ぶ—祖母卒。
同　八年壬戌—十五歲
羞惡の心深し。
寛永元年甲子—十七歲
竊かに禪師に就き論語の講を聞く—大洲の俗武を專らにし文を鄙しむ—禪師京師に歸る—四書大全を求む—深更に及んで書を讀む。
同　二年乙丑—十八歲
本生の父吉次死。
同　四年丁卯—二十歲
朱學を崇ぶ—中川貞良輩學に志す—儒法

大學の解—陽明先生全書を讀む(三十八歲)(異說)良知—格致誠修云云の詩。
白鹿洞規(藤樹規の誤)。
學問の初志を立つるより先なるはなし。
學は本體を認知るを先務とす—良知—主忠信。
知止—能慮。
大學解と考—意知の辨。
意の字義。
自反愼獨を以て入德の筌蹄とす。

人間の第一義。
放心の祟。
先生の信仰。
事々皆主意あり。
修養上の工夫。
天拜—孝經及感應篇を持誦す。
先生の起床と朝務。
中川權左衛門狂見の弊あり。
先生夢について語る。
魄を以て魂を載するの心位。

に俟つ—廿八歲歲旦の詩—池田某と京師に會す—嶋川子に逢ふ—小川氏來學—先生の結婚—谷川寅落合左來學—大野了佐來學—中川貞良來る—吉田氏來學—持敬圖說並原人を著はす—藤樹規並學者座右銘を作る—山田權來學—中川熊來學—論語の解—太乙神を祭る—翁問答を著はす—王龍溪語錄並王陽明全集を讀む—孝經啓蒙を著はす—熊澤了介來學—中村叔貫來學—嗣子虎生る—小醫南針を著はす—詩經を講ず—中西氏弟子となる—淸水氏來學—神方奇術を著

を以て祖父を祭る。
同　五年戊辰—二十一歳
大學啓蒙を著はす。
同　六年己巳—二十二歳
荒木氏先生を目して孔子となす—母を江西に省す。
同　九年壬申—二十五歳
春江州に歸省し母を豫州に迎へんとす。母應ぜず—織部正に事ふ。
同　十年癸酉—二十六歳
蒯且を母を思ふの詩あり。
同　十一年甲戌—二十七歳
仕を致して江州に歸る—辭仕書—辭任に

習の説—習の歌
孝經—愛敬と良知。
教育法—先生學を講ずるの大要—瑟僴。
先覺の得失を論ぜず。
先生の起居動作。
先生の信仰—陰隲—敬神—前聖群賢を尊崇す。
邑令に對する恭敬。
先生の逝去—臨終の一言—備前少將光政—喪事。
先生の家庭。

門下の學者が先生に親炙せる間の心の狀態。
先生家を出でらるゝ時の光景。
用意と意念。
逸樂を戒む。
學者書を讀み學を務むるは農夫の業を治むるに異ならず。
大溝城主先生を引見す—城主家宰を責む—先生心を動かさず。
防箭法—直進避くるなきのみ。

はす—加世五來學—岩田仲愛來學—次男鑑生る—仲條太來學—分部伊賀守先生を引見す—夫人高橋氏死去—鑑草刊行—三男季重生る—先生卒去—先生の臨終—喪事—備前少將光政侯—葬送—先生道を以て自ら任ず—先生の多能—先生の妹。
○宜伯—事歷。
江君宜伯墓誌銘。
○仲樹—事歷。
○季重—出生—母—妻—幼時—光政侯に召され御近習となる—學校奉行—致仕—小川村に於て學を講ず—宗對州侯—朝鮮へ遣はさるべき議あり—御暇を請ひ小川村

ついての先生の處置—若黨を憐む—命を京師に俟つ—自活の道。

同　十二年乙亥—二十八歳

京師に至りて策儀を學ばんとす—易學啓蒙を得—先生所感を語る。

同　十三年丙子—二十九歳

京師に至り池田某並嶋川子に逢ふ—小川覺來學。

同　十四年丁丑—三十歳

高橋氏の女を娶る—貞淑—池田氏來學。

同　十五年戊寅—三十一歳

谷川寅落合左來學

大野了佐來學—中川

先生斯文の興起を以て自らの任とす—中川氏の狂見を憂ふ。

先生の永眠を惜しむ。

先生の多能。

著書。

本朝道學の開祖—卓立の君子。

（附）

藤樹先師學術旨趣大略。

道統之傳。

母堂佛學を信ず—その奥旨また悉く吾が儒教中に包まる。

唐船の至る甚だ國に益なし。

良醫と君子—淵氏始て先生に見え中川氏と語る—先生淵氏の言を聞き自ら治む。

淵氏船を傭ひ價を增して之を與ふ—自然の天祿。

舟に乘じて湖を渡るは危し—一葦に乘りて唐土に渡るも惧るべからず。

へ歸る—京都に於て學を講ず—江西文内—常省先生—狗尾を著はす—また對州君へ召さる—息藤介新知二百斛—江戸下谷の大火—常省子鄕に歸りて述懷—京都に閑居—小川村に歸る—卒去—葬送—石碑—藤介對州より歸り喪に服す。

先生の著書。

先生の門下並私淑者。

中川權左衞門。

加世八兵衞。

中村亦之允。

山脇左右衞門。

又右衞門。

谷川玄朴。

熊澤了介。

淵源兵衞。

貞良・吉田氏來學—持敬圖說並原人を著はす。 同　十六年己卯—三十二歲 藤樹規・學舍座右銘を作る—山田權來學—中川熊來學—小學を講ず—竹生島に遊ぶ—論語を講ず—論語の解を著はす。 同　十七年庚辰—三十三歲 每朝孝經を拜誦す—性理會通を讀む—太乙神を祭る—太乙神經を撰ばんとして成らず—翁問答を著はす—癸未春梓人の手に洩れて板行す—破らしむ—王龍溪語錄を讀む。 同　十八年辛巳—三十		邑令（大島三郎左衛門）（別府某の誤）—一民法を犯す—謹篤の至。 先生の起居動作。 先生疾病—終焉の一語—喪事を修む。 先生の室並遺子。 先生の多能。 著書。 跋—絕無僅有の君子—本朝道學の開祖。	石河定源。 二見新右衛門。 三輪執齋。 川田資深。 藤樹先生尊像畫。 與池田氏書。 博市。 先生の逸話。 本朝孝子傳。 先生と熊澤息游丈（蕃山）と贈答和歌。 備前少將光政公と季重子。 伊藤長胤（東涯）參拜。 先生の墳墓石垣成る—祭文—詩歌。 京師の同志中より年頭狀。 又翌年。 江戶同志獻詠詩歌。 常省先生の三綱領の歌。 常省先生遺文及び歌一

四歲
勢州太神宮に參詣す——孝經啓蒙を著はす——專ら格套を守るの非を覺ふ——靈夢（嘿軒の號）——熊澤伯繼來學。

同　十九年壬午——三十五歲
中村叔貫來學——愛敬の二字——嗣子虎生る。

同　二十年癸未——三十六歲
小醫南針を撰す——中西常慶來學——詩經を講す——中西氏の嘆稱——清水氏來學。

正保元年甲申——三十七歲
神方奇術を撰ぶ——加世五來學——岩田長來學——陽明全集を讀む

首。

跋

一三綱領の解。

同　二年乙酉―三十八歳

經書切要なる語の解をなさんとす成らず。

同　三年丙戌―三十九歳

次男鐺生る―仲條太來學―分部伊賀守先生を引見す―夫人高橋氏死。

同　四年丁亥―四十歳

鑑草刊行。

慶安元年戊子―四十一歳先生卒す。

藤樹先生年譜　解題並凡例

解　題

一、本卷には年譜三種を收む。今便宜上其の一岡田氏本を底本としたるもの、其の二川田氏本を底本としたるもの、其の三會津傳來本を底本としたるものゝ三種に分つて底本並に對校本の性質を解說すべし。

其の一、岡田氏本を底本としたるもの

一、全書岡田氏本は正保三年先生三十九歲夫人高橋氏の死に筆を擱き、以下一枚の白紙を添へ、次に「私ニ記」の三字を冠して、同四年丁亥の條及び慶安元年八月廿五日先生朝卯刻藤樹の下に卒することを記せり。是れに依りて考ふれば、三十九歲以前の記述は岡田氏の編述にあらざることを知るべし。

一、本年譜は文簡なれども、或は先生の德容を記し、或は先生の思索に長じ給へるを述べ、或は念々修養を怠らず、その學日に新なりしことを記して、先生の一生を略敍し、以て先生の先生たる所以を髣髴せしむ。隨て一言半句も輕々に看過すべからざるものあり。先生に親炙し日夕其の高風を仰ぎたる人にあらざれば、焉ぞ能く此の如くなるを得んや。特に三十四歲の條下に「今日にして此を思ふに德光ありて下位に嘿し給へり。」との句あり。筆者先生現在の境遇を以て嘿軒の名自ら事實と相稱ひ天之を助けざるを嘆じたる語氣見ゆ。されば前記三十九歲の時に筆を擱けることゝ共に先生

在世の時門人の手に成りしものなることを知るべし。

一、對校書中に中村氏本あり。滋賀縣高島郡大溝町大字勝野中村德通氏の藏有にして、その先季貫氏の筆に係る。表紙に「延享丙寅三年十月安原文煥所持ニ而借寫ス也六十二歳中村季貫」とあり。（門弟子傳中村仲直の條下參照。）今之を岡田氏本に比較するに、原著は固より同一の系統に屬すれども往々異同あり。特に岡田氏本私ニ記に係る分、卽ち正保四年丁亥秋鑑草刊行の一條は岡田氏本になくして中村氏本に存せり。加藤士任曰く「此一條は三十九歳までの部分が先生の生涯を眼前に見るが如く印象的に書きたる筆致と比すべくもあらず。必ずや後人の追記に出でしものならん。」と。その他南畝本・東氏本・春日氏本の三種ありといへども皆中村氏本の系統に屬するものなり。今之を表解すれば左の如し。

岡田氏本（底本）
中村氏本 ―― 南畝本・東氏本・春日氏本（對校本）

（イ）南畝叢書本　一冊、蜀山人大田覃の刊行にして、その由來は該書の序文に詳かなり。今京都帝國大學圖書館本に依り、また嫡流中江氏傳來の拔書本をも參考したり。

（ロ）東氏本　一冊、陽明學會主幹正堂東敬治氏の藏有にして、先考澤瀉子が一齋佐藤翁に從學せる頃その藏本につき筆寫せるものなりといふ。

（ハ）春日氏本　一冊、本書は「藤樹先生遺文春日先生奥書」と題せる一帙中に收む。原本は春日潛菴の門人恒河子健大溝より携へ來れるものなり。今京都市上京區吉田河原町十八番ノ二赤井直揉氏の

藏有本に據る。

尙京都帝國大學圖書館の委托本中に「常澄石門遺書建仁大中藏本」の捺印ある古寫本「藤樹先生年譜」一冊あり。建仁寺大中院の所有に係る。中村氏本の系統に屬す。

一、寬永二年並に慶安元年の條下傍註に引用せる「鴻溝錄」と稱するは大溝藩士前田梅園の大溝領に關する史實を記錄せるものなり。先生が歸りて父の喪に服したるが如きは、孝子として無かるべからざる事實にして、古傳の書之を佚せるを本書に依りて補ふことを得たり。然れども其の原據詳かならず、或は官職に居るもの歸服のこと無き例あれば、先生も亦大洲に在りて喪に服せられたるか今知るに由なし。

一、篠原元博氏の見たる年譜と今存するところの年譜とは同じからざるが如し。左に二ヶ條を掲げて之を明かにす。

(イ)書翰年補遺與熊澤二の註に「按ずるに此書今止、年譜稿本にみへて正保三年の夏作れりとす。」とあれども今の年譜には載せられず。

(ロ)書翰集正編與池田子註に「按ずるに此書諸本竝に載せず。たゞ年譜稿本に庚辰秋翁問答を著はす條下と甲申の秋陽明全書を得たる條下に池田子に與ふる書に云々見于書翰と註して其文を全く載せざるものあり。」とあれども今存するところの年譜には載するところなし。

一、巽軒井上博士著日本陽明學派之哲學に、「藤樹年譜一卷二宮玄仲著。此書は藤樹の門人江州志賀郡膳所草醫二宮玄仲が萬治三年藤樹の十三回忌辰に於て撰述せし所に係る。」といへり。此の書東京帝

國大學附屬圖書館に藏したりしも、大正十二年九月一日の大震火災の爲燒失したりといふ。今此の系統に屬する書の存否を知らず。

其の二、川田氏本を底本としたるもの

一、川田剛撰「藤樹先生年譜」は安政五年大溝城主分部光貞侯の命を受けて編纂せるものにして、淵岡山入門の年次の如き、古傳の書之を佚せるを、僅かに本書に依りて補ふことを得たり。然れどもその原據詳かならず。此の書川田剛自筆木版本並に明治二十六年四月印刷活版本の二種あり。今之を比較するに往々異同ありて後者の却て前者よりも精錬せるを見る。蓋し川田翁が後に修正せるものなるべし。今後者を底本とし之に對校するに前者を以てし、其の異同の點は傍記の方法に從つて之を明かにせり。但し底本中明かに誤植と認むべきものは木版本に依りて之を訂正せり。底本の欄外に附せられたる頭註は、今印刷の便宜上脚註の方法に改む。

其の三、會津本を底本としたるもの

一、會津傳來藤樹先生年譜は同地藤門の士平義都の編述にして史實他の書と頗る異同あり。按ずるにその說くところ藤樹先生行狀・同事狀等に基けるが如くなるもまた別に異本の彼の地に傳來せるもののありしものに據れるなるべし。此の書原本東京故齋藤一馬氏（會津出身）の所有にして既に雜誌「陽明學」第百拾號（大正七年二月一日發行）に掲載せられたるものなり。

凡例

一、**底本としたる岡田氏本には元和七年先生十四歲の條下正保元年先生三十七歲の條下に「イニ」とし**

て各二ヶ條の註記あり。今そのまゝ之を採錄す。

一、川田氏本會津本其の他諸書の記事にして岡田氏本と異なるものは、之を各條の末尾に附記し、且つ編者の名を明記して之を區別す。

一、對校に用ひたる書名左の如し。凡そ此等の異同は左の略符を添へて之を正文の右側に傍記したり。但し漢字にて書かれたるものと假名にて書かれたるものとの相違に過ぎざるものは、主要なるもの以外は多くは記入せず。

△印は對校本に此等の文字なきを示す。

中村氏本	藤樹先生年譜	（中）
南畝本	藤樹先生年譜	（南）
春日氏本	藤樹先生年譜	（春）
東氏本	藤樹先生年譜	（東）
會津本	藤樹先生年譜	（會）
川田氏本	藤樹先生年譜	（川）
舊本川田氏本	藤樹先生年譜	（舊）
蕃山先生實錄		（實）
集義外書		（外）
藤樹先生文集		（文）

一、底本としたる岡田氏本には句讀・訓點なし。今悉く之を施す。また、必要に應じて、振假名岡田氏本

中村氏本倶に諸處振假名あり。及び送假名を附す。此の場合特に（　　）と略號とを用ひざるものは編者の加筆なりと知らるべし。但し異本と照合したる結果を示すために、「イニ」として傍記せられたるものは、凡て底本に存したる形のまゝとす。「イニ」とは異本の第二といふ意味ならん。

一、底本としたる岡田氏本もと多くは濁音を附せず。今盡く之を附す。

一、川田氏本には句讀點のみあり。今之に從ひ、又別に訓點を附せず。底本諸處頭註有り。今凡て脚註に改む。

一、會津傳來本について言へば、本書の底本としたるものには句讀・訓點あり。此は正堂翁の附せられたるものならん。今多くは之に從ひ、且つ其の足らざるを補ふ。尚漢文の措辭に於て妥當を缺くもの頗る多けれども、今一々訂さず。

一、南畝本・會津本・川田氏本の序文は編纂の便宜上景慕詩文集中に分載したり。

一、內容目次を作り、藤樹先生行狀・同事狀・同別傳・藤夫子行狀聞傳等と共に一覽表として之を掲げ綜覽に便す。

昭和二年丁卯八月十日

小川喜代藏謹識

藤樹先生全集 卷之四十二

藤樹先生年譜

先生諱ハ原、字ハ惟命、姓ハ中江氏、假名ハ与[興(中)]右衞門、江西高嶋郡小川村ノ人也。考諱某、字ハ吉次、同郡北川氏ノ女ヲ娶[テ(中)]。先生ヲ藤樹ノ下ニ生ズ。先生少ヨリ出テ豫州ニ仕[ヘ(中)]、后致仕〆藤樹ノ下ニ學ヲ講ズ。門人從テ藤樹先生ト稱ス。

慶長十有三年戊申三月七日。先生生[ル(中)]。

元和元年乙卯。先生八歲。在小川。

先生僻壤ニ生長ストイヘドモ、野鄙ノ習ニ染ムコトナシ。タマ〳〵隣家ノ兒童ト馴アソブトイヘトモ、每ニ靜ニシテカレニ相移ルコトナシ。

二年丙辰。先生九歲。在伯耆。

是年祖父吉長公ニ養ル。此春祖父小川村ニ來テ先生ヲ養ンコトヲ欲ス。父母其一男ナルヲ以テ不肯。祖父固クコレヲ强フ。故ニ不得已〆遠ク伯州ニ遣ス。

先生性穎敏、豪邁ニシテ幼ヨリ物ニ愛著セズ。故ニ父母ヲ離テ遠ク行トイヘドモ、一毫モ哀ムヿナク、能ク祖父母ニ孝アリ。今年始テ文字ヲ習ヒ書ス。期年ニメ殆ド能ス。祖父モト文字ニ拙シ。毎ニ自ラコレヲ悔ユ。故ニ先生ヲシテツトメテ文字ヲ學バシム。遠近ノ書翰皆先生ヲシテ書セシム。人皆其幼ニメ文字ヲ能スルコトヲ驚歎ス。

三年丁巳。先生十歳。在豫州。

今年伯州ノ大守左近公㈠豫州大洲ヘ轉任セラル。故ニ先生祖父ニ從テ大洲ニ往ク。冬吉長公㈡風早郡ノ宰トナル。先生又從テ風早ニ往ク。祖父先生ノタメニ師ヲ求テ益〻文字ヲ勵マシム。字ヲ學ブノ間ニヲイテ庭訓・式目等ヲ學ブ。先生コレヲ記得スル甚ダ速ニメ一字トメ忘ルヿナシ。祖父悅デ以爲ラク如レ斯ハ壯年ノ人トイフモ及ブベカラズト。常ニ人ニ逢フゴトニ其敏ナルヿヲ稱譽ス。先生ヒソカニオモヘラク、吾コレヲノミニ止ルベカラスト。

（附記）會津本、先生の立志を是年となす。藤樹先生行狀並に同事狀の記するところと同じからず。

㈠ 加藤貞泰。

㈡ 藤樹先生補傳第三十六項參照。（紫水）（風早に飛地ありしは大洲のみにては六萬石に足らず、藤領を割きて補ひ優遇したり。（藤陰））

五年己未。先生十二歳。

一日食スル時ニツラ〱オモヘラク、此食ハ此誰ガ恩ゾヤ。一ニハ父母ノ恩。二ツニハ祖父ノ恩。三。ニハ君ノ恩。自今以後誓。ハ常ニコノ恩ヲ思テ忘ルベカラズト。

六年庚申。先生十三歳。

是年夏五月大ニ雨フリ五穀不レ實。百姓饑餓ニ及。ントス。コレニ因テ風早ノ民去テ他ニ行。ント欲スルモノ衆シ。吉長公コレヲ聞テカタクコレヲトヾム。郡ニ牢人アリ。其名ヲ須トト云。コノ者クルシマト云大賊ノ徒黨ニシテ、形ヲ潜メ久シクコヽニ住居ス。今ノ時ニ及デ先。退。ントス。彼已ニ他ニ行バ百姓モ亦従テ逃ントスルモノ多シ。コレニ因テ吉長公僕三人ヲ遣。シテカレヲトヾム。僕等歸ルヿ遲シ。吉長公怪ンデミヅカラ行テカレヲ止メ、且法ヲ破ルヿヲ罵ル。須トイツワリ謝シテ吉長公ニ近。ク。其様体ツネナラズ。コレニ因テ吉長公馬ヨリ下ントス。須ト刀ヲ拔テ走リカヽリ吉長公ノ笠ヲ撃。吉長公ノ僕コレヲ見テ、後。ヨリ須トヲ切。須ト疵ヲ蒙ルトイヘドモ、勇猛強力ノモノナレバ事トモセズ　後ヲ顧テ僕ヲ逐フ。コノ間ニ吉長公鎗ヲ執テ向フ。須ト亦回リ向フ。吉長公須トガ腹ヲ突透ス。須トツカレナガラ鎗ヲタグリ來テ、吉長公

ノ太刀ノ柄ヲトル。吉長公モ亦自ノ柄ヲトラヘテ互ニクム。須ト痛手ナルニ因テ倒テ乃死。須トガ妻吉長公ノ足ヲトラヘテ倒サントス。吉長公怒テ亦コレヲ切。已ニシテ自其妻ヲ殺スヿヲ悔ユ。后須トガ子其父母ヲ殺セルヲ以テ甚ダコレヲ恨ミ、常ニ怨ヲ報ントメ、シバ〳〵吉長公ノ家ニ火箭ヲ射入ル。其意オモヘラク、家ヤケバ吉長公驚出ン。出バ則コレヲ殺ント。吉長公其意ヲウカヾヒ知ル。故ニヒソカニ火箭ノ防ヲナス。然レ圧其意乃シ盡ク賊黨等ヲ入テアマサズ此ヲ殺ント欲ス。故ニ却テ門戸ヲバ開シム。乃シ先生ニ謂テ曰、今天下平ニメ無軍旅之事。爾功ヲナシ名ヲ揚べキ道ナシ。今幸ニ賊徒襲入トス。我賊徒ヲ伐バ爾彼ガ首ヲトレ、又家邊ヲ巡テ賊徒ノ入ヲウカヾへ。先生コヽニオイテ毎夜獨家邊ヲ巡ルヿ三次ニメ不怠。時ニ九月下旬、須トガ子數人ヲイザナヒ夜半ニ襲入ントス。吉長公アラカジメ此ヲ知ル。乃僕等ニ謂テ曰、今夜賊徒襲入ントスルヿヲ聞ク。イヨ〳〵門戸ヲ開キコトゞ〳〵ク内ニ入シメヨ。我父子サマニ彼ヲ伐ン。爾等ハ門ノ傍ニ陰レ居テ鉄炮ヲ持、モシ賊逃出バコレヲウテ。必ズ入時ニアタツテコレヲウツヿナカレト。夜半賊徒マサニ入ントス。僕アハテ、先鉄炮ヲ放ツ。賊驚テ逃グ。吉長公此ヲ逐ヿ

歔町、遂ニ追及。ヿアタワズ〆返ル。於是先生ヲシテ刀ヲ帶セシメ共ニ賊ヲ待ツ。先生少モ恐ル、色ナク、賊來ラバ伐。ント欲スル志面ニアラワル。吉長公先生ノ幼ニ〆恐ル、ヿナキヿヲ喜ブ。

冬祖父ニ從テ風早郡ヨリ大洲ニ歸ル。

七年辛酉。先生十四歲。在大洲。

或時家老大橋氏諸士四五人相伴テ吉長公ノ家ニ來リ終夜對話ス。先生以爲(中)ラク家老大身ナル人ノ物語常人ニ異ナルベシト。因テ壁ヲ隔テ陰レ居テ、終夜コレヲ聞。ニ何ノ取用ユベキコトナシ。先生ツイニ心ニ疑テコレヲ怪ム。○嘗テ(一ニ於曹溪院天梁和尙ニ就テ)寺ニ入テ手跡ヲ學ビ其暇ニ詩聯句ヲ學ブ。マ、佳作アリ。

イニ或人和尙ニ謂テ曰、中江原キワメテ聰明ナンゾ話則ヲ參セシメザル其未悟ルベカラザルヲ以テカ、和尙曰、不然我コレヲ示サバ遂ニ會得スベシ。然リトイヘ圧却テ滿心ヲ生ゼンカ、コノ故ニツイニ示サズ。

秋八月七日。祖母卒。歲六十三。

八年壬戌。先生十五歲。在大洲。

。秋(中)九月二十二日。祖父吉長公卒ス。歲七十五。

先生平居僚友相應接ノ間一ノ過失アレバ他ヲ恥。自。悔。月ヲ越レ圧忘ル、ヿ不

能。其羞惡ノ深キ如シ此。故ニ嘗テ一物ノ遺受モ甚タ謹メリ。

寛永元年甲子。先生十七歲。

其夏醫師ノ招ニヨツテ京都ヨリ禪師來テ論語ヲ講ズ。此時大洲ノ風俗武ヲ專ラニシ文學ヲ以テ弱シトス。故ニ士人コレヲ聞クモノナシ。唯先生獨リ往テコレヲ聞ク。蓋シ先生幼ニシテ祖父母ニ離レ家ヲ繼ギ君ニ事フ。是故ニ身ヲ脩メ家ヲ齊ヘントスレドモ其道ヲシラズ。嘗テ大學ノ句讀ヲ習フニ、正心・脩身・齊家等ノ語アルニヨツテ儒學ニ身ヲ脩メ家ヲ齊ル道アルヿヲ知ル。然ドモ敎ルモノナクシテ默止ヌ。今禪師來テ講ズルヲ幸トシテ、潛カニ往テ是ヲ聞ク。論語ノ上篇ノ講終テ禪師京ニ歸ル。先生又師トスベキ者ナキコトヲ愁テ、四書大全ヲ求ム。然レドモ人ノ誹謗ヲ憚テ晝ハ終日諸士ト應接シ、每夜深更ニ及デ業トシテ二十枚ヲ見終テ寢ヌ。其通ゼザル所アレバ思テ忘レズ。夢寐ノ間、人アリテ示ガゴトクニシテ曉得スルヿ多シ。先ツ大學大全ヲ讀ムヿホトンド百遍ニ及デ始テ曉得ス。大學通ジテ後語孟ヲ讀ム。ニ皆通ズ。

二年乙丑。先生十八歲。在リ大洲ニ。

春正月四日。本生ノ父吉次公死ス。享年五十二。㊀

（附記）「鴻灘録曰、寛永二年乙丑正月四日、父吉次死、年五十二。聞ニ訃音一歸喪レ服。閏ニ四月一。歸ニ于大洲一。時十八歳。其後請レ暇歸省ニ母氏一。」

㊀ 會津本五十三に作る。（紫水）

四年丁卯。先生二十歳。

先生專ラ朱學ヲ崇デ格套ヲ以テ受用ス。是年始テ中川貞良ノ輩、學ニ志シ同志二三輩會合シテ大學ヲ講明ス。乃聖學ヲ以テ己ガ任トス。

夏儒法ヲ以テ祖父ヲ祭ル。㊁

㊁ 川田氏本祭ルを改葬に作る。（紫水）

五年戊辰。先生二十一歳。

是ノ年初學同志ノタメニ大學啓蒙ヲ著ス。其書モツパラ四書大全ニ從フ。后コレヲ見テイマダ精カラズトメ破レ之。

（附記）會津本始而讀王子之書契其心といへり。此は藤樹先生事狀の說と同じ。恐らくは非ならん。（紫水）

六年己巳。先生二十二歳。

春兒玉氏ニ行。荒木氏坐ニアリ。先生ノ到ルヲ見テ曰、孔子殿キタリ玉フト云。其意ヒソカニ先生ノ學ヲ爲スコトヲソシル。先生曰汝チ酒ニクラヒ醉フカ。對ヘテ曰

コレ何ノ言ゾヤ。先生ノ曰、孔子ハ已ニ二千年前ニ卒シ玉フ。今我ヲ以テ孔子トスルハ、汝酒ニ醉ハズンバ、汝目盲タルナラン。思フニ我ヲ以テ孔子トスルハ文學アルヲ以テカ。文ヲ學ブハ士ノ道也。汝ガゴトキノ文盲ナルハ是奴僕ナリ。荒木氏逈レテ曰、我コレヲ戲ル。請フ子コレヲユルセト云。イマダ圭角アルヿ如此。后來德日ニ進ム。ニシタガイ全ク融和シ了ル。

是年イトマヲ請ヒテ母ヲ江西ニ歸省ス。

九年壬申。先生二十五歲。

春暇ヲ乞テ江州ニ歸省ス。其意母ヲ倡ヒテ豫陽ニ歸リ、定省ノ孝ヲ盡サンヿヲ欲ス。然レ𪜈母老テ古鄉ヲ離レ遠途ニ趨クヿヲ欲セザルヲ以テ、獨リ豫州ニカヘル。歸路船中ニシテ始テ哮喘ヲ患フ、キワメテ甚シ。

今歲改テ織部正ニ仕フ。織部正ハ大守出羽守ノ弟也。出羽守諸士ヲ織部正ニ分チ与フ。先生モ亦分付ノ中ニ屬ス。

㊀ 翁問答慶安二年本に「いざなふ」の振假名あり。從ふべし。（紫水）

十年癸酉。先生二十六歲。

春正月朔旦。老母ヲ思フノ詩アリ。蓋シ豫州ニ來ラザルニ因テ其定省ヲ得ザルヿ

ヲ歎ク。適感アルニ依テ作ス。詩ハ草稿ニ見タリ。

十一年甲戌。先生二十七歳。

冬十月仕ヲ致〆江州ニ歸ル。此ヨリ前毎々家老佃氏ニ謂テ曰、母老テ故郷ニアリ。此地ニ倡ヒ來ラント欲スレ𪜈肯ハズ。願ハ能君ニ奏〆仕ヲ致ヿヲユルサレンヿヲ。佃氏曰、諾。我必能君ニ告フサン。然レ𪜈年ヲ經レドモ果サズ。蓋シ其意先生ノ多才ナルヲ惜ミ、且又他ニ仕テ厚祿ヲ得ント欲スルノ志ナランヤト疑フ故也。是ニ於テ先生疏ヲ作テ佃氏ニ捧ゲ天ニ誓フノ詞ヲ以テ他ニ仕ノ志ナキヿヲ顯ス。其文ニ曰ク、

今度私御暇之義言上被成被下候へと奉頼候付而、傳左殿助右殿御同心被成種々御異見之段忝奉存候。此中も如申上候二つには何れも如御存知二三年以前より病者に罷成候而次第に人なみの御奉公相つとめがたき躰迷惑に奉存候。一つには古郷の母十年以來ひとり住を仕罷有候。私の外に別ニ母をはごくみ可申子も無御座、又ハよすがに頼可存ほどの親類も無御座候故、四五年以前より漸々飢寒に及ぶ躰に御座候間、此地へつれこし可申と存たてまつり、去々年御理申上むかひに參候處ニ、もはやとし罷寄又は病者に御座候而里の内をも自由にありき申事不罷成躰に御座候。其上女之義に御座候へバ、古郷をはなれ遠國へ參候事たというゑ死仕候とも成申間敷旨申候故、不及是非すて置罷歸候。私義ハ養親共に四人迄御座候へども三人にハ幼少にてはなれ申、今母一人殘り申候。母一

人子一人の事に御座候。其上母存生之内も今八九年の躰に御座候條、御暇申請古郷へ罷歸母存命之間ハ如何樣のわざを成とも仕養申し母相果候はゞ罷歸貴樣を頼存めしかへされ被ㇾ下候はゞ御奉公仕度覺悟に御座候。此外聊存子細も無ニ御座一候。私之義に御座候條、左樣には思召間敷候得共若右申上處當座之かりごとにて眞實ハ身上をもかせぎ可ㇾ申望にて申上かと御推量被ㇾ成事も御座候はんと存、此中も度々如ニ申上一左樣之所存少にても御座候はゞ、立所に天道の冥罰を罷蒙、母に二度あひ申間敷候。か樣になげき申所御聞屆被ㇾ成候而不便に思召候はゞ、能樣に御取つくろひ被ㇾ成かりごとに言上仕かなどゝきこしめしあやまりの無ニ御座一樣に、被ニ仰上一御暇被ㇾ下候樣に奉ㇾ頼・外無ニ他事一候。恐懼謹言。

三月七日

然氏猶イマダ許サズ。是ニ於テ已ムヿヲ得ズ〆潛カニ逃テ江陽ニ歸ル。是年ノ祿米盡ク倉ニ積置キ、朋友ニ假貸スルノ米穀アルヲバ器物ヲ遣〆コレヲ償フ。江陽ニ致ル時銀纔ニ三百錢アリ。祖父ノ時ヨリ使フ所ノ若黨一人アリ。先生其ノ歸トコロナカランヿヲ憫ミテ銀二百錢ヲ与ヘテ曰、是ヲ持チ豫州ニ歸リ商ヲナシテ世渡セヨ。若黨固辭〆曰、君ノ銀纔ニ三百錢。然ルヲ我ニ過半ヲ賜フ。我元ヨリ一錢ヲ受ンノ志ナシ。タヾ君ニ從テ艱難ヲナサント云。先生强テ不ㇾ已。是ニ於テ涕泣〆銀ヲ受テ歸ル。

冬十一月京ニ在リ。先生逃去ルヲ以テ君ノ惡ミアリテ江陽ニアルコヲ防レンコヲ慮テ京都故友ノ家ニ寓シ命ヲ待ツコ百日餘。其尤メナキヲ以テ江陽ニ歸ル。百錢ノ銀ヲ以テ酒ヲ買ヒ、又農家ヱ賣テ其息ニ依テ母ヲ養フ。其後刀ヲ賣テ銀十枚ヲ得タリ。是ヲ以テ米ヲ買ヒ農家ニ借ス。息ヲ取ルコ世人ヨリ甚減ズ。是以テニヤ其債ヲ責ズメ來テコレヲ還納ス。

(一) 本全集卷之二十第一頁より同五頁迄參照。(紫水)

十有二年乙亥。先生二十八歲。

今歲始テ筮儀ニ通ズ。先生曰、我易ノ理ニ於テハ心ヲ盡サバ或ハ其万一ヲ得ン。筮著ニ於ハ其傳ヲ得ズンバ能セジト。是ニ於テ京師ニ行テ易ノ講師ヲ求ム。一人ヲ得タリ。曰、講ジ終テ后銀數枚ヲ出サバ講ント云。先生元ヨリ家清貧ナルヲ以テ止ム。又一人ヲ得タリ。曰、講終ルマデ一日モ他ニ行コナクンバ講ズルコヲ得ン。先生曰、何ノ故ゾ。曰、此ヨリ先イマダ講ノ半ニ及ズシテ逃去却テ是非ヲ議スルモノアリ。我此ニ懲タリ。故云レ爾。先生以爲ラク是非ヲ褒貶セザルコハ云ニ及ズトイヘモ、一日モ他ニ往ザルコ約シ難シトメ又止ヌ。是ニ於テ易書ヲ求ルニ始テ啓蒙ヲ得タリ。江陽ニ歸テ後此熟讀筭考

〆其筮儀ニ通ズ。

先生嘗曰、予豫州ヨリ歸テ后少ノ閒暇アレバ眠リ臥テヨク寢ルヿ一年餘。此頃年、心常ニ人間世ニ放在〆精神ヲ播弄スルガ故ナリ。豫州ニ在シトキ夜ル寢テ後人ノ呼フヿ一聲ニ〆醒。或ハ跫音ヲ聞テモ覺ム。故ニ以爲ク心明ニ〆ホトンド寢テ不尸者ニ近シト。今コレヲ思フニ支撐矜持ニ拘攣スルガ故ナリ。

㈡ 本全集卷之十一（附）易卦圖參照。（紫水）

十有三年丙子。先生二十九歲。在江州。

秋先生京ニ行ク。先生池田某ト元ヨリ友タリ。此時池田氏筑州ヨリ洛ニ來タル。先生モ亦行テ會ス。又始テ嶋川子ニ逢フ。是ニ於テ易ヲ談論ス。月ヲ閲テ歸ル。此ヨリ后終身マデ洛ニ不行。〇是年小川覺豫州ヨリ來テ學ヲ問フ。先生送行ノ詩アリ。㈠

㈠ 今文集に見當らず。（紫水）

十四年丁丑。先生三十歲。

是年高橋氏ノ女ヲ娶ル。蓋シ此時先生イマダ格法ニ泥ム。故ニ三十而有室ノ法ヲ執レリ。其女容皃甚醜シ。先生ノ母コレヲ憂ヘテ出サントスルヿアマタ

、ビ。然レ𪜈先生固ク辭ス。容色醜シトイヘ𪜈、性質甚。聰明ニ〆心ヲ用ユル
ヿ貞シ。先生常ニ諸門人ニ會シテ夜半ニ過。、或ハ五更ニ及デ後閨ニ入レ𪜈、
十年ノ間終ニ先生ニ先。テ寢ズ。居常小事トイヘ𪜈先生ノ命ヲ不レ受バ不レ行。○
是年池田氏來テ學ヲ問。。送行ノ詩アリ。

十有五年戊寅。先生三十一歲。

今年始テ谷川寅・落合左兄弟來テ業ヲ門ニウク。又大野了佐ト云者アリ。彼。父
先生ト親。ク友タリ。了佐嫡子ナリトイヘ𪜈稟質極テ愚魯鈍昧ニ〆、士業繼。ニ
足ザルヲ以。父嘗テ賤業ヲ營。ジメンヿヲ計。了佐コレヲ憂テ先生ニ來テ曰、我醫
トナラント欲ス。願。ハ醫書ノ句讀ヲ教。ヨ。先生ソノ志ヲ憫。テ授。テ大成論ヲヨ
マシム。先。ニ二三句ヲ教ルヿ二百遍バカリ、巳ヨリ申ニ及デ漸ク記ス。食ニ退
ツテ后コレヲ讀。ニ皆忘。了ル。又來テコレヲ習。コト百余遍ニ〆始。記得ス。コレ
ヨリ以后日ニ來テ習フコト年ヲフ。先生江陽ニ歸。ニ依テ今年來テ醫ヲ學ブ。
先生ソノ醫術ヲ曉得シガタキヲ以テ醫筌ヲ作テコレニ授ケ、又コレヲ講〆其
ノ義ニ通ゼシム。后醫ヲ以テ世ヲ渡リ數口ヲ養フニ足レリ。先生嘗テ曰、我
了佐ニ於テ幾ド精根ヲ盡ス。坐ニ在ルモノ皆ヨク教ルコトヲ嘆ズ。先生ノ曰、

我カレニ教フトイフ圧、彼勉メズンバアタハジ。カレ甚ダ愚昧ナリトイヘ圧、其ノ励勉ノ力ハ甚ダ奇ナリ。況ヤ了佐ガ如クナラザル者ハ其勉ムル所ヲ知ルベシ。

春中川貞良与州ヨリ來テ學ヲ問フ。秋吉田氏來。教ヲ受ク。先生ミナ送行ノ詩アリ。

夏持敬圖説幷ニ原人ヲ著ス。此ヨリ前專ラ四書ヲ讀テ堅ク格法ヲ守ル。其意專ラ聖人ノ典要格式等逐一ニ受持セント欲ス。然レ圧間時ニ合ハズメ滯碍行ガタキヲ以テ、疑テ以爲ラク、聖人ノ道カクノゴトクナラバ今ノ世ニ在テ吾輩ノ及ブ處ニアラズト。是ニ於テ五經ヲ取テ熟讀スルニ觸發感得アリ。故ニ持敬圖説幷ニ原人ヲ作爲メ同志ニ示ス。此ヲ行フヿ數年。然レ圧行ハレザル處多。シテ甚ダ人情ニ戻リ物理ニ逆フ。故ニ疑止。ヿアタワズ。

十有六年己卯。先生三十二歲。

春藤樹規幷ニ學舍座右銘ヲ作テ諸生ニ示ス。

三月山田權与州ヨリ來テ醫ヲ學ブ。

夏四月中川熊与州ヨリ來テ業ヲ受ク。

夏小學ヲ講ズ。明年ノ冬ニ至テ終ル。諸生專ラ格套ヲ守ル。
夏諸生トモニ竹生嶋ニ遊ブ　興。乘〆詩ヲ賦ス。
秋論語ヲ講ズ。郷黨ノ篇ニ至テ大ニ感得觸發アリ。是ニ於テ論語ノ解ヲ作。ント欲ス。先郷黨ノ篇ヨリ起テ先進ノ二三章ニ至ル。病苦ニサヘラレテ果サズ。后コノ解ヲ以テ心ニ合ザル處多シトス。

㊀ 郷黨啓蒙翼傳を指す。此は此の年に起筆せられ其の大成したるは庚辰以後のことなるべし。（紫水）

十七年庚辰。先生三十三歲。
夏孝經ヲ讀デ意味深長ナルコヲ覺フ。コレヨリ每朝拜誦ス。○今歲性理會通ヲ讀ミ發明ニ感〆每月一日齊戒シ太乙神ヲ祭ル。蓋シ古天子ハ天ヲ祭リ、士庶人ハ天ヲ祭ルノ礼ナシ。此祭ヲ以テ士庶人天ヲ祭ルノ事トス。是ヲ以テ此ヲ祭テ怠ラズ。後チ妻ノ喪ニ依テ止ム。喪終テモ亦病氣ニ妨アルヲ以テ又祭。ズ。
夏太乙神經ヲ撰ラバント〆稿半ニ及ブ。病ヲ以テ終ニ成。書ニ及。ズ。
秋豫陽ノ同志ノ求。ニ依テ翁問答ヲ著ス。已ニ〆後其書心ニカナワザル處多シ。故ニコレヲ改メント欲〆同志トイヘ圧博クコレヲ示サズ。然レ圧癸未ノ春梓人此ヲ盗ミ取テ板行ス。先生此ヲ聞テ梓人ヲシテコレヲ破ラシム。此ヨリ後

改メ正ント欲ス。曰、上卷ハ孝經ニ觸發〆其意ヲ寫シ書ス。故ニ其論穩當ナリ。下卷ハ世ヲ憤リ弊ヲ矯ム。是ヲ以テ其說抑揚大過アルヿヲ免レズ。故ニ先ヅ下卷ヲ改ント欲スト。是ニ於テ數條ヲ改ム。疾ヲ以テ終ニ成ズ。

冬王龍溪語錄ヲ得タリ。始コレヲ讀トキ其觸發スルヿノ多キヿヲ悅ブ。然レドモ其佛語ヲ間雜シ禪學ニ近キヿヲ恐ル。後、陽明全集ヲ得テコレヲ讀ムニ至テ、龍溪ノ禪學ニ近カラザルヿヲ知ル。且佛語ヲ間雜スルノ世ヲ憫ムノ深キヿヲ見ル。如何トナレバ聖人一貫ノ學本太虛ヲ以テ準則トス。老佛ノ學皆一貫ノ中ヲ離レズ。唯精粗大小アルノミ。達人何ゾ其言語ヲ忌ンヤ。且當時佛ヲ學ブノ徒多シ。是ヲ以テ其語ヲ間雜〆其外ニセザルヿヲ示シ、皆太虛一貫ノ道ヲ悟ラシメンヿヲ欲スルモノナリ。

(二) 翁問答跋に寛永十八年辛巳の歲に作るとなす。（紫水）

十有八年辛巳。先生三十四歲。

夏二三子トモニ勢州大神宮ニ參詣ス。此ヨリ前曾テ以爲ク、神明ハ無上ノ至尊也。賤士ニ〆貴人ニ近クスラ訓瀆ノ恐レアリ。況ヤ神明ヲヤ。是ヲ以テ終ニ神ニ詣拜セズ。其后學日々ニ精微ニ入ル。故ニ以爲ク士庶人モ亦神ヲ祭ルノ禮

アリ。然ラバ則チ神ニ詣スルコトモナクンバアルベカラズ。且大〔太(中)〕神宮ハ吾朝開闢ノ元祖ナリ。日本ニ生ル、者〔モノハ(中)〕一タビ拜セズンバアルベカラズト。是ニ於テ詣ス。

㊀訓讀底本二字の間もと致の字あり、後抹殺せらる。此は中村氏本の如く馴れて濱を致すと讀むべく訓讀とすべきに非ざるものの如し。（紫水）

秋孝經啓蒙ヲ著サントス。疾ニ依テ又成ラ〔ラ(南)〕ズ。明年終ニ啓蒙ヲナス。後其說經旨ニカナワ〔ヘ(中)〕ズト〆改メ正サントス。然レ𪜈終ニ果サ〔サ(中)〕ズ。是年始テ專ラ格套ヲ守ルノ非ナルコトヲ覺フ〔フ(南)〕。此ヨリ前專ラ朱註ヲ尊信〆日ニ講明之、小學ノ法ヲ以テ門人ニ示ス。是故ニ門人格套ニ落在シ拘攣日ニ長ジテ氣象漸ク迫レリ。或ハ圭角アリテ同志ノ際ナヲ融通セズ。一日門人ニ謂テ曰、吾久シク格套ヲ受用シ來ル。近來漸〔ハ(中)〕其ノ非ヲ覺フ。格套ヲ受用スルノ志ハ名利ヲ求ルノ志ト日ヲ同シテモ語〔ム(中)〕ルベカラズトイヘ𪜈、眞性活潑ノ体ヲ失フコトハ均シ。只吾人拘攣ノ意ヲ放去シ、ミヅカラ本心ヲ信ジテ其跡ニ泥ムコトナカレ。門人大ニ觸發興起ス。○一日門人ニ語テ曰、昨夜夢ニ人アリテ吾ニ光嘿軒ト云號ヲ授ク。光嘿ノ號吾ニ過ギタリ。只嘿軒可ナリト云テ、此ヨリ自ラ〔ラ(南)〕嘿軒

ト稱ス。今日ニ〆此ヲ思フ。ニ德光アリテ下位ニ嘿シ玉ヘリ。天何ゾ此ヲ保佑（佐（中））シ玉ハザルヤ。

冬熊澤伯繼來テ業ヲ受ク。（一）去（中）秋始テ來テ人ヲシテ謁ヲ請フ。先生其志ノ眞僞ヲ知ラ（シラ（南））ズ。故ニ固クコレヲ辭ス。左（二）△（中）請ウ（然レモ猶ヲ（中））テ已。ズ。（ヌ（中））先生書ヲ以テコレヲ辭ス。其詞曰［闕］

（附記）底本此の下半葉白紙を置く。（紫水）

（三）ニ（中）左尚請ヒテ曰、タトヒ教ニ与ラズトイフトモ如何ゾ一タビ拜謁スルヿヲ許サゞルト。其情甚ダ△（中）愁テ涙ヲ滴ル△（中）ニ至ル。先生其情狀ヲ聞知〆コレヲ憐ミ謁スルヿヲ許ス。尚業ヲ受ルヿヲ許サズ。强テ歸ラシム。冬又來テ固ク請ウテ已マズ。是ニ於テ終ニ業ヲ授ク。

（一）底本もと去の字ありしに岡田氏自ら之を抹殺せり。按ずるに外書に蕃山自ら識して高島に來り先生に見えたる年を二十四歳となし、蕃山實錄に寛永十八年辛巳秋八月に作る。蕃山は元和五年を以て生れ元祿四年七十三歳を以て歿したれば此の年當に二十三歳なるべし。皆合はず。

（二）（三）左は左七（三）中村本の二は二郎八を意味し、共に熊澤子の名なり。門弟子傳並書翰集補遺與ニ熊左七ニ參照。（紫水）

十有九年壬午。先生三十五歳。

春中村叔貫來テ始テ業ヲウク。先生近時專ラ孝經ヲ講明△（中）シテ常ニ愛敬ノ二字ヲ

掲ゲ出シテ心体ヲ體認セシム。曰、心ノ本体原ト是愛敬的。猶水ノ濕ニシタガイ〔ヒ(南)〕火ノ燥ニツクガ如シ。只吾人種々ノ習心習氣ニ凝滯セラレテ心体ノ明蔽ハル。然レ圧親ヲ愛シ兄ヲ敬スルノ心且ツ赤子ヲ見テ慈愛スルノ心ノゴトキハイマダ滅〔減(中)〕セズ。時アツテ發見ス。此心ヲ認テ存養〆失ザルトキハ則チ聖人ノ心也。

冬十一月嗣子虎生ル。此ヨリ前ニ男一女ヲ生メリ。皆月ヲ踰エズ〆夭〔㊀死(中)〕ス。

㊀底本夭字の右に死の字を傍記す。亦岡田氏の筆なり。中村氏本は夭の字死に作る。

二十年癸未。先生三十六歲。

是年山田氏森村氏ノタメニ小學南針ヲ撰ブ。

秋中西常慶來テ學ヲ問フ。此冬詩經ヲ講ズ。一ニ南終テ已ム。中西氏モ亦與リ聞ク。退テ曰、嘗テ予洛〔ラ(中)〕ニ於テ俗儒ノ講ヲ聞クヿ久シ。向キニ先生ノ學世儒ニ異ナルヿヲ聞テ疑テ以爲ク何事ヲカ說ク。ト。今講ヲ聞テ大〔太ニ(中)〕驚テ感服スト。是ニ於テ終ニ弟子トナル。

冬清水氏來テ業ヲ受ク。

（附記）湖學雜纂に曰く、「止善書院記追加に、「清水子ハ先師爰元御暇之節先師を慕ひ、御願を申、祿を指上近江へ引越御側ニ附添申候。親炙之御門人也」とありて註に元博按ずるに清水子の事年譜にみへず、はつかにこゝにみゆ。年譜の鈌を補ふべし。」といへり。（紫水）

正保元年甲申。先生三十七歲。

春森村氏山田氏ノタメニ神方奇術ヲ撰ブ。

夏四月加世五來テ業ヲ受ク。

秋八月岩田長來テ業ヲ受ク。○是年始テ陽明全集ヲ求得タリ。コレヲ讀デ甚ダ觸發印証スルヿノ多キヿヲ悅ブ。其學彌進ム。○先生門人ニ語テ曰、予嘗テ山田氏ニ送。ニ三綱領ノ解ヲ以。ス。其至善ノ解ニ曰、事善ニ〆心善ナラザル者ハ至善ニアラズ。心善ニ〆事善ナラザル者モ亦至善ニ非ズト。此時予イマダ支離ノ病ヲ免レズ。故ニ誤テ如此解ス。門人問テ曰、此解甚ダ親切的當ナルヿヲ覺フ。如何ゾ以テ支離トス。先生曰、心事元是一也。故ニ事善ニ〆心善ナラザル者ハイマダコレアラズ。心善ニ〆事善ナラザル者モ亦イマダコレアラズ。門人曰、狂者ノ如キハ心元無欲淸淨光明正大也トイヘドモ、其事ハ破綻アルヿヲ免レズ。鄕原ノ如キハ其事ハ中行ノ君子ニ似タリトイヘドモ、其心ハ則チ汚レタリ。分明ニ是心ト事トニツナルニアラズヤ。先生曰、然ラバ狂者ノ如キハ心裏光明ナル時ハ事爲モ亦光明ニ〆些子ノ蓋藏ナシ。其世故ヲ輕蔑シ且

盡ク人情ニ合ハザルハ又其心イマダ精微中庸ノ道ニ入ラザルガ故也。其心精微ニ〆事爲ノ破綻アル者ハイマダコレアラズ。鄕原ノ孝弟・忠信・廉潔・無欲ノ如キハ盡ク是レ世ニ媚ビ許容ヲ求ルノ穢腸ヨリアラワル、所ノ事也。然ラバ則チ其事モ亦善トスベカラズ。其事ノ中行ノ跡ニ似タルヲ以テ善トスル者ハ功利ノ意也。然ルニ或ノ曰、此道大哉。盜人モ亦コレヲ得ザレバ巧ヲナスコトアタワズ。入ルコト先ダツハ勇也。出ツルトキ後ルヽハ義也。分ツトキ均シキハ仁也。此三ツノ者ヲ得ザレバ大盜ヲ成スコトアタワズ。是ヲ以テ道ノ離ルベカラザルコトヲ見ツベシト。此說笑ヘ悲ムベキ者也。○一日門人ニ謂テ曰、予曾テ持敬圖說・原人ヲ著ス。當時工夫ノ要カクノゴトクナルニ過ギズトス。工夫寖ク積ムニ至テ其說ノ瑩カナラザルコトヲ知ル。

（附記）川田剛撰年譜に云ふ。冬渊岡山始來謁ゝ。岡山入門の年次諸書載するところなし。蓋し據るところあらん。今詳かならず。

(一) 熊澤氏墳墓記續蕃山考四〇頁に依れば長は仲愛の妻高橋氏の名なり。今こゝに長に作るは恐らくは誤。

(二) 三輪執齋著藤樹先生全書序文（本全集附錄湖學紀聞）並書翰集卷上與池田子書參照。

(三) 光明正大底本光明二字を抹殺するの記號ヒヒの二字あり。正の字高字を傍記す。

(四) 先の下中村氏本「ツ」字なし。（紫水）

二年乙酉。先生三十八歲。

今年ノ冬經書切要ナル語ヲエラビ擧テ解ヲナシ、同志ノ益ヲトル便トセント欲シテ、十一月ヨリ稾ヲ始メ幾ニ一葉許ニシテ終ニ成ラズ。（中）

三年丙戌。先生三十九歳。

春正月二十五日次男鍇生ル。春仲條太來テ學ブ醫ヲ。（中）○是年郡主分部伊賀守ヲ見ル。（中）先生ノ德アルヿヲ聞キ見ンヿヲ乞フ。邑宰先生ニ强ユ。先生固ク辭ス。（中）后已ムヿヲ不得シテ見ユ。先生ヲ待スルヿ頗ル禮アリ。然レ𪜈終ニ道ヲ問ヿナシ。

夏四月三十日。夫人高橋氏死。年二十六。

（附記）底本これ以下白紙一枚を置く。（紫水）

私ニ記（中）（南）

戊子七月四日
三男彌生ル。（中）

四年丁亥。先生四十歳。

秋鑑草刊行。先生嘗翁問答兩部ヲ著ス。然レ𪜈學日ニ進ニ至テ、此問答愈其心ニ叶ハズ、改正ノ志有ケレバ、博ク門人ニダニ授ケ玉ハズ。然ルニ癸未ノ年梓人ノ手ニモレテ既ニ梓ニチリバメシヲ幸ニ早ク知テ是ヲ破ル。板屋迷惑ナルヨシヲ再三歎クニ依テ損ヲツクノヒニトテ女中方ノ勸戒ノ爲ニ嘗テ著シ置玉フ書ヲ鑑草ト題シ彼ニ授ク。（中村氏本）

慶安元年戊子。先生四十一歳。

譜(中)秋八月二十有五日朝卯時先生藤樹ノ下ニ卒。葬ニ江西ニ。(中)

(附記) 按ずるに先生の三男常省子の出生について底本は戊子の二字を冠しつゝ正保四年丁亥の條下に記せるを以て、川田剛撰年譜には、誤つて前年の條下に、秋七月四日季重生云云。といへり。然れども祠堂神主の函に「慶安戊子七月四日生寶永己丑六月二十三日卒年六十二」とあればその誤なることを明かなりとす。

鴻溝錄に曰、故舊門人來會レ葬者三百有餘人。相議葬ニ于玉林寺門前ニ。世稱日ニ近江聖人ト。不レ名。(紫水)

(斯書未レ詳ニ何人所ニ編也。紀レ事確實、而裁レ文拙劣。則其成ニ於當時門人之手ニ也、蓋無レ疑矣。當時氣運淳龐、文事未レ闢、時則有ド若ニ藤樹其人ニ者ト、首ニ唱乎前ニ。有ド若ニ蕃山其人ニ者ト、主ニ張於後ニ。詢是晨天景星、朝陽鳳鳴。爭レ先覩レ之爲レ快焉。嗚呼、盛哉。讀レ之三嘆息。裕識)

(附記) 萩原裕編鹿鳴園叢書藤樹先生年譜跋文より、春日精之助氏報。(藤陰)

（附）

川田氏本　藤樹先生年譜

甕江川田剛毅卿撰（黄微（舊））

先生諱原。字惟命。姓中江氏。稱與右衛門。江州高島郡小川邑人。祖父（舊）諱吉長。事米子侯。食祿百五十石。父諱吉次。母北川氏。隱於農。先生嘗講學於藤樹下。（舊）學者因稱藤樹先生。云（舊）

慶長十有三年戊申春三月七日。先生生於江州小川村。

元和元年乙卯。先生八歲。

先生雖生長田野。擧止自異凡兒。

二年丙辰。（舊）先生九歲

春祖父吉長來自米子。欲携歸先生。以爲其嗣。父母鍾愛。不忍遠離。辭以無他兒。不聽。先生聞命。決然即道。毫無悲感態。往事祖父母甚謹。○是年先生始學書。吉長命代己作書札。辭理暢達。覽者奇之。

三年丁巳。先生十歲。

是年米子侯徙封於豫州大洲。以吉長爲風早郡宰。先生從移焉。就塾師。讀庭訓式目等書。誦過數遍盡背記之。吉長大喜。每對客。輒誇稱極口。然先生未嘗以自足。謂人生所當爲。豈無大於是者哉。

四年戊午。先生十一歲。

始讀大學。至自天子以至於庶人。壹是皆以脩身爲本。嘆曰。幸哉此經之存。（舊）聖人豈不可學而至焉乎。因泣下沾衣。

五年己未。先生十二歲。

一日先生方食。投箸自責曰。此是誰所賜也。一則父母 二則祖父母。三則君。三者之恩。不可以須臾忘。

六年庚申。先生十三歲。

夏霖雨。五穀不登。風早郡尤甚。吉長下令禁男女逃亡。有奸人須卜者。竊謀誘衆與俱去。吉長詗知。親往詰之。須卜佯爲謝狀。起擊吉長。吉長怒。槍殪之。既而須卜子（其（舊））欲爲報讐。屢率其黨。乘夜放火於吉長宅。吉長命先生巡察。一夕賊來襲。知其有備而去。吉長與先生開門出逐。先生意氣安閑。絕無恐怖色。人服其膽勇。○冬從吉長歸大洲。先生謂吾素長於田野。一旦遽與士大夫接。苟有言語動止違禮節。恐（則應（舊））爲其所笑侮。因日夜思念。寢不能寐。

七年辛酉。先生十四歲。

一夕諸大夫來談。先生以爲是執國政者。當器識異常。乃屬耳於壁。而終夜言論。平平無他奇。先生大怪之。○先生嘗就曹溪院僧天梁學書又學作詩。(屬（舊）)間(頗（舊）)有佳什(作（舊）)。或謂天梁曰。中江氏之子。天資敏慧。盍使其叅話則也。豈有未能悟之者乎。天梁曰。否彼一語輙悟矣。但恐既悟之後稍長傲氣耳。○秋八月七日。祖母小島氏歿。年六十三。

八年壬戌。先生十五歲。

秋九月二十二日（△（舊））。祖父吉長歿。年七十五。吉長以己無文。使先生爲學。凡書籍筆墨之費。毫無所吝惜。是（少（舊））以先生得講習（△△以爲（舊））如意云。○先生連遭大喪。哀痛形於色。○先生謹愼。雖小節。不敢忽之。其與僚友應酬。一有過差。輙忸怩自耻。踰月不能忘。

寛永元年甲子。先生十七歲。

夏有僧來自京師。講論語。先是先生讀大學。心竊向聖學。及聞僧至。大喜。往學焉。居無何。僧去。乃購得四書大全讀之。時大洲之俗。崇武卑文。先生深憚物議。晝與諸士講武。夜則對燈誦讀。未期年業大進。

二年乙丑。先生十八歲。

春正月四日。父吉次歿。年五十二。

四年丁卯。先生二十歲。

先生專奉朱學。動用禮法自持。與中川貞良等。講習大學。以興斯文爲己任。○夏川備禮改葬祖（△（舊））父吉長。

五年戊辰。先生二十一歲。

是年著大學啓蒙。其說專原於大全。

六年己巳。先生二十二歲。

先生嘗訪兒玉氏。會荒木某在坐。呼先生爲孔子。先生怫然。曰。孔子卒。（沒視漢（舊））二千有餘載於此。今汝目我以孔子者。豈以我學文而嘲之乎。學文士之常耳。士而無文。與奴僕何異。某愧而謝去。○是年乞暇省母於江州。

七年庚午。先生二十三歲。

春著安昌弑玄同論。○初吉長好圍棋。故先生亦習焉。及志於聖學。卒廢之。一日與兒玉某等。會於城中。談及圍棋。先生曰。吾雖久不對局。而比前日進一著矣。某不信。乃與之圍。果不能勝。一坐驚歎。

九年壬申。先生二十五歲。

春乞暇省母於江州。因請奉歸以養焉。（母（舊））不可。乃不得已獨返。途患哮喘。○是年侯分封其弟。爲新谷侯。使先生仕焉。

十年癸酉。先生二十六歲。

春正月朔。賦懷母詩。

十有一年甲戌。先生二十七歲。

前此。先生以母老侍養無人。屢陳情請致仕。侯重其爲人也。不允。是年三月。又上書於執政佃氏苦請。誓以不事二君。不報。遂棄官而去。先如京師。寓於某氏。以待罪百餘日。逮問不至。乃返小川邑。初先生之去大洲也。俸米若干斛。藏廩封鎖。又傾家貲。悉償諸債。至是所齎錢三百。內分二百。與僕遣歸。餘錢僅百文。無以爲生。乃親當壚賣酒。又鬻佩刀。獲銀十枚。放債收息。以其收息薄也。人莫不如期償還。○冬泛舟觀月。賦詩曰。念慮一毫差。應酬千里訛。人心宜主靜。明月不沈波。

十有二年乙亥。先生二十八歲。

春作聖像贊。○秋京(洛(舊))友來訪。書白鹿洞揭示。並賦詩一首贈之。○是年得周易啓蒙讀之。日夜尋繹(究(舊))。遂窮其蘊。

○一日先生語門人曰。吾歸住小川邑一年於此。始覺此心稍安然。故寢則背貼席矣。嚮者在大洲。夜就寢。人呼一聲輒覺。自謂庶乎寢不尸者。今而思之。是支撐衿持之過耳。

按行狀。初先生據宋儒訓解。講究經傳以爲大學者初學入德之門。尤不可以不致思。因自作之解者。前後凡三。而未得格知之要。適讀陽明全書解致知爲致良知。乃默坐澄心。驗之人情。考之事理。質之詩書語孟之言。莫一而不脗合。於是豁然開悟。從來之疑始釋矣。是年寬永乙亥。先生二十八歲也。故明年丙子(參(舊))歲旦。有料知聖學成功地。氣朔今朝共是春之句。此說與他書所載不同。然亦似有據。姑記於此以備考。

十有三年丙子。先生二十九歲。

秋如京師。會藤田某島川某。談易賦詩。閱月而還。○冬作神農像贊。○是年小川覺來訪。先生作詩送之。

十有四年丁丑。先生三十歲。

春池田某來訪。先生作詩送之。○是年娶高橋氏。蓋據禮男子三十而娶之文也。母以其容醜〔高橋氏之（舊）〕欲爲改娶。先生固請而止。高橋氏資質貞順事先生十年。凡事無巨細。不受命則不敢行。先生每夜與諸生會講。率至二鼓三鼓而後罷。高橋氏端坐待之。無倦色。未嘗一夕先先生而就寢也。

十有五年戊寅。先生三十一歲。

春正月朔。先生讀孝經有感。賦詩。○谷川寅。落合左。兄弟來受業。○初先生在大洲。與大野某善。其子了佐愚騃。某慮不能承後。欲使其服賤業。了佐心恥之。竊就先生請學醫。先生憫然授之大成論。讀誦數十遍。不能記一字。至是復來學焉。乃著醫筌授之。既而了佐遂以醫成家。先生嘗語諸生曰。吾於了佐。竭吾精力了矣。然非彼勉勵之功。吾亦未如之何也。二三子天資。（萬舊）非了佐之比。苟有志焉。何患不成。特欠一勉字耳。○先是。先生專講四書。凡日用常行。欲一遵守聖賢之遺法。稍覺其窒礙難行。於是更取五經讀之。頗有所感發。乃著原人及持敬圖說。○是年中川貞良吉田某來訪。先生作詩送之。

十有六年己卯。先生三十二歲。

春山田權來學醫。○夏四月撰藤樹規。及學舍座右戒。藤樹規跋曰。原竊惟。今之人爲學者。唯記誦詞章而已。是以吾道之所寄。不越乎言語文字之間。愚嘗憂之也深。故推本聖人立教之宗旨。而參以白鹿洞規。條列如右。而揭之楣間。庶幾與一二同志。固守力行之也。○中川熊來受業。○遊竹生島賦詩。○講小學至明年冬卒業。○秋講論語。於鄉黨篇。有所感觸。乃撰論語解。起鄉黨至先進三章。會病。不果。○是年森村某來訪。先生作詩送之。

十有七年庚辰。先生三十三歲。

夏先生讀性理會通有感。祭太乙神。每月以爲例。嘗曰。祭天之禮。唯天子有之。若士庶人。則祭太乙神而

可也。乃撰太乙神經。未脫稿。亦罹疾而止。又深尊信孝經。斷斷以爲孔氏之遺書。每朝拜誦之。○秋著翁問答。○冬獲王龍溪語錄讀之。心病其多用禪語。及後見陽明全書乃釋然。曰。聖人一貫之學。以太虛爲體。異端外道。皆在吾範圍中。吾安忌言語之相同哉。且當時學禪之徒甚衆。設令其讀之。則庶乎亦知吾道之至大無外。而自悟其非歟。先賢救世之苦心。可以(舊)想矣。

十有八年辛巳。先生三十四歲。

夏謁伊勢勢州(舊)。大神宮太廟(舊)賦詩。初先生遠鬼神。除其祖先外。一切祠廟不詣拜。謂賤之於貴。不可以相親。在人且然。況鬼神幽明殊途者乎。至是。大悟其非。曰。他神姑置之。若大神宮勢廟(舊)則天地開闢之祖。凡生於此間者。安有遠焉而不祭之理哉。乃往而拜焉。○秋七月熊澤伯繼來學。先生辭以事。固請。乃許謁見遣歸之。冬十一月再來。因門人淵田某。懇請不已。先生感其篤志遂授業。○是年先生始悟拘泥之非。謂諸生曰。吾嘗尊信朱學。命汝輩專以小學爲準則。今始知其拘泥之甚矣。蓋守格法之與求名利。雖不可同日而論。至其害眞性活潑之體。則一也。汝輩讀聖賢書。宜師其意。勿泥其跡。聞者大興起。○作文論坐禪。曰。瞿曇迷而入山。又迷而出山。達磨惑而面壁。又惑而背壁。譬如蟻旋磨。后世佛者以入山面壁。爲大覺了悟。此謂刻舟求劍。求名而坐枯禪。則市井之俗腸。志道而守頑虛則猶緣木而求魚也。靜室閑坐。雖如無心猿之跳弄。意馬之奔馳。只是瘧疾之間日而已。畢竟何足恃也。○一夜先生夢。有人授之光默軒之號。先生謂光字吾不敢當。因號默軒。

十有九年壬午。先生三十五歲。

春中村叔貫來受業。○先生專講孝經。揭愛敬二字。示學者。曰。愛敬是人心自然感通。猶水之流濕。火之就燥也。吾人全爲氣習所蔽了。然父子兄弟間猶有時發見。苟認得此心。以存養焉。則聖賢氣象。不難窺知

也。○夏與小川某書曰。疑問雖於集註之評。則得其當。而於正經之主意。則無體認之質問（按質問疑當作工夫）。是何言與。是何言與。如許之末務。素非吾之所以望於子。子亦素非其所志。顧以未免專以集註爲主本之固。故有此皮膚之問而已。蓋經有心有跡有訓詁。學訓詁而講明其跡者。初學未知文字者之所務也。已曉文義。則專於正經上體察玩索。須求心心融會之妙。而后當有吾所望之疑。若不如此用工。則與俗學相違。不能以寸矣。○秋著孝經啓蒙。○冬十一月二十三日子宜伯生。母高橋氏。先是。先生生二男一女。皆未閱月殤。○是年熊澤橫山谷川中川諸子去。先生各作詩送之。其送熊澤詩曰。動而無動靜無靜。無倚圓神未發中。愼獨玄機必於是。上天之載自融通。

二十年癸未。先生三十六歲。

春正月朔賦詩。其序略曰。一貫之靈竅字之曰良知。千古聖聖相傳之道。學者自鄉人所以可至於聖人之學脈。唯在于玆而已矣（按學者云云疑當作學者所可自鄉人以至於聖人之學脈。）○書賈竊刻翁問答。先生聞之大驚。命速毀版。曰。上卷其說原於孝經。存之尙可也。至下卷。則憤世矯俗。不免抑揚太過。於是。欲盡改之。會病不果。○秋作聖像贊。○冬先生爲諸生講詩。有中西常慶者。亦來聽焉。退而歎。曰。初吾在京師。聞先生之學。大異於世儒。而未知其所以異者果何事也。今則知之矣。遂執贄爲弟子。○淸水某來受業。○是年先生爲山田森村二生。撰小醫南針。

正保元年甲申。先生三十七歲。

春正月朔賦詩。曰。穆穆文王不顯春。梅花鶯語二南民。何爲後學不興起。豪傑惟人予亦人。蓋去冬先生爲諸生講二南卒業。故及云。○又爲山田森村二生。撰神方奇術。○夏四月加世五來受業。○秋八月岩田長來受業。○冬淵岡山始來謁。退而語人曰。先生非獨德容可敬。聰明才智。亦有不可企及者。先生聞之。歎曰。

吾嘗恐以聰明才智加人。務韜藏之。猶不免有時發露。彼之所以美吾者。卽吾之所以自耻也。○是年先生購得陽明全書。沈潛反復大有所得。頗悔其所著原人持敬圖說等之論未瑩。一日語門人曰。吾嘗贈山田某。以三綱領解。其至善解曰。事善而心無善者。（按無善疑當作不善）非至善。心雖不違善。事不中節者。亦非至善。當時未免支離之病。故爲此謬說耳。夫心事一也。心善則事亦善。事善則心亦善。天下未有事善而心不善。心善而事不善者也。或曰狂者之行。鄕愿之心。豈非心事判爲二者乎。曰不然。狂者之行。大抵光明盛大。無些掩飾。其或奇激失中者。心有所未透徹也。若夫鄕愿。則俯仰阿世。無復一善可取。古人云。此道至大。盜且不能外之。入先勇也。出後義也。分均仁也。是亦皮相之論。安足與語所謂至善者哉。

二年乙酉。先生三十八歲。

春作文題淸水氏卷。其略曰。人之一身。有大體有小體。身體髮膚。此小體也。仁義禮智。此大體也。身體德性。皆受之父母。而非己所私有。故以情愛謹身。則順親亦以情愛。所謂順情識之父母者也。尊德性脩身。則順親亦以德性。所謂順靈明之父母者也。是以孝經以嚴父配天爲大孝。中庸以明善誠身爲順親之道。只是在明明德而已矣。明德之愛敬。寂然不動。感而遂通天下之故。無以聖凡餘欠。但爲氣習情欲所蔽。則不啻不通天下之故。於其親。亦不能通。然幸其本體之明。有未嘗息者。必可知其止。而芟除舊習葛藤。消化情欲之邪火。以復本體之明。此之謂大孝焉。○先生常爲學者說止於至善工夫。又於諸經中。擇其切要語。以爲註解。脫稿僅數條。會病而止。

三年丙戌。先生三十九歲。

春正月二十五日。子仲樹生。母高橋氏。○仲條太來學醫。○夏四月晦。高橋氏歿。年二十六。先生爲持齋五十日。○一日先生有所感。賦詩。曰。獄外有獄納沙界。名利傲意其四壁。哀哉世間多少人。拘攣這裡長

戚戚。○冬書森村氏卷。曰。心之虛明。此之謂謙。惟虛也。故溫恭能容。惟明也。故稱物平施。反謙爲傲。傲者由意之滿溢。而火氣炎上者也。惟滿溢也。故不能容。惟炎上也。故不能屈下。蓋人心有傲。則本體之虛明所蔽。按虛明下脫爲其二字。而天君失位。而靈臺變做鬼窟。而魍魎用事。於是。天下群魔以類聚于方寸。遂爲病狂喪心之徒。噫。哀哉。是故。大學誠意傳以自謙開示本體。謙者德之柄也。克傲而火氣不淨盡。則雖用百倍之功。而不能入德。學者宜知所用力也。○是年大溝侯延見先生。接遇有禮。

四年丁亥。先生四十歲。

春書土橋氏卷。曰。大極動而生陽。靜而生陰。所謂命也。蓋大極不是陽而好。不非陰而惡。然人不能無意必之私。而於事有適莫也。於是。聖人揭出賦命自然之理。而解其惑而已。夫生也。達也。富也。貴也。得也。福也。皆陽也。死也。窮也。貧也。賤也。失也。禍也　皆陰也。君子立大極。而不願乎外。於天下。無適也。無莫也。是以死生窮達。貧富貴賤。得失禍福。皆爲寒暑風雨之序。夫然。故君子唯致其良知而已矣。命分豈足論辨乎哉。○又書野尻一利卷。曰。知者。天性之靈覺。意者。心之所倚也。蓋天性之本然。無將迎。不逐物。於天下之事。毫無適莫也。方其靜也。廓然大公。猶鑑空衡平。方其動也。稱物平施。猶明鏡照姸媸。平衡之稱輕重也。心有所倚。而始有適莫。而或將或迎或逐。心神擾亂。憧憧往來。無所定。是以方其靜也。無記頑空。猶明鏡之斑垢駁蝕也。方其動也。顚倒錯亂。猶衡不平。而所稱皆爽也。故大學之要。在誠意。誠意之功。在格物致知而已。○夏加世五歸鄉。先生賦詩送之。○秋七月四日。子季重生。即常省先生也。母繼室別所氏。○是年先生撰鑑草刻行之。

慶安元年戊子。先生四十一歲。

春正月朔。賦詩。曰。教官讀法屬民晨。同志彌看勸戒眞。怪且羞吾心不古。千山萬木唐虞春。○夏又觀月

賦詩。○秋八月二十五日。先生卒。先生及病革。隱几端坐。遠去婦女。召門人曰。吾去矣。誰能任斯文者也。噫。言畢瞑目而逝。門人相會。用文公家禮。葬之於小川邑玉林寺側。備前侯聞訃。使其臣熊澤伯繼來賻。隣里鄉黨。扶老携幼。涕泣送柩。如喪親戚。後邑人修其宅爲祠堂。春秋奉祀。至(舊)今不廢云。

藤樹先生之事。散見於傳記者。往往有異同。大溝藩主。標嶺(舊)分部侯懼其久而或失實也。命剛錄之。剛乃據其(舊)先生門人所輯。國字年譜。行狀。系圖。及遺稿。全書。心學文集諸書。叅伍考定。以撰年譜如右。

安政丁巳冬十一月　川田剛識

（附）

會津本 藤樹先生年譜

先生姓藤原。諱惟命。氏中江。自稱與右衛門。父諱吉次。母小川氏㊀。慶長十三年戊申三月七日生。江州高島郡大溝屬邑小川。幼而穎悟謹篤。雖生育僻壤。與群兒嬉戲。無習俗汚染。質性瑩美也。

元和元年乙卯先生八歳。在小川邑。

邦君或過其門。則雖在內庭室中。必跪拜致其敬。

㊀北川氏の誤。（紫水）

二年丙辰先生九歳。在伯州。

祖父諱吉長。仕伯州米子城主加藤左近太夫貞泰。吉長來江州小川邑。請先生養之。先生從吉長赴伯州米子。事祖父母孝矣。

是年始而學文字。期年而能之。遠近書簡來則吉長使先生報答之。衆人賞之矣。

三年丁巳先生十歳。在豫州大洲。

是年伯州米子城主加藤左近太夫。移于豫州大洲城。吉長供奉。先生從之。冬吉長進爲風早郡吏。先生從之到風早郡。吉長使師習文字。讀庭訓式目之雜書。先生聞一知二。敏賢者矣。祖父吉長喜曰。如斯者幾希也。

是年始讀大學。至自天子以至庶人壹是皆以修身爲本。歎曰。於戲。吾何幸從事于斯哉。感淚屢濕袖。從此志篤學日新。

四年戊午先生十一歲。

五年己未先生十二歲。

夏五月霖雨。五穀不登。百姓饑饉。欲風早郡民離散也。郡吏吉長止之。有賤賊須卜者。奸惡而亂風詠俗。且結黨。謀百姓離散。吉長聽之。誅戮之。須卜之子恨之。欲討吉長。雖先生幼稚。夙夜廻家屋境內。戒夜賊徒將入門。先生握劍柄。嚴然矣。吉長喜先生有勇而有知也。

㊀欲の字は當に郡民の下に在るべし。此の如く措辭を誤りたるもの多し。今一々註記せず。（紫水）

六年庚申先生十三歲。

七年辛酉先生十四歲。在大洲。

一日大洲家長大橋氏。作諸士四五人。來吉長之亭。終夜談話焉。先生以爲執政之一言豈徒哉。隔戶聞之。鄙俚雜談。不足取用。先生賤之。

是年習文字。讀書之間。賦詩聯句。有佳作。

穐八月祖母卒。春秋六十有三。

八年壬戌先生十五歲。

秋九月二十二日。祖父吉長卒。春秋七十五。先生平生於應接有過失。恥之。自反而不忘之。

九年癸亥先生十六歲。

是年通誦十三經。

寬永元年甲子先生十七歲。

繼祖父吉長家。事君忠矣。他日讀大學。一誦三歎焉。以脩身齊家之語也。以來雖欲聞講受敎無

其師默止之數月也。是夏禪僧來于大洲而講論語。大洲之家風專武、厭文、無諸士聞之者焉。先生獨往而聞之。數日。禪僧半途而歸京師。先生憂之。而後雖請其人不得之。故當四書大全讀之。諸士譏先生之問學。先生慮時勢、代日學夜。有不通則寢而思之。思之不得不措。誦大學百返。始知其甚。次讀語孟。悉通其理者也。

二年乙丑先生十八歲。

春正月父吉次於江州小川邑卒。春秋五十三。

三年丙寅先生十九歲。

四年丁卯先生二十歲。

先生尊崇朱文公。學其教道。以格法主之。專攻己也。是年中川良貞（底本頭註曰良貞他書皆作貞良、蓋正堂翁所註。（紫水））及同志三四輩。慕先生來。先生講大學。以聖學為己任焉。

是年夏以文公家禮祭祖父吉長。

是年大學啓蒙成。其書蓋專據朱文公大全之說。其後閱之未精密故廢之也。

五年戊辰先生二十一歲。

先生弱冠而厭俗學支離。出京師學易經。始而讀王子之書契其心。

六年己巳先生二十二歲

春。先生到兒玉氏之亭。荒木氏見先生曰。孔丘來哉。先生曰。孔子歿而二千有餘歲。汝何欺我乎。荒木氏恥之。先生退而知其圭角也。後來日進月就。崇德融和。有威而不猛者矣。

是年告大洲城主加藤出羽守藤原泰興。到江州小川邑。見母堂。請孝養而歸豫州。

七年庚午先生二十三歲。
八年辛未先生二十四歲。
九年壬申先生二十五歲。
春。告大洲城主加藤出羽守泰興。到江州小川邑。見母堂。母堂曰。我老衰而不欲離古鄉赴豫州。強言之而不聽也。先生歸大洲。
是年豫州大洲城主加藤出羽守泰興。使弟織部正直泰與諸士。先生仕織部正直泰。
十年癸酉先生二十六歲。
春正月朔日。有懷母詩。蓋不來豫州。故歎不得其定省也。
十一年甲戌先生二十七歲。
冬十一月致仕。歸江州小川邑。（原註）行狀曰。二十六爲奉母堂辭豫州之俸歸江陽。 先是謂大洲長臣佃氏曰。母在舊里。雖欲偕來不肯也。願致仕歸舊里養母。佃氏曰。我必告公者也。雖然不果之。其意惜先生之才德。且仕二君欲得厚祿乎否。疑之而不許者歟。於是先生寄佃氏以誓盟。顯不仕二君也。雖然不容之。先生慮之。欲樹定不風息。欲子養不親待。潛退大洲。歸江州小川邑焉。其退日積今年資祿於私倉。不貪一粒。家屋灑掃而無汚穢焉。先生歸舊里。則從者某從。先生到京師一日。謂從者曰。汝可歸豫州。吾行舊里養母堂而已。今殘銀三百錢。以二百錢頒汝。宜立身行道者也。從者固辭曰。君銀僅三百錢。與過半。雖一紙半錢可受之乎。直從君共死生而已。涕泣頻也。先生強與之。不能默止。拜賜。歸豫州。
冬十一月有京師。先生以私退。恐君命。到京師。賴朋友之家。待命百餘日。大洲侯感孝情而赦之。

先生歸江州小川邑。養母堂、安如矣。

是年始通筮著。先生曰、於易經道理、盡心、得其萬一者歟。於筮著不得其傳、則不可得之也。於是出京都求易學講師。適有講師。貪金錢不正教也。先生貧乃止矣。他日有一講師。先生請聞其講。講師曰、禁他出一志聽之者。傳之矣。先生曰、何以如此言之乎。曰、聞講半途而廢者數多也。或評其是非、侮我謗我。是以如此而已。先生以爲不謂是非易、禁他行難、乃息之焉。於是需易書、始而得啓蒙矣。其後歸江州小川邑、熟讀參考而通筮著焉。

㊀ 有京師は當に在京師に作るべし。後文有豫州大洲も亦同じ。（紫水）

十二年乙亥先生二十八歲。

十三年丙子先生二十九歲。

是年小川氏自豫州來江州小川邑、師先生學之。賦送行詩。

秋。先生赴京都。會筑州池田氏。先生友善。始遇島川氏論談易經。閱月、歸江州。

十四年丁丑先生三十歲。

是歲娶高橋氏女。蓋三十而有室。據聖謨者歟。其女容貌甚醜。母堂憂之。先生曰、雖容貌甚醜、生質聰而用心貞。勿憂之也。平日先生會門人、及五更入閨門。先先生不能寢正座矣。雖平生爲小事、待先生之命行之。嗚呼。賢貴貞婦者也。是年池田氏來學。賦送行詩。

十五年戊寅先生三十一歲。

是年谷川氏落合氏來受業。始有豫州大洲與大野氏友善。嗣子了佐。生質魯鈍而不能繼士業。欲授鄙賤之業、了佐憂之。慕先生來、謂先生曰、願爲醫師。先生憫其意。授大成論讀之。先生教之

二三句。及二百反。漸覺食飯喫茶、而後皆忘矣。經年不能記憶也。其後先生致仕歸江州。是年了佐來。小川邑學先生。懇厚也。先生以難醫術通曉。輯捷徑醫筌授之。講之其意通。以醫鳴世者也。先生曰、於吾了佐幾盡心而已。弟子曰、師者學而不厭。敎人而不倦。感歎之。先生曰、雖欲盡吾心敎之。了佐無困々勉々、則豈能之乎。可謂奇而已。

春中川良貞(一)從豫州來學先生。

夏持敬圖說・原人論成。先是讀四書。堅守格法。欲其志以聖賢之典要格式逐一受持之也。雖然不合時宜、好惡執滯數多矣。於是疑之。以爲聖人之道如此者。不有所及吾儕者歟。其後熟讀五經、觸發感得。而著述此二書。示同志。

(一) 良貞當に貞良に作るべし。(紫水)

十六年己卯先生三十二歲。

春。(一云。夏四月。) 作藤樹學規學舍座右銘。示諸生。

三月山田氏自豫州來受業。學醫術。

夏四月中川氏自豫州來受業。講小學諸生。守格法。

秋講論語。於鄉黨篇感得觸發。而後欲著述論語解。自鄉黨篇至先進篇。病發而不果之也。以此解不協心略多焉。

十七年庚辰先生三十三歲。

是年夏讀性理會通、而後發明之。每月朔日齋戒而祭大乙神。蓋天子祭天、士庶人不祭天。是禮也。以是祭代士庶人祭天者也。是以不怠之也。是年撰大乙神經。草稿半而病發。不及淨書。嗚呼。

惜哉。秋應豫州同志之需。著翁問答。既而不合書心。有志改正。是以雖同志不與之也。癸未年春。竊洩梓人彫刻之矣。先生聞之。削板梓欲改之也。既問答上卷。孝經觸發而後模寫其意。故其論溫和也。下卷有憤世激。不免有其說抑揚大過者歟。於是改數條。病發而不果之也。

是年冬。得王龍谿語錄讀之。而觸發數多。雖然。恐佛語間雜近禪學。後至讀陽明全集。龍谿知非禪學也。且佛語混雜者。豈憫世之深焉。抑聖人一貫之學。以大虛爲準則。老佛皆不離一貫中。有唯精粗。而先覺憚何佛語乎。此時佛學之徒多繁也。是以使其語悟之者歟。

十八年辛巳先生三十四歲。

夏。先生與二三子。詣伊勢太神宮。昔日以爲神明無上至尊也。不可馴致者歟。譬以鄙賤身。恐親顯貴族。況於神明乎。是以累年不詣廟前也。頃年積德精微。而以爲雖士庶人有祭神之體(一)。聞講。太神宮本朝之大祖。至德神明也。生此國有不蒙神恩者哉。不可不詣拜者矣。於是詣焉。

(一) 體恐らくは禮の字の誤。（紫水）

秋。欲輯孝經啓蒙。病發息焉。明年啓蒙成。而後參考之。不合其經旨欲改之。不果之也。

是年始守格法。知其敝。先是專信朱子註解。日月講之。以小學之敎論諸生。故門人泥其格法。日日拘攣。氣象漸迫矣。於是先生謂門弟子曰。吾泥格式受用久矣。漸覺其非哉。以格式受用者。以名利受用者。其志雖非同日談。失眞性活潑之本體是同者歟。吾人放下拘攣之意。信天理本然。可泥其事跡者也。諸生大歡而興起焉。

冬。熊澤伯繼來受其業。伯繼去秋來請見。先生不知其志。故辭而不見之也。再來請見先生贈書。

亦辭焉。伯織請曰。雖嘗不施教。如何不許謁。意旨懇厚也。先生聞之見之。雖然。不容授其
年冬。來因請其教。於是授其業也。

十九年壬午先生三十五歲。

春。中村叔貫來受業。先生頃日專講孝經。揭愛敬二字曰。心本然原愛敬。猶下水濕就火燥也。吾
人種々習心習氣。凝滯而蔽本心。雖然愛親敬兄心且見赤子慈愛心未有滅者矣。認是本心存
養之。則聖人之心也。求他乎。
冬十一月。生男虎之助。先是二男一女。皆不踰月殤矣。

二十年癸未先生三十六歲。

著述小醫南針。授山田氏森村氏。
是年秋中西常慶來問道。冬講詩經周召二南。中西氏退曰。於京都聞講談數。未聞若先生講習。
益從先生學既盛也。冬清水氏來受業。
春。輯神方奇術。授山田氏森村氏。

正保元年甲申先生三十七歲。

夏四月加世氏來受業。
是年始讀陽明全集。甚喜焉。學益進。弟子日衆多矣。先生謂門弟子曰。我著三綱領解。照至至善
之解曰。雖事善心不善。則不至善。雖心善事不善。則亦不至善。此時吾未免支離之蔽。故誤之者
也。門弟子曰。覺此解眞實。如何如此乎。先生曰。心事是一也。故事善而未有心不善者。未有心不
善而事善者矣。門弟子曰。如狂者。雖心無欲淸淨。於其事上不免破綻。亦如鄕原。雖事似中行。其

心汚穢而不分明者歟。先生曰。不然。如狂者。心裏光明。則事又光明也。輕蔑其世。不合其情者。以不得精微中庸之教也。未有心精微而事破綻者也。鄉愿之孝悌忠信廉潔無欲者媚世求穢腸顯事也。然則其事不善。雖似其行善。貪世誣民甚者也。

一日謂門弟子曰。予嘗著持敬圖說·原人論。當時工夫之一助也。今工夫積而知不其說。熒

二年乙酉先生三十八歲。

是年冬欲輯經書功要。舉要語解之矣。十一月始草稿。纔三葉。而不果之。惜哉。

春正月十五日。生男鐺。

是年大溝城主分部伊賀守藤嘉治。請見先生。先生固辭焉。強之。不得辭見之。待先生懇厚也。

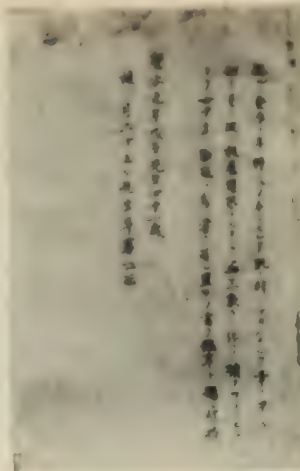
夏四月婦人高橋氏卒。

四年丁亥先生四十歲。

秋。刊行鑑艸。爲婦人禁戒。

慶安元年戊子先生四十一歲。

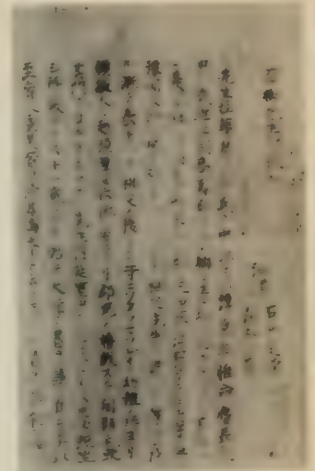
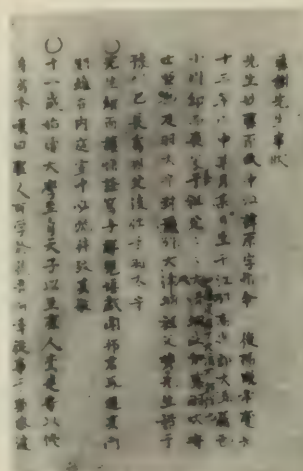
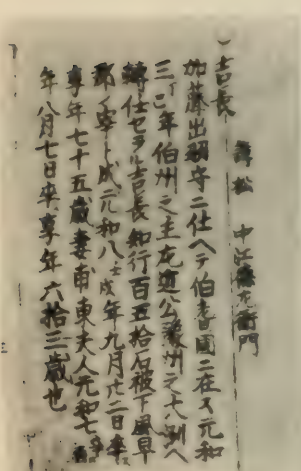
秋八月二十五日。先生大漸。遂卒其邸。嗚呼。天何不假之以年。而使不幸短命哉。闔邑之人。哭泣悲哀。如喪其親。遠近同志。聞訃悉集會焉。以文公家禮。修葬事。衣衾棺槨。必誠必信。葬江州小川邑。

藤樹先生年譜　畢

主なる底本及對校本（八種）

藤樹先生年譜　全書岡田氏本

（藤樹書院藏）

藤樹先生行狀　中村氏本其一

藤樹先生行狀　中村氏本其二

（近江　中村德通氏藏）

藤樹先生行狀　江阪氏本

（藤樹書院藏）

藤樹先生事狀　中村氏本

（近江　中村德通氏藏）

藤夫子行狀聞傳　松下氏本

（近江　田中竹松氏藏）

大洲止善書院記　松下伯季筆

（藤樹書院藏）

湖學雜纂　篠原元博氏編

（藤樹書院藏）

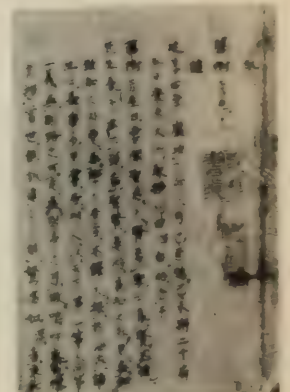
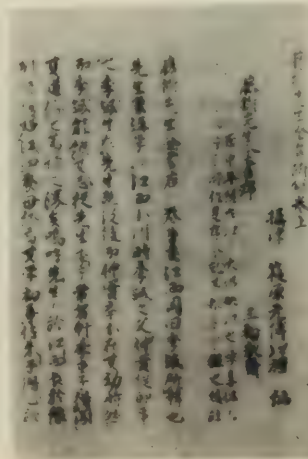
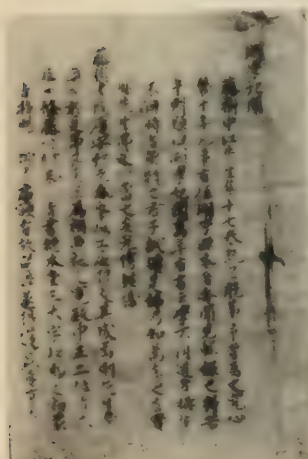
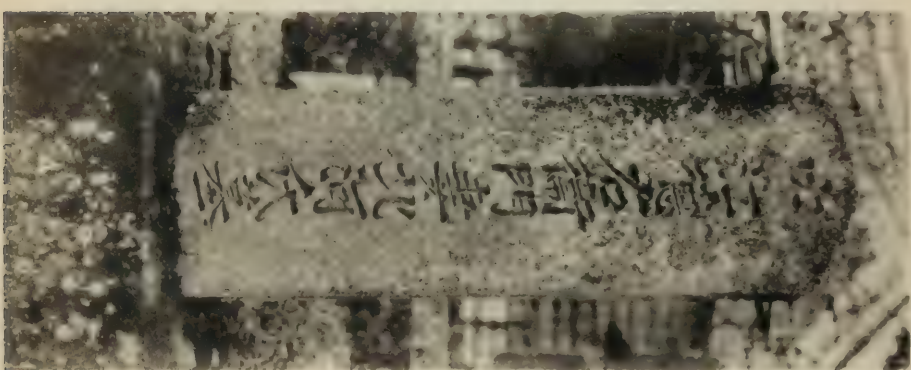
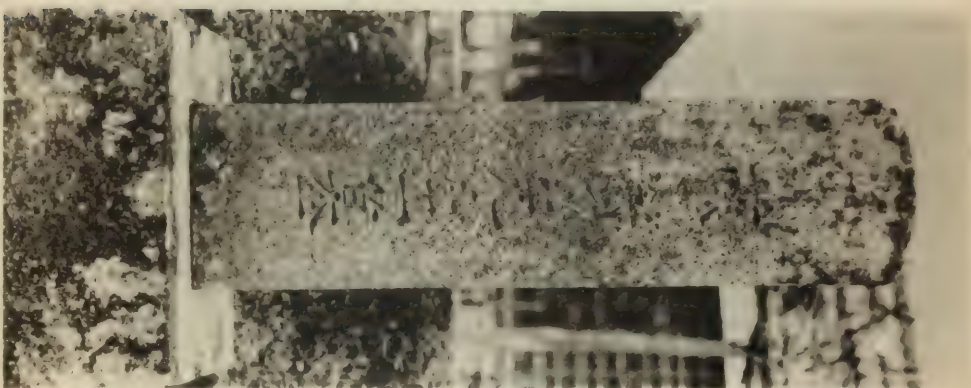
湖學紀聞　篠原元博氏編

（藤樹書院藏）

中江家墓碑三基

藤樹先生母堂墓碑

藤樹先生墓碑

藤夫子行狀聞傳並補傳自第二十六項至第二十八項參照

常省先生墓碑

藤樹先生行狀　解題並凡例

解　題

一、本卷は著者明かならざれども先生の一生を傳記體的に總叙したるものにして、年譜の編年的に分錄したるものと異れり。今本卷の底本となしたるものは、滋賀縣高島郡大溝町大字勝野中村德通氏の藏有本にして、表紙標目「藤樹先師御行狀」の下に「淵氏門弟鹽見永三より石河文助𛀁傳所持之由ニテ寫之。」とあれば岡山學徒の手に成りしものなることは疑ひなく、又その右傍に「此書延享三年丙寅秋七月備州ヨリ小川邑志村治左衞門𛀁申來、寫本講堂ヨリ中村季貫寫遣ス、外ニ事狀共二冊所持殘ス。」と識せり。此書二三史實を誤れる點なきにあらざるも、謹嚴なる筆を以て先生の性行と學術の大要とを叙述し特に立志並に終焉の模樣、また先生の起居動作等年譜に洩れたるものにして本書に依りて傳へられたるもの少からず。

一、對校したる諸本及び其の傳來左の如し。

イ、江阪氏本　滋賀縣高島郡青柳村大字青柳故江阪一雄氏が大正八年秋世界的流行性感冒にかゝり病蓐中特に使を以て藤樹圖書館に寄附したるものにして、實にその叔父謙齋(雄之助彊義)の筆寫せるものなり。謙齋は近郷三重生(今滋賀縣高島郡安曇村大字常盤木の一部)の人なれば、その原本の夙に同地方に存せしものなるを知るべし。

ロ、大友氏本　同縣同郡大溝町大友謙次郎氏之を筐底に得て藤樹圖書館に寄附せるものにして、志

村讓の印影あり。讓は通稱士儉、竹涯と號し同縣同郡小川村の人なり。

ハ、春日潛菴本　春日先生與書藤樹先生遺文と題する一帙中、藤樹先生年譜・同行狀・同實錄といへる合本ありて之を收む。その原本は門人大溝藩士恒河子健の傳ふるところにして、今は京都市赤井直採氏の所藏に係る。

ニ、東澤瀉本　本會顧問陽明學會主幹正堂東敬治氏の所藏にして先人澤瀉氏の佐藤一齋翁に從學せるころ、其の藏本に就き筆寫せるものなりといふ。

ホ、土橋氏本　大阪市住吉區平野鄕町含翠堂土橋保高氏の秘藏なり。

ヘ、內閣記錄課本　題して藤樹行狀といふ。大正十四年三月圖書係西村五十馬氏が、特に本會の依賴により謄寫して寄贈せるものなり。

ト、史籍雜纂本　國書刊行會發行史籍雜纂卷三中家傳史料卷四に收む。附錄として卷末に藤樹先生學術旨趣大略あり。此の文は二見直養翁芳翰集別錄に本づくものなるを以て、今該書を底本として之を收錄し、且つ史籍雜纂本を以て校正を施す。

因みに云ふ。巽軒井上哲次郎博士著日本陽明學派之哲學に「藤樹行狀一卷此書は慶安三年の著作云々。」の文字あり。百方搜索すれども、かゝる年紀の明かなる書を發見せず。頗る遺憾となす。

チ、知止歌小解　此の書の本文と解題とは、本全集卷之十六倭文經解成書五にあり。今之を略す。

一、(附)道統傳は滋賀縣高島郡水尾村大字鴨北川久兵衞氏藏有の眞蹟に據り編者の特に加へたるものなり。

凡例

一、底本の表紙には「藤樹先師御行狀」と題する七字の題簽あれども、正文起筆の標目には「藤樹先生行狀」と記せらる。今後者を以て書名と爲す。是れ對校本共通の名に從ひたるなり。

一、各文段の起首、底本には圏子○あるに非ず。今底本行を新にしたる所に之を加ふ。但し行文の一二行に過ぎざるものには、之を加へざることもあり。

一、註解は、すべて編者の挿入したるものにして、各條の末尾若しくは適當の處に之を附したり。

一、史實誤謬の點に就いては、各條の末尾に編者の管見を識して、讀者の參考に供したり。

一、對校の結果は本文の右側に之を傍記し、左の略符を附して其の據れる所を明かにしたり。

江阪氏本　（江）　　内閣記錄課本　（内）
大友氏本　（大）　　史籍雜纂本　（史）
春日氏本　（春）　　土橋氏本　（土）
東氏本　（東）　　知止歌小解　（知）

一、時に史實を明かにし若くは讀下の便を謀らん爲め編者の私意を以て傍記を施したるものあり。何等の符號をも附せざるもの卽ち是れなり。

一、底本には標目なし。今新に内容目次を附し一覽表として年譜の初に掲げたり。參看せられたし。

昭和二年丁卯七月二十日　　小川喜代藏謹識

藤樹先生行狀

○先生姓藤原ニメ氏ヲ仲江ト云。（諸本皆中江ニ作ル）諱原字惟命、慶長。戊申ノ歲、（十三年（東））近江國高嶋ノ郡小川ノ郷ニ生ル。イトケナフメ父ヲウシナヒ、其祖父ニ養ハル。祖父ハ加藤貞泰伯州米子城主元和年中豫州大洲ヘ移。（紫水按ズルニ底本ハ祖父ハノ下ニ「當國大溝ノ郡主加藤出羽守ニ仕フ守一ノ十六字アリ。下文「伊豫ノ國云云。」ニツヾク。而シテ右十六字ヲ抹殺シ、加藤貞泰以下本文ノ通リ二十字ヲ朱記ス。又底本頭註ニ、「加藤侯居ニ于大溝ニ不レ能レ詳也。」ノ十一字ヲ朱記ス。訂正シタルモノハ文理通ジ難クナリシガ、事實ハ要スルニ祖父ハ加藤貞泰伯州米子城主ニ仕フ。元和年中豫州大洲ヘ移サル、ニヨリテノ意ナリ。按ズルニ高島居城ノコト、北藤錄、加藤家所藏寫本、加藤光泰貞泰軍功記・藩翰譜等ノ諸書ニ見ユ。潜菴本ニ、「當郡ノ郡代加藤作内光泰後濃州黑野ニ移リ、嫡男左近太夫貞泰伯州米子城ニ移リ、豫州云云。」ノ語アリ。又イトケナフメ父ヲウシナヒ、其ノ祖父ニ養ハルト云フモ事實ト稍異ナリ。年譜ノ記述ヲ正シトス。）伊豫ノ國大洲ノ城ニ封セラルニヨリテ、祖父先生ヲ携ヘテ豫州ニ（ナ（江））移ル。漸ク長ナリテ、祖父ノ後トシ守ニツカフマツレリ。幼稚ノ時ヨリ穎敏人ニ越エ、謹厚モ亦他ニ異リ。群兒ト嬉戲スルノ間、郡主（守（大））或ハ其門ヲヨギリタマエバ、先生內庭室中ニイマストイヘモ、必跪坐シ拜敬ヲナス。（元和四年戊午ノ（東））十一歲ニメ始テ大學ノ書ヲ讀ム。自二天子一以至二庶人一壹是皆以レ修レ身爲レ本ト云ニ至リテ、書ヲ恭敬シ嘆メ曰、聖人學デ至ルベシ。生民ノタメニ、此經ヲ遺セルハ何ノ幸ゾヤ。コヽニヲイテ感淚袖ヲウルヲシテヤマズ。是ヨリ聖賢ヲ期待スルノ志アリ。一度書ヲ讀デ必諳ズ。イマダナラハザル文字トイヘモ、皆通曉ス。人皆奇異ナリトス。（元和九年癸亥（東））十六歲ニメ十三經ヲ通習ス。惣テ諸子百家ノ文、（△（內））倭國ノ書ニ到ルマデ讀マズト云ヿナシ。先生初ハ威儀ニナラヒ、禮書ノ中其箴ノ要ナルモノヲ取リテ、所々ノ壁間ニ誌シテ、日用ノ則リトシ強持スルヿ久シ。省ミルニ揣摩依倣ノ工ニメ、心性ヲ類フ術ニアラザルヿヲ覺フ。以爲ク、（因テ（知））聖人人ニ（チ（江））教ユルノ道、カクノ（如ノ（江））ゴトク外儀ニヨルベカラズ。我用ユル所誤レリト。是ヨリ群儒ノ論ヲ考ルヿ深シ。然レモ下手ノ實地未ダ其（ノ（東））究竟ヲ得ズ。因テ聖教ノ本源ヲ求メテ易經ヲ學ブ。此經ニ能ク通ジタル學者アランヿヲ思フテ、京師ニ到テ是

ヲ求ム。一學生ヲ得テ是ヲ學ブ。聞一知十ノ美ナルヲ見テ、學生大ニ稱メ、我ガ敎ユル所ノ人ニアラズト云。
講成豫州ニ歸ル。

○江州ニ在マス母堂、先生ヲ慕ヒ思ヒフカシ。先生豫州ニ迎エンヿヲ願フトイヘドモ、母堂猶故鄕ヲ去ランヿヲ愁テ此ヲイム。先生ヤムヿヲ得ズシテ、仕ヲ致サンヿヲ請フ。一通ノ書ヲ封シテ事ヲ述ブ。守ノ執事等コレヲ讀デ其純ラ孝ナルヿヲ感ジ、涙ヲ垂ルヽ者アリ。先生鄕ニ歸ル。時ニ寬永癸酉ノ歲先生二十六歲也。樹欲靜兮風不止。來者可追歸去來ノ詩アリ。

㊀年譜に先生鄕に歸るは寬永甲戌二十七歲の時とす。從ふべし。（紫水）

○豫州ノ小子其德ヲ慕ヒ來リテ學ブ者アリ。先生分毫ノ矜誇ナク、朴實頭ニシテ人ニ知ラレンヿヲ求メズ。然ドモ遠近其風ヲ聞ク者來リテ敎ヲ受ク、コレガタメニ舍ヲ苑中ニ儲ケテ、ヤドサシム。庭前ニ一ノ古藤樹アリ。諸生稱シテ藤樹先生ト云。

○先生初ニ疑フ所ノ精一ノ功、イマダ實地ヲ得ズ。諸儒ノ訓解ニヨリテ經傳ノ奥旨ヲタヅヌ。大學ハ立敎第一ノ書ナルヿヲ信ジテ、沈潛反復自ラ解ヲ作ルヿ三度ニヲヨブ。大意皆朱子章句ノ旨ニヨレリ。然ドモ格知誠正ノ精義猶先生ノ心ニ滿タズ。ヲモヘラク近代名儒アリテ、此精蘊ヲ發スルヿアルベシ。ト云テアマネク薪渡ノ書ヲ搜ル。偶、陽明先生ノ全書ヲ得タリ。一度コレヲ閱ミスルニ至テ、先年疑フ所ノ致知ノ知ヲ解シテ良知トス。コヽニ於テ神交リ、心會シテ指歸ヲ得タリ。欣然トシテ開悟ス。是ヨリ默坐澄心シテ本體ヲ見、人情事變ニ處シテ、變通ヲ知ル。其機一ニシテ動靜ノ殊ナルナシ。皆良知ニ諧シテ自若タリ。是ヲ六經語孟ニ考ヘテ脗合セズト云ヿナシ。周之靜・程之定是ヲコヽニ驗ムルニ悖ルヿナシ。其他ノ群儒ノ論モ亦其要トスル所是レニ出デザルヿヲ見得ス。是寬永乙亥ノ歲先生二十八歲也。故ニ丙子ノ春鷄旦ノ詩ニ曰。

格致誠修貫ニ日新ヲ、易難先后不ニ彬々ヲ。料知聖學成功ノ地、氣朔今朝共ニ是レ春。

(一) 先生與池田氏書並年譜皆陽明先生全集に作る。但し本書に在つては、王氏の書を得たるを以て二十八歳のことゝすれども、他は皆三十七歳のことゝす。三十一歳の作原人に先賢周・程・張・周・朱の名を示せるに、王子獨り其の列にあらざる等の事實より、編者は年譜三十七歳の説を正しと思ふ。王子の名翁問答等に散見するものは、龍溪語錄等によつて其の學を知られたるに由るならん。(紫水)

○先生ノ學、日々新タナルニ依テ諸生親炙スル者益々多シ。俗學記誦ノ習ヒヲ憂テ白鹿洞規(一)ヲ以學舍ノ模範トス。自ラ其後ヘニ記シテ云ク。原竊惟。今之人爲學者。惟記誦詞章而已。是以吾道之所寄。不越乎言語文字之間。愚嘗憂之也深。故推本聖人立教宗旨而參以白鹿洞規。條列如右。而揭之楣間。庶幾與一二同志固守力行之也。寛永己卯四月二十一日ト云爾。

(一) 白鹿洞規は藤樹規に作るべし。(紫水)

○先生常ニ學法ヲ論ズルニ云ク。天下ノ事皆主意アリ。コレヲ知ル時ハ事ヲナスニ安シ。必ズ以ワキマヘ知ルベシ。學問ノ初、志ヲ立ルヨリ先ナルハナシ。憤リヲ發スルノ方此學天下第一等。人間第一義。無別事可做。無別路可走。是學問之主意也。

○其學者ニ示ス大意變通ニシテ一ナラズ。學ハ本体ヲ認知ルヲ先務トス。故ニ其與ル所ノ書略ニ云ク、學本體ヲ見ザレバ空鐺ヲ𤇆ルガ如クニシテ若干ノ工程皆徒然タリ。喜怒哀樂未發ノ時、當下具足ノ良知ヲ觀察セヨ。應事接物上ニ於テ此良心ヲ奪フハ氣習情欲ノヲカス所ナルヿヲ自反シ克治スル時ハ、必進修ノ功アルベシ。又云、見在當下ノ心、不動于欲。不滯于物。慈愛恭敬・溫々惺々・坦蕩々者卽心ノ本体也。此性ヲ見得メ愼ミ守リ、視聽言動・行住坐臥・應事接物一切ノ境ニ對シテ失ナハズ、主人公トアガメ從フヲ主忠信ト云。此工程間斷ナキ時ハ、浮氣除キ躁念止ミ、萬事ノ顚動日々ニ能ク辨ヘ、五官其職ヲ盡シ、天君安穩タルベシト云々。

○大學知止ノ一假（段（東・東））止ヲ以テ至善ノ別名トナシ本體ヲ示ストス。故其解ニ曰、凡心ノ常擾亂シテ定ラズ。其擾亂ヲシヅメ（定（內））ザレバ、講習討論ヲ心上ニ安頓スルヿアタハズ。故ニ學者入德ノ始擾亂ヲシヅムルヨリ先ナルハナシ。擾亂ノ惑ヒ寂然不動ノ本体ヲ不ㇾ知ヨリ起ル。コヽヲ以テ知ㇾ止而后有ㇾ定ノ一句ヲ揭テ頂門ニ針ス。又曰、止トイヘバ槁木死灰ノ解ヲナス惑アリ。故ニ能慮ノ一句ヲ擧テ、止ノ本體活潑流行ノ天機アルヿヲ示ス。

○先生大學古本ニモトヅキテ解ヲアラハス。考ハ尤晩年ニ出ヅ。二書頗ル發明スル所多シ。說ヒテ（キ（江））意知ノ兩路ニ至ル、學者工夫ノ縝密至テ親切ナリトス。朱子意ヲ解シテ心之所ㇾ發也トス。陽明モコレニ隨フ。先生惟論語絕四ノ意ヲ證トシテ意ハ心ノ所ㇾ倚也ト云フ。好惡ノ執滯、是非ノ素定、一切ノ將迎、及ビ一毫ノ適莫、皆意ナリトス。知ハ良知ナリ。孩提ノ愛敬ヲ知リ、成人ノ四端及ビ眞是眞非ヲ知ル、天性ノ靈覺也トス。蓋以爲明明德ノ工夫、良知ヲ主トシ（五事ノ不正ヲ格シ（知））。意念ノ己ニ克ツノ外他事ナシ。是則聖門易簡直截ノ宗旨也。然レ𪜈此經アリテヨリコノカタ諸賢未ㇾ論及ビ。先生初テ其歸趣ヲ發ス。大ニ後學ニ功アリ。

㊀　考解共に晩年の作にして其の間先後を定むることは能はず。唯他の例より言へば、考先づ成り解後に成れりとするが穩當とすべきか。委しくは卷之十二解題參照。（紫水）

○意ノ字、經書ニアラハル、所思慮（發明（春・江・內））。底ノ義アリ。然レ𪜈論語ニヲイテハ、意必固我ト云𪜈ハ心之所ㇾ倚ナルヿ明ケシ。正心ノ傳文忿懥・恐懼・好樂・憂患四者有ㇾ所ハ則意念也。如何トナレバ、四者虛中ヨリ發出スル時ハ順應中正也。軀殼上ニ念ヲ起スニヨリテ、適莫アツテ留滯スル所アリ。故ニ誠意ノ外、別ニ誠心（正（東・內））ノ功ナシ。傳文熟讀翫味セバ、意知ノ兩路ノ說、分明ニシテ良工ノ苦心ナルヿヲ知べシ。

○先生、自反愼獨ヲ以テ入德ノ筌蹄トス。學庸ノ解ニ於テ極テ其精微ヲ云フ。凡學問ノ大旨、放心ノ（チ（江））收テ大本ヲ立ルニアリ。自反ノ照鑑ヲ以テ、凡態ノ魍魎ヲ消スルハ放心ヲ求ル妙術也。愼獨ノ靈方ニ依テ、德性ノ

眞ニ復スルハ大本ヲ立ル要樞也。其書略ニ曰ク、㈠反顧乎外。求於人之心光、將全體精神。照察自己腔子裡。而無毫髮之滲漏之謂。自反。蓋顧外求人之心。專管外照。而裏面冥然。乃離火之象也。自反之心。專管內照。而外面闇然。乃坎水之象也。所謂洗心者。以自反之神水。消放心焦火之義乎。是以善用自反。則世間種々苦楚怨尤煩熱倏消。而胸次清涼。似蓮華之濯清漣焉。又曰。獨者。良知之殊稱。千聖之學脉也。萬物之一原。故謂之獨。未見獨。則將慎以見獨爲事。已見獨。則以慎獨爲事。夫然。故貌言視聽思。必於是。接物應事。必於是。貧富貴賤。必於是。禍福利害。必於是。死生壽夭。必於是。毀譽得喪。必於是。造次必於是。顚沛必於是。故曰。無往而非學焉。無入而不自得焉。

㈠ 卷之四書二七頁參照。

○習ノ說、尙書ノ大甲ニ初テ論語ノ末篇ニ見ユ。エ(江) 後儒略說之。先生ニ至テハ胎ヲ下テヨリコノカタ見聞意識ノトドマル所ヲサシテ皆ナラヒトス。先儒ノ說ヲ按ズルニ、大底抵(內)明德ヲクラマスハ氣稟人欲ニ歸ス。然レドモ習ノ好惡ニヨツテ本心ノ感通ヲ塞グ者又スクナカラズ。宜ク体認明辨スベシ。故ニ先生平日コレヲ說與メ琢磨スルヿ詳審也。習ノ歌ヲ作ル。其略ニ曰ク。㈡習有美惡。泥均作累。譬如金砂。貴賤雖異。入眼疼痛。其苦不二。

㈡ 卷之五雜著第十九頁參照。（紫水）

○甚ダ孝經ヲ尊信メ、孔子自ラ著ハス所ノ書ナリトス。經ノ要領愛敬ノ二字ニアルヿヲ見得シ了テ、天性ノ別名トシ良知ノ本眞トス。心(內) 陽明良知ヲ說クニ多クハ善惡ノ機、眞妄ノ辨ヲ知得スルヲ以秉彝ノ則リトス。先生ハ愛敬ヲ兼言テ。以テ(江・大・春) 本然感通ノ端的ヲ示ス。理同メ指ス所ヤ、異リ。按ズルニ、孔門ノ學仁ヲ說テ物我ノ私ヲ去リ一體ノ至公ニ復ラシム。愛敬ハ其實地也。

○凡ソ先生學ヲ講ズルノ大要如ㇾ此。然レ𪜈、常ニ試ムル所ヲ以テ、學者ニ示ス。主意皆當下良知ヨリ發出メ日新ノ益トスル所ナレバ、其旨一樣ナラズメ學者進修ノ功モ亦新タナリ。或ハ書ヲ講明メ義理ノ窮盡ナキヿヲ覺(內)悟シ、或ハ諸生ヲ勸メテ切琢ノ功ヲ勵マシ、輔仁ノ益ヲ求メシム。先生ノ言易簡ニメ從ヒ易キガ如シトイヘ𪜈、又惕勵ノ功ヲ論ズル時ハ甚ダ嚴密也。岡村氏ヲ送ル辭ニ曰ク。㈠初學ノ時困勉ノ功ヲ不ㇾ用ヒメ堂ニ上リ室ニ入ヿハ、顏子モ不ㇾ及所也。況ヤ、其下ナル者ヲヤ。最反求スベキ所也。大學誠意ノ傳瑟僩ヲ以テ切琢ノ眼目トナシ、中庸ニ困勉百倍ノ功ヲ以テ換骨ノ靈方ヲ示シ玉フ。其意能ク可ㇾ看得ㇾ也。是ヲ農業ニタトフルニ困勉百倍ノ功ハ耕耘ノ艱難勞苦ナリ。時習ノ說ビハ得處ノ秋實也。

㈠　卷之十八倭書一正編第七十八・第七十九頁參照。（紫水）

○先生、博ク先儒ノ說ヲ講求メ、精微ヲ極メズト云ヿナシ。然レドモ、其異同ヲ心ニヲカズ。故ニ身ヲ終ルマデ(江)一言先覺ノ得失ニ不ㇾ及。或ハ世儒ノ語トイヘ𪜈是ヲ讀デ佳ナル者ヲヤ。バ(江・史・大)反復シ、必ズ諸生ヲメ記セシム。要スルニ、修德ノ筌蹄ヲ求メテ其他ヲ不ㇾ問者ノ如シ。

○先生、顏色溫和ニメ言語正シ。神氣安定ニメ、平居ノ間從容タリ。其人ト交ル禮容ヲ見ルニ、謙遜ニメ陋劣ナラズ。常ニ雜語ナシトイヘ𪜈溫厚ナルガ故ニ、坐ニアル者自ラ悅豫タリ。正直ノ操、勇氣ノ傑、得テヲカスベカラザル者アリ。母堂ニ事ヘテ孝ヲキワム。氣ヲ下ダシ色ヲコロコバシメテ其命ニ違ハズ。故ニ母堂コレニ和順スルヿ幼稚ノ時ノ如クニメ、相憚ル底ノ意思ナシ。母堂佛ヲ好ム。中元ノ日盂蘭盆會ヲナセバ先生、是ヲタスクルコト純一ニメ甚ダ慇懃ナリ。其家ノ治ルヤ法アリテ正シ。

賓客アル時ハ、其懽ビヲツクシ、祭祀ニハ、其敬ヲ致ス。

家窮メテ貧シトイヘ𪜈、コレニ居テ裕如タリ。或ハ餘粟アレバ、村民ニ振貸ス。都ベテ親戚故舊愛ヲツクサ

ズト云ヿナシ。

○厚ク福善禍淫ノ妙理ヲ信ズ。故ニ起居常ニ敬畏腔子ニ滿テ閑氣ナキ者ノ如シ。持敬ヲ解メ畏ㇾ天命ヲ尊ニ德性ヲ一ノ名ト云フ。嘗テ學者ニ示メ曰ク。昔人多ク道ニ志アリテ其德ヲナサザルハ、只放心ノ祟リ〔祟リテ（内）〕ヲワキマヘザルユヘナリ。タトヘバ、風止ンデ波ヲ見、鐘ヲ撞テ響猶ノコレルガ如シ。此病魔昏昧煩熱ノ祟〔祟（史・内・江）〕リヲナスノミニアラズ、放肆戯辱ノ過チヲナスモ、其危兆實ニコヽニ始ルト云フ。先生偶ゝ半夜目覺ル時ニ當テ、聖謨賢範其心ニ工夫スル時ハ必ズ起テ是ヲ思フ。其工夫終リテ後臥。經書ノ文字他ノ字紙ニ雜ルヿヲ忌ム。其餘ノ文字〔頭（東）〕トイヘドモ輕忽スルヿナシ。身自ラ陰隲ヲナス。或ハ諸生及鄕民ノ富メル者ト共ニ計テ、嚴寒ノ比歩渉ヲアハレミテ溝渠ニ橋ヲ懸ル等ノヿアリ。都テ善惡ノ應報ヲ信ズルヿ、庸人ヨリ是レヲ見レバ老嫗ノ愚ナルガ如シ。因テ曰ク。吾レ學ヲナスノ功、愼獨ヨリ始ムト。是レ其自得熟スル所ヲ見ツベシ。

㊀ 卷之二十一雜著第一六頁參照。（紫水）

○本朝ハ、神國ナルヿヲ仰テ、先生深ク神明ヲ尊崇メ敬欽ヲナスヿ至レリ。又座上ニ道統傳一軸ヲ掛ケ、每日昧爽ニ起テ盛服上香メ前聖群賢ヲ祇拜シ了テ孝經ヲ誦ス。

○先生人ヲ和スルヿスクナカラズ。大溝ノ郡主分部伊賀守ノ仕士別府氏㊀ハ小川ノ邑ノ令タリ。一日、小川ニ來テ事ヲナス。時ニ一民法ヲ犯ス者アリテ縲絏ニカヽル。邑民等先生ニ其罪ヲ解ンヿヲ請フ。先生其夜別府氏ガ寓舍ニ往テ語テ夜半ニ至ル。言イマダ罪人ノ事ニ不ㇾ及シテ歸ル。邑民來リテ是ヲアヤシム。先生ノ曰ク邑令顏色トケタリ。汝等恐ルヽヿナカルベシ。アシタニ至リテ別府氏自ラ解ケテ曰、按ズルニ前夜中江氏來レルハ民ノ罪ヲ謝センガタメ也。然レモ一言其事ニ不ㇾ及、コレヲ察スルニ我レ小邑ノ令タルヲツヽシミ走卒其事ニ不ㇾ及ナラン。我其祇敬ヲ謝スルニ不ㇾ堪ト云テ、則其罪ヲ赦ルス。

㈠ 卷之四十二事狀第四頁參照。（紫水）

○慶安元年戊子ノ秋先生病ス。其革カナルニ至テ命メ婦人小子ヲ屛ク、只諸生ノミ傍ニアリ。先生醫ヲメ脈ヲ診ムルヿアラシメテ曰ク。脈ソレ絶ヘナント、則タスケ起キテ端坐シ、几ニ隱テ歎メ曰、此道ノ任誰カアル、嗚呼無哉。ト云テ卒ル。時ニ年四十一、秋八月二十五日也。訃音ヲ聞ク處ノ同志悉ク集リテ、文公家禮ニ因テ喪事ヲ修ム。備前大守少將源光政イマダ先生ニ面諭セズトイヘ𪜈、其學ヲ信ズルニ因テ臣熊澤氏ヲ遣メ賻ヲ贈ル。門人棺槨ヲ營ミテ某ノ日小川ノ邑ノ北ノ地ニ葬ムル。邑村隣里ノ人群聚メ葬ヲ送ル。悲哀涕泣メ其父母ニ喪スルガ如シ。

㈠ 卷之四十四藤樹先生門弟子傳參照。（紫水）

○先生木下氏ノ女ヲ娶テ長子ヲ産ム。後妻某氏ノ女ヲ娶テ二子ヲ産ム。長ハ備前ノ大守ニ客タリ。中子季子ハ是ニ事フ。長仲共ニ早逝。季子ハ大守逝メ後仕ヲ致メ郷ニ還リ、先生ノ學ヲ講ズ。

㈡ 本書並事狀に載する所に依るときは、先生の室は木下長嘯の孫女なるに似たり。然れども今考ふべからず。祠堂神主並系譜年譜には高橋氏と明記せり。

㈢ 長仲ともに高橋氏の出なり。土橋氏本を正さす。後妻は別所氏なり。（紫水）

○先生、斯文ノ興起ヲ以テ自ラノ任トス。論ズル所時ヲ憂ヒ世ヲ救フノ意多シ。嘗テ門人ニ戲言メ曰ク、我學ヲ講ズル所國土ノタメニ永久萬壽ヲ祈ルガゴトシト云々。又中川氏ハ門人ノ中ノ巨擘トス。然ルニ、莊子ノ大篇飛揚ノ論ヲ悅ンデ狂見ニ走ルヿ年アリ。先生、中西氏ニ對メ曰、中川氏狂見我甚ダ是ヲ憂フ。タトヘバ長子ヲ失フ𪜈其憂如此ナラジト。中西氏是ヲ告グ。中川氏驚キ懼レテ先生ニマミヘテ怨言メ曰ク、我幼年ヨリ、先生ノ學ヲ信ジテ郷ヲ去テ身ヲ委ス。是レ名ニ非ズ、利ニ非ズ、只正修ヲ求ルノ外他ナシ。先生異見ヲ憂ルヿ此ニ至ラバ、何ゾスミヤカニ正サズメ、我ヲメ此過ニ至ラシムルヤ。先生顏色ヲ正メ曰、然リ、君子

ハ人ノ非ヲ云フニ不ㇾ忍、我不肖ナリトイヘドモ、苟モ君子ヲ學ブガ故ニソレ妄ニイワズ。今又是ヲ云フ、是止ムヿヲ得ザル良心ナリ。吾子是ヲ思ヘ。坐ニアル諸子皆悚然タリ。

(四) 「我幼年ヨリ以下先生異見チ」に至る四十七字底本之チ脫す。今、春日氏本江阪氏本等によりて之を補ふ。
岡山先生示教錄卷二、六丁參照。(紫水)

按ズルニ、先生、道ヲ任ズルヿ深フシテ、來學ヲシテ斯文ノ興起ヲ欲スルヿ此一條ヲ以テ「可ㇾ見」。易簀「ノ日」、誰有嗚呼無哉之歎、默識スベシ。皆以博愛厚重ノ實心ヨリ流出シテヤムヿナシ。天斯文ノ興ランヿヲ欲セバ、何ゾ先生ヲシテ永年ナラシメザル。嗚呼惜哉。

(一) 此一條を以て下底本可見二字を脫す。江阪氏本春日氏本によつて補ふ。
易簀の下底本の日二字無し。今春日氏本によつて之を補ふ。(紫水)

○先生、祇法詩文及書字倭歌醫術軍法武藝ノ類皆意ヲ用ヒズトイヘドモ、自ラ其能クスルヿヲ得タリ。

著ス所ノ書。

孝經啓蒙一卷　漢字ヲ以テ書ス。

先生、淵氏ニ告ゲテ曰ク、此經ノ精義啓蒙ニ於テ未ㇾ盡サトイヘドモ、學者句讀ニヨリテ大意ヲ見ルニ便リスト云々。

大學解一卷　倭字ヲ以テ書ス。

古本ヲ宗トス。其辨考ニ委シ。經一章ヨリ誠意正心ノ二傳ニ至テヤム。但シ誠意ノ傳其末ヲ缺ク。

大學考一卷　倭字ヲ以テ書ス。

晩年ノ作ニ出ヅ。故ニ親民ノ說解ト稍〻異ナリ。

(三) 親民ノ說解ト異ナリ云々卷之十二大學考解題並凡例參照。(紫水)

中庸解一卷　倭字ヲ以テ書ス。

僅ニ首章ニノヤム。(一)其後、門人加世氏先生ノ講義ヲ聞テ、私ニ記ルス所二十餘章、先生ノ解ニ附會スル本アリ（ノ(江・内)）。詞甚ダ鄙俚也。後生誤テ先生ノ解ニ混ズベカラズ。

(一) 中庸首章解以外、第二章以下第二十七章に至る先生の作に係る中庸解あり。中庸續解と名づけ本全集卷之十四に載す。(紫水)

論語解一卷　倭字ヲ以テ書ス。

郷（テ）（所謂(江・内)）九章・學而時習章・絶四章・君子之於天下也章・逸民章・回也其庶乎章・君子坦蕩々章・參乎吾道章・君子不重章・顏淵問仁章也。

郷黨篇註解一卷　漢字ヲ以テ書ス。

(二)全篇コレヲ注ス。鼇頭アリ。其ニ先生ノ作也。先生四書ノ註解ヲ作ランヿヲ思フ。其年幾クナラズシテ沒ス。(三)學庸ノ解スラ終篇ナラズ。知ル者是ヲ惜シム。

(二) 本書の著者も亦郷黨啓蒙の名の存せしを知らざりしものの如し。委しくは卷之八解題參照。

(三) 是亦古本大學全解の作ありしを知らざりしものなり。卷之九參照。(紫水)

翁問答上下。卷（二(東)）以倭字書(東)

先生、自ラ改定センヿヲ欲ス。其旨趣中川氏ノ跋ニ見ユ。僅ニ改定ノ辭、問テ曰ク、答テ曰クトアリ。其体充ト詑（託(内)）シ、師ノ曰クト書スルヿ心ニカナハザルヲ以テ改ムルト云リ。是先生自ラ淵氏ニ告ル所ナリ。

春風一卷

鑑草八卷

文錄一卷

書翰一卷

捷徑醫筌六卷

日用要方(一)

(一) 土橋氏本には日用要方の次に左の三書を載す。(紫水)

(二)神方奇術一卷

(三)小醫南針

上(四)棟中棟

此二部ハ友人醫ヲ學ブ者アリ。コレガタメニ編輯ス。

(二)(三)小醫南針と上棟中棟との二書は未だ發見するに至らず。唯南針の一部中卷は卷之三十五捷徑醫筌の中に見ゆ。(紫水)

詠草一卷(四)

世ニ寫シ傳フル所、諸生ノ倭歌多ク以テ雜ル。因テ淵氏ニ質〆、先生詠ズル所ヲ撰ンデ一卷トス。

(四) 書翰集諸本中に歌集あり。會津學徒相傳藤樹先生歌集一卷あれども詠草と稱するものなし。(紫水)

本朝ノ往昔經籍ヲ傳テ　上是ヲ重ンズ。故ニ四家ノ儒業ヲ置ク。文人才子不ㇾ乏近代又布衣遊士博覽ノ輩多シトイヘドモ、共ニ章句文詞ノ習ニ局リテ、心術躬行ヲ事トスル者、古今其迹絶テ無シ。昔宋周元公不傳ノ道統ヲ繼ヲ以テ、是ヲ稱〆再渾淪ヲ闢ク人ナリト云。先生又絶學ノ士ニ出デ、聖人簡易廣大ノ宗ヲ遺經ニ得テ萬世道學ノ教ヲ開ク、言ツベシ、卓立ノ君子也ト。來哲其書ヲ讀ミ、其學ノ緒ヲ證セバ、其レ必取ルヿアラン。

勢陽洞津城下後學

森本正貴敬寫(江・大)

⊖文助(江・大)ヨリ書寫シ來ル(土)

勢州洞津石河定源謹書寫之

于時享保二丁酉年中春下旬(江・大)

享保十五庚戌夏四月廿五日

行　狀　終　(内)

⊖ 按ずるに石河文助諱成倫其養子文左衛門諱定源なり。江阪氏本に文助定源となすは誤なり。(紫水)

〔本册末尾補遺並補正の項目下に、全書志村氏本載する所の「藤樹先生逸事」十八條を追記す。(藤陰)〕

藤樹先師學術旨趣大略

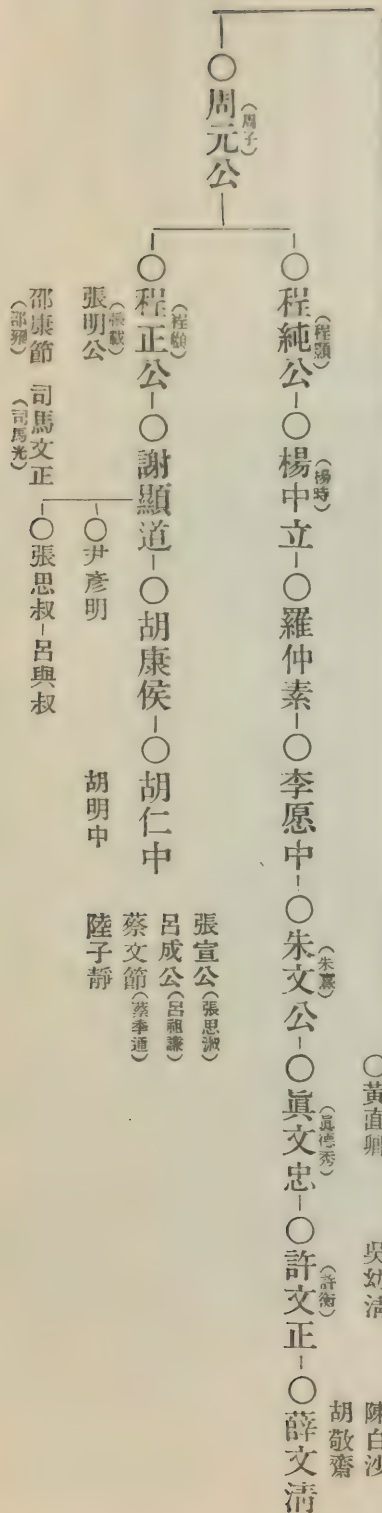
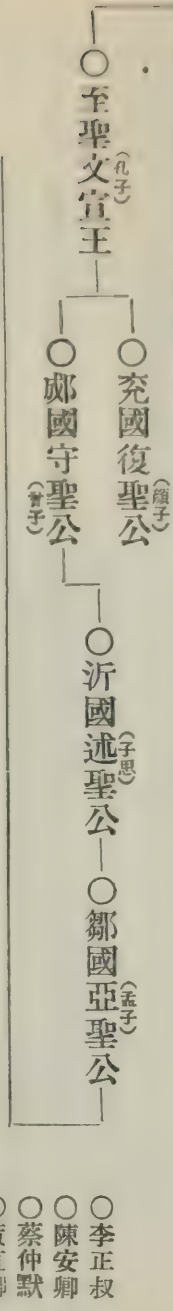
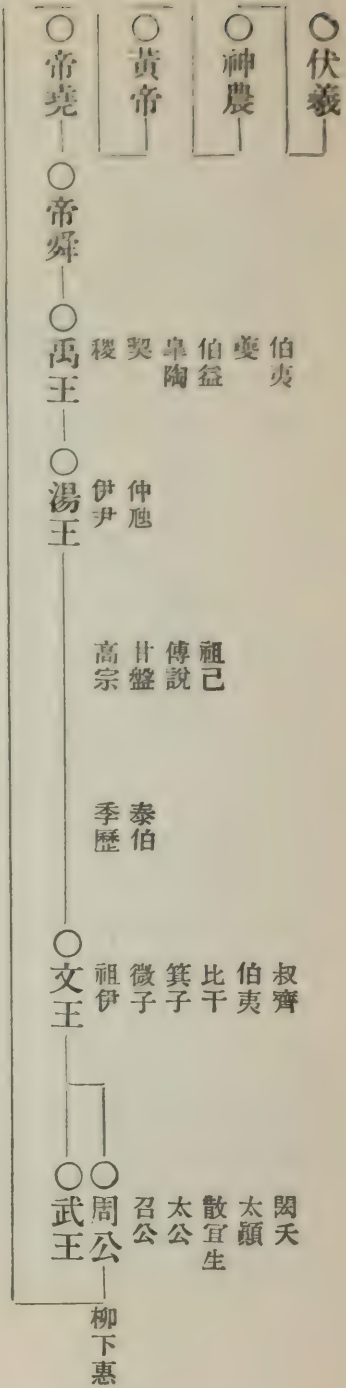
藤樹先師の門に入て聖學を學ばんと欲るものハ、最初に先學問ハ天下第一等の事、人間第一の義なれバ是を外にしてハ天下に可レ爲の事なく、是によらずしてハ、萬世も可レ行の道なき事を、能々識得して必聖人とならんといふ志を堅く立定め、先師以來岡山先生の學脉を守り、本体良知ハ、卽天の御心なる事を深く尊信して、禮をとつて師に隨ひ、文を以て友に交り、會座を重じて、講習討論切磋琢磨し、孝悌を勤、補輔（史）仁の益を勤め相助け、相長生（史）じて、日新の功を勵す。會座の切磋ハ、人々君父につかふまつるより、日用の所業、起居動靜、應事こと（史）接物、茶裏飯裏までも、常に念慮の誠ならざると事上の正しからざる事を自反して、少も心よからざるものあれば、その先輩について是を正し、同志に討論す。或はたま〳〵こゝろよきを得たる事△（史）も、亦意念と良知の兩境を先輩と同志に正しを請ふ。互に其開示垂敎ハをのづから先師の家法により（史）る。紙筆にのべがたし。

先師ハ朝ハ神國なる事を仰ぎ、神明を尊宗する事尤切實也。專孝經大學中庸を以て、自ら修め人を敎り。へ（史）孝經ハ啓蒙を作り、前賢未發の旨を開示し、大中は解を述て、講學の助とす。故に每日昧爽に盛服上香して、前聖群賢を拜して孝經を誦す、事ハ行狀に見て（史）へたり。大學の說ハ考に備り。はれ（史）其致良知の旨ハ、王子に本づきて、是に加ふるに當下の二字を以し。端的の工夫をしめす。世人字々句々王子にのみかたむけりとおもふは、先師の意にあらざること、大學考において是を見るべし。先師本邦數千載の後に生れて、前聖不傳の妙を、始て此土に興起せり。萬世道學の師たる事豈異論あらんや。その敎言議論ハ、書翰の書及び翁問答にくわしければ、さらに述るに及ばず。されど、言外の意味相傳の一路ハ、師友の會座神會默契

の間にあらざれば、要訣心悟の妙所、書言の能つくすところにあらず。岡山先生曰、先師の學は潜龍也。時のいたらざるを以て、身を江西にひそめて、此道を後世にのこさん事をのみ心さし給へりとなり。先師の講堂江州小川に在て、毎歳八月の諱日其まつり有、其子孫ハ遠く對州に有て、講堂ハ主人もなけれども、方五六里の間其德をしたふものすくなからずして、近郷の民までもこれをあふぎて菜果をすゝめ（もう(史)）、作物の初を持來りて備ゑ（ふ(史)）る者有。京師よしや町にも、岡山先生講堂を建、新に先師の祀堂（祠(史)）をまふけ、祭祀（禮(史)）たへず。其外所々に（の(史)）、門葉祭祀怠らず。岡山先生ハ、むかし業を先師の門にうけ、學を京師のかたはらに講ず。利祿を輕じて、道の重きを任ず。德孤ならず、是によりて遠く風化をしたふものます〱多し。岡山たかりせば、誰か此道をつたへん。爰に於て岡山のいさほし大なりとす。是豈人意のする所ならんや。先師の門人所々に散在して、その趣或は各〻異なる所有といへども、人倫に本づき良知の眞にしたがふの教をつたへて、歿後七十餘年まで綿々として不レ絶。此學によりて、孝をはげみ實を勤る者、所々に少からず。是先師の精神、天地をつらぬき、人心の同じく然る所を得たまへる德化にあらずや。その後世に行はれん事をねがひ給へる誠實、豈しるしなかるべけんや。其德行學意ハ、行狀に見得侍れば、更にいふに及はず、見る人心をひそめて能是を味はゞ、みづから（自分(史)）是をしる事あらん。

右之一書、享保六年辛丑江戸中郷二見直養翁記して其筋へ出され、
台覽にも入し御内沙汰也。

道統之傳

○伏羲
○神農
○黃帝
○帝堯
○帝舜
○禹王
○湯王
○文王
○武王
○周公
柳下惠
伯夷
夔
伯益
皐陶
契
稷
仲虺
伊尹
祖己
傅說
甘盤
高宗
泰伯
季歷
叔齊
伯夷
比干
箕子
微子
祖伊
閎夭
太顚
散宜生
太公
召公
○至聖文宣王(孔子)
○兗國復聖公(顏子)
○郕國守聖公(曾子)
○沂國述聖公(子思)
○鄒國亞聖公(孟子)
○周元公(周子)
○程純公(程顥)
○楊中立(楊時)
○羅仲素
○李愿中
○朱文公(朱熹)
○眞文忠(眞德秀)
○許文正(許衡)
○薛文淸
○李正叔
○陳安卿
○蔡仲默
○黃直卿
劉夢吉
吳幼淸
王陽明
陳白沙
胡敬齋
張宣公(張思淑)
呂成公(呂祖謙)
蔡文節(蔡季通)
○程正公(程頤)
○謝顯道
○胡康侯
○胡仁中
張明公(張載)
○尹彥明
胡明中
陸子靜
邵康節(邵雍)
司馬文正(司馬光)
○張思叔
呂與叔

道無隆汙。人有古今。或同時而出。或異世而生。或五百載而興。或千載而作。或生於東夷。或生于西夷。世之相後也如此。地之相遠也亦如此。有見而知焉。有聞而知焉。豈惟耳提面命而已哉。非若異端必貴直受之謂也。學者可致思焉。此有正派一條。是吾道之傳也。而橫枝傍出者。不能不採焉。見者擇之。嗚呼。聖賢獨何心哉。豪傑之士。雖無文王猶興。庶幾有志者。有能感發興起于此也。豈不無小補于世教云。(眞蹟)

此の圖及び文は林羅山の文集中に見ゆるものにして先生が此を謹書して禮拜せられたるものなるを知る。(　　)の中の文字は正保四年丁亥板行「道統小傳」により編者之を附す。又司馬文正は邵康節の列に、呂與叔は張思叔の列にあるべく、且つ呂與叔と並びて游定夫を補ふべし。道統傳全體については大正十五年發行內藤湖南博士還曆祝賀支那學論叢中の本會顧問文學博士高瀨武次郎先生の「道統傳」を參照すべし。「道統之傳」眞蹟は別揭挿繪北川氏藏幅に見ゆ。(紫水)

藤樹先生行狀(附)參照

(近江　北川久兵衛氏藏幅)

(陳茂卿)夙興夜寐箴圖　筆者未詳

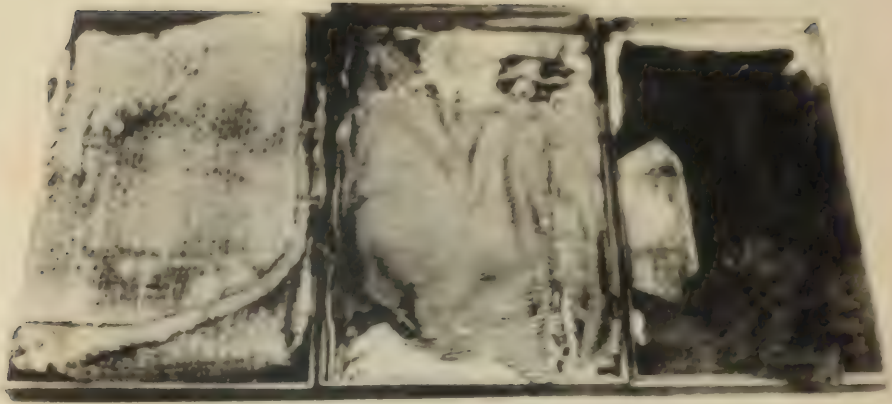
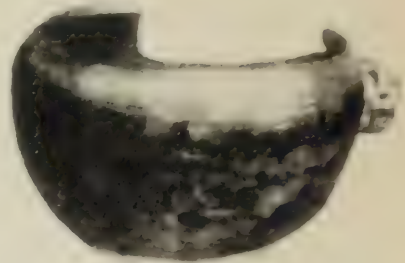
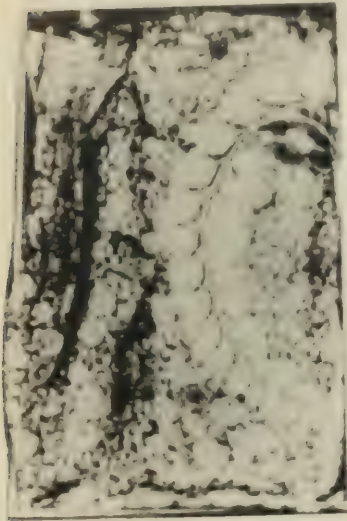
此圖は藤樹先生の門人岩佐太郎右衛門の嫡流の字に殘れるものにして或は先生が門人に教示する材料とせられたるものならんか

(近江　岩佐定一氏藏)

藤樹先生遺品

遺服（補傳第四十四項參照）

酒壺と暖簾

補傳第三十項並第四十四項參照

藤樹書院と先生遺愛の藤

藤樹先生事狀　解題並凡例

〔解題〕本書の著者は明かならず。又本書は世に傳來するもの極めて少く、編者の知れる範圍に於ては、僅かに寫本三本あるのみ。其の一は中村氏本、其の二は會津傳來本、其の三は土橋氏本なり。中村氏本は滋賀縣高島郡大溝町中村德通氏の藏書にして、卷尾に「享保十三年戊申五月廿二日」とあり、表紙に「丙寅秋七月御行狀共二冊寫之季貫。」と識せり。丙寅は延享三年にして先生の歿後實に九十九年なり。此の筆寫の年月より推せば前記の享保十三年云々の文字は或は本書述作の年月なるやも測り難し。季貫は德通氏の祖先にして、常省先生の門下なり。（門弟子及研究者傳中村仲直條參看）會津本は、會津學統中に傳來せるものにして、その繼承者末裔東京故齋藤一馬氏の（會津出身）藏有にして、雜誌陽明學第百拾八號（大正七年十一月發行）に揭げられたり。土橋氏本は大阪市住吉區平野鄉町含翠堂土橋保高氏の藏有に係る。

一、本書は年譜行狀と相待つて史實闡明上得るところ少からず。然りといへども、亦議すべきものなきにあらず。卽ち先生の大洲辭任を二十六となし、先生の室を長嘯の孫女とせるが如き是れなり。前者につきては歸鄉を豫告したる數通の眞蹟書簡が閏七月十五日と記入せられ、而して此は先生二十七歲の時なれば、年譜の記する所の如く二十七歲とするを正しとす。後者については行狀には木下氏の女に作り、本書も亦長嘯の孫女となす。史を按ずるに勝俊卽ち木下長嘯子には子なし。而して先生の前室高橋氏の神位は今尙儼然として藤樹書院祠堂內にあり。更に先生の書簡中に木下氏に與ふる一文あり。若し木下姓が前後一致するものとし、且つ高橋氏と木下氏とを合一に考へんとす

れば木下氏は高橋氏の養女となりて先生の許に嫁せられたりと見ざるを得ず。姑らく臆説を記して知者を竢つ。

〔凡　例〕　一、本書は中村氏本を底本とし他の二者につき嚴密に對校したり。會津本は今その原本を得るに道なきを以て止むを得ず、前記解題に於て述べたる雜誌陽明學に依れり。卷末二種の跋文もまた同じ。尙東京第一高等學校教授安井小太郎氏は心學錄と稱するものを藏せり。委員柴田氏の斡旋により之を一讀したるに本書の文を插入せること少からざれば、これまた校合したり。

一、脚註（二行割書）及び文末の註記はすべて編者の插入したるものなり。

一、對校の結果は左の略符を附して本文の右側に之を傍記したり。

會　津　本　（會）
土　橋　氏　本　（土）
安　井　氏　本　（安）

一、底本には罕に訓點の附せらるゝものあれども、其の大部分は白文なり。會津本亦前記陽明學に見えたるものは句讀點あるのみ。今句讀點反點及び送假名を施す。又會津本の誤あるものは一々之を示さず。

一、底本標目を設けず。今新に内容目次を付し一覽表として年譜の初に掲げたり。參看せられたし。

昭和二年丁卯七月十日　　小川喜代藏謹識

藤樹先生事狀

先生姓藤原。氏中江。諱原。字惟命。後陽成帝慶長十三年戊申某月某日。生于江州高嶋郡大溝(村(會))邑小川。幼而喪父。養(育(會))于祖父。祖父㊀大溝城主加藤羽㊁大守(當作遠江守。)士臣也。及羽大守(當作左近太夫貞泰。)(出(會))封豫州大津㊂(洲(會))城。祖父携先生移于豫州。已長爲祖父後。仕于羽太守。(出(會))㊁

㊀ 大溝、底本に加藤侯居于大溝不能詳也の十一字を傍記す。　㊁ 大守太守は底本のまゝとす。
㊂ 大津、底本洲の字を傍記す。蓋し大洲もと大津に作る。（紫水）

○先生幼而穎悟謹篤。与群兒嬉戲。聞邦君或過其門。則雖在內庭室中。必跪拜致其敬。

○十一歲始讀大學。至自天子以至庶人。壹是皆以修身爲本。嘆曰。聖人可學。於戲。吾何幸從事于斯。感淚屢濕袖。從此志日篤。學日新。

○十六歲通誦十三經。

○弱冠厭俗學支離。至洛學易。始讀王子之書。契其心。(恐訛傳。)

○二十六(當作二十七。)爲奉母堂。辭豫州之俸。歸江陽。營學舍。聚諸生。庭前有一古藤樹。諸生因稱藤樹先生。

○先生之學。以易簡爲要。平日說話。皆簡易至廣大。所著之書。字々句々。皆易簡明白。

○先生之敎諸生。先要見其本体。故其指示語云。現在當下之心。不動于欲。不滯于物。慈愛恭(敬(會))。溫々(惺々(會))坦蕩蕩者。則心之本体也。是乃學問主意頭腦也。其用工實地。在自反愼獨。

○先生云。此學天下第一等。人間第一義。更無別事可做。無別路可走。

○先生云。倭漢學者志于聖人。其德不成者。由放心之祟而已。

○先生平生深信福善禍淫之妙理。畏神明。恰如尼媼之愚。

○先生云。事事皆有主意。不知主意。則支離無要。日用之間。其所爲。皆無不有主意。

○先生云。學在去習心。　又云。學在解心。廢（癈(會)）又云。活法俗語所謂取轉㊀是也。於日用之事。不知取轉。則如舟無楫。世間學者雖多。而知之者寡矣。

㊀ 取轉とは我が心を引きまはして、道にそむかぬやうにするなり。蓋し岡山學派獨特の用語なり。「席上一珍」に詳かなり。（紫水）

○每日清晨焚香天拜。持誦孝經及感應篇。及晚年默誦不發聲。以謂發聲則（本ノマヽ、私云粗ノ字可有乎。）（會）

○每晨到寅。必寤而興。朝間務一日家事。

○中川權左衛門。因見莊子書。有狂見之弊。經年。　先生對中西孫右衛門。嘆之曰。吾雖失長子。不如此憂。中西氏以告。中川氏（中川氏(會)）乃怨。　先生云。何不速督之。而令（命致）至于此歟。　先生正顏色。言之曰。君子不忍言人非。吾苟學君子。故不言。然今又言之。亦不得已之心也。吾子其思之。是一條可見。先生。（任道之深(安)）欲得英材。而教育之。以傳此學于天下后世之實心矣。　先生云。大抵夜夢者。旦晝之影也。常人晝間。或事務所紛。玩嗜所慰。而雖姑忘苦痛。及寢而休（体(士)本體(安)）歇。其實見。而爲惡夢。學者於日用之間。纔離本體。則不知不識。汨沒憂苦戚々之中者。於是可驗矣。今予夢中無異平日。

先生嘗往大溝。歸小川曰。途中知得以魄載魂心位。歸後示諸生。

先生門下學者。親炙之間。不生名根虛過之念。是化其德之厚也。（會）

先生出時。諸生薦履。則　先生必執之。拜載（戴(會・安)）而出。

先生云。用意与意念難辨。凡事不可不用其意。而計畫（畫(會)）不可全作意念而放下也。（會）

先生云。世間多般逸樂之事。爲之甘心。吾不知心奈何。就中博奕妓女之遊嗜者。果何心哉。

○先生見農夫治業而言。吾讀書務學与彼之作業。意思一般。

○大溝城主分部伊賀守。在江戸。聞先生之名。歸城引見先生。△先生辭去。△(會)後城主責其家宰曰。中江氏雖居吾土地。世所推重也。故我請之。欲爲之盡禮意。然(會)子等。惟令予爲言辭而默。終日甚無狀也。或人聞城主責家宰。而不審事之顛末。卒然來而告先生云云。先生不變神色。談論自若。或人出。　先生乃語諸生曰。城主之怒。何關於我。城主縱怒我(會)。於礼無所恥。何以動吾心乎。何以動吾心乎。(會重出)

先生世間有所謂戰陳防箭法。　先生論之曰。我亦有防箭法。直進而無避而已。中在(會)吾身。命分之箭。千万中只有一支枝(安)。若有避之心。則非命之箭。亦中者也。何則射時。箭之中的者罕。而不中者多。避其罕中之地。而向其多至之地。所以中不可中之箭也。

先生母堂。信佛學。　先生一日爲之講佛書。出而言諸生曰(會)。某頃日見佛書。其奧旨。亦悉包于吾儒教中。彼教若別有好意思。學之亦可也。彼亦不過明此心。則何舍吾儒全体之教。而別求之哉。學者所宜知也。

先生云。唐船之至甚矣(安)。無益于國。種々服用器物。雖無唐土美麗之物。我國之所出而足矣。且每歳所遺(會)五(安)之價金許多。本朝之金銀。底本作全銀。今改。年々△(會)減一年。是以不穿坑。則財用不給。穿坑則地氣潤涸。而不穀不登之本也。

先生云。世無良醫。一大欠事也。百工雖不良。於事無缺。醫不良。則謬民命。是不可無者(會)也。尚有甚於此君子而已。若世無君子。則民彝不修。一日無之可乎。然君子不求聲聞。故雖或有之。人難得而

知之。今料嚴窟江濱、或有君子潜其身、愼不得聞其人也。淵氏始就中川見于氏(會)先生中川氏云。公見貴(會)先生如何。淵氏嘆稱云。其德不能窺知。才之見于外者。可謂美也。中川氏欣然曰。誠如公乃以告先生。先生心謂才之見于外。吾非所喜。既閲月而(會)言中川氏曰。吾才今尚見于外否。其自治之(會)誠切如此。

一日淵子氏(會)自横井濱㊀乘舟到小川。以日晩天寒、船郎甚勞、増其價與之。先生聞之曰。好仁不好學。則其蔽也愚也(會)。人人所務。皆當爲之職分。而其所得亦有定分。是自然之天祿也。固不可以私減之。亦不可以私増之。公何不致到(會)思于此乎。其於人情事變用其心。總如此。

㊀横江濱の誤なり。小川村の近邑にして今本庄村大字なり。小川村を距ること約一里。(紫水)

或人(會)問云。自江東至江西、乘舟渡湖。則雖捷而危。陸行則雖遠而不危。君子路雖遠。必陸行。不由水路之危。先生云。君子毎事戰兢。不爲危險之事。豈惟(會)水路以爲危乎。知命則縱乘一葦。渡唐土亦不爲可恨。恨底本作俱。今改。

邑令大嶋㊁三良左衞門。一日到小川。政一民犯法者處罪。邑村(會)民等來請先生爲解其罪。先生領之。其夜往(會)行大嶋寓館。語至夜半。不一言及罪人事而歸。既而大嶋自解云。中江氏爲言聽民罪而來。然不言之而歸者。謹篤之至也。次早乃命聽其罪。

㊁大島は別府の誤なり。藤樹先生行狀第七頁を參看せられたし。(紫水)

先生色溫言正。神定氣和。其心極洒落。而人難知爲洒落。無愛敬、而人難知爲其(會)愛敬。卑遜而不陋劣。樸實而不固滯。其規模廣大。其條理精密。平生作用。有活法閑(會)無定体。應酬之變。殆有難形容者矣。其氣宇之定。雖當倉卒之間。無有遽色窘步。其威儀之間。升降進退。自無不中規矩。其勇氣之

傑。雖方夫有不可凌者。其事母堂也。東西南北。惟命之從。故母堂待之。如童穉時。而無些相憚底意思。其治家也。正而有法。閨門之內。夷愉肅穆。如無人聲。臧獲輩。相和不發〔矣(會)乎(土)〕。賓客必盡其懽。祭祀必盡其敬。親戚故舊。必盡其愛。邑中野人來到。與之談農事。油々如其家。甚貧。麁食敝衣。人所不堪而處之裕如也。若或有餘粟。必賑貧邑民。民謹其返納。如神物。其救無告者。而行陰隲者。不可勝計。嚴寒時。必与諸生及鄉民富者相謀。懸橋于邑中溝渠。令無揭涉矣。其救人也。隨其財〔材(會)〕。而成就之。平日答問之間。絕不說文字。只以平和言導之。而亦不厭學者。務博觀。常甚尊信孝經。嘗為諸生。手書為小軸。令各佩膺之。

先生疾病。屏婦人小子。惟諸生侍側。令醫診脉而曰。脉其絕。乃起而端坐。隱几。歎曰。誰有之哉。誰有之哉。嗚呼無言。畢屬纊。年四十一。　後光明帝慶安元年戊子八月廿五日也。夫　先生平日任道之重。雖臨終之時。尚以道之不傳為憂如此。嗚呼天何不假之以年。而使不幸短命也〔哉(會)〕。闔邑之人。哭泣悲哀。如喪其親。遠近同志聞訃悉集。依文公家禮修喪事。備前少將遣熊澤氏贈賻。以介營石槨。越某日葬于小川邑北地。

先生初娶長嘯孫女。後娶某氏。子男三人。伯仲前婦人生。李〔季(會)〕後婦人生。皆仕于備前。伯仲早世。李〔季(會)〕辭祿歸小川。追尋先生之學。

先生博聞強記。善詩文。如書字・倭歌・醫術・軍法・武藝類。皆不用意。自得精妙。

先生所著書孝經啓蒙・學庸解・大學考・論語抄注。及鄉黨篇解・翁問答・春風・鑑草皆行于世。亦為門生學醫者。著捷徑醫筌・日用要方等書。亦有文集書簡各一卷。

按本朝之古。吉備公仲麻呂等。英材入唐。受經書。此時不幸。中華聖學之傳泯。故其所傳皆皮膚

而已。其後群儒注解傳來。家講人習。而心術躬行人。未之有。先生起于此間、得孔孟傳授之心法。以興起斯文爲己任。永垂訓于万世。可謂絶無僅有之君子而本朝道學之開宗也。

享保十三戊申五月廿二日

跋⊖

此事狀は何人の記せるにや、藤門の諸賢寫傳へて流布す。亦先師年にかかりて記せる書傳たるあり。彼是違ひども見得て、さだかならず。于時安永末の夏、中野氏平義都かなたこなたの書を拾ひ集め、誤りを改、繁きを削りて一書と成し、藤樹先生年譜と題して、諸同志に與ふ。後世藤學の同志疑ひなからんため、ここに親よし斷りを述ぶ。

寛政七年卯冬　　北川親よし誌

此書は、文拙しといへども、其時代藤門の諸生記す所にして、草稿なるべし。されば、事しげしさいふとも、削るまじきものあるべし。また一には時代の古書を捨るにしのびず。故に予もまた此書を寫して、後世に傳。中野子の年譜あるをもて、みだりに此書を捨つまじきよしをのぶ。

平常親

⊖ 跋以下底本これ無くして會津傳來本に見えたり。今採りて之を補ふ。（紫水）

藤夫子行狀聞傳　解題並凡例

〔解題〕　一、本書は、藤樹先生行狀聞傳・藤樹記聞又は常耕紀聞・藤樹先生實錄・藤樹先生聞錄等の名あり。或はまた藤樹先生記と題するものもあり。今「人間善惡一生道中記」と題する古寫本に見ゆる志村仲昌著「藤夫子行狀聞傳」を底本とす。

一、著者仲昌は藤樹先生の近親にして、志村治左衞門と稱し、常耕と號す。近江國小川村の人にして常省先生の門下たりしといふ。その本書を草するに至りたる事情は序文に詳かなれば今復言はず。

一、本書は文辭極めて拙にして、意味通じ難きところ少からず。然れども小川村老農の筆に係り朴實にして先生に對する態度の謹厚なるは却て興味深し。況や特に本書によりて傳へられたる史實少からざるものあるに於てをや。

一、底本は藤樹先生門下末裔滋賀縣高島郡本庄村大字南船木故松下岩之進氏の家に傳來したるものにして、今は同縣同郡青柳村大字下小川田中竹松氏の所藏に係る。今之を松下氏第一本と呼ぶ。此の書卷首に著者の序あり、卷尾に同じく、跋ありて首尾完存し、且つ松下伯季筆に係る傍記多々存す。而して此の傍記は後記松下氏第二本の本文と一致するもの多く、內容體裁共に能く整ひたり。唯惜むらくは筆寫に當りし人學力乏しかりしを以て誤字頗る多きこと是れなり。

按ずるに本書は類本頗る多し。今左に之を表示すべし。

松下氏第一本（底本）
- 小川本
- 藏田氏傳來本
- 春日氏本

┌田谷氏本
│
├藤樹記聞
│
└松下氏第二本

本書の編纂に丁り右表示するところの諸本を以て對校し若しくは參考となしたり。左にその性質を略記せん。

一、小川本　編者の藏有にして表紙に「藤樹先生行狀聞傳」と題す。文政十丁亥仲冬小川城太夫秀則の筆寫に係り、また後人の註記あり。その本文並に體裁は底本と全く同じ。而して既記底本に松下伯季傍記に係るものと一致せる部分も共に同一人の筆寫に係り、而して註記の大部分は松下氏第二本より採錄せるものと思はる。

一、藏田氏傳來本　滋賀縣高島郡大溝町大字勝野笠井勏氏の藏有にして明治三十四年七月同氏の筆寫に係る。その原本はもと中江家の姻戚たりし同町藏田言合左衞門家に傳來せるものなり。此の書内容並に體裁は底本及び小川本と殆ど同じく唯異なるは底本及び小川本に在つては本朝孝子傳記事の次に藤樹蕃山二先生贈答の和歌を載するも、此には之を缺けるのみ。

一、松下氏第二本　松下氏第一本卽ち底本と同じく、松下氏傳來の書にして藏有者もまた同じく、表紙に「藤樹先生聞錄」と題し、卷首に「藤夫子聞書集序」の文字あり。卷尾に跋を載せず。また松下伯季の註記あり。且つ後半に至りては記述の順序體裁大に底本と同じからず。今左にその異同を列記すべし。

イ、書翰文並に和歌はすべて草書體平假名にて記載せり。

ロ、與二池田氏一書の次に送二赤羽子一（本全集巻之四第一九頁參照）を載せ、その次に「藤樹先生尊像云云。」（聞傳第二四頁）とあり。
またその次に「先生壯年時云云。」（第二六頁）次に「豫州ヨリ博市云云。」（第二五頁）享保六年八月京師ヨリ伊藤元藏長胤云云。」（第二八頁）次に「同年先生ノ墳墓ノ圍垣成就ス云云。」を載せ、且つ祝文の末尾に左の文字あり。

圍垣料出ス各連名二百四（餘？）人在所ノ覺

京師ノ同志三十一人　江戸同志四十八人　會津家中十六人
會津城下三十人　同北邑二十人　同所垣川中同北村十二人
高田村中十四人　播磨姫路十四人　阿波十二人
伊勢ノ津十五人　桑名ニ五人

以下三十五頁終りに至るまで底本との異同はなく、次に本朝孝子傳の記事ありて、挿畫の一（第二八頁）を載せ、最後に五性分釋圖（本全集巻之十一）を載せたり。
右の外松下伯季の追記に係るもの底本と同じく、意の歌（第三五頁）を載する外、祠堂神主並常省先生奉祀神主の二條あり。最後に「再奉二復呈一佐公常賢伯砌一」と題する常省先生の文を掲げたり。今之を底本と比較するに文字の誤謬少く頗る善本に屬すといへども、伯季の追記に係るもの多く、また卷末に跋を載せざれば、體裁に於て完からざるものあり。是れ編者が底本となすを避けたる所以なり。然れども本書の内容は底本に在りては伯季の傍記によりて略々盡すこと得たり。

一、藤樹記聞　元滋賀縣伊香郡視學小西菊之助氏の藏有に係る。此の書大部分は幼稚なる筆蹟を以て識され、一部分は健筆を以て識さる。而して卷末に紙片を貼布して文化五年（戊辰）□（不讀）月謄寫西湖園識

の文字あり。その內容は前記松下氏第二本と同じ。唯卷首序文を缺けると卷尾松下伯季追記に係る部分を缺如せるのみ。

一、春日氏本　藤樹先生實錄と題す。此の書もと大溝藩士恒河子健の傳ふる所にして、京都市上京區吉田河原町十八番の二赤井直採氏の藏有に係る。その內容は槪ね松下氏第二本に酷似するところあれども、本朝孝子傳の記事が「藤樹先生眞像云云。」の次に置かれ、而してその次に六月廿七日小島甚丞宛の書狀あり。而して松下氏第二本卷尾に收むる所の五性分釋圖はなくして、その缺ける所の跋文を存せり。

一、田谷氏本　藤樹先生記と題す。滋賀縣高島郡今津町大字弘川田谷永秀氏の藏有に係る。內容は前記春日氏本と同じけれども、また小異あり。春日氏本に在りては本朝孝子傳の條下に「寛永十一甲戌年冬十月ニ歸リ玉フノ圖ナリ略之。」とありてその圖を示さゞれども本書に在りては二箇の挿畫を完存せり。また卷尾に五性分釋圖と寛政十二年申九月の寄附募集の趣意書を載せたり。

一、本書所載中江宜伯墓誌銘は、之を藤樹書院所藏拓本と比較するに頗る異同あり。是恐らくは摹刻に先だちて草稿の夙に傳來せるものならん。

一、藤井懶齋著本朝孝子傳に載するところは漢文にして其の所論の精細なること本書所載の比にあらず。按ずるに、これまた初稿の傳來せるものならん。尙本項については本全集卷之四十五湖學紀聞を參照せらるべし。

【凡例】　一、底本もと句讀點なし。今全部に亙りて之を附す。

一、對校の結果は左の略符を附して本文の右側に之を傍記す。△印は其文字存せざる意を表す。

松下氏第二本（松二）　藤樹記聞（記）　春日氏本（春）　田谷氏本（田）　蕃山先生實錄（實）

書翰集（書）　中江宜伯墓誌銘拓本（拓）

一、底本處々松下伯季の傍記あり。今（伯）の略符を以て之を示す。

一、底本本文中衍文あるものは衍と傍記し、疑はしきものは？を附す。

一、古字にして今日普通の形に改めたるもの概ね左の如し。時には此等の略字を用ひて底本の面目を傳ふるに努めたり。

叓（事）　旹（時）　号（號）　刕（州）　躰（體）　条（條）　余（餘）　庠（庸）　圣（聖）

一、底本もとありし註記にして後人の筆に係るものはその旨を識す。

一、註記を要するものは或は割註とし或は各條の末尾に識す。

一、割註は編者の新に挿入したるものなり。末尾に記する註記は編者の名を識して、もとありし部分との區別を明かにす。

一、底本は假名遣極めて亂雜なり。舊本の面目を存せん爲誤謬に屬するものありといへども、今改めす。今その誤れるものを例記すれば凡そ左の如し。

飢死ニ　齡と　啇ヒ　志シ　養ヒ親　誤マリ　蒙ブリ　老スヒ（衰）　候ラハバ　候エバ　與エテ

從フテ　償ウ　養ウ　敎ユ　慕ウ　養ナヘバ　豫州エ歸ル

一、底本讀み難き文字には所々振假名を附せり。今之を存すると共にその足らざるを補ふ。

一、底本往々語法を誤り、一讀理解し難きものあり。かゝる場合には意譯を施す。

一、中江宜伯墓誌銘は藤樹書院所藏拓本につきて之を對校したり。底本誤讀したるものあり。今訂す。

一、熊澤蕃山の事蹟は、巨勢卓幹著蕃山先生實錄の拔萃なるを以て、滋賀縣高島郡水尾村万木良知氏藏有岡田季誠氏筆に係る同書に據り之を正したり。

一、本書はもと標目なし。今新に内容細目一覽表を附して年譜の始に掲げたり。參看せられたし。但し一覽表を編するに際して卷頭に掲げられたる系譜については重要なるものゝみを採取するに止めたり。

昭和二年丁卯十月一日

小川喜代藏謹識

藤夫子行狀聞傳之序

藤樹先生者江州高嶋郡小川村中江氏ノ家ニ誕生シマシマシテ、九歳之年ヨリ祖父吉長(伯)ニ養ハレ、豫州大洲之御領主加藤出羽守ノ家臣タリ。然ルニ、古郷小川村之實母吉次ニ離レ、一人身ニ成玉ウニ依テ孝養盡サン事ヲ歎キテ豫州エ迎ヘントコヒ玉ヘ𪜈婦人者老テ境ヲ越ズトテ不肯、依之疏ヲ作リテ家老佃氏ニ差上、二十七歳之冬古郷ヘ歸リ玉フ。藤樹ノ下ニテ學ヲ講ジ玉ヘバ、諸方ヨリ慕ヒ來リ學業ヲ授カリ儒官ヲ顯ハス人々多シ。且ツ逝去シ玉ヒテ百年余ニ及ベドモ次第ニ慕ウ同志世上ニ多シ。先生之學術彌興起スル事明ラケシ。今文明之世盛ンニテ博學衆才之儒者多ク、其門ニ慕フ學者世上ニ多シトイヘ𪜈、先生之學術ヲ慕フ同志モ又衆多也。先生壯年之時學術ニ疑ヒ有テ憤リヒラケ難キ折節、王陽明ノ全書始メテ渡リ熟讀シ次第ニ疑ノ處發明アリテ憤リ開ケ、入德之欛柄手ニ入樣ニ覺エ開悟シ玉フトアリ。然リトイヘ𪜈、東武及奥州會津・勢州洞津・桑名・豫州等之同志スラ發明ノ書籍ヲ省察而藤學ト稱シ或者江西ノ學ト尊信ス。誠ニ深切成哉。藤夫子之學德高大成事其門ニ入テ可知事也。然リトイヘ𪜈小川之里ニテ藤學之意味ヲ尊信スル人希也。後世ニ至リ取失ナハン事歎カシ。且ツ予ニ聞傳ヘシ事ヲ書寫シ置ベシト云フ人(伯)アリ。予古稀之齡ヒニコヘタベ𪜈計リ難キ命故辭スルニ忍ビズ、年譜之内ニ有シ事𪜈其大概聞傳ヘシ事𪜈ヲ考ガヘテ愚筆ヲ不耻書アラハス而已爾云。

農翁仲昌七十有四歳

謹而著之

干時寶曆三癸酉歳仲夏吉辰

○—吉長　　諱松　中江德左衛門

加藤出羽守ニ仕ヘテ伯耆ノ國ニ在ス。元和三丁巳年伯州之主左近公豫州之大洲ヘ轉任セラル。吉長知行百五拾石被下風早郡ノ宰ト成ル。元和八壬戌年九月廿二日卒ス。享年七十五歳妻市東夫人元和七辛酉年八月七日卒ス。享年六拾三歳也。

㊀ 加藤出羽守、當さに左近大夫貞泰に作るべし。（紫水）

—吉次　　中江德右衛門

小川村ニ在住ス。寛永二乙丑年正月四日卒ス。享年五拾二歳也。娶ニ北川氏女ヲ妻トス。諱市寛文五乙巳年五月廿二日卒ス。享年八拾有八歳也。以テ（儒法（松二・記・春））文公家禮之法ヲ。玉林寺之墓地ニ葬ムル。（先生ノ側（伯））石碑之銘ニ中江德右衛門妻北川氏墓トアリ。三方小右衛門筆也。藤樹先生ノ實母也。及ニ長壽ヲ榮松ト號ス。

—（二男）某　　中江三郎右衛門　仁兵衛（伯）

小川村ニ在住ス。

—（三男）治之　　元立　崇保軒　中江右門

堂上方ニ仕ヘ在京ス。

—（嫡（伯））女子　　諱布佐　廣野　貞間

壯年之内　堂上方ニ祐筆ヲ勤メ（伯・松二）
後ニ能書故京都ニテ女子ニ筆之指南ヲ授ル。

㊀ 筆之指南云云、春日氏本筆道の指南に作る。從ふべし。（紫水）

一立重　　中江數馬　與市

壯年之内堂上方ニ仕ヘ、後ニ能書故筆耕ヲ業トス。（シ禁裏ヘモ上ル（松二・記））京都河原町ニ在住ス。子ナキ故穗積氏之子ヲ養子ニス。

一女子　　諱玉

穗積賴母ガ妻ト成。穗積氏ハ座頭ノ官職ノ取次役ヲ勤メ、久我大納言殿家エ（ヘ（記））出入ス。

一某　　中江惣八

惣故數馬ヲ養子ニス。（△（伯）ナル（伯））藤樹先生ノ所緣ヲ望ミ後ニ伊勢國龜山之家中高橋氏之家督ヲ相續シ、知行百七拾石被レ下、勘定方ヲ勤ムル處、奉輩（朋（春））之仕損シ（相役（記））ニテ難レ遁ニ依テ半知トナリ、其后御暇マ下サレ妻子モニ京都穗積氏ニ掛ル。

一惟命（字ハコレナガ）　　諱ハ原　姓者中江氏　假名ハ與右衞門　嘿軒

慶長十三戊申年三月七日小川村藤樹ノ下ニテ誕生アリ。母者北川氏榮松公也。原九歳之時ニ祖父吉長ニ養ハレ、初而伯耆ノ國エ行。（米子（伯））此春祖父小川エ來リ（ヘ（記））孫ノ原ヲ養ハント乞フ。父母其一男成ニ依テ不レ肯。祖父固ク是ヲ强フ。故ニ止事ヲ不レ得而遠ク伯州エ遣ハス。原性穎敏邁ニシテ幼キヨリ物ニ愛着セズ。故ニ父母ヲ離レテ遠ク行トイヘモ一毫モ哀ム事ナク、能祖父母ニ孝アリ。今年始テ文字ヲ習ヒ書ス。期年ニシテ殆能ス。祖父本文字ニ拙シ。常ニ自ラ是ヲ悔ユ。故ニ原ヲシテツトメテ文字ヲ學バシム。遠近之書翰皆原ニ書セシム。人皆其幼ニシテ文字ヲ能クスル事ヲ驚歎ス。祖父文盲トイヘモ先生之書物ニ於テ銀子ヲ費ス事有トキハ一毫モ惜ム事ナク、進ンデ與ヘシム。若遊宴之事ニ費ヤサントスル事有レバ、甚ダ是ヲ拒ンデ罵シル。如レ此故ニ常ニ友ヲ招而逸樂ノ習ヒヲフ

セグ。元和辛酉年原十四歳之時在大洲於曹溪院天梁和尚ニ就テ寺ニ入テ手跡ヲ學ビ、其暇ニ詩聯句ヲ學ンデ。佳作アリ。或人和尚ニ謂テ曰、中江原極メテ聰明也。詣則ヲ參セシメザルヤ、其未ダ悟ルベカラザルヲ以テカ。和尚ノ曰、不然。我是ヲ示サバ速ヤカニ會得スベシ。然リトイヘドモ却テ慢心ヲ生ゼンガ故ニツヒニ不示ト云リ。畢

先生十二歳之時、一日食スルキツラ〳〵思ヘラク、此食者是誰恩ゾヤ。一ツニハ父母之恩、二ツニハ祖父之恩、三ツニハ君之恩、自今以後誓ヒテ常ニ此恩ヲ思ヒ忘ルベカラズ。

行狀ニ曰、先生十一歳ニ而始メテ大學ノ書ヲヨミ、自天子以至於庶人壹是皆以修身爲本ト云ニ至リテ書ヲ恭敬シ、嘆而曰、聖人ヲ學ンデ至ルベシ。生民之爲ニ此經ヲ遺セルハ何ノ幸ヒゾヤ。爰ニ於テ感涙袖ヲウルホシテヤマズ。是ヨリ聖賢ヲ期待スルノ志シアリ。一度書ヲ讀デ必諳ズ。未ダ習ハザル文字トイヘドモ皆曉ス。人皆奇異也トス。十六歳ニ而十三經ヲ通習ス。總而諸子百家之文、倭國ノ書ニ至ル迄讀ズト云事ナシ。先生始メハ威儀ニナラヒ、礼書ノ中其篇ノ要成物ヲ取テ、所々ノ壁間ニ誌シテ日用ノ則トシ、強持スル事久シ。省ニ揣摩依倣ノ工ニシテ心性ヲ養ウ術ニ非ル事ヲ覺フ。以爲、聖人ノ人ニ教ルノ道如此外儀ニヨルベカラズ、我用ユル處誤マレリト。是ヨリ群儒之論ヲ考フル事深シ。然レドモ下手ノ實地未其究竟ヲエズ。因テ聖教本源ヲ求メテ易經ヲ學ブ。コノ經ニ能通ジタル學者有ン事ヲ思テ京師ニ至テ是ヲ求ム。一學生ヲ得テ是ヲ學ブ。聞一知十美アルヲ見テ學生大ニ稱而我教ルノ人ニ非ズト云。講成テ豫州ニ歸ル。先生廿五歳ノ春暇ヲ乞テ江州ヘ來リ、母堂先生ヲ慕フ思ヒ深キニ依テ、豫州エ倡ヒ歸リ定省之孝ヲ盡サン事ヲ欲ス。然レドモ母老テ古鄕ヲ離遠途趣ク事ヲ欲セザルヲ以テ、獨豫州ニ歸ル。船中ニシテ始テ哮喘ヲ患フ、極メテ甚シ。後自ラ曰、我幼少ヨリ世間之毀譽ヲ思惟而、胸ヲコガシ食味ヲ變ズルニ至ル。爰ヲ以テ或ハ此病ヒヲ得ルカ。當時學術アリトイヘドモ、猶支[illegible]矜持ニ渉リ、カツテ超脫之見ナシ。

近來學術漸ク進ムニ從フテ心氣粗和平洒脫故ニ疾モスコブル輕事ヲ覺フト。先生廿六歲ノ春正月朔日老母ヲ思ウノ詩アリ。蓋シ豫力ニ來ラザルニ依テ、其定省ヲ得ザル事ヲ歎ク。適感有ニ因テ作ス。

○（闕文）

子欲與養親不待。　樹欲靜兮風不止。
來者可追歸去來。[一]

（一）此詩文集に。羈旅逢レ春遠樹レ哀。綠巒黃鳥止ニ斯梅。樹欲レ靜兮風不レ止。來者可レ追歸去來。に作る。（紫水）

寬永十一甲戌年先生廿七歲冬十月仕ヘヲ致而江州ニ歸ル。是ヨリ前毎ニ家老佃氏ニ謂テ曰、母老テ古郷ニアリ。此地ニ倡ヒ來ラント欲スレ圧肯ハズ。願クハ能君ニ奏而仕ヘヲカヘサン事ヲ。佃氏ノ曰、諾、我必能君ニ告サン。然レ圧年ヲフレ圧果サズ。蓋其意ハ先生ノ多才ナルヲ惜ミ、且又他ニ仕ヘテ厚祿ヲ得ント欲。ルノ志シナランヤト疑故也。是ニ於テ先生疏ヲ作而佃氏ニ捧ゲ天ニ誓フノ詞ヲ以、他ニ仕フノ志シ無キ事ヲ顯ハス。其文ニ曰、[二]

今度私御暇之儀言上被レ成被レ下候エト奉レ願候ニ付テ、傳左殿助右殿御同心不レ被レ成、種々御異見之段忝ク奉レ存候。此中モ如ニ申上候ニ一ツニハ何レモ御存知ノ如ク二三年以前ヨリ病氣ニマカリ成候テ、次第ニ人ナミノ御奉公相勤メ難キ躰迷惑ニ奉レ存候。一ツニハ古郷ノ母十年以來一人住チ仕罷リ在候。私ノ外ニ別ニ母チハゴクミ申スベキ子モ御座ナク、又ハヨスガニ賴ミ存ズベキ程ノ能親類モ無ニ御座一候故、四五年以前ヨリ漸々飢寒ニ及ブ体ニ御座候間、此地エツレコシ可レ申スト存候參リ、去々年御理ハリ申上、向ヒニ參リ候處ニ、最早年モ罷ヨリ亦者病者ニ御座候テ里ノ内チモ自由ニアルキ申ス事マカリナラザル体ニ御座候。其上、女之儀ニ御座候エバ古郷チ離レ遠國ヘ參リ候事、假令飢死ニ仕候圧ナリ申間ジキム子申候故、是非ニ及バズ捨罷罷歸リ候。私儀ハ養ヒ親共ニ四人迄御座候ヘ圧、三人ニハ幼少ニテ離レ申シ今ハ母一人ノコリ申候。母一人子一人之事ニ御座候。其上母存生ノ内モ今八九年之体ニ御座候條、御暇申シ受古郷エ罷歸リ母存命之間ハ如何樣ノ業チナリ圧仕リテ養ヒ申シ、母相果候ラハバ貴樣チ賴ミ存、召カヘサレ被レ下候ハバ御奉公仕度覺ゴニ御座候。此外聊カ存ル子細モ御座ナク候。私之儀ニ御座候條、左樣ニハ思召間ジク候ラヘ圧、若右申上候處、當座ノ假事ニテ眞實ハ身上チモ挊可レ申由ニテ申シ上ルカト御推量ナサルル事モ御座候ハント存、此中モ度々申シ上ル如ク左樣ノ所存少シニテモ御座候ハバ、立所ニ天道之冥罰チ罷蒙ブリ母ニ二度アヒ申間ジク候。加樣ニ數キ申ス處御聞屆ケナサレ候テ、不便ニ思召候ハバ、能樣ニ御取ツクロヒナサレ、假事ニ言上仕ルカナドト聞シ召

御誤マリノ御座ナキ樣ニ仰上ラレ御暇下サレ候樣ニ、願ヒ奉ル外無ニ他事一候。恐惶謹言。

三月七日　　　　　　中江與右衛門判

佃　小左　樣

㊂ 不レ被レ成、中村氏所藏致仕書藏幅並年譜に被成さあれども不の字を加ふるもの意味能く通ずるを覺ゆ。（紫水）

然レ氏、猶未許サレズ。是ニ於テ止事ヲ得ズシテ潛カニ逃レテ江陽ニ歸ル。是年之祿米悉ク倉ニ積置朋友ニ假貸スル米穀アルヲバ器物ヲ遺ハシテ是ヲ償ウ。江陽ニ到ル時、銀纔カニ三百錢アリ、祖父之時ヨリ使フ處之若黨一人アリ。先生其ヨル處無ラン事ヲ憫レンデ銀二百銀ヲ與エテ曰、是ヲ持豫劦ニ歸リ商ヒヲナシテ世渡リセヨ。固辭而若黨曰、君ノ銀纔カニ三百錢。然ルニ我ニ過半ヲ賜フ。我元ヨリ一錢ヲ受ル志シナシ。唯君ニ從フテ艱難ヲナサント云。先生强テ不レ止。是ニ於テ涕泣而銀ヲ受テ歸ル。冬十一月京ニアリ。先生逃レ去ヲ以君ノ惡ミ有テ江陽ニ有事ヲ防ンヿヲ慮而、京都故友ノ家ニ寓而命ヲ待事百日餘。其トガメ無キヲ以テ江陽ニ歸ル。是寛永乙亥之年也。先生廿八歲（九伯）丙子之春鷄旦ノ詩ニ曰、

格致誠修貴ニ日新一。　易難先后不ニ彬彬一。
料リ知ル聖學成功ノ地。　氣朔今朝共是春。

㊀ 春日本・藤樹記聞、若黨固辭ノ曰に作る。
㊁ 防ン事ヲノ四字底本後人の筆にて傍記す。今小川本その他によりて、本文に挿入す。（紫水）

同十有三丙子年（氏伯）先生江州ニ在住アリ。筑州ヨリ池田某ト京都ニテ會ス。嶋川子ニ逢フ。豫劦ヨリ小川氏來。學ヲ問。先生三十歲高橋氏ノ女ヲ娶ル。三十一歲今年始テ谷川寅・落合左兄弟來テ業ヲ門ニウク。豫州ヨリ大野了佐來テ醫ヲ學バント欲ス。極メテ愚鈍昧ニシテ大成論ヲ讀シムルニ、先大成論（記・春）二三句ヲ二百遍計リ巳ノ刻ヨリ申ノ刻ニ及ンデ漸記ス。退テ食シ后是ヲヨムニ皆忘レ了ル。又來テ是ヲ習フ事百遍余リニシテ始メテ記得ス。是ヨリ以後日々ニ來テ習フ事年ヲフ。先生其醫術

ヲ曉得シ難キヲ以テ、捷經(松二)臀筌ヲ作テ是ニ授ケ、亦是ヲ講而其意ニ通ゼシム。后醫ヲ以テ世ヲ渡リ數口ヲ養ウニ足レリ。先生ノ曰、我彼ニ敎ユトイヘドモ彼不勤バ不能。彼甚ダ愚昧ナリトイヘドモ其勵勉ノ力ハ絶テ甚ダ奇也。況ヤ了佐ガ如クナラザルモノハ其勉ムル處ヲ可知。春中川貞良豫州ヨリ來ル。秋吉田氏來テ敎ヘヲ受ク。夏持敬圖說幷ニ原人ヲ著ス。同志ニ示ス。先生三十二歲ノ年ノ春藤樹規幷學舍座右ノ銘ヲ作リテ諸生ニ示ス。三月ニ豫州ヨリ山田權來テ醫ヲ學ブ。夏四月ニ中川熊來テ業ヲウク。秋論語ヲ講ジ、鄕黨ノ篇ニ至テ、大ニ感得觸發アリ。是ニ於テ論語ノ解ヲ作ラント欲ス。先鄕黨ノ篇ヨリ起テ先進ノ二三章ニ至ル。病苦ニサヘラレテ果サズ。先生三十三歲今年性理會通ヲヨミ、發明ニ感而毎月一日齊戒シ太乙神ヲ祭ル。則太乙神經ヲ撰バル。今ノ肖像之冠裝束者太乙神ヲ祭リ玉フ服巾也。秋豫州之同志ノ願ヒニ依テ翁問答ヲ著ハス。冬王龍溪語錄幷ニ王陽明全集ヲ得玉フテ熟讀シ玉ヘバ、疑ヒノ處發明是アリ。憤リ開ケテ入德之欛柄手ニ入開悟シ玉フ。秋孝經ノ啓蒙ヲ著ハシ玉フ。冬熊澤了介伯繼來テ業ヲ受ク。去ル秋始メテ來リ人ヲ賴テ謁ヲ請フ。先。志ノ眞僞ヲ知ラザル故ニ堅ク是ヲ辭ス。二度請テヤマズ。先生書ヲ以テ辭之二度、尙請テ曰、假令敎ニアヅカラズト云フ𪜈、如何ゾ一度拜謁スル事ヲ許サザルト。其情甚ダ愁テ淚ヲ滴ルニ至ル。先生其情狀ヲ聞知リテ是ヲ憐レミ謁スル事ヲ許ス。尙業ヲ受ル事ヲ許サズ。强テ歸ラシム。冬亦來テ固ク請テ已ズ。是ニ於テ終ニ業ヲ授。先生三十五歲ノ春中村叔貫來リテ始メテ業ヲ受。冬十一月嗣子虎生ル。先生三十六歲。是年山田氏・森村氏ノ爲ニ小醫南針ヲ撰ブ。秋中西常慶來テ學ヲ問。此冬詩經ヲ講ズ。二南終テヤム。中西氏ノ曰予洛ニ於テ世儒ノ講ヲ聞ク事久シ。今先生之講ヲ聞テ大ニ驚テ感服スト。是ニ於テ終ニ弟子トナル。

㊀ 三十三歲王陽明全集を讀まれたりとは恐らくは誤。（紫水）

冬清水氏來テ學業ヲ受。正保元甲申年先生三十七歲ノ春森村氏・山田氏ノ爲ニ神方奇術ヲ撰ブ。夏四月加世五來テ學業ヲウク。秋八月岩田長仲愛來テ學業ヲウク。

先生三十九歳ノ春正月次男鐺生ル。仲條太來テ醫學ヲ學ブ。（授ク（伯））此年郡主分部伊賀守先生之學德ヲ聞召、見ン事ヲ乞玉フ。邑宰某先生ニ告グ。先生固ク辭ス。后止事ヲ得ズシテ見ユ。先生ヲ待スル事頗ル禮アリ。然レ𪜈學術ヲ問セラレズ。夏四月三十日夫人高橋氏病死ス。享年廿六歳。宜伯仲樹ノ母儀也。

先生四十歳ノ秋、鑑草刊行ス。先生嘗テ翁問答兩部ヲ著ス。然レ𪜈學日々ニ新ナルニシタガヒ、此問答愈〻其心ニカナハズ。改正之志シ有ケレバ、博ク門人ニダニ授ケ玉ハズ。然ルニ癸未ノ年梓人之手ニモレテ既ニ梓ニチリバメシヲ、幸ニ早ク知テ是ヲ破リ玉フ。板屋迷惑成由達テ歎クニ依テ損之ツグノヒニトテ女中ノ勸戒ノ爲ニ嘗テ著シ置玉フ書ヲ鑑草ト題シ、彼ニ授ケ玉フ。慶安元戊子年七月四日ニ三男季重生ル。母ハ后妻別所氏也。先生享年四十一歳ニシテ秋八月廿五日之朝卯刻ニ藤樹書院ニテ卒シ玉フ。行狀ニ（記）曰、先生病ス。其革㊀床ニ至而、令シテ婦人小子ヲ退ゾケ唯諸生而已傍ラニアリ。先生醫ヲシテ脉ヲ診ムル事アラシメテ曰、脉ソレ絶ヘ（記）ナント。則助ケ起シテ端座セシメ、几ニ隱ツテ歎而曰、此道ノ任誰カアル。嗚呼無哉ト云テ卒ル。天何ゾ此人ヲ惜マザランヤ。不孝（幸（伯））短命成ゾヤ。訃音ヲ聞ク處ノ同志悉ク集リテ、文公ノ家禮ニ因テ喪事ヲ修ム。然ルニ備前太守少將源光政候（侯ノ誤）未ダ先生ニ面諭セズト云ヘ𪜈、其學ヲ信ズルニ因テ臣熊澤了介丈ヲ遣ハ而賻ヲ贈ル。門人棺槨ヲイトナミテ某日小川村之北之地ニ（玉林寺ノ境內ニ（記））葬ムル。邑村隣里之人群聚而葬ヲ送ル。悲哀涕泣而其父母ニ喪スルガ如シ。

㊀ 革底本右側ニ「カク」左側ニ「アラタム」の假名を附す。今改む。（紫水）

按ズルニ先生道ヲ任ズル事深フシテ來學ヲシテ斯文之興起ヲ欲スル事此一條ヲ以テ知ベシ（春）。易簀誰有。嗚呼無哉之歎默識スベシ。皆以博愛厚重ノ實心ヨリ流レ出シテ止事ナシ（春・記）。天斯文ノ興ラン事ヲ欲セバ何ゾ先生ヲシテ永年ナラシメザル。嗚呼惜ヒ哉。亦曰、永壽シ玉ハバ后學ノ者ノ益ヲ得ル事多

カルベキニ、哀ヒカナ。先生祀法・詩文及書字・倭哥・醫術・音楽・軍法・武藝ノ類皆意ヲ用ヒズトイヘドモ自ラ其能スル事ヲ得タリ。

曰、右ニ記ス事共ハ先生之年譜ト同ク行狀トノ内之抜書也。門人諸生之中ニモ或ハ學業ヲ傳授シ或ハ醫術ヲ傳授而、先生ノ德澤ニヨッテ世上ニ其名ヲ顯ハス人々ヲ記ス。此外知ラザル同志モ多シ。

―女子　諱　葉　先生之妹

小嶋七郎右衞門(伯)。妻ト成。長壽ノ(伯)后清心尼ト號シ、老母榮松尼公(松二・記)ニ仕ヘラル。

母子共に備陽侯より御扶持を下さる(伯)

―宜伯　諱　虎之助　中江太右衛門先生之嫡子也

母者高橋氏。寛永十九壬午年十一月廿三日小川村藤樹之下ニテ生ル。備前ノ太主少將源光政候(侯ノ誤)先生ノ學術ヲ慕ヒ玉フニヨリ、先生物故ノ後御客分ニ愛セラル。然ルニ寛文四甲辰年五月十二日享年廿三歳ニテ備州ニテ卒ス。學術大才ニテ德實高ク世コゾッテ是ヲ惜ム。岡山ノ城ノ東南平井山之麓ニ葬ル。

或人曰、與市山之上ニ家中町中之墓所ナリ㊀。此山之西後ニ菴アリ。松賢寺ト號ス。此ニ　中江宜伯之墓アリ。石塔者六角ノ臺ニテ高ク結構ナル石碑也。碑ノ銘ノ文宜シキトテ學ヲ好ム人々寫シニ來ルト云云。此邊ニ常省先生ノ女之墓アリ。小女中江氏瑠璃墓ト有。

㊀ナリ當さにありに作るべし。(紫水)

江君宜伯墓誌銘　熊澤伯繼ノ文ノ由

中江君子(拓)。太右衛門。諱虎。字。宜伯。少名ハ(拓)ハ太右衛門諱(拓)江州高嶋郡小川之人。号与右衛門・諱惟命。考ハ(拓)始仕テ于西豫ニ。

早有解印之懷。辭官歸鄕。高尚其志。專以講學論道爲事。其敎崇德義。勵節行。儘有游其門者。學徒或稱藤樹先生。嘗娶高橋氏。以寛永壬午十一(拓)某月某日廿二、子(拓)。寔生君於小川。君幼有智。子(拓)智(拓)資稟溫厚。擧止閑靖。不好庸兒之嬉戲。頗有成人風標。甚亂夙孤。累遭閔凶。事祖母恭謹。及長劇好道學。敦尙行實。讀史誦經。日乾夕惕。孳孳無倦。深以纂前緖成考功爲志。「其杜實」庚寅寔嘿恩惠潦抑自有過人者。(六拓)之歲。筮仕于備陽。二弟仲樹・季㊀季孝(拓)重幷皆成官。資敎懇個(拓)到。友于尤篤。君不居子(拓)居(拓)危座。終日無怠惰(拓)。偃側之容。接人持己。動以法度。慶有餘行。則馳馬試劒。講肄軍祇。可謂能游於藝矣。寛文四年甲辰年△(拓)五月十一日二(拓)以疾病(拓)卒于家。享年廿有三二十(拓)。未娶無嗣(拓)。嗚呼痛哉。早夭即世。故不幸之至也。遂窆於岡城東南平井山之麓。學士僚友會哭相弔(拓)予。參酌喪儀。以祇治葬。因考其狀。乃撥其槩。剟刻(拓)碣表墓。且系以銘。々曰(拓)

惜乎哉(拓)若人。弱冠英特特(拓)。志學奮然。忘寢与食。纘緖積懋(拓)功。共爲子職。盡規存心。強有臣力。會文偲々。講武翼々。色溫氣剛。行敏言默。天胡嗇年。無成其德。平井之丘。遺此幽刻。

㊀ 季孝藤樹先生三男常省子の名。(紫水)

仲樹 先生之二男也　鍋之助　中江藤之允

正保三丙戌年正月廿五日小川村藤樹下ニテ生ル。母者高橋氏、備前ノ大圭少將源光政候(侯ノ誤)ヘ召抱エラル。御氣ニ入ニテ御近習ヲ勤メ、新知百五拾石被遣ハ。然ルニ氣病ヲ煩ラヒ色々療治セラレケレ死(マヽ)快シカラズ、京都エ登リ名醫方之療治ニテモ相叶ハズ。終ニ京都ニテ卒ス。行年廿歲ニテ寛文五年正月廿三日ニ卒シ、京東山黑谷ニ葬リ、石碑ノ銘ニ中江藤之允仲樹之墓ト有。谷川儀左衞門墓ト一所ニアリ。

一 季重 先生之三男也　彌三郎　常省先生　中江氏ヲ轉シ江西文内

慶安元戊子年七月四日小川村藤樹之下ニテ生ル。母者大溝ノ家中別所氏。妻ハ備前ノ士官長谷川九郎太夫妹ヲ娶ル。先生卒去シ玉ヒテ故障之義有テ母義ハ親本ヘ戻ラル元(伯)。彌三郎襁褓之中ヨリ孤ト成リ、東萬木村岡田傳右衛門家ニテ養育セラレテ、十一歳ニテ備陽ノ大主少將光政侯エ召出サレ御近習ヲ勤ム。御氣ニ入之仲樹ノ家督ヲ直ニ仰セ付ラレ、穎敏人ニ勝レ德實大才ニテ、壯年ニ到リ學講(校?)ノ奉行トナリ、泉八右衛門(伯)ト相役也。此人ハ熊澤了介丈ノ弟ニテ、博學衆才ノ儒士也。季重丈モ學術秀才之大儒ニテ世上ニ門弟多シ。元來哮喘ノ持病有テ役儀勤リ難キニヨリ、大守伊豫守侯御代ニ御斷申シ上。仕ヘヲ致シ、小川村エ歸鄉シテ學ヲ講ジ、門弟ニ示教セラル。其學術ヲ宗對州侯開召及バレ、學問ノ御助ケニ雇ハレ、博學秀才ヲ感稱セラレテ朝鮮エ遣ハサルベキトノ義アリ。對州侯ノ家臣トナリ朝鮮ヲ勤ムル義古主之御トガメ如何ト思ハレ御暇マヲ願ヒ、古鄉小川エ歸鄉セラル。其后京都エ登リ學術ヲ講談シ玉ヘバ、同志倍々多クナル。其節名ヲ轉シ江西常省先生ト門人稱ス。几亦先師發明之學庸ノ解ノ未殘リシヲ患ヒテ考ノ憤リヲ二書トモニ註解ヲ加ヘ狗尾ト號シ、同志ニ授教セラル。然ルニ對州之京屋敷留主居、木原壽軒(一)モ同志故(伯)。此書ヲ信仰而書寫シ、對州君エ遣ハシケレバ、依之二度御雇ヒナサレ、此度者御客分ニモテナサレ、諸色對州侯ヨリ御賄ヒ也。嫡介(二)子息(伯)ヘ此時新知二百斛給ル、季重尉對州侯之御客タル故、衣類諸道具等者御藏ニ入。大儒故書籍發明之文集御文庫ニ入。然ルニ江戸屋敷柳原下谷火難ノ節文庫エ火入燒失ス。及(三)老年ニ再編モ難成殘念之仕合ナリ。藤樹之發明之書籍殘ラズ此火難ニ燒失ス。然リトイヘトモ主君ノ御影ニテ命ハ別條ナク遁レテ古鄉エ來リ祠堂ニ於テ時祭ヲ執行フ事大幸ナリトノ玉フ。季重尉老スヒニ及シヰ、病モ重リ御斷リ申上、此度ハ京四條御旅ノ邊ニ閑居シ玉フ。長々之病氣ユヘ勝手モ不如意ノ處安原節齋尉父子之世話ニテ京都ヲ仕舞、五月廿三日小川村ヘ歸宿シ、病氣次第ニ重リ享年六(四)

十四歳ニテ寛永六己丑年六月廿三日卒シ玉フ。近所ノ同志相集リ文公家禮之法ヲ以テ玉林寺ノ墓地ニ葬ル。（先人ノ側ニ(伯)）其後岡田季誠樹諸方（子(伯)）ノ同志之中ヘ相談シ石碑ヲ建立ス。常省先生墓ト記ス。大津伊上佐市筆也。京都ニ在住ス從弟（ノ(伯)）中江數馬ヨリ對州ノ中江藤介方ヱ父之病氣重キ由青通有ケレバ、驚キ見舞ニ來ラル。遠國之海上故ニ死後四十日程ニシテ來宿ス。夫ヨリ喪中卅日餘勤ム。寒天ニ及渡海モ難儀ユヘ對州ヘ歸帆アリ。

㈠ モ同志故小川本また同じ。　㈡ 子息(伯)小川本また同じ。

㈢ 影、當さに陰に作るべし。　㈣ 當さに六十二歳に作るべし。(紫水)

―女[五]子　諱　伊知　早世　備前ニ小女中江氏瑠璃墓トアルハ此女歟

㈤ 底本此一行皆松下伯季の筆。(紫水)

―女子　諱　染

備前ニテ生レ小川ヱ來リ、分部侯ノ士官[六]藏田與治右衛門妻ト成。後備前ニテ死ス。(伯)

㈥ 藏田與治右衛門諱久彌世々言合左衛門さ稱す。(紫水)

―某　常省先生之嫡子也　諱　𤄃之介[七]　貞平　中江藤介

對州侯御附成サル。

小川村藤樹之下ニテ生レ、壯年ニ及ビ宗對馬守ヱ被召抱、新知二百石遣ハサル。博學衆才故大目附役ニナリ、知行四[八]百石ニナル。妻著惣田助作ノ女ヲ娶リ子息多ク有之由。

㈦ 𤄃之介、對州中江氏の系圖には常省先生の小字さなす。

㈧ 四百石さなすは誤。(紫水)

某 二男(伯) 中江彌九郎

母ト一所ニ備前之家臣長谷川九郎太夫ニ掛リ早世ス。

某 藤介嫡子 中江爲右衞門

於ニ對州ニ父之跡ヲ繼グ。

某㊀ 同二男 中江文内 於ニ江府ニ早世。

㊀ 底本此の一行松下伯季の追記なり。（紫水）

「二男中江文内壯年ノ時、父ト江戸詰ノ時馬上ノ達人ニテ荒馬ニノリ落馬ノ痛ニテ江戸ニテ早世スト相聞ユ」（記・春）

先生(伯)著ス所之書

一、大學補拙 一卷 宋本解豫州ニテ作ル。

先生廿一歳ノ時ノ發明ノ書之。(伯)

一、孝經啓蒙 一卷 漢字ヲ以テ書ス。

先生淵氏ニ告テ曰、此經之精義啓蒙ニ於テ未ダ盡トイヘドモ、學者句讀ニヨリテ大意ヲ見ルニ便リスト云云。

一、大學解 一卷 倭字ヲ以テ書ス。

古本ヲ宗トス。其辨考ニ委シ。經一章ヨリ正心之二傳ニ至而ヤム。但シ誠意ノ傳其末ヲ欠ク。

一、中庸解 一卷 倭字ヲ以テ書ス。

僅カニ首章ニシテヤム。其後、加世氏。

先生講義ヲ聞而私ニ記ス處廿餘章、先生之解ニ附會スル本アリ、詞甚ダ鄙俚也。後世誤テ先生ノ解ニ混

ズベカラズ。

一、大學考　一卷　倭字ヲ以テ書ス。

晩年ノ作出ス(一)。故親民ノ說解ト稍異也。

(一)出ス、恐らくは出づの誤。(紫水)

一、論語解　一卷　倭字ヲ以テ書ス。

都テ九章學而時習章。絕四章。君子ノ於天下也章。逸民(伯)章。回也其庶乎章。君子坦蕩蕩章。参乎吾道章(伯)。君子不動章(二)。顏淵問仁章也。

(二)道の下底本章の字を脱す。松下伯季「章脱字歟」四字を追記す。(紫水)

一、鄕黨篇註解　三卷　漢字ヲ以テ書ス。

全篇是ヲ註ス。鼇頭アリ。共ニ先生ノ作也。先生四書ノ註解ヲ作ラン事ヲ思フ。其年幾クナラズシテ沒ス。學庸ノ解スラ終篇ナラズ。知ル人是ヲオシム。寛保二壬戌年秋九月洛下石川惟元是書ヲ(記)刊行ス。

一、翁問答　上中卷　六冊。

先生自ラ改定センヿヲ欲ス。其旨趣中川氏ノ跋ニ見ユル。僅カニ改定センノ(記・松二)辭間テ曰ク、答テ曰クトアリ。其体允ト許シ、師之曰ト書スル事心ニカナハザルヲ以テ改ムルト云リ。是先生之自ラ淵氏ニ告ル所也。

一、春風　一卷

今勸善錄ト改名出版(小)

一、鑑草　八卷　或人ノ曰、妹ニ書與エ玉フト云リ。

一、文　錄　五卷　文集ノ事ナラン。(伯)

一、書　翰　一卷　別集一卷　徐章一卷　安原貞平輯錄(伯)

一、捷徑醫筌　六卷

大野了佐与州ヨリ來テ醫ヲ學ブ。此人之爲ニ發明シ玉フ醫書也。

南針ヨリ以前作之。(小川本註記)

先生歿後八年ニシテ即チ明暦元年乙未仲夏之。南針中卷之内ノ病門ヲ首卷ニ附ス。跋アリ。見ルベシト。又曰ク、寛永年間書籍目錄ニ醫筌六卷中井半右衛門述トアルハ誤ナリ。(松下氏第二本傍註)

一、日用要方

㊀醫書名奇本ニ中井與左衛門作(伯)。ト有ハ誤リ也。

㊀此の一項底本誤つて日用要方の下におく。後著者自ら此の項に移すべき記號を附す。今從ふ。(紫水)

一、神方奇術　一卷

森村氏、山田氏与州ヨリ來リテ醫ヲ學ブ。是人々ノ爲ニ發明アリ。

一、小醫南針　右同斷

一、上棟、中棟

一、持敬圖說並原人　上下二冊

一、宇佐美軍書　先生ノ註釋多シ。アリ(伯)

一、孝經講義　一卷

中村所左衛門、先生之講辨ヲ聞錄スル書ナリ。

一、百人一首ノ歌之詩トテ百詩アリ。

一、詠草　一卷

一、以呂波歌

女夫人之爲、戒之爲之仕附書也。

（附記）藤樹先生の以呂波歌と稱するもの一册あり。古來わが鄕に傳來するものあれども、その歌詞等につき之を考ふるに到底先生の著作として見るを得ず。依て玆に識す。（紫水）

中川權左衛門・加世八兵衛・中村亦之允又(松二)・山脇左右衛門イニ苗字不知傳(伯)又右衛門近邊ノ同志諸生ト申シ合於ニ祠堂一期ノ喪ヲ勤メント諾セシニ御領右無ニ御許容一。無(伯)是非各離散ス。オリカラ熊澤了介丈是ヲ聞、先生之學業体認ノ儒者故五人共一度ニ備陽侯ニ召抱ヘラレ、新知二百石ツヽ遣ハサレ、就レ中中川權左衛門与州中川貞良ノ弟也。小川村講堂ノ東ニ在住シ妻ハ小嶋七郎右衛門娘先生ノ姪ヲ娶テ來助ト云男子ヲ儲ケ及ニ壯年一權太夫ト云。小川生レ故毎歳年始ニ氏神へ御初穗一封ヲ獻ズ。權左衛門ハ毎夕少將光政侯御前へ召出サレ學術ヲ開シ召サレ戌亥ノ刻ニ及ブ。故ニ往來駕籠ヲ下サル。博學多才之儒者也。加世八兵衛者博學ノ儒者故先生之發明之學庸ノ解ノ末ヲ先生ノ意ヲ以テ解ヲ成ス。且祠堂ヲ退ク時之次ニ曰、

心學之友集リ居テ天下第一等ノ事ヲノミ講論切磋スル事至リノ御代ニハ多ク侍レ𪜈、末代濁世ニハ稀ニナン侍ルト聞。カ(マヽ)中扶桑ニシテ顧軒先生ノ号く(伯)ノ門下ニコソ師友ノ切磋日ニ而利害ヲ避ケテ一向ニ第一義ヲ講明シ蓬萊ノ會ヲナス事年久シカリケルニ、去ル秋ノ始メ夫子痰咳ノ病ヒウタタ指出テ、イク程ナク逝去シ玉ヒテヨリ、門生等終日歎傷スレ𪜈不レ及ニ是非一。△(記・春)故先輩等(記・春)。相謂テ曰、夫子已ニ逝クトイヘ𪜈、趣ムクベキノ道路已ニ開キヌ。吾儕等講習

琢磨シ聖域（イキ(伯)）ニ至リ夫子終身之思ヒヲナサシメント。豪傑ノ友而已集リテ講習討論日久ク、輔仁ノ益少ナカラザリケルニ、國主如何計リノ事ニヤ、吾儕等ニ藤樹ヲノキ侍ルベキトノ告ナリケレバ、民ト而否（ナ）云ニヤ及ブベキ、相共ニ切偲ノ情ヲ離レテ他邦ニ分散シヌ。嗚呼國主イカンカ成惑（マドヒ(伯)）ゾヤ。嗚呼國主イカンカ惑（マド(伯)）フ事ノアルヤ。聞說大唐ニハ家少シ有小里迄モ學校有テ、日々ニ心學ヲ講ジ、民ニ道ヲ敎ヘ苦ヲ除キ樂ミヲ與ヘ玉ヒ侍ルトコソ。嗚呼國主如何成惑ヒゾヤ。此惑（マド(伯)）ヒ國主一人ニ限ラズ、天下ニ皆侍ルナレバ一遍（ヒトヘ(記)）ニ圣學ノ世明カナラザル故也。圣道世ニ暗キ事ハ學ブ人之誠アラザル成ベシ。嗚呼吾儕等モ聖道ヲ學ブノ徒ニシテ未ダ誠有ザル成ベシ唯圣道之身ニ誠有ン事ヲ希フ而已。身ニ誠アル𪜈ハ、是ヨリ聖學モ世ニ明ラカニシテ、國主之惑（マド(伯)）ヘルモ氷之如クトケ侍リナン。吾儕等亦假令軀□（(不讀)或は軀殼?）千里ヲ隔ツトイフトモ、其心之相應ズル事寸法（方寸(伯)）ヲ容ンヤ。嗚呼只自反而身ニ誠有ン事ヲ希而已矣。

加世氏ノ子孫備陽ニ於テ大役ヲ勤メ加恩八百斛ニナル。谷川玄朴ハ五人之内ニテハナシ、儀左衞門事也。尤小川村之出生ナレドモ、親次郎右衞門ハ備陽侯ノ御分知之内松平石見侯ノ家臣タリ。勘定役ヲ相勤ム。然ルニ石見守者大坂陣之後其家退散而知行所御本家ニツク。依之玄朴ハ備州侯ニ抱ヘラル。先生之書翰ニ谷口（川(伯)）寅トアルハ玄朴ガ事也。亦谷川寅備陽エ行クニ餞別之詩、文集ニ見エタリ。是ニテ察スベシ。博學衆才故　闕白一條卿ノ政所ノ女佐ノ臣トナリ、此時ノ名ヲ儀左衞門ト云。先生之學術ヲ能受用ス。備陽侯エ仕ヘ壯年之時江戸三年詰ノ内ニ愛宕坂ノ邊ニ長野佐祐軒ト云神道學ノ達人アリ。㊀此人ニ神道之學ヲ傳受シ、在京ノ内御所司板倉内膳（正(伯)）守エモ御雇ヒアリ、夜々講釋ニ參上セラル。然ルニ神道學ノ達人ノ蚜ニ右衞ト云アリ。是ヲ養子ニス。（佐祐軒㊂編子ナキニ依テ(記・松二)）幾程ナクシテ佐祐軒卒ス。遺言ニ神道ノ學谷川子ニ傳授シ置タリ、此仁ニ學ブベシト有シ故、京都ヘ尋テ來リ、右傳受スル事三年ニ及ブ。且小川村ニ每歲九月十日神事ヲ執行フ事アリ。㊃永榮王之神事ト申ス。此故實ヲ知ル人ナシ。谷川子神道ノ學ニ達シタル故ニ末世絕轉セザル樣ニ繻珍ノ二表ヲ寄進セラル。郡中ニ比類ナキ神事ナリ。

㈠ 先哲像傳に「藤樹沒後門人三年の間心喪を勤めんとせしかども領主の許しなく各悲歎して晋々の請ひたらぬより許されざりしとて泣々其地を去りしとぞ。」といへり。　㈡ 此の詩今文集に見えず。而して豫方云云の詩あり。

㈢ 此人ニ、當さに此人ヨリ神道之學ヲ學習しに作るべきか。　㈣ 繼子、當さに嗣子に作るべし。

㈤ 今十月十日に行はる。松下氏第二本頭書に云。「松下氏按倭國軍記ニ云軍神ヲ勸請奉ル音ヲ和國ノ俗ニ時作ト申也。其伊々開布ト三重ニ音ヲ擧之ト。永榮王ノ神事ハ此ノカ又ハ別カ。」といへり。（紫水）

熊澤氏了介。名伯繼。字者助右衛門（小字左七郎（伯））。元和五己未年生洛五條。其先者尾州瀨邊人也。父者野尻喜（藤）兵衛（伯）三郎云。十六歳ニテ備陽侯ニ仕ヘ、官ヲ辭而寓江州桐原。寛永十八辛巳年秋八月往江西小川書院請受教。雖然藤樹先生固辭而不許拜謁。空而歸矣。冬十一月又往小川（江西（貫））。深慕之而不已。憑淵田氏家而經日久矣。於是藤樹先生感其深切之志、而許拜謁。直受學業矣。且遊藝而無常師。蔬食苦修甚勤。正保二乙酉年廿七歳、改名次郎八。依京極主膳吹擧、再仕備州大主。國政大革。慶安二己丑年、號助右衛門。從備侯、適於武州。侯伯太夫士（實錄大夫に作る。下之に傚へ。（紫水））慕其道。於是名輝于江府。　將軍家光公欲徵問道。然其未幾而公薨。時伯繼爲備陽士師。秩三千斛。食邑于蕃山。仍以蕃山爲氏。門人稱蕃山先生。三十九歳繇病辭備陽、居京洛。先生狩轉落巖谷傷手足。故辭武職。大守以其季子池田丹波守輝錄（伯）爲先生之養子。先生改名了介。居京而學神道雅樂。得其旨。公卿太夫從聞其道。寛文七丁未年四十九歳（蕃伯）遯居于城州鹿背山。先生有文武才。而名高。時京兆尹聆讒佞誣公卿多集不便于世之說。而感（京伯）乃介夫五十一歳住播州之明石。酒井雅樂頭板倉内膳正令先生移松平日向守之邑。先生家于太山寺之邊。（名伯）其軒曰息游。門人自是呼息游子。不名。延寶七己未年（六十一歳（伯））移和州矢田山。貞享四丁卯年六十九歳（秋（伯））八月仍大樹之命。移總州古河。冬十月上表武府。演政事。忤旨。乃禁錮。元錄（祿（松二））四辛未年秋八月十七日殞于古河。壽七十有三。以儒禮葬其地。先生學琵琶於小倉大納言實起卿。

笄、於藪大納言嗣孝卿。一日隱姓名、吹越天樂。笛。安部飛彈聽之曰。此音非啻人。心情之正。發音律之(伯)乃與道斃而止。識者以藤樹比周濂溪。以蕃山擬程伊川云。

右ノ通蕃山之實録ニ見エタリ。武府ニ上表シ、演政事ト云事アリ。和州和田山ニ有シ時廿一ヶ條之表文ヲ作テ、川中孫十郎丈ハ公儀之御目附衆ナレ𪜈、門弟タルニ依テ、遂ニ相談差上ラル。其時狩野備後侯御大老ニテ、隱者之身トシテ、公儀ノ政道ヲ不憚言語同斷之義ト其トガメニテ、古河(總州(伯))へ遷サルルト云事アリ。依之田中孫十郎モ目附役上ラレシ也。

淵源兵衛ハ奥州會津之人ニテ(會津藤樹學道統譜奥州仙臺之隱士に作る。(紫水))京都ニ學問執行シテ葭屋町ニ寓居アリ。先生之學術ヲ慕ヒ小川村へ侍テ來テ學業ヲ受用ス。先生淵子ニ示サルル處、致良知ノ學術能体認シ世ニ執行ナハバ天下ノ寶タルベシト示教セラルル事骨ズイニテツシ、先生物故ノ後葭屋町ニ祠堂ヲ建立シ、藤夫子ノ神主ヲ儲ケ、諸生ヲ招キ學ヲ講ジケレバ、同志モ多ク集會アリ、岡(伯)山先生ト門人嘆稱ス。文ニ曰、事繁キ世ノ人ノ習ヒトテ、我手傳ハザル事ヲバ等閑ニ思ヒナストカヤ。タトヘバ醫師之我藥リヲ服用セシムル内ハ、其病家ヲ大切ニ思ヒ入ルトイヘ𪜈、他之療治ト聞ヤ否ヤ、忽チ入魂變ジテ疎ソカニ成モテ行ガ如シ。古曰、上醫ハ世ヲ醫ス。中醫ハ人ヲ醫ス。下醫ハ病ヲ醫スト云。是ニ依テ考ルニ人皆能不思ノ故ニ謬マレルモノカ。

九衢ノ陰樓ニ藤樹先生之祠堂ヲ築キナサント欲スル事、下拙等兼而望ム所也。其故ハ神武ヨリ以來聞説ウキ事ノ品コソカワレ世ノ中ニ心安クテスム人モナク、皆苦海ニ沉ムトナン。是ヲ憐レミ是ヲ救ハント道義ヲ外ニ求ムルハ、恰モ大水ヲ手ニテフセグト云諺之如ク成ベシ。然ルニ江西藤樹之下ニ於テ始メテ其專ラ成教ヘ親切ナリトイヘ𪜈早ク沒シ玉ウテ不幸也。其後、末葉ノ諸生離散而興起アレ𪜈、毫髮之倚所有カ、時至ラザルカ、寸善尺魔タタリヲナス。我黨二三子、素ヨリ蒙昧ニシテ未熟ナレ𪜈、タガヒニ隔心ヲ忘レ、幸ニ九

衞。相遇テ切磋琢磨ヲ勵マシ先師ノ學域ヲ口ヅカラ告ント欲ス。若。志シ怠ラズンバ、後ノ君子ヲ俟得ル事モ有ベキヤ。併ラ吾儕𪜈如此。主意ヲバ察セズ、妄リニサミスル族モ有ベシ。良知之照ス處私ノ左右ダニ無ンバ、萬事何之憚ル處カ是有ン。嗚呼。惣ラクハ末。有道義於身而已矣。或人云。神武ヨリ以來初テ於藤樹下其教ヘ親切也ト有處何トヤランオホケナク覺フ。師トシ則トル處ヲ尊信アルハ、一段殊勝ナレ𪜈、畢竟我堂ノ佛尊トシト云。ノ如クニテ聞テ宜シカラズト云。答曰藤樹先生述作之物漢文ニテ全集アリ。孝學庸之註アリ。論語ノ註郷黨之註其外抜書ニ而科註アリ。亦假名書ノ物彼是引合セ熟讀アラバ此疑ヒ免カルベシ。近來ハ世上ニモ品々之書籍ヲ見ハシ代々之大賢スラサミスル族多シ。若。其類ニ見ナシタマワン事イト口惜。大賢ナドヲサミスル事ハ、何卒評判吟味モ有度事ナレ𪜈、吾人身ニアヅカラザル故ニカ、等閑ニ見ナスト見エタリ。何レノ書モ、善惡𪜈ニ熟讀ノ上批判アラバ、天下之大幸有ベシト有ノ處如何成故ニヤ。答テ曰、物ゴト批判明ラカ成ザル沙汰ニ非ル𪜊ハ、却而勝心荷擔ノ基ト成テ益ナシ。朱子曰。異端虛無寂滅之教。其高過於大學。而無實。此筆勢眼ヲ付ベシ。寂滅ノ教大學ニ過ルトアレバ、我儒ノ教ヘヨリ玄理ヲ論ズル事謂ズシテ分明也。而無實ト有處、是儒佛ノタガヒ也。朱子既ニ佛教之高キ事、大學ニ過ル域迄熟翫有之。今時異同ヲ爭ウ人其一端ヲモ勘辨ナク、他ヲ毀リ自ラ高ブル異見ニテハ歸服ナキ而已ニ非ズ、却テアザケリニアヘリ。和漢𪜈ニ、末書ヲモ熟讀ノ上、其勝劣ヲ辨フル𪜊ハ、善人ハ益々ススミ惡人者日々ニ退クベケレバ、扨天下之大幸ナラズヤ。今吾儕トモ尊信ヲナストコロモ、不吟味之類ニ思ヒナサレン事、是一ツノ憂也。如何程辨惑ヲナス𪜈、信仰ナキ人者猶アザケルベケレバ、是ヲ默止スモノ也。惟願ハ、右述作之物𪜈具サニ試ミテ、葦原ニ芝蘭ノ眞ヲ生ゼシ意味ヲ翫察有ン事ヲ希フノミ。

丙辰年秋ノ季朔。此地奉勸請

高千穂大明神。以綴野詩、抒卑志。誠恐誠惶。述卑懐、以進祝詞云爾。

淵万再拜。㊀

千秋万歳是時屯。孝徳一貫天地人。
日續光華無息道。照臨水穂
大明神。

日續ハ　天照太神之御姓之由、水穂ハ日本之惣名之由。學者（伯）立身天地間。惟出與處而已。則發出（松二）爲經綸、思以兼善天下。處則蘊爲康齊。思善其鄉、以先細民。未嘗無所事。々若徒輕肥蕩恣。虚生虚死耳。與草木同朽腐。是下流凡夫也。能無恥乎。今吾黨亦乾坤得意人也。是不思乎。嗚呼。願因
藤樹先師之徳化、討習講論。得輔仁益。以立必登聖域之志。全脱脚凡情、而精義入神而已。

㊀ 丙辰、延寶四年なり。藤樹先生歿後二十九年。

㊁ 淵万の名唯こゝに出づ。未だ詳かならず。（紫水）

藤樹先生曰、一人之農夫之勤務（松二）メト自身之作用ト二一（松二）般之由諸生ニ御示シ候ラヒツル、此義今ニ自得ナシ難成（松二）ク候。貴境ニテモ御試御尤ニ候。此中越氏發明ニ農夫ノ勤メ一日モ間斷候テハ其業怠タリテ。若加様ノ主意ニテモ可有之哉ト申事ニ候。依之考フルニ吾人今日之農業ノ勤メヲ怠タル而已ナラズ、秋實之米穀ヲバシタタカ納メ置キ、徒ラニ遣ヒ費ヤシ地頭殿エハ夥タシキ未進可有之候（伯）候ト存候。イツモ申ス通リ先生一座之議論不親切成件ハ、何トナク淀舟咄シニナリ。我等ハ年貢ヲハカリ申スベシトテオモヤエ御歸リ候ヒキ。是ヲ以テ察スルニ吾儕共毎日毎座未進而已ト恐レ多ク候。以上

九月十七日　　岡小子（淵氏ヵ）

諸　君　江

淵子東府ニ在住セシ時、

先生エ書通之オクニ、

蓬生(ヨモギフ)ニスマデタダヨウ我身カナ

ゴ(伯)。カミヲクラヒテムサシトゾ思フ。

先生ヨリ返事ノ時ニ、

ゴミ塵モイトエバムサシイトハズバ　子イニ(伯)。

濁リタル世モ皆隅田川。

一、伊勢國洞津東(藤(伯))。堂和泉侯之御内石河文助(石河文左衛門の誤(紫水))㊀定源儒士壯年之時京師ニ學問修行ノ時、岡山子之學術ヲ傳エ聞テ深ク慕フ。㊁岡山子之行狀ヲ見テ、日本ニ君子者有間ジト思ヒシニ此淵子コソ生身之君子哉トオモヒテ彌尊信不淺、㊂藤夫子之學術ヲ受用体認而專ラ其弟子ニ示教ス。㊃藤樹事行ト藤樹行狀トノ(年譜ト同書之(松二))二書(此二書(伯))ハ石河定源ノ發明ト云云。門人小川玄朔曰、石河氏ノ家本ニハ箇條多ク書記シ有ト云リ。依之洞津ニ藤樹先生之同志多シ。㊀石㊁慕フ㊂石㊃彌㊅先生、皆底本松下伯季の傍記により補ふ。

㊄ 大溝中村德通氏所藏藤樹先師御行狀古寫本表紙に「淵氏門弟鹽見永三より石河文助に傳所持之由にて寫之」とあれば行狀が定源の著にあらざること明かなり。藤樹事行とは如何なる書なるか、今傳はらず。伯季が年譜と同書之とせるはいかゞ、或は藤樹先生事狀を指せるものにや。石河文助は文左衛門の養父にして咸倫と稱す。岡山先生の門に學ぶ。(紫水)

一、二見新右衛門者奥州會津之人也。(奥州會津、伊勢山田に作るべし。委しくは藤樹學道統譜を參看すべし。(紫水))淵氏ノ任ニテ學業体認而、江戸大傳馬町ニ在住而學ヲ講ジ、諸生ニ示教ス。御旗本衆及諸國ノ士官傳承而同志多クアリ。二見(氏チ(伯))直養先生ト稱ス。(門人(伯))江戸荒神町下谷ニ藤樹先生之祠堂建立アリ。明倫堂ト號シ。同志集會ス。然ルニ三輪善藏希賢ヲ執齋先生ト

稱シ、此明倫堂ニ於テ學ヲ講ジ、毎日同志集會アリ。然ルニ執齋先生學所ヲ仕舞上京セラル。明倫堂ノ聖像表具一幅唐（恐らくは元の誤。紫水）李仲和筆也、狩野法眼永眞ノ外題並ソヘ書等アリ。文宣王聖廟圖一卷。朝鮮人之筆也。王文成公之眞像一幅。此肖像之事ハ三輪執齋子數年心ヲ盡シ先年石河土州侯長崎御奉行之節御賴ミアリ。周雪畫致ニ出來ニ候エ圧、冠服等ノ吟味得度不ニ相調ニ。其後細井因州侯長崎エ御越之節（折衛（伯））公儀大淸會典ノ御用ニテ唐山ヨリ召呼レ候擧人沈燮菴在留ニ付、段々吟味相調、長崎慶山ト申ス唐畫師之畫二幅出來、一幅ハ江戸下谷明倫堂ニ安置シ、一幅ハ寛保元（辛酉）年（有（記・春・松二））三月廿七日ニ小川村藤樹書院エ納マル。致良知ノ掛字一幅藤夫子之眞筆也。幷ニ金子拾兩相添ヘ古ノ通リ三輪執齋子ヨリ講堂エ奉納アリ。伊豫ノ儒士川田半太夫資深子小川村ヘ持參アリ。此川田氏ハ執齋子ノ門人ニテ藤樹ノ學業ヲ受用体認シテ而博學多才之儒者成故、大洲（大（伯））ノ郡主加藤侯エ儒官ニ召抱エラレ、伊豫國ニテ藤夫子ノ學術ヲ專ラ任ゼラル。諸生世擧（衍）ツテ惟命先生再誕之思ヒヲナシ慕フ（深ク（伯））事斜メナラズ。川田子講堂ヘ來リテ曰、藤夫子九歲ヨリ廿七歲迄（十九年ノ間之（頭註伯））、大洲ニ在住セラレ、其中ノ行狀ヲ諸士在町圧ニ普ク鑑ミニスト云リ。且大洲ニテノ發明ノ書籍詩歌之草稿書翰等ニ至ル迄モ家々ノ寶物トナリ大切ニスト云リ。去ニ依テ大主ヲ始メ士官ハ勿論在町之男女ニ至ル迄普ク尊信セズト云事ナシ女婦人都テ藤樹ノ講トテ神明之講ノ如ク毎月日ヲ極メテ會合而御德澤ヲ感喜ス。大守ニモ先生ノ教學（術（記・松二））ハ天下第一等。人間第一義。無ニ別事之可ニ做。無ニ別路可ニ走トアレバ此教ヲ能ク受用スル輩ハ國之爲家之爲身之爲是ニ勝ル事ナシトテ、領内之賤山カツ迄モ、先生之教エヲ可レ（ズ?）學ト有レ之故村々在々ヨリ川田氏ヲ招待スル事先後ヲ爭フト云々。誠ニ深切ナル事ナランヤ。且又川田資深子ヨリ先生之百年忌ノ說一冊假名文ナリ。（於豫州大洲（伯））止善書院明倫堂建立之時

王陽明藤夫子三輪執齋先生之三賢安置之祭文一冊漢文也。右ノ二書送ラレ講堂ニ奉納アリ。其外先生壯年ノ

時之書翰幷ニ詩歌モ深切成事モアリ。（世上流布ノ御書簡ニノリ不申御書ト祭文追加ニアリ（頭註伯））跡ヨリ可レ遣トノ書中來ル。又曰、先生豫州ニ在住シ玉フ。（時ノ（伯））屋敷アリ。其前ヲ過ル人士庶人ニ至ル迄敬禮ヲナシ往來スト云リ。（一唐李仲和筆也云々の脚註は編者の新に挿入したるものに非ずして底本そのまゝの形なり。（紫水））

藤樹先生尊像畫之儀享保十三（十四の誤（紫水））酉年六月十七日ニ勢州洞津藤堂（和泉守（記））侯ノ家臣玉置佐右衛門町奉行之時祠堂ヘ奉納アリ。（此箱ノ書付ニ辻子五郎左衛門所持ト有（記））小川玄蒴挨拶ニ依テナリ。玉置氏後ニ御用人トナリ知行千五百石ニナル。（加恩（記））元來。京葭屋町岡山（先生肖像ハ（伯））子爲ニ信仰ノ（信仰ノ（伯））母堂蘂松公ヘ談ジテ、御容躰ヲ吟味而（シテ）狩野某。畫（ニ（伯））三枚書セ一幅ハ尊信ノ爲土藏ニオサメ置キ、二幅ハ門弟之内エ送ラル。（其肖像ニハアラズ（伯））其内ナランヤ。（カ？）又ハ御旗本衆ノ内坂井信房子（元文五庚申年（伯）執齋ノ門人之（伯））於ニ東武ニ狩野友甫ヲ寓居ヘ招キ寫シ得ルノ畫二枚。内一幅著江戸下谷明倫堂ノ御肖像ノ畫、後ニ豫州之明倫堂ニ安置シ玉フ由。一幅ハ小川村祠堂ニ安置シ玉フ。此御肖像ナランヤ。（カ？）御容貌之冠巾ハ太乙神ヲ祭リ玉フ神衣服巾也。（深衣幅巾（頭註記））其御裝束ハ遺物ノ内ニ有リ。

與ニ池田氏ニ書。（四條略書之眞跡伏見米谷氏藏（伯）堀川（春・田））慶安元戊子（伯）筑州。之人也

道學之御志シ今程如何。定テ日々ニ厚ク。ナラル（マカリ（伯）可ニ罷成ニ（記））ベクト奉レ察候。私事深ク朱學ヲ信ジ、年久シク工ヲ用ヒ申シ候得モ、入德之効覺束ナク。候。（御座テ（伯））學術ニ疑ヒ出來憤リ開ケ難キ折節、天道之惠ミニヤ陽明全書（集（伯））ト申ス書渡リ買取熟讀仕。（候（記））得バ、拙子疑ノ如ク發明共御座候テ憤リ開ケ少（チト（伯））シ入德之欛柄手ニ入申ス樣ニ覺エ、一生之大幸言語道斷ニ候。（モシ（伯））此一助無ニ御座一候ハバ、此生ヲ空ク可レ仕ニト難レ有奉レ存候。面上ニ委御物語リ仕度ト而已存暮シ候。百年以前ニ王陽明ト申ス先覺出レ世、朱學ノ非ヲ指點シ、孔門嫡派之學術ヲ發明メサレ候。大學古本ヲ信ジ致知ノ知ヲ良知ト解シメサレ候。此發明ニ依テ開悟ノ樣ニ覺エ申候。夫ニ（就夫（記））付大學古本ヲ主トシテ今程抄ニ仕掛申シ候。若出來致シ候ハヾ其許エモ（元ヘ（伯））下シ可レ申覺悟ニ候。

一、當代世間之迷ヒヲ辨マエタル議論ヲ集メ翁問答ト題シ同志之提撕ニ仕候ヲ京ニテ盜ミ出シ板ニホリ掛申スヲ見付イロ／＼コトハリ仕リ板ヲ破リ申候。其故ハ前廉書申スモノニテ候ヘバ我等氣ニ入ザルトコロ數多御座候。書直シ可レ申覺悟ニゴザ候故ニテ、此故其許エモ不レ進候キ。破リ申ス板屋モ損マイリ候テ迷惑仕旨コトハリ申スニ付、女中方之勸戒ニト、迪吉錄ノ拔書ニ評判ヲ書タル書ヲ鑑艸ト題而前廉ヨリ御座候ヲ彼損之ツクノヒニ板行仕ラセ申候。未ダ京ニテハ廣ク賣不レ申候。御ナグサミニト一部送リ進候。御ランナサルベク候。故事ハ迪吉錄三綱行實ナド之拔書、評者鄙夫之愚案ニテ御座候。「板屋損マイリ候テ」一底本「板屋モ損マイリ候ヘハ」に作る。今伯季の訂筆によりて改む。（紫水）

一、御望ミノ碑遠慮仕ル事候テ相延申候。漸々ニ遠慮之事モ障リナク罷成候條、來來年底本來年の上去の頭書あり。記聞及び小川本皆去來年に作る。（紫水）ハ取立可レ申ト存候。左樣ニ御心得ナサルベク候。加程之事モ面上ニカタリ申度候。

一、今程興起之同志數多御座候テ日々令講論候。夫ニ付同志中興行候テ拙子屋敷ヲ買廣メ講會之書院ヲ立申スニ相極メ今程材木ナド調エ申候。私ニ建申學校ヲ書院ト申候。加樣ノ事ニ付一入御床シク存ル事ニ候。何卒ナサレ二三年之内ニ御上リ待存候云云。面上ニ申談候者虛世之苦惱ヲ御免カレ、太上之直樂自得可レ被レ成候ト存事ニ候。如何。　恐惶謹言（伯）三月十九日

此書翰之義書翰集ノ內ニ相見エズ。岡田季誠子ノ處ニ相殘リシヲ今爰ニ書加ル。亦曰祠堂之材木者熊野山近江國高島郡饗庭村の西部にあり。（紫水）ノ邊ニヒヘ谷ト云アリ、夫ヨリ出シトナン云々。

一、有贈赤羽子說出于文集遺稿（伯）

一、豫州ヨリ博市ト云座頭、先生ノ示敎ヲ希ヒ小川村エ尋テ來テ初メ之ホドハ同志中ニ書物ヲ習ヒ文字ヲ覺ル事サトキ者ニテ、一度聞事忘ルル事ナシ。古鄕之親族エ狀通ヲ書寸ニハ、自筆ナラデバ親類之案ンジモ

有トテ、左ノ手ヲ定規ト面狀ヲ書キ遣ハストナン。日ヲ經テ先生之示教ヲ受用（シテ）而后大洲エカヘリ、博市堂ト云講舍ヲ建テ專ラ諸生ニ講談ヲ□。（不讀（紫水）シ示教ス（記））フト云事アリ。

一、先生壯年之時、大洲ノ家中ニテ奉董（朋雀の意（紫水））ノ内ニ產婦ニ難產ノ人アリ。先生モ醫學ニ達シ玉フ故ニ其坐ニツラナリ玉フ時、怪（不怍（松二・記））カラズ鷄宵鳴シケレバ、家内親族多ク座ニナミイタル人々ケウヲサマシアキレハテ居タリシ時ニ、先生ノ曰鷄ガヨヒ鳴シタトノ玉ヒケレバ、家内モ座中モ先生之ヨヒ鳴トノ玉フト悅ビノ眉ヲ開キケレバ、產女モ彌〻勇ミ出來□（頓ナ（伯））テ恙ガナク出產シタルト云事アリ。

(一)ヨヒ鳴、善い鳴にて産兒のよい泣に通じて用ゐられしものならん。（紫水）

一、本朝孝子傳ニ曰

中江惟（コレ）命（ナガ）

中江與右衞門惟命者、近江國高嶋郡小川ト云處之人也ケリ。早ウコリ書（フミ）ヲヨム事ヲ好ミ、終ニ王子之學ヲ世ニオコセリ。母アリ。是ニ孝也。一年加藤氏伊豫國大洲ノ城ニ仕ヘテ母ヲ其處ニ向ヘ養ハントセリ。母ノ曰、婦人者御迎（サカヒ（伯））エヲ越ズト。ソキケ（コ（松二））。願ハクハ是ヲ守ラント。惟命逆ハズ、仕ヘヲ止（サシ）テ國ニ歸ラン乞エトリ。加藤氏其才ヲ惜ミテ免サレズ。惟命打歎キテ我不孝ナリトイヘド、錄（祿（松二））之爲ニツナガレテ母ニ定省ヲカカメヤトイヒテ文書（フミ）置テヒソカニノガレ小川エ（ニ（伯））隱レスンデ母之悅ビヲ得タリ。時ニ年二十七、寛永ソレ之年月ナリトゾ。

論ニ曰

或人問（フ）中江氏其門下ニ教ヘテ曰、自己ノ德性則是父母之天眞也。サレバ我性ヲ養フハ親ヲ養ウ謂レ也。孝是ヨリ大ヒナルハナシ。近クナレ事（ツ）マツルト、然ラザルトニ拘ハル事ナカレト。此語意母ノ爲ニ錄（祿（松二））ヲイナミ

テ歸リ養ハレケルト、相逆ケルガ如シ。イカン。曰、此人(伯)蓋オモエラク、性ヲ養ヒ、親ヲ養フ二ツ有ニ非ズ。ヨク性ヲ養ナヘバ(フ人(伯))イカデ親ニ薄カラント。サレバ此人者誠ニ彼ヲ二ツニセズ、身ト言バトソムクニ似テ實ハ逆カジ。是ヲ眞似ブ人ニ至リテハ思ヒタガヘテ彼浮屠ガ恩ヲ捨テ性ヲ見ン事ヲ求ムル方ニ流レ入ンガオソロシキ也。曰、其教ヘノ流、サルオソロシキ業アラバ、イカデ此書ニ此人ヲトレルヤ。曰、世ノ儒者口ニ者一日之養ヒ三公ニカヘズト說テ、身ハ遠ツ國ニ遊ビ、富ヲ求ムルニ心之イトマナクテ、歸リ養フ事ハ忘レハツルモ多カリ。是ヲモテ中江氏ヲ見レバ、孝子成事疑ヒナシ。既ニ是孝子也。イカデ此書ニ取ザラ舞。畢」

（附記）春日氏本・田谷氏本此の次に書翰集補遺贈ニ小島氏ニ一書を載す。編者は第二册四九一頁に誤つて唯志村竹涯老人の筆記に見ゆるのみと識せり。玆にその粗漏を謝す。（紫水）

或書云、熊澤氏始メテ先生ニ見ヘラレシ時、熊澤氏「皆人ノ――ト云レシヲ先生カヘシニ「チハヤブル神ノ社ハ月ナレヤ参ル心ノ内ニウツロフ。是レハ先生ノ末孫中江久風ト云人　物語トゾ。伯季云、久風ハ德岡氏之。

（松下氏第二本）

熊澤息游丈ノ哥ニ

皆人ノマイル社ニ神ハナシ
ココロノ底ニ神ヤマシマス。

先生之返リ事ニ

皆ヒトノマイル社ハ月ナレヤ（フシチガムヤシロノカミハイニ(伯)）
心ノスマバ神ヤ宿サン（水ノスメハウツロフィ(伯)）

備陽侯少將光政侯ヨリ繪讃ノ表具物ヲ仲樹拜領セラレ、沒後ニ遺物季重子常省先生なり。（紫水）ニ渡リケルニ御尋子有テ歌ヲ御ヨミ遊バシ玉ヒ、讃ニ御書ナサレ候テ季重子ヘ下サレ候由。

ナキ人ノ跡シタヘトハ書ザリキ
ヨソノ筆ダニ形見ナルラン

一、享保六辛丑年八月ニ京師ヨリ伊藤原伯元藏長胤弟平藏長準門人木邨源之進重繩來テ祠堂ヲ拜見ス。長胤詩ニ

江西書院聞名久。五十年前訓義方。今日好來絃誦地。古藤影掩舊茅堂。

一、同年先生之墳墓之圍垣成就、諸國ノ(伯)同志都而二百餘人助力アリ。惣代ト而京師ヨリ岡田以安・山田由元・木野自安・河合德右衞門・辻彦左衞門等來テ墳墓ヲ祭ル祝文アリ。

維

享保六年歲次辛丑九月戊戌越己丑朔二五日癸巳京師

諸生敢昭告ニ

藤樹先生靈。於戲。

先生希世之才德。勃起乎

（本朝孝子傳所載）

本朝開千載不傳之道學。極精粹。德至大。育庶生。遠啓後學。

先生沒後迄今七十有餘年矣。墳墓在于小川焉。（北隔城方五步計）邑中同志拜掃不懈。惟恐蕃籬不固而不能永世境界不侵。墳塋莫窮也。京師諸生慨然思。

先生之遺德蒙於後昆。欲墟墓四面繞以石垣。而爲不朽之圖。於是廣告四方同志諭之。四方同志聽之感服。戮力助之。小川

（本朝孝子傳所載）

同志尸其事，指揮甚務。自夏至秋，石工竣事。於是京師諸生數輩來詣墓所，致清酌之奠。謹告其始末。尙饗。

岡田以安詩

江西學術四方鳴，贊舍今存道尙明，講習綿々禮容盛，遺風千歳育諸生。

河合德右衛門

味カラヌ道ノシルベニアフミヂヤ
タエヌ小川ノ流レヲゾクム。

辻　彦左衛門　憲尙

惠ミアル影タカ嶋ノ秋ノ月
ヨロヅ世掛テ照マサルラン。

河合　桐葉

味カラヌ月ノ光ニアフミヂヤ
德高シマノ跡ヲ見ル公。

清　信

時イタリ今日ゾ願ヒモアフミナル
榮フル宿ノナガキメグミヲ。（藤伯）

從京師之同志中年頭之書中ノ文。

改年之御慶無盡期申納候。彌貴境各樣御清健ニ御迎歲可被成ト珍重ニ存候。定而年ト共ニ新タニ御勇

進可被成候條被命聞可被下候。爰許　御祠堂御安康ニ次ニ面々無異義超年仕候。今十一日不相變於會所讀書始メ致集會候。遠情安思召可被下候。隨而一友之云。吾人胎ヲ下テ以來、謬リテ是非之素定ヲ心ノ主トシ習ヒ來リ、天下之事ニ於テ有適有莫、純粹自然之發ヲ蔽塞ス。是則心之詩所候意ニ始リテ、好惡之執滯ニ至レモ、不省察ソノ熟所之故熊心所ト成テ發見スルヲ良知之靈照ト成ス。所謂就意裏面求誠ナリ。譬ヘバ如泥水洗硯。故ニ學者當下不動于欲等之件々ヲ掲ゲ、毫髮之學欲モ不副時、唯有之儘ノ心氣之象ヲ以中和之本領ヲ垂示ス。實ニ先師千百年之蒙ヲ開キ玉フ。切近之妙漸ト難有新タニ感通仕候。如何思召候哉、永春御格正奉希候由ニ御座候。恐惶謹言。

正月十一日

山田山元。山田玄慶。大田玄悅。大田玄軒。小野左助。河合德右衞門。石川道安。安目又四郎。辻彥左衞門。寺井與三兵衞。林大隅守。大隅織部。野條忠右衞門。金原仙龍。小倉瀾平。村田勘下。丹羽熊右衞門。岡田以安。後藤右兵衞尉。土山右近府生。古津友眞。淵半平。大隅長門守。土山出雲守。

㈠　安目、諸本多くは安田に作る。（紫水）

又翌年

改曆御慶不可有際限、千里同風目出度申納候。彌以貴境御安鎭ニ諸君無御別條御越年被遊候哉。此元省々無相變儀致迎年候。久敷以書狀モ不申通御無音ニ打過候。無間斷御會モ被爲成御憤發之御事ニ察存候。爰許ニテモ十二三人者月並六七會宛ケダイナク交修相勸メ相養ヒ罷リ有候。マコトニ翁問答ニハ第一心之安樂、鑑草ニハ身安心樂ト其御趣意於和解未曾有之御開發ト、旦夕難奉存候。中國東國筋ニテモ瀾被爲會信候。蒙友追々出來仕、每度書音致候。殊勝成御實志モ承候而偏ニ　師恩之德澤ト扨々絕言語

辱奉存候。(其記ニハ伯)春中何卒二三輩者御庿參仕度ト(伯)奉存罷在候。左候ハヾ遂閑話可蒙御示教候。年始御祝詞爲可申上先々如斯御座候。恐惶謹言。

正月十一日　　連名右ニ同ジ

藤夫子八月廿五日祭壇ニテ一人ヅヽ讀退江戸同志之中ニ

奉獻

藤樹先生靈前。　　笑柳軒樸鷗　百拜。

先師實學古今論。　日域初開衆妙門。
相々傳々吾儕等。(承伯)　碎身粉骨奈斯恩。

欽奉呈。　　小子宗印　稽首九拜。

先師大人藤樹先生祭壇。昭鑒　尙饗。

繼往開來藤樹賢。　德風不盡萬斯年。
今朝當拜敢無隱。　遺像儼然香案前。

奉祭　　高友　會九拜。

先師藤樹。賦小律以聊代生芻一束奠
尙饗。

望風志士拜高堂。　告奠英靈蘋菜芳。
堪仰先生餘此德。　已垂緒統遍扶桑。

奉獻　　花澤清右衛門　并拜(伯)

先師藤樹先生祭壇。

天地ノ御タマノ花ノ。コノ(記)カミナレバ

手向ニ何ノヌサヲトラマシ。

二見忠昵　拜上

奉レ献二

先師祭壇一。

愚ナル身ニモ惠ミト思ハル、

タエナル道ノタ子ヲノコシテ。

雜誌陽明學第九五號二見直養先生後裔八王子住二見榮之助氏來翰に直養は二男にしてその長兄を忠昵といひ外宮の神官となると。而して忠昵なる人なし。暫く疑を存す。(紫水)

野澤貞寛　抃拜

奉レ献(檜伯)

先師祭。

道ナリト思ヒタカヒシアヤウサヲ

マドヒト知ルハ惠ミナリケリ。

享保戊戌年仲秋廿五日高備子ノ亭ニシテ

藤樹先生ノ御祭リノ有シ序、尊像ヲ拜シ奉リテ唯御敎エノ尊トク辱ナサニ我愚ヲモ哥ノ道ヲ知ラザルヲモ

忘レ侍リテ

御敎ヘノ其道筋ハカギリナシ

大嶋六左衞門常行　上

アヲゲバ高クシタウ計リゾ。

右ノ通東武ノ同志ヨリ書附來ル(伯)

常省先生ノ讀玉フ三綱(綱(松二))領ノ歌ニ

明　明　德

拂エタヽ心ニカヽルムラ雲ヲ

オノヅカラスム有明ノ月。

親　民

自ラ見レバ草木モアハレナリ

人ニウトキハオノレカラコソ。

止ニ於至善ニ

一筋ニ木トノコヽロニカヘリツヽ

安キイナ(ナ(伯))リニ身ヲ宿シテン。

竹

呉竹ノ世ノフシブシモ程〳〵ニ

直キヤ道ノカガミナルラン。

寶

直ホナル(スナホ(松二))心ノ梶ヤタカラブ子

世ワタルセトノ波モサハラジ。

道

孝親。慈子。忠君。仁民。敬兄。愛弟。信友。此天性之良能。天下之達道也。人而不能踐之。人欲蔽塞其心也。若能自反愼獨。則知仁勇達德。發見流行從道。猶火就燥。水流濕(一)而已矣。

(一) 濕或は溼の字の誤なるべし。(紫水)

善

積善之家。必有餘慶。積不善之家。必有餘殃。小人以小善爲無益而不爲也。(二)故不能積善而成名。以小惡爲無傷而不去也。故惡積而不可掩。罪大而不可解。

(二) 全文は易の文言傳並下繫辭傳の辭にして唯「故不能積善而成名」の八字を挿入せるのみ。(紫水)

義

字從善從我。故自我心之眞實上發而爲善。謂之義。若能如此。則事父母則爲孝。事君則爲忠。事兄則爲弟。交朋友則爲信。居家而家齊。無事而不成焉。於戲。美也哉。

履霜。堅氷至。

微少之惡念。不去之。遂爲殺逆之基。一善之念頭奉持之。積至賢者之域。一念寔安危禍福機軸。猶百尺之假山積一簣而成。至(三)千丈堅堤之自蟻穴潰。豈忽之哉。何不勉勵哉。

(三) 至の字は或は成の字に屬して讀むべきか。然らずば當に之自二字の間に在るべきが如し。(紫水)

右明明德親民止於至善竹寶之歌五首。道善義履霜堅氷至ト之解四者常省先生之發明也。

意(四)　常省先生御歌也

シヅカナル心アラネバ年月ヲアハレアナ憂ト過シツル哉。

(四)　意以下歌一首底本松下伯季の補筆に係る。松下氏第二本また然り。(紫水)

此一卷之書之事予壯年之トキヨリ聞傳シ事共ヲ覺エ書ニ書留シ事共也。離レ〳〵ニ有シヲ后世ニ至リ捨ラン事ヲ歎カシク思ヒシ儘、今合卷ニ相認也。粗

藤夫子之德行者、賤キ筆ニハ書盡シ難キ事也。相殘リシ御事共ハ、亦末ノ卷ニ書顯ハスベシ。唯耻ラクハ誤字片言有ン事、是老ヌヒノ致ス處也。御勘辨ヲ希而已。

寶曆三癸酉年林鐘望日　　野叟仲昌　花押

志村周助丈に授之

藤樹先生別傳　解題並凡例

【解題】一、本書の著者は恐らくは大洲地方の人なるべし。中に中川善兵衛良時の文字あり。是れ時良の誤にして時良は「安永七年九月死行年六十六」なることその系譜に詳かなれば、本書の成れる年代も略〻想像するを得べし。今底本を本會顧問陽明學會主幹正堂東敬治翁の秘藏本に採りたり。而してその原本は大洲地方より傳來せるものなることは卷末に見ゆる文政十二乙亥歳仲夏云々なる記載によりて明瞭なり。

一、本書の記事中の多くは、大洲舊記（寛政年間大洲領喜多郡中折谷村庄屋富永彦三郎編述）續近世叢語（角田九華著弘化二年乙巳晩秋開刻）近世大儒列傳（内藤聚燦著）藤樹中江先生傳（甘雨亭叢書孝經啓蒙弘化紀元中秋安中城主板倉勝明子赫撰）の四書に載せらる。而して大洲舊記を除く外は、何れも刊行本として弘く世に行はれたり。

一、本書の記事は主として大洲地方の口碑傳說に據れるものならん。惜むらくは、二三の記述に於て首肯し難きものあり。特に讀者の注意を望む。

【凡例】一、引用書中藤樹中江先生傳と稱するは甘雨亭叢書中の孝經啓蒙の首に收むるところにして、藤樹先生補傳第三十七項引用するところの愛媛縣喜多郡久米村矢野眞枝氏所藏の古寫本藤樹先生傳とはまた別種のものなり。

一、底本もと脚註なし。今新に之を加ふ。

一、（附）馬術十一ヶ條は愛媛縣喜多郡大洲村下井小太郎氏藏有の軸物より材料を取りたるものにして、研究の資料として、編者の新に加へたるものなり。

大正十四乙丑年八月一日　　小川喜代藏謹識

（再刊追記）

一、本書の著者は大洲に明倫堂を建設し、藤樹先生の學德を全藩に普及せしめし雄琴川田資深の長子たる資哲（明倫堂を司る。寛政四年七十四歳沒）か、又は資哲の次子資政（明倫堂を司る。文化十年五十四歳沒）ならん。

一、本書を謄寫して江戸佐藤一齋に贈りし保積正厚は大洲藩士にして、勝三郎又は莆助と稱し、十六歳（文化三年）にして藩主泰濟侯の近習役となり、十五人扶持百石を給せらる。學を好み幼より明倫堂に學び、出府に當りては佐藤一齋に教を受けたり。本書を謄寫せる時は二十五歳にて、後累進して徒士支配御用人となりたり。近藤信氏報。（[illegible]陰）

藤樹先生別傳

先生諱ハ原、字ハ惟命、氏ハ中江、稱ス与右衛門ト。講堂ニ有リ藤樹。因テ藤樹先生ト云。又自不能叟ト稱ス。（不能叟の號諸書に見えず。編者往年伊豫國郡中町に某氏を訪ひ傳說藤樹先生眞蹟と稱するものを一覽したるに孝の大字並に解にして不能子書とありたり。按するに本書の記事蓋しここに基けるものなるべし。）近江國高島郡小川村之人也。父諱ハ吉次、稱ス德右衛門ト。母ハ北川氏、慶長十三戊申三月七日ニ生ル。慶安元年戊子八月廿五日終ル。行年四十一歳。元和二年丙辰先生九歳祖父吉長ニ養レテ豫州大洲ニ移リ、太守出羽守泰興公ニ仕フ。寛永十一年甲戌先生廿七歳冬十月母ノ養ヒノ爲ニ辭シ仕、小川ニ歸ル。其時ノ願書今ニ中村与右衛門家ニ（後裔中村四郎太夫と稱す。今既に亡し。）所持ス。先生爲リ人幼ニシテ穎悟ナリ。曹溪院ニ行テ、院主天梁和尚ニ隨テ文字ヲ習フ。或時和尚ニ問テ曰、釋迦生レテ指シ天指シ地曰、天上天下唯我獨尊ト云。實ニ如キ此ヤ否ヤ。若シ實ニ如キ此ナラバ、釋迦ハ天下万世ノ敖慢ノ人ト云ベシ。和尚何ゾ祇スル之。和尚叱シテ曰、是小兒ノ知ル處ニ非ズト。（大洲舊記續近世叢語藤樹中江先生傳、近世大儒列傳等に見ゆ。）或時僧徒ニ告ゲテ曰、今夜必ズ盜賊來ラント、僧徒曰、何以テ知ル之。先生曰、先キニ人來ル、我是ヲ以テ知ルト。果シテ其夜來レリ。（「有時、人來るを見て今夜賊が來るべし」に作る。（大洲舊記））又或時隣國ヨリ人ヲ害セシ者來ル。跡ヨリ人來テ是ヲ留ンコトヲ請フ。先生聞テ父（祖父に作るべし。）ニ告ゲテ曰、先ヅ早ク諸方ノ船手ニ下知シテ出船ヲ留メヨト。果シテ船中ニ於テ得タリ之。幼ニシテ其智如シ此。悉ク擧ルニ不暇アラ。（昔時ハ隣ノ御領ヨリ出奔致候者有レ之時ハ、皆申來リテ御領内中嚴命有テ捕ヘ出ス事定式ノ法ナリ。多クハ武士ノ出奔一家内連共也。年ノ内ニハ二度モ三度モ申來ル事有レ之。扨此處ニ御藏有、中江德右衛門（一本作ニ德左衛門一）ト云武士被レ命折節欠落人ノ事申來ル。如何セント云玉フヲ、其孫幼少ニテ傍ニ聞玉ヒテ、先ヅ出船ヲ差止玉ヘト云玉フ。誠モト船止シ玉フニ、ハタシテ其船ニ其人有テ其兒子ノ智發ヲ恐ルトイヘリ。是則成長ニ隨ヒテ後藤樹先生ト號。諸人敬ヒ大儒トナリ玉フニ依リ、世ノ人近江聖人ト稱シケリ。書モ亦能ク出來、陽明學ノ日本ニテノ大祖ニシテ扶桑ニ名高シ。（大洲舊記））

長ジテ人ノ棊ヲ圍ムヲ見テ棊ハサトスベシ。先キニ石ヲ置ク者、必ズ勝タン。但シ我一ツノ疑アリ、是如何

カスルト。是ヲ聞カバ所謂劫ナリ。於是答テ曰、是ヲ劫ト云。必一手隔テテ是ヲ取ル、敵是ヲ免サザレバ夫レヲ捨テテ是ヲ得ト。先生卽チ疑解ケテ碁ハ我知レリト。人是ヲ圍マンコトヲ乞フ。于時先生一兩日考之其求メニ因ツテ圍ム。初ヨリ是ニ敵スルモノナシ。其後先生是ヲ嗜マズ。今ニ大洲城中廣間ニアル處ノ碁盤是也。中江藤樹少年觀圍棋。始聞劫說乃言、是非先下子則勝之理乎。我既了解。其人請圍之。藤樹曰、一日二日尙可考究。既而圍棋、無敵焉。城中昔稱國手川田某驗數曰、陸象山同日之談（續近世叢語）大儒列傳亦載之。大同小異。下井小太郎翁曰、城中藏有法、圍棋碁可疑。馬術モ亦如此。其道ヲ學ブトモ馬場ヘ出乘玉ヘルコトナシ。或時、人ノ求ニ因テ乘玉ヘルニ常ニ乘ル人ニ劣ルコトナシ。馬術十一ケ條ノ目錄ヲ先生自ラ書玉ヘル眞蹟アリ。先生ノ屋敷ハ鐵砲町ヘ入處今ノ石河孫左衛門屋敷ノ内也。先生内ニアリト雖モ、太守馬場ヘ出玉フトテ門前ヲ通リ玉ヘバ、必衣服ヲ正ウシテ跪坐セリ。其謙厚如此。先生小川ニ歸リテ後一日對客。客退イテ後門人問テ曰、先生今日對客少シク屈スル處アルガ如シ。先生曰、然ラント。夫ヨリシテ後祿重ク位高キ人ニ謁スト云ドモ、少モ屈ムコトナシ。唯禮容厚キノミナリト。又或時先生外ヨリ歸レリ。門内ニ一僧イメリ。其容貌不凡ヲ見テ盤珪禪師ナルコトヲ知リ、門人ヲシテ磁器ニ水ヲ盛ラシメテ、彼ノ僧ノ前ニ行イテ是ヲ地ニコボサシム。禪師曰、我彼ニ問フ事ナシ。彼何ゾ我ニ問フコトアラント云テ歸レリ。中江藤樹隱居近江國小川邑。嘗自外歸家。有僧立門前。云云。（續近世叢語）大儒列傳亦載之。大同小異。太守泰興公、盤珪ヲ尊信ス。其本鎗術ノ故ヲ以テ也。嘗テ傳フ、太守鎗ヲ出セバ珪珠數ヲ以テ是ヲ拂テ曰、心動クト。太守心術ヲ問フ。珪曰、太守中江ノ賢ナルヲ知ラズシテ、終ニ不用之。何ゾ心術ヲ知ラント。先生ノ致仕ハ太守ノ御年若キ比ナリ。後悔テ命ジテ先生ヲ召サシム。先生拜シテ對テ曰、母ノ爲ニ不得止シテ辭セリ。我今サラ母ヲ如何セン、死セバ必歸リテ仕ヘント。而シテ先生母公ニ先ツテ死セリ。大洲侯嘗問心術於盤珪禪師。盤珪對曰、閣下不知中江原之賢。而無用是非。人君之器也。而學心術何益。大洲侯聞盤珪言心懟之。遣使近江召藤樹。藤樹辭曰、昔者臣之所以上書而行者、不得已也。臣早喪父及養父、獨有母而已矣。母亦無它子。惟臣爲親。義不可棄母而出也。母終天年之後、乃可應尊命矣。惜先母而已。（續近世叢語）藤樹中江先生傳マタ之ヲ載ス。景浦直孝氏曰、按ズルニ續日本高僧傳ニ出羽守加藤泰興、盤珪ヲ大洲ニ請シタルハ明暦二年ニシテ先生ノ歿後實ニ九年ナ經タリ。然ルニ大洲侯盤珪ノ言ニ動カサレテ先生ヲ召シタリトハ信ズベカラズト。

先生常ニ痰咳ヲ憂フ。病發スレバ多ク枕ヲ重テ臥ス。愈ルニ隨テ一ツヽ去レリ。先生將レ死。病革ルノ時母公來テ病ヲ問フ。先生曰、少快シト。自ラ其枕ヲ一ツ去レリ。母公枕ノ減ズルヲ見テ、然バヤガテ快カラント云ヒテソコヲ去レリ。暫アリテ先生卽チ終リ玉ヒヌ。カク簀ヲ易ルニ及テモ、母ノ意ヲ慰メンコトヲ忘レ玉ハズ。先生ノ孝心誠ニ難有コトニ非ズヤ。川田雄琴敎曰、先生之於レ孝至レ死不レ變、可レ謂ニ至孝一矣。(續近世叢語)大儒列傳亦載レ之。大同小異。

先生存命ノ日小川ニ於テ書ヲ講ジ切磋ノ會ヲナセリ。諸國其德ヲ慕フテ、大洲ヨリモ君ノ許ヲ得テ行キ道ヲ學ビシ徒彼此アリ。先生書簡文集ニモ見エタリ。其歸省ノ折カラ賜ハリシ文章、其子孫今ニ持傳へ、中川善兵エ良時時良の誤なり。時良は貞良の玄孫にして安永七年九月死。行年六十六(中川氏系譜)等ノ家是ヲ秘藏ス。嘗テ聞ク先生會坐ニ臨メル時、モシ其坐ニ浮躁ノ士アリテ雜話ニ及ベバ、必ズ曰、淀喘ニナリヌ、我所レ不レ欲也。我ハ年貢ヲ計ルベシトテ、席ヲ退テ或ハ書ニ對シ、或ハ靜坐シ玉ヘリト。諸生是ニ因テ大ニ耻テ志ヲ發セリトナン。所レ謂淀喘シトハ淀舟喘シト云フコトナリ。乘合ヒ諸國ノ人ナレバ、思ヒ思ヒノ喘シニテ志一ナラズ。律分レテハ益ナケレバ也。年貢ヲハカルトハ先生ヲモヘラク我未ダ學業不レ修、心地不レ樂、百姓ノ年貢ヲ怠タルガ如シ。故ニ是ヲ計ラント也。岡山先生書簡下參照是先生會坐ノ戒ナリ。カヤウノ詞モ自ラ傳フル人希也。今ハ失フタルガ如クナレバコヽニ併セ及セリ。

文化十二乙亥歲仲夏。豫州大洲之藩保積正厚。謄寫而贈ニ于佐藤先生一。

(附) 馬術十一ケ條

一、手のつゞきの事

上あく　　中かう　　下やう

一、たづなかまゑ三六寸の事
一、五はうのくちの事
一、四めむのくらの事
一、あぶみふみやうの事同くらはさみどころの事
一、くらしたの事
一、くらのおきやうの事
一、はゑびしめやうの事
一、おもがひしつけやうの事
一、ぶものたづなの事
一、さゝなみの事

以　上

大坪流十一ヶ條

あ　と　書

中江藤樹先生眞蹟大坪流馬術十一箇條の後に記す。

此大坪流馬術十一箇條ハ　藤樹先生の眞蹟也。久しく大野某の家に傳來れり。こゝに小林君馬のみちにくはしきのみならず、先生の餘訓を慕ふのあまり、此眞蹟を得てん事を欲し、これをこふてやまず。大野氏其志の淺からざるに感じ、つゐにこれを與ふ。こゝにおゐて小林君予をして其梗槩を記し、子孫に傳へん事をおもふ。君の子孫よく孝ならば、馬のみちに怠らず、且先生の餘德を慕ひて君の志にそむく事なかれ。これを筆してもつて贈る。

寛延三年庚午八月朔　川　田　資　深　拜　書

藤樹先生補傳　解題並凡例

一、本卷は藤樹先生年譜・同行狀・同事狀・同別傳・同行狀聞傳等に洩れたる事項にして、諸書に散見せる各種の史實を始めとし、或は古文書に見ゆるもの、或は口碑傳說に存するもの、並に編者多年の研究に由りて發見し考證したる事項を網羅し、以て先生の事蹟をして一層明瞭ならしめん爲に輯錄したるものなり。

一、本卷は諸書に散見せる諸種の資料につき、或は古人の論評を附記し、或は編者の私見を添へて讀者の參考に供したり。據るところの書は凡そ左の如し。

集義和書　集義和書顯非寫本　岡山先生書簡寫本　岡山先生示敎錄寫本
同追加寫本　席上一珍寫本　先哲叢談　淡窓紀聞
翁草　閑散餘錄　東遊記　先哲像傳
史籍集覽　餘姚學苑寫本　藤樹先生傳寫本　等

一、本卷中口碑傳說等を揭げたるもの數件あり。惟ふに口碑傳說はその性質上確實なるものにあらざれば、隨つて猥りに之を傳ふることの輕卒なることを知る。然れども史乘に洩れたるものにして、僅かに口碑に存するものもなきにあらず。或は史實上より見て價値極めて少しとするも、その由りて來る所以を考ふるときは、何れも先生に對する景慕の情の發露に外ならざれば、此の點より觀察して頗る興味あることなり。殊に村井弦齋の著「近江聖人」に顯はれたる鞁膏藥の傳說の如きは、普

く人口に膾炙するところのものなれば、その原據に就いて一言を費すも、敢て無用の事にあらざるべし。

一、巻首掲ぐるところの古文書は愛媛縣新谷町黒田義太郎氏の所藏にして、編者は大正十二年十一月愛媛縣立大洲中學校長上田光曦並大洲町立大洲尋常高等小學校長中野雅夫兩氏の案内にて新谷町河内字十郎氏の宅にて拜見することを得て筆寫したるものなり。大洲歴代の郡奉行については「大洲秘錄」に記載せらるれども、先生の郡奉行たりしことを載せず。今此の古文書によりて漸くその缺を補ふことを得たり。

一、藤樹先生の事蹟は舊大洲藩並大溝分部藩に關すること多きを以て、特に加藤分部兩家の系圖を掲げたり。加藤家の系圖は「大洲秘錄」に載するものにつきて摘錄し、該書に見えざる後世のものは大洲町大字推森足達儀國氏に請ひて調査報告を得たるものを載す。該系譜中尊稱たる公の字を用ひたるは「大洲秘錄」の用例に從へり。末尾泰秋泰通二氏に子の字を付したるは子爵たるを意味す。但し「大洲秘錄」より摘錄せるものといへども、不備なるものあるときは（　）を附して足達氏の調査に係るものを掲げたり。分部家の系譜は大溝町大字勝野笠井劼氏の所報に依れり。

一、巻末中江氏系圖の作製に當り、嫡流中江家傳來の系譜は故ありて今得るに道なきを以て、已むなく左の方法に從ひたり。

　順位に關する記載は行狀聞傳及び編者藏有即ち「小川本中江氏系圖」並に滋賀縣高島郡教育會編纂「藤樹先生」所載の「中江氏系譜」等に據りたり。履歴に關する記事は行狀聞傳の分は之を省略し、藤樹

書院祠堂に奉祀せる神位の陷中並外箱の記事及び前掲編者藏有本並に「藤樹先生」の二書末裔中江勝氏報告その他に採り一々その出處を明記し且つ異同あるものについては特に注意を加へたり。編者藏有本は明治十三年養父勝次郎自ら對馬に到りし時、末裔中江淸壽氏傳來の系譜を寫取りたるものにして、「藤樹先生」所載の分は當時滋賀縣高島郡新儀尋常高等小學校に在職中たりし末裔中江勝氏が自家の系譜を寫取りて編者に提供せるものにつき補正を加へたるものにしていづれも正確なる資料に屬す。

一、中江家累代の折紙の内八通は大阪市西區江の子島在住中江つるゑ子の所藏に係る。此はもと對州中江家嫡流の家に傳來せるものなりしが、中江淸壽氏が明治十三年藤樹先生の墳墓に參拜したる時支族中江つるゑ子の父彥次郎の猶は小川村に在りし時之を托し置きたるものなりとは淸壽翁の自ら編者に語りしところなり。此の折紙は編者大正十三年六月中江つるゑ子をその宅に訪ひ、自ら之を寫し取りたるものなり。

一、中江氏系圖中(藤)の略符を用ひたるは、前記「藤樹先生」を斥す。

一、引用文中往々片假名平假名混用のものあれども、すべて原本のまゝ忠實に之に從ひ敢て修正を加へず。

一、引用文中誤字その他必要の場合に(まゝ)又は(マヽ)と傍記せるは「原本のまゝ」といふを意味す。

一、本卷以下門弟子並研究者傳・常省先生文集・同續編・門弟子詩文集・景慕詩文集並卷之十七倭歌三補遺卷之二十倭書三補遺の數篇は編者の新に輯錄したるところなり。編者淺學菲才固よりその器に非ずと

いへども、巽軒井上博士・惺軒高瀨博士を始め陽明學會主幹正堂東敬治翁・西園寺源透・渡邊頼母・足達儀國其の他幾多の諸君子の有力なる資料の供給と懇切なる指導とを吝まれざりしと加藤主任の嚴正なる補正とによりて、漸くその任務を果すことを得たり。玆に併せ錄して感謝の意を表す。

昭和四己巳年一月廿五日

小川喜代藏謹識

藤樹先生全集　卷之四十三

藤樹先生補傳

一、郡奉行に拔擢せらる

（古文書）

成野村相定免之事

高三百拾五石四斗九升一合　田畠共
内四拾三石七斗九升　先荒中川成共
殘而
田方高八拾七石七斗三合　毛付
畑方高百八拾四石　毛付
定米四拾五石五斗三升
夫米四石貳斗六升四合
定大豆七拾四石四斗
夫大豆八石三斗五升六合
定胡广壹石貳斗六升貳合
右之通相極ル但口米之義者
可爲此外者也依如件
寛永三年
寅九月十三日

加藤傳左衞門　花押
武田久三衞　花押
澤口半介
中江与右エ門　花押
庄や弥二郎との
惣百姓中

（備　考）

右古文書は伊豫國新谷町黒田義太郎氏所藏。是に由つて先生が早く郡奉行に拔擢せられたるを知る。黒田義太郎氏はもと成野村舊里正の家にして弥二郎といへるは其先なり。成野村は今は喜多郡大川村大字成野なり。

㈠「センアレチャウ、カハナリトモ」と讀む。要は先々の荒地と土地が流失して川となりたる分を控除するの意なり。

㈡ 大米とは附加税のこと。（松山市伊豫史談會西園寺源透氏報）

㈢ 寛永三年先生年齒十九。〔上記は郡奉行の連判と見ての説なり　近藤信氏は武田以下三人は加役なるべしとす。（藤陰）〕

大洲藤樹會長　下井小太郎謹談

郡奉行は牧民官にして税務をも司り、民事刑事をも兼ねたる重職にして、人材を要することを以て世襲することなく、特に拔擢して任用したるものなり。大洲加藤月窓公（泰興）英明にして豪膽なり。自ら政務を宰裁し、人材を登庸して弊政を釐革し、孜々として怠らず。この時に當り先生年齒僅弱冠に達せざるに拔擢せられてその職にあり。以て君公の如何に先生を信用せられたるかは想像するに足るべしと。

逸　　話

中江與右衞門郡奉行勤められし頃、公事訴訟有レ之。其辭を飾り言を巧にして可レ申候共、兼而は覺悟し出候得共、與右衞門樣に顔を合せ候と虚言は不レ被レ申」と、百姓共申候を今の若荷谷村庄屋清五右衞門祖父覺へ居り咄し候を、清五右衞門父助太夫と申者承り候て咄し候となり。（永世錢高）

（備　考）

右永世錢高といへるは斷片にして前掲古文書と共に黒田義太郎氏の所有なりしに今は散逸せりといふ。惜しむべし。今大正五年九月大洲藤樹會發行藤樹先生銅像除幕式記事に依る。

二、修養法

一、朋友問て云、江西の學者感應篇をよみ、又誦經の威儀を勤めたりときく、世人是を笑ふ者あり、まことなるか。
答云、まことなり。細工のしならひにはけづりぞこなひおほく、馬の乗習には度々落るがごとし。聖賢傳受の心法の師なくて、中江氏初てさまぐ＼に心をねりて試られき。心法の受用にたよりあるべきことは、まづ取て受用してたすけとせり。ふたつのこと全くよしとはおもはれざりしかど、志のきどくなる所あるは誦經の威儀なり。凡習の過悪をこまかに記したるものは感應篇なり。爰を以てしばらく用られたり。㊀紙捻して一日の過をむすび善をなしたることもありき。皆細工初にて事はよからざりしかども、志はよかりしかば悔べからず云云。（集義和書卷十。七丁）

㊀ 按ずるに岡山先生示教録卷七、二十六丁に、此時先師大豆之御試シ物語有の語あり。恐らくはこゝにいへる紙捻りと同じく一日一善の修業を積めるをいへるなるべし。（紫水）

三、淵岡山學派の著書に散見せる逸話十一條

一、昔、藤樹先生孝經・感應編を毎日御讀被成しに始は御聲を高く御讀被成しが、後には御聲も聞へず、御口の内にて被遊しなり。或時被仰けるは、聲の高ければ外へ向氣味有と云云。（中村氏本岡山先生書簡下八丁）

一、先生曰、先師中庸御講談の時、予註を㊀覺て御講釋を聞んと思ひ書を見て居ければ、註釋を見ること不可なりとの玉ふ。其心註をして講釋を聞ては紛紜の弊ありと思召相なり。扨京の者一兩輩聞書せんと筆を染て居たり。先師集註に御構なく眞直に御講釋被遊候故、聞書する事ならず。（岡山先生示教録卷二、十四丁）

㊀ 編者曰、「註を」の下、「して」は「みて」の誤寫なるべし。

一、先師萬木と云所へ請待有て大學を講じたまい候。其節我等を始て諸同志存候は、此邊の鄕人此學を尊信

すべき端なれば、先師此講習はなんへ敷御發明など可被仰と存候處に、只何となく常底に不相替三綱領を講ぜられ候云云。（中村氏本岡山先生書簡下、九丁）

㈢萬木とは藤樹書院所在地の近邑東万木のことにして西万木には非ざるべし。前者は今滋賀縣高島郡青柳村大字青柳の内なり。（紫水）

一、十一日は昔先師講習はじめとて其規式ありつる。後の君子を希□今も又其格法ばかりなれども、聊か是を取行こと有。（同上　十八丁）

㈢古來藤樹書院に於ては、一月十一日鏡開きて祭典を行ひ來れり。此は講習始めの儀式の殘りたるものならん。（紫水）

一、先生曰、中川氏莊子をみて、見がそれたるを先師曰、權左が見のそれたるは我子の虎之助に後れたるよりも憂はゝしきと仰せられ候。是以考るに君子の天下を思召ㇳは父子の親みよりも尙ふかし。如此いへば不及料簡やうなれども、萬々世まで思召故なるべし。此に眼をつけて合點すべし。眼のつけ處也。（岡山先生示教錄卷二、六丁）

㈣㈤こゝに先生と云へるは淵岡山を斥し、先師とは岡山より藤樹先生を呼べる語なり。以下之に倣へ。（紫水）

一、先生曰、兼て先師大學も中庸も經一章にて濟ㇳとの玉へり。論語は聖賢の言行を記したるものなれば、無用の事はなけれども、今日上に不合ㇳありとて、諸生に書ぬかせ講ぜられしなり云云。（同上十四丁）

一、先生曰、先師は御試みの事あれば、容易に不被仰出。廿日も卅日も能御試み、事によりては一兩月、半年も御かゝり、疾と熟して後被仰出樣に見へ玉ふ。我等などは觸發のことあれば、其儘云出すなり。元來物忘れするゆへ、未忘内に物語して諸生へ聞せ預け置心もあればなり。（同上　三十二丁）

一、師曰、我昔し急事有りて小川より武州へ下る時、先師のたまひけるは、先伊勢へ參宮して可下となり。是面白事也。此御趣向思ふに冥加を思召ての事なるべし。冥加を以ては先樣思ひの外首尾能きものなりとある事なるべし。（同上　卷五、十五丁）

一、貞享丙寅夏富松子咄しに、受用する者は取廻しをせねば位を失ふもの也。昔年先師船中にて御逗留被成

風を御待候事有二御座一しとなり。旅にては常の宿にてさへ滯留は安からず。まして波の音・梶の聲思ひやるだに淋しき物なるに、御取廻しには、我宿に居る時は人の尋ねを受、人のかたへ音信文のとりやり、人世萬事に片時も隙きを得ざるに、幸なる處へ來て、心上の障りもなくて受用する事はかたじけなく思召となり。（同上　追加三十一丁）

一、先師嘗て小川の邑の神明に詣して、㊀天下太平。大道興隆。時和年豐。民安物阜。家皆孝子。國皆忠臣。と願ひ玉ひて、更に門戶を立るに意なし。只世界中の人の善に向を志願とせり。故に海內此の學を傳るもの此心を受て、深く孔孟の道を信じて、程朱・陽明皆吾道の先覺なりといへり。㊁（席上一珍八丁）

㊀五十嵐養庵先生語類文集上卷養庵先生答二郭內諸君一書に岡山先生は每朝天下泰平。大道興隆。民安物阜。と御祈禱被ㇾ成候事御存知之通也云々。此の文和翰にも見ゆ。といへり。以て岡山の思想の本づくところを知るに足るべし。

㊁席上一珍については卷之四十六會津學道統譜參看。（紫水）

一、客問曰、藤樹はいかなる人ぞ。答曰、昔一人あり。先師に問曰、吾輩甚尊信して聖人の地位にいたれりとす。師の心には如何。藤樹曰、㊂もし大唐にありて論せば上品にはいたらず。又下品にもあらず。只中品なるものと知べし。由ㇾ此觀ㇾ之まづ賢人と云べし。昔先師作二琴曲一曰、「生死利害はまぼろし浮雲なれや。ほめそしり得も失も朝三暮四。放下せよ、凡心。」と今此曲を唱て其人品を知べし。（同上　二七丁）

㊂漢書古今人表には古今の人物を上上、上中、上下以下下下に至る九品に分ちたり。（紫水）

四、聰明の人

藤樹先生は博學も諸人に勝れたる人なり。氣質聰明にして無ㇾ師に文開けたり。先生十三の時禪寺へ手習ひに上られたり。其の時禪僧に四書の素讀を習へり。禪僧のことなれば確と不ㇾ知あらまし習はれたり。其後再び師に就かず。儒書字書を聚め獨學せられたり。十七八歲の時文開け理通じ、廿四五歲の時までに十三經は云ふに不ㇾ及諸子百家の書又は軍書・醫書まで悉く見盡し、一字一理の疑ひなきが如し。如ㇾ此の聰明の氣質の

人ゆへ聖人一貫の學脈を學得し、日本聖學の開基となれり。（集義和書顯非）。

㊀　顯非は直門の人西川季格の作るところなり。

五、盜賊を化す

藤樹篤信王文成致知之學、先躬行、後文詞。每引四民、訓諭之、人無賢愚、皆服其德、莫不興起善。今世諸儒絕無近似者。嘗夜自郊外歸、有賊數人、突從林中出、遮路曰、客解橐以供我飲酒。藤樹乃熟視、舉錢二百授之。賊拔刀叱曰、所以求客者、豈止是而已哉。速卸衣裳及佩刀、否則不須多言。藤樹神色不變曰、姑緩之、吾慮其授與不授孰是。乃瞑目叉手。少頃曰、吾慮之、假戰而不利、無輕卸以與汝之理。卽撫刀起且曰、戰者必先以姓名告。我近江人中江與右衞門也。於是賊大驚、投刀羅拜、曰、儂鄉雖五尺童子、莫不知藤樹先生爲聖人者。吾黨雖攘攫爲活、豈得施之聖人哉。願先生矜其不知而宥之。藤樹曰、人誰無過、過而能改、善孰大焉。乃說之以知行合一之理、則賊感泣、遂率其黨、爲良民（先哲叢談卷二）

廣瀨淡窓曰、叢談に藤樹仁齋各、盜難に遇ひし事を記せり。都て斯様の事柄は作り話多きものなり。此の二つも大方こしらへ事なるべし。然れども亦二子の學風心術の同じからざるを知りて作りたるものなり。藤樹は心學なり。仁齋は古學なり。心學は心安する處を行ふ、天下をも大なりとせず。一身をも小なりとせず。唯理のあるところ卽ち心の安する處なり。士庶人たる者盜賊に遇ひて衣類貨財を奪はれたらんには天子の天下を人に奪はれ、諸侯の國を人に攻め取られたると同じ事なり。羞惡の心ある者の忍ぶべき事に非らず。是藤樹の刀を拔て戰ふ所以なり。古學の見を以て云はば、道は聖人天下を治むる爲に設け玉ひしなり。天下國家は大にして一身は小なり。一身の節を伸べんとして一家の存亡を顧みず。一家を正さんとして國天下の利害を顧みざるは權を知らざるなり。是仁齋が衣を脫て賊に與ふる所以なり。是を以て人の行事は見識に本づく事を知るべし。假令作り話にせよ。心を付置べきことなり。（淡窓紀聞）

六、神祇組

嘗來江戶、一日過街市、適大小神祇組。（組猶黨也、當時都下士、多好豪俠。共結爲黨、其所帶大小二刀、柄屛鏤以神祇二字、故人呼號大小神祇組、或云、其結黨盟之大小神祇。故云爾。）飮於

酒樓嘗見藤樹相謂曰。彼以聖人得稱者也。聖人其如吾黨何。試唾其面辱之。直來逼。聲色並厲曰。鈍誠得非世所謂今之聖人而胡沽虛名以誣罔人邪。戟手向之。藤樹徐陳姓名曰。少長于近江農家。以其少識字見推爲里中童蒙師耳。安得若君之言乎。其容貌言吐感動人。神祇組不覺節折曰。吾黨過矣吾黨過矣。願先生宥無禮之罪。從今敬受教於門下。㈠或人謂藤樹未嘗來江戸。姑錄口碑俟後考。（先哲叢談卷二）

㈠ 先哲叢談の著者が其の註記に云へるが如く、先生は江戸に行かれたることなし。此の說恐らくは事實に非ざるべし。（紫水）

七、溢者を諭す

久世大和守領下にて或時溢者㈡人を過ち白刃を振て明家に取籠るに仍て、捕手の者其家を圍むと雖、渠元來したゝか者故に、迂濶に捉兼て、唯其邊に屯して誰有りて踏込まん氣勢もなく時移る處に、領内に藤樹先生（中井與右衛門）寓して在けるが、折節其邊を通り合せ、此の由を聞て捕手に向ひて云く、我此の者に理害を說て伏せしめんに許してんやと。捕手諾す。藤樹則佩刀を解て無刀に成り彼家へつと入る。其の氣平和なり。溢者の殺氣忽ち是れが爲に拆けて立向ふ事を不得。暫く在て如何教諭しけん。彼者白刃を鞘にして藤樹と伴ひ表へ出る。藤樹捕手に向ひ此の者既に歸降する上は穴賢、强議の擧動あるべからずといふ。捕手點頭して渠を請取るに、彼者自得の上尋常に繩にかゝる。是れ藤樹の德の及ぼす處なり。（翁草）

翁草可可主人洲書。明和九年うの花月
六十三叟（餘姚學苑）

㈡ 溢者とはあばれものと讀むべきか。中井は中江の誤なり。此の後、享和元年刻群書一覽並倭板書籍考等誤りて中井となすもの少なからず。（紫水）〔溢者はあふれものと讀むべし。（春城）〕

八、轎夫を化す

藤樹は、もと近江の人也。京師葭屋町一條邊に今に其宅地あり。ある時竹轎に乘て江州より京に到る。其

道中にて竹橋に乘ながら轎夫に向て性善・良知・良能の旨を說話せられければ、心なき轎夫も落涙〆悅びしとなん。實德の物を感動せしむる此の如きに至る。賞歎に堪たり。（閑散餘錄松下伯秀聞見錄に據る）

㊂ 起筆のところ大儒列傳には南川維遷日に作る。按するに先生の別宅京都に在りたりとの事頗る疑はし。恐らくは、岡山先生の學館を斥せるものならんか。されど岡山先生の學館は延寶二年の創立にして先生の歿後實に二十七年なり。委しくは北川親懿翁雜記抄に見えたり。（紫水）

九、熊澤蕃山の入門

熊澤先生は藤樹先生の門人なれど、其の功蹟をいへばいふべき所も少からず。されども其人も今時は得難しとぞ思はる。此人藤樹先生に從はれし初めを尋ぬるに、其頃加賀の飛脚金子貳百兩を預り持て京に登るに、江州河原市より輕尻の馬をやとひ、榎木の宿に泊る。馬かたは河原市へ歸り馬のすそを洗はんと鞍を解きしに、鞍の下より財布一つ出でたり。取上げて見れば金貳百兩あり。馬かた大きに驚き、今の飛脚の取忘れたるにこそと思へば、其儘榎木に走り行き、飛脚の泊れる宿に至り、對面し委敷尋ね問に、相違なければ其金を取出し返しけるに、飛脚は死したる者のよみがへりたる心地して悅びのあまり、行李より別の金子十五兩を取出し馬かたにあたへ「もし此貳百兩なくば我一命を失ふのみならず、親兄弟迄も重き罪に至らん。さればそこの高恩中々言葉のいひ盡すべきにあらねども、先當座の御禮迄に送り奉る。」と、淚を流し悅ぶに、馬方大に驚きし顏色にて「そなたの金をそなたに取納め給ふに何の禮といふことあるべき。」とて手にだに取らず。色々にこしらへいへどもさらに受けずして歸らんとする處、やむことを得ず、十兩とへらし、五兩となし、三兩となし、段々へらして、終には金貳歩となし「せめて是斗は我心の悅びなれば、受け玉ふべし。左なくては我心もすみ申さず。今宵もいねがたし。」と理を盡し詞を盡しいふにぞ、「此金を受け申程ならば貳百兩をも留め置き申べし。かくかへし申からには聊にても謝禮を受るは我心にあらず。さりとて餘儀なくのたまへば、さらば鳥目貳百文を玉はるべし。是は今夜やすむべき所を是迄追ひかけ來れる賃錢也。是は我取るべき錢なれば申請べし。」といひて二百文にて酒を買ひ、其の家の人にふるまひ、我も醉程のみて歸らんと

す。飛脚も感に堪へかね、「さるにてもそこはいかなる人にておはす。」と問ふに、「名ある者にあらず。又何一つ知れる者にあらず。只我在所の近所に小川村といふ所あり。此村に与右衞門といふ人おはして、夜ごとに講尺（講釋）といふことあり。某も折ふし行きて聞侍りしに、「親には孝をつくすべし。主人は大切にする者之。人の物は取らぬもの之。無理非道は行ふべからず。」などいふ事常々語り玉ふにより、「今日の金子も我物にあらざれば取るべき理なしと心得し迄のことなり。」といひすてゝ歸りぬ。飛脚はそれより京へ登りいつもの宿に至り、「扨も此度は辛き命いきのびて各方にも對面することとなりぬ。」とて有りし次第を委はしく語るに、折ふし其家の裏に熊澤治郎八は田舍よりのぼり居て學文修業最中の事なりしが、此物語を聞て、其人こそ誠の儒といふものなりとて、其翌日すぐに江州に到り、小川村を尋ねて、隨從を願はれしに、人に教申べき程の學德なしとてさらに隨從をゆるし玉はず。熊澤ひたすらに願ひて二日の間藤樹の門にたゝずみて歸らず。藤樹の老母是を氣の毒がりよしや先内へ入れ申せよとありし故、いなみがたくて内へ入れ、つひに師弟の契約をせられしよし。其後藤樹を備前より招き玉ひしに、其身は病身なりと堅く辭し、門人熊澤といふもの有、御役にも立つべき者なりとて、熊澤を出されけり。（松下伯季筆「藤樹先生 熊澤先生 蕃山先生 聞見錄」所載の東遊記に據る）

（附記）隣邑新儀村鄕土誌に左の記事あり。

中西又左衞門　（口碑）

寬永中河原市村の人（今の新儀村大字安井川）にして里正を勤む。當時中江藤樹先生方へ屢々出入す。或時加賀の三度飛脚（大名の公金を京都へ持ち行く飛脚を云ふ）を乘せ馬方として、（當時河原市村は西近江路の宿驛にして、此在所に馬を飼ふもの五六戸あり。飼主は義務として日割を以て馬を出し公用に服する習慣なりしなり。又左衞門亦飼馬あるを以て出勤せしなり。）當河原市驛より滋賀郡小松驛まで送り、歸宅して行水の爲め馬具を下さんとせしに、財布一つ出でたり。取上げて見れば金貳百兩あり。又左衞門大に驚き今の飛脚の取り忘れたるにこそとて、卽夜小松に追ひ行きしが、宿の都合にや木戸驛（一說に榎木驛に作る）に漸く宿泊所を探り得て對面し委細を問ふに云々。

（一）滋賀郡和邇村大字今宿の小字に榎木といふところあり。西近江路と山城街道との交叉點に榎の老樹一本あり。此の地古昔宿場のありしところにして、近江路に沿ひ岸岡某といへるあり。古來羽織屋と稱して旅人宿を營み居れり。口碑に飛脚の宿りしは此の家なりといへり。されど今岸岡某につきて聞くも何等傳ふるところなし。（紫水）

一〇、口碑　鞁藥の話に就いて

村井弦齋著「近江聖人」は明治二十五年十月を以て世に出でたり。記事全く小說にして史實としては更に取るべきところなしといへども、輕快の筆を振ひて能く先生の爲人を畫出せるは頗る多となすに足る。中にいふ先生幼時母を懷うて止まず。浪士中田長閑齋を新谷に訪ひ鞁の靈藥一貝を兵馬倥偬の間に得て單身近江に歸り、之を母に獻じたりと。特に此の一節人をして覺えず淚を催さしむるものあり、最も人口に膾炙するところにして終に小學校初年級の修身科敎材として採用せらるゝ向もあるに至れり。されば往々史實の有無を問合はさるゝこともあり。編者はかゝる質問に逢ふ每に小說的記事に過ぎざる旨を以てせり。偶〻大正十二年秋大洲に遊びし時、同地には古來よりその傳說ありて、新谷にはその靈藥を賣れる家もありたりとのことなりき。次いで風早郡（今溫泉郡河野村大字柳原、別項參照）の舊蹟に至りし時、圖らずも沼田某より先生十二歲の時單身近江に歸れりとの口碑の存することを聞き、また同地にては祖父德左衞門氏を先生の叔父と傳來れることなど全く村井氏の近江聖人中の記事と吻合するを知るに至り、編者は著者が以上二者の傳說を按排構想せるものにあらずやと考へ、書を以て村井翁に質疑したりしも、答書を得る能はざりき。是に於て新谷町河内字十郎翁にその調査を依賴したりしに、大要左の如き報告を得るに至れり。

新谷は分封當時新に設置せられたる城下にして、先生の幼時鞁藥を得んが爲、中田長閑齋を訪はれしといふは、恐らくは今の古町とて現在の中樞地より西に川を隔てゝ二三十戸散在せる所ならん。こゝに紅屋利三郎といへる舊家あり。宿屋兼藥業の農家にして看板をも出し居たりとのことなれども、今はその家もなし云々と。

要するに鞁藥の一條史實として何等根據を有するものにあらずといへども、「近江聖人」の著者が兩地に存する口碑に基きて新に構想せるものなることは否むべからざるところとす。

一一、口碑　過を謝す

愛媛縣大洲藤樹會々長下井小太郎翁曰く、小林某は大洲藩大坪流馬術師範の家にして、世々左の一話を傳ふ。

藤樹先生一日小林某に向つて曰く、馬は別に學ばずとも馭することを得べし。某曰く、然らず。その術を得ざれば自由に馭することは能はず。先生曰く、否、必ず馭することを得べし。某曰く、然らば試みに乘り給ふべしと。先生直ちに馬に乘りけるが、果して馭すること能はず。馬は擅に路傍の草を食ひ荒せり。是に於て先生馬より下りてその失言を謝せりといふ。

一二、口碑　恭敬

前記下井小太郎翁曰く、口碑に月窓公は毎月一日恒例として必ず八幡宮へ御社參ありけるが、藤樹先生の住せる鐵砲町は其の通路に當りたれば、高く呼はる叫びの聲は遠くより能く聞えたり。先生行列の近づくと見るや、𧘕𧘔を着して門前に出で、慇懃に禮を盡せりと。また曰く、先生のこの態度に對し藩公は却つて喜ばざるの色あり。蓋し當時先生專ら朱子學を學び、聖賢の遺法を墨守しければ、其の格法に拘泥するの迹、自然に顯はれて終に公の忌むところとなりしならんといふ。

中江與右衛門は名高き者也。鐵砲町今の村上治郎兵衛屋敷に居ける由、殿樣門前を御通りの時は早晩にても上下を着し門前に罷出居けりと。（新知錄）

編者按ずるに行狀に「幼稚の時より穎敏人に越え謹厚も亦他に異なり。群兒と嬉戲するの間、郡主或は其門を過り玉へば、先生内庭室中にいますといへども、必ず跪拜し拜敬をなす。」といひ、また會津本年譜に八歳小川に在る時の事とすといへり。されば是れ先生幼時よりの行ひにして強ち朱子學專攻の結果とのみ見るべからざるものならん。

新知錄と稱する者、百方之を索むれども得ず。今大洲藤樹會發行藤樹先生銅像除幕式記事より轉載せり。

一三、口碑　酒を賣る

藤樹書院所藏先生遺品中に古備前燒酒壺破片並に下り藤紋付布簾二枚あり。編者曰、布簾といふこと古來の傳説なれども神明を祭れる時の戸帳と思ふ方が如し。傳云ふ、先生大洲より歸るや一時酒を賣りて口を糊せり。年譜參照當時使用せるもの即ち是なりと。先生酒を賣るや、必ず今日は如何なる仕事をなしたるかと問ひ、その仕事の難易によりて酒量を斟酌せりと。又云ふ、先生會所に於て經を講ずる間は壚に當りて酒を賣る者なきを以て、里人は隨意に布簾を潜り、自ら所用の量を汲み、その價を置きて去るを例としたり。或時面識なき人來りて酒を買ひ、價を拂はず、又名をも告げずして立去れり。先生乃ち賣上帳に左の一首を記せり。

ごんづわらじに蒲脛巾、知らぬお方に

酒三升、しかもその日は加茂祭。

幾程もなくその人倉皇として自ら來りて、その過失を謝したりといふ。當時大溝に饗庭傳兵衞といへる釀造家ありたり。先生は此の家の酒を賣れるなり。同家に酒に關する先生の眞蹟ありたりといへども、今傳はらず。またその家も今は絶えたり。

（附記）

大溝に俗謠あり。

銅黄・筒開・長濱屋

池田屋庄右衞門でんこ〳〵。

銅黄屋は上原利右衞門といひ、筒開屋は馬場忠右衞門といふ。馬場忠右衞門は當時饅頭屋を業とし、くらべ饅頭とて名高かりき。口碑に藤樹先生も時々立寄り遊び給へることもありしと。此の家に藤樹先生の眞蹟ありしも、今は散逸せり。長濱屋は前記饗庭傳兵衞のことにして、釀造家なりしなり。此の三家は當時大溝城下に於ける町人の舊家なりしといふ。（大溝町大字勝野馬場松太郎氏談話）

一四、口碑　分部伊賀守に諷す

滋賀縣師範學校教諭田中虎三郎氏曰く、口碑に大溝藩主分部伊賀守當時英明の聲あり。嘗て江戸にありけ

る時、諸侯伯頻りに語り且つ質すに藤樹先生の事を以てす。侯痛く賢者の領內にあるを知ざりしを恥ぢ、その國に歸るや、禮を厚うして先生を召す。先生固辭して應せず。侍臣を派して促すこと再三、遂に日をトして謁見す。侯大に喜び、治具を設けて之を迎ふ。時に老臣等甚だ憚ばず。蓋しその禮遇の厚きに過ぐるあるを以てなり。かくて先生到りけるに、欵待頗る厚く、終日歡を盡して夜に入れり。先生拜辭し邸を去らんとして玄關を下るや、醉歩或は蹣跚たりしか、侯、急に輿を命せしむ。侍臣等言を左右に托し、對ふるに輿なきを以てす。侯曰く、予が乘輿を出せと。侍臣等復た拒むを得ず。遂に侯の輿を以て先生を送りて小川村に抵らしむ。是に於て左右大に驚き、始めて先生の常人にあらざるを知る。川田剛著年譜正保三年の條下に是年大溝侯延見先生接遇有禮といへるは卽ち此の間の消息を洩せるものなりといふ。

（附記）編者明治三十年九月二十五日藤樹先生二百五十年祭の執行せられし際、時の大溝小學校長田中虎三郎氏が同地に於ける古老の談なりとて物語れるを聞き、極めて面白く感じたり。今その大要を綴り且つ同氏の校正を經てこゝに出しぬ。固より口碑に過ぎざれども、またその湮滅せんことを恐れて茲に附す。讀者之を諒せよ。

一五、口碑　奇蹟

藤樹書院玄關敷臺を距ること約二間半隣地との境界に沿ひて一奇石あり。傳へ云ふ、藤樹先生折々此の石に撒水して唐土に火事ありといへりと。蓋し寓意のあることなるべし。兒童走卒といへども、今尙相戒めてその石上に腰を下し又は足を觸るゝ等の事をなさず。

一六、口碑　舊講堂の壁下地

故老の物語に我等幼き頃舊講堂にて遊びしことありしに、處々壁落ちて下地の見えたるところもありしが普通なれば割り竹を藁繩にて卷付くるものなるに、講堂はさにあらず。葭の幹を紙捻にて纏へるを見たれば子供心にも先生の門人達は多くは武士の子なれば、繩なふことに慣れざればにや、かく紙捻にて作りしなる

べしと語りあひきといへり。

一七、口碑警句

支族中江八十八の家に古來左の眞蹟を傳へたりといへども、今や散逸して唯口碑に存するのみ。

朝寢すべからず。長坐すべからず。大食は命の取越。

一八、藤樹先生大洲辭去に關する異說に就いて

大洲地方に古來左の傳說あり。

藤樹先生の大洲を去れるは藩主月窓公の篤く僧盤珪を尊信せるを以て先生心平なる能はざりしに由ると。

沙門直契撰續日本高僧傳卷五に據るに、盤珪の請せられて大洲に入りしは、明曆二年にして、先生既に歿して九年を經過せり。また盤珪は元祿六癸酉年七十二歲を以て逝けり。されば先生の大洲を去りし寬永十一年は僅かに十三歲の幼童に過ぎず。しかも尙得度以前の事に屬せり。されば何れの方面より觀察するも史實に合致せざること斯くの如し。その虛說たるや固より論を俟たざるところとす。

（附記）本論は愛媛縣立松山高等女學校敎諭景浦直孝氏の「伊豫に於ける中江藤樹の敎化」（敎育時論一〇八二）に依れり。玆に之を謝す。（紫水）

一九、藤樹先生大洲辭任の事情について

大洲藤樹會々長下井小太郎翁曰く、先生の辭去せられし當時にあつては表面上固より新谷藩臣にして辭任の書も佃家老宛にし新谷侯への御取成を懇請せるも、分封早々未だ新谷へも移られず。且つ侯未だ若年なれば、政務の實際はすべて月窓公の裁量に待ちしなり。月窓公は英明豪膽の君主にして能く賢才を登用し、孜々として改革を斷行せり。故に柔弱用ふるに足らざるものゝ如きものあれば、一旦旨に忤ふものあるときは直ちに切腹を申付けらるゝの有樣なりき。先生かゝる君主の下にあつて許可を待た

ずして去る、その決心の堅きを知るべし。而して先生直ちに小川村に歸らず、京都に滯留せるは固より追手の來るべきを豫期せるなり。然るに侯之を不問に付せられたるは特別寬大の處置にして、深く先生の心事を察せるものといふべし。先生の辭去については、之を藩の事情に考へて物議ありたるものとせざるべからず。されど大洲の子弟相率ゐて近江に至り、先生に從學せるのみならず、侯また之を默許せるによりて考ふれば藩士と先生との間、敢て何等の問題もあらざりしや明瞭なりとす。

二〇、先生の雅號に就いて

先生の嘿軒と號せることは年譜に詳かなれば、今茲に贅せず。顧軒の號は行狀聞傳に先生歿後門人の祠堂を退く時の文に「扶桑にして顧軒の門下こそ云云。」といひ、また門人赤羽長の作れる詩の序に「幸受上帝之眷命而得侍於顧軒先生首經講筵之末云云。」といへるもあり。藤樹書院祠堂の神位櫝面に先生姓中江、諱原、字惟命、號顧軒。と明記せり。按ずるに書經に「顧諟天之明命。」と云へる語に據れるなるべし。然るに先哲叢談一たび願軒となしゝより、世間流布の書多くは之を襲用すといへども、恐らくは草書によりて誤れるものなるべし。其の他先哲像傳・大儒列傳等の書西江の號を揭げたれども確證なし。惟ふに常省子嘗て姓名を江西文内といへることあれば、或は終に逆倒して先生の號に誤用するに至りしものならんか。また別傳に不能叟といへり。編者大正十二年十月伊豫國に遊び郡中町に某氏を訪ひ傳說藤樹先生眞筆を一覽したるに不能子書とあり。別傳の記事或は之に基づけるなるべし。今暫らく疑を存す。また人名辭書に天君の號を載せたるものあり、是恐くは何人かゞ翁問答序文を讀誤りて私かに作れるものなるべし。何となれば翁問答は著者が志學の年より切磋琢磨を勵ませども開悟の自得及びがたきにより、明哲の人もがなと思へる折から隣里に天君とて逸民とおぼしき老翁のありけると聞き、之を訪ひしに門下の俊秀に體充といへる人ありて常に論議して止まざりしを傍らより聞きて之を書きつけたる體にあやなして作れるものにして、天君の說けるところは卽ち先生自ら說く所に相違なきも、たとひ假託にもせよ、先生自ら天君を以て自任するが如き不遜の態度を取れる

ものにあらざることは、その序文を熟讀するものゝ容易に首肯するところなるべし。

㊀ 本全集卷之四十七門弟子詩文集參照。

二一、近江聖人の稱號に就いて

〔[illegible]一藤樹研究「[illegible]」第六號末尾小川委員の此の記述訂正に關する陳述參照。一[illegible]一〕

藤樹先生を以て近江聖人と稱することの起原を稽ふるに、門下の諸子にありては、既に竊かに聖人を以て呼びしものありしこと雜著所載「席上一珍」の示すところの如し。其の他神明を以て先生を目し、或は絕無僅有の君子といひ、或は扶桑古今の一君子または藤夫子を以て稱するの外、先哲叢談の記事の如きものあり。叢談に逸話あり。一は先生江戸に在りて神祇組に侮辱せらるゝ場面にして、惡罵嘲笑の語なりとす。一は先生郊外にありて賊に遭ふの場面にして、賊悔悟の餘りに發したる嗟嘆の語なり。是に由りて之を觀れば先生の神格門弟子の瞻仰に値したるものありしと共に、其の德化既に鄙俚に喧傳せられ、田夫野人尙聖人を以て目したるの一證左となすべし。然れども此の兩者は史實として疑ふべきものとす。その近江聖人を以て稱するに至りしは何時頃なりしか詳かならざるものありといへども、文章にあらはれしは實に「斯文源流」を以て嚆矢とす。此の書は室鳩巢の門人河口子深の著にして、先生の歿後凡そ一百年に出づ。惟ふに先生の學徒に在りては我が堂の係尊しといふが如くにて開て宜しからずとし、行狀聞傳滿を引いて發せず、飽くまで謙讓の態度を强持せるにも拘らず、終に異學者の筆を假りて名を成すに至れるなり。明治三十年九月廿五日杉浦重剛翁の藤樹先生を祭る文に曰く、「聖之所以爲聖。古今東西蓋一其揆。已爲近江聖人。所以爲宇內之聖人。」と是に於て終に世界の聖人を以て稱せらるゝことあるに至れり。先生嘗て曰く、「學問之道無他。在立必爲聖人之志。而已矣。」と。晦養軒に與ふる書に曰く、「學道之憤悱も出來候て、世間たぐひまれなる境界に罷成候。志は大にすゝみ申候。二三年たゆみ不申候て、凡情はまぬがれ可申と、此上之たのしみに御座候。」といへるもの、如何に先生が渾身の努力を拂つて聖人たらんことを期したるかを見るべく、其の終に聖人を以て稱せらるゝに至れるもの偶然にあらざるを知るべし。

二三、藤樹先生の眞蹟に就いて　（「藤樹先生を語る」中の小川委員の論文、並に「藤樹先生遺墨帖」中の拙稿眞蹟考参照。（藤陰））

世傳へて藤樹先生眞蹟と稱して愛藏するものゝ中に間〻藤樹と署し惟命または愿・不能子などの文字あるものあり。甚しきに至りては全紙または半截に一行若しくは數行の大文字を書し落欵を押捺せるものあり。然れども正確なる資料について之を觀るに、書翰に在りては中江与右衞門と署名し、詩文に在りては中江原と署せるものあるのみ。藤樹の文字は學舍の稱呼として用ゐられたれども、惟命・愿・不能子等の文字に至りては絶えて見えず。また、書幅の如きも全紙又は半截大のもの一二あるを見るのみ。坊間流布の書畫鑑定書等には動もすれば落欵を載するものありといへども、由來先生の書は署名せるものすら極めて稀にして落欵等は絶無なり。是れ先生の筆について、眞贋の甄別實に容易ならざる所以なりとす。按ずるに古來先生の眞蹟と稱して珍藏せるものゝ中には固より僞作に屬するものも許多あるべしといへども、その多くは門下の諸氏が先生の詩文を敬寫せるものゝ誤り傳へられたるものにして、是等書幅の中には間〻門生自身の文もあるべく、或は常省先生或は岡田季誠氏等の筆蹟不知不識の間に混入せるものもあらん。今その一例を擧ぐれば孔子二千四百年祭記念先儒遺墨帖に載するところの井上通泰博士の所藏に係る主忠信云々の如き、また編者嘗て近邑大溝に於て土井某より購入せる淺森村子外一文の如き、また古來眞蹟との傳説ありて些の疑問をも挾まず編者より藤樹書院へも寄附し知友にも割愛したることありし論語寫本の如き、或は岡田季誠氏の家に傳來し逸品の聞えありし京都長尾時春氏所藏に係る志の賛の如き、いづれも是等の部に屬するものなるべきか。されど此の種の遺墨に在りては、研究資料として重要なるものなきにあらず。編者はかゝる見地よりして、此の種の資料の永久に保存せられんことを切望するものなり。

今試みに世に存するところの先生の眞蹟について、聊管見を述ぶるところあらんとす。先づ至聖文宣王の一幅と致良知の一軸は先生が孔門嫡流の學者として、將た日本陽明學の開祖として、實に無かるべからざる逸品たり。孝經の寫經並に假名書き孝經の二冊は孝を以て學問の骨髓道德の全體となせる先生に在りては是

れきた缺くべからざる珍什ならずや。二十一歳の時著はし給へる大學啓蒙の斷片一紙と、終焉に先つこと七十餘日門下の秀才中村重に與へられたる書狀とは、時代的にその兩端を顯はせるものとして興味尤も深しとなす。先生の生涯中その根本精神たる孝的思想の尤も積極的に發露せられたるは、實に致仕書を捧げて大洲を退去せるの時なりとす。今日傳はれるところの致仕書はたとひ先生の眞蹟に非ずとするも、必ずや確かなる材料を本として之を謄寫したるものに相違なかるべく、隨つて原眞蹟の舊形を偲ばしむる好資料なり。而して之に先だち親戚故舊に歸鄉を豫報し、母の萬事を懇請せる書狀の現存せるによりて、先生の先生たる所以彷彿として顯はるゝを見る。朱子學時代に於ける講學上の眞面目は、四書啓蒙・五性圖說・明德圖說・藤樹規等の原稿によりて概見することを得べし。翁問答は、朱子學より陽明學に轉せんとしつゝありし過渡期時代の著作にして今や僅かにその原稿の斷片一枚を存するに過ぎざるは寂寞の感なきにあらず。信仰的對照の遺物としては道統傳の一幅あり。易卦の一函は先生が深奧なる哲理の究明に餘念なかりしと同時に自ら筮儀を玩索せる狀景を如實に物語れるものにして、聖人たらんとの志の如何に厚かりしかは晦養軒に與へられたる一書之を證して餘あり。訓點及び振假名を施せる孝悌論一冊は、先生が如何に明末の俗文を讀破せられたるかを立證し得べく、太神宮參拜の詩については敬神思想の如何に濃厚なりしかを知ることを得べし。而して今世に傳ふるところの一幅には、いづれも他の詩文を列記せる斷片なれば、是に依りて先生自筆の文集の存在せしことをも推知するに難からざるなり。先生は連年元旦に丁り必ず吉試の詩を賦し、以て修養に資せられたり。而して今存するもの辛巳と丁亥との二幅あり。之を觀るに太神宮參拜の詩と同じく中江原と謹書せり。以て先生用意の存するところを察するに足る。送行文に至りては、先生が門人に對する懇切の情と教育法の一端とを概見すべし。昭和二年十月大阪市吉川又平氏は伊豫國八幡濱町某家の所藏たりし一軸を購ひ謹んで之を縣社藤樹神社に奉納せられたり。此は門人佃子に送れる漢文書簡に加ふる經解五篇を以てしたるものにして、殆ど全文に亙り訓點及び振假名を付せられたるを見る。以て漢文讀下力の乏しかりし門生等を教育せられたる實際は略ゝ想見するを得べし。先生晩年の作としては大學考・同蒙註・同解・中庸解等あり。何れ

も完本にして綴込みに眞筆にて丁數を識せり。先生の晩年に於ける圓熟せる經解は之によりて窺ふことを得べく、その謹嚴なる文字と潑剌たる筆勢とは先生の人と爲りを證して餘あり。また別に中庸第二章以下の解あり。門人の筆に屬すといへども、その表紙に識せる中庸の二字は先生の眞筆なりとす。以上の三書は先生の學術に關する重要なる典籍にして、何れも完全に保存せられたるは喜ぶべし。また熟語解數紙あり。陽明學に關する用語を列記して、之に簡單なる註解を施せるものにして晩年の思想に屬す。

中川子並戸田子に送れる送行の和歌あり。一は平假名を用ひ一は片假名を用ひて面白き對照をなせり。藤樹書院の什寶に「うゑて見よ花のそだたぬ里もなし心からこそ身はいやしけれ」との古歌短冊あり。先生の短冊としては唯此の一紙を存するのみ。その他熟語解の後に附記せる五首の詠草あり。いづれも先生の和歌に關する筆蹟として珍重するに足る。

代門人答西銘疑義の一幅と岡七兵におくれる書通とはいづれも反古の裏に識されたるものにして、以て先生の質素なる生活振を想像し得べく、而して後者の如きは火難に遭ひたるものと見えて燒痕數ケ所あるにも拘らず、之を表裝し家寶として重襲せり。以て後人の如何に景仰せるかを察するに足るべし。

先生の餘技としては黄鳥の畫賛あり。大洲止善書院の由緒と離るべからざるものとして世に知らる。その他格物致知(性命雙修云々)吾・愼獨・(太虛廖廓之皇上帝云々)誠意(誠者本心之實悳云々)の如きはいづれも人の需に應じて揮毫せられたるものなるべく、倚松庵に與へられたる一書は先生の茶事に造詣ありしことを物語れるものにして、中川貞良に與へられたる書通にふすべ云々(薫香)と云へると相俟つて先生の風雅的生活の一端を窺ふに足るべきなり。

按ずるに先生の筆蹟は楷書と艸書と大にその趣を異にし殆ど別人の如き感あり。楷書は謹嚴にして一點一劃苟もせず。艸書は流暢にして潑剌たり。兩者相俟つて、先生の人と爲り油然として顯はるゝを覺ゆるなり。

(附記)雜誌文藝書畫日東之華第四卷第八號第九號(昭和三年八月號九月號)所載直林生氏の「中江藤樹先生の遺墨研究に就て」の論文は一般

に先生の眞蹟なりと謂はるゝものをそのまゝ信じて評論したる嫌あれども、編者の未見に屬する版本中にあるもの數多を載せられたれば、編者は今後更に此等版本中にあるものが果して眞蹟なりや否やを討究し、然る後それらに關する意見を發表する所あらんことを期す。（紫水）

二三、藤樹先生の國家的精神に就いて

一、**敬神思想**。年譜寛永十八年先生三十四歳の條によれば、夏二三子を伴ひ伊勢神宮に詣拜せることを識せり。今その要を擧ぐれば、先生おもへらく、太神宮は吾が朝開闢の元祖なり。日本に生るゝもの一たびは拜せずんばあるべからずと、詩を賦して誠恐誠惶謹んで其の所懷を述べられたり。今その詩の大意を略述すれば、皇祖天照大神の御神德を稱へ奉りて光華孝德續無窮といひ之を犧皇の業に比し奉り、進んで聖人の道と我が國神道の教とは異同あることなしと説破して六合を照臨し冥助を垂れ給はんことを祈願し奉れり。文集二詩篇參照。皇祖の御偉業を以て之を犧皇の業に比し奉れるが如きは、固より失當の甚しきものなりといへども、中華崇拜は當時學者の迷想にして獨り先生をのみ咎むべきにあらず。寧ろ此は先生が儒者の立場より自己の理想とせる大人格者を捉へ來りて之に擬し奉りたるものにして、我が　皇太神宮に對して無上の尊敬を捧げられたるものと見るを至當となす。殊にその詩の序に於て太神宮の太の字の上を空白にし詩の結句に於て同じく太神宮の文字をば別に行を提して謹書せるが如きあり。またその詩は日本書紀卷一に「此子光華明彩照徹於六合之內。」と云へる文字と相通ずるところあるも亦奇ならずや。また門人淵岡山の江戸に下らんとするや、先づ伊勢神宮に參拜して後下るべしといひ、岡山示教錄卷五、二五丁その他菅廟に題しては儒道の興起を祈り、竹生島に遊びては詩を賦し易卦によりて竹生島その物の精神を以て神明なりと斷じ、以て神社に辨財天を祀れることのいはれなきことを述べ、小川の神社に詣でては「天下泰平大道興隆」を祈願せられたり。行状の著者が　本朝は神國なることを仰いで、先生深く神明を尊崇して敬欽をなすこと至れりと云へるが如きあり。此等の數例は先生が我が國の神明に對して深く敬虔の念を拂へるものなることを立證して餘あり。唯こゝに注意すべきは、先生の神明といへるは我が惟神の道に於て謂ふところの神明とは大に趣を異にするものあること是れなり。先

生は翁問答その他に於て神明または神道の文字を多く使用せられたることあれども、多くの場合その神明といへるは皇上帝即ち宇宙の本體を斥し、神道といへるは儒道のことをいへるなり。而して皇上帝は宇宙の主宰者にして、また吾々の始祖たり。されば吾々人類は盡く此の皇上帝の所産にして、吾々の運命もまた皇上帝によりて支配せらるゝものなり。由來吾人は宇宙間に吾人人類を超越したる一種偉大なる力の存することを否定する能はず。吾人が此の偉大なる力を認識し得るは、やがて宗教の人生に缺くべからざる所以を物語るものにして、藤樹先生に在つては此の偉大なる人格的の力即ち原始儒教に於ける天、若くは皇上帝の存在を確認し、皇上帝の下に天神地祇まし〳〵て皇上帝の命を受けて化育を司らるゝものとなせり。是に於て藤樹先生の神明といへる思想の中には、我が國神道の神を含むものなりや否やとの疑問起る。惟ふに先生は我が國の天神地祇の本原につき言明せられたるところはなけれども、宇宙の森羅萬象盡く皇上帝の分身變化なりとする先生の宇宙觀に於ては、天神地祇もまた皇上帝の所産なりと斷定せざるを得ず。先生の神明といへる思想の中に我が國の神明を含まずとすれば、我が國の神明は神祇の外に立たゝせらるゝことゝなる。皇上帝即ち宇宙の本體の所産にあらざる神明ありとは先生の宇宙觀に於て是認し得べきものなるべきか、如何。而して一方先生が我が國の神明に對し明かに神として崇拜し、神として詣拜し、神として祈願せる史實の存在せることを既に列擧したるところの如し。此の如く考へ來るときは先生の神明といへる思想中我が國の神明を含むものなることは明かなりとす。

二、**先生の志**。行狀に曰く、先生斯文の興起を以て自ら任とす。論ずる所時を憂へ世を救ふの意多し。嘗て門人に戲言して曰く、「我學を講ずる所、國土のために永久萬壽を祈るが如し。」と。竊かに考ふるに先生に在つては孔夫子の道を興して理想の天下を現出せんとせられたるものにして、その手段方法に至りては教育を措いて外に道なしとし、孜々として講學に從事し、子弟の教育に渾身の努力を拂はれたり。されば病革るに臨み几に隠りて歎じて曰く、「此の道の任誰かある。嗚呼無哉。」と云ひて瞑目せり。事狀の著者は此の事を論じて左の言を爲せり。曰く、「先生平日道に任ずるの重き、臨終の時といへども尙道の傳はらざるを以て憂と

爲すこと此の如し。」と。また門下有爲の士に中川謙叔あり。嘗て莊子を讀みて狂見の弊に陷りたり。先生は之を歎きて、「例へば長子虎之助を失ふとも其の憂は此の如くならじ。」といはれたり。淵岡山は之を評して、「君子の天下を思召ことは父子の親みよりも尙ふかし。岡山示教錄卷二、六丁といへり。岡山はまた或時左の如くいへり。

先師の道我一代に不成ば二代になりとも三代になりとも五十年百年の後になりとも興起し、天下家ごとに和順に成れ様に所希也。是先師の志願なれば也岡山示教錄卷二、二〇丁と。その他既に識せるが如く、先生小川の神社に詣でて、「天下泰平。大道興隆。時和年豐。民安物阜。」と祈願せりといふ。以て先生の志が常に我が國家興隆の上にありしことは窺知するに難からざるなり。

三、我が國を「ゑびす」と稱せられしか、否か。當時の儒者多くは支那の文化に眩惑するの餘り、我が國を自ら卑しめて東夷または夷と稱したることあれども、先生は常に日本・本朝・我が朝等の文字を用ひ、夷または東夷など明記せるものあることなし。唯翁問答上卷之本に「もろこしにもゑびす國にも云々。」本全集第三册一〇四頁、一〇五頁といへるところ二ケ所あり。此のゑびす國なる語の中には間接には我が國をも含むこととなるべければ、先生もまた他の儒者と同じく我が國を夷と考へられしものとも云ひ得べし。然れどもかゝる用例は唯翁問答のみに在りてその他の著書には全くなし。また翁問答下卷之本に「聖人はもろこしにならではうまれたまはず。」との一句あり。此の語は先生が中華崇拜の弊に陷れるを如實に物語れるものにして之を反證すれば我が國を夷と考へられたりとの證左となすに足るべし。然れども此の語は先生が聖人たらんとの志を立て聖學を興すを以て自己の任務と自任せる事實と兩立するを得ざるものなり。何となれば、若し此の語の示すが如くもろこし以外には聖人出でずとの前提を許すものとすれば、日本の國土に生れられたる先生の學は全く意義を失ふことゝなるを以てなり。惟ふに此の語はまた翁問答のみに見ゆるものにして、その他の著書に至りては更に載するところなければ、此は先生偶然の失言と見做すを可とす。然らざれば先生の思想は大なる矛盾に陷るを免れざるべし。

また先生は天竺に對しては明かに戎國と云ひ、「終に聖人一人も出でたまはず。」本全集第三册二一一頁と云はれたれども、

我が日本については支那と對等の地位に置いて考へられし節もあるなり。其は前記太神宮參拜の詩に於て畏れ多き事なれども　天照皇太神宮の御神徳を犧皇に比し奉れるが如き或は聖人神道の教と並べ稱せられたるが如き是れなり。されば先生の學統を忠實に繼承せる淵岡山は實に左の言をなせり。曰く「前略例へば日本古今君子稀に候事、若くは僻地故か。（編者云ふ、東夷といはず。）然れども　天照皇太神まします事、吾葦原の大唐にも所レ不レ愧也。是を以て神道第一之國云々。」と。岡山の此の言は恐らく先生晩年の思想を發揮せるものならん。されば他の多くの儒者に比しては先生は確かに日本的精神を抱き、我が國を支那に次いで優秀なる國と考へられし事と思はる。高弟熊澤蕃山が大いに日本的精神を發揮したるも偶然にあらざるなり。

二四、藤樹先生の佛教に對する態度に就いて

藤樹先生の佛教に對して取られたる態度については、便宜上之を二つの時代に分ちて觀察することを得べし。即ちその一は翁問答著作時代にしてその二は鑑草著作時代なりとす。

一、**翁問答著作時代**。年譜によれば寛永十七庚辰年先生三十三歳秋豫陽同志の求めに依りて翁問答を著はされたることを識せり。此の時代に於ては先生は佛教に對して破邪顯正を主として攻擊的態度を取れり。知徳圓滿の大人格を具へ近江聖人として世人の景仰を受くること淺からざりし先生が、佛教を攻擊せられたりと聞いては一驚を喫するものもあるべく、或はまた先生に對して非難の聲を發するものもあるべし。しかしながら先生が佛教に對して痛棒を加へられたるは主として儒學者一般の傳統的精神に支配せられたるものなると共に、又實に其の已を得ざるに出でたることを知らざるべからず。惟ふに佛教に在りては主として理想の世界を來世に求むるものなるを以て勢ひ厭世主義に陷り易く、親子夫婦の緣を絶ち、人間生活を營まず、出家して山に入り開悟の道に入らんとするものにして親子夫婦の關係を基調として人倫を正し現實の社會に即して理想の世界を建設せんとする孔夫子の道とは全く正反對に立つものと謂はざるべからず。昔孟子が楊墨を闢くに渾身の努力を拂はれたるが如く、先生は夙に大志を抱き、聖學を本邦に興起するを以て自己の任務

させられたるを以て、先づその教育の一端として門生等をして佛教の正教となすべからざる理由を了得せしめざるべからず。是れ先生が伊豫同志の爲めに翁問答を著さるゝに際して特に佛教について其の所以を開示せられたる所以なりとす。

先生が釋迦を以て狂者となし聖人を以て稱せられざりしが如き、妥當ならざるかの感なきにあらずといへども、これ亦理由の存するところなり。勿論釋迦は東洋に於ける絶大なる大人格者にして世の渇仰して措かざるところ、聖者たるに於て誰か異議を挾むものあらんや。然るに先生が聖人といはず、狂者を以て過せられたるは如何。是れ一に立場の異なるに由るなり。由來聖人といふ稱號は儒教に於て理想の人格者にさゝぐる名稱にして佛者に對して言ふべき語にあらず。故に先生は孔夫子の道を信條とせる學者なるを以てたとひ如何なる大人格者といへども儒教の理想に合致せざるものは之を聖人として崇敬するを得ず。此は佛教に於ても孔子を目して如來または佛菩薩等といひて以て之を讃美するを許さざると同樣ならん。既に儒學に於て釋迦を遇するに聖人を以てすること能はずとすれば、之を中行を得たる聖人につぐべき地位に在る狂者の地位に置くより外に道なきにあらずや。

先生は佛教に對して隨分激烈なる議論をなせり。然れども釋迦の人格に對しては深く敬意を表し、多くは釋尊なる敬稱を用ひ用語に於ても慇懃を怠られざりしことは、隨處に之を認むるを得べし。唯立教の趣旨に於て現世を厭離する思想存するを以て、終に末流に至りては釋迦、達磨に藉口して人生生活の眞意義を沒却するが如き行狀を爲すものあるに至りたり。されば先生は當時に於ける僧侶の如上の非行を指摘して以て門生の心眼を開くに意を用ひられたるなり。固より斯くの如きは儒教に於ても末流に至りては各々其の弊とする所なきにあらずと雖、之が爲に僧侶の非行を默認すべき理由なし。況や倫常を正し名教の維持を以て自己の使命と自認せる先生に於てをや。唯其の所論の餘りに露骨に過ぎ皮肉に亙れるを遺憾となすべきのみ。

翁問答改正篇序に曰く、

先生嘗曰、問答の中儒佛を論ずるところのごとき、今これを讀に精當を得ざる事を覺ふ。

と。而して先生は問答を改正せんと欲せられたるも病の爲に果されざりき。かゝる次第なりしを以て弘く門人にだに示されざりしが、計らずも梓人の手に洩れて刊行せらるゝに至り、先生大に驚きて之を破られたり。然るに歿後また洩れて刊行せられたるを以て門人等止むなく校定して世に出したるものなり。然れば本條に於て叙述したるところは先生自ら精當ならずと言明せられたるものなるを以て唯先生の思想經過の觀察上重要なる資料として參考に供すべきのみ。その如何なる程度にまで修正せらるべきものなるかは、固より明かならざれども、次に述ぶるところによりてその幾分は之を窺ひ知るを得べし。

二、鑑草著作時代。前條に於て略述せるが如く親子夫婦の緣を絶ちて人倫を顧みず、人間生活を度外に置くが如きは固より儒學立敎の趣旨と相容れず。されど此はその根本思想にあらずしてその理想に達せんとする手段方法に過ぎざるなり。若し暫く儒と云ひ佛といふ見地を離れて虛心坦懷にその根本義について考察すれば、彼此互に相融合するところあるを看取すべし。殊に陽明學に於て然りとなす。今試みにその一例を擧ぐれば、陽明が人胸中有箇聖人といへると佛敎に於て一切衆生悉有佛性と云へるとはその根柢に於て相一致するところあるを見るべし。また佛敎に於ては地獄極樂の說を立て死後の安穩を求むるものなれども、此は方便に過ぎずして實は心の苦惱を脫して安樂の狀態に住せんが爲なり。之を儒學に比較するに明明德と云ひ、或は致良知と言ふは心の修養を先にし以て眞樂の境に住せんとするものにして、儒佛兩者の根本思想に至りては合致するものなり。されば先生は翁問答に於ては佛敎に對して侃々諤々の論陣を張り以て正面攻擊を加へられたりしにも拘らず、鑑草に於ては翻然としてその態度を改め良知を示すに婦女子の耳慣れたる佛語を混入して明德佛性の四字となし、萬物一體の心を中心として婦人の守るべき道につき懇切叮嚀に說示せられたり。惟ふに是れ聖人天の如き仁心より流出したるものにして、一點の私心なきを觀るべし。年譜を按ずるに翁問答を著述せられたると同じき寬永十七年冬王龍溪語錄を得て之を讀まれたるに書中多く佛語を間雜せるものあり、禪學に近からざるやを恐れられたり。蓋し先生の佛敎に對する思想の變化は此の頃既に端を發したるものならん。されば第二期に於ける先生の佛敎に對する態度は之を二つの方面より觀察するを得

べし。即ちその一は佛教の奧旨盡く我が儒教中に包含せらるものとせること是れなり。事狀に曰く、

「先生の母堂佛學を信ず。先生一日之が爲に佛書を講ず。出でて諸生に言て曰く、某頃日佛書を見るにその奧旨また悉く吾が儒教中に包まる。彼の教若し好意志ありて之を學ぶも亦可なり。彼れ亦此の心を明かにするに過ぎず。則ち何ぞ吾が儒全體の教を舍てゝ別に之を求めんや云々。」（原漢文）と云へるもの即ち是れなり。その二は教説の方法として便宜上暫く佛語を假用せること是れなり。年譜に曰く、

「佛語を間雜するの世を憫れむの深きことを見る。如何となれば聖人一貫の學、本太虛を以て準則とす。老佛の學皆一貫の中を離れず、唯精粗大小あるのみ。達人何ぞ其言語を忌んや。且つ當時佛を學ぶの徒多し。是を以て其語を間雜して其外にせざることを示し皆太虛一貫の道を悟らしめんことを欲するものなり。」と。此の第二の場合は多くは婦人の教育に用ひられたるを見る。即ち春風・鑑草を始め書翰集に於ては中川貞良の老母並牛原氏の老母におくれる書通の如きは、即ち是れなり。

尙終りに臨み一言の添加すべきことあり。先生の書通凡そ百餘通載せて書翰集にあり。多くは晩年の作に係る。而して佛教に關する所說散見しつゝ一言半句も佛教に對して非議の言を發したるものあるを見ず。以て先生晩年の思想の如何なるものなりしかは之を想像するに難からず。

二五、藤樹先生に關する諸子の評論

一、門弟子の觀たる藤樹先生

熊澤蕃山

中江氏は生付て氣質に君子の風あり。德業を備へたる所ある人なりき。學は未熟にて異學のついゑもありき。五年命のびたらましかば、學も至所に至べき所ありしなり。（集義外書卷六、十二丁）

淵岡山

吾藤樹先生は扶桑古今之一君子。勿論私言事にあらず。默識心通云々。（岡山先生示教錄卷一、十四丁）

（略）葦原において神代はいざしらず。神武より以來終に聖賢のおこりたまひたるよし傳にも無²御座¹候となん。然るに鄉州僻地に藤樹先生出世ましまし候。他人嘲り可ᴸ申候哉。藤樹末葉の者共に至而は扶桑古今の一君子と稱し申候。（岡山先生示教錄卷三、五丁）

（略）こゝに我藤樹先生直に神聖の至道を發明して、上古神人の遺志を繼、遠くは異朝聖人の學脈を自得して且學者用力下手の實地を開示し、聖學の蘊奥を指揮し玉ふ事易簡直截なり。可ᴸ謂千載不傳の緒を繼人也と。后世に至て神明と仰ぎ尊ばんコ疑なし。（中略）又云、先師博學多才の力にて其道を得玉ふか。師の曰、先師の先師たる處文にあらずして德にあり。學術の要も又文にあらずして自得にあり。（岡山先生示教錄卷六、十一丁）

先師の學は潜龍也。時のいたらざるを以て、身を江西にひそめて此道を後世にのこさん事をのみ心とし給へりとなり。（二見直養芳翰集下別錄藤樹先師學術旨趣大略、本全集卷之四十二第一三頁）

西川季格

岡尊師の曰、藤樹は純一無雜にましします。我等が受用は、しどろもどろ也。（松本以休先生示教錄、五丁）

平人の及ぶべきものに非ず。○扶桑古今一君子。○天下儒佛共に目を醒まし自ら聖學の宗とす。○氣質聰明。（集義和書顯非）

二、學統繼承者の觀たる藤樹先生。

卓立の君子。（藤樹先生行狀）

絕無僅有之君子。（藤樹先生事狀）

石河氏

本朝藤樹先生は三代以來明朝までの諸儒の學域蘊奥を精く考へ玉ひて、新に聖門の學術を興起し玉ふ。○傳へ聞く。藤樹先生は和朝の一君子也。（藤樹先生學術定論）

木村勝政

藤樹を中江与右衛門殿と云人と思ふ故信おこりがたし。藤樹は神明なりと木村翁被ᴸ仰候。（松本以休先生示教錄）

一丁）

三宅石菴

藤樹先生嘗慕二明道陽明一而優及レ之。（戊子歳旦詩跋）學不レ同レ道者稱レ生不レ同レ時者望。（藤樹先生書簡雜著序文）

三輪執齋

本邦の王文成公。（拔本塞源論私抄序）

德崇く學正しうして實に本邦道學の淵源たり。（藤樹先生全書序）

大鹽中齋

我邦姚江開宗也。（洗心洞劄記）

春日潛菴

今如二藤樹超然獨興一孟子所レ謂豪傑之士。非耶。（春日潛菴遺稿）

山崎天遊

千聖一滴之眞血脈。方待二先生一而始傳。（祭文）

三島毅

淡海聖人。不レ負レ名。（詩）

三、異學者の觀たる藤樹先生

奥田士亨

日月德比隆。（書院日記詩）

安原霖寰

三代以上人物。（藤樹書院記）

佐善元益

大賢と可レ申候。（大儒列傳）

雨森芳洲

吾無得而間然。(近世叢語)

中井積善

藤樹先生德業之懿。無以尙焉。(平田氏藏幅跋)

室鳩巣

百年來人の間然せざるは、只藤樹一人也。(斯文源流)

河口子深

世之を近江の聖人と稱す。(斯文源流)

醫家頤齋

世に關西の孔子と云。(諭艸)

賴杏坪

江西千古一名賢。(藤樹先生景慕錄)

尾藤二州

藤樹之德。近世無匹。(靜寄文集)

山鹿素水

古之所謂隱君子乎。(跋原謹以通言餞熊澤氏之行)

楠本碩水

天資誠實。而明敏有足化動人者。(碩水先生遺稿)

四、後世景慕者の觀たる藤樹先生。

杉浦重剛

宇內之聖人歟。(祭文)

富岡鐵齋

風采武同ニ曾子賢一。（藤樹書院藏幅）

二六、藤樹先生母堂墳墓移轉に關する常省子の書狀

墓所之事拙者存寄
倘々何さ□も義理こよき
迄なく候へ共存寄無遠慮被仰越可被下候

一、宜伯公思召寄には玉林寺は地形悪敷、水氣深候故、御心に易無ニ御座一候ニ付、藤樹公之御墓も御移可レ被レ成興之義ニ候。其故今度之義も田中へ治可レ申興被ニ御置一候。右之段御尤至極之御志興奉レ存候故、先日吉右衞門登申候節委細存寄之段書付遣申候。然處ニ今度玄卜物語にて承り候へば、祖母樣御存生之内前々台も小川を御はなれなされまじきとかたき御言葉共故与州へも備州へも終に御越無レ之、其地ニ而御終被レ成候。然バ田中へ移申候は祖母樣之御志ニ易無レ之道理ニ而御座候。然共又先書ニも申入候通死者の志とてむださしたる事には從不レ申□に御座候。右御兩所之御志を考合申候へば先宜伯公之御志道理御座候へ共、今田中には一家は無ニ御座一候へば、そまつに成申而も誰とがめ申者も有ニ御座一間敷候。小川は在所之事に候へば所之者も筋目を可レ存候。夫上遠く不レ通方も御座候へば、そまつに被レ成申間敷候。其上玄卜物語にて承り候へば、玉林寺の地形も地震以後相替(かはり)しつけもうすく成申候旨に御座候。左樣候へば宜伯公御心に懸申候地形之義も直し申候へば是はうすく成申候。然ば祖母樣之御心興幷に墓所之不レ荒興、此二つ道理つよく被レ存候故同心致弥レ玉林寺内に定可レ興存候。併我不器りよう無レ之候へばふかき義理心に落着不レ致候義可レ有レ之候間宜伯公之思召寄の宜可レ有レ之興被レ存候。常□之理には何も存寄之躰御書付御越可レ成候弥レ了介存寄ニ付拙も存寄もへんじ同事に成候義何も同心ニて決定可レ被レ下候。申迄もなく候へ共御手前義へ宜伯公被レ仰置一候義候へば、少興も心に懸候義候て、追而委可ニ仰越一候。猶頓而御供にて上京致可ニ申遣一候以上。

四月五日　　　　　　　　　　　　　　中江彌三郎　判

居相瀨三郎樣

（附記一）右書狀眞蹟滋賀縣高島郡川上村大字濱分岩佐定一氏所藏

（附記二）宜伯公とは藤樹先生の長男虎之助氏のことなり。按ずるに宜伯公は玉林寺に於ける先生の御墓は地勢あしく濕氣甚しきを以て夙に改葬移轉の義然るべくとの御考にて又祖母樣百年の後には必ず田中へ治むるやうにと申置かれたるならん。田中とは小川村を距ること一里強の西に丁り、今安曇村大字田中といふところなり。こゝに玉泉寺といふ寺院あり。地勢高燥にして一種特別の墓地あり。恐らくは之を斥せるものならん。先生の母堂の歿せるは寛文五年十二月にして此の書狀は四月とあれば或はその翌年頃のことにやあらん。常省子は備前に祿仕せるものなれども或は時に京都に滯留せることもありしなるべし。當時宜伯公の既に歿せる後なりければ、その遺志に遵ひ移轉のことども細々と書付恰も登來りし吉右衞門に托して申送れるなるべし。然るに其の後玄朴の物語を聞くに及び、地震によりて地形の變じたることを知り、且つ祖母樣の御志の程をも知悉したれば、茲に再び書を裁して前言を取消し移轉すべからざる旨を申送れるなるべし。玄朴とは小川村の人にして先生に學び松平石見守に事へたり。谷川寅といへるはこの人の事なり。おもふに此書の記事によりて先生辭任書中に「其上女之儀に而御座候へば古郷をはなれ遠國へ參候事たとひうへ死仕候共成申間布旨云云。」といへると相俟つて先生母堂の堅く聖訓を守り婦人境を越えざるを以て信條とせる賢婦人たりしことを宜伯公の純孝至誠の爲ゝ人をも想像せらるゝと同時に、常省子の御兩所の御志を如何に尊重されしかをも推察するを得べし。宛名の居相瀨三郎とは何人なるか詳かならず。（紫水）

二七、先師之御墓所石圍垣建立覺

一、享保五年子ノ秋大森周介致二在京一京同志中ゟ折々遂二對談一候。「同志河合德右衞門被レ仰候ハ藤樹先生之御墓所圍垣も及レ被二損一候。京同志思レ之候。御墓地四方石の圍垣に建立致シ度由申候へ共、對州ニ被レ成二御座一候御嫡孫中江藤助殿へ御訟え不レ申候而ハ如何ニ存、相止め候由被レ仰候。周介申候ハ常省先生御存生之節末々講堂之義高島同志中ゟ御頼被レ成候故、折々修覆を加え候へ共、終ニ藤助殿江御案內不レ申入レ候。只今被レ仰候石垣之義御相談相調候樣に被レ成被レ下候ハゞ先師も御悦喜可レ被レ成候。何とぞ相調候樣にと賴申候へバ、河合氏左候ハゞ周介高島へ下候節、御墓地四方之間尺を改め石屋ニ積らせ書付參

候樣にと被仰候故、翌丑の正月ニ罷下り高島同志中に右之趣遂披露候處、重疊之御事と有之候。其後南小松村石屋八郎兵衛呼越石垣之相談致し候而、委細書付同二月ニ京都へ致持參河合氏に掛御目候。京同志相談之上ニ而小川村より一同志上京ニ而右之段再應賴申由、國々諸生中に、御文通有之其後相調候。同七月ニ石屋に申付同八月二十六日迄ニ出來申候事。（中略）

一、同九月四日ニ京都ノ同志

山田由元
木野自安
河合德右衛門
岡田以安

右四人大溝に御着此方へ案内有之候故、此邊之同志中に右之段申通翌五日ニ雙方於講堂參會有之候。則各御墓參京都より御造酒御肴御持參有之御墓に奉獻之。神主に右同斷。

高島同志

安原善藏　同　茂助　同　淺右衛門
同　貞平　中村作野右衛門　同　次助
小川介左衛門　大森周介　志村次左衛門

京都同志中ゟ右の連中御酒ニ而御振舞御吸物御酒肴。右て岡田以安老御講釋有之、大學三綱領。此邊の同志中ゟ京同志衆を麁飯ニ而振舞雙方退出仕候之。以上。

享保六年丑九月五日　（藤樹書院所藏藤樹御墓所石垣帳）

二八、橘南溪の藤樹書院參拜記

先生俗稱は中江与右衛門と云て江州大溝の在中小川村の產にて分部侯の領地の百姓也。王陽明流の學者な

補傳第二十七項參照

藤樹先生御墓所石闌垣建立覺

補傳第三十項參照

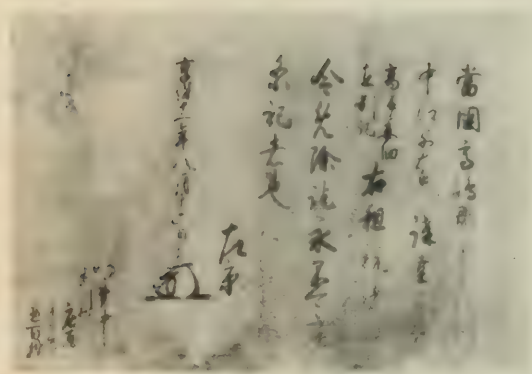
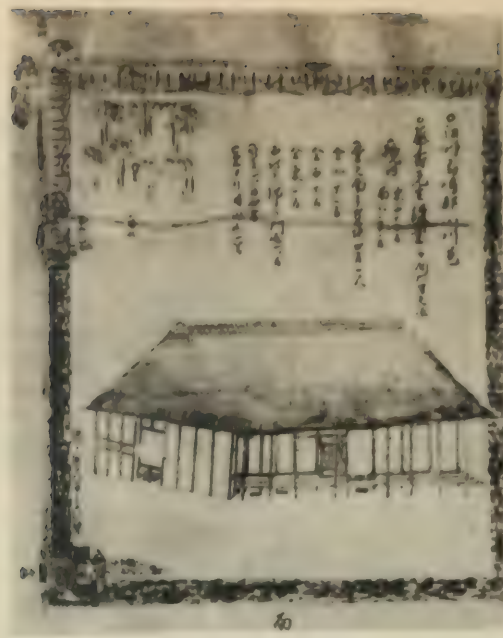
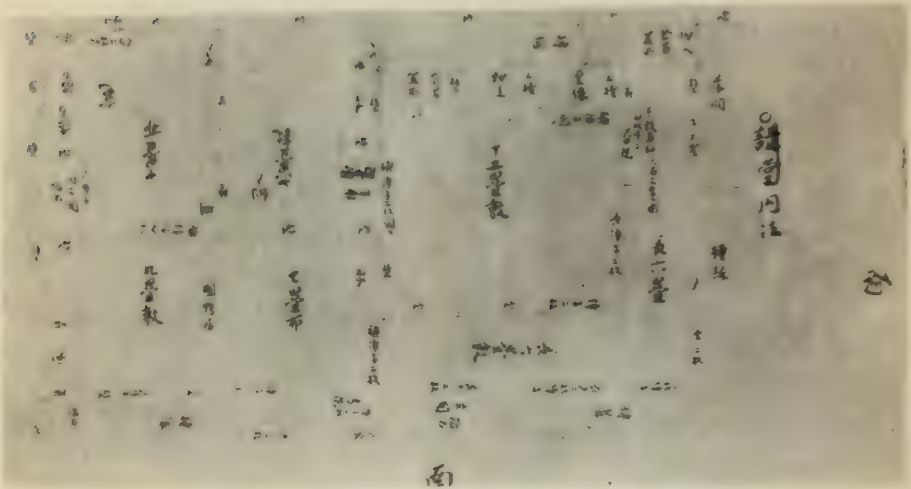
講堂地子御免御黒印　其一

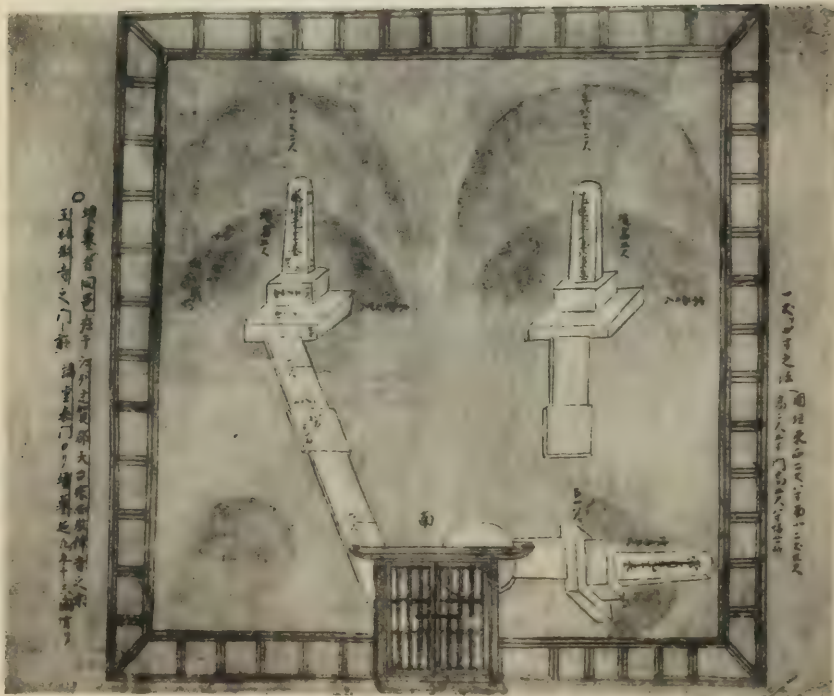
補傳第三十項參照

同　　上　其二

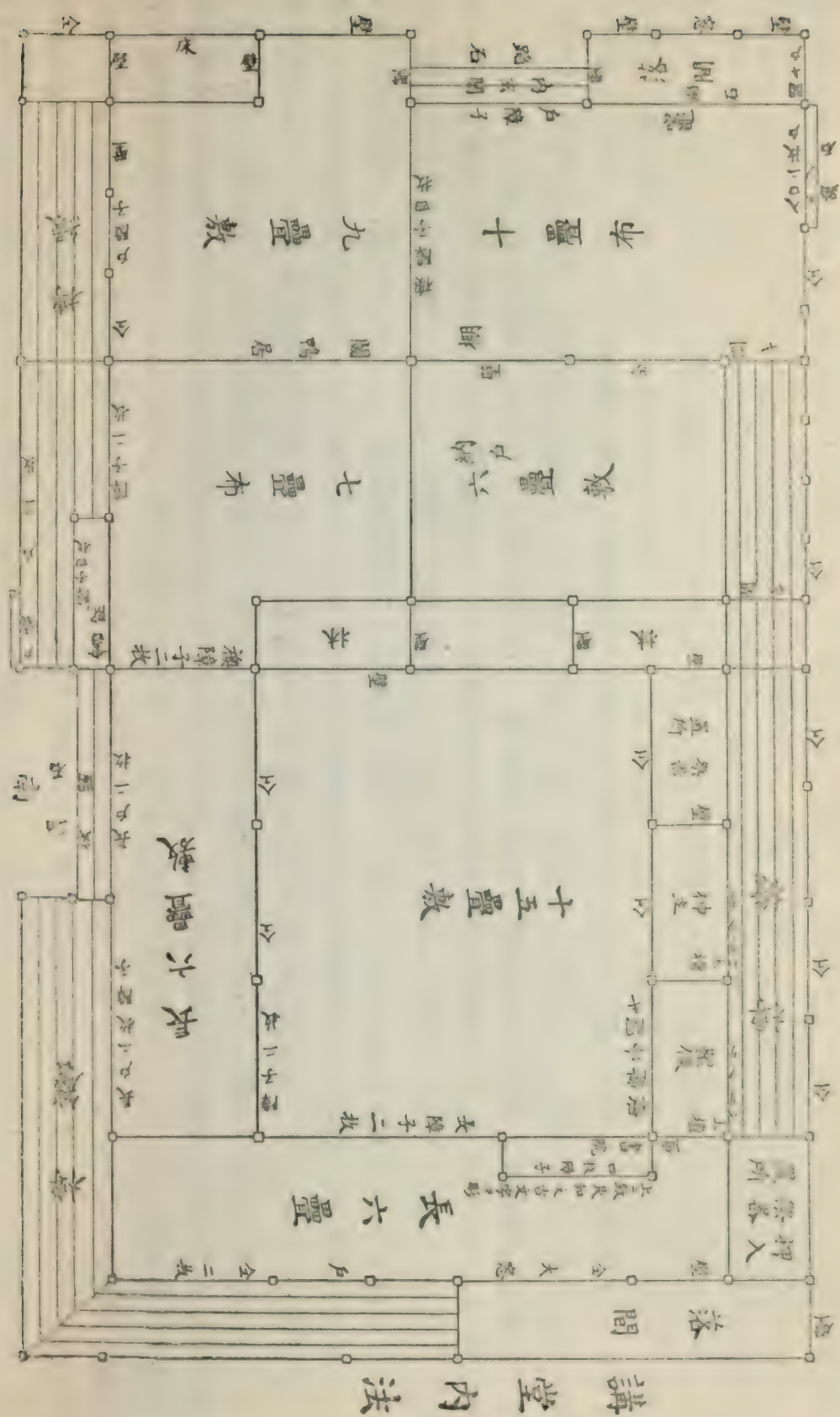
（藤樹書院藏）

藤樹先生長男中江太右衛門氏墓碑

藤夫子聞傳參照（藤樹書院藏幅）

藤樹書院舊圖　其一

同上　其二

補傳第二十八項參照

同上　其三

（藤樹書院藏）

りしが、其徳行近時の學者の及所にあらずとぞ思はる。先年余聞し事あり。尾州の一士人（編者按ずるに、大儒列傳に三輪希賢に作る恐らくは誤）用事有て此邊を過ぎ先生の墓所小川村に有と聞て、畑うつ農夫に尋しに先に立て行く。程なく小さき葉屋に至りしばし待せ給へとて内に入り、やがて出るを見るに、木綿の新しきひとへ物に布の小紋の羽おりを着たり。彼士人驚て扨々丁寧なる男かな。墓だに敎へ得さすれば滿足なるにと思ひもて行うち墓所に至りぬ。彼農夫竹垣の戸をひらきいざ入て拜し給へといひて、其身は戸外に拜伏せり。士人大に驚き扨は衣服を改め着せしは我爲にはあらで先生を敬するにてありけると心付、扨も汝は藤樹の家來筋の者にてやあると問へば、左にハ候はず。されど此村のものハ一人として先生の御恩を蒙ざるなし。親をうやまひ子をしたしむ事をわきまへしりたるは先生の御蔭なれば、必おろそかに思ふべからずと我父母もつねづねをしえ候ひぬと語る。士人も初ハ只なをざりに一見の心にて來りしが、此農夫がやうす見聞するに今更に心もあらたまり、ねんごろに拜して歸りぬとなり。其後余肥後にて村井氏に親しく交りしに、ある日村井氏外より歸り語りしは、扨も今日は珍敷墨跡を見たり。此國の家老何某の方へ近き頃江府より聟養子に見えし有り。其方へ用事ありて行て物がたりの序に、ふと思ひ出で、そこの御里方の御領下に中江藤樹といひし人ありしよし御存知にもや。其手跡などは所持し玉はずやと語り出しに、彼人座を改め、藤樹先生の御事ハ我父祖以來尊敬いたし候ひて老父我を愛するのあまり遠方へかく參るに付て、兼て祕藏の一軸を出して得させぬ。御所望ならば見せ申べしとて、奥に入り禮服に改め一軸を携出て床にかけ遙に引さがりて拜せられぬ。其尊敬かくばかりなれバ、我も手あらひ口そゝぎなどして拜してやみぬ。分部侯にありては必竟領地の一農夫なるをかくまで敬せらるゝ事代代賢を愛し德を尊び玉ふことも有り難く、又藤樹先生も眞の大儒なることもはじめて知りぬと申されし。此二事耳に殘りあれハ、此度よき序なれバ墓にも謁し講堂をも一見せばやとおもひて大溝の東（編者按ずるに東松下伯季既に北の字に改む。蓋し南谿は旅人なればかく誤り考へしならん。下文南又東に改む。俱に伯季に從ふべし。）加茂といふ所より南へ入る事八丁にして小川村に至る。農夫老幼までもくはしく道を敎、迷ふ事もなくて講堂の前に出たり。雨戸とざしあれバ其となり志村周助といふ醫者の許へ案內して講堂を拜したきよしいひ入るゝに、まづ玄關へ上り給へといふ。草鞋がけなれバ只

（附記）右は寛永九年仲夏分部清與の製圖に依る。（棠水）

かりそめに講堂の案内をこいへど、强て足そゝぎの水など持來るまゝ、やむ事を得ず、草鞋脚絆など解て玄關へ上るに、周助出迎ふ。四十ばかりの惣髮なり。茶煙草の世話も行屆きたり。余講堂を拜見し神主をも拜し度よし乞へば、周助奥に入り禮服を着して講堂の鎰を手に持いざ來り玉へと引連て行。扨講堂を開きたるに堂いかやぶきにて間數四間あり、書院南面にて十五疊椽〔緣?〕がはあり。向ふこ西脇に押入あり。此書院講場之。其次對客の間八疊に床あり。其次十疊其次臺所なり。正面椽〔緣?〕がわの上に藤樹書院といふ四字の額あり。分部昌命拜書とあり。十疊敷の間に朱子の白鹿洞の規則を板に書てかけたり。さばかり相違の學風なるに此文をかけられたるも殊勝に覺ゆ。押入の内に深衣を着せる繪像あり。釋菜の時の圖と云。其前に厨子あり。其内に神主あり。上箱に「先生姓中江諱原字惟命号顧軒稱藤樹先生。慶安元年戊子八月廿五日卒。葬邑東北玉林寺」の三十八字あり。箱の内に神主常法のごとし。扨悉見終り周助宅へ戻り、いかなればかく此堂を司り玉ふゝ問に、父祖代々門人にて、殊に昔よりかく隣家に住み、今にては先生の子孫も無ればかくは預り來れるなり。殊さら今にてはよき門人もなくなりぬれば、毎月六度づゝ村民を集め論語を講ずるも某を無理に其人に當られて勤中なり。（東遊記抜書寫本原田知近氏藏）〔三十三頁第二行「尋しに」の下「細道なれば知れ申まじ案内し奉らんとて」の十八字を補ふ。近江原田知近氏報。（藤陰）〕

二九、郷人景仰諸侯を恐れず

一諸侯駐駕門外。令村老闢門。不肯。曰。凡謁廟者。達廟門數百步下輿。蹙々入拜堂下。無貴賤一矣。今接肩輿石砌曰闢戸甚倨。非交神道。不奉命。侯謝過請入。曰。晩矣。願再卜日。急去不顧。郷人仰止如此云。（先哲像傳所藏松崎堯臣撰）

三〇、分部侯租税を免ず

古文書　一

藤樹先生之儀名高キ御事ニ候へバ、御上ニも御如在に不思召候。就夫去年門下中ゟ講堂地子之儀願被

上候得共、御在江戸御留守故及ニ延引一候。此以後講堂地子高九斗壹升九合末代御赦免被レ成候。其上只今迄相滯候未進米も御用捨被レ成候。此趣門下中へ可ニ申達一候。末々小川村中ゟ如在不レ仕候樣ニ小百姓迄可ニ申付一者也。（書院日記享保六年七月十三日）

古文書　二

當國高島郡上小川村中江与右衞門講堂之地（高帳委細在ニ別記一）右租稅諸役令ニ免除一訖。永不レ可レ廢ニ祭祀一者也。

享保十一年八月十六日　　左京

光忠　花押

門弟中

上小川村

庄屋

年寄

惣百姓

古文書　三

藤樹先生講堂地之事

一、西之方　南北　貳拾壹間五寸
　但北之隅ニ藤之樹有
一、東之方　南北　貳拾壹間壹尺六寸
一、南之方　東西　拾六間貳尺
一、北之方　東西　拾五間四尺
一、講堂　四間八間

一、高九斗四升六合六夕
但免許之狀有之

右

享保十一年八月十六日

澤井八郎右衛門㊞
佐治与右衛門㊞
別所九兵衛㊞
武野源太夫㊞

門弟衆中

上小川村
庄屋
年寄
惣百姓

古文書 四

上小川村講堂除地之儀先規之通相違有之間敷者也。仍如件。

享保廿一
三月五日

和泉
光命 花押

（右四通藤樹書院所藏）

（附記）

爾後藩侯御代替りには必ず御黒印を下附せられたる者にして、隼人光庸（寳曆五年九月十五日）左京光寶（天明五年十月朔日）若狹光邦（文化六己巳年七月十三日）左京光寧（文政八乙酉年七月廿一日）虎之助光貞（天保二辛卯年七月十九日）等同文の折紙上記の外五通あり。（紫水）

三一、光格天皇叡旨を賜ふ

古文書 一

德本堂三大字、是右大臣一條藤公書以所賜也。

寛政丁巳初秋

醫學院法印　惟　和　謹　識

古　文　書　二

寛政八辰年秋の初に西湖小川の講堂に
藤樹先生先年在世の時家藏ありし
聖像並先生の像去秋
禁裏の御醫畑柳安法印を以奉備
叡覽　　主上常御殿におゐて御潔齋被爲遊
御拜禮之上先生之賢德深御感の餘りに德本堂と堂號を被成下密に一條正二位右大臣藤原忠良公に御染筆を被命、講堂江御寄附被成下也。先生沒後已に百有餘歲および上王公大夫下士庶人に至る迄大德を景仰して
聖朝榮名を達し賜事先師在天の靈歡有べし。
末流の學者拜戴して後世連綿すべき基本ならんと誠恐頓首而禿筆の一番を添ておくる也。

寛政九年丁巳仲秋　　禁裏御內

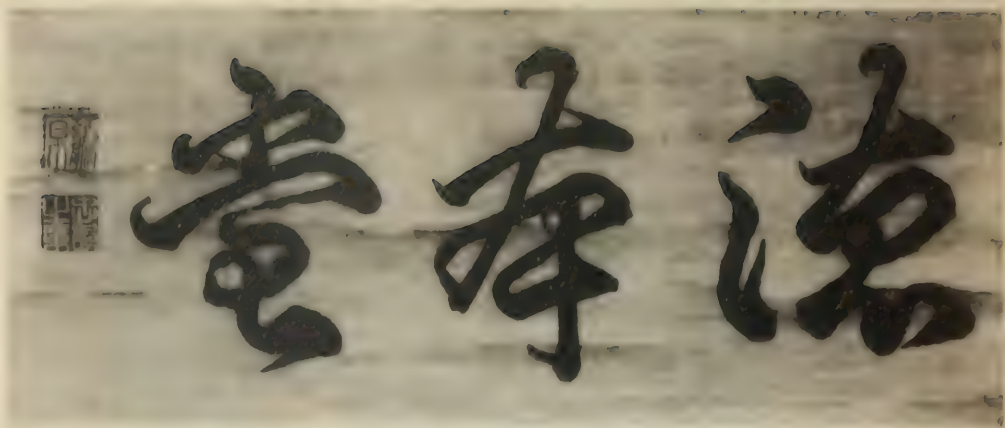
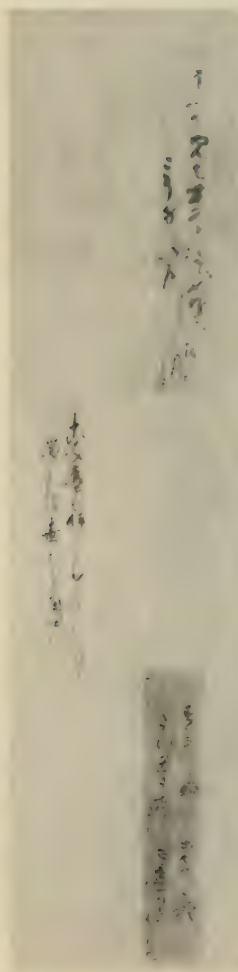
德岡主殿小野久風　花押

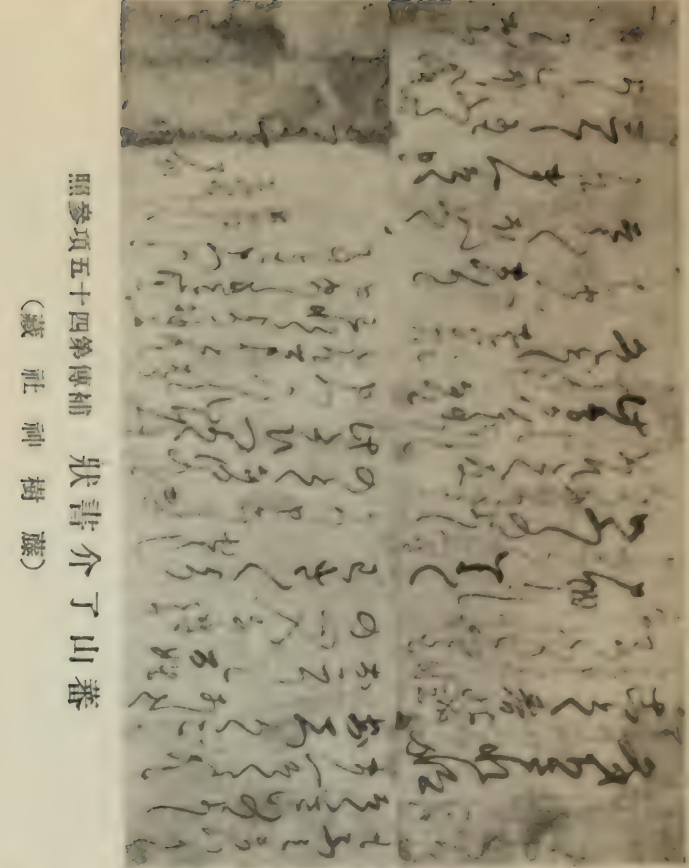
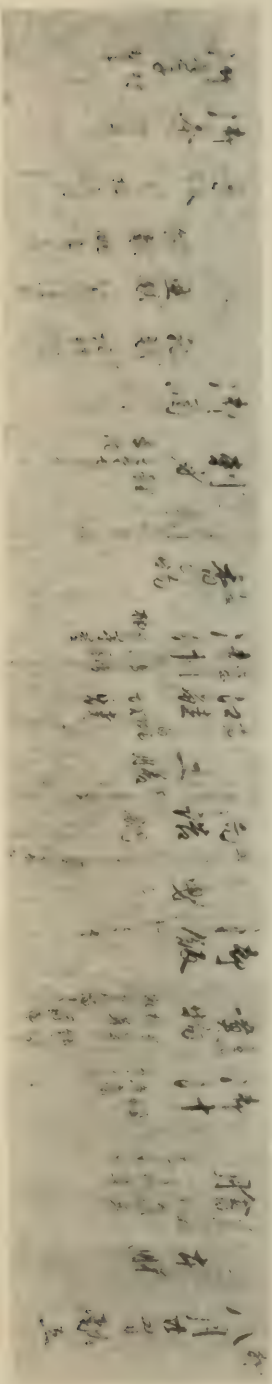
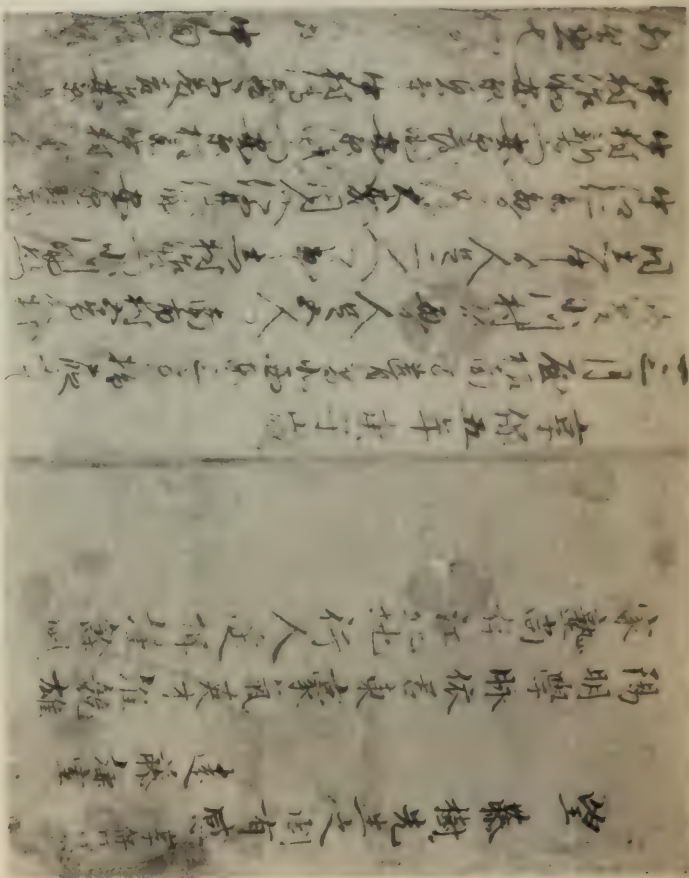
（德岡主殿小野久風は、京都市上京區田岡寺東門前町三二德岡久秀氏藏寛政八年正月德岡氏也へ書ける由緒書によれば、禁裡御所小間使役德岡左膳久徴養子、實は江州小川村住志村四介男と見ゆ。今日精之助氏報。（應陵））

（右二通藤樹書院所藏）

三二、歿後に於ける祭祀の模様　其一

按ずるに常省先生の小川庄次郎に送れる書翰に「講堂春之祭禮も何も御出會被成候而御執行被成、八月忌

光格天皇御下賜「德本堂」堂號

右大臣一條忠良公筆　補傳第三十七項參照

藤樹・蕃山・岡山三先生古歌三首　補傳第四十四項參照

（藤樹書院藏）

德本堂三大字是
右大臣一條藤公書
以所賜也
寛政丁巳初秋
醫學院法印惟和謹識

「德本堂」堂號御下賜に關する古文書

補傳第三十七項參照（藤樹書院藏）

蕃山了介書状　補傳第四十五項參照

（藤樹神社藏）

書院日記　景慕詩文集詩の部參照

（藤樹書院藏）

藤樹先生祭祀神饌物獻立　補傳第三十二項參照

（藤樹書院藏）

日之祭貿同志御來會、貴樣降神御務被成候而御執行被成被下候由、寔御厚情之至不勝感謝候云々。」といひ、三輪執齋の原田平八郎に送れる書翰に「岡田十之允殿舊冬參府久々にて對話御噂承之大悅仕候。御志も無間斷、八月先師御諱祭之節は講堂へも御會合被成候由奉感心候云々。」といへるが如き、當時門下同志の士が時々書院に會合して敬虔の誠を致し、傍ら遺書を研究して修養を怠らざりし一班を知り得べし。之を書院日記に徵するに、歷々として見るべし。今二三を摘記すれば左の如し。

享保五年

一、四月廿五日中村氏安原氏大森氏志村氏來會讀傳習錄。

一、八月廿五日藤樹先生忌日保井氏中村氏安原氏大森氏志村氏小川氏來會以時祭之式祭之。讀翁問答。

享保六年

一、正月十一日安原氏中村氏大森氏志村氏小川氏來會以酒殽祭二先生。讀白鹿洞規。

享保七年

一、正月十一日安原善藏中村新右衛門安原淺右衛門安原權兵衛中村作之右衛門安原貞平志村治左衛門大森周介小川介左衛門來會以酒菜祭兩主。讀傳習錄。

享保八年

一、八月廿五日小川介左衛門大森周介志村治左衛門安原善藏中村新右衛門安原權兵衛中村□助中村治助安原貞平淵田源兵衛來會。治左衛門因母氏之志獻赤飯於兩主。勢州森本甚五兵衛獻酒肴。貞平講論語先進三章。

左に志村竹涯翁の「書院記事」中より、藤樹先生年忌に關するものを抄錄すべし。

講堂　藤樹先生百回忌延享四年丁卯八月二十五日献立

膾　似鯉　大根ケンニ金柑　　煮染（ニシメ）　里芋　椎茸　かんぴやう　　汁　味噌　蓮芋ノクキ　鯉　柚　松茸

飯　曳物　向フ付　香ノ物　鯛燒物　ならづけ　かけ汁

（まゝ）二刺身 鯉細作子付 生姜 ケン柚 いか酒 かい敷 南天　汁 すまし 雀 茗荷 牛蒡 叩口山椒　切煮 （まゝ）鰤 蒸メ 鶉あんかけ

御酒　初献　大鮎あら鹽燒　亞献　鴫燒鳥

終献　蚫　吸物　松茸 鯇小串 蓮芋 酢味噌

後段ニ　鷄卵　餅　砂糖あん　茶　菓子 上々ノ干クハシ 梨子

以　上

（附記）藤樹書院に卯八月廿五日献立、と題する古文書を存すれども、大に異同あり。挿繪參照。（紫水）

講堂　藤樹先生百五十回忌　祭祀式　寛政九年丁巳秋

奉主　志村周助　序立　各々

參拜　各々鞠躬再拜　降神　小川丈太夫

進饌　南市村 安原當次郎　侑食　五番領村 中村新右衛門

初献　小川四郎二郎　奉肴　執事

讀祝　志村周助　祝畢再拜　各々

亞献　山本養碩　奉肴　執事

終献　志村周彌　奉肴　執事

闔門　執事　啓門　執事

献茶　執事　献菓　執事

（まゝ）辭神　各々鞠躬再拜　焚祝　志村周助

徹饌　執事　送主　小川丈太夫

執事役　中江三郎右衛門　北川宗左衛門

志村忠左衞門　志村新七　各禮服
淵田金七

献立

鱠　鯇魚 さうの芋 青豆 ケン金柑　御汁 ふくさ 鯛 大根 めうが　煮物 つぼ 里芋 昆布 焼豆腐 ぜんまい 氷蒟蒻

御飯　平盛り 鯇魚 くずかけ　向詰 鯛　刺身 鯉 煎酒 すり生姜

御酒肴　初献 はやすし　亜献 松茸 ひたし物 すり柚　終献

以上

庄屋志村清兵衛 年寄志村三之丞 初メ村中へハ酒肴同志之外他所ゟ拜祀人是等皆赤飯出ス、尤酒肴。此日祭祀畢而其比羽州大泉管原改造貫昌字 大輔 と云儒士周助方ニ滯留し、周次周彌兄弟ニ教授させ置ハ也。同人於書院客殿孝經啓蒙を講ず。他所ゟ聽衆數十人有レ之由。

講堂　藤樹先生二百回忌　弘化四年丁未秋

門下
安原權兵衞
小川城太夫
志村三治

献立

鱠　鯇魚 大根ケン　汁 鯉 味噌　壺 里いも ぜんまい やき豆腐

平　あめの魚 まつたけ 青ミ　燒物 鯛　猪口 ひたし物

御飯　赤飯之香物　初献　鮭魚　鮨　亞献　うぐい白燒
終献　鯉刺身　茶　菓子
　以　上
式終て後　赤飯但五斗　酒肴あびにしめなますしいらぬたひたし
庄屋淵田五兵衛年寄志村清次、松田庄左衛門を始メ村中へは酒肴、他所ゟ參拜人ニ赤飯酒肴を出ス。

三三、歿後に於ける祭祀の模樣　其二*

附、藤樹書院維持法の確立

*〔伊豫大洲に於ては明和三年八月十日に藩主加藤泰衛侯より川田資哲に達ありて「同書堂ニテ毎年藤樹祭可有之、祭料銀二枚宛、毎年被下候段御達」があり、爾來明治三年大洲藩主が江戸に引揚ぐる迄繼續せらる。近藤信氏報。〔藤陰二〕

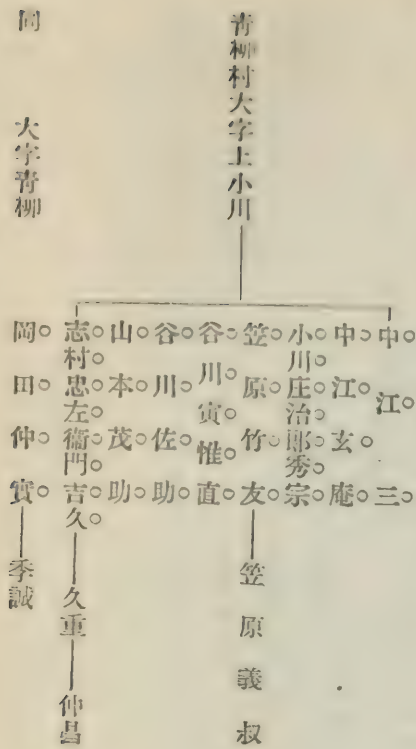
明治三十年は藤樹先生歿後二百五十年の忌辰に相當するを以て、四月吉日高島郡教員會は祭典擧行の件を郡長に建議せり。是に於て高島郡長原源太郎氏は郡內各町村長並各小學校長の參集を求め滿場一致を以て其の議を決し、青柳村長川越庄右衛門氏外數名を擧げて祭事委員を囑託せり。折しも突如として郡長非職の命に接したれば、有志等川越委員を擧げて委員長となし、以て祭主を兼ねしめ、京都下御靈神社社司出雲路興通氏指導の下に文公家禮に遵據し、郡內各町村の後援と教員會の賛襄とに依りて愈々九月廿五日を以て嚴粛なる儒式の祭典を擧行せり。此の日快晴滋賀縣知事以下參拜者遠近より集り殊に郡內外小學校兒童の祠前に額づく者約四千にも上りたり。東京杉浦重剛氏は知友某を遣はして祭文本全集卷之四十八祭文參照を奉れり。その他富岡鐵齋・谷鐵臣・市郡水香・岡本黃石・同宣成等の諸氏詩賦を寄せらるゝもの少からず。また始めて遺物展覽會を開きて一般の觀覽に供したり。

翌廿六日玉林寺に於ては佛式を以て法會を營めり。蓋し先生の墳墓その境內にあるを以てなり。また書院に於ては田谷永脩氏外二名の發起にて國典を以て先生を祭り敬虔の誠を致せり。

當時藤樹書院は別に維持方法の定あるにあらず。唯僅に鄕黨古來の傳統的習慣に依りて年々の祭祀を行ふ

に過ぎざれば、この好機に際し維持資金を募集し、以て遺物を永遠に保存し名蹟を千載に傳ふべしとの議あり。是に於て有志者相圖り川越庄右衛門の名を以て趣意書を發表せり。恰も好し明治三十一年三月河毛三郎氏（金澤人）來りて高島郡長の職に就かるゝや深く感ずる所あり。東奔西走朝野名士の賛襄を得て、全國各官衙各學校其他知名の士に謀るところありしに、同意を表せられたるもの少からず。竟に事　天閣に達し、明治三十四年三月六日を以て保存金として内帑より金貳百圓御下賜の光榮に浴したり。されば之に加ふるに一般より寄附せる淨金を以てし、金七千餘圓を得て基本金となし、永遠に之を消費することなく、其收入のみによりて維持するの方法を定め、尙管理の確實を期する爲郡會の決議を經て、明治三十八年四月藤樹書院を郡の經營に移し、藤樹書院財產管理規則を設け、また文庫を設立せり。大正十一年三月史蹟名勝天然記念物保存法により内務大臣の指定を受け、同年十一月十三日財團法人の許可を受けたり。

三四、江西に於ける藤樹學の消長と先師追慕の實狀

藤樹先生在世の時、近郷の子弟贄をその門に取りしもの多からん。今資料の徵すべき人々の名を擧ぐれば凡そ左の如し。

青柳村大字上小川
- 中○江○三○
- 中○江○玄○庵○
- 小○川○庄○治○郎○秀○宗○
- 笠○原○竹○友○―笠原義叔
- 谷○川○寅○惟○直○
- 谷○川○佐○助○
- 山○本○茂○助○
- 志○村○忠○左○衞○門○吉○久○―久重―仲昌

同　大字青柳
- 岡○田○仲○實○―季誠

（附記）右氏名の右に圏子を附するは藤樹先生の門人にして圏子を附せざるものは常省先生の門人なり。（紫水）

寛永十一年先生の小川村に歸らるゝや、領主分部侯移封後既に十數年を經たる時なれども、藩業創始の

際に屬し且つ藩士多くは大溝に在城すること少かりしを以て、直接の影響あらざりしが如く、唯僅かに傳記に見ゆるは小川村某の爲め先生の邑令別府氏を寓舍に訪へることありしと、正保二年伊賀守嘉治公が先生を引見せることあるのみ。伊賀守の先生を引見せらるゝや、接遇禮を盡されしも道を問ふことあらざりしは惜しむべし。後先生の先夫人卒去せらるゝや、藩臣別所友武の女選ばれて先生に嫁す。傳へ云ふ、是實に伊賀守の御聲がゝりに出づるなりと。幾もなくして先生歿せらる。備前少將光政公哀悼に堪へず。先生の母堂並に妹に扶持米を送り且つその三子を召して優遇せられたり。爾後幾十年資料の徴すべきもの乏しといへども、近鄉の子弟相會して春秋の祭祀を營み、或は書院の修復を怠らざりしことは常省子並に中江數馬の小川庄治郞におくれる書狀によりて略、想像するを得べし。常省子後年備前を辭して先生の遺跡に學を講じ或は京都に滯留して斯道の宣布に從事せることあり。此の間、近鄉の子弟日夕親炙して敎を請けしも常省子後出でて京都・江戶並に對州に在り。晩年對州より歸り、幾もなくして藤樹書院に於て歿せらる。是より先き岡田季誠十之允あり。先生の門人仲實の次子にして熊澤蕃山の甥なり。常省先生に學ぶ。少より藤樹先生の遺著を蒐集するを以て志となし、苦辛經營數多の年所を經て終に成る。名づけて藤樹先生全書となす。是に於て常省先生の序を請はんと欲し之を江戶に送る。偶、江戶大火あり、灰燼に歸す。季誠撓まず再び編輯に從事す。同時に近鄉南市村に安原貞平あり。霖寰と號す。常省先生の門下仲武の子なり。伊藤東涯に學び造詣最も深く德また高し。是に於て子弟を誘掖し時々藤樹書院に會合して學を講ぜしかば堀川の學風近鄉を風靡せり。蓋し思想の上より云へば、先師の學と相距ること遠しとなす。然れども先師に對する敬虔の念に至りては之が爲に一毫も動搖するところあるを見ず。しかのみならず、享保六年八月伊藤東涯の祠堂に參拜するあり。同十三年三月伊藤長堅、奥田三角等の來謁せるありて、却て異彩を呈するの觀ありき。

　是より先き大溝藩に在ては、常省先生の門下頗る多かりき。中にも磯野義隆・中村季貫・原田一溪諸氏の如きは篤學の士なり。磯野義隆は彌右衞門と稱す。篤學勤行の人にして屢々君を格し民を撫し、封内の民その澤を蒙らざるものなし。又光庸公をして學舘設立を企圖するの念を起さしむるに至りしもの、義隆與つて大

に力ありしといふ。中村季貫は藤樹先生の門人中村所左衛門の甥にして五番領村の人なり。享保六年分部光命公に召出され、また光庸公に歷仕す。季貫頗る學を好み藤樹先生に關する遺書を筆寫して家に藏せり。その子德勝鷲溪と號す。伊藤東涯に學び、後藩の侍講となる。原田知辰名は知德、一溪と號す。通稱平八郎夙に王新建の學を好み、常省先生に師事せしのみならず。また三輪執齋の門に出入せり。執齋の平八郎及びその子多仲に與ふる書簡の一節に

略岡田十之允殿舊冬參府久々にて對話御噂承レ之大悅仕候。御志も無二間斷一八月先師御諱祭之節は講堂へも御會合被レ成候由奉二感心一候。此方同志も無レ怠寄合候へ共、教導非二其德一候故、博取不レ申候而此道之益にも不二罷成一不本意恥入存候。中略此道易簡直切。親切明白。自致二良知一之外。無二他事一候。云々

といへり。知辰かくの如く王學に興味を有したりといへども、後志を翻して伊藤東涯に學び、鷲溪と相並んで藩儒となる。斯くの如く上下相競うて古學を宗とし、良知の學を喜ぶものなきに至りたるは、當時藩の事情止むを得ざるものありしならん。然れども先生を推尊するの念に至りては日を追うて益々濃かに月を經て愈々厚きを加へたり。

享保五年庚子安原貞平藤樹別集を撰す。

享保六年閏七月十三日分部左京亮光忠公は門下の願により講堂の地子を免せられ、同十一年八月十六日御黑印を下附せらる。爾來御代替りには必ず折紙を下附せらるゝの例となり。且つ又時々祭祀料を供せられたり。免租のこと二萬石の小藩としては異例に屬すと謂ふ。

享保六年九月藤樹先生墓域の石垣成る。京都より岡田以安外數名來りて墓を祭る。

享保七年壬寅十月中旬三輪執齋の筆に係る岡田季誠編藤樹先生全書和文序成る。次いで十年四月漢文序成る。曩に貞享二年正月季誠自ら藤樹先生文集に序せしより茲に至る實に四十一年を經過したり。

享保十一年六月安原貞平森寰藤樹先生書院記を撰し、先生を推尊して三代以上の人物となす。當時近郷の同志相謀り、森寰を盟主と仰ぎ毎月五・十の日をトし藤樹書院に會合して傳習錄・翁問答・鑑草等を讀み或は論

語・孟子を講じ連年絶ゆることなかりき。

享保十八年五月十五日領主分部光忠公參拜せらる。今藤樹書院日記中より斯道私淑者の參拜せるものを摘錄すれば左の如し。

享保六年五月十三日奧州會津松平肥後守儒者岡田此母勢州桑名川村武右衛門參拜。按ずるに、川村氏は二見直養の門人なり。
享保七年四月十五日江戸下村庄左衛門參拜。按ずるに、下村氏は三輪執齋の門人なり。
同九月十二日江戸花澤清右衛門參拜。
享保八年八月廿五日勢州森本甚五兵衛正貫參拜。
享保九年三月二十二日江戸三輪善藏・同爲之丞・加藤伊左衛門參拜。
享保十年三月二十九日播州平野澤田元立外二名參拜。
享保十一年三月十五日敦賀橋本元亮・黑川市右衛門參拜。
享保十二年二月二十日勢州津廣小路町石河文左衛門參拜。按ずるに、石河氏は淵岡山の門人にして藤樹先生學術定論の著者石河定源のことならん。本全集卷之四十六會津藤樹學道統譜參照。
享保十三年四月七日植木是水・谷靜齋・辻彦左衛門參拜。按ずるに、植木是水は難波翁の門人なり。同上道統譜參照。
同年七月七日大阪下博勞松本町山口屋伊兵衛參拜。
享保十四年三月十日勢州津小川玄朔・福谷享成・豐田多十郎參拜。按ずるに、小川氏は石河定源の門人なり。
同年五月二十二日奧州會津熊倉村森代平兵衛・京師辻彦左衛門參拜。按ずるに、森代氏は岡山先生の門人五十嵐養安の二子。同上道統譜參照。
同年五月二十五日奧州會津小田附村五十嵐小左衛門外六名參拜。
享保十五年三月二十七日備前陰土山（まゝ）岐丈右衛門參拜。
享保十六年六月十日奧州會津耶麻郡小田附村井上和右衛門・伊關半右衛門・二瓶善兵衛・新明善三郎參拜。
同年八月二十九日奧州會津耶麻郡小田附村東條清右衛門・同忠左衛門・富永源七・伊關新九郎參拜。
享保十八年三月二十一日勢州森本重矩參拜。
同年四月二十九日京師小倉鋼兵衛・河合桐葉外二名參拜。
享保十九年九月二十九日備前万波嘉右衛門・万波甚吉參拜。
享保二十年閏三月十六日敦賀安土吉左衛門參拜。
元文元年三月十三日敦賀橋本元亮外三名參拜。

元文二年七月三日會津小田附村星平八郎伊關儀左衛門參拜。
元文五年六月廿一日三輪執齋參拜。
（以上書院日記より抄録）

以上の記述により當時京都・江戸・會津・伊勢等岡山學派の人々が先師の遺蹟に對し如何に敬虔の念を捧へるかを知り得べく、而して之を目撃したる小川村近郷の士民が、また間接にその感化を受たることを看取すべし。

寛保元年三月廿七日川田琴卿その師三輪執齋の寄附に係る至聖文宣王聖像・王文成公眞像・先師御眞筆致良知の三幅並文宣王廟圖に金拾兩を添へ持參祠堂へ參拜。

延享四年八月廿五日諸生相謀りて、藤樹先生百年祭を修む。大阪中井甃菴・五井蘭洲・三宅才次郎・林益菴を始め十三人、備前中川權太夫謙叔の孫谷川平助玄卜の孫同次郎右衛門、江戸三輪爲之允を始め同志五十七人より香料を供しその費を助く。

同年秋十月四日藤樹先生全書編纂者岡田季誠歿す。

延享五年八月十三日大溝藩士原田平八郎、佐治心齋等王龍谿全集一部を藤樹書院に納む。

寶暦三年大阪鴻池彦右衛門・同宗吉より金拾五兩、中井忠藏・五井藤九郎・懷德堂社中より金貳百疋、江戸三村市右衛門・市川小右衛門・長尾傳藏・三輪爲之丞より金貳兩藤樹書院へ寄附せるを以て祭田の資となす。

同年仲夏七十四翁志村仲昌藤樹先生行狀聞傳を撰す。

二月十九日鄕隣諸生相謀り蘋藻を具して先師を祭る。

寶暦十一辛巳年八月十九日分部昌命公子參拜、原田太仲・同平吉・中村作彌等陪從す。同十三癸未年三月廿四日同公子藤樹書院の四大字の扁額を謹書し原田方綱をして之を納めしむ。蓋し志村當耕の懇望に由るなり。

按ずるに公子諱は昌命字は伯穀蘭所と號す。光命公の次男にして光庸公の弟なり。元文四年六月二日生る。二十七歳にして肥後國熊本侯の老臣三淵氏の嗣子となる。幼より穎悟學を好む。備臣原田龍江・同瀧川・中村鸞溪等を師とし學び經義に通じ詩文を能くす。その深く藤樹先生を追慕せることは橘南溪の東游記に見えた

り。（記錄その名を題とす。）人々傳へて美談とし鄕土の誇とたす。

安永六年六月二十日京師淵貞藏參拜す。貞藏は岡山先生の末裔なり。

天明五年十月八日東遊記の著者橘南溪、若洲小濱藩儒士西依丹右衛門參拜す。西依氏は成齋と號す。若林强齋の門人なり。

天明七年四月京都中澤道二參拜道話を述べ、植村庄助參拜、中庸を講ず。或は云ふ各々論語を講ずと。

寛政二年二月手島堵庵外一名參拜。手島氏心學を講ず。

寛政九年八月廿五日藤樹先生百五十回忌を修む。祭祀畢りて羽州大泉菅原貫昌孝經啓蒙を講ず。是より先き畏くも

主上光格天皇　常御殿に於て御潔齋遊ばされ聖像並藤樹先生の御書像を御叡覽の上、先生の高德御感あらせられ、德本堂の號を下し玉ひ、竊かに右大臣一條忠良公に御染筆を命せられ御下賜あらせられたり。同時に侍讀伏原從二位宣光卿致良知の三大字を書して寄附せられたり。

文政四辛巳年八月十五日江戸佐藤一齋參拜「書堂既閲百星霜云々。」の詩あり。編者或はおもへらく篠原元博氏の藤樹先生全集編纂の爲に江西に來りしは或は此の頃の事にはあらざりしか。

天保三壬辰年六月大鹽中齋も亦祠堂に謁せり。「院畔古藤花盡時云々。」の詩は實に此の時の作にしてその時の狀景は洗心洞箚記に詳かなり。翌四年六月中齋また參拜して王陽明全集及び洗心洞箚記を寄進し、九月書院に於て開講、次いで十一月書院修復費として拾五金を、翌五年八月「跋藤樹先生致良知三大字眞蹟」の大額を寄納せり。中齋の來るや、斯くの如く至誠を藤樹先生の祠前に捧げたるのみならず、或は藤樹書院に於て或は大溝の藩邸に於て循々として大虛の道を說き致良知の訓を高唱して止まざりしかば、士民大に共鳴し好學の風靡然として起れり。先づ小川村に在りては志村周次魁をなし、小川城太夫もまた之に參加せるもの〻如く大溝に在りては領主分部若狹守を始めとし分部天行・分部擴齋あり。また前田小右衛門・恒河羽太・原田太仲・長野主稅の如きも中齋の書翰によりて之を察するに、或はその門に及びしものならん。その他南市村の

早藤貞太・佐貫（サヌキ）村（今の安曇村大字田中の中に在り）の內藤長三郎等あり。陽明學勃興の機運まさに熟せり。惜しい哉、天保八年の一擧あり。志村周次先づ横死してその家亡ぶるに至り、城太夫・貞太・長三郎の如き途中亂を聞いて引返し、或は一時身を隱して漸く難を免れたりといへども、苟も多少因緣を有するもの何れも危惧を抱き、一時その爲す所を知らざりき。かゝる有樣なりしを以て中齋が多年涵養し來りし學風も一朝その跡を斷つに至りたり。

天保十一庚子年大溝藩士恒河子健廿二才にして京都に上り、春日潛菴の門に入れり。子健竹陰と號す。恒河羽太の子なり。後森門の俊秀を以て重んぜらる。

天保十四癸卯正月分部侯より永代祭祀料として銀壹貫匁御寄進當年より先生忌日には村內休業すべく達せらる。

同年四月一日藝藩儒者吉村秋陽參拜し古本大學を講ず。大溝藩士横田秋藏案內せり。秋陽は佐藤一齋の門人なり。恒河子健之を旅宿に訪ひ、藤樹先生眞蹟の跋を請へり。

天保十五甲辰年三月二十四日伊豫大洲藩川田觀平筑前秋月藩中島衡平參拜す。川田氏は雄琴先生の後裔にして中島氏は佐藤一齋の門人なり。

弘化二年十月恒河子健藤樹先生書簡集一冊を大溝より携へ來り之をその師潛菴に傳ふ。潛菴の藤樹學に共鳴するところ多きは蓋しこゝに基けるものか。

弘化四丁未年八月廿五日藤樹先生二百年祭を謹修す。淵岡山先生末裔河原敬治參拜祭文を奉る。

嘉永二年三月大溝藩士横田秋藏嘗て春木南溟に囑して、藤樹先生畫像を畫かしめ自ら文を題して之を上梓す。秋藏は箕濤と號し佐藤一齋の門に學ぶといふ。是より先き宍戸文亭藤樹先生畫像一幅を畫く。文亭は大溝藩士にして江戸定府たりしものなり。

安政二乙卯年大溝藩士分部圖書頭字復、三輪執齋先生肖像一軸を藤樹書院に寄納す。

安政五戊午年分部光貞侯儒臣川田甕江に命じて藤樹先生年譜並德本堂記を撰せしむ。同年仲夏江戸河田興

識海大溝侯の囑に應じて藤樹先生眞蹟致良知三大字の跋を作る。佐藤一齋の舊製「書堂云々」の詩を藤樹先生畫像に題したるはまたその翌年のことなり。此の畫像は分部光貞侯の嘗て鶴澤探龍に囑して畫かしめ藩學校脩身堂に掲げられたるものにして、明治に至り大溝藩士長野熈氏之を拜領して藤樹書院に寄納せり。

以上の記述により當時大溝藩を中心としたる陽明學勃興の一班を知るべし。大溝舊藩士故橫田耕次郎氏所藏雜記に曰く「光貞侯維新前隔年東都に于役する毎(まゝ)に佐藤一齋・河田屏浦・川田甕江・安積艮齋等を聘して毎月四書及五經等を講せしめ自己及び藩士にも之を聞かしめたり。」と。以て大溝藩に陽明學の興起せる由來を知るべし。

明治維新匆忙の際に丁りても、藤樹先生に對する敬虔の念に至りては少しも變ることなく、年々の祭祀敢て怠ることなかりき。今書院の記錄中より當時祭祀の狀景を左に摘錄して參考に供せん。

明治巳(まゝ)八月祭典日

拜謁人姓名

	野呂周德
	牧野鐵藏
	安原權兵衛
村役人	次良右衛門
	与兵衛
	源次郎
清酌	小川勝次郎
參(まゝ)薦拜	恒河三八郎
	小野寺秀發
清酌	橫田秋藏
	加藤辰三郎
	二村武次郎
	北村米吉

庚午八月二十五日

辛未八月二十五日

参　拜

分部從五位光謙殿

華士御附々

右

村役人

小川將治郎

淵田源治良

山本慶治

淵田源内

明治四年八月廿五日大溝舊藩主分部光謙氏は藤樹先生畫像板木二枚と致良知板木一枚及び大紋一領を寄納せられ、同年九月同藩士宍戸義智氏は至聖孔夫子の畫像一幅を寄納せられたり。明治八年九月大阪故篠原元博氏の息女里久子參拜し父の編著にかゝる藤樹先生全集一部並朱陸年譜通攷一部を獻じ、同十三年六月には下總國匝瑳郡蕪里村良知書院社中山崎天遊翁參拜し慶んで先生を祭り筵席を修造せり。與人その熱誠に動かされて之が感化に浴するもの少からず。故老今尚傳へて美談となす。翁歸りて未だ幾許ならず、書院類燒の厄に遭ひ、先生講學の書院一朝にして烏有に歸す。誠に悲しむべし。對馬にありし先生の末裔中江清壽氏の參拜したるも此の頃の事なり。かくて有志等深く書院の燒失を悲しみ、翌十四年篤志を江湖に募りて浄財を集め、同十五年に至り假りに一宇を建立し神主を奉祀して漸くその堵に安ずることを得たり。小川村出身大津淵田源右衛門外一名より柳涯郡田素行の筆に係る藤樹古跡の碑を寄附建設したるも此の頃の事なり。

惟ふに當時世擧つて西洋崇拜の思想その極に達し、舊物といへばその價値の如何を問はず之を破壞して顧みざりしが如き隨處に於て行はれたる時代なりしも、前揭長野熙氏並篠原里久子の寄附に係る二點のみは一時他人の手に委するが如き粗漏なかりしに非ざれども、此の外重要なる寶物は完全に保存するを得たり。

明治二十三年十月三十日畏くも　聖天子教育に關する勅語を渙發あらせ給ふや、混沌として向ふところを知らざりし我が國教育の方針茲に一定し、先生の德を慕ひ參拜するもの日に益々多きを加ふるに至れり。明

治二十五年安曇村の有志等月刊雜誌「藤影」を發行し先生の遺德を宣揚し、名敎の振作に資する所あらんとしたりしも不幸中道にして挫折するの止むなきに至りたり。時に藤樹書院所在地に志村巳之助なるものあり。先生の遺德宣揚を圖らんと欲して拮据幾年明治二十六年五月を以て藤樹全書一部を刊行せり。此の擧やその內容の杜撰にして世を誤りしは惜しむべしといへども、獨力以て之を敢行したる勇氣はまた嘉みすべし。

明治三十年は藤樹先生二百五十年の忌辰に丁るを以て高島郡敎員會率先して郡長に建議し盛大なる祭典を擧行し、之を機として維持資金を募集し、書院の確立を圖りしことは既に前條に詳記したれば今茲には言はず。唯こゝに特筆すべきは時の郡長河毛三郎氏は十年一日の如く熱誠以て事に膺り、同郡青柳村大字青柳岡田元誠氏を動かして、その祖先季誠氏の編藤樹先生全書一部その他有力なる資料を藤樹書院に寄附せしめたる事にして、今回の全集刊行をして容易ならしめたる素因は實に茲に在りて存するを知るべし。その他明治三十七年九月公爵伊藤博文閣下より藤樹先生眞筆心畫孝經一部を寄附せられたるあり。同年十月大溝町原田弘藏氏は安原霖寰筆藤樹先生書院記を寄附せられ、同三十八年九月揖家傳來の藤樹先生眞筆大學考及び解一冊並門人筆中庸(卷之十四解題參照)一冊等を寄納し書院の寶庫更に豐富を加ふるに至りたり。是より先き明治三十四年春大溝町笠井劼氏は藤樹先生直門の後裔たる安曇村大字五番領中村治助氏方に於て岡山先生書翰三冊大學旁訓一冊を發見して之を淨寫し、後之を藤樹書院に寄納せり。

明治四十年十月二十三日畏くも　聖天子勅して藤樹先生に贈正四位の恩命を降し給へり。時の高島郡長鵜飼元吉氏等恐懼に堪へず、末裔中江勝氏の遠く長崎縣對馬にあるを招致して十二月六日藤樹書院に於て位記の傳達を行へり。是に於て郡長等勝氏の前途につき深く考ふるところあり。郡會の議決を經て郡費を以て翌四十一年四月一日滋賀縣師範學校に入學せしめたり。同年六月二十三日二十四日の兩日に亘り、藤樹先生贈位奉告祭並常省先生二百年祭を擧行し、また弘く天下に檄して先生の遺筆を募り遺物展覽會を開催せり。大溝町上原信順安曇村早藤貞一氏等清風會の人々は「藤」といへる題にて和歌を天下に募り、正二位公爵山縣有朋閣下以下朝野名士の清吟を得て之を献詠せり。青柳村川越森之助氏等有志と謀り修道會を組織して、毎月

一回藤樹書院に會合し、傳習錄の研究に從事したるは此の頃の事なり。同年七月二十三日東京陽明學會主幹正堂東敬治氏參拜し孝經を講せり。爾後數回書院に參拜し斯道の鼓吹に努められたり。特に翁の參拜によりて淵岡山先生を世に紹介するの機會を得たるは注目に値すべし。

大正四年秋編者は「藤樹先生の面影」と題する一書を輯し、之を縣教育會の主催にかゝる教育資料展覽會に出陳したりしに、入選の榮を擔ひたれば、高島郡教育會に於ては、之を發行して教育の資に供せんとの議あり。委員を設けて精錬を加へ京都帝國大學文科大學教授文學博士高瀨武次郎先生の校閲を請ひ、同七年八月を以て「藤樹先生」と題して之を世に公にせり。同十一年十一月文學士加藤盛一同高橋俊乘の二氏は「御國の光近江聖人」と題する一冊を著はせり。此は前者が難語難句の續出するに顧み、平易なる口語體を以て記述し普及を圖らんとの趣旨に出でたり。大正七年八月郡教育會は東京孝德書院柴田甚五郎氏を聘して藤樹先生の事蹟並學說について講習會を開催せり。尚又書院所在地の青年團に在つては年々三月七日を以て藤樹先生誕生會を開催し來りしが、此の頃に至り、惺軒高瀨博士その他知名の士を聘して頌德講演會を開催し以て修養に資したり。大正十年の比、佐野郡長、加藤主任等の發起によりて「藤樹學會」を組織し以て今日に及べり。

是より先き藤樹先生二百五十年祭の謹修せられたるより以後、年々九月二十五日の御忌日に丁り文公家禮に遵據して嚴肅なる祭典を行ひ郡内各小學校は云ふに及ばず郡外よりも參拜するもの陸續として絕えず、眞に教育祭としての價値を發揮し社會人心の上に及ぼせる影響少からざるものあり。是に於て郡内教育家中、國民教育の立場より、神社を創立し國典を以て奉祀すべしと說くものあり。此の意見やがて輿論を喚起して終に藤樹神社を創立し神明として先生を崇敬するに至りたり。その委しきことは後條に記述するところあるべきを以て、こゝには之を省略す。而してこれと同時に本全集の刊行を企て先生の學德を千載に傳へんとの計畫あり、拮据十年、終に今日その成果を見るに至りたり。

三五、大洲に於ける藤樹先生の邸址

〔拙稿「藤樹研究の新資料」第九項參照。（藤陰）〕

大洲に於ける藤樹先生の邸址に二あり。一を字桝形とし、一を鐵砲町とす。前者は今の大洲尋常高等小學校敷地内北詰の端にして、中川善兵衛貞良の邸址と相接し、道を隔てゝ止善書院址と相對す。口碑に祖父吉長公時代住居の址なりといふ。後者は縣立大洲中學校の所在地にして、祖父の歿後こゝに移り、寛永十一年先生辭去の時まで居住せる所なり。先生の大洲を去るや、村上氏繼いでこゝに住し、後梶原氏の住するところとなりしが、明治三十四年大洲中學校の創立せられしより、漸次敷地擴張せられ、先生の遺蹟も全く舊觀を改むるに至れり。明治四十年十二月藤樹先生邸址碑を建つ。碑は文學博士巽軒井上哲次郎氏の揮毫にしてその傍らに藤棚あり。是れ先生遺愛の藤の孫生を藤樹書院より移植せるものなり。また先生の日常使用せられし井戸あり「中江の水」と命名して碑に刻せり。按ずるに大洲藩にては養子又は幼年にて相續するものは祿高を減じ置き、後日の勤振によりて漸次元の祿に復歸せしむる制度にして、嫡子なれば七才以上御目見の式を終れば、父の祿高をそのまゝ相續するを得れども、先生は養子の身なれば、祖父の受けたる百五十石を減じて百石とせらるゝと同時に、また邸宅も祿高相當のところに移轉を命ぜられしなり。然るに元和四戊午年三月五日御家中支配帳に「百石中江德左衞門」と明記せり。德左衞門とは先生の祖父吉長公の事なり。果して然りとせば如上の敍述は否定せらるゝことゝなるなり。編者は此の問題に關し書を大洲舊藩士七十八翁下井小太郎氏に寄せて質疑したるに左の如き回答を得たり。

（前略）御祖父吉長翁の食祿百石云云に付御申越の趣も有レ之、察するに祖父吉長公も最初は百石にてありし者にて御本人の存生中に百五十石に増祿相成りたるものと被レ存候。否らざれば嫡男に非ざる養嗣子の藤樹先生にして百石の食祿を受けらるゝ筈なきは、舊大洲藩の祿制に於て明瞭の事實と小生は確信致候。若し吉長翁にして終身百石の食祿にてありしなれば、相續人たる藤樹先生は十五人扶持の食祿を受けられたる筈の祿制にてありたり。右にて御判斷相成度要するに、吉長翁の時代に百五十石を領し、先生の御相續以後百石に減少せられたるものと御承知被レ下可レ然と存候云云。（大正十三年五月十三日）

思ふに元和四年は藤樹先生年僅十一歳即ち祖父は郡宰として風早に在りし時なれば、後大洲に歸りて藩公直屬の家士に遷られし後、御加增のことありしこと下井翁の言の如きものありしならん。

三六、風早郡に於ける藤樹先生の遺蹟に就いて

一、序　說

藤樹先生の祖父吉長公の郡宰たりし當時の治所は多分今の愛媛縣溫泉郡河野村柳原邊にあるべしとの事は大正四年十一月二十九日大洲に於て擧行せられたる川田雄琴先生贈位奉告祭に於ける縣立松山高等女學校教諭景浦直孝氏の講演筆記に見えたり。越えて大正八年八月畏友柴田㵎天氏同地を訪問して大に得る所あり。歸途藤樹書院に參拜して快談せられたることありき。大正十二年十月編者は藤樹先生に關する資料研究の爲大洲地方に至り、滯留數日歸途同地を訪問したるに、偶然その邸址に住せる沼田新七氏外二三の故老に邂逅して詳細なる說明を聞き、また實地を踏査するを得たれば、更に伊豫史に造詣深き西園寺源透・景浦直孝の二氏を松山市に訪ひ、精査の後、漸く柳原邊とすることとの確信を有するに至れり。然るに大正十三年十二月景浦氏は「伊豫史精義」と題する著を公にせり。その中に「藤樹の祖父吉長は風早郡宰として溫泉郡河野村別府邊にありしならんと考ふれども徵證を得ず。」と記せらる。編者は不審に堪へず、直ちに書を以てその意見を徵したるに、來書に云ふ。「江戶時代統治の狀況を見るに別府がやはり中心にして、庄屋(名主)も同地にありて柳原には無之云々。」と。また第二信に「松山領里正鑑」を引用して里正の別府にありて柳原になきことを明示せり。偶々文學士德重淺吉氏の來遊せるあり。編者質すに此の事を以てす。氏曰く「庄屋(里正)は元來民選のものにして郡奉行は官選のものなるを以て庄屋の有無を以て直ちに代官所の存否を決すべきにあらず。」と。大正十四年六月下旬大洲に於て藤樹先生銅像改鑄除幕式の擧行せらるゝあり。編者は參列の爲大洲に赴きしが途次再び同地を訪問し豐田爲市氏外數氏に就いて調査をなしたるに、柳原の遺蹟地たることは動かすべからずとの確信を有するに至れり。憾むらくは火災の爲書類燒失して一々徵證を得るに道なきことを。左にその梗概を記して參考に資せんとす。

二、梗　槪

松山市の北方約四里にして柳原あり。溫泉郡河野村大字別府の一部に屬し戸數約三百を有す。松山北條間の要路に當り東は別府に隣して山に面し、西は瀨戸内海に濱す。此の地一圓もと風早郡と稱して大洲藩の領地なりしが、寛永年間（西園寺源透氏曰く、溫故集に替地を寛永四年となすは誤謬なり。前後の事情より推考するに恐らくは十一年の冬若くは十二年の春頃ならんと。）八十三箇村と共に松山藩の米湊といへる地方（今の郡中方面）と交換せり。爾來北條を本地と稱し、當地方を替地と稱すといふ。明治二十九年風早郡を廢して溫泉郡に併合せり。按ずるに伊豫二名集に「屋敷得居半右衞門尉觀應四年今岡通任河野家より柳原村に居地を玉ふと云。天正年中得井氏住。」とあるもの卽ち當地城の起源ならんか。邑の中央に一町四方の地あり。前田太七氏報に南北五町東西二町とす。もと免租地たりしといふ。その中に約六百坪の邸址ありて、今、沼田新七・忽那虎義・小林太七等三氏の住宅地となれり。是れ卽ち藤樹先生の祖父吉長公の邸宅のありしところにして、先生十一歲大學を讀みて發憤せられたるは實に此の地となす。無格社三穗神社（氏神）の境內と相接續して東南に川（近年縣道造成の爲潰川させるところ）あり。西北に道路あり。邸內に櫧櫟木あり。直徑約三尺三寸高さ約六七間もあらん。傳說に大洲より移植せるものとなし、同地には此の外更に該樹を存せずといふ。また古井二個あり。是等の數者今尙坐ろにその昔を偲ぶに足れり。沼田新七氏曰く、「先生手植の榎ありしも、先年伐採したり。」と。惜しむべきことなり。

無格社三穗神社の傍に小祠あり。大洲藩主加藤泰興公を祀る。棟瓦に蛇の目・下り藤等の紋を刻せり。里人之を月窓樣と呼び、崇敬極めて厚し。その傍に來島德右衞門を祀れる瓦製の鎭守あり。古來每年七月十五日夜村內男女相集り、俗稱を唱へて立念佛を行ふと云ふ。而して右來島氏は藤樹先生の叔父なりとの傳說ありて里人は堅く之を信ずるものゝ如し。西園寺源透氏曰く、「來島德右衞門は越智郡來島氏（今の久留島子爵家）の一族ならん。此の地來島氏又は其の一族得居氏の領分たりしことあり。その當時の人ならんか。」と。惟ふにその名の相似たるより終に誤つて吉長公に附會するに至れるものなるべし。その祖父を誤つて叔父となすが如きありといへども、かゝる傳說の存するは明かに遺蹟地たるを物語るものといふべし。

また邸址を距ること約一町にして禪宗一心庵と稱する寺院あり。大洲藩主を本尊とす。位牌に圓明院殿月

意定心大居士と刻せり。其他御藏所・會所・揭示場・士族屋敷・牽場等ありたりとて豐田爲市氏は一々之を指點せり。是によりて之を觀るときは、江戸時代に於て當地が政治上の中心たりしことは否むべからず。隨つて代官所の所在地たりしことは明かなり。而して一方別府にはかゝる由緒地の存するもの更になしといふ。

因みに豐田氏は代官所の址と稱するものを聞かずとて自ら說を爲して曰く、「圖中縣道の東側不明（ホ）と識したるところ（次頁見取圖參照）矩形を爲したる一廓にして由緒ある邸址と見ゆ。是れ或は代官所の所在地にはあらざりしか。」と。西園寺氏曰く「郡宰の邸即ち代官所なりしなるべし。」と。德重文學士曰く「吉長公の時代には固より同邸にて政務を取りしものならんも、後に別の所に移りしものなるべし。」と。次に參考資料を併記せん。

（古文書）

元治元年

御用日記

一、十月二十二日於二柳原會所一村々之通御渡之節御代官所方左之通被二仰下一候事

風早郡小山田村　百姓作五郎（以下略之）

二、七月七日於二柳原會所一參會之節左之通申定候事（以下略之）

（松山市　西園寺源透氏所藏）

口碑

（イ）柳原多美雄氏は柳原の產なり。乃ち曰く「余幼時家庭にありて讀書せるに藤樹先生に關する記事ありしかば、祖父側らより余を顧みて先生は尚幼少なりしを以て手を引かれて此の地に來れるなりと云へることを屢々ありき。」と。

（ロ）沼田新七氏曰く「先生十二歲にして母を慕ひ近江に歸れりとの傳說あり。」と。

（附記）

諸書に散見せるもの

（イ）年譜　元和三年・同五年・同六年の各條。　（ロ）行狀事狀　先生の立志。

（ハ）大洲舊記並別傳　盜賊並欠落者云々。

以上（大正十四年七月十八日稿）

三、見取圖

北
東
西
湊
中府南字
免租地
東府中
免租地
藤樹先生邸址
士族屋敷
(イ)チシヤノ木
(ロ)エノキ
(ハ)末島徳右エ門鎮守
(ニ)大洲月窓侯ヲ祀レル小社

三七、中江藤樹書置一卷の僞作なることを辨ず

（一）中江藤樹書置

中江與右衛門學問王陽明の跡なかんがへ性理至極良知良能のおしえなたづれ、道春ほどに博文にはあられど、德實な本として眞理な探り出されけるハ此の人の大功也。其氣象自然と顏淵の風あり。一度仕官に身な任せ東國にありし時、老母壹人近江にあり。あるとき與右衛門文な母の方へ遣はし東國に呼下し、朝夕膝下におゐて養育せん事ないひ送られける返事に、其方學問なつとむる程もなし。「婦人は境な不レ越。」といへる古語なしらずやといひおこされけるにぞ、與右衛門身のあやまりなしり、大にはぢて主君へいさまのれがひな再三申上けれども承引なければ、ちからなく書置一通のこして家財なふりすて着のまゝながら江州へ立のき老母にかしづけり。其の書置の文に曰、

我等老母壹人江州に罷在候。母子相はなれ候てハ養育心にまかせず候故、當地へよび下しはごくみ申度由文にて申遣し候へバ、返事に婦人は境な不レ越と申越其國な出べき氣色なく候。親壹人子壹人の事に候得ば某な賴たよりにいたし罷在候所に、かよふに國なへだて親な他國に捨置候事道ならず存候故、しきりに御暇之義奉レ願候得ども御宥免なければ、ちからおよばず、ただ今立退申候。しかればば不忠の者と可レ被レ爲二思召一候得ども、つらつら忠と孝との二つなかけくらべ候に、君は祿な以て御招候得バ我等ごときの庸儒ハいかほども御家に集可レ申候。さて又老母ハ某にはなれ候てハ他にたのむべきもの無二御座一候。されバ忠孝の二つなわきまへ見申に孝ハおもくして忠ハかろし。私義はおもき方へ心ざしかろきなすてて立退申者也。かやうに御家な出かされて二君に仕べき心底無レ之候。此段聞し召わけられずして不屆に被二思召一候はゞ如何樣とも可レ被二仰付一候。少も御恨に不レ奉レ存候。道の重きにひかされ罷出候得ばかりそめに御厚恩なわすれ申候に似たれども天命の至極におゐてハ愚夫の了簡此上に難レ及如レ斯御座候。以上。

中江與右衛門維時

右之書置な大守聞し召れ、かんろいな流させ給ひて則家財な不レ殘取したため跡よりそのまゝ江州へ送り屆給ひぬ。誠に德義の至、中興の君子此の人につづくものなし。志あらん人ハ翁問答備生雜記な見て與右衛門の行跡なあふぎ給へや。諸縣太平記七卷ノ抜書ニアリ。

介壽筆叢一册盞山地覺藏介壽之所二抄錄一也。今以レ遍二撰者名一記レ之備二後日探索一云。

天保七年丙申正月

教授官員安並雅景

（明治三十四年八月以二東京帝國圖書館本一一校了　近藤圭造）

又類例としては、

玉手箱　細工流之見立次第

礒近き比、陽明流の學者備州岡山に德を殘し、熊澤了海と聞へしハ其先きいづれも道を傳へ玉へる。かの手筋を專ら心學と申由承候。（まゝ）聞。嚮されば其事學に二つなく道ならば道學ならば學とこそ申べし。諸のおしへ多七千餘卷之藏經、五千言の道德、莊子之三十三篇尹子列子等の書、三皇・五帝・周公・孔子の書ありといへ共、此心の一字を説に不ㇾ過。學問の道無ㇾ他。其放心を求る而已と孟子の示し玉ふなれば、あながち心學と別て名くべきやうなし。右熊澤を以て心學者と稱するは了海が心にあらず。抑々熊澤が理學のはじめを尋ヌるに爰に中江与右衛門とて西國の太守に仕へ知行二百五十石領して在江戸之務なり。然るに中江が老母一人江州日野といふ所にありけるを、與右衛門呼下し、東武に於いて養ん事をおもひ迎ひを上せて下向を招きけれども、夫人は不ㇾ越ㇾ境といへる聖敎を守りて老母中々納得せず。依ㇾ之與右衛門止事を不ㇾ得主人に申立、老母を養育仕度存候間暇を被ㇾ下候へと願けれども、中江が才德を惜しみ玉ひ更に暇を赦し玉はれバ、今ハ与右衛門力不ㇾ及、或時一通の書置して家財一つも手を不ㇾ附殘し置、身ずから密ニ立退ける。書置曰、

私在所（一本大郷ニ作ル）江州日野ニ老母壹人有ㇾ之（一本在候ヲ二作ル）手前郷（一本取ニ作ル）に呼寄養育いたし度候間（一本存ノ字アリ）度々迎をいらへ遣招申候得共（一本遣候ニ作ル）、夫人は（と雖モ死アリ）不ㇾ越ㇾ境と申金言を相守承引不ㇾ仕候。就ㇾ夫先頃頻に暇を奉ㇾ願候得共御赦不ㇾ被ㇾ下候。倩々廻ニ思案ㇾ候に老母は拙者壹人を賴候得ば、離ニ遠境ㇾ住居罷居候而者、且暮之氣遣やる方なく覺候。依ㇾ之此度不ㇾ顧ニ恩儀ㇾ密立退候事不忠之者と可ㇾ被ニ思召ㇾ候。乍ㇾ然忠と孝と引くらべ候ニ忠ハ輕く孝ハ重し。其故ハ君以ㇾ錄被ニ召抱ㇾ候得者、如ニ我等ㇾ之者御家ニ何程も相勤申候。又老母は私に離れ候而者仝賴寄べきもの無ニ御座ㇾ候。然者孝之重き方に罷越度存立候。勿論ニ君に可ㇾ仕心躰無ㇾ之候。ケ樣申候事不屆ニ被ㇾ爲ニ思召ㇾ候はゞ後日被ㇾ成ニ御尋ㇾ候て何樣ニも可ㇾ被ニ仰付ㇾ候。毛頭御恨不ㇾ奉ㇾ存候。以上。

月　日　　中江与右衛門藤樹

右之書置を大守披見ましく感涙し玉ひて、卽彼が殘し置ける家財を取り集め江州日野迄送られけるとなり。扨与右衛門ハ在所にいたり老母にかしづきたゞ閔子の恨をかくし、ひとへに曾子の志をあらはし、朝夕孝行に仕へ、常に象山文集傳習錄抔を陽明の學ニ翫び江西の儒と呼れける云云。（餘姚學苑）

前者は史籍集覽第十一冊介壽叢書中に編入せるものにして、その原本諸藝太平記は一名元祿太平記といひて八卷あり。元祿十五年三月京都五條通書肆桝屋青山爲兵衛の出版にして、元祿十四巳の冬の仲といふ自序あり。大正五年十一月國書刊行會より江戸時代文藝資料第五卷の中に收めて出版せり。著者は梅園堂といふ。此の梅園堂とは都の錦の匿名にして本名を宍戸鐵舟といひ大阪の人なり。又儒書を伊藤仁齋に、歌書を北村季吟に、作歌を烏丸資慶卿に學びたるも、戯作家となり、後罪を得て薩摩に流されたりと藤岡東圃遺稿卷四

近世小説史に見えたり。

此書載するところの書置文は内藤聚燦著近世大儒列傳を始め巽軒井上博士著日本陽明學派之哲學其他現代大家の著書に引用せるもの少からず。余はその世を誤ることの大なるを恐れ、大正六年六月陽明學誌上に之を論じて識者の教を請ひたり。後者は徐姚學苑と稱し巽軒井上博士の秘藏本にして、薩摩の王學者伊東潛龍の輯錄に係る。著者詳かならずといへども兩者頗る相類するものありと謂ふべし。

(二)僞作なりとする理由

一、書置文の出處について

藤樹先生致仕書の原文は夙に岡田氏本藤樹先生年譜並三宅石菴編書翰雜著等諸書に收錄せられ（本全集卷之二十上佃某參照）現に大洲舊藩士故中村四郎太夫氏の家世々珍藏し來れる致仕書の書軸は先生の眞蹟を敬寫したるものなりと思はる。然るに前記の書置文に至りてはその出處詳かならず。舊大洲新谷兩藩ともその寫をだに傳へず。殊に岡田季誠編藤樹先生全書を始め先生の書翰に關するもの十九種の多きに上れるも、一として此の如きものを載するところなきはいかにや。されど古來先生が書置して立去れりとの説をなすものなきにあらず。藤井懶齋の本朝孝子傳即ち是れなり。同書の後叙に甲子の年の奥書あり。甲子は貞享元年なれば、孝子傳の成れるは元祿十四年に先つこと實に十八年なりとす。また編者頃日伊豫國喜多郡久米村矢野眞枚氏秘藏に係る藤樹先生傳と題する古寫本一冊を借覽せり。中に德田彥六のものせる一文あり。曰く、

藤樹先生大洲致仕之時書置して退給へるとみな人申傳ふ。藤井氏の本朝孝子傳に載せらるゝも右に寫し置ごとくぞ。しかるに今中村氏の家に傳へし先生自筆の書翰を得て見るに左のごとし。又ある人の物がたりに神山道長翁のかたられし某若き時先生とつれに親しく致仕之砌も長濱迄見送りしと申されしと。ケ樣之事によりて考レバ御暇の願も叶で退去し給へると見へたり。潛かに遁レ給ふといふは不審なり。倂考べし。

德田寄隆識

右彥六は大洲藩家老佃小左衞門の玄孫にして常者先生に師事せるものゝ如し。是によりて之を觀るときは當時大洲地方に在りてはかゝる流言の一般に行はれたるものと見えたり。然れども此は致仕書に對する俗傳に過ぎずして、別に書置文なる書實存したるものに非ざるや明かなり。

二、文體上の異同

先生の手に成れゝ書翰文凡壹百通は載せて書簡集三卷にあり。讀者一讀して、直ちに文體の相違せるを看取すべし。

三、用語の異同

孝養とあるべきところを養育云々に作れり。翁問答鑑草等を始め書簡文中かゝる用例あるを見ず。

四、言辭不遜

致仕書の言々句々至誠の文字ならざるなきに比し、書置文の如何に不遜にして禮を缺けるかを思ふべし。

五、思想上の矛盾

孝は重くして忠は輕し云々の一句あり。時封建時代に屬し、こゝに見ゆる忠なる文字は今日吾等の考ふる皇室に對するものと固より區別ありと雖も果して先生にかゝる思想ありしや否や。編者は翁問答中より一二節を摘錄してその然らざる所以を明かにすべし。

イ、君父は恩等しき者なり云云。(本全集卷之二十二、一〇頁)

ロ、君のおんはおやの恩にひとしくおもき厚恩なればおやにつかふるごとく心をつくしてつかふまつるなり云云。(同上三一頁)

六、署名の妄

中江與右衞門維時と署名せるも先生の字は惟命なり。また「玉手箱」に藤樹に作れるも先生自ら藤樹と署名せること曾てこれあることなし。

七、史實上の矛盾

玉手箱に「私在所江州日野に老母壹人有之云云。」といへり。取るにも足らぬ僻事にして抱腹絶倒に堪へず。また「一度仕官に身を任せ東國にありし時老母一人近江にあり。」といひ、玉手箱に「爰に中江與右衞門とて西國の太守に知行二百五十石領して在江戶之務なり。然るに中江が老母一人江州日野といふ所にありけるを與右衞門呼下し東武に於ゐて養ん事をおもひ迎ひを上せて下向を招きけれども云云。」といへり。その日野といひ、二百五十石といひ、在江戶之務といへるが如き、全然無稽の言のみ。末尾に「右の書置を太守聞召されかん

るゐを流させ給ひて御家財を不殘取したゝめ後よりそのまゝ江州へ屆給へぬ。」とあり。此事諸書に引用せるものありといへども、古傳の書吏に傳ふるところなし。

以上列擧する所によりて書置文の先生の筆にあらざることは自ら釋然たるものあるべし。

三八、藤樹先生畫像に就いて

藤樹先生畫像は大別して𧘕𧘔を着せる坐像と深衣を着せる立像の二とす。左に之を細説すべし。

一、𧘕𧘔姿の坐像

（イ）藤樹書院最古の畫像。藤樹先生行狀聞傳に先生歿後門人淵岡山が先生の母堂榮松公に談じ畫工に命じて三幅を畫かしめたるをいへるものにして、裃に藤巴の紋あり。三幅の中一幅は今尙藤樹書院に現存し、他の一幅は京都市上京區小松原北町福井直子氏之を秘藏す。此の幅恐らくは京都葭屋町講堂の重寶たりしものならん。淵學紀聞に、淵宗誠家藏藤樹先生眞一幅。吾友津川仲通嘗就德岡氏得請寫之。先生儀貌豐碩朗目。疎眉束髮。著肩衣及袴。垂手端坐。瞻仰之不覺起敬。（一齋佐藤君云。書院藏先生故衣數。稱皆極濶大。意疑何等軀幹解穿了這様衣。後睹玆像方信其堪用。）といへるもの卽ち是れなり。殘りの一幅は所在詳かならず。而して行狀聞傳の記事稍々明瞭を缺けるところありて或は岡山先生の畫かしめたりといふは玉置氏の寄附に係る深衣立像の肖像ならんかを疑へるものゝ如し。然れども書院藏幅の裏に京都淵氏所寄付とあり。また福井氏の藏幅も藤樹書院のものと全く同一なれば疑を挾むの餘地なしとす。按ずるに此の肖像最も古く且つ正確にして而も一種冒すべからざる陽明學的氣象の窺はるゝあり。不知不識畏敬の念を覺えしむ。寬政八年秋畏くも　光格天皇の　叡覽を賜ふ。大正九年九月滋賀縣高島郡大溝町原田知近氏の藤樹神社に寄附せられたる梅戸在貞畫伯揮毫の畫像は實に此の幅を擴大謹寫せるものにして、同十一年五月大阪市森下博氏の玉林寺に寄附せられたる石本曉海氏作藤樹先生木像並に大正十四年東京原安民氏の鑄造に係る大洲城上安置の銅像はいづれも此の畫像を原據とせるものなり。また大阪市外石切住吉川又平氏所藏に係る現代南宋畫の巨匠小室翠雲畫故元帥山縣有朋公の自ら歌を題せるものあり。是れまた同樣の系統に屬するものならん。

(ロ)　豫州傳來の畫像。川田雄琴先生の止善書院記の追加に「先師御像之事元文五庚申年同志阪井尙房於東武狩野友甫を寓居に招寫得し肖像なり。」といひ、また行狀聞傳にも同樣の記事あり、「尙一幅は江戸明倫堂の御肖像後に豫州明倫堂に安置し玉ふ。一幅は小川村祠堂に安置したまふ。」といへり。然れども今いづれも傳はらず。而して從來止善書院に安置せるものは落款に住吉內記の四文字あり。此の幅解藩の當時故ありて同藩士森井喜八郎氏の有に歸し、後その子良策氏携帶して函館に在りしが、大正三年四月八日大火の爲燒失せり。幸愛媛縣立大洲中學校にその寫眞を藏せるを以て原形を存するを得たり。而して住吉內記と稱するもの數名あるを以て筆者のその何れに屬するかは知り難く、隨つて年代の推知また困難なりといへども、社の肩巾廣く且つ襞積の四裂せるは明かに後世のものたることを立證するものなり。按ずるに該畫像は御容貌頗る八面玲瓏たる君子の風ありて孔子の所謂溫良恭儉讓の風丰濃厚に顯はる。また以て當時學者の先生に對して畫きたる容止の一班を窺ふに足るべし。

(ハ)　大溝藩傳來の畫像

(1)宍戸文亭の筆一幅。大溝町藤井大藏氏之を藏す。文亭は分部藩江戸定府の士にして畫を谷文晁に學び、弘化四丁未年正月歿す。享年六十六。此の畫像筆力雄健にして大作たるを失はず。また是れと全く同型の幅に鶴澤探龍六十歲の筆あり。八十八翁佐藤一齋の「碩人已矣幾星霜云云。」の贊あるを以て世に知らる。而して佐藤翁八十八歲は安政五年に當るを以て、此の畫像の成れるは此の年以前なるを明知すれども、文亭筆との前後は之を知るに由なし。此の幅もと大溝藩學校脩身堂の舊藏なりしが、同藩士長野熈氏之を拜領して、藤樹書院に寄附したるものにして、後故ありて同郡饗庭村大字饗庭河原林橘郞治氏の珍藏するところとなりしが昭和四年一月再び藤樹書院の有に歸したり。その木版は藤樹書院に藏す。大溝町磯野剛氏所藏の幅に「安政七庚申三月光貞侯より拜領」との文字あれば、其の上梓の年月が安政七年以前なるを推知すべし。

今此の兩者を豫州傳來の畫像と對照するに、此れは彼れに比し溫乎たる中に稍々剛毅の氣象の顯はるゝを見る。その他仔細に觀察するときは異同固より少からずといへども、その扇子を右にし刀の紐を下げたる等大體の結構相似たり。〔大溝侯より拜領したるは長野忠順にして書院に寄附したるは其の子熈とす、現存の人なり。熈は誤字。松本義懿氏報。(藤陰)〕

(2)春木南溟筆一幅。大溝藩士横田公恭は佐藤一齋の門人なり。嘗て春木南溟に囑して藤樹先生の肖像を畫かしめ、自ら文を題して之を上梓す。是れ嘉永二年三月の事なり。その題せる文に云ふ「頃得先生肖像摸寫上梓云々。」と。然れども今その據る所を詳かにせず。按ずるに此の像狀貌魁偉にして諸家の描くところと全く撰を異にし、中齋の所謂發強剛毅の氣象を濃厚に發揮せるものなり。以て當時學者の陽明學に對する思想の一班を表示すると共に、また先生性格の半面を描寫せるものといふべし。（委しくは野田笛浦の藤樹先生畫像記を見るべし。）

また別に木村梁舟の畫ける一幅あり。同郡朽木村大字岩瀬石井齋太郎氏の秘藏に係り、大正十五年九月藤樹神社に寄附せるものなり。此の幅大體の結構前者と略々相似たるも詳細に觀察するときは異同また少からず。梁舟は京都の畫家にして慶應の頃の人なり。而して南溟もまた同時代の人なれば、兩者の間に何等かの關係あるべきも、今は知るに由なし。

因みにしるす。上來述ぶる處何れの畫像も都て社に藤巴を付せるも此の兩者に限り、下り藤に一文字を畫けるものを用ひたり。按ずるに藤樹書院祭器中に同樣の紋章あり。參考すべし。

(二)　藤樹神社什寶の畫像

該畫像の由來は原田知近氏の奉納書に詳かなれば左に之を掲ぐべし。

近江聖人藤樹先生御畫像（杉浦重剛先生贊　梅戸在貞畫伯筆）

明治二十五年滋賀縣高島郡安曇村の有志が東京なる杉浦重剛先生の稱好塾の後援を得て月刊雑誌「藤影」を發行し、其の附錄として杉浦重剛先生の

何要後進贊。和光而同塵。
早已有天爵。曰近江聖人。

との贊を揮毫せられたる狩野友信筆の近江聖人の御畫像を頒布したることあり。知近安曇尋常高等小學校に職を奉じ常に該校に掲げられたる右の御畫像を拜し、高風清節一代の師表たる杉浦先生を欽仰するの餘り、右の版木の湮滅を惜み、再版頒布の志あり。當時「藤影」發行に關係ありし山崎鶴吉氏東上の際杉浦先生を訪

ひて再び揮毫せられんことを願ひしに快諾せられ、大正八年十二月之を書して與へられたり。會、梅戸在貞畫伯の名聲を聞き、青柳村江坂敏男氏の紹介に依り、御畫像の揮毫を依頼せしに、提供せし舊畫の數種が相互異れる點多きに疑を懐き、確實なる原據となるべきものを求めらる。是に於て佐野高島郡長（當時藤樹書院の管理者は常に郡長其人なりき）の許可を受けて大正九年三月藤樹書院所藏の淵岡山寄贈の御畫像及藤樹先生の遺服を借りて江坂氏と共に梅戸畫伯を訪ひたり。同年五月御畫像成る。

藤樹神社創立協賛會に於て藤樹先生の御畫像を印刷頒布せんとする計劃あり。其の原圖として本畫像を推薦したるに佐野理事長は之を採用せんことを約せらる。年來の宿望を達し得て餘あり。而して佐野理事長は本畫像を藤樹神社の寶物として保存せんことを欲せらる。是亦實に欽仰すべき御畫像の其の所を得る者なりと信ずるを以て茲に謹みて藤樹神社に奉納する者なり。

大正九年九月十五日　　原田知近識

二、深衣を着せる立像

藤樹書院所藏の一幅に藤樹先生尊像と題するものあり。筆者詳かならざれども、また逸品たるを失はず。行狀聞傳に「享保十三（十四の誤）酉年六月十七日勢州洞津藤堂和泉守家臣玉置佐右衛門町奉行之時祠堂へ奉納あり。」といへり。函に「二見氏所持之尊像。享保七壬寅仲冬寫之。」と記さる。二見氏とは淵岡山の高弟直養を指せるなり。また會津學統中にも同様の畫像の傳來せるものありて、今その最後の傳承者の末裔三浦定彦氏之を藏せり。湖學紀聞に「書院有先生著深衣像。大失其眞矣。」といへるはその支那化せるを忌避せるならん。然れども既に古き所傳あり。また御容貌の如き大に參考となすに足るものあるべし。編者はその支那化せるの故を以て頓に之を抹殺するを好まず。また裔孫中江家を始め支族の家にも往々之と同様の畫像を藏するものあり。是れ近世藤樹書院の藏幅を模寫せるものなるが如し。而してその一二を除く外多くは筆技拙劣にして到底近江聖人の風姿を偲ぶに足らず。湖學紀聞の記事は移して以て適評たるを感ぜずんばあらざるなり。

近年東京柴田甚五郎氏また一幅を畫かしめ同好の士に頒與せり。

（附記）本章を艸するに丁り京都梅戸在貞畫伯大溝町笠井劫大洲町須内實三郎の三氏に特に資料の提供其の他多大の援助を與へられたり。茲に之を謝す。（紫水）

三九、藤樹先生の家紋に就いて

藤樹先生の家紋に凡そ四種あり。その由來詳かならず。左にその大要並に管見を記して參考となす。

一、下り藤。藤樹書院所藏の先生遺品暖簾（傳說先生酒を賣れる時店頭に垂れられたりといふ）並に常省先生の神龕に付するところなり。傳へて中江家の本紋となす。

二、下り藤に三。是れ藤樹先生遺服黑麻袿衽に付せるものなり。（藤樹書院什寶參照）按ずるに孝經に夫孝者天之經也。地之宜也。人之行也といへり。天地人の三才を一貫せるものは孝なれば三の字は卽ち孝を表現せるものなり。故に本紋たる下り藤の中央に三を畫きて聖學の根本思想を表示せるものにはあらざるか。嫡流中江家の紋は上り藤に三の字を畫けり。是れ武士は成り下がるを忌むといふこともあれば後世に至り變更せるものなるべしといふ。

三、藤巴。藤樹書院所藏門人淵岡山の畫かしめたる藤樹先生眞像に付するところなり。岡山の此の畫像を畫かしむるや、先づ先生の母堂に謀じて承認を得たりとの事なれば粗漏のあるべき筈なし。大洲秘錄を觀るに加藤外記高忠此の紋所を用ふ。加藤家は大洲侯の家老なれば或は故ありて賜ひたることありしか。將た又先生舊君を懷ふの餘り直接その家紋を用ふるを憚り、家老加藤氏の紋所を附してせめてもの思出でとせられたるにはあらざるか。

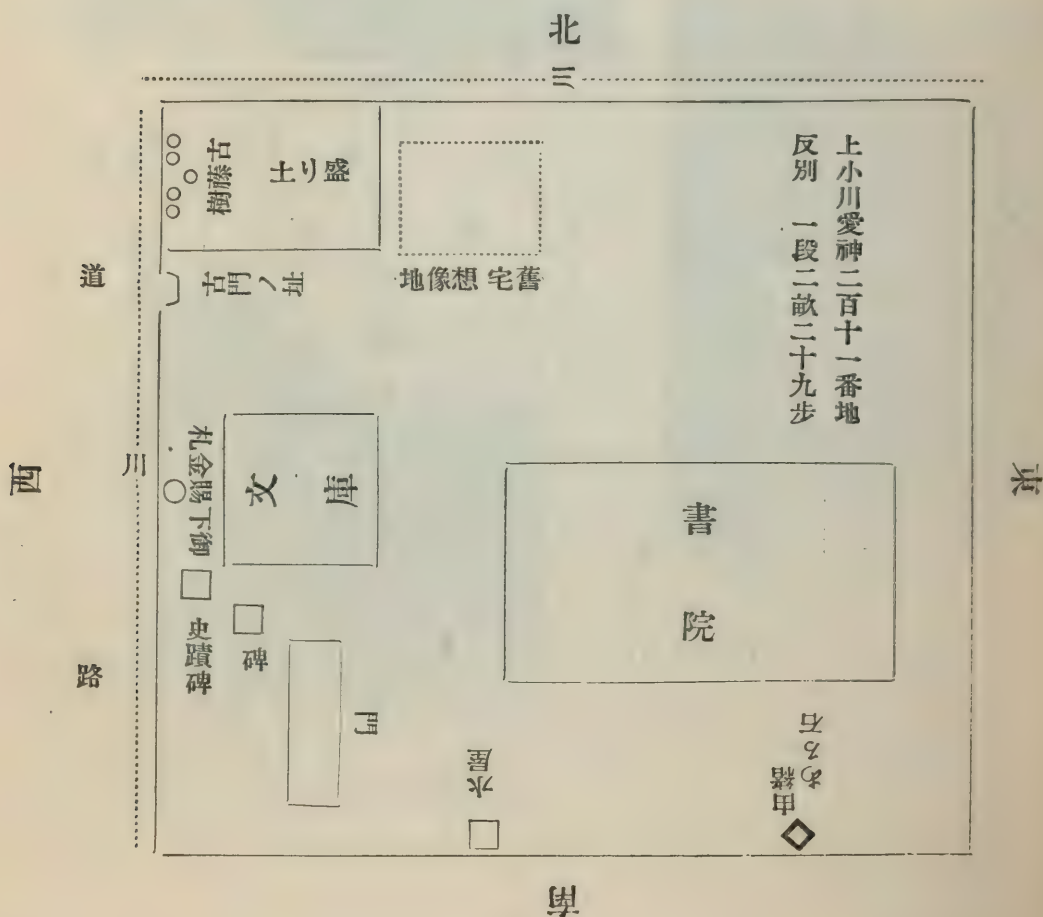
四、下り藤に一。是れ藤樹書院所藏祭具膳に付するところにして大溝藩士横田公恭が春木南溟をして畫かしめたる藤樹先生畫像並木村梁舟の筆に成れる同畫像にも此の紋を用ひたり。竊かに按ずるに先生嘗て唐一菴の禮元剰語を讀みて大に感ずる所ありて太乙神を祀れることあり。太は尊にして乙は一なり。唐氏の考にては學問の道は此の一と云ふ眞理に徹するにあり。此の一に徹すれば卽ち聖境に達したるなり。先生の

太乙神を祀れるは唐氏の發明に共鳴せられたるに由る。依て或は疑ふ先生かゝる考より此の紋を案出せられたるものにあらざるか。
以上述ぶるところ單に編者の臆説に過ぎざるものあり。讀者その意を諒とし批正を吝まるゝことなくば幸甚なり。

四〇、藤樹書院炎上

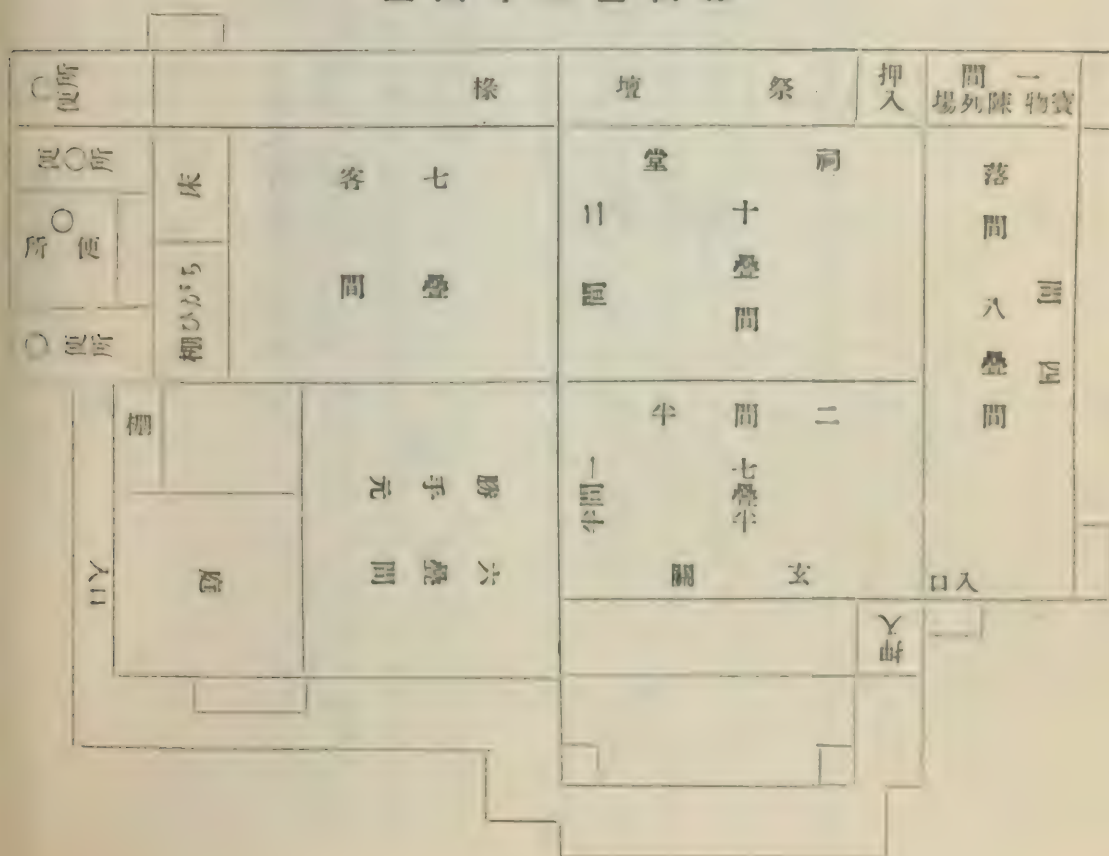
明治十三年六月五日下總國匝嵯郡蕪里村良知書院天遊山崎勇三郎氏參拜し謹んで先生を祭り筵席全部を修造して歸國せらるゝや未だ幾許ならず、九月二十六日夜某家偶々火を失したり。折しも西風烈しく起りて闔邑忽ち炎の街となり三十四戸を燒失し、延いて書院に燃え移れり。是に於て先生講學の書院一朝にして烏有に歸す。（明治五年八月學制頒布以來書院の西側に一棟を增設し、且つ一部を假用して藤樹學校と稱し上小川下小川兩村小學教育の處となし來りしが茲に至り共に燒失せり。）實に千載の恨事なり。然れども神主は恙なく重要なる寶物亦一として燒失せざりき。翌十四年滋賀縣令籠手田安定氏外三名發起となりて篤志を募り翌々十五年假りに一字を建立して神主を奉安し、また新に土藏を築きて

藤樹書院境内見取圖

東
北
西
南
上小川愛神二百十一番地
反別　一段二畝二十九歩
舊宅想像地
盛り土
古藤樹
古門ノ址
書院
文庫
御下賜金札
史蹟碑
碑
門
水屋
由緒ある石
道路
川

什寶を納むることゝなせり。今存するところの書院卽ち是れなり。燒失以前の構造は前揭楠南溪の藤樹書院參拜記の章に委し。藤樹神社創立協贊會は書院改築の計畫を有すれども、未だ成らず。下に現在の境內並に建物等の概要を附載す。

四一、大洲に於ける藤樹先生銅像の建設

大洲は藤樹先生修養の地たり。先生の德を磨き素を養ひ以てその大を成すに至れるもの一に大洲の山川に負ふところなくんばあらず。昔川田琴卿その師三輪執齋の旨を承け、止善書院を刱建し、斯道の鼓吹に勉むるところありしが、物換り星移りて明治維新の頃に至り、終に廢滅に歸したり。然りといへども、先生の遺芳餘薰は尙緜々として絕えず。鄕人欽仰思慕の情年と共に愈々濃かなるものあり。茲に同志相謀りて明治三十五年二月大洲藤樹會を組織し、舊大洲藩士加藤泰秋子を總裁に同新谷藩士加藤泰令子を副總裁に推戴し、下井小太郞氏を會長に選任

藤樹書院平面圖

愛媛縣大洲に於ける藤樹先生の舊緣地と追慕の實際

龍護山曹溪院

藤樹先生年譜元和七年條參照

大洲城頭　藤樹先生銅像

補傳第四十一項參照

藤樹先生邸址碑

補傳第三十五項參照

中江之水

補傳第四十二項參照

皇后陛下御使差遣の光景

補傳第四十二項參照

藤樹神社鎭座祭御靈代御通御

し、明倫堂の舊藏たりし先生の畫像を原圖として高さ三尺四寸二分の銅像を謹製し、之を大洲城山舊天主閣址に安置したり。臺座に賛あり。曰く內外瑩徹。八面玲瓏。千古聖德。萬衆知崇之。是れ實に文學博士巽軒井上哲次郎氏の撰文にして、總裁加藤泰秋子の揮毫に係る。明治四十三年十月十一日先生終焉の日（太陽曆に換算）をトし、除幕の式典を擧行せり。加藤子爵令嗣泰通氏夫妻は東京より來りて臨場せられ、藤樹書院また代表者某を派遣し裔孫勝氏に代つて除幕を行はしめたり。是に於て大洲の士民日夕先生の英姿を仰ぎ、其の高風を景仰することを得るに至れり。惜しい哉。材質粗惡、技工また不完全にして、未だ以て先生の風丰を彷彿せしむるに足らざるものあり。加ふるに腐蝕を以てす。是に於て大正十三年七月之が改鑄を企て現代美術界の泰斗原安民氏の手によりて謹製せらるゝに至れり。翌十四年六月二十八日除幕式を擧ぐ。近江よりは縣社藤樹神社社司某高島郡教員會副會頭饗庭喜代藏青柳尋常高等小學校長小川退藏の三氏列席せり。また式後講演會を由緒深き大洲尋常高等小學校に開き、藤樹先生全集編纂主任文學士加藤盛一氏を聘して「聖人論」と題する講演を聽講せり。惟ふに千古の偉人中江藤樹先生の感化は今より一層の光輝を放ち天下の一大靈蹟として風敎上至大の好影響を及ぼすものあらんとす。所聞初め改鑄の企劃あり、廣く之が出資を募りしに、時方に財界不況に會し、應募豫定の額に達せざるを危まれしに、其の結果に至りては、遙に所要の經費以上に出でたりと。此の如きは先生の餘德の然らしむるところ又發起者其の人を得たるに由ると雖も亦以て地方人士の敬仰の淺からざるをトすべし。〔至德堂建立のこと第一冊卷首再刊の辭二五頁參照〕

四二、藤樹神社の創立

大正六年藤樹神社創立の議高島郡敎育家の間に首唱せらるゝや、滋賀縣知事森正隆氏を始め朝野の士賛同するもの少からず。縣敎育會またこれを美として聲援を爲せり。大正八年八月縣敎育會は巽軒井上博士を聘して斯道の講習會を開催せり。氏は日本陽明學派の特徴を高調して藤樹先生を神社に奉祀することの至當なる所以を詳論せり。かくて機漸く熟し地を青柳村大字上小川字中道に相して同年十二月二十日淵田竹次郎氏

外十六名を總代として神社創立願を內務大臣に提出したり。越えて九年六月十日付を以て許可を得たれば、直ちに藤樹神社創立協賛會を創設して時の滋賀縣知事堀田義次郎氏を會長とし、高島郡長佐野眞次郎氏を理事長とし、寄附金の募集其の他に着手し、同年十二月十三日地鎭祭を行ひ、木曾御料林より特に用材の御下附を受け、翌十年九月二十六日起工式を行ひ、本殿を始め順次附屬建物を造營したり。是より先き高島郡小學校敎員會より鳥居（高サ五間巾四間）一基、同兒童より狛犬一對、同靑年團より石燈籠一對、同郡役所員より鳥居一基縣立今津中學校職員生徒より社標一基、（藤樹神社の四大文字は杉浦重剛先生の揮毫に係り、其の他の文字は藤樹神社々司故野呂周一氏の謹書に屬す）大阪市太田繁盛會より水屋一棟等の寄進あり。翌十一年五月四日縣社に列せられ、同二十一日鎭座祭を擧げせり。

かくて十一月　國母陛下京都地方へ行啓の砌、十二日を以て畏くも御使御差遣の御事あり。次いで十二月九日　久邇宮良子女王殿下には「敬慕する人物中江藤樹」と題する御作文を特に御染筆御下附あらせられたり。

四三、藤樹先生御木像に就いて

玉林寺に安置せる藤樹先生御木像は大阪市森下博氏の寄附に係り、京都市石本曉海氏の苦心謹製せるものなり。先生の御銅像は既に伊豫國大洲にあれども、御木像は實に之を以て嚆矢となす。其の原圖は藤樹書院最古の畫像に據り、高さ二尺三寸あり。用材は臺灣八千山の檜にして千有餘年を經過せるものなりといふ。先生の崇高なる人格と溫潤含蓄の氣象彷彿として坐ろに襟を正さしむ。由來同寺には藤樹先生の墳墓あり。また過去帳に常省先生の戒名を明記せる等の事あり。是れ先生の儀像を作りて之を安置するに至れる所以なりとす。大正十一年五月十二日京都市岡崎公會堂に於て除幕式を行ひ、越えて十四日同寺に安置せられたり。偶〻大正十五年四月十七日庫裡火を失して堂宇全燒の厄に遇ひ、御木像また烏有に歸したり。森下氏深く之を遺憾となし、再び石本氏に囑して謹製せしむることゝし、目下同氏丹精の裡にあり。（昭和三年八月二十五日識）

藤樹先生御木像

第四十三項に記さるゝが如く、木像は一度火災に遭ひしかば、森下氏は石本氏に再刻を依頼し、昭和四年五月に至て刻成て復之を同寺に安置せり。像の高さ二尺三寸、奥行一尺六寸、用材は臺灣の八千山の千三百餘年を經たる檜を用ひたり。像下の臺は同材にて高さ九寸あり。

題木像

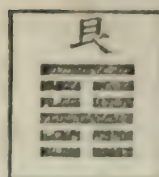
名匠再雕江聖眞　威而不猛亦溫純
像前端坐凝眸子　恍惚自知感得神

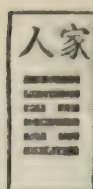
高瀨武次郎　謹識

(一)藤樹先生遺品

一、易卦　一函

函の表に藤樹先生遺品と題し、側に講堂の文字あり。易卦百八十四個を納む。古來先生の神龕中に奉安せり。易卦は紙或は木にて作り、または薄板にて作り紙を貼布せるもの等、すべて四種あり。文字は藤樹先生の眞蹟にして卦は木版なり。左にその大略を記載すべし。

第一種

正方形にして木にて作り紙を貼付せり。卦字並に卦を顯はし裏に天四・山三等の文字あり。現に六十三個を存す。

第二種

長方形にしてその作り方全く前と同一なれども、中に二個のみ卦字を載せず。都て五十六個現存せり。

第三種

上圖の如く木にて作り恰も將碁の駒の如き形にて表に易卦を書き、裏に數字を書せり。現在十四個を存す。

第四種

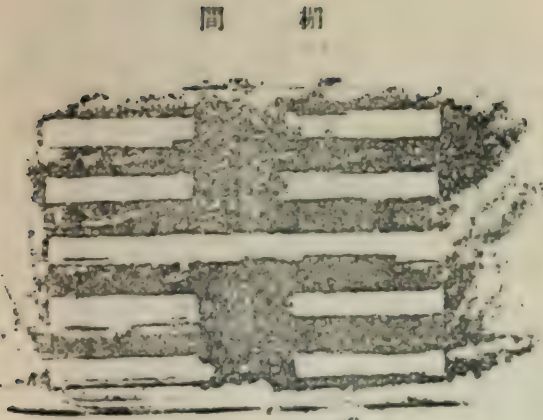
上圖の如く紙にて作り、表に卦を畫き卦字を載せず。裏に地六、風一等の文字あり。五十一枚現存す。

尙その詳細なることは本全集卷之十一（附）易卦圖に就いて見るべし。

（附）尙祠堂神龕に刻せる易卦を左に示す。

藤樹先生神龕

祠堂正面に神位を安置せるもの、外尙顯考惟命府君神主顯妣惟命公夫人高橋氏神主を並べ祀れるものあれども何れも同樣に刻せり。

楣間

右扉

左扉

御兩親の神主を安置せる神龕

楣間

扉に刻せる卦は前に同じ

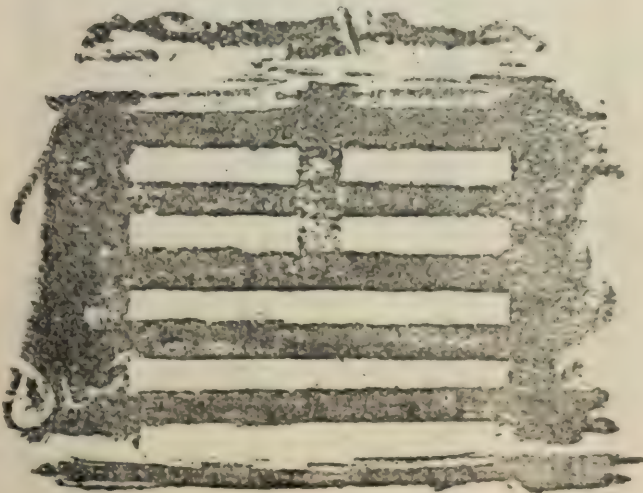
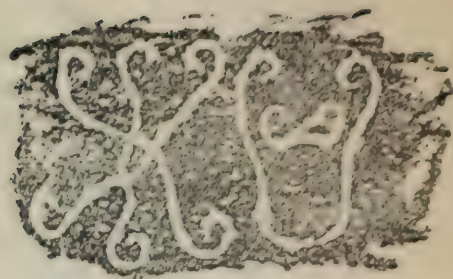
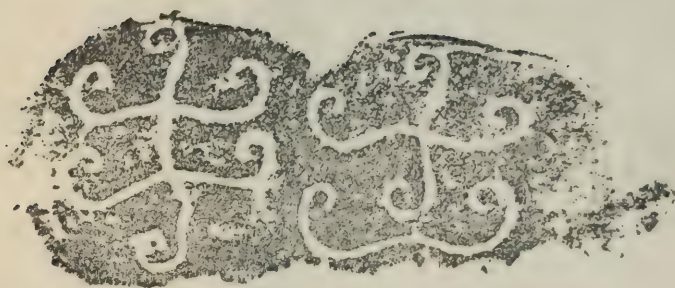
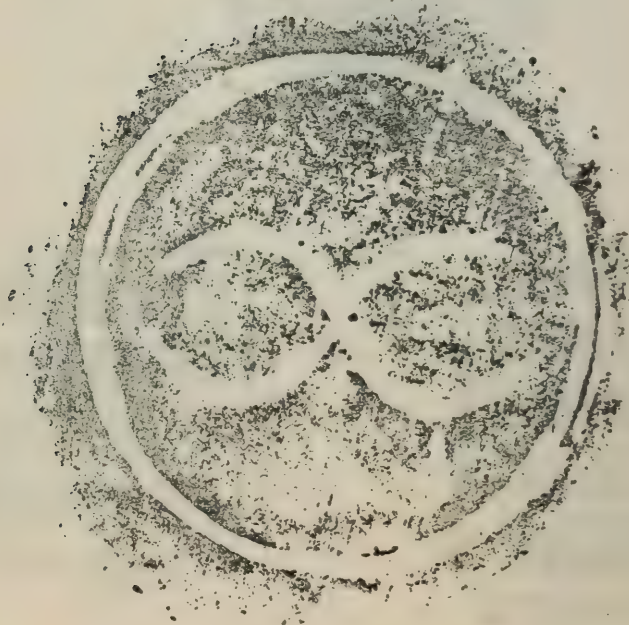
顯兄藤之丞神主を安置せる神龕は楣間はなく扉は前に同じ

楣間

右

楣間

左

右扉

祖父吉長公夫妻神主を安置せる神龕

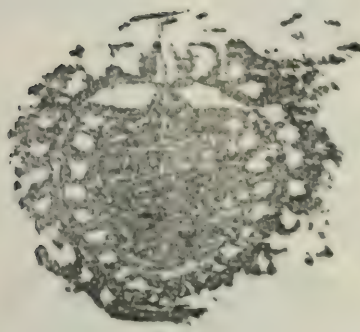
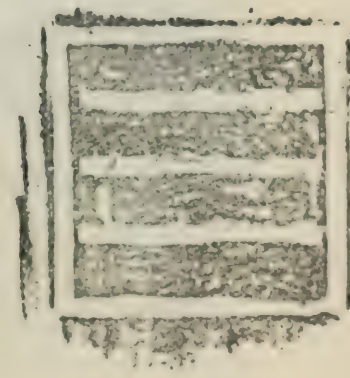
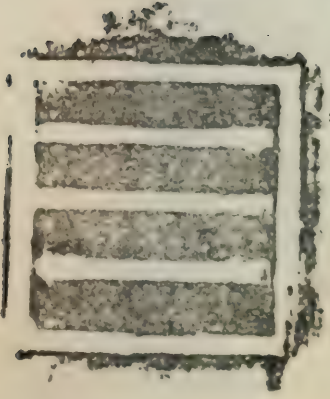
左扉

常省先生神龕

楣間

右扉

左扉

七六

一、筮竹　一組

めど萩にて作り五十本あり。袋入にして竹筒に收め易卦と共に神龕中に奉安せり。（本全集卷之十一挿繪參照）

一、酒壺　一箇

古備前燒一斗入壺にしてその形火鉢の如く、一部破損し破片二個あり。傳說に先生豫州より歸り生計の道なきを以て酒を賣られたる時の酒壺なりといふ。

一、紋附布簾　二枚

更紗にて作り、下り藤の紋所あり。傳說に藤樹先生豫州より歸りて、酒を賣り生計を立てられたる時の布簾なりといふ。また、一說に太乙神を祭れる時の御戶帳ならんと。後說眞に近きが如し。

一、致良知篆額　一面

湖學紀聞に詳かなり。就いて見るべし。

一、遺服

絹袷 藤樹先生畫像御着用のもの　一枚

茶無地木綿綿入道服　一枚

絹地袷袴　一枚

黑麻𧘕衦 紋所下藤に三　一領

但し函に「藤樹先生遺服弘化四丁未仲夏京師佐野某」と識せり。

絹麻ちゞみ單物 女もの　一枚

布地淺黃小紋單物 紋所抱蘘荷　女もの　一枚

布地小紋帷子 紋所丸に花菱　女もの　一枚

水色帷子 紋所蔦　女もの　一枚

淺黃帷子 無紋羽織　一枚

淺黄帷子　紋所花菱　一枚

絹地小紋下着　紋所笹龍膽　一枚

按ずるに遺服中紋所の種々異なるものあるは母堂を始め婦人方の遺服の殘存せるものなるべし。

(二)藤樹先生眞蹟

一、致良知　三大字横幅　函入　一軸

寛保元年三月二十七日京師三輪執齋の寄附に係る。事藤樹先生行狀聞傳に見えたり。表裝は纐纈縫にして鳳凰に菊の模樣あり。此は　光格天皇御張臺の古切れなること函中に納めたる書類に見ゆ。

一、藤樹先生心畫孝經　小形折本帛紗包函入　二冊

一冊は細楷を以て孝經全文を謹書したるものにして卷首に明人江元祚の編せる孝經大全中の圖解並誦經威儀を載せたり。他の一冊は孝經全文を平假名に書下したるものにして同じく誦經威儀を載す。（委しくは本全集卷之十六假名書き孝經の解題に見えたり。）此の書藤樹先生門人大洲の家臣瀧野藤右衛門の家に傳はりしが、故ありて伊藤公爵の手に入りしを明治三十七年藤樹書院へ寄附せるものなり。其の由來は帛紗に詳かなり。門弟子傳第十七項を參照すべし。

一、翁問答原稿　一枚

「人ハ原乾坤ヲ父母トシテ上帝好生ノ心ヲ云云。」と書起せり。古來傳へて翁問答の原稿となす。然れども今傳ふるところの翁問答には見えざれども、翁問答の思想と合致するを見れば、或は初稿本の斷片ならんか。その全文及び寫眞は本全集卷之二十二の解題並挿畫に見えたり。

一、大學　一冊

表紙に大學と大書し大學考・同蒙註・同解の三書を收む。表紙共合せて三十一枚あり。先生晩年の作に係る。潑剌たる先生の氣象紙上に躍如たり。綴込みの中に丁數を示せる數字あり。此の書もと編者の家に傳

るものなるが、明治三十八年七月藤樹書院に寄附したるものなり。本全集卷之十二解題並凡例參照

一、中庸(續解)　一冊

本書は中庸第二章以下第二十七章に至る解にして表紙共すべて六十三枚あり。古來門人筆として編者の家に傳來したるものにして、明治三十八年七月前記大學と同じく藤樹書院に寄附したり。這回本全集の編纂に丁り圖らずも藤樹先生の著述なること加藤主任によつて發見せられ、且つその全文は門人の敬寫に係るものなるものなるも題簽中庸の二字と綴込み中の丁數を記入せる數字とは先生の筆に相違なきことを立證せられたるものにして、先生の學術論定上極めて有力なる資料なりとす。委しくは本全集卷之十四中庸續解を參看せられたし。

一、短冊　一枚

函書に古歌三首と題し、熊澤蕃山・淵岡山の和歌短冊と同じく合裝せる一軸中に收められたるものにして、「うへて見よ花のそだゝぬ里もなし、心からこそ身はいやしけれ」とあり。蓋し引用して修德上の工夫に資し或は敎育の料に供せられたるものならん。

一、書簡　函入　一軸

中孫右宛斷片なり、その全文は本全集卷之十八書翰集補遺に載す。中孫右とは中西孫右衞門常慶の事なり、門弟子傳第三十二項を參照すべし。

(附)　常省先生眞蹟

常省先生誓約　函入　一卷

是常省先生延寶の頃藤樹書院に於て門下を集め講學せられたる時の學規なり。函書は安原貞平の筆と見ゆ。全文は本全集卷之四十七常省先生文集に載す。

(三)門人之筆蹟

一、孝經啓蒙　寫本　一冊

從來藤樹先生眞筆と云傳へ、書院唯一の什寶として珍藏せるものなるが、今回本全集の編纂に丁り、加藤士任の愼重なる研究により門人の敬寫せるものなることを確むるを得たり。然れども、たとひ先生の眞筆にあらずとするも、敬寫本として最も古く、隨つて該書の古き形式を傳へたるものとして推奬するに足るべし。委しくは本全集卷之六解題を參看せられたし。〔門人益田義則の筆なること明かとなれり。（藤陰）〕

一、淵岡山自筆短冊　一枚

函に古歌三首と題し、藤樹・蕃山二先生の短冊を合裝せるものゝ中にあり。「すくもたくなにはのこやの夕煙立つ名もしらず身をこがすかな。」といへる一首なり。岡山の筆蹟は世に傳ふるもの極めて少く、且つ藤門の双璧とも云ふべき岡山の筆蹟が、書院の什寶中に存することは頗る興味あることとなり。

因みに云ふ。熊澤蕃山の短冊といひ傳ふる「ごみ塵も云云。」の和歌は、藤樹先生行狀聞傳によれば、先生の淵子に答へられたるものにして、その筆蹟もまた蕃山にあらず。此は全く誤傳に屬す。

一、論語　寫本　一軸

論語爲政篇子曰攻乎異端斯害也已より同篇末尾に至る文字を謹寫せるものにして編者の家に傳來せるものゝ一部なり。明治三十年九月廿五日藤樹先生二百五十年祭の擧行せられたる時藤樹先生眞蹟に相違なしと確信し記念として寄附したるものなるが、本全集編纂に丁り研究の結果門人の敬寫に屬することを知るに至りたるものなり。

一、書經　寫本　一冊

一、周易　寫本　一冊

右二冊編者の家に傳來し明治三十八年七月藤樹書院に寄附したるものなり。先生常に門人にすゝめて經書の謄寫をなさしめられたり。今此の二書を觀るに、何れも細楷謹書一字苟もせず。以て門下諸氏の學修振りを窺ふに足る。

一、熊澤蕃山先生書　一幅

夏雲多奇峯の五字一行ものなり。明治三十年九月廿五日藤樹先生二百五十年祭に丁り時の滋賀縣高島郡長町原亮氏の寄附せられたるものなり。

(四)　畫　　像

一、藤樹先生眞像　一幅

𧘕𧘔を着し一刀を帶せる坐像にして先生の畫像中尤も古く且つ正確なりといはる。此は門人淵岡山が藤樹先生歿後先生の母堂に談じて狩野某をして畫かしめたるものにして、本全集卷頭に掲げられたるもの卽ち是なり。委しくは本卷第三十八項「藤樹先生畫像に就いて」の章を參看せられたし。

一、藤樹先生尊像　辻子五郎左衞門(藤夫子行狀聞傳)　一幅

函蓋裏に二見氏所持之尊像、享保七壬寅仲冬寫之とあり。本卷三十八項「藤樹先生畫像に就いて」の章參看。

一、藤樹先生畫像　鶴澤探龍六十歲筆　一幅

是近世陽明學の泰斗佐藤一齋子が「碩人已矣幾星霜」の詩を題せる有名なる畫幅にして、舊大溝藩士長野熙氏が明治十五六年頃藤樹書院へ寄附の爲之を時の高島郡長木戶良峯氏に手交せるところ其の後故ありて同郡饗庭村大字饗庭故河原林德明氏の有に歸したりしが、昭和四年一月京都市大谷仁兵衞(滋賀縣高島郡三谷村出身)藤樹神社創立協賛會理事長松山藤太郎の二氏並加藤主任等の盡力に依り、後記藤樹先生全集十一冊と共に之を藤樹書院に回收し、以て長野氏の素志に副ふことを得たり。

一、唐畫聖像　一幅

孔聖及び十哲の像にして元人李仲和の筆なり。狩野永眞法眼の外題及び添書あり。

寬保元辛酉年三月二十七日三輪執齋の寄附に係る。藤樹先生行狀聞傳に詳かなり。寬政八年秋旣記藤樹先生眞像とともに畏くも　光格天皇の叡覽を賜ひ御感斜ならず、德本堂の堂號を下し賜へり。

一、至聖孔夫子像　一幀

明治四辛未年九月二十一日大溝藩士宍戸義智氏寄附せり。

添書

余嘗在二東京邸一。而購二得聖像一幀一。稱賞益若干年矣。慶應戊辰春伏水戰爭。覇家一朝而隳レ業焉。於レ是余挈レ家而歸二本藩一。未レ幾而本藩亦解矣。余罹落拓。實難レ獲二鷦鷯一枝安一也　因納二此幀於德本堂一。亦要レ使二此幀不一レ散逸一焉耳。

明治辛未秋　宍戸義智錄　印印

一、王文成公之眞像　小原慶山筆　一幅

寛保元辛酉年三月廿七日三輪執齋聖像並文宣王聖廟圖一卷とともに藤樹書院に寄附せり。その由來は藤樹先生行狀聞傳に詳なり。就いて看られたし。

一、陸王二先生肖像　藤原正鄰筆　双幅

陸子には包顯道の贊、王子には林道春の贊あり。共に永忠成の謹書せるものなり。文化五戊辰仲秋京都曾我部式部源元愷紀藩岡田元益劉蕚京都藤井林藏藤憲章等の寄附せるものなり。

一、三輪執齋先生肖像　一幅

安政二乙卯年大溝藩士分部圖書頭寄附せり。圖書頭字復號天行大鹽中齋の門人なり。

一、東澤瀉先生像　一幅

東澤瀉諱は正純字は崇一又崇一郎と稱す。周防國岩國藩の臣なり。佐藤一齋に學び陽明學の大家なり。勤王の志厚く慶應二年事を以て柱島に謫せらる。明治元年釋されて生還す。同廿四年二月二十日歿す。壽六十　同四十五年二月二十日朝廷特旨を以て正五位を追贈あらせらる。此の畫像は澤瀉子五十有七歳自畫自贊の小幅にして、明治四十三年三月廿七日令嗣正堂東敬治氏が自ら携へ藤樹書院へ參拜して寄納せるものなり。

（五）勅額

徳本堂　一幅

寛政八年秋主上　光格天皇の御内命により聖像並先生の像　天覽に供へ奉る。主上畏くも常御殿に於て御潔齋あらせられ、　叡覽の上先生の高徳御感あらせられ徳本堂の號を下し置かれ、密かに一條右府公（正二位忠良公）に御染筆を命せられ御下賜あらせらる。御添書二通本卷第三十一項　光格天皇叡旨を賜ふの條を參看ありたし。

（六）景慕遺墨

一、伊藤東涯詩　一幅

右は享保六年八月十一日京都伊藤東涯の參拜せる時の詩にして、宿二安原氏宅一翌午到二小川一尋二藤樹書院一と題せり。詩は藤樹先生行狀聞傳並湖學紀聞に見えたり。

一、伊藤東涯聯　一對

書經の神之格分不レ可レ度。夫無二常享一享二克誠一の二句を刻せり。是れまた湖學紀聞に見えたり。

一、藤樹先生書院記　額　一面

享保十一年六月安原霖寰の撰にして自筆の草稿なり。明治三十七年十月滋賀縣高島郡大溝町大字勝野原田弘藏氏の寄附せるものなり。

一、扁額藤樹書院四大字　摹刻　一面

寶曆十三年三月二十四日大溝藩公子分部昌命の揮毫に係り、今藤樹書院の正面に掲げらるゝもの即ち是れなり。尙湖學紀聞を參照せられたし。

一、致良知　一幅

一、寬政九年朝廷德本堂の三大字を下し賜ふに際し、侍讀伏原從二位宣光卿の書して以て寄附せらるゝところなり。摹刻して玄關に揭ぐるもの卽ち是なり。

一、佐藤一齋詩　一幅

文政四辛巳年八月十五日江戶佐藤一齋參拜せる時の詩にして、後年大溝藩脩身堂所藏藤樹先生の畫像に起句の「書堂已閱百星霜」私淑吾來晋瓣香」を「碩人已矣幾星霜」景慕今顏德本堂」と改め舊製として題せり。その全文は湖學紀聞並景慕詩文集にあり。參看せられたし。

一、跋藤樹先生致良知三大字眞蹟　額　一面

天保五年八月廿五日藤樹先生忌日に丁り大鹽中齋の謹書して寄附せるところなり。是より先天保三壬辰年六月中齋始て參拜し、致良知三大字の眞蹟を拜觀せり。後備藩の石黑後藤兵衞なるものあり。人を介してその祕藏するところの藤樹先生致良知の三大字を示して跋を請へり。此に於て中齋藤樹學の大眼目について力說詳論せり。偶々門人志村周二中齋の此の跋を揮毫して寄附せんことを請へり。中齋猶豫して果さざりしが、圖らずも天保五甲午年八月五日の夜靈夢に感じて齋沐謹書して、周二の志に副へり。縱一尺七寸六分橫四尺二寸實に一代の傑作なりとす。景慕詩文集を參看せらるべし。

(七)　祝　文

一、岡田以安　一通

享保の頃淵岡山の學徒京師岡田以安等江西同志の懇請により、京都・江戶・阿波・姬路・會津・伊勢等の同志に諮り二百餘人の助力を得、先生墳墓の石欄を設く。享保六年九月竣功す。是に於て京都より岡田以安外四名來りて墳墓を祭る。此の祝文則ち是なり。

一、中村德勝　一通

延享四年八月廿五日先生一百年祭に於ける祝文なり。中村氏については門弟子傳第四十四項參照せらるべし。

一、川田甕江　一通

安政四年八月二十五日大溝藩儒官川田甕江參拜して先生を祭れる文なり。甕江後侯命を奉じて藤樹先生年譜並德本堂記を撰せり。

一、山崎天遊　一通

明治十三年六月五日下總國匝瑳郡蕪里村良知書院天遊山崎勇三郎氏の參拜せる時の祭文なり。

一、杉浦重剛　一通

明治三十年九月廿五日藤樹先生二百五十年祭の擧行せられたる時東京杉浦重剛氏が知人を派して恭しく神前に捧げられたる祭文にして、先生を推奬して宇内の聖人となすに至れり。全文景慕詩文集にあり。參看せられたし。

(八) 圖面

一、文宣王廟圖　一卷

朝鮮人の筆なり。寛保元年三月二十七日京都三輪執齋の寄附せるところなり。

一、文宣王廟圖寫折本　一冊

並前圖と同じく三輪執齋の寄附せるものならん。

一、藤樹先生講堂の圖　一幅

藤樹先生舊講堂及墓所の圖にして天保十一年八月大溝藩士分部亘の寄附するところなり。

(九) 墓碑銘

中江宣伯君墓碑銘碑文石摺　二枚

文政元年三月二十六日備前國岡山若林彦十郎氏參拜寄附せらる。

(十) 版　木

一、藤樹先生畫像　一枚
　大溝藩脩身堂所藏先生の畫像に佐藤一齋の題せるものにして明治四年八月二十五日分部侯の寄附に係る。
一、致良知　一枚
　藤樹先生致良知の眞蹟に川田蘂海が敬書せるものにして分部侯の寄附に係る。

(十一) 古　文　書

一、德本堂勅額御下賜に關する書類　二通
一、御黑印　八通
　領主分部侯より講堂地子御免に關するもの。
一、藤樹御墓所石圍垣帳　享保六年　一冊
一、書院日記初記　享保五年庚子之春　一冊
一、日　乘　一冊
　右二冊は享保元文年間に於ける記錄なり。當時先生の學漸く天下に勃興し來れるが故に、京都・江戸・會津・伊勢等の同志がいかに先生の遺蹟に敬虔の念を拂へるかを知るべく、且つ江西學徒の事蹟をも知るの參考となすべし。
一、卯八月廿五日献立　一通
一、大鹽中齋寄附狀　一幅
　天保四年十一月大鹽中齋が書院修復の手當として拾五金を寄附せる時の書類なり。
一、影幕手束　一卷

明治四十年七月金澤市河毛三郎氏が滋賀縣高島郡長在職中書院維持確立の爲盡瘁せる記念として寄納せるものにして故三宮男爵の書翰數通を納む。

(十二) 書　籍

今文庫中に格納する主なる書目を列擧すれば

一、王陽明全集 唐本　四帙　二十三冊

天保四年六月大鹽中齋の寄附するところにして帙に自筆にて付諸藤樹中江先生之書院天保四癸巳夏六月浪華後學大坂城市吏致仕大鹽後素と記す。各冊に洗心洞大鹽後素の落款あり。

一、王龍谿語錄全集 但鈌本　一部　二十冊

延享五年八月十三日大溝藩原田平八郎佐治心齋二氏の寄附に係る。

一、楊龜山文集　二帙　六冊

大鹽中齋の舊藏にして明治四十一年十月東京陽明學會主幹東敬治氏の寄附に係る。

一、藤樹先生全書原稿　十五冊 此の册數中には序文、目錄、嘿軒文集其の他別本と名づくるものをも含む。此の外散逸に歸したるものもあり。

藤樹先生門人岡田仲實の次男季誠氏の編纂に係る自筆但し中に二册季誠氏の筆にあらざるものあり。今岡田氏一本と名づく。此は前記の册數に加算せず。の原稿にしてその由來は景慕詩文集中三輪執齋の全書序文並門弟子傳岡田仲實の條、その他卷首編纂總則等に詳かなり。明治三十九年八月季誠氏の末裔滋賀縣高島郡青柳村大字青柳岡田元誠氏より寄附せらる。

一、倭文藤樹先生書簡拾遺 寫本　一册

岡田季誠氏の老筆なり。本全集卷之十八解題(十三項)參照。

一、藤樹先生書簡 寫本　一册

岡田季誠氏の筆にして三宅石菴著書簡雜著の拔萃なり。右二册は前記全書と同時に岡田元誠氏より寄附せるものなり。

一、藤樹先生年忌說　　一冊

川田雄琴の著にして岡田季誠氏の絶筆なり。

一、熊澤氏事依尋答（松平日向守様御用人之答）　　一冊

全編を十八ヶ條に分ち問答的に熊澤了介の事蹟を記述せるものにして、紙數表紙共十四枚あり。末尾に「右は享保八年卯十月同九年四月書寫畢」と識さる。岡田季誠氏の老筆に係る。

一、孝經外傳（岡田季誠氏筆）　　二冊

右三書は前記藤樹先生全書と同じく明治三十九年八月岡田元誠氏より寄附せらる。

一、藤樹先生全集（但鉄本）　　十一冊（拾四卷）

本書は大阪の人徵餘篠原元博以禮氏の編輯自筆の原稿にして、內容その他に關しては、首卷編纂總則及び卷之四十四門弟子並研究者傳末尾に委しければ參看せられたし。此の書一部明治八年九月息女里久子が父の遺命に依り自ら參拜して、同じく父の編述に係る朱陸年譜通攷一部五冊と共に藤樹書院に寄附したるもの、（後故ありて前記河原林氏の藏有するところとなりしが、昭和三年十二月大津市陣內政雄氏の有に移る。）同四年一月、前記大谷松山氏等の盡力によりて既記鶴澤探龍六十歲筆藤樹先生畫像と共に藤樹書院に回收し、以て徵餘氏の素志に副ふことを得たり。

其の他學庸解（版本享保十三年版）和翰（寫本卷之十八解題（四）參照）藤樹書翰（寫本同上（二）參照）藤樹先生遺敎別本（寫本同上（六）參照）藤樹先生書翰集（寫本各一冊同上（五）參照）知止歌小解（寫本版本各一冊卷之十六解題參照）藤樹先生行狀（寫本二冊同卷之四十二藤樹先生行狀解題參照）朱陸年譜通攷（徵餘篠原元博著原稿）一部等あり。

四五、藤樹神社什寶

一、吾が敬慕する人物　中江藤樹　　一部

絹表紙裝幀　紙數五枚　桐製二重箱入

久邇宮良子女王殿下御自作御直筆にして大正十一年十二月九日御下附あらせらる。但し久邇宮附宮內事

務宮野村禮讓氏より藤樹神社創立協賛會理事長佐野眞次郎氏宛添書あり。

一、白銅鏡　北總金人香取秀眞作　一面

作者香取秀眞氏は當社御靈代の鑄造者にして現代に於ける斯道の大家なり。嘗て囑に應じて當神社御靈代を謹製するに際し、神鏡二面を鑄造し、その一を御靈代に納入し、他の一を什寶として寄附せられたるもの即ち是れなり。

一、御神號　元帥伯爵東郷平八郎閣下筆　一幅

記に曰く、藤樹神社四大字元帥伯爵東郷平八郎閣下所書。今年三月七日既刻爲扁額。揭之華表。又裝其眞蹟。藏之神庫焉。初神社工將竣。創立協賛會理事長佐野眞次郎氏先請得東宮御學問所御用掛杉浦重剛先生之藤樹神社四字。勒之於社標。由先生以子爵小笠原長生君爲紹介。然後得此四大字也。近江聖人之神德靈光、庶幾益以顯昭矣。雕刻裝潢之費以成其事者誰。甲賀郡寺庄村吉川又平氏也。

大正十四年乙丑三月十日

京都帝國大學教授　文學博士　高瀨武次郎　謹識　印印

一、藤樹先生畫像　一幅

此の畫像は藤樹書院傳來門人淵岡山の畫かしめたる舊畫像によりて、京都梅戸在貞畫伯の擴大謹寫せるものにして、東宮御學問所御用掛杉浦重剛先生の賛あり。大正九年九月十五日神社の創立に先ち、滋賀縣高島郡大溝町原田知近氏の奉納せるものなり。尙委しくは本卷第三十八項藤樹先生畫像に就いての條を參看せられたし。

一、藤樹先生眞蹟　送佃子。愼獨。格物致知解。題明明德。誠意。聖經。　横卷　一幅

此の眞蹟一卷は古來伊豫國大洲地方に傳來し、久しく八幡濱町梶谷淸海氏の祕藏するところなりしが、昭和二年春同町賈人上田藤七氏の有に歸したり。茲に大阪市外石切在住吉川又平氏は滋賀縣甲賀郡寺庄村大字葛木の出身にして敬神の念最も深し。偶〻伯父贈正五位城多耐軒翁嘗て陽明學を嗜み國事に奔走せる人

なるを懷ふ。而して吉川氏に在つては寤寐も忘るゝ能はざる大恩人なるを以て、之を購ひ藤樹神社の神前に奉獻し、以て追遠の微志を致さんとの志あり。上田氏また義氣に富み、藤樹神社へ奉獻せらるゝを喜び、特に價を減じて割愛せられたり。是に於て吉川又平氏は昭和二年十月六日謹みて之を藤樹神社に奉納せられたり。

一、傳説藤樹先生遺品壺　一個

此は大溝藩主分部侯の家に傳來せるものにして嘗てその臣細野某之を拜領し、後同藩士岡田實氏の珍藏するところなりしが、三轉して同郡新儀村大字葉園村社葉園神社社掌八田繁太郎氏の有に歸し、大正十年九月當神社の創立に先立ち之を奉納せるものなり。

一、熊澤蕃山先生書翰　一幅

此の一幅はもと藤樹先生全書編纂者岡田季誠氏末裔の家に傳來したるものにして、宛名は今磨滅して明かならざれども、恐らくは蕃山先生が妹美津子に與へられたるものならん。大正十五年二月滋賀縣高島郡安曇村大字田中早藤貞一郎氏より奉納せるものなり。

一、祭藤樹先生文　杉浦重剛先生眞蹟　一幅

此は梅窓杉浦重剛先生が明治三十年九月二十五日藤樹先生二百五十年祭の忌辰に丁り祠前に奉れる祭文を全帋に謹書せるものにして、大正十四年五月十日大阪市東區今橋貳丁目大音新吉氏より奉納せるものなり。

一、藤樹先生畫像　一幅

梁舟畫、傳詳かならず。大正十五年九月滋賀縣高島郡朽木村大字岩瀬石井齋太郎氏より奉納せるものなり。委しくは本卷第三十八項藤樹先生畫像に就いての條を參看せられたし。

一、色紙　東郷元帥書小笠原長生子箱書　一幅

大阪市外吉川又平氏は敬神の念頗る厚し。嘗て元帥東郷平八郎閣下の揮毫を得て之を藤樹神社に奉獻せ

んとの志あり。小笠原長生子の紹介を得て懇請せらるゝところありしに、大正十五年春至誠の二字を書して之を與へられたり。時に元帥年齒當さに八十一。茲に於て表装を施し、昭和二年五月十五日恭しく之を藤樹神社へ奉納せられたり。惟ふに至誠の二字は儒學の根本義にして、先生學問の骨髓たり。元帥東郷平八郎閣下が此の二字を謹書せるものまた所以ありといふべきなり。

一、刀劍　備前長船長光長さ二尺八寸五分　一振

右は滋賀縣高島郡朽木村朽木藩主朽木之綱氏の家に傳來せるものにして、乳人某之を拜領し、後同國同郡青柳村大字青柳中江寅吉氏の珍藏するところとなりしが、偶〻感ずる所あり。昭和三年三月七日後記佐藤一齋翁の揮毫に係る屏風半雙と共に之を藤樹神社に奉納せるものなり。

一、佐藤一齋の揮毫に係る屏風　半雙

此は近世陽明學の泰斗佐藤一齋翁八十四歳の筆にして一行もの半截六枚あり。各紙に署名落欵あり。前記中江寅吉氏の久しく珍藏するところなりしが感ずる所あり、昭和三年三月七日之を藤樹神社へ奉納せるものなり。

一、詩　天台道士杉浦重剛翁眞筆　一幅

此は東宮御學問所御用掛天台道士杉浦重剛翁が寄松言志の一詩を賦して、藤樹神社創立協賛會理事長佐野眞次郎氏に與へられたるものにして、大正十四年三月十八日恭しく之を藤樹神社に奉納せるものなり。

一、富岡鐵齋畫清溪洗心圖條幅　一幅

斯道の巨匠八十九叟京都富岡鐵齋翁が當社社司小川喜代藏の懇請を容れて健筆を振ひ、大正十三年五月廿一日之を藤樹神社に奉納せるものにして、添書一通あり。

尊翰拜受時候不順相變候際益以御壯健之義是可賀。藤樹先生御神蹟誌御恵贈感謝之至也。豫而拙畫呈進可致之等因循多罪御容恕願上候。則御神供に及拙筆王陽明先生小文辭之畫一拜御咲納可被下候。何分老

衷之所爲無所可取御寬宏願上候。

五月廿一日　富岡百錬

藤樹神社々務所御中

一、書　陸軍大將大迫尙敏閣下書　一幅

右は至孝の聞高かりし故陸軍大將八十二叟大迫尙敏閣下が、大正十四乙丑年夏日特に大阪市外石切在住吉川又平氏の希望に依り藤樹先生の嘗て小川の神社に詣でて祈願せらるとの傳說ある、天下泰平、大道興隆。時和年豐。民安物阜といへる四句を謹書せるものにして同年九月前記吉川氏の奉納せるものなり。

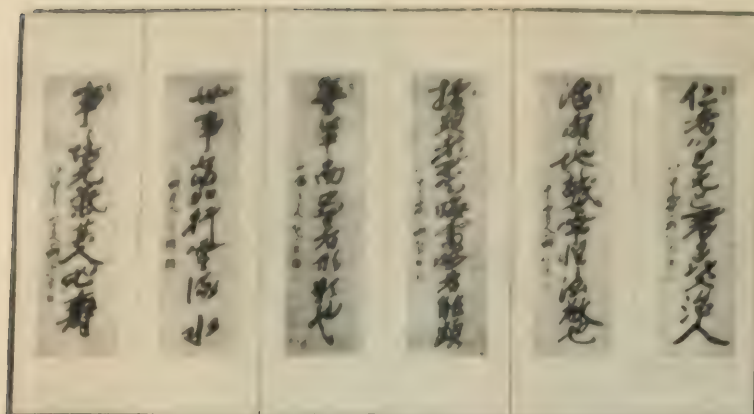
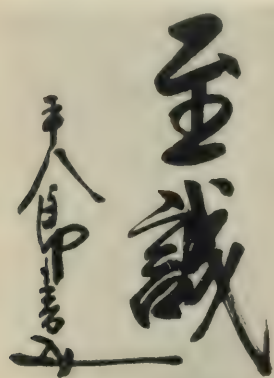
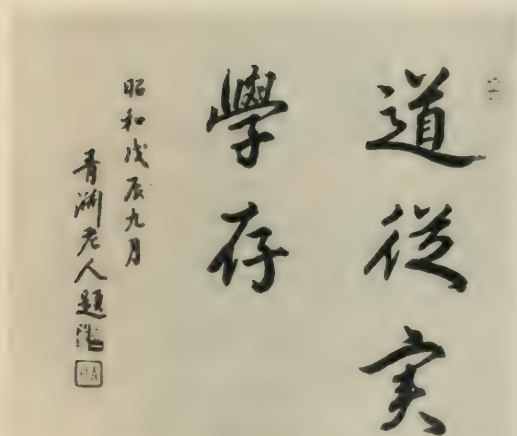
一、金杯　桐御紋章附直徑四寸六分五厘　重量六十八匁　一個

右は大正元年七月三十一日附賞勳局より滋賀縣高島郡へ下賜せられたるものにして、大正十五年七月郡役所廢止に際し、今津町外十六ヶ町村より當社什寶として奉納せるものなり。

一、聖胎純熟　一幅

右は大勳位元帥閑院宮載仁親王殿下が、特別の御思召を以て本全集の爲に御染筆御下附遊ばされたるものにして、縱一尺五寸横四尺〇寸あり。御題辭として本全集卷頭に揭げられたるもの、即ち是なり。その由來は、本全集第一冊卷首凡例に詳かなり。藤樹神社創立協賛會は、殿下の厚き御思召を畏み、昭和三年十月九日謹みて之を縣社藤樹神社に奉納せり。

一、孟母神像　金銅鑄工品　重量百四十五貫匁　高サ四尺五寸　一基

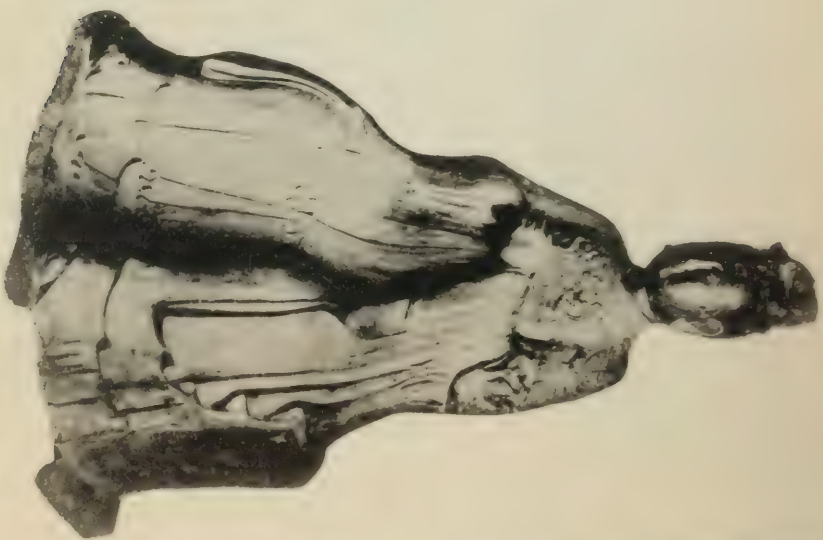
右はもと支那山東省即墨縣城北林哥庄なる靈山廟に安置せるものにして、專門家の鑑定に依れば今より凡八九百年前即ち北宋の頃藝術最盛時代の傑作品にして、其の風采の崇高、圓滿慈愛の顏貌、服裝配線の優美にして高雅なる、比類稀なる世界的貴重品なり。抑〻孟子は亞聖孔子と並稱せらるゝ大賢にして、儒學上に於ける偉大なる功績と德望とは蓋し天地不滅のものなるべく、此の偉大なる人格者を生み能く之を敎育

藤樹神社什寶四種

一齋　佐藤翁書

東郷元帥書

道從実
學存
昭和戊辰九月
青淵老人題

澁澤青淵子爵書

鐵齋　富岡百錬翁畫並贊

補傳第四十五項參照

藤樹神社什寶　孟母銅像

補傳第四十五項參照

高サ四尺五寸　重量百四十五貫匁

（藤樹神社藏　大阪　吉川又平氏奉納）

藤樹先生母堂墳墓移轉に關する常省先生書狀

補傳第二十六項參照

（近江　[illegible]定一氏藏）

してその德器を成さしめたる孟母その人に至りては、また永く婦人の龜鑑として仰がざるべからず。此の尊像は支那に於て幾百年間信仰の的となり釋奠の禮絶ゆる事なかりしが、清朝滅び革命動亂相次いで起るに丁り大正十一年故あつて我が國に渡來せり。偶〻昭和三年八月大阪市外吉川又平氏の知る所となり巨資を投じて之を購ひ、同年九月十五日を以て藤樹神社に奉納せるものにして今之を藤樹書院に安置せり。

一、青淵澁澤榮一翁書　一幅

右は大阪市外吉川又平氏感ずる所あり、昭和三年十月八十九翁澁澤榮一氏に請ひ「道從實學存」といふ五字の揮毫を得て、之を藤樹神社に奉納せるものにして、東京市瓜生喜三郎氏の盡力に依れり。尙當社には同子爵の筆「聖凡一性」の額面あり。此は當社創立當時理事長佐野眞次郎氏の希望に依り、特に揮毫して奉納せられたるものなり。

一、頭山滿翁書　一幅

自天子以至於庶人壹是皆以脩身爲本 錄藤樹先生發奮之語 昭和三年 戊辰 十月頭山滿書と識せり。是れまた前記吉川又平氏が特に揮毫を請ひて藤樹神社に奉納せるものなり。

（附）　加藤家分部家及中江氏系圖其の他

（一）　大洲加藤家系圖

御系圖

大職冠鎌足公後胤鎭守將軍利仁之裔加賀守吉信廿一代加藤權兵衛尉景泰長男初名加藤作內

加藤遠江守光泰公

天文六酉年濃州橋詰村ニテ御誕生。

文祿二巳年八月二十九日高麗釜山海ノ內セツカイト云所ニ御逝去。御年五十七、號曹溪院殿剛圓勝公大居士、謚光列明神御內室一柳藤兵衛女右近妹號惠照院殿。

加藤左近太夫貞泰公　初作十郎　左衛門尉　濃州黒野城主又伯州米子城主

天正八辰年江州高島ニテ御誕生。

元和三年大洲城ニ御移、元和九亥年五月二十二日江戸ニテ御逝去。御年四十四。

號大峰院殿英叟雄公大居士。

御内室小出大和守女。

加藤出羽守泰興公　甲子？　(まゝ)初五郎八

寛永元癸亥年御年十二歳ニテ御家督。延寶二甲寅年御隠居。

同五丁巳年閏十二月十六日大洲ニ於テ御逝去。御年六十七。號圓明院殿月窓淨心大居士。

新谷御分知一萬石　加藤織部正直泰公 — 出雲守泰觚公　實御本家泰義公御二男

大藏少輔泰貫公　五十三 — 織部正泰春公　實御本家泰恒公御九男

近江守泰官 — 出雲守泰賢 — 山城守泰濤

大藏少輔泰環

加藤美作守泰義公　幼名龜之助　有馬之助

寛文八戊申年於大洲御逝去御年四十。

號實相院殿義山信公大居士。

加藤遠江守泰恒公　初名五郎八

正德五乙未年七月九日御逝去。御年五十九。
號英久院殿傑山俊公大居士。

加藤出羽守泰統公（初名隼人）
享保十二丁未年六月廿四日於大洲御逝去御年卅九。
號顯德院殿圓惠明公大居士。

加藤遠江守泰見公（初名隼人　初泰古　後泰溫）
延享二年乙丑六月十二日御逝去。御年卅三。
號大心院殿泰叟玄高大居士。

加藤加賀守泰衑公（左近將監　出羽守上總介）
天明四年甲辰正月十三日御逝去。
號寬厚院殿仁叟英義大居士。

加藤遠江守泰武公（初名富之助）
明和五年戊子五月廿二日御逝去。御年五十七。
號廣善院殿穎峰義俊大居士。
（足達條國氏曰く、泰溫卒去後に生れ泰衑の養子となる。）

加藤出羽守泰行公（初名造酒進）
明和六年己丑五月八日御逝去。御年十七。
號本源院殿天性宗眞大居士。
（足達條國氏曰く、實は泰衑の男にして泰武の養子となる。）

加藤遠江守泰侯公　初名次郎四郎　初泰輝
天明七丁未年七月四日御逝去。
號憲章院殿篤應惟恭大居士。

加藤遠江守泰濟公
文政九丙戌年九月二十九日於江戸御逝去。
號文龍院殿海嶽巢雲大居士。

（以上「大洲秘錄」摘錄）

加藤遠江守泰幹公　初作十郎
嘉永六年正月十五日逝去行年四十一。
號濬良院殿哲叟威儀大居士。

加藤出羽守泰祉公
洪德院殿四品前兵部侍郎兼羽州刺史仁岳宗溫大居士。
文久四年八月十六日病デ大洲城ニテ逝去。享年廿一。

加藤遠江守泰秋子
大義院殿明道至德大居士。
正二位勳三等子爵大正十五年六月十七日病デ東京ニテ逝去。享年八十一。

加藤泰通子
明治十二年四月十日生。從四位勳四等子爵侍從職兼式部官。

（以上足達儀國氏報）

(二) 大溝分部家略系

嘉治公 伊賀守 明暦四戊戌年七月十日右故卒三十二歳
―嘉高公 若狭守 寛文七丁未年六月十二日卒二十歳
―信政公 若狭守 正徳四甲午年冬十一月十八日卒六十三歳
―光忠公 左京亮 享保十六辛亥年三月十四日卒三十四歳

―光命公 和泉守后若狭守 天明三癸卯年十一月廿二日卒七十歳
―光庸公 隼人正后若狭守 寛政二庚戌年八月廿六日卒五十七歳
　―昌命 肥後三淵氏ヲ繼グ澄年伊織之助天明七丁未年正月十日卒四十九歳
―光實公 左京亮 文化五戊辰年四月十四日卒五十四歳
―光邦公 若狭守 文化七庚午年九月廿二日卒二十五歳

―光寧公 左京亮 安政五戊午年七月二十一日卒五十歳
―光貞公 若狭守 明治三庚午年四月十二日卒五十五歳
―光謙 當代 文久二壬戌年十一月三日生

（笠井劼氏報）

(三) 中江彌三郎勤書

中江彌三郎近習高百五十石。寛文九年己酉二十二歳。

一、曾祖父中江德左衛門生國江州高島之者。加藤左近殿にて少知行被レ下罷出候。祖父德右衛門と申者牢（まゝ）人にて江州在所へ引籠居申に付、私親與（まゝ）右衛門を養子に仕候。德左衛門果候以後左近殿御子息出羽守殿より德左衛門跡式与（まゝ）右衛門に被二仰付一御奉公仕罷在、其後牢人仕江州在所へ引籠居申二十年以前病死仕候。

一、私儀明暦二年九歳にて被二召出一御支配五十俵五人扶持拜領仕、萬治元年極月十五日十一歳之時兒小姓被二仰付一候。

一、寛文四年九月二十五日御知行百五十石拜領仕候云々。

（池田家勤書抄岡山市渡邊賴母氏報）

(四)　中江家累代之折紙

備前國赤坂郡岩田村之内高五拾五石壹斗九升口上道郡乙多見村之内高九拾四石八斗壹升都合高百五拾石令扶助訖全可知行者也

寛文四年
九月廿六日　　光　政　花押

中江彌三郎とのへ

(中江勝氏所藏)

備前國赤坂郡岩田村之内五拾五石壹斗九升口上道郡乙多見村之内九拾四石八斗壹升都合高百五拾石令扶助訖全可知行者也

延寶二
正月十五日　　綱　政　花押

中江彌三郎とのへ

(中江勝氏所藏)

高貳百石
右遣之者也全可知行之
狀如件
元祿十六癸未年
正月元日
義方花押
中江藤助とのへ
(中江勝氏所藏)

高貳百石
右元祿十六年任先判之
旨不可有相違之狀如件
享保四己亥年
五月朔
方㊂誠花押
中江藤助とのへ
(中江つる子所藏)

一字之事誠明と遣之者也仍狀如件

享保十四己酉年
十二月朔日　　義誠花押

中江藤助とのへ

（中江勝氏所藏）

高貳百石

右享保四年任先判之旨不可有相違之狀如件

享保十八癸丑年
九月十五日　　義如花押

中江鎌五郎とのへ

（中江つるゑ子所藏）

高貳百石
右享保十八年任先判之
旨不可有相違之狀如件
寶曆二壬申年
十一月十五日　義蕃　花押
中江藤助とのへ

（中江つる丞子所藏）

高貳百石
右寶曆二年任先判之旨
不可有相違之狀如件
明和四丁亥年
閏九月二十五日　義暢　花押
中江登とのへ

（中江つる丞子所藏）

高貳百石
右明和四年任先判之旨
不可有相違之狀如件
安永七戊戌年
七月九日　　義功花押
中江登とのへ
（中江つるゑ子所藏）

高貳百石
右安永七年任先判之旨
不可有相違之狀如件
文化十四丁丑年
七月十八日　　義質花押
中江類右衛門とのへ
（中江つるゑ子所藏）

高貳百石
右文化十四年先任判之
旨不可有相違之狀如件
天保十己亥年
七月二十三日　　義章　花押
中江類右衞門とのへ
（中江つる子所藏）

高貳百石
右天保十年任先判之旨
不可有相違之狀如件
天保十四癸卯年
二月十五日　　義和　花押
中江類右衞門とのへ
（中江つる子所藏）

高貳百石

右天保十四年任先判之

旨不可有相違之狀如件

文久三癸亥年

九月十五日　　義達　花押

中江清壽とのへ

（中江勝氏所藏）

同上包紙に

義達様御繼目之御判物元治元年九月二日被成下實

文久三年被成之御判孫左衞門御叱リ中清壽實二歲

ニシテ跡式ニ仰付今年三歲名代平山次郎兵衞相勤

頂戴仕ル

㊀　口上道郡乙多見村は今の岡山縣上道郡財田村字乙多見。

㊁　方誠は宗義誠公の一名。（紫水）

（五）折紙を原據としたる中江氏の系圖

○彌三郎——藤助——鎌五郎——藤助（登）——類右衛門——清壽

（六）佃彥六の筆に係る中江氏の系圖

中江德左衛門吉長—　貞泰君御代於二伯州米子一出勤之由云傳。不詳。直泰君御分知之節爲二附士之列一。寬永年中死去之由云傳食祿百石。

└与右衛門惟命　實ハ德左衛門孫也。爲二養子一從二德左衛門一之由云傳。號二藤樹先生一。

慶長十三年三月七日生二於江州高島郡上小川一。幼名原藏。諱惟命。

元和二年九歲從二於祖父吉長一。往二于伯州米子一。

元和三年從二於吉長一遷二于豫州大洲一。

寬永十一年致レ仕歸二于小川一。

慶安元年八月廿五日卒二于小川之舊廬一。（マヽ）四十一歲。

右生卒履歷梗槩季重之書記也。

以下略之（藤樹先生傳。伊豫國喜多郡久米村矢野眞枚氏所藏）

（附記）按ずるに此の一篇佃彥六の自筆にして、その右生卒云云といへるは單に藤樹先生の條に係り且つ佃氏は常省先生の書記を他より移して茲に記入したるものと思はるれど詳かならず。同條下に先生の幼名を原藏といへるは諸本の佚せるところにして頗る貴重なる文字なりとす。德左衛門吉長の條下に直泰君御分知之節云云と云へるは全く藤樹先生の事實にして、祖父吉長に關せず。（紫水）

(七)　集成せる中江氏の系圖

◎初代 **吉長** ── 諱松　中江德左衛門

藤樹書院祠堂神主陷中に曰く、「故德左衛門公諱松字吉長中江氏大宗始祖神主」と。湖學紀聞に曰く、「據祠堂神主書諱松者蓋其小字稱德松也。」甫東夫人神主陷中に曰く、「故東夫人諱市中江氏大宗始祖神主。」

(附記) 以下履歴に關し藤夫子行狀聞傳に見ゆるものはその記事こゝに再錄せず。(紫水)

○第二代 **吉次** ── 中江德右衛門

祠堂神主陷中に「故德右衛門公諱烝(マヽ)字吉次中江氏小宗始祖神主」といふ。湖學紀聞に「據祠堂神主書諱烝者蓋其小字稱德之烝也。」と。

祠堂神主陷中に「故北川氏孺人神主」とあり。傍に「歲八十有八以寬文五年乙巳十二月二十二日卒於江州高島郡小川村。」とあり。

(附記) 按ずるに北川氏の甫東夫人と同名なるは蓋し襲名せるならん。(紫水)

二男 **某** ── 中江三郎右衛門　仁兵衛

諱吉久寬永十三年七月七日歿す。行年五十九。室萬木(マヽ)氏の女。(「藤樹先生」摘錄)

(附記) 右「藤樹先生」所載の記事は滋賀縣高島郡青柳村大字上小川中江代吉氏の書類に據る。按ずるに後世小川村に於て中江氏を稱するもの多くは此の系統に屬す。(紫水)

三男 **治之** ── 元立　崇保軒　中江右門

(附記) 湖學紀聞に崇保軒と治之とを別人となす。今その據るところを詳かにせず。(紫水)

―女子　諱布佐　廣野貞圓

―立重―――某　中江惣八

―女子

◎第三代 惟命　諱ハ原　姓者中江氏　假名ハ與右衞門　嘿軒

祠堂神主陷中に曰く、「與右衞門公姓中江諱原字惟命大宗神主。」外箱に曰く、「先生姓中江諱原字惟命號顧軒稱藤樹先生慶安元年戊子八月二十五日卒葬邑東北玉琳（林）寺。」

同陷中に曰く、「中江惟命公夫人名久高橋氏神主。」

―女子　諱葉　先生之妹

○第四代 宜伯　諱虎之助　中江太右衞門　先生之嫡子也

祠堂神主陷中に曰く、「故中江氏假名太右衞門。諱虎（之）助字宜伯神主。」側らに「寛永十九年壬午十一月廿三日生於江州高島郡小川村寛文四年甲辰五月十一日卒於前備州三野郡岡山城下。」

（右陷中記事志村竹涯老綿書院記事に據る。）

○第五代 仲樹　先生之二男也　鍋之助　中江藤之允

祠堂神主陷中に曰く、「故藤之丞氏中江諱仲樹神主。」側らに「以正保三年丙戌正月二十五日生於江州高島郡小川村寛文五年正月廿三日卒於城州愛宕郡京師歲二十。」とあり。

○第六代 季重　先生之三男也　彌三郎中江氏ヲ轉ジ江西文内　常省先生

（對州中江家系圖に小字龜之助に作り宜伯公碑文に季孝に作る。）

祠堂神主陷中に曰く、「故中江彌三郎字季重神主。」外箱に曰く、「先生姓中江諱彌字季重稱常省先生。近江國高島郡小川邑人考諱原字惟命稱藤樹先生。妣別所氏慶安戊子七月四日生。寶永己丑六月

二十三日卒年六十二。葬₂邑東北玉琳(林)寺先塋之側₁。娶長谷川氏生₂二男一女₁。

享保乙巳春門人相議設₂神主₁二月念日工人竣₂事越念五日奉₂納祠堂₁。」

玉林寺元過去帳に曰く「高山道保居士。」—大正十五年四月十七日燒失前の過去帳に依る。（柴水）

―女　子　諱　伊知

湖學紀聞名瑠璃天に作る。

―女　子　諱　染

湖學紀聞名捨遁大溝臣藏田淸左衛門云云に作る。

○

―某（第七代）　常省先生之嫡子也　諱　興之介　貞平　中江藤介　對州侯御附成サル

延寶二年五月二十日備前岡山に生る。元祿十六年對馬侯宗義方公に事へ食祿二百石。享保十四年十二月朔日義誠公より誠の一字を賜ふ。依て諱輔を誠明と改む。學校奉行となり享保十八年六月十日歿す。享年六十。對馬國嚴原成相寺に葬る。諡歡喜院大洋悲心居士。室嚴原藩士早田式左衛門の女、諡桃源院花心幽香大姉。（「藤樹先生」所載）

―某（二男）　中江彌九郎

法名顯考誠明府君神主（小川本）

（以上順位並に名の下に摘記せる諱號出自等の記事は藤夫子行狀聞傳に依る）

○

―郡　內（長男）

元春實永五戊子年九月五日。生。（嚴原ニ（藤））父ニ隨テ東武ニ到リ享保十八癸丑年正月廿七日卒ス。（小川本）

「藤樹先生」に曰く、享年二十五（六（湖））。諡泰享院健利寰通居士。行狀聞傳湖學紀聞共に中江爲右衛門に作り二男。文內とは別人と爲

す。末裔中江勝氏報にて曰く、「墓はもと下谷區養玉院にありしも、今は大井町にあり。」と。

―勝見　誠明二男

寶永庚寅七年二月九日生(七庚寅?)(七(藤))同藩士黒木平庫養子トナル。(小川本)

(附記)按ずるに行狀聞傳、湖學紀聞等此の項を脱す。

「藤樹先生」に此の次に女子三人を擧ぐ、卽ち勝見の妹なり。左の如し。

女子　嚴原藩士　梅野右門の室。

女子　同　樋口類右衞門の室。

女子　同　志賀重左衞門の室。(紫水)

○

―元泰　第八代　誠明の三子

(折紙鎌五郎に作り、「藤樹先生」鎌之助に作る。)

鎌太郎・民右衞門・藤助。享保二丁酉年正月十日生。(嚴原に(藤))父ノ家督ヲ繼グ。享保十八癸丑年八月四日義如公御判物被成下、又寶暦二壬申年十一月十五日義蕃公御判被成下、天明三癸卯年二月廿八日卒ス。享年六十七歳。法名自音院心觀淨智居士。(小川本)

(附記)「藤樹先生」に曰く、室は同藩泰賓左衞門の女、二子を生む。天明七年七月二十五日卒す。諡自光院慧觀妙智大姉。(紫水)

○

―元輝登　第九代　長男

父ノ家督ヲ繼グ。寛寶(保)二年三月廿一日生。(嚴原ニ(藤))明和四丁亥年閏九月廿五日義暢公御判物被成下安永七戊戌年七月九日義功公御判被成下子無キニ依テ弟元明ヲ養子トナスト雖多病ニシテ家督ヲ讓ニ至ラズ。一女ヲ生先卒ス。弟元明ノ女ヲ養ヒ黒木勝見ノ二子元長ヲ養子トナス。文化十一甲戌年三月十八日卒ス。享年七十三歳。法名本淨院廓無自醉居士。(小川本)

(附記)「藤樹先生」に曰く、「明和五年二十七歳にして義暢公に從ひ東武に到る。槍馬に長じ陽明學に通ず。同藩士飯島留左衞門の女を娶る。子なし。」(中略)室諡本了院廓應貞顏大姉。(紫水)

元明外記　二子

寛延元戊辰年十一月三日生（嚴原に藤）一女ヲ生寛政四壬子年十一月二日卒ス。享年六十四歳之。法名(三)寶鏡軒一圓無相居士。（小川本）

（附記）「藤樹先生」に曰く、幼より學を好めども多病にして志を爲す能はず、渡邊佐兵衞の女を娶り一女を生む。勝見の二男を養子と爲す。（中略）諡爲忠院信應杜心居士、室諡貞性圓心妙鏡大姉。又曰く、女子。養子元長の室。文政二年二月十二日卒す。諡玉照院自室了清大姉。

(三)寶につき末裔中江晉氏の報に對馬國嚴原成相寺の過去帳は前記「藤樹先生」所載の如し、底本は誤記なるを知る。（紫水）

○第十代　元長　植右衞門　元明養子

家督ヲ繼グ文化十四丁丑年七月十八日義質公御判被成下又天保十四癸卯年二月十五日義和公御判被成下嘉永四辛亥年十月十二日卒ス。享年六十四歳之。（小川本）

（附記）「藤樹先生」に曰く、實は黑木勝見二男少にして柔術を好み壯年楊心流の免許を受け義質公に從ひ東武に到る。後以酊菴迎使として京師に役し歸りて郡奉行たり。後長崎聞役に任せられ居ること三年。（中略）諡淳弘院徹淨安居士室は養父元明の女一男二女を生み繼室楠本氏一女を生む。（紫水）

第十一代　元信　孫左衞門　長男

文化十二年正月十八日生（嚴原に藤）家督ヲ繼グ文久三癸亥年三月四日事故アッテ退隱ス。明治二己巳年八月二十四日卒ス。享年五十四歳。法名得眞院篤忠勇金居士。（小川本）

（附記）「藤樹先生」に曰く、二十歳にして和田流居合の奧義を極め門弟頗る多し。二十五歳にして射藝の免許を受く。慶應元年大目附役にて藝州の使者を勤め歸りて大目附兼郡奉行に任ぜられ後大目附兼勘定奉行に轉じ文化三年故ありて退隱す。（中略）室は同藩士平山郷左衞門の女二男三女を生む。明治四十年舊十一月二十三日卒す。諡得雲院爲節金巾大姉。又姉二人妹一人あり。即ち左の如し。

女子　佐治數馬の室。

女子　森川長九郎の室。
女子　同藩士早田圓右衛門の室。
（以上順位小川本中江氏系圖に依る。）

○

―女子　同藩士陶山庄一郎の室、後離婚。
―勇太郎　早世。
―女子　齋藤官の室。
―女子　鶴（姓）太郎の室。
―第十二代 清壽

文久三年十一月六日生る。明治十三年藤樹書院焼失後迎へられて小川村玉林寺先塋に參拜す。長崎縣下縣郡鶏知村に現住す。室は同藩士小川廣胖の妹。（「藤樹先生」）
大正八年十二月十八日長崎縣下縣郡嚴原町大字國分四拾七番戸より滋賀縣高島郡青柳村大字上小川參百拾八番地へ轉籍。（青柳村戸籍簿）

○

―第十三代 勝

明治二十五年三月六日嚴原に生る。四十年十二月六日藤樹書院に參拜し、祠前に於て藤樹先生贈位の位記を拜受す。翌四十一年四月一日滋賀縣師範學校豫備科に入學し、大正二年三月二十一日同校卒業。爾後高島郡内に於て小學教育に從事す。大正九年四月東京東洋大學へ入學。（「藤樹先生」）後國學院大學へ轉學、大正十三年三月卒業。同年五月六日藤樹書院に於て神前結婚を行ひ直ちに朝鮮京城第一公立高等普通學校へ赴任教育に從事す。室やす子青森縣八戸町松橋宗吉の妹。

├女子　初子。
│　明治二十八年十二月十三日出生。豊原藩士倉成棄正に嫁す。
├謙治　早世。
├利雄
│　明治三十三年六月十六日出生。大正十四年三月明治大學商科卒業。大阪市在住（紫水）
└女子　久子早世。

（以上の順位「藤樹先生」に據る。）

藤樹先生補傳　終

門弟子並研究者傳　解題並凡例

【解題】　藤樹先生の門人中世に知られたるものは其の數甚だ多からず。熊澤蕃山を除くの外は、僅かに、中川謙叔・泉仲愛等の二三輩を數ふるに過ぎず。淵岡山の如き先生の學統を傳へたる篤學者にして、功績の大なるものありしにも拘らず、從來殆ど世に知られざるの有樣なりき。況や、その他をや是れ蓋し先生が早く歿せられたるを以て、その徹底せる育英の業も、中途にして挫折するの止むなきに至りたると、また一方斯學の性質上名聞の他に洩るゝを厭ひたるの結果にも由るべし。由來事功の如きは、明良肝膽相照らすに非ざれば之を施すに由なきものにして、事功の有無を以て直ちに斯道の隆替をトし、人物の高下を論ずるは未だ當らざるなり。惟ふに俊傑の士が社會を善導し風教を維持するに顯著なる力を有することは勿論なりといへども、また之と同時に無名の士が暗々裏に衆力を竭くして社會の爲に貢獻せるもの、また沒すべからず。是れ編者が本全集刊行に際し本篇の起草を敢てしたる所以にして、一は門下の俊秀を叙すると共に、無名の士をも知り得る限り忠實に傳へて、以て門下の諸氏が先生の學術を如何に體得し、如何にその感化に浴したるか而して天下後世に如何なる影響を與へたるかを觀察するの資に供し、以て藤樹學の眞價をして一層明瞭ならしめんとの微志に出でたるものなり。

本卷載するところの資料中池田光政・熊澤蕃山等の傳記に就ては、その書固より乏しからずといへども、中川謙叔・加世季弘・泉仲愛等の如き、多くは蕃山資料中に散見するに止り、その他の諸氏に至

りては殆ど之を得るに道なし。依て編者は諸書を涉獵し、或は緣故の諸家を訪問して古文書・記錄等を探り、或は口碑・傳說等を質し、或は書を以て敎を請ひ、その間史實探訪の爲め愛媛縣大洲町に至りたること前後三回、岡山市に至りたること一回あり。鄕國の諸家に至つてはその幾十回に涉れるやを知らず。以て漸く本卷を成すに至れるなり。

池田光政公を門弟子中に列したるは稍〻妥當ならざるやの感なきにあらざれども、公が先生の講義を聽きしとは諸書の傳ふるところにして、殊に儒敎主義の實行者として逸すべからざるを以て、特に之を本卷の首位に掲げたり。

門弟子が文公家禮に據つて祀れる祖先の神主は幸にも近鄕門下末裔の諸家に存するを以て、繁を厭はず之を掲げて、以て當時先生の學が如何に深刻なる印象を與へたるかを觀察するの資に供したり。

研究者志村竹涯の如き之を本卷に掲ぐるの失當なるを思はざるにあらざりしも、また先生の遺書を研究して註記を加へ、或は有力なる材料の氏の筆記に據りて傳へられたるもの少からず。依て特に之を載することゝなしたり。唯氏の傳へたる史實上の記事に至りては、往々誤謬あるを免れざれば、本卷の編纂に丁りては愼重なる用意を以て之に臨み妄りに取材することを避けたり。

三輪執齋佐藤一齋大鹽中齋春日潛菴等先生の學に私淑せる錚々たる學者多々ありといへども、本編は主として直門の諸子並研究者の傳を叙するを任務とするものなるを以て都て之を省略せり。

書中肥後藩の陽明學に就いては上妻博之氏の研究に、赤穗義士木村貞行並吉田忠左衞門に就いては西村豐氏の研究に、又井上眞改に就いては依知川朝陽氏の研究に依りたるものにして、安原伯正・中

村仲直等については笠井劼氏の著「安原霖寰」に負ふところ頗る多く、大洲方面の士については大洲町梶原景文同足立儀國の兩氏並に伊豫史談會西園寺源透氏等より材料を受けしこと少からず。岡山藩に關する諸氏については渡邊頼母・永山卯三郎・河本一夫・大島勝海の四氏に負ふところ鮮少ならず。茲に之を謝す。

〔凡例〕 一、本書は藤樹先生直門の諸子を本傳とし、その子孫にして家學を承繼し又は特に學術上功績あるものは(附)として之を掲げたり。

一、三宅石菴は門人の子孫にあらざれども、藤樹先生書翰雜著の編纂者にして本全集と密接の關係あるを以て特に(附)として之を掲げたり。

一、篠原元博は藤樹先生全集編纂者として功績顯著なるものあるを以て特に本傳に加へて之を最後に置きたり。

一、直門の諸氏を呼ぶに姓の下子と稱したるは文集・書翰集・年譜等の用例に依る。その用例なきものは新に附するに氏を以てしたり。また熊澤蕃山・淵岡山の二子を呼ぶに先生を以てするは從來の用例に屬すれども本卷は門弟子としての傳記なるを以て今は採らず。

一、熊澤は姓にして蕃山もまた姓なれば、熊澤蕃山と稱するは意義をなさず。熊澤伯繼又は蕃山了介と稱するを可とす。然るに本書多くの場合熊澤蕃山と稱したるは唯普通の用例に從ひたるのみ。

一、本書は各傳の末尾に(原據)の二字を掲出して、その據るところの書名を明記し、或はその資料の所在等を略記したり。

一、本文の記述中既に據るところの書名を明記せるものは（原據）欄に再錄せず。
一、本書は必要に應じて資料を詳記して記述の基くところを明かにしたり。
一、大洲侯その他藩公の諡號を以て識せる場合はその下に（　）を附して本名を示す。但し再三掲出せるものは之を省略せり。
一、記述中萬年本の文字あり。此は萬年三宅石菴著藤樹先生書簡雜著を斥す。
一、傍記中（餘）と識せるは「餘姚學苑」にして（加）と識せるは「加藤家臣錄」なり。

昭和三年八月一日

小川喜代藏謹識

（再刊追記）

一、永田權右衛門、新に發見したる先生の眞蹟によりて門人中に此の人あり、五百石の祿を食みし家老なるを始めて知り得たり。第二冊五五八頁五六〇―五六一頁間挿繪及び「藤樹研究」第八卷一號近藤信氏永田權右衛門傳參照。
一、池田光政公と先生との關係、柴田委員の調査に係る淵岡山の研究に關する主たる書目、近藤信氏稿佃叔一及永田權右衛門、郡安兵衛正眞についての記述、並に編者の調査に由る義則森田又四郎の系譜及び戸田孫助正度の記事を夫々の項目下に追錄す。（藤陰）

藤樹先生全集 卷之四十四

門弟子並研究者傳

一、池田光政公

備前少將池田光政公は三十二萬石を領せる大藩主にして、慶長十四年四月四日を以て岡山城に生れ、天和二年五月廿二日七十四歳を以て逝けり。謚して芳烈公と稱しまた烈公ともいへり。おもふに公は比類稀なる英明の君主にして夙に熊澤蕃山が王佐の才あるを察して深く之を信任し、孜々として治を圖り專ら儒教の教義に則りたる國家を建設せんことを圖れり。されば太宰春臺が湯淺常山に復する書に「夫烈公者。不世出之英主。得熊澤子。而任以國政。明良之遇。實千載之一時也。」と云へるもの、能く此の間の消息を穿てるものといふべし。公また蕃山の薦によりて辭を卑うして、藤樹先生を招かれしも先生辭し玉ひたりと云ふ。併しながら是に依りて後來先生の三子並に中川謙叔以下門下の數輩來り仕へて國政に任ずるの端緒を啓けり。此の事を記せるもの後人の筆なれども、吉備温故秘錄（大澤惟貞輯錄）の文信ずるに足るものあれば左に之を摘錄すべし。

花畑。御移封以前ヨリアリテ、遊息ノ所ナリシガ、烈公ニハ聖學御尊信ニテ此處ニテ文武ノ兩藝ヲ學習セシメ度思召サレシニ、正保ノ頃熊澤助右衛門歸參セシ後、助右衛門ヨリ陽明學ヲ御勸メ奉リケレバ、江州ノ大儒中江与右衛門藤樹先生ヲ召サレケレドモ、與右衛門ハ御斷リ申上ゲ來リ仕ヘザリシニヨリ、与右衛門子太右衛門宜伯年僅カニ九歳ナルヲ召サレ、慶安三年庚寅來リ仕フ。此時与右衛門門人加世八兵ヱ・中川權太夫・中村又之丞等太右衛門ニ從ヒ、備前ヘ來リテ此花畑ニ居住セシメ、諸人ニ學習セシメラレシト云フ云云。

按ずるに服部南郭の加世毅軒君墓誌銘に「熊澤先生薦江州處士藤樹中江先生。於是侯玉帛具禮聘之。而藤樹以老且疾。辭不至。令其子及諸弟子至。」といひ、慕賢錄にもまた此の事を載せたり。されど此時先生未だ四十

歳に達せざりしほどなれば、老いたりと云ふは當らず。且つ長子並門下の士の禍を解きしは慶安三年のことなれば、行狀聞傳に「先生物故ノ後御客分ニ愛セラル。」といへるを以て正となすべし。翻つておもふに曩に先生の辭退さるゝに丁りて默契なしとも限らざれば、歿後に至りて漸く實現せられたるものとも見るべきか。〔本冊卷末退養門弟子傳參照。（藤陰）〕

有斐錄（寛延の頃池田侯の家人三村永忠の編纂に係り寛延己巳夏四月河口子深の序あり。）に「江州小川の邑中江與右衞門藤樹先生と號す。王氏の學にして道德甚尊し。公御尊敬被レ遊常に御文書を以て御議論有、江戸御往來には大津の邊へ出て見へ給ひ、或は御旅館へ御招有て御饗應御閑話等有。」（按ずるに公先生を大津の旅館に招き御閑話ありたりとの事藤樹先生行狀と合はず。暫く疑を存す。）また同書に「先生沒後神主を西之丸に設給ふ云云。」とあり。君則（池田侯臣近藤篤著。按ずるに本書の成れる年代詳かならざれども、著者は六之丞と稱し、河口靜齋の門人にして治政公に奉りたることその序文に見えたれば、略々その年代を知ることを得べし。また一本に安永七年赤松勤寫レ之との跋あり。明治四十三年十一月岡府星東居士君則を刊行して「芳烈公言行錄」と題せり。その自序に原本は芳烈公歿後間もなく作られたるものなることをいへり。今その據るところを知らず。また一說に湯淺常山の作なりともいふ。）に「先生沒後公先生の神主を西の丸に設けさせ玉ひて御祭有。今は和氣郡八木山村影堂に收め有云云。」（影堂、鏡石神社鎭座地名。）といひ、熊澤先生事跡考（清水队遊著）に「公亦中江氏を師とし學び、歿後神主を設て城中に祭玉ひ、公逝去の後は八木山神社の相殿國祖の神の從祀たり。」といへり。按ずるに備前國和氣郡三石町大字八木山に池田侯に由緒深き村社鏡石神社とて國祖輝政侯を祀れる神社ありてその傍に小祠あり。中江藤樹先生を祀る。里人之を神主堂と稱す。編者昭和二年一月廿八日社掌八木安太氏の案內にて參拜し親しく拜觀することを得たり。神龕並櫃すべて純然たる儒式にして藤樹書院祠堂に奉祀せるものと些の異同あるを見ず。こゝに於て芳烈公のその昔を思出でて無限の感に打たれたりき。

慶安元年八月廿五日藤樹先生卒せらるゝや、公其臣熊澤了介を遣はして賻を贈り來り弔せしむ。後また先生の三子を順次備前に迎へて或は之を御客分となし、或は近習を勤めしむ。季子常省子の如きは終に學校奉行に登用せらるゝに至れり。また小川に遺れる母堂及び妹には夫々扶持米を下されたりといふ。

寛文九年七月公嘗て泉仲愛・津田永忠に命じて造營せしめられたる國學竣功したるを以て、その二十五日始めて上校の式を行はる。藤樹先生眞筆至聖文宣王の書幅は中室にかゝげられたり。（此の幅今尙池田家事務所

に藏せり。」此の時蕃山明石より召されて至りその事を督せり。閏十月九日蕃山始めて諸士數十輩を學舍に會して道義を講說せり。備後藩士の教育は主として此の處にて行はれたるなり。

その他和氣郡閑谷に地を相して黌舍を創設し、輪奐たる講堂を築き聖堂を建てて大に文教の更張を圖れるが如き、またその近海に地を相して隄を築き潮を捍き鹵を斥けて沃土となし、以て十八町三段七畝十八步餘の地を得たれば、周制に則りて井田を設け民を置き名づけて井田村（今和氣郡伊里村大字井田）と稱したるが如き、また朱子の社倉法に倣ひて米を儲へ凶荒の扶助に備へしが如き、また旭川の東方所謂百間川の大工事を施して之を兒島灣に通じ、以て城下の氾濫を防げるが如き數へ來れば一として儒教主義の實現にあらざるはなし。

有斐錄に「公御一生國事を勤勞なされ、御學文も初めは王學後朱學御尊信被ㇾ遊、世に四君子と稱せし其壹人にて、天下に名を顯し給ふ。國中の人一人として其澤を蒙らざるものはなし。」（史籍雜纂第二、三五二頁）といへり。編者昭和二年一月岡山市に至り侯爵池田家事務所に於て芳烈公御日記を拜見したるに、承應三年午八月二日御上京之刻の條下に左の文あるを見たり。

一、防州（讃州ガ狀。新太郎上京候ほど心學之事急度異見可ㇾ然候。主は不ㇾ可ㇾ止候得共、家中へ廣まり不ㇾ申樣に云云。」

とありて尙朱書にて板倉周防守重宗・酒井讃岐守忠勝と傍記せり。

是れに由りて之を見るときは公晩年に至り幕府の忌諱を避けん爲め姑らく王學を捨てて朱學を奉ぜるが如き態度を示せるにはあらざるか。されば有斐錄の記事は此の事實を皮相的にのみ見たるものなるべし。惟ふに藤樹先生の學をよく咀嚼し能く同化して、一個の見識を立てたるものは蕃山なり。而して先生の學を尊信し、蕃山の獻策を納れて、之を實地に應用し政治上に試みたるものは實に芳烈公なりとす。されば先生の學を講ずるもの、先づ芳烈公の事蹟を追懷するの必要あるを知るべきなり。

（原據）蕃山譜。事實文編。慕賢錄。藤樹先生年譜。藤樹先生行狀聞傳。續蕃山考。碑文（井田村）。光政公御日記。

二、熊澤伯繼

熊澤伯繼は江西門下の巨擘にして、世推尊して蕃山先生と稱す。諱は伯繼、通稱は左七郎、後治郎八、又助右衞門と改む。野尻藤兵衞一利の長子にして、元和五年を以て京都五條に生る。幼にして外祖父熊澤守右衞門守久に養はれて、遂にその氏を冒す。寛永十一年甫めて十六、備前少將光政公に事ふ。公夙にその凡ならざるを察し大に用ゆるところあらんとす。蕃山以爲らく學文武を兼ぬるにあらざれば以て君に事ふべからずと。乃ち二十にして仕を致して近江國桐原に隱れ武術を練り學を修む。十八年京師に至りて師を求むれどもいまだその人を得ず。偶々藤樹先生の爲人を聞き小川村に至りて業を受けんことを請ふ。先生辭するに人の師となるに足らざるを以てして許さず。十九年七月再び來りて固く請ふ。先生また辭して見ず。その廡下に宿すること二夜先生の母その志を憐み先生に諭すところあり。先生唯々としてその命に從ふ。時に蕃山二十四、（蕃山は元和五年を以て生れ、元祿四年七十三を以て歿したれば、寛永十八年は當に二十三ならざるべからず。而して集義外書に蕃山自ら二十四となす。姑く外書に從ふ。）先生より少きこと十歲、九月三たび來りて業を受く。集義外書卷之六に蕃山自ら此の時の事を記して曰く、

我年たけて問學せんとす。文才なく文字なし。氣力盛なりし時は不幸にして學あることを不レ知、無用の事に精神を勞し、病氣に成て後二十二歲の時初て四書の文字讀を習ぬ。集註に仍て四書を學びき。廿四の七月高島に行て中江氏に逢てうたがはしき事をとふ。歸て又九月に高島に行て來年の四月まで居て孝經・大學・中庸を學びき。それより後は父たる者仕へを求めんがために江戶に行ければ、東江州の人遠き城屋敷に母并に妹どものみありければ、京都にも西江州にも行ことかなはず。家きはめて貧にて獨學する事五年なりき。しれる人母弟妹のあるなしり饑饉の餓死に入なんことをあはれみてつかへを求めしむ。其比中江氏王子の書を見て良知の旨をよろこび予にも亦さとされき。これによりて大に心法の力を得たり。

正保四年再び往きて岡山に仕ふ。公固より蕃山が王佐の才あるを知る。大に悅び祿三百石を給し命じて側役となす。慶安元年八月廿五日藤樹先生卒す。蕃山命を受けて來り弔す。又自ら心喪に服すること三年に及ぶ。慶安三年擢んでられて大夫となり、國政に參與し、祿三千石を食む。是歲公蕃山の議を用ひ士大夫を分ちて四疆の要害を守らしむ。和氣郡八塔寺村は備播作三州の犬牙相接するところにして尤も要害の地なりと

す。蕃山以爲らく警備の法士卒をして土着せしむるより善きはなしと。是に於て自ら之に當らんことを請ひ乃ち士卒數十百人を八塔寺村に徙し、人毎に一馬一槍を具へしめ地を相して田地を開墾し警備大に整へり。四年公に從ひて江戸に赴く。名聲籍甚その道を慕ふ者益々多く閣老某蕃山を延いて上客となす。徳川頼宣・松平信綱・板倉重宗・久世廣之・板倉重矩・堀田正俊・本多忠平・中川久清等尊信最も厚く、大將軍大猷公もまた將に蕃山を召見せんとす。會々薨じて果さず。承應三年蕃山、公に從ひ江戸を發して京師に寓す。板倉重宗蕃山の事功赫々として群小のその間に乘せんことを憂へ勇退せんことを勸む。蕃山その意を諒とす。然れども公の殊遇に感じて去るに忍びず。七月洪水あり。餓死せんとするもの九萬人に及ぶといふ。公乃ち蕃山の議を用ひて速かに倉庫を開きて大に窮民を救ひ、また使を幕府に遣はして四萬金を借りてその用に充てたり。民皆その仁政を謳歌して止まず。是歳蕃山また公に勸めて諫の箱を城外に置き、士民をして時政の得失について言ふことを得せしめ、以て時弊を救ふの端緒を開きたり。また水利を善くし、堤防を造り、武備を嚴にして不虞に備ふる等其の劃策擧げて數ふべからず。而して蕃山一家頗る儉にして衣服飲食淡然として好む所なし。壁間常に源義經の畫像一幅を掛くるのみ。他の掛幅なし。閨門肅然家道雍睦妻子自ら家事を執りて婢女を置かず。しかも多く善士を畜ひ軍賦の備萬石の家に比すべし。

明暦二年和氣郡木谷村に獵し馬逸して壑に陷り右の臂を傷く。自らおもへらく悍馬に鞭ち强弓彎くこと能はざれば武士の務も是までなりと。卽ち遯世の志あり。公に請ひてその季子丹波守輝祿を養うて嗣となし、以てその家を承けしむ。（池田家別邸所藏息游軒書翰二册あり。蕃山諄々として丹波守を戒むるもの數通を收む。）尋いで食邑寺口村を改めて蕃山と名づく。蓋し新古今集源重之の「つくば山はやましげ山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり」といふ歌に取り暗に歸臥の意を寓し王學治心の意もまたその中にあるなり。蕃山重職にあること八年。芳烈公の善政美事一として與らざるものなく、功績の見るべきもの數ふるに暇あらず。致仕の後といへども大事あれば必ずその議に與る。

萬治二年京都に寓居し蕃山了介と稱せり。居ること殆ど十年。雅樂を學び國典を習ひまた聯歌を好めり。蕃山もと深草の僧元政と友とし善し。嘗て元政の稱心庵に會す。蕃山琵琶を鼓し小倉實起卿琴を彈き、而し

て元政和歌を賦して各々興を遣れり。是の時に當り天朝の公卿贄を門に取るもの少からず。人あり、所司代牧野親成に譏す。是に於て寛文七年蕃山終に京都を去りて芳野に寓す。和歌一首あり。

この春はよし野の山の山守となりてこそ知れ花の色香を

幾もなく山城國鹿背山に移る。九年板倉内膳正重矩の勸めにより松平日向守信之の領地播州明石に移り、大山寺の側に居る。その居を名けて息游軒といふ。是歳芳烈公國學を創建し大に文教を張らんとす。蕃山乃ち公の召に應じて備前に到り學政及び釋菜の儀を議定し始めて至聖文宣王（藤樹先生眞筆）を祀る。延寶七年松平日向守封を大和の郡山に移す。蕃山從て徙る。貞享二年松平日向守また封を下總古河に移す。蕃山も亦從つて徙る。貞享四年同志田中孫十郎大目付を命ぜられたれば書を以て政務につき教を請へり。（諸書多くは蕃山封事を奉れりとなすも今採らず。）蕃山具にその思ふところを書して之を送る。老中某之を見て論じて曰く、處士政を議す、罪大なりと。終に禁錮せらる。是れより蕃山時事を言はず。人と語り談偶々之に及べば默然として答へず。笙を把りて之を吹く。元祿四年八月十七日終に逝く。享年七十有三。日向守乃ち親戚門人を會し儒禮を以て古河の大堤村鮭延寺に葬る。墓表題して熊澤息游軒伯繼之墓といふ。明治四十三年十一月三日朝廷特旨を以て贈正四位を追贈あらせられたり。著書凡二十五種あり。集義和書、集義外書特に世に顯はる。傳記の委しきことは湯淺常山の熊澤先生行狀記、草加定環の蕃山先生行狀、熊澤先生言行錄、巨勢卓幹の蕃山先生實錄、片山重範の蕃山先生年譜、中江藤樹熊澤蕃山傳、秋山弘道の慕賢錄、井上通泰の蕃山考、續蕃山考、奧田義人の熊澤蕃山等に詳かなれば就いて見るべし。〔集義和書卷第六全部は藤樹先生の眞著にして蕃山の作に非ず。委細は本全集第二冊末尾志村全書の檢討(附)集義和書の吟味參照。（藤陰）〕

（疑義）　文集四。原譜以ニ通書ヲ餞ス熊澤子之行ニ一の文あり。此は蕃山が招きに應じて、豫州に趣かんとするを送れる文なり。然れども今その史實を證すべきものなし。暫く疑を存す。

（論評）　荻生徂徠與ニ藪震庵一書曰、承ニ熊澤集書一不佗未レ見ニ其書一。嘗聞ニ其人太聰明一。蓋百年來儒者巨擘。人材則蕃山、學問則仁齋、餘子碌々未レ足レ數也。徂徠高邁負レ才。鮮レ所ニ推服一。然評ニ古今名家一以ニ先生一爲ニ經國之才第一一。

太宰春臺復ニ湯淺常山一書曰、夫烈公不世出之英主。得ニ熊澤子一而任ニ國政一、明良之遇、實千載之一時也。（蕃山先生年譜）

（原據） 本篇は主として片山重範著熊澤蕃山先生年譜に據り、傍ら熊澤氏事依レ尋答、松平日向守樣御用入之答、並集賢錄を參考したり。

（附）

（一） 熊澤蕃山の末裔並近江蕃山文庫の剏設に就いて

熊澤蕃山の長子を繼明といふ。蕃山右七郎と稱し池田綱政公に事へ新地千五百石を領したりしが急死してその家斷絕し、二男繼義によりて蕃山の直系は繼がれたり。繼義は蕃山左七郎といふ。播州明石の城主松平日向守信之に事へたりしが、松平氏斷絕の後浪人して京都に歿す。その子繼古また同じく蕃山左七郎と稱し始めて鳥取藩國老荒尾氏に事へたりしが、その卒去と共に蕃山の直系は終に絕えたり。是に於てその血族たる小野左二郎繼賢は岡山より來りて因州の熊澤家を繼げり。之を第四世となす。後故ありて米子に移れり。是より父子相承くること四たびにして第九世繼明に至る。偶々明治維新の大改革あり。幾多の變遷を經て轗軻不遇に陷りたり。明治二十二年屯田兵に志願し北海道に赴きしも、不幸頻發再び老軀を齎して米子に歸り悲境の極に達したり。是に於て傳來の神主並遺物を奉じて輾々終に姻族畑莊助氏に身を寄するに至れり。畑氏は近江國滋賀郡和邇村大字栗原の人なり。その宗家を莊兵衞といふ。蕃山の三女かる子は實にこゝに嫁せしなり。されば畑氏は深くその境遇に同情して優遇を加へ明治四十年二月十五日を以て本籍を栗原に移し永眠の地となさしむ。翌四十一年五月二日終に大津の別邸に卒す。享年六十六。畑氏名門の斷絕を惜み宗家莊兵衞の長女リツ子をして、その祀を奉ぜしめたり。明治四十三年十一月三日朝廷特旨を以て熊澤蕃山助右衞門に對し贈正四位の恩命を下し給ふや、岡山縣當局は種々研究の結果蕃山の養子たりし池田丹波守輝錄の末裔子爵池田政時をして位記の拜受に浴せしめたるも、又リツ子が蕃山の後裔たること並に之を證する證據書類の充分なることをも立證せり。かくて畑氏等その遺物を永遠に保存し世道人心の善導に資せんと欲し、同志を募りて蕃山會を組織し、栗原に地を相して近江蕃山文庫を剏設し、且つ祠堂を設けて神靈を奉祀せんとし、拮据數年終に輪奐たる一宇を建立し、大正十五年十月三日を以てその落成式を擧行せり。

略系

（原補）　近江蕃山文庫所藏の熊澤家古記録に據る。

（二）　藤樹先生の蕃山に及ぼせる思想上の影響

藤樹先生は學深く德高くして能く陽明王子の學を祖述し、儒學の眞髓を發揮するに努められたりといへども、之を政治上に應用するの機會を得る能はざりしは惜むべし。然れども門下に不世出の英才蕃山ありて、希世の明君芳烈公に事へ、明良肝膽相照してその學ぶところを實地に試み、大に聖學の本領を發揮することを得たり。されば先生の學は蕃山を俟ちて始めてその全きを得たるものともいふべきか。而して蕃山の學を講ずるや一見識ありて一々師說に盲從するを好まず。淵岡山が一言半句一點半劃も先師の敎に背かざらんことを期したるとは大に趣を異にせり。然れども仔細に觀來るときは蕃山の思想は藤樹先生の學より得來れるものなること明かなり。今左にその最も顯著なるもの三ヶ條を揭げて聊か見るところを記述すべし。

一、弟子を遇するに心友の態度を以てしたること

蕃山は集義和書卷二に「拙者は弟子と申者一人もなく候。」といひて門人を遇するに常に心友の態度を以てすべきことを說きたり。按ずるに是れ蕃山の創意に出づるにあらずして實は藤樹先生の學風に淵源せるものなり。先生の書簡集を精讀するに門人を呼ぶに常に同志を以てし懇切叮嚀を極む。また送佃子文に「佃子

遠ク辱ス心友之訪ヲ，面ノアタリ請フ函室之指引ヲ，(本全集巻之四文集四參照)といひ、送ル中西子ニ文に「中西子謬ツテ不ㇾ吾ヲ鄙トセ。遠ク辱クス輔仁之訪ヲ。不ㇾ佞雖ㇾ不ㇾ能ㇾ成スコト其美ヲ一、而喜ブ益友之奇遇ヲ。而相與ニ講習討論シ。以テ得ㇾ摩勵之助ヲ一。」(同上)といへるが如き、歴々として見ることを得べし。之を彼の山崎闇齋が師弟の誼を正すに君臣の禮を以てせると同日の論にあらず。蓋し江西學派の一特色となすべし。

二、取捨の見地

蕃山は集義和書に「愚は朱子にもとらず。陽明にもとらず。たゞ古の聖人に取て用ひ侍るなり。道統の傳のより來ることは朱王共に同じ。其言は時によつて發する成べし。其眞にをひては符節を合せたるがごとし。(中略)愚拙自反愼獨の功の内に向て受用と成事は陽明の良智の發起に取、惑を辨るの事は朱子窮理の學により侍り云云。」(義論一)といへり。是れ蕃山の朱王いづれにも偏せざるの態度にして頗る卓見に屬す。然れどもその朱王の一方のみに偏するは黨同伐異の私言にして至當の公論にあらずとなすは、藤樹先生の學風にして委しくは先生晩年の作にかゝる大學考を見るべし。(本全集巻之十二、第三・四頁)また集義和書に師說取捨の見地を記して曰く、

心友問。先生は先師中江氏の言を用ひずして自らの是をたて給へる高慢也と申す者あり。云、予が先師に受てたがはざるものは實義也。學術言行の未熟なると時處位に應ずるとは、日をかされて熟し、時に當て變通すべし。予が後の人も又予が學の未熟を補ひ予が言行の後の時に不ㇾ叶をばあらたむべし。大道の實義にをひては先師と予と一毛もたがふことあたはず。予の後の人も亦同じ。其の變に通じて民人うむことなきの知もひとし。言行の跡の不同を見て同異を爭ふは道を知らざるなり。

問ふ。何をか大道の實義といふ。

曰く。五典十義是なり。一事の不義を行ひ、一人の罪かろきものを殺して天下を得事もせざるの實義あり。不義をにくみ惡をはづるの明德を固有すれば也。此の明德を養て日々に明かにし人欲の爲に害せられざるを心法といふ。是又心法の實義也。先師と予と違はざるのみならず。唐日本を雖もたがふことなし。此の實義をろそかならば其云所みな先師の言にたかはずとも、先師の門人にあらじ。予が後の人も予が言を非とし不ㇾ用とも此實義あらん人は予が同志也。先師本より凡情を愛せず。君子の志を尊べり。未熟の言を用て先師を贔屓するものを悅ふの凡心有べからず。先師存生の時變ぜざるものは志ばかりにて學術は日々月々に進で一所に固滯せざりき。其の至善を期するの志を繼

で日々に新にするの德業を受たる人あらば眞の門人成べし。古より民三に生ず。父母生じ、君養ひ、師敎ゆといへり。恩ひとしき故にとも
に三年の喪をつとめき。予が先師におけるも其の恩君父に同じ。子よく父の家を起し、臣よく君の德をひろめ、門人よく師の學を新にせば
ともに恩を報ずる也。(義論六)

之を精讀するに蕃山が眞理の闡明を以て學者の任務たることを自認すると同時に一事の不義を行ひ一人の罪なきものを殺して天下を得事もせじと提唱して孔門の學徒が政治家としての本領を示し、而して之を一括するに明明德の三字を以てしたるは能く藤樹先生の學を發揮せるものといふべきなり。

三、敬神思想

藤樹先生が我が神明に對し敬虔の念淺からざりしことは既に補傳第二十三項に於て詳記するところありたり。さればかゝる思想を有せる師の下にありし蕃山が神道に關して發明するところ少からざりしは固より當然なり。その說くところ我が古神道と同じからざるものありと雖も、當時斯道の眞精神未だ世に顯はるゝに至らざりし暗黑時代に在つて儒者の立場に於て一種の見解を下し、三輪物語・神道大義・三社託宣等を著して神道に關する意見を詳述せり。殊に先生の太神宮參拜の詩に於て「默禱聖人神道敎。」といへるは語簡にして未だ盡さざる所あり。蕃山之を受けて集義外書に「神道と聖人の道とは名こそかはりたれども同じく人道にして三綱五常の道にもれず。」(脫簡二)といひ、神道大義に「天地ひらけて人の道あり。人の道は則ち天地の道なり。天地は不言にして人に敎へ給ふ。神聖之れを翼くるに言を以てし給ふ。但〻神の代には未だ文字あらざりしを以て物によりて人の德を象どり敎をなし給へり云云。」といひて三種の神器に顯れたる德を述べ、その終りに云ふ、「唐土の聖人は之れを知仁勇と名づく。天地の神道は和漢同じ事なり。我朝の神皇の象と唐土の聖人の言と符節を合したるが如し。之れを奇特といふべからず。心同じく道一なるが故なり。故に神道に深きものは儒道を借らざるも心法明かにして政敎備れり。況んや異端をや。神道は易簡明白至れり盡くせりと謂ふべし。」といへるは先生の未だ言はざるところを能く謂ひて餘蘊なしといふべし。また集義外書に、

一、再書略。中夏の聖人を日本へ渡し候はゞ、道學の教いかゞ可レ被レ成候や。儒道と申名も、聖學と云語も被レ仰間敷候。其まゝに日本の神道を崇め王法を尊て廢れたるを明かにし絶たるを興させ給て二度神代の風かへり可レ申候。（削簡二）

といへるは明かに日本主義を闡明せるものなり。而して蕃山は更に一歩を進めて勤王思想を發揮するに至れるは所謂藍より出でて藍よりも青く、眞に克く師の學を新にするものと謂ふべきなり。

（三）　餘　論

熊澤蕃山は集義外書卷六に藤樹先生を評して左の如く云へり。

中江氏は生付て氣質に君子の風あり。德業を備へたる所ある人なりき、學は未熟にて異學のついゑもありき。五年命のびたらましかば學も至所に至べき所ありしなり。中江氏存生の時は予を始として皆粗學の者どもなればゆるさるべき者一人もなかりしに、中江氏の名によつて江西の學者の名の實に過ぎたることは十百倍なればついゑもまた大なり。

人往々此文を讀んで、蕃山がその師を呼ぶに中江氏を以てしたると、その學を未熟なりとし異學の弊ありと云へることを以て蕃山の人と爲りに疑を挾むものなきに非ず。然り蕃山が多くの場合その師を稱するに中江氏を以てしたるは稍々妥當を缺けるの感なきにあらず。然れども集義和書顯非を著はして藤樹先生を尊信し蕃山を批議したる門人西川季格がその書中往々中江氏と稱したることあるを見るときは蓋し當時の習慣と見て可ならん。然り而して蕃山も獨り中江氏と稱したるのみにあらず。或は先生と稱し、先師と稱し、また先師中江氏とも稱したるなり。されば之を連ねて先師中江藤樹先生と叮嚀に稱したるものとも考へらるべきにあらずや。

蕃山が先生の學を未熟なりとし異學の弊ありといへるに就いてはまた說あり。蓋し蕃山は師說を奉じて良知の學を宗とするものなれども、「愚は陽明にも取らず、朱子にも取らず。」などいひて暗に王子の學にあらざるかの如き態度を示せり。是れ朱王いづれも比類稀なる大儒には相違なきも、「大賢以下の學は未だ熟せざる所あり。」となし一に堯舜を以て理想とせるものにして、先師の學また茲にあることを自信せるなり。しか

しながら是れ獨り蕃山に限るにあらず。苟も儒學を奉ずるほどのものは必ずや堯舜孔孟を以て理想とせざるものなし。夫れ君子一たび道に志し孜々として勤むといへども聖境に達すること豈容易の業ならんや。されば孔子の如き生知安行を以てするも尙七十の高齡に達して始めて理想の境に達せる程なれば蕃山が、不惑を踰ゆること僅かに一年にして永眠せられたる先生の學を稱して未だ熟せざる所ありとして惜めるもの、故なきにあらざるなり。惟ふに有德の君子は物我の隔心を有せず。若し蕃山を以て有德の君子とするの前提を許すものとすれば、その學域中に包含せらるゝ蕃山が何ぞその師藤樹先生を自己より引離し之を客觀的に見て批評するが如き態度に出づるものならんや。蕃山は先師の學を稱して未熟なりといへりといへども、また直ちに自己の粗學なることをもいへり。されば蕃山の此の一語は自己を反省しまた一方同門の士を戒飭せる自然の歎聲と見るを至當となす。異學の弊ありといへるは集義和書卷十、七丁に誦經威儀のことを云へると、同外書卷七、五丁に鑑草に就いての意見あり。此の如きものは決して師を批議せんが爲に言へるものにあらず。讀者よく本文を精讀してその意のあるところを了解するを要す。

三、泉仲愛

泉仲愛通稱八右衞門、泉窩と號す。野尻藤兵衞一利の第二子にして熊澤蕃山の弟なり。寬永十三年十四歲にして平戶侯松浦隆信に仕へ其子鎭信の時君命によりて岩田治左衞門の養子となり、養父の死後其祿二百石をつぐ。同十九年二十歲の時松浦家を辭し正保元年江西に來りて藤樹先生に學ぶ。時に年齒まさに二十二。先生より少きこと十五。慶安三年二十八歲の時池田氏に仕ふ。承應元年三十歲の時新知五百石を賜ふ。明曆二年三十四歲の時養父治左衞門の兄甚右衞門の孫十太夫の當時九歲なるを上野國大月より呼び寄せ、寬文六年君に乞ひて祿二百石を十太夫に分ちて治左衞門の跡を興さしむ。此時仲愛四十四歲十太夫十九歲なり。仲愛假學館の奉行となりしより幾ど三十四年、學校總奉行となりしより二十七年餘を經て、元祿十三年二月十六日年七十八にて職を免せられたり。又仲愛は光政・綱政の二君に歴事し、祿五百石、銃卒二十人の頭たり。

才器は息游に劣り、篤實は勝れりと稱する者多し。元祿十五壬午年三月二十日行年八十にて三野郡岡山に卒す。上道郡平井山に葬る。室高橋氏名は長、江洲彦根之城主井伊家の臣高橋勘兵衛の女なり。寛文四甲辰年十二月十三日蕃山村に卒す。夫婦が鼻に葬る。後箕浦平左衛門の女を娶るといふ。長子藤兵衛伯達早く歿す。次子八右衛門家を繼ぐ。

（原據）熊澤氏事依レ尋答。集義錄。蕃山考。續蕃山考。藤樹先生年譜。雜誌陽明學第四十九號所載井上通泰博士の蕃山先生略傳。

逸　事。

一、或時御咄之序に、近頃は餘り大なる過ちも無かと思ふとの給へば、泉氏聞て、恐ながらそれはいやにて御座候と被二申上一ければ公御顏色少し變にさせ給ひて、奥へ入らせ給ふに依て泉氏退出恐入、翌日出仕をひかへて在宿なれば、御尋有、早速登城あれば、召して御咄あり。御容貌常に變らせ給はず。御機嫌勇々敷、泉氏も前日の事聊心頭になしと見へて敬謹恭しく、其後再び其事の給はず。泉氏も不二申上一、識者是を聞し、誠に君臣合體といふ是なり。此位は道に通じたる人ならでは知りがたき所也といへり。（史籍雜纂第二、三二四頁有斐錄元）

二、泉八左衛門熊澤次郎八ノ弟也。世に有徳の君子と稱す。を評定所へ列座に御出し被レ成候、何事をもいはず出候迄也。諸役人無益の事に思ひ、八左衛門をば陶器にて作りたらんがよかるべしと戯れ評せし位なりし。公聞召て、八左衛門が前にては、假初にも虚妄の事いふ人有べからず、八左衛門が言と不レ言とにはよらじと仰ける。（史籍雜纂第二、三三五頁有斐錄元）

八左衛門評定所へ出る事、一年餘も過て、大臣達公の御趣意を悟られしと也。依レ之公の大知なる事を感ぜり。八左衛門が前にては、事を捌くに私なるの論を憚る。しかれば國政に於て甚だ益有べし。其御趣意にて出されたり。（史籍雜纂第二、三三五頁有斐錄元）

三、泉仲愛稱二八右衛門一。了介弟也。仕二備前一食祿五百石。以二吏事一見レ重。偶有下兄弟爭二父田一者上。相訟獄。光政使二仲愛決一レ之。仲愛命寘二兄弟於一小室一。使レ與二飲食與一レ浴。至二夜分一不レ斷。兄自悔謂レ弟曰。今所レ爭田。借耘耕何如。弟曰。固所レ欲也。以告レ之。仲愛悦曰善哉、乃教以二連枝不一レ可二相伐一陳以二禍福之義一。兄弟歔欷而出。遂全二天倫一。（野史二八三四頁）

四、淵岡山

淵岡山諱惟元、一に宗誠といひ通稱四郎右衛門また源兵衛に作る。故ありて岡源右衛門と改む。仙臺に生（編者曰、一說に生國攝津なりと。）

れ伊達家の臣と云ふ。藤樹先生より少きこと九歳。後幕臣一尾伊織に事ふ。一尾氏の領地近江にあるを以て主命を帶びて滯留せる折しも藤樹先生の爲人を聞き正保元年冬小川村に來り中川氏を介して先生に謁す。此の時岡山二十八歳なり。岡山退いて嗟嘆し中川氏と語る。事、事狀並に川田剛著藤樹先生年譜に見えたり。先生歿せらるゝや岡山畫工に命じて先生の肖像三幅を畫かしめその一幅を藤樹書院に納めたり。延寶二甲寅年京都西陣葭屋町に學舍を創設し、先師の祠堂を建て斯文の興起に努めたり。岡山の學を講ずるや先師の學を以て千聖不傳の秘を得たりとなし、その眞傳を天下後世に傳へんことを期したり。貞享三丙寅年十二月二日卒す。壽七十東山永觀堂に葬る。著書岡山先生示教錄七卷。同追加一卷。岡山先生書翰集三卷あり。皆後人の編する所なり。岡山初め洛外の岡山(?)といふ處に居る。故に門人岡山先生と稱す。嗣子伯養諱惟直字は牛平その業を繼ぐ。元文元年十一月十三日歿す。伯養二男一女あり。長男早世し次男廢疾あり。乃ち東條葭卿を會津高額村より迎へて其の女に配し家學を繼がしむ。葭卿諱は惟傳字は貞藏天明二年二月四日歿す。享年六十八。長男章甫家學を受く。章甫諱は惟倫字は良藏寛政十一年九月二日歿す。享年四十九。子孫相繼いで學を講ずること凡五十年孜々として怠らず。その學は京都を中心として江戸・會津・伊勢・大阪等綿々として絶えず。その委しきことは會津藤樹學道統譜に見えたり。惟ふに岡山は蕃山の如く赫々たる事功なしといへども先生の純熟せる思想を後世に傳へたる、その功績に至りては歿すべからざるものあり。正堂東敬治翁嘗つて蕃山・岡山を以て藤門の雙璧といへるは能くその肯綮を得たりとなす。(補正參照)

岡山先生書簡中よりその和歌二三を摘記して以て詞藻を窺ふの資に供す。

答二久野氏一書通の奥に「西山ノ紅葉最中ニ候。責テ一枝ナリモ掛御目度候。サリナガラ此腰折ニテ紅葉ノ御自得」

一枝ノ色ハ色カハ紅葉バノ山ノスガタニ心アルカナ

答二都築氏一書通の奥に

今サマノ色ヲ忘レテトコトワノ操ニナラヘ松ノ藤ナミ

答片岡子書通の奥に

今ザマヲ忘レテ古キ道シアレバ行モ歸ルモ障ラサリケリ

答荒井一明書通の奥に

山里ノ奥モ隱スサ、垣ノアラハニ安キ人ノ心モ

（原據） 碑文。備生雜記。藤樹先生書簡集（春日氏本篠原氏本）。會津藤樹學道統譜。藤樹先生行狀聞傳。岡山先生示教錄並追加序。愚按抄。北川子示教錄。川田剛著藤樹先生年譜。湖學紀聞。雜誌陽明學。

（附）

（一） 淵氏一家の墓碑文之寫 在京都東山永觀堂師禪林寺之

淵四郎左衞門尉宗元墓

碑陰文字あれども全く磨滅して一字も讀み得ず。案むろに途なし。其古色位置等より考ふろに或は岡山先生の大父ならんか。暫く最初に記す。

初代
淵岡山之墓

貞享三年歲次丙寅臘月初二日卒。

二代
淵伯養惟直之墓

元文元丙辰年十一月十三日。

三代
葭卿淵先生之墓

先生諱惟傳。字貞藏。號葭卿。大父東條次賢。大母條氏。先生以正德乙未正月二十七日生於東奧會津傍高額邑。性敦厚好學。淵氏曾祖岡山受業藤樹先生。學成後京師葭屋街設塾講學有年矣。祖伯養繼業。有一男一女。男先歿無嗣。故門人共議迎先生于會陽。使繼其業以配其女。生一男女。先亡。男惟倫。女適藤公。強後娶堀池氏。舉二男一女。男共夭。女嫁岩崎氏。天明二年壬寅二月四日終。享年六十八。葬于東山禪林寺。銘曰。

葭卿先生。有才有德。
刻文此碑。以貽厥則。

正二位清原宣條卿撰　男　惟倫　建

清淑淵氏墓

清淑諱閭、姓淵氏、生于京師、其先日向國人、岡山諱惟元・字源右衛門之孫、伯養諱惟直・字半平之女、母木村氏、實村下氏所生也、伯養二男、長兵藏早歿。次有廢疾。伯養既卒。門人相議以木村氏命迎東條惟傳於會津、使奉其祀、妻以其女、即清淑也、生一男一女、寛延四年辛未八月十九日病卒。私謚曰清淑。

四代
章甫先生墓

君諱惟備。字良藏、號章甫、淵葭卿君長子、母半平君女、初半平君無嗣、養東條氏之子以女配之、是爲葭卿君、君承家學講業不懈。娶伊村氏、先歿。再娶福岡氏、亦歿。有二男七女、寛政己未九月二日病歿。年四十九。葬于禪林寺先塋側。　男　惟清　建

五代
高山宗節居士

天保六年未五月七日

考ふるに惟清君の謚ならん。

清岳法心禪女　（啞者）

卒日不詳。惟清君の女ならん。傳聞七十歳以上にして明治十五年比に歿すと。從五位福井貞憲大に法心を保護したりしが、岡山先生以來教化の本源たりし祠堂所在の地所は法心の養子留吉の時に至り終に他人の有に歸したり。

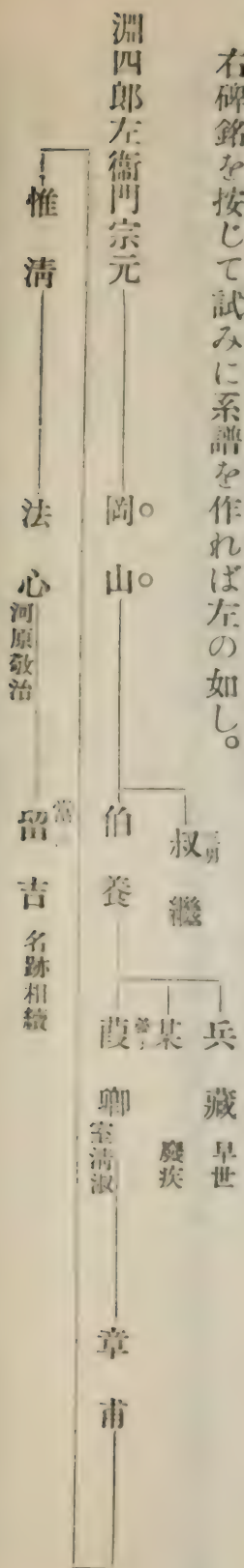
河原敬治源有善

葬所今詳かならず。嘉永七年の火災後に歿せしならん。出生地は京都の北方鞍馬の附近也。傳聞に有善は惟清君の歿後に妻子を携へ淵氏へ入家せしものにて其の名跡者なれども淵姓を襲ふに至らず、終に歿したり。其の妻子は引續き淵家を更に法心に還附し其の生家に復歸したりといふ。

（明治三十七年七月京都市外小松原村故福井成功氏報）

（二）　略　系

右碑銘を按じて試みに系譜を作れば左の如し。

- 淵四郎左衛門宗元 ― 岡山
  - 岡山 ― 叔繼（二男）
  - 岡山 ― 伯養
    - 伯養 ― 兵藏（早世）
    - 伯養 ― 某（廢疾）
    - 伯養 ― 葭卿（養子）（室清淑） ― 章甫 ― 惟清 ― 法心（河原敬治） ― 留吉（養）（名跡相續）

(三) 備前長谷川九兵衞より志村仲昌宛書狀の一節

一、於二京都葭屋町、藤樹先生祠堂一へもお染御同道御參拜被レ成候由同所淵源右衛門殿懇志之趣共傳承奇特感心仕候。右淵氏事此表にも存知候者共有レ之兼而承傳候事ニ御座候。厚情之趣承候付是亦此度以二書狀一一禮申遣候左樣御心得可レ被レ下候。(書院記事)

こゝにお染といへるは常省先生の第二女にして備前長谷川氏に寄寓せろ時の書狀なり。末尾に「先達而豫州書院出來候義申進候付委細之趣御紙面被レ下又由來承知大幸ニ存候」とあれば略々その年代を知るべく、また淵源右衛門といへるは葭卿氏を指せるものと思はる。

(四) 逸事

貞享三丙寅岡山先生御終焉之年也 五月廿三日遠藤子へ御咄被レ成候遠藤庄七郎謙安先生也覺書に、我等義二三十に及まで江戸にて一尾伊織殿へみやつかへいたし成程氣に入申候。また、父親の氣に入候て三十餘り迄ひとつ床に臥申樣に有レ之候。其後仙臺に罷下り母に逢申候時私の頭のはげ候を手にてなで被レ申候て、扨々年寄頭などはげ申候か、其方義は或は奉公を爲レ致又は何國何方に差置候ても人々の氣に入申候。蔭にて安堵申候といわれ候。

(北川子示教錄三六丁)

或朝門弟子を呼で、わが寢姿はいか樣にと、御愼しみ有レ之しと也。亦夜陰小用抔便じ給ふに、脇指を帶し用事を遂し、幾度なりとも手洗ひ床につき給ふ事に有しと也。また人を正し給ふ事などありても、容易に言ひ出し給はず。君子は人の非を言ふに忍びざるの御位顯れ候由、要語と申は退レ我と申事、岡山先生一生の御手段と申傳へ候。

(北川親懿翁雜記抄一一丁)

(五) 門弟子の觀たる淵岡山

石河定源………岡山子之學術ヲ傳聞テ深ク慕フ。岡山子ノ行狀ヲ見テ、「日本ニ君子者有間ジト思ヒシニ此淵子コソ生身之君子哉。」トオモヒテ彌〻信不レ淺云云。

(藤樹先生行狀聞傳)

松本子曰。先師は天に通じ給ふ人也。故に天命を尊び、祟を恐れ給ふ事うばたゝのごとし。岡山先生は藤樹先生に能通じ給ふ人なり。

(松本以休先生示教錄)

(六) 淵岡山子を世に紹介するに至りし經路

淵岡山の事蹟は從來湮滅して久しく世に顯はれざりき。畏友笠井劼君は近鄉大溝町の人にして篤學の士なり。明治三十四年春藤樹先生門下末中村治助氏を安曇村大字五番領の邸に訪ひ、古書堆積中に於て計らずも岡山先生書簡と題するもの三冊を得られたるに、その說くところ藤樹先生致良知の學にして、しかも所々先

生に關する插話あり。然れども當時その岡山先生と稱するは如何なる人なるかを詳かにする能はざりしが、志村仲昌著藤樹先生行狀聞傳巽軒井上文學博士同蟹江文學博士の共編に係る日本倫理彙編中に載せられたる三輪執齋先生雜著並に藤樹先生學術定論及び井上博士著日本陽明學派之哲學等を通讀し大に啓發せらるゝ所あり。是に於て一書を輯し淵岡山と題して之を左右に置けり。編者また明治三十七年の頃藤樹書院の文庫を探り享保年間の書院日記並に日乘と題するもの二冊を得たり。之に依りて京都・江戸・伊勢・會津等の同志年々陸續として參拜せる狀況を知り岡山學派の影響の大なるを感じたり。後大溝舊臣横田耕次郎氏を訪問して岡山の末裔河原敬治といへる人が弘化四年八月二十五日藤樹先生二百年祭に丁り參拜し上れる祭文を得たり。之を一讀するに岡山の建てたる京都葭屋町の講堂も此頃に至りてはその衰運の極に達せると共に淵氏と當時醫を以て嘖々の聞ありし京都市外笠井氏との關係を知るを得たれば書を以て照會したるに、淵氏一家の墓は東山禪林寺永觀堂に在ること及びその子孫の現況とを報せられ、且つ自ら永觀堂の墓に展しその碑銘と碑文とを寫して贈られたり。是に於て岡山に關する事歷更らに其の詳細を知るを得たり。偶〻明治四十一年七月東京陽明學會主幹東正堂翁始めて藤樹書院に參拜し書院の什寶中に古歌三首と題して藤樹・蕃山・岡山三先生の短冊を表裝したる一軸あるを見て、岡山とは如何なる人なるかとの質問を發せられたるに端を發し、後、人をして中村氏傳ふるところの岡山先生書簡三冊を淨寫せしめて之を翁の左右に呈したり。是に於て編者また笠井氏と謀り氏の研究を骨子として淵岡山と題する一文を輯して、之を陽明學誌上に投稿したり。爾後翁は會津の地必ずや學統の傳來するもののなかるべからずと爲し捜索餘念なかりけるに、圖らずも學統最後の傳承者たる三浦親馨の曾孫齋藤一馬氏に邂逅しその詳細を聞くことを得て欣喜に堪へず、大正九年三月齋藤氏の案内にて親しく會津に至りて緣故の諸家を訪問し岡山學派に關する遺書卽ち岡山先生示教錄同追加計七冊を始め多くの典籍を得られたり。是に於て岡山子の影響愈〻明瞭となるに至れり。大正十年本全集編纂の擧あるや同十二年三月委員柴田氏は委囑を受けて會津に至りて遺跡を視察し研究するところあり、大正十五年十一月巽軒博士が日本陽明學派の哲學を訂正して其の第十三版を發行せらるゝに當り、新に淵岡山の一項を追

蕃山了介書狀

（近江　岩佐定一氏藏）

泉仲愛書狀

（委員　小川喜代藏氏藏）

淵岡山書狀

（會津　三浦氏藏）

（據大正十二年七月發行雜誌陽明學第百六十七號）

中川貞良書狀

門弟子並研究者傳第六項參照

（近江　山本源内氏保管）

中川謙叔書狀　此は講堂卽ち藤樹書院の葺に關する書狀なり

（近江　岩佐定一氏藏）

吉田新兵衛書狀

門弟子並研究者傳第十三項參照

（近江　山本源内氏保管）

凋せられたるも亦其實を此等の資料に仰がれたるものなるべく、かくて岡山の傳記と其の學術とは世に明かなるに至れるものなり。〔本冊末尾補遺並補正及び再刊追錄、淵岡山の研究に關する主なる書目參照。（藤陰）〕

五、一尾伊織

一尾伊織世々伊織と稱す。諱は通勝書簡集に據る。寛政重修諸家譜通尙に作る。通稱小太藤樹先生眞蹟に據る。小太恐らくは小太郎の略。藤樹先生より長ぜること九歲。幕府の直臣にして、父通春の遺跡を繼ぎ、近江國蒲生郡に於て采地一千石を食む。淵岡山子その臣たり。岡山屢〻命を受けて江州に來り、先生の德を慕ひてその門に入れり。按ずるに一尾氏の贄を執るに至れるは、恐らくは岡山子の慫慂に基けるものならん。書簡集正編に正保三年丙戌秋の一書あり。之を眞蹟に徵するに「未能尊面處貴簡忝拜見別而不淺奉存候。」といへるは、始めて刺を通ぜる時の書通なるべく、實に岡山の入門に後るゝこと二年なりとす。通勝貞享元年七月十九日致仕し元祿二年三月十三日卒す、壽九十一。先生の永眠に後るゝこと四十一年なりとす。書簡集補遺答一尾子書に「於其地熊澤・岡村二子御面談磨勵之益御座候旨幸甚〻〻。就中熊澤子同志中之巨擘に御座候まゝ指南御望御尤に奉存候。幸源兵衞被罷下候條議論被遊學問思辨之功御勤可爲大幸候。」といへり。こゝに其地といへるは江戶を斥せるものなるべく、當時江戶に於ける講學の狀況略想見するを得べきなり。（補正參照）

（附記）以上は書簡集の通勝と重修譜の通尙とを同一人と見做して傳を立てたるものなり。按ずるに書簡集正編丁亥春の一書に色念を戒めて少年の通病なりと云へるは、先生より九歲の長者たる通尙氏としては當らず。且つ初めて刺を通ぜる時の書通と思はるゝ丙戌秋に先だち同年夏の一書あれば、通尙氏の外に尙一人同族中先生の門下たりし人あるべし。而して前記夏の一書については書簡集據るところの遺教本には同じく一尾通勝となせり。重修譜を按ずるに通尙の養子に小兵衞通命あり。慶安四年七月父に先だち二十五歲を以て逝けり。而して通命は正保三年當さに十九歲なり。されば編者は通尙・通命の二氏ともに先生の門下たりしにはあらざるかを思ふ。敢て識者の是正を請ふ。

（原據）藤樹先生書翰眞蹟。藤樹先生遺教本。蕃山手翰。北川親懿翁雜記抄。會津藤樹學道統譜。寛政重修諸家譜。（第三輯）

六、中川貞良

中川貞良名は善兵衞、伊豫大洲加藤侯の臣中川孫兵衞治良の長男にして世々三百石を食む。藤樹先生より長せること四歳其の邸宅先生と相隣りせるを以て幼時より相親しむ。寛永四年先生始めて學を大洲に講ずるや、貞良等主として其の門に聚る。先生致仕の後寛永十五年笈を負うて江州に來り學ぶ。正保三年その鄕に歸るや先生文を作りて之を送る。その文に曰く、文王在せぬ世に興りて外議をはばからざる志誠に希代の豪傑なりと。また以てその爲レ人を察するに足るべし。寛文十年三月五日卒す。年六十七。壽榮寺に葬る。子孫永く大洲に仕ふ。末裔中川泰輔陸軍少佐たり。東京市外杉並町字馬橋二百四拾番地に住す。家世々先生書翰眞蹟一軸並送二中川子一長編和歌眞蹟一軸持敬說一冊等を藏す。左に參考とすべき資料を附記す。

(一)　當家傳來の眞蹟

藤樹先生書翰　玄德公云云宛名闕　一通

右寫眞、明治四十一年藤樹先生贈位奉告祭記念帖にあり。本全集卷之二十書簡集補遺參照。

(二)　送二中川子一和歌　本全集卷之十七倭文集一に寫眞並本文を載せたり。

中川氏の邸。大洲町桝形にあり。先生の舊邸と相隣る。今大洲尋常高等小學校の東隣に接續せり。

(三)　谷川玄卜へ送れる書狀

權左ヱ門上り申候まゝ一書令二啓上一候。其元御無事に御座候哉。此地相替儀無二御座一候。權左ヱ門も是ニ四十日斗逗留申候故はなしども承得ニ大益二申候。隨分勵可レ申と存候。

一、先日以二書狀一申候。相屆申候哉。作□衞門殿たき物望ニ候間公家方ニ御調合被レ成候たき物格別よく御座候まゝ、何とぞ才覺成候はゞ御賴候て、銀五十め分藥種御調御調合候て被レ下候へかし。拙子方ゟ申越くれ候へと御申候まゝ申越候。何とぞ御才覺候て可レ被レ遣候。成不レ申候はゞ成不レ申との御返事いそぎ可レ被レ下候。此方ニて藥種相調調合いたし候へと□事ニ候。猶且而可ニ申達一候。恐惶謹言。

卯月十四日　　中川善兵衞　花押

谷川玄卜樣

人々御中

（滋賀縣高島郡青柳村大字上小川山本源內氏保管）

(四) 中川氏系圖拔萃（此の系圖は伊豫史談會富水道人西園寺源透氏より寄せらる。）

○中川讃岐守　甲州八代郡南田中村

采女正　元和七年卒、年七十二。紫金山瑞蓮寺に葬る。

治良　孫兵衛　生于南田中村。慶安四年卒、年七十七。葬于大洲壽榮寺。妻上月氏女、葬于壽永寺。

貞。良。　善兵衛　生于大洲。寛文十年三月五日卒、年六十七。葬于壽榮寺。法名圓光道融居士。妻大崎平左衛門女。後妻吉田弥五兵衛門女。

兼。叔。　權左衛門、生于大洲。萬治元年十一月十八日卒、年三十五。葬于備州岡山。妻小島七郎右衛門女。

兼明　權太夫、生于江州小川。終于岡山。妻岡野金右衛門女。

女子　四人早世

兼豐　權之進。實生駒治右衛門二男、生于岡山。

昌良　市左衛門　元祿十二年卒、葬壽永寺。

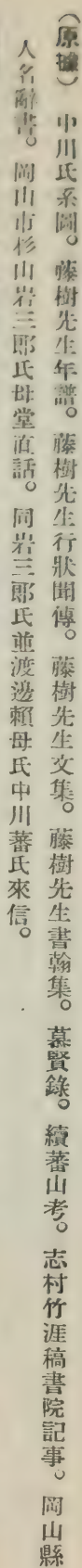
良與　源左衛門　實加藤太郎左衛門二男。

┬晴　良―中村半兵衛―――喜左衛門
├中川宗貞(マヽ)―――宗壽良翁
└中川宗淳豐良(マヽ)浮(加)簡(加)―――伊平太

大正十四年七月念六古書堆中なおさり、偶々中川氏系圖を得たり。依て其要旨を鈔錄し小川學兄に贈呈す。[印]　[印]

七、中川謙叔

中川權左衛門諱は謙叔一に兼叔に作る。幼名熊、伊豫大洲加藤侯の臣中川孫兵衛治良の二男にして、善兵衛貞良の弟なり。寛永十六年四月近江に來りて藤樹先生に學ぶ。時に年十六、先生より少きこと十六。滯留四年、壬午の夏豫州に歸りて父母を省す。慶安三年秋(日本教育史資料には明暦元年乙未に作る。)同門の士と共に備前少將光政侯に事へ祿二百石を食む。萬治元年十一月十八日歿す。年三十五。墓碑岡山市笹山にあり。書翰集に、先生門弟子を諭すに屢〻權左在宅、會講して見解を御聞なさるべく候と推奬せるにても其爲人を察すべし。室小島氏は江州高島郡下小川村(今青柳村大字)の人にして先生の姪なり。其の子來助諱兼明長じて權太夫と改む。その室は赤穗義士岡野金右衛門の女なり。世々備藩に事ふ。近世龜之進といふものあり。馬術に長せるを以て闔藩に名あり。長男橫太郎健忘齋といふ。奇人なり。女子教育の必要を感じ、自ら山陽女學校を創立し、生葬式を行ひ香儀を得てその資に充てたり。學なしといへども人皆その爲人に服し、先生を以て呼ばざるなし。二男岩三郎は同藩士杉山氏を嗣ぐ。西郷南洲に學ぶ。從五位に叙せられ備前西鄉の稱あり。二氏ともに維新の活動家を以て知らる。橫太郎の嫡孫を來助といふ。今東京府下荏原郡東調布町上沼部二五に住す。左に略系其の他を附す。

（原據）中川氏系圖。藤樹先生年譜。藤樹先生行狀聞傳。藤樹先生文集。藤樹先生書翰集。慕賢錄。續蕃山考。志村竹涯稿書院記事。岡山縣人名辭書。岡山市杉山岩三郎氏毋堂直話。同岩三郎氏並渡邊賴母氏中川蕃氏來信。

（疑義）岡山先生示教錄卷二に「彼事は中川氏も被レ見候。我等も螢火ほど見申候。」といひて、中川氏を推奬せることあり。また翁問答跋を作れるも中川氏なり。而して此の兩者單に中川氏といへるのみにて、貞良氏なるか。謙叔氏なるか。明かならず。

（二）逸事

孝經爭臣五人の章を講ぜしめられ、大臣池田出羽・池田伊賀に各〻心をここに用ひらるべし。予によからぬ事あらば必諫らるべし。又各〻も人の諫を能受入られよと仰有しかば一座皆感じ奉りし時、中川謙叔（權左衛門といふ。）末座より進み出で、只今の御一言國家永長の兆也。然れ共公は嚴威有て殊に聰明におはします。又疱瘡の跡ありて、たま／＼怒らせ給ふ時は一目とも見られずと人々皆申候。かかる事にて御諫を申人の候べき。公先色を和柔にして諫るものを賞し給はゞ言路開て御益有べしと申ければ、公（餘）其眞言を賞し給ふ事大方ならず。謙叔退出し時加世次春（八兵衛といふ。）餘りなる事を云しと有れば謙叔人臣の職自己の利を思ふ爲にいひたるにあらず（餘）國家の爲に無禮を忘れたりといひし。（史籍雜纂第二、三三四頁 有斐錄元）（餘）餘姚學苑。九經類編引用

池田吉左衛門組
切米五十俵
扶持十人

中川來助

元祿九子
三十九歳

（三）御奉公書　池田家所藏

一、父權左衛門生國豫劦大洲。慶安三年寅御國に罷越、同四年卯於テ御花畑ニ家屋敷拝領仕、中江与右衛門ニ被レ下候御米之内御内意ニ而致ニ頂戴一罷在、承應元年辰　故少將様へ初而御目見申上、明暦元年未七月御知行二百石拝領仕、其後在郷邊に住宅仕度奉レ願候處、同三年酉八月知行所和氣郡大田原村ニ御普請被ニ仰付一家屋敷拝領仕候。萬治元年戌十一月十八日行年三十五歳ニ而於ニ御國一病死仕候。

一、私生國近江小川村父權左衛門病死候後十人扶持拝領仕候ヽ勝手次第江劦へ罷越居申様ニと被ニ仰付一候故萬治二年亥正月江州小川に罷越寛文七年未四月十五日備前へ罷歸申候。

一、寛文八年申五月九日十一歳ニ而　故少將様に初而御目見申上候。

一、同九年酉二月二十九日御切米五十俵拝領仕、都合五十俵十人扶持被レ下候。同年九月六日　當殿様へ初而御目見仕候。（以下略之）

（四）謙叔の遺命

杉山岩三郎氏母堂の談に謙叔の遺命に人の師となるに足るものにあらざれば、吾が家を相續すべからずとの一條ありしといへり。西殼一氏の謙叔の末裔たる中川蕃氏に與へたる書中の一節に、

一、謙叔の遺言に一技一藝に達せざる者は吾が子孫に非ざるなりとの故にや、十三、弓馬槍劍又は軍學等の師範となり申候。」といへり。然れども其の原據に至りては明かならずと。

（中川蕃氏來報）

（五）著書　全人論

此の書加藤圭任が昭和二年七月大阪市鹿田書肆より購入せるものにして、卷末に「明和三年丙戌春正月高尾寫藏。大正七年己未三月高尾武治郎より讓受、原田靖。」とありて約三十一字詰二十二行二十八枚の古寫本なり。所々朱書にて異本と照合せる跡あり。表紙は新に附したるものにして、藤樹先生全人論と題せり。按するに巽軒井上博士著日本陽明學派之哲學に中川謙叔著とせるもの、恐らくは此書を斥せるなるべし。加藤圭任曰く、「本書の中心思想は一體の心を以て、全人即ち聖人の眞面目なりとなすものにして、藤樹先生が孝弟論より暗示を得て解釋の中心思想となせりと想はる、晩年の作中庸續解の内容と一致するものあり。若し此書中川氏の著に相違なしとすれば、三十五歳にて歿したる氏が早くも先生の思想を消化したるを見、又中川子並に戸田子を送る長篇の和歌にも一體の心を詠じたるものありて、此の思想と相通ふところあり。此の書また氏の文筆健なるを察すべく、斯の師にして斯の弟子ありと謂ふべし。」と。

八、中川氏老母

中川氏老母名は傳はらず。伊豫國大洲侯の臣中川治良孫兵衛の室にして上月氏の女なり。貞良・謙叔の二子を擧ぐ。二子ともに先生に學ぶ。謙叔殊に盛名あり。書翰集に正保三年及び四年の兩度先生のおくられたる書通あり。此の時老母の年齡詳かならざれども、夫治良既に古稀を超えたれば、相當の老境にありしなるべし。先生の文によりて考察するに、老母寄る年波に寂しさを感じ、轉迷開悟の道を求められたるなり。而して先生直ちにその心を受けて、「後生一大事なれば今生猶一大事なり。」と說破して自家獨特の立場に於て、佛語を借りて明明德の要義を懇諭せられたり。老母またかゞみ草を愛讀せることは、正保四年の書通に見えたり。歿年その他詳かならず。

（附記）先生の門下に中川氏老母の外に、牛原氏の老母あり。而して先生之を導くに女性の耳慣れたる佛敎の語を借り來りて、循々として聖敎の本旨を說き、安住の心境に達せしめんことを圖れり。先生夙に女子敎育に注意し春風並鑑草の著ありしのみならず、老境に瀕せる婦人の敎育に意を用ひられたるはまた一特色をなすべし。（紫水）

九、加世季弘

加世季弘諱次春、默軒と號す。大洲加藤侯の臣加世平次（御奉公書七右衛門に作る）の子なり。先生より少きこと十七。藤樹先生年譜にいふ「正保元年加世五來て業を受く。」と。文集二丁亥夏送加世子歸鄕二（遺稿加世伊右衛門尉に作る）の詩あり。徵餘子云ふ、「五郎ち季弘なるべく、八兵衛と稱するは疑らくは後に改むるものたらんと。慶安三年秋（御奉公書慶安元年秋に作る）季弘郎ち先生の長子太右衛門君並高弟諸子と共に褐を解き二百石を食む。季弘學篤く行正しく兼て音律に通じたり。市の令となる。吏事の傍ら侯の側に奉侍して禮樂の事に與る。延寶元年正月學校奉行となり十餘年を經て貞享元年二月歿す。壽六十。子なし。兄の子を養ひて嗣となす。之を毅軒となす。毅軒諱次英また豫州に生る。後來りて默軒の嗣となる。人と爲り强力にして吏才あり。嚴正にして人を率ふ。職に在ること四十年、治績大に擧る。享保十五年十二月廿四日歿す、壽七十。亦嗣なし。大久保重利の子名は元風字は子羽を養うて子となす。子羽學を好む。服部南郭に師事せり。子孫詳かならず。今略系其の他を附記す。

（一）略　系

加世右近——加世七介（羽柴秀吉に事へ後加藤光泰に事ふ。）——加世七右衞門（加藤貞泰に事ふ。寛文二壬寅十月二十四日、大洲町光源寺過去帳。）——〇（名不傳大洲侯に事ふ。）——次　英（八兵衛の養子となる。）

——八兵衞——（養子）次　英——（養子）允　風

〇〇〇

（原據）南郭文集。備前岡山毅軒加世君墓誌銘。事實文編。〇藤賢錄。續蕃山考。

（二）御奉公書

町奉行　加世八兵衞　高二百石　寛文九酉　四十五歳

先祖ハ上野之住人曾祖父加世右近ト申者、上野方天文年中ニ江州之淺井備前守殿家ニ宮澤玄蕃ト申者依レ爲二親族一宮澤ニ立寄備前殿エ御奉公仕罷在候。長政公沒落之砌小谷之城ニテ討死仕候。祖父七介ハ其節幼少御座候故母ト一所ニ江州之内長濱礒野村ト申所ニ隱レ罷在候。其後長濱ナ羽柴筑備守樣御領地ニ被レ爲レ成候時、筑前麾下加藤作内殿長濱之内拜領被レ成彼地エ御住居之節小兒姓ニ罷出初テ御奉公仕候。其後筑前樣播州姫路御拜領被レ成候之故作内殿モ姫路エ御越被レ成御在番被レ成候。祖父七介モ姫路エ罷越森家ト合戰之砌モ作内之手ニテ御奉公仕候由ニ御座候其後明智反逆之節筑備樣備中ヨリ御上リ之刻作内殿播州方御供被レ成御越候ニ供仕明智破北之刻明智者ニ野瀬ト申士退申ニ行合細討仕印ヲ取申候其節作内殿方褒美ニ腰物被レ遣候由其道具ニレ今兄弟共方ニ所持仕候其後作内殿方ニ所替被レ成天正年中ニ甲斐一國御拜領被レ成候是方作内殿ヲ遠江守殿ト申候祖父七介モ久功仕候トテ奉行ヲ被レ下帳頭ト申者ニ被二仰付一候由其後高麗御陣之砌祖父七介ハ甲府留守番ニ罷有相果申候遠江守殿モ高麗ニテ御遠行被レ成御子左近殿御幼少ニ御座候故甲斐國ハ被レ爲二召上一美濃之内黑野ト申所エ御小身ニ御成被レ成所替被二仰付一候其節新參之士共ハ御暇被レ遣古參之士共モ小身ニ成御供申黑野エ罷越申候親七右衞門モ幼少ニテ七介相果申又右之通之御所替故小知行被レ下罷在候其後伯耆之米子エ御替リ被レ成無レ程伊豫大洲エ所替被レ成候ニ御供仕大洲ニテ七右衞門相果申候親跡式私兄ニ被レ下唯今加藤出羽守樣ニ罷在候私儀若キ時分ヨリ江州エ參居申其後慶安元年之秋御國エ參罷在同四年之夏御花畑ニテ家屋敷被レ下中江多右衞門ニ被レ遣候御米之内御内意之由ニテ頂戴仕罷在候承應元年之冬御目見申上明暦元年七月中旬ニ御知行二百石被レ下其上在江邊ニ住宅仕度旨望候由何方ニテモ罷在候樣ニト江戸方申參由目證猪右衞門殿ニテ被二仰渡一同二年閏四月十四日津高郡紙工村ニテ御普請被レ爲二仰付一家屋敷拜領仕ハイリ居申候御城ニテ御祭リ有レ之節ハ毎度罷出御用相勤申候萬治元年極月末ニ御廟之御役儀被レ爲二仰付一同二年正月朔方毎日御廟エ見廻諸事見及候樣ニト御意ニテ毎日中村又之丞ト相替リ御廟エ參申候付寛文六年十二月十三日ニ町奉行御役儀被レ爲二仰付一。（岡山市池田侯爵家所藏大島勝海氏報）

一〇、佃　叔　一

佃叔一（一に佃叔に作る）は藤樹先生書翰に佃助九郎に作る。伊豫國新谷藩の家老たり。正保元甲申年藤樹先生を小川村に訪ふ。先生文を作つて之を送る。慶安戊子年また先生を訪うて教を請へるもの丶如し。書翰集を檢するに正保元年より慶安元年に至るまで、先生の書通絶ゆることなし。今その文によりて察するに、母公に事へて和厚の心なく、圭角去り難きを耻ち、或は色欲抑へ難きを憂へ、或は受用はか不ゝ參と嘆き、只管先生の教を請へり。その學未だ室に入り堂に升ること能はざりしといへども、また得易からざる篤學の士といふべし。

略系

○徳田藤左衛門爲泰——（養子）佃小左衛門一永——

- （嫡子）（三百石）佃市郎右衛門賀永——（養子實徳田彦六季一次男）（二百石）佃市郎右衛門守永——（養子實新谷河村新平方知二男）佃小左衛門守直（以下略之）
  - 寛文元辛丑年八月二十七日卒、五十九。
- （佃助九郎）？
- （次男（三男？））徳田彦六季一——徳田權兵衛寄一——徳田彦六寄隆
  - 享保二十乙卯年八月二十八日卒。
- 徳田藤左衛門一之……清六——（現戸主）彦市
  - 寶曆六丙子四月二十日卒。
  - 東京市淺草區千東町二丁目三七一番地住。

（附）徳田彦六寄隆

徳田彦六藤原寄隆は佃小左衛門一永の玄孫にして、新谷藩の家老たり。藤樹先生に私淑し、邸内に祠堂を建てて祭祀を懈らず、能く子弟を教養せることは、常省先生の彦六に與へられたる書通に見えたり。享保二十乙卯年八月二十八日歿す。法眼寺に葬る。

（原據）大洲町程野彦太郎氏藏有藤樹先生書翰（書翰集正編參照）。文集四並日次の部。書翰集。新谷町河内宇十郎氏藏有常省先生書翰。（常省先生文集參照）。後記（一）佃氏に關する研究資料。

（一）佃氏に關する研究資料

甲、加藤家臣錄（元抄）

一、四 百 石　　德田藤左衞門爲泰

生國美濃國厚見郡德田村

曹源院樣旬濃州稻葉邑（マヽ）ヨリ御出世ノ時ヨリ相勤、甲州ニテ御城中之一所ヲ相守候其節祿不レ詳。朝鮮御陣之節者御留守ニ罷在候。其後大峯院樣濃州黑野江御所替之節祿四百石被二下置一候。

養子實家不レ詳織田家ヨリ出候由　伜　小左衞門一永

一、四 百 石

生國不レ詳代々泰ノ字通リ字ニテ御座候所、故アリ相改、名字伜ト改候義

權現樣天下御掌握之砌リ、諸家之諸士德ノ字遠慮仕候テ相改ル

大峯院樣御代部屋住ニテ相勤、其節祿不レ詳。後養父藤左衞門家督三百石被二下置一、其後元和九癸亥年新谷要關院樣御分知之節

法眼院樣爲二御命一御附人御家老職被二仰付一御加增百石都合四百石被二下置一候。新谷江不レ被レ遊二御越一內ニ於二大洲（マヽ）一死去仕候。其節嫡子市郞右衞門義大洲江被二差殘一候ニ付、右之家督三百石御家老（マヽ）職共ニ次男彥六江被二仰付一、則新谷當德田藤左衞門家ニテ御坐候。其後彥六義者本名ニ戾リ德田ニ相改申候。小左衞門義新谷御分知無二御坐一內御先手組御預被レ遊候。

一、三 百 石　　伜小左衞門一永嫡子　伜　市郞右衞門賀永

生國濃州黑野

圓明院樣御代幼年ヨリ部屋住ニテ相勤、後百石被二下置一候。小左衞門義新谷江御附被レ成候ニ付、大洲江被二指殘一之由被二仰付一、其後都合三百石被二下置一御用人役被二仰付一、後御持筒組御預被レ遊。

一、二 百 石　　養子實新谷德田彥六季一次男　伜　市郞右衞門守永

圓明院樣御代寬文元辛丑年九歲ニ而家督被二仰付一幼年ニ付成長仕候迄新谷ニ罷在、其後大洲江罷出相勤。

英久院樣御代元祿二己巳年江戶御留守居役被二仰付一、在府仕候。其後御願申上同十丁丑年御免役大洲へ罷歸、翌年病死仕候。（以下略之）

乙、大洲秘錄（二六抄）

光泰公御代ヨリ奉仕舊領五百石

○德田藤左衞門――養子　四百石　伜小左衞門――

―女子　國領太郎右衞門妻

佃　市郎右衛門（三百石　五十九歳）——佃　市郎右衛門守永（實德田彦六ノ男　二百石）——佃　小左衛門守直（實河村新平男　二百石）——佃　藤七郎永航

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　——女子　大橋源五左衛門妻

——德田彦六（新谷御家老　三百石）

——德田權兵衛——德田彦六——德田杢彌

——佃　市郎右衛門

丙、尾形貞氏手記德田氏系譜（長尾氏舊記抄）

初代　德田藤左衛門　藤原爲泰

　美濃國厚見郡德田村ノ產主人加藤貞泰ニ從ヒ大洲ニ入國。

二代　佃小左衛門一永　初代爲泰ノ養子トナル。

三代　德田彦六季一　二代一永ノ三男。

四代　德田權兵衛奇一

五代　德田彦六奇隆

六代　德田藤左衛門一之　奇一ノ三男。

七代　德田小右衛門精一

八代　德田安之助　大洲加藤新五右衛門弟晚年素濤齋ト稱ス。

九代　德田佳治郎　同加藤新五左衛門二男氏部後儀一ト稱ス。

十代　德田清之進　氏部長男清六一寧ト稱ス。

　彦　市　清之進長男。

（愛媛縣大洲町足達儀國氏報）

丁、在滿洲撫順佃氏支系佃廣氏所藏記錄拔萃

四百石　佃小左衛門一永　（德田小左衛門一永）

童名ヲ金千世丸ト言ヒ元服シテ藤七郎ト言フ。大峯公ニ仕ヘテ近侍トナル（部屋住ニテ相勤ム）。父ノ職禄ヲ襲ギテ後権現様天下掌握ノ砌リ德ノ字ヲ遠慮シテ佃ト改ム。元和九年大殿様御分知ノ節家老職仰付ケラレ江戸ニ相詰メ寛永十一甲戌年将軍御上洛ノ砌リハ直泰様ノ御供ス。寛永十四年丑月十八日大洲ニテ死去ス。享年六十歳法名ヲ天屋宗性居士大洲曹溪院ニ葬リシ後寶永七庚寅年四月曾孫斎隆新谷法眼寺へ改葬シ墓碑ニ德田一永甫墓ト記ス。

（愛媛縣大洲町足達儀國氏報）

戊、龍護山曹溪院過去帳寫（抄）

〇月菴道桂居士　寛文元辛丑年八月二十七日　德田氏
　佃市郎右衛門父

功居宗忠信士　元祿十一戊寅年正月二日　德田氏
　佃市郎右衛門

〇良智院淳性自溫大姉　延享二乙丑年十月十二日　德田氏
　佃小左衛門室

淸愼軒英岳宗雄居士　寶暦六丙子年四月十五日　德田氏
　佃退翁

（附記）〇印の分は龍護山内墓碑を存す。

同上位牌

表　月菴道桂居士
裏　俗名佃市郎右衛門賀永
　　享保七壬寅年四月依火災
　　玄孫小左衛門守直改之

表　功居宗忠信士
裏　俗名佃市郎右衛門尉守永
　　享保七壬寅年四月依火災
　　嫡子小左衛門守直改之

（以上大洲町足達儀國氏報並昭和三年六月加藤主任自ら曹溪院に至り過去帳調査）

己、新谷法眼寺過去帳並墓碑寫

牌銘

德　田　季　一　甫　墓

德田季一妻若松氏墓

德田寄一之墓　碑ノ裏　德田彦六藤原季一嫡子權兵衛尉寄一慶安三庚寅暦六月廿一日巳刻於豫州喜多郡新谷誕生元祿十四辛巳年三月二十七日戌刻於同所卒去矣

元文己未八月四日
□松院加藤氏

藤原姓德田彦六寄隆墓　位牌　通元院圓心義光信士靈位　享保廿乙卯年八月廿八日　俗名德田彦六寄隆

寛延三庚午六月廿八日
德田彦六寄隆室吉田氏墓

（愛媛縣喜多郡新谷町河内宇十郎氏報法眼寺住職某調査）

（二）佃叔一に關する研究

佃叔一が大洲藩又は新谷藩の家臣なることは、明瞭なれども、その出自に就いては大なる疑問あり。左に之を討究すべし。

大洲町程野彦太郎氏所藏藤樹先生書翰眞蹟に佃助九郎宛のものあり。之を書翰集に徴するに佃叔一（一に佃叔に作る。）に送れるものなり。されば佃叔または佃叔一と稱するものは、佃助九郎のことなるべし。然るに大洲藩唯一の史乘ともいふべき加藤家臣錄・大洲秘錄等にその名を載せず。また前記新谷の人尾形貞氏の手記に係る德田氏系譜にも見えず。偶〻加藤公御傳記大藏直泰君の條下に左の一條あり。

寛永十八年辛巳御在所へ御暇、未だ屋敷無レ之故、大洲へ初入し玉ひ、中島（編者云、大洲の地名）家老佃助九郎宅に居住し玉ふ。

また新谷の人尾形貞氏の手記に、

新谷御分地給人名簿に依れば、四百石佃小左衛門あり。分地允許は元和九年にして引越は寛永十九年なり。その引越御付衆の姓名錄には家老四百石佃助九郎。

と見えたり。と。而して此の手記は同じく新谷の人長尾氏（今所在不明）の舊記より轉寫したるものにして、大洲町足達儀國氏の報に係る。以上の史料によりて之を考察するに、先生の門下たりし佃叔一卽ち佃助九郎が、新谷藩の家老たりしことは動かすべからず。然るに前記二書並に系譜に載せず。また、德田氏傳來の系譜は在新谷德田清六氏未亡人が先年之を東京なる令息彦市氏に送られしが大正十二年九月一日の大震災に燒

失せりといふ。

書翰集正編答佃叔一書に篠原氏は註して云。○志村世賴云、此卽新谷の執政佃小左衞門に答ふる書也」と。而して遺教本に依れば此の書通は乙酉春卽ち正保二年の作なり。然るに在滿州撫順佃氏末裔佃廣氏所藏記錄に依れば、佃小左衞門は寬永十四年享年六十歲を以て歿したれば、此の正保二年は既に歿後九年を經過せるなり。されば佃叔一を以て佃小左衞門となすは謬なり。

既に佃小左衞門一永が佃叔一にあらずとすれば、進んでその子賀永・季一の二人について研究せざるべからず。佃市郎右衞門賀永は小左衞門の嫡子なり。曹溪院過去帳に「月菴道桂居士寬文元辛丑年八月廿七日佃市郎右衞門父」と識せるもの、卽ち此の人の事なり。こゝに市郎右衞門といへるは賀永の養子市郎右衞門守永を指す。而して大洲秘錄に賀永の年齡を五十九歲と明記せるを以て、逆算すれば慶長八年の出生となる。卽ち先生より長ぜること五歲にして前記の正保二年には、年齒當さに四十三歲となるを以て、書翰集に「色念おこりがちにて御なやみ候由少年の通病にて候」といへる語に該當せず。

小左衞門の次男を彥六季一といふ。父の跡を繼ぎ、新谷藩の家老職に任ぜられ三百石を食む。此の人の歿年また詳かならざれども、加藤家臣錄に據るに彥六の次男市郎右衞門守永は、寬文元辛丑年九歲を以て大洲家老佃市郎右衞門の養子となりたり。今その年齒によりて之を逆算すれば、承應二年の出生となる。されば守永の父彥六季一の年齒を佃叔一が少年と呼ばれたる正保二年に二十歲なりし者と假定すれば、守永の生れたる承應二年は二十八歲に當るを以て年齒の上より云へば考慮の中に加ふべきに似たり。然れども彥六季一を以て助九郎に擬することはまた不可能なり。何となれば叔・季兩者の文字を一人にて占むることは有り得べからざることとなるを以てなり。

既に叔一が小左衞門にあらず。賀永にあらず。また季一にもあらず。而して大洲又は新谷に於て、佃氏又は德田氏を稱し、家老職に任ぜられたるもの、此の家筋の外になしとすれば、果して何人なりしか。是に於て編者は更に今一度書翰集を精査して、左の語あるを發見したり。

答佃叔（丁亥夏）

當年は殿樣御在舘にて、御手透御座有間布と令ㇾ察候。（本全集卷之十八第三四頁）

答佃叔（戊子夏）

御志厚く相見へ其上御逗留中觸發も多く相見へ、大幸不ㇾ過ㇾ之候。公用難ㇾ去さて存候よりちと早々御歸り御殘多存事候。（本全集卷之二十第一〇頁）

此の語によりて考察すれば、佃叔一なるもの仕途多忙の身なりしことを想像すべく、而して大洲または新谷の家臣に相違なきことは書簡集を精讀するものゝ、夙に首肯するところなるべし。

されば編者は、尾形氏の手記に係る德田氏の系譜に「三代德田彥六季一」とありて、その下に「二代一永の三男」と識せるに信を置かんと欲す。此の事たるや加藤家臣錄・大洲秘錄等何れも次男とせるに一致せざれども加藤公御傳記に、家老佃助九郎と明記せると、長尾氏の舊記に、家老四百石佃助九郎といへる等思ひ合すれば、市郎右衞門賀永と彥六季一との間に、叔一助九郎の存在せしにあらずやと思はる。卽ち小左衞門は新谷へ引越の以前に死亡したるを以て、嫡子市郎右衞門賀永は大洲に差殘され、次男助九郎父の跡を繼ぎ、新谷の家老に任ぜられ、四百石を領したりしも、故あつて三男彥六に讓りたるにはあらざるか。而して加藤家臣錄・大洲秘錄等此の事を載せず。系譜また助九郎の名を顯はさゞるは、蓋し故あらん。今考ふべからず。

一一、國領太

國領太は太郎右衞門と稱す。伊豫大洲侯の家臣國領内記の養子にして、同藩士人見淸治の二男なり。加藤家臣錄に曰く、

一、三百石　養子實人見淸治二男　國領太郎右衞門　名乘不相知

大峯院樣御代家督被ㇾ仰付ㇾ其後御旗組御預ヶ奉行職御普請奉行兼而相勤。

といへり。正保二乙酉年（篠原氏本甲申に作る。）近江に來り藤樹先生に師事す。止ること一ヶ月別に臨み、先生自反愼獨の大意

を筆して之を送る。書翰集を按ずるに先生の送れる書通寛永二十年より慶安元年に至るまですべて六通ありて書通年々絶ゆることなし。末裔清之助氏所持の系圖に曰く、「太郎右衞門定公儒學に志深く王陽明先生の學を慕ひ藤樹先生中江与右衞門の門人として其名高し。則中江氏手跡易坤の卦を認め定公におたへらる。當家に傳ふ云云。」

また國領氏の一族に又三郎といふ人ありたること、書翰集補遺答國領の書に見えたり。

（原據）　藤樹先生年譜。同文集（小川本目次）

一二、國領定卿

國領定卿は平馬と稱す。太郎右衞門の子なり。加藤家臣錄に曰く。

一、三百石　　實子　國領平馬定卿

部屋住に而百石被下置相勤。其後

圓明院樣御代家督被仰付

英久院樣御代御先手組御預ケ被仰付

とあり。また、系圖に「定卿公太郎右衞門定公之志を繼儒學を學び給ふ、手跡を好み能書の聞へあり。新谷御領阿藏村月光寺額定卿公の御筆也。扨又醫學をも學び給ふ。又鷹を好み（略）定卿公御心持彼是御詮議藤樹先生中江与右衞門殿へ御尋之所彼是思召与右衞門殿御答の御手簡壹通代々持傳。定卿元祿五壬申年正月十日於大洲卒す。法名一法無二信士曹溪院に葬る、行年六十歲。」といへり。子孫世々大洲に事ふ。末裔を清之助といふ。愛媛縣伊豫郡郡中町に住し小學教育に從事すといふ。

（附記）　本全集卷之二十書翰集補遺に答國領定卿甲申冬の一書あり。甲申は正保元年にして元祿五年六十歲を以て歿したる定卿は、逆算すれば、此の時年齒僅かに十二歲に過ぎず。然るに書中懇々として色欲を戒められたるの語あり。大洲秘錄二を見るに「國領平馬三百石六十七」といへり。その歿年系譜の示す如く元祿五年にして六十七を以て歿したりとすれば、此の時當さに十九歲の靑年となる。以て系譜の誤謬を補ふに足る。編者大正十二年十一月末裔清之助氏を郡中町に訪ひたり。氏は當時愛媛縣立師範學校在學中なりき。曩に引用せる系圖は此時一覽を許されたるものにつき摘錄し置けるものに依れるなり。

一三、吉田新兵衛

吉田新兵衛諱守正大洲藩士加藤清右衛門良次の子にして三百石を領す。加藤泰興侯御代部屋住にて百五十石を賜ひ次いで家督相續を命せらる。其の後御名字を憚り吉田と改む。御先手鐵炮組御預け仰付られ、また奉行職被二仰付一寛永十五戊寅年秋近江に來りて先生に學ぶ。別に臨み先生詩を作りて之を送る。延寶八庚申年十一月十七日卒す。大洲妙光山に葬る。その子彌次兵衛諱良忠襲ぎ子孫永く大洲侯に事ふ。末葉加藤良顯目下松山市出淵町二丁目十一番戸に住す。

（大正十二年十二月稿）

按ずるに作右に與ふる書簡本全集卷之二十第六一頁に新兵もはや五十にて御座候さあれば先生よりは長者なりしなるべし。

略系

○加藤清右衛門良次――吉田新兵衛守正――彌次兵衛良忠――

――彌次兵衛守周――惣左衛門守之――惣左衛門守良――兵太景良……

……加藤良顯（當代）

（原據）子孫所持の系圖。元和四年三月御家中支配帳。加藤家臣錄。藤樹先生年譜。

谷川玄卜に送れる書狀。

傍輩衆其元へ立寄申候間一筆令二啓上一候。其元御無事ニ御座候哉。拙夫事去年三月ゟ在江戸仕無事ニ相務只今供仕罷歸候。先以御母儀樣御死亡之由去冬大洲ゟ申越候。扨々御力落、可レ申様も無二御座一候。便りも無二御座一終以二書狀一も御悔不レ申心外ニ罷成候。此度ハ立寄懸二御目一度存候へ共自由ニ不二罷成一候故不レ及二了簡一候。久々不レ能二面上一御なつかしく存候事書中ニ不□得申候。拙者事一兩年ハ取分年罷寄眼も殊外うすく行歩も不自由ニ罷成候。然共今度ハさやかくやさ相勤罷歸候。大慶御推量可レ被レ成候。貴様御仕合も緩々さ御座候様に承一段目出度存候。大洲ゟ比便り御座候が、老母息災ニ居申由申越罷歸あい可レ申さかやう之大慶無二御座一候。令二歸着一候はゞ大洲ゟ以二書狀一可二申達一候。あハれ／＼今一度遂二面上一積儀共御物かたり申度候。具に申上度候へ共うでふるい此書面之通ニ御座候故わけも見へがたく御座候ハんさ早々申殘候。眼ハ見へ不レ申腕はふるい申書中も罷ならず候。御推量被レ成可レ被レ下候。何事も／＼面上之時節ヲ待つより外ハ無二御座一候。さぞ□用之

御務御はげミ可レ被レ成さ推察申候。萬々期ニ後音之時一候恐惶謹言。

五月朔日　　　　　　　　　　吉田新兵衛　花押

谷川玄卜様
　　人々御中

尙々久々打絶以二書狀一さへ不レ申承一御ゆかしく存計候。此度たちより不レ懸二御目一候事も可レ有二御座一さ存候。わけ見へ申ましくさ早々申留候。以上。

（滋賀縣高島郡青柳村大字上小川山本源内氏保管書通）

編者竊かに按ずるに新兵衛眼は見えず腕はふるひ歩行も自由ならざる老齢にありて尙母を慕うて止まず。孝心の深き眞に藤門の士たるに耻ぢずといふべし。

一四、岡村光忠

岡村新右衛門諱光忠（賞教本伯忠に作る）大洲加藤侯の臣岡村彦右衛門の養子（本全集巻之十八答二岡村子一甲申夏參照）にして備前國岡山坂口八郎右衛門（系圖坂口七右衛門に作る）の弟なり。二百五十石を食む。先生より少きこさ四歲。加藤家臣錄元に曰く、

養子實備前岡山坂口八郎右衛門弟
岡村新右衛門光忠

一、二百五拾石

圓明院様（泰興）御代家督二百石被二仰付一。
同御代御普請奉行被二仰付一。
同御代御持筒組被二仰付一。
同御代五拾石御加增被二仰付一。

末裔岡村進氏所藏の記錄に、

光忠ハ厚ク學ニ藤樹先生門ニ志レ學。然ニ先生有レ故而此地チ去テ近江ニ居住セラル。故ニ又後チ願ヒテ彼ノ地ニ行イテ問答ス。

さいへり。此の文によりて考ふれば光忠の入門は早くも先生大洲在住の時にありしもの丶如　。書翰集に寛永二十年春より慶安元年に至るまで此の人におくれる先生の書通十一通並年次未詳二通あり。寛文七丁未年

六月二十九日歿す、享年五十六。（大洲秘錄二、五十五歲に作る）子市右衛門道順家を承く、子孫永く大洲に事ふ。末裔岡村進氏松田市袋町五九に住す。

略系

本國近江國坂田郡能登瀨村
光泰公御代太閤秀吉公ヨリ御附人

○岡村彥右衛門（四百石　五十五歲）――岡村新右衛門（實備前坂口八郎右衛門男　二百五十石　五十五歲）

├岡村市右衛門（二百五十石　六十三）――岡村新右衛門（實舍弟　二百五十石　四十二）

├岡村又左衛門道堅（二百五十石）（以上大洲秘錄二）――岡村權右衛門道叟（實子　二百五十石）

├岡村新右衛門道生（二百石）

└岡村門安道一（道叟二男）……健之――進（當代）

（加藤家臣錄元拔萃）

（原據）末裔岡村進氏報。

一五、大野了佐

大野了佐は大洲加藤侯の臣大野勝介藤原久次の二男にして、慶長十七年藝州廣島に生る。幼名小次郎後母の實家尾關家の養子となり、尾關友菴と稱す。先生より少きこと四歲。若年の頃藤樹先生の門人となり醫を學ぶ。性魯鈍を以て聞ゆ。了佐愚なりといへども醫を以て立たんことを欲し孜々として學に從事す。先生之

を憐み、精根を盡くして敎へて倦まず。又捷徑醫筌を著はしてその指針たらしむ。了佐終に醫を以て世に立つことを得たり。事藤樹先生年譜寛永十五年の條に詳かなり。宇和島領宮内村今の西宇和島郡に住す。貞享五年八月十四日卒す。壽七十七。子なし。鈴木安的を以て養子となし、その女に妻したり。子孫今明かならず。

（附記）了佐の父勝介は本國尾州羽栗郡大野村青山修理に仕へ二百石を食む。朝鮮出陣後福島正則に仕へ三百石。大阪出陣後大洲に仕へ同三百石を食み、後新谷分封の時隨從せり。勝介の家は了佐の兄市左衛門之を續ぎ、弟九兵衛嘉次その後を承けたり。嘉次の末裔を克一といふ。東京市外野方町上高田六一に住す。目下陸軍士官學校に在學中なり。嘉次の三男を小三郎といひ季菴と號せり。了佐に學び醫を業とし新谷侯に臣事せり。その末裔を虎三郎といふ。舊京都府立醫學專門學校の出身にして醫を業とす。

大野家に關しては加藤家臣錄、大洲秘錄等載するところ稍異同あり。今は大野克一氏の系圖並に記錄に依れり。了佐の家筋については多年百方搜索の結果大洲町梶原景文氏によりて發見せられ同氏の紹介により、その近親岡本篤義氏に請ひて之を得たるものなり。（大正十五年二月稿）

編者按ずるに藤樹先生の門下熊澤蕃山・中川謙叔の如き俊傑の士ありしと共に、また大野了佐の如き鈍昧の士あり。而して先生之を憐み、循々として敎へて倦まず。その醫書大成論の素讀を授くるに僅かに二三句につき約二百遍を以てし、午前十時より午後四時に及びて漸く記憶す。食事終りて後之を讀ましむるに旣に忘れ了れりといふに至りては、誰かその低能に驚かざるものあらんや。而して先生尙諄々として倦まず。曰く吾了佐に於て殆ど精根を盡し了れりと。先生また特に捷徑醫筌六卷を編して之に授け、醫を學ぶの指針たらしめたり。此の書明曆年間印行せられて、弘く世に行はる。今之を觀るに全部漢文にして六百枚あり。惟ふに先生は獨學自修聖經賢傳を精讀し、終に一家の見を立て陽明良知の學を本邦に開き、門下を敎育せり。その間寸隙あらんや。然るにかゝる多忙の身を以て一書生の爲に自らその敎授書を編述して之を敎育せり。先生の至仁なる性格はまた遺憾なく發揮せられたりといふべし。

一六、戸田孫助

戸田孫助は大洲加藤侯の臣にして、祿二百石を食む。後新谷分封の際隨從を命せられたり。藤樹先生の門に學ぶ。先生より少きこと四歳。末裔平野嘉七郎氏所持の記錄に曰く、

戸田孫助藤原正度幼名伊達之助後源之丞、又源左衛門平野勘右衛門二正ノ三男、母ハ中村氏ノ娘。慶長十七壬子歲、伯州米子ニテ生ル。加藤泰興公御代年月不詳被召出、知行百石被下、直泰公ヘ附サセラレ御用人役相勤。追々御加增有テ都合二百石給リ寛永十九壬午歲新谷(マヽ)ニ分ル。苗字譯有テ戸田ト稱ス。貞享二乙丑歲隱居。元祿八乙亥歲四月四日死去。墓ハ新谷普明山法眼寺ニ在リ。法名綠巖樹貞信士。又曰く、

戸田孫助正度儒學ヲ好ミ藤樹先生ヲ師トシテ敎ヲ請、先生歸鄕ノ後モ江州ニ行テ學ヒシ由、江州ヨリ歸鄕之時先生ヨリ贈ラレシ和文章代々持傳有レ之。

按ずるに右の文によれば戸田氏の先生に師事したるは、早くも先生大洲在住の時にありしが如し。慶安元年先生の逝去に先つこと幾許もあらざる頃に丁り、佃叔一に答へられたる書中に「今度戸田子へ進じ候送行の歌懸物云云。」と云ひ、また末尾に「紙餘戸田子御語り候はん。」といへることあれば戸田氏の先生を江西に訪ひて後歸りたるは、先生の臨終に先つこと恐らくは百日を出でざるべし。且つその辭するに丁り懇切なる送行の歌を賜ひ、また佃叔一宛の書通を托せられて歸途に就きしなるべし。先生の訃報一たび到りしとき、戸田氏の心事いかなりしぞ。戸田氏の祖先某は嘗て播州にありたり。系譜に曰く、

本國播磨松村黨さて松村一黨の内松村・平野・戸田・眞嶋さ四家に分れたり。是に由て苗字之事四つの内何れを用ゆるも同樣之事さ云ひ傳へたり。既に二正も初は松村さ稱し後平野に改めしさ云傳ふ。

といへり。末裔平野嘉七郎氏東京市外上目黑九三〇に住す。孫助の先生に受けたる送行の和歌長篇眞蹟は、故ありて後愛媛縣郡中町松村鹿太郎氏の有に歸し昭和二年六月同町篠崎吉夫氏の珍藏するところとなれり。

略系

○戸田孫助（直泰公御代被召出　大洲平野勘右衛門弟）二百石
｜
戸田勘右衛門
｜
戸田孫助　二百石
｜
戸田勘右衛門（實中村甚五太夫二男）……
｜
當代　平野嘉七郎（大洲秘錄四、四十三丁並編者補）〔卷末追錄參照〕

一七、瀧野藤右衛門

瀧野藤右衛門は大洲加藤侯の臣瀧野孫右衛門の嫡子にして藤樹先生に師事せり。加藤家古錄亨下に曰く、

兄元祖瀧野權兵衛
瀧野勘平光正

一、二百石

生國播州加東郡下瀧野村後瀧野孫右衛門ト相改候由。「右二代ニテ御座候哉不詳。」

大峯院様（貞泰）御代被二召出一候。「儀不詳。」

瀧野孫右衛門光正嫡子
瀧野藤右衛門。

御禮申上候。家督相續不レ仕早世仕候。

養子實村上武左衛門重信次男
瀧野清右衛門重長

一、百五拾石

生國雲州。

圓明院様（泰興）御代家督百石被二仰付一大阪御留守居役被二仰付一

英久院様（泰恒）御代右在勤之内五十石御加恩被二下置一候。以下略。

按ずるに公爵故伊藤博文嘗て藤樹書院に寄納せる藤樹先生心畫孝經二冊はもと瀧野家に傳來せるものなり。跋あり。曰く、

吾祖瀧野孫右衛門光政ノ嫡子藤右衛門ハ實名不レ傳。藤樹中江先生之門人也。因テ先生自ラ此ノ孝經二卷ヲ書シ賜レ之。夫ヨリ代々傳レ之。予重倫世ニ至リ君公此書アル事ヲ聞キ見ン事ヲ求メラル。因テ呈上ス。公見終リ安川右仲寛ニ命ヽ此書題名及ビ　先生ノ姓名等ヲ此函ニ書セシメテ復返シ與ヘラル。因テ松岡高堅ニ乞其梗概ヲ記セシメ永々重寶ヽ藏二家ト云。

文化三年丙寅秋九月穀旦

松岡高堅代
瀧野重倫書

（右跋文は藤樹書院所藏藤樹先生心畫孝經秋紗に依る。本全集卷之十六參照）

一八、山田權

山田權は豫州の人なり。寛永十六年三月先生を慕ひ、江州に來りて醫を學ぶ。同二十年先生山田・森村二生の爲に小醫南針を撰ぶ。正保元年春先生また同じく二生の爲に神方奇術を撰す。是年父の令に從ひ、將に歸省せんとす。是に於て大學三綱領の解を以て、居學の一助となさんことを請ふ。先生文を艸して之を送れり。同年秋岡村伯忠に答ふる書中に、「今までは九右仕立もどし可ㇾ申とて隙無ㇾ御坐ㇾ候。」(注)といへるは先生が山田氏を教育し豫州へ歸鄕せしむる爲に多忙なりしをいへるならん。同三年丙戌冬答ㇾ山田權ㇾと題する一書あり。此の書者津學統傳來の眞蹟には山田九右樣宛に作れり。以て權と九右と同一人なることを立證するに足るべし。山田氏が大洲加藤侯の臣たりしことの明證はなけれども、加藤家臣錄亭下に、

山田五兵衞次男　山田見湯　實名不詳

一、百石

圓明院樣（泰興）御代中小姓に被ㇾ召出、
實相院樣（泰義）に被ㇾ遊ㇾ御附ㇾ醫業相勤申候。其後英久院樣（泰恒）御代給人被ㇾ仰付ㇾ新知百石被ㇾ下置ㇾ

と見えたり。參考すべし。

（原據）藤樹先生年譜。同文集四。同書簡集。

谷川玄卜に送れる書通。

幸便御座候間一書令ㇾ啓上ㇾ候。其元彌御無事ニ被ㇾ成ㇾ御座ㇾ候哉爰元同志衆各別義無事ニ罷在候。其後ハ互に以ㇾ書狀ㇾも不ㇾ申承ㇾ御遠々敷奉ㇾ存候。如何。學術御手ニ入申候哉。私などもいづれも參會仕議論仕候へども御存知之通天資魯鈍故か、凡心之超脱成がたく氣之毒ニも存事ニ候。當夏ハ罷上貴面可ㇾ得御意ㇾ覺悟ニ御座候。互ニ何角世事之障御座候而無ㇾ其義ㇾ候。御參會之折節思召御出し候はゞ平井佐七殿小森德右殿へ一傳之由可ㇾ然樣ニ御心得奉ㇾ賴候。いづれも時節ハ來り候はゞ不圖罷上面上ニ萬々可ㇾ得ㇾ御意ㇾ候。恐々謹言。

七月二十四日　山田九右衞門　花押

谷川玄卜樣
人々中

尙々其後は久々不㆑懸㆓御目㆒御床敷存事ニ御座候。以上。

（滋賀縣高島郡青柳村大字上小川山本源內氏保管）

一九、神山子（かうやま）

神山子は中江先生傳に市郎兵衞道長に作る。伊豫國大洲加藤侯の臣なり。加藤家臣錄に、

神山兵左衞門正英

神山市郎兵衞政久嫡子

一、三百石

圓明院樣御代慶安二己丑之年御近習ニ被㆓召出㆒萬治元戊戌年讃州丸龜御在番之節於㆓彼地㆒新知百石被㆓下置㆒後又御加恩百石被㆓下置㆒御用人役被㆓仰付㆒其後圓明院樣御隱居附ニ被㆓仰付㆒御隱居料之內ヨリ百石被㆓下置㆒都合三百石拜領仕候。右神山市郎兵衞政久先祖之義ハ當時神山市郎兵衞正直方ヨリ書付指上候ニ付相記不㆑申候。

といへり。その名を政久とせるは前掲中江先生傳の道長とせると一致せざれども、一は名乘にして他は號にやあらん。道長自らの物語に「吾れ若年の頃先生と常に親しく、致仕之砌も長濱まで見送りし」よし、中江先生傳徳川彥六寄隆の筆記に見えたり。その全文は本全集卷之四十三藤樹先生補傳第三十三項に載せたれば、就いて見るべし。また全書岡田氏本倭文集一に送㆓福本子㆒丁亥秋の和歌一首あり。曰く、

外にねがふ百の思案な打捨てよ
良知の外に利も德もなし

而してイ神山子と傍記し、花翰本・中村本・藤樹別集の三書いづれも神山子に作りたり。是によりて之を觀るときは、神山子正保元年秋遠く來りて學を問へるによりて、先生歌を作りて良知の旨を傳へられたるものならん。その子孫、今九州方面にありと聞けども詳かならず。

二〇、西川季格

西川季格は伊豫大洲加藤侯の臣なり。初め清水季格と稱す。（また清水十に作り（原田氏本雜記に清水十兵衞に作る）或は清水士に作れるものあり。是れ恐らくは季格の事なるべく、その十な士といふは蓋し傳寫の誤なるべし。）寬永二十年小川村に來りて藤樹先生に師事す。或は云ふ、初め先生の大洲を去るや季格思

慕して止まず。乃ち侯に告げて祿を致して來り從ふと。未だ孰れか是なるを知らず。文集に正保二年書ニ清水子巻ニの文あり。書簡集に正保三年の書通と慶安元年の書通とあり。參照すべし。季格嘗て蕃山の著集義和書を讀んでその說くところ先師に對して不遜なりとなして集義和書顯非二卷を著はして之を駁せり。此の書元祿四年辛未歲春三月中旬の序あれば先生の歿後實に四十四年を經たるなり。編者嘗てその上卷を東正堂翁に得て之を書寫し座右に置けり。今之を通讀するに論旨正鵠を得ざるのみにあらず。忿疾讒妄讀むに忍びざるなり。編者熟〻先生の淸水子に送れる文を通讀して季格が內自ら修むることを忘れて、徒らに外を責むることを是れ事とし先師の敎旨に背けることを惜しむ。死歿年月日詳かならず。門人詩集中に此の人の作かと思はるゝ「人生七十有幾年云云。」の句あり。參考すべし。川田雄琴の止善書院記追加に季格が先生に受くるところの家藏の聖像あり。その姪三重生重種より止善書院に納めたることを擧げたり。その他末裔の消息明かならず。

（原據）集義和書顯非序。藤樹先生年譜。篠原元博編藤樹先生全集附錄上追加。（本全集卷之四十五）

二一、森村子

藤樹先生の佃叔に答へられたる書翰（本全集卷之十八、第二九頁）に「次左・權左など〻對談講習能御體認可ㇾ爲ニ大幸ㇾ候。」との語あり。岡田氏本に森村氏と傍記せり。されば先生の門下に森村次左衞門といへる人ありしことは明かにして、しかも中川權左衞門謙叔と並記せる文勢に依りて考ふれば、恐らくは大洲の士ならん。されど此の人の姓名加藤家臣錄・大洲秘錄等の諸書に見えず。また同じく書翰集に森村長に答ふるの一書あり。（同上卷之二十第三三頁）此の書通は大洲傳來の森井氏本並に三宅石菴の藤樹先生書簡雜著等に載せられ森村長と明記せり。然れども此の人の事また前記二書に載するところなし。書翰集（同上卷之二十第六二頁）に「森長右丹州見舞に御下候云々。」の語あり。加藤家臣錄に大洲藩家臣中姓森を冒すものあれども、長右衞門と稱するものあるを見ず。當時往々姓名を略書せることあり。中善兵・中孫右・熊左七等の如き是なり。さればこゝに森長右と稱するものは或は森村長の略書にはあらざるか。その他森村小あり、森村仲敏あり、森村伯仁あり、十郎右あり、加太夫あり、大洲秘錄。溫

故集に森村太兵衞あり。按ずるに森村小とは多くの用例に倣ひて之を考ふれば森村小右衞門、小左衞門または小太郎等の略書なるべし。而して遺教本に森村仲敏とせるところを岡田氏本に森村小に作れるを以て小と仲敏とは同一人に似たれども、また遺教本に森村伯仁とせるところを岡田氏本に森村小に作れるところもあれば、今何れとも定め難し。伯仁と仲敏との關係について之を考ふるに若しその文字によりて想像することを許すものとすれば伯仁と仲敏とは兄弟の間柄なりとも謂つべきか。之を要するに森村子の事については資料缺乏、精確なる傳記を得る能はざるを遺憾となす。

伊豫史談曾西園寺源透氏は報じて左の如く云へり。森村家は二軒あり、一は森村嘉右衞門同十郎左衞門（編者云、書簡集十郎右に（本全集卷之十八第一二一頁）大洲秘錄十郎右衞門に作る。）の家にして、三百五十石を食み町奉行を勤む。二は森村太兵衞の家にして、二百石を食み御替地代官たり。溫故集に據るに前者は嫡子加右衞門に至り月窓公の食言を憤り去りて福知山朽木侯に事へ後者は違算の件にて免役となりたり。然るに此の家の事元和四年の支配帳に見えず、或は嘉右衞門家の分家ならんか。と。

編者按ずるに森村十郎右並太兵衞の兩人が先生の門人たりしことは、前者遺教本にその名の存するにて知るを得べく、後者は後記溫故集の末尾に明記せるにて詳かなり。而して森村伯仁に與ふる書通（本全集卷之二十、第三二頁）に「加太大に御言傳云云」といへるものあり。此の人恐らくは十郎右の卑族ならんか。今試にその略系を示せば左の如し。

略系

森村嘉右衞門――十郎右衞門――加右衞門
　　　　　　　　　　　　加太夫？
森村太兵衞

森村氏に關する研究資料

（甲）森村十郎右衞門に關するもの。

〇大阪御陣御供衆（寫本）の中。

長柄　　壹本

拝鍵　壹本　　　　　　　森村加右衛門
のぼり　甲　壹本

（右慶長中）

○元和四年御家中支配帳の中。

三百五十石

元和
森村嘉右衛門

寛永
森村十郎右衛門

○大洲秘錄四　町奉行の條。

森村加右衛門

○溫故集卷之三

森村十郎左衛門知行三百五十石老年病氣及二大切一候節、爲二御見舞一圓明公方御使者加藤藏人殿被レ遣候處、此時御意の御口上ニハ隨分心長く保養すべし。若命終るとも跡式の事少しも氣遣あるべからずと、いと念頃なる御意共之。十郎左衛門至て難レ有奉レ存抱キ起されて上下を着用せんとすれども不レ叶、上下を疊て膝に置漸と御請申上、嫡子森村加右エ門を呼寄段々御懇意之趣能々汝君恩を忘れざれと感涙を流し其後一兩日を經て終ニ命終りぬ。扨加右エ門忌明たる後家督三百石ニ被二仰付一候へバ加右衛門申候は私身分ニ取候てハ大祿過分の至兎角申上候儀も無二御座一候。併し亡父十郎左エ門病中藏人殿爲二御使一段々御懇之御意の上致二落命一候其跡の氣遣申間敷由被二仰聞一候趣、亡父私を呼びよせて右御懇意之段能々承候へ、末々迄御恩忘申間敷やうにと與々申殘候。只今跡式五十石減候段亡父へ對し何分にも御請申上がたきよし願申ニ付達二御聽一候所、圓明公御意にハ跡式の義氣遣不レ申樣にとこそ申渡つれ、知行へすまじきとの約束ハ夢にもせずとの御意に依て御家を立退きしとそ。後に朽木の家へ出られ御家老職相勤享保之比迄森村勘右エ門と云て家老職を務め丹波國に住すと云。扨藏人殿後々まで其時我も一所に可二立退一事成しに其氣不レ付心外の事くと度々御申有しといふ。

編者云ふ、こゝに朽木家といふは福知山藩の事なり。編者嘗て加藤主任を介して京都府立福知山中學校長田中常憲氏（現在京都府立桃山中學校長）に調査を依賴したるに左の返書を得たり。

森村勘左衛門氏。

朽木植綱侯ニ仕フ。其頃高二百石物頭御取次寺社奉行被二仰付一次ニ常智院樣（編者云續藩翰譜當智院に作る。朽木植治。）御代御小姓頭被二仰付一享保十三年江府勤番御老役被二仰付一又七十石增加、故アリテ（ソノ故不詳）小姓頭御赦免格式ハ御番相勤候樣ニ被二仰付一遠近御使者役寬保二年五十四歲病死。

編者按ずるに元文武鑑二　朽木土佐守玄綱の條に森村勘左衛門あり。當さに此の人なるべし。今試みに勘

左衞門が五十四歲を以て歿せる寬保二年より逆算すれば元祿二年の出生となるを以て助左衞門は恐らくは加右衞門の子または孫に當る人なるべし。

（乙）　森村太兵衞に關するもの。

○讃州高松御在番御供之次第（寫本）の中

貳　百　石　　　　森　村　太　兵　衞

（附記）西園寺源三兵衞、高松城主生駒壹岐守罪ありて封除かる。加藤泰興幕命に依り行て在番す。時に寬永十七年なり。同十九年歸藩す。

○大州秘錄四　御替地上御屋舗代官附之條

森　村　太　兵　衞

○溫故集卷之三

一、森村太兵衞知行百石替地代官、米湊相勤居られしに或年勘定被致候處如何被致候哉。合勺を致相違候。其前方某と六人（名不知）是も勘定の節合勺才の相違有之再三吟味被致候得共何分合不申依之甚恐入、大橋作右衞門殿迄申上る。作右衞門殿被達御聽候處、圓明公（泰興）御意には勘定は元より作りものなり、合も不思議不合も不思議也と其分にて相濟候、何も相濟安心しける。此度森村太兵衞の勘定も此格と作右衞門殿思ひながら右の段被仰上候へば公御機嫌損じ、王陽明流の勘定は聞きたくもなし、暇を遣はし候へと仰出ける。作右衞門色々と取成被仰上候へ共君御同心なく終に御暇を被遣候。都て圓明公の御計ひ諸人の不及事と申あへり。此森村は藤樹先生の御門人なりとぞ。

以上の記述に依りて十郎右衞門・太兵衞の兩氏については略々知るを得たれども、その多く書簡集に顯はれたる伯仁と仲敏とが通稱何人に相當するかは終に知悉するを得ざるなり。今左に年譜その他に顯はれたる事蹟を列擧して參考となす。

文集二送行の文己卯（寬永十六年）の條に森村子志於道而好學。不得已而干貧仕。東奔西走。猶未有所得。而雖無間暇以其志篤故來訪于予草廬といひ、川田剛著年譜には此年を以て來學すとなせり。文集四送行文壬午（寬永十九年）の條に森村子遊原之門用力於心學有年于茲焉。今適方論講終篇從父之命歸省といひ、また送行文丙戌冬（正保三年）を見るときは、その文學を爲すことを好まざるを以て父命に從はずして來學せるものに似たり。また同年の送行文に森村子會同志講論者。有年于茲矣。雖知止未圓從父命而歸省。とい

へり。年譜に寛永二十年及その翌年先生山田・森村二子の爲に小醫南針・神方奇術の二書を撰せり。小醫南針の一部は捷徑醫筌の中に編入せられて明暦元年出版せられたり。

書翰集に依るに森村小は正保元年に二通あるのみなるも、伯仁は寛永二十年より慶安元年に至るまで陸續として絕えず。その間唯正保二年を缺くのみ。其他知止歌の如き日用工程の如き後世の學者が尤も重要視したる大文字は實に森村子の爲に發せられたるものなり。以てその如何に修養の深かりしかを察すべし。

（附記）本項を艸するに丁り伊豫史談會西園寺源透氏は多大の援助を與へられたり。

二二、中村子

門下中村氏を稱するもの後記中村所左衞門の外に重兵衞・重節・重・叔實・叔貫・十兵衞・又右・又之丞・重左・兵等の名散見せり。左に之を討究すべし。

一、重兵衞。

文集二己卯（寛永十六年）歲旦の詩の次に送₂中村子₁の詩あり。此の詩は年紀を明記せざれども、文集そのものゝ記載例によりて己卯の年なることを知る。而して岡田氏一本の註に「重兵衞海津人木村惣右衞門下吏。」とありて原田氏本草稿集にも同樣の記事あり。元來海津（滋賀縣高島郡）には中村といふ町名（字）あり、加州前田藩の舊領地なり。その町名を姓とせるところより考察すれば、重兵衞なるもの蓋し同地の名門ならん。然るに年譜には寛永十九年の條下に「中村叔貫來りて始て業を受く。」とあれば寛永十六年に送行の詩を受けたる重兵衞と年譜に載するところの叔貫とは恐らくは別人なるべし。

二、重節。

書翰集正編に中村子におくれる先生の書牘二通ありて、篠原氏本題註に全書大洲本答₂中村重₁となし、全書岡田氏本もまた同じく中村重に作れり。而して遺敎本には右の外尙二通あり。前の二通と同じくすべて重節に作りたれば、重と重節とは恐らくは同一の人なるべし。（此の人、萬年本に中村兵に作れり。）且つその書中「今度戸田子へおくり候送行懸物などめづらしく御覧候て御體認可₂被₁成候。」といへり。その戸田子なるものは新谷の藩士なれ

ば戸田子に送れる送行懸物によりて修養すべしとの書狀を受けたる重節は、恐らくは新谷または大洲の人ならん。加藤主任曰く、先生の重節に與ふる文を見るに、何れも深奧なる哲學的思想を含み其の說くところ他人に與ふる文に比すべくもあらず。是に由りて中村子その人の造詣の如何に深かりしかを卜知すべし。と。

三、叔貫

書翰集正編に、伊豫の人と思はるゝ中村重節に答ふる文に「又右方へ（イニ叔貫）御下し候法語の類にては云云。」とありて全書岡田氏本並に和翰本等何れも同じく叔實と傍記し、而して年譜には叔貫に作りたれば、今何れとも定めがたし。されど叔實と叔貫とは文字相近きより互に相混淆せるものにして同じく又右を指せるものなるべし。此の人後年に至り備前に事へたりと見えて三輪執齋の藤樹先生全書序文に「中村叔貫の備前にあるに送り正して云云。」といへり。前記「又右云云」の文によりて推敲すれば恐らくは伊豫の人なるべし。

四、十兵衛。又右等。

大溝町大字勝野原田知近氏所藏古寫本雜記に「藤先生之門人衆（マヽ）」と題する一條ありて、その中に、

中村十兵衛　江州萬木村之住。
中村又右衛門　中村十兵衛子息兩人共備前に居住。
新　六
岡田傳兵衛　中村十兵衛子息江州萬木村に住之他家へ養子也。

といへり。万木（ユルギ）村とは、小川村の隣邑にして今の青柳村大字青柳の中もと東万木といひしところにして、岡田季誠氏の父仲實と同鄕なり。而してこゝにいふ中村十兵衛並又右衛門は前記伊豫の人と思はるゝ重兵衛並叔貫とは別人なり。更に又右衛門は二人ありたりと想像し得べきを以て的確に知るを得ざれども、藤樹先生行狀聞傳　藤樹先生の卒去に丁り中川權左衛門等數氏と共に祠堂に於て期の喪をなせる等の事あり。參考すべし。（後記又之丞參考資料參照）

五、又之丞。

中村又之丞一に亦之允に作る。江西東万木村の人なり。藤樹先生行狀聞傳に先生の歿せられたる時、中川謙叔等數氏と共に祠堂に於て期の喪をなさんとせることあり。また備前に於ける中川・加世・中村三人の勤書中に中村又之丞の名あり。慕賢錄に中村又之允食祿二百石といひ、續蕃山考に慶安二年中村又之丞二十四歲にて備前に事へ貞享元年二月學校奉行となり、元祿元年三月免職のことを載せたり。元祿元年は年齒まさに六十三なりとす。

谷川玄卜に送れる書狀

得ニ幸便ヲ捧ゲ愚札ヲ候。其許彌〻御無事之段承及珍重存候。此方□公儀も無ニ異儀一候可ニ御心易一候。

一、禁中樣御崩御□爲□仕候。にが〳〵布儀ニ奉レ存候。嘸京わらんべ迄愁傷たるべきさ奉レ察候。

一、鄙父去ル七月據氣にて據ハ落候へども其後腹はり腰痛候てさして快氣も不レ仕へん〳〵さ相煩申候。千萬氣遣ニ存事ニ候。貴樣ハ八月江州へ御下候儀さ□□□樣子御らん可レ被レ爲さ奉レ存候。万木方も申來候へども病体詳ニハは不レ申候故きくまほしく（まゝ）存候。兎角万木にて八郎右・傳兵衛など療治の分ニてハ却而そこないさも成可レ申さ存候。其上藥相當不レ仕永々相煩申候而次第におもり候はゞ如何さ存候。少も〳〵急其元ハ御よびのぼせ上手ノ醫ニも御かけ被□はりなどをもたて色々□さ取しめ養生仕候樣に奉レ賴候。はや二つき三つき永々布煩故次第ニ老人之事ニ候へば、おさろへ可レ參さ存候。我等も見廻ニ上り申度候へども急成病さも見へ不レ申候故、尤五七日以前ニ治兵衛ヲ見廻ニ遣候。當月末ニはもどり可レ申候間樣子次第ニて病體おもくきこへ申候はゞ、見廻ニ上り可レ申さ存候。其後ニ罷？下り候事も先相延遣候。□□もの病症是非ヲ聞不レ申候はゞ下り申まじくさ存候。煩之樣子御報ニレ具可レ被ニ仰遣ヲ候。定而病症御聞不レ被レ成事ハ有ニ御座一間布ニレ終煩さも不レ煩共爰元へ。（不字脫カ）被ニ仰聞ヲ事、情ノうすき樣ニ奉レ存候。猶遠鄕候へバ一日〳〵ノ煩ノ樣子聞まほしき斗にて無ニ心元ヲ奉レ存候。

一、熊澤殿も當月初に有馬へ湯治めされ少相當仕候樣ニ承候。恐惶謹言。

九月廿三日　　　　中村又丞　花押

谷川玄卜樣

尙々鄙父煩候樣子御聞被レ成候通御報ニ可レ被ニ仰下ヲ候。十兵衛方よりハ我等共ニ氣遣させ申まじきさ存候故、便ごさに能樣ニ斗申越候へども、他より申來候ハ難病之樣ニ承候故氣遣仕候。急々先御よびのぼせ其元にて御相談取しめ養生仕候樣ニ奉レ賴候。此狀万木へ御さゞけ可レ被レ下候。宜奉レ願候。以上。

（山本源內氏保管書翰）

編者按ずるに此の書通は備前在任中の中村又之丞が江州万木の里に起臥せる父の病氣重き由を聞き、京都に在住せる谷川玄卜に寄せたるものにして、孝心の深き躍如として紙上に顯はるゝを見るべし。書中いへるところの八郞右とは岡田仲實卽ち季誠氏の父にして、傳兵衞（第四項並本全集卷之二十第四四頁參照）とは岡田傳兵衞の事なり。末尾に熊澤子有馬湯治の事をいへり。蕃山の岡山を去りしは明暦三年なれば又之丞が此の書通を認めし時代も略〻考へ得べく、禁中御崩御といへるは恐らくは　後光明天皇の御大喪を指せるべし。

六、重左。兵。覺右。

本全集卷之二十「與₂谷川氏₁」書に「或人御志立候由奇特と存候」といへる或人の文字を遺教本に十左に作り中村本に重左に作れり。また同上卷之十八「答₂山田權₁」書中に「御推量の如く中村重三家令₂炎上₁候にがく〳〵しき事に候。」といへることあり。また兵あり、嘗て晝寢を戒められたること雜著に見えたり。鄕貫事蹟考ふべからず。同上卷之二十「答₂佃叔₁」書に「覺右と御相談云云。」の語あり。覺右については大洲秘錄二に、

中村與兵衞──中村長右衞門（四百石　七十九歲）─┬中村太郞右衞門正貞
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└中村覺右衞門正辰（實養子河越氏男、泰興公御代被₂召出₁新知百五十石、七十六歲。）

といへり。恐らくは此の人ならん。因みに長右衞門は先生の致仕書の副書に連記せる人なるべし。

二三、小川覺　並仙

小川覺は豫州の人寛永十三年近江に來りて學を問ふ。是より先、先生大洲に在りて學を講ずるや覺その門に入りて硏鑽怠らず。弟仙亦大洲時代より親炙の門人たり。按ずるに元和四戊午年三月五日の御家中支配帳に百五十石小川與六とあり。覺兄弟或はその子孫ならんか。大洲秘錄加藤家臣錄等の諸書小川氏に關して錄するところなし。按ずるに是等諸書の成れる時小川氏既に大洲を去りて久しきを經たるものにはあらざるか。

（附） 赤穗義士木村岡右衛門貞行並吉田忠左衛門

右の一篇は西村豐氏の王學會に於ける講話筆記（明善社發行王學雜誌第三卷第三號）を骨子とし附するに私見を以てしたるものなり。茲に有力なる資料を示されたる同氏に對し厚く感謝の意を表す。

水戸の編輯にかかる深秘箧底錄に「木村岡右衛門は小川某につきて酷だ明人王守仁の學を好めり。」と記し、又佩弦齋雜著四十七士傳もこの說に據りて王學を酷信せりとなせり。西村豐氏は自ら說を爲して曰く、木村岡右衛門貞行の師事したりといふ小川某は恐らくは藤樹全書（志村巳之助編）に載するところの小川某なるべしと。編者按ずるに豫州小川覺兄弟は其の消息杳として知るを得ざれども或は他の多くの門人と等しく備前に事へたることなしともいふべからず。また谷川寅は嘗て小川玄朴と稱したることあり。玄朴は松平石見守並その宗家備前光政侯に篏仕したれば木村氏の仕へたる赤穗とは近藩なるを以て木村氏に道を傳へたるもの若し小川覺兄弟にあらざれば或は後者玄朴ならんか。西村氏はまた之を二つの方面より觀察したり。一は門下の巨擘にして備前に事へ偉功を奏したる熊澤蕃山は寛文年中明石侯松平日向守の聘に應じて其の地の息游軒に於て王學を以て一時子弟を薫陶したることあるを以て、小川某にして若し藤樹の門下にあらざれば或は蕃山の學徒にして之を貞行子に傳へたるものなるべしと。その小川某を以て蕃山の學徒に擬するが如きは俄に首肯すべからずといへども、蕃山の影響を考慮の中に加へたるは傾聽に値すべし。二は細井廣澤は肥後の王學者北島雪山の門人にして義士と親交厚かりしを以て往來の際自然とその學風を傳へたるものなるべしといへり。

西村氏は尙赤穗加里町三木彌次郎氏の秘藏に係る木村貞行の書簡一通を揭げたり。左に之を摘錄すべし。

前略……殊に御同道之御方も御座候由一入珍重至極に存候。私共も貴樣御下向之後は如ㇾ形取失可ㇾ申かとこれのみ無㆓心元㆒奉ㇾ存候所、夜長に罷成り候はど何も寄合片言咄をも仕合、其上先生へ折々得㆓御意㆒申候。今來少しはすゝみ申樣に御座候へども御存知の如く染習昏迷不ㇾ移候故、稍もすれば間思雜慮の大持病再發意念そびき出し愼獨の工夫も實ならず是れ偏に其志不ㇾ立故と口惜次第に奉ㇾ存候。たとへ骨を鐵石にくだかれ骸を市井に引きさらされ候とも、此一儀をすて別路に走申すべきことは日本大小神祇冥罰は不ㇾ存候へども、父母存命の內は志一人にも任せがたく少しは不ㇾ愼儀共も御座候。此段は天道を證據人と存置候。此上隨分無㆓油斷㆒何れも詮議可ㇾ仕奉ㇾ存候。委曲御意を得べく候へども御取込之節御披見も如何と存じ餘事申殘し候。恐惶謹言。

木村岡右衛門　花押

十一月十九日

吉田忠左衛門殿

侍史

編者之を精讀するに、全篇の骨子たる愼獨の工夫は致良知の三字と同じく實に藤樹學の根本思想にしてその他間思雜慮といひ、柒習昏迷といひ、意念といひ、別路に走るといひ、何れも斯學の常套語にしてその執筆者たる貞行氏が江西の學徒たることは疑ふべからず。宛名の吉忠左衞門といへるは吉田忠左衞門兼亮の事なり。されば兼亮もまた王學系統に屬する人なるべし。西村氏はまた三木氏の珍藏せる吉田氏の眞筆に係る扇面を掲げたり。

忽是太虛月一團。　怒雷陰（マヽ）雨共無端。
陣々清風雲晴後。　又是大虛月一團。

此の詩は「いさぎよき月にかかれるむら雲も霽るればもとの潔き月。」といふ歌と同じく先生の首尾吟にして人口に膾炙するところなり。唯二三文字の出入あるのみ。

按ずるに西村氏は貞行氏の書簡中に見ゆる先生の文字を以て吉田氏に對する尊稱となせども編者は精讀してその考察の誤なきかを疑ふ。乃ち編者は之を以て貞行氏の師事せる第三者を斥すものとなすなり。されば深秘筐底錄の記事にして正確なるものとせば、先生の二字は明かに小川某を斥せるものとなすべきなり。隨つて二氏は同門の士たることも髣髴として想像し得べきなり。之を要するに赤穗四十七士の忠魂義魄は山鹿素行の教育に基づくことは勿論なりといへども、また江西學の影響鮮少ならざるを知るべきなり。

二四、垂　井　子

垂井子はその鄕貫詳かならざれども本全集卷之十八に丁亥秋の一通あり。發端の語に「彼人の物語云云。」とあるを遺教本に「權左・九右」に作れり。權左は中川謙叔にして九右は山田權の事なり。而して二子ともに大洲の士なるを以て考ふれば垂井子もまた恐らくは大洲侯の臣ならんか。加藤家臣錄卒下に、

一、百　石

垂井五右衞門昌春
垂井兵左衞門昌次四男

圓明院様御代父兵左衞門家督三百石之内二百石市助に被ㇾ下置、百石五右衞門に分知被ㇾ仰付ㇾ候

一、百　石

垂井傳右衞門昌廣
實子

英久院様御代家督無ㇾ相違ㇾ被ㇾ下置ㇾ候

と見ゆ。或は此の中の一人には非ざるか。また前記兵左衞門は元和四戊午年三月五日御家中支配帳にも載せられたり。松下氏聞見錄に幸井氏に作れるは恐らくは誤ならん。

二五、谷　勘　兵

本全集卷之二十「與二谷川氏一書」あり。此の書藤樹先生眞蹟斷片谷勘兵の宛名あり。會津北鄕藤樹先生學派所傳故齋藤一馬氏所藏に係る。而して此書は和輸本・中村本等すべて與二谷川氏一とせるものなれば、その谷といへるは谷川の略書なることをも想像し得らるべし。同上卷之十八「與二森村伯仁一」の書中に「先書にも如レ申勘兵衞と御相談隨分被レ入二御精一心術之御取入可レ被レ成候」といひ、また同じく「答二作右一書」中に「新兵・善兵などそこつに勘兵衞御暇之義被二申上一御意違に被二思召一段尊書之趣一一御尤に奉レ存候。私御理申上候處きこしめしわけられ御懇なる首尾にて御暇被レ下候旨、私一人か樣なる大幸に奉レ存候。」と云へるによりて考ふるに勘兵衞なるものもと大洲に事へたりしを、故ありて御暇を賜はりしものゝ如し。然れども加藤家臣錄並大洲秘錄等の書に谷川氏の文字見えず。暫く疑を存す。

二六、田　邊　子

本全集卷之十八に、正保二乙酉年春及び冬に田邊子に送れる先生の書簡二通あり。一は善惡の歸一性を說き得て餘蘊なく、一は病氣再發につき湯藥のみにては驗氣あるまじきとて、自反愼獨を勵み七情の滯を退治すべきことを懇諭せり。是に由りて之を觀るときは、田邊子夙に先生の門に入り、相當修養を積めるの士なることを知るべし。此の人何國の人なるや詳ならざれども、大洲藩元和四戊午年三月五日の御家中支配帳並に大洲秘錄三に百五十石作庵あり。また加藤家臣錄享下に、

一、百石　　田邊作庵六男　田邊彌七秀澄

圓明院様御代兒小姓に被二召出一元服後新知被二仰付一候。

一、百石　　養子實田邊仁右衛門相秀次男?　田邊彌之右衛門秀祇

英久院様(泰恒)御代家督拜領

等の記事あり。田邊なるもの或は大洲の士にはあらざりしか。本全集卷之十八「答清水子二書に「仁右・藤右云云」とあり。その藤右といへるは既記瀧野藤右衛門の事なるべく、仁右といへるは前記加藤家臣録の田邊仁右衛門相秀の事にして、本條にいふところの田邊氏その人にはあらざるか。暫く臆説を識して後考を俟つ。

二七、瀧　氏

本全集卷之二十に正保二乙酉年與二瀧一通ありて、「今ほど心學に御志御座候旨乍二御尤一感入申候。」といひ、また「今程權左在宅に候條日々御會講と令二推察一候。」といへり。その大洲人たる中川謙叔が目下在宅せるを以て、日々會講せらるゝことなるべしと云ひ送られたる瀧氏は、恐らくはまた大洲の士なるべし。元和四年御家中支配帳に「三百石瀧武左衛門」「百五十石瀧市右衛門」の二人あり。參考すべし。

二八、盲人博市

盲人博市は伊豫の人なり。藤樹先生行狀聞傳に詳かなり。就いて見るべし。今松山市西園寺源透氏並大洲方面の人々について質すも更に傳ふるところなし。

(附)　藤樹先生の豫州に及ばせる影響に就いて

編者云、中川貞良以下大洲藩または新谷藩の子弟にして先生に學びし者、茲に至りて三十二人(推定を含む)あり。殊に個叔一は新谷藩の家老たり。中川・國領・吉田の諸氏は、何れも三百石の高祿を食み樞要の地位にありし人々にして、また大野了佐の如きあり、盲人博市の如きあり、上下競うて先生を思慕して止まざるの狀想見するに足る。寛永十三年小川俤兄弟始て笈を負うて先生を小川村に訪ひしより岡藩の子弟翕然として來り學ぶもの陸續として絶えず、而して君侯之を默認し時に允許を與へられたることもありたり。翻つて先生に就いて之を觀るに、

その著翁問答は豫州子弟の懇望によりて初學の爲にとて執筆せられたるものなり。捷徑醫筌六卷は有名なる低能者大野了佐の爲に編纂せられたるものにして、鑑草附針は同じく大洲の士山田・森村二生の爲に著作せられたるものなりとす。書翰集を觀るに先生の門下に送れる書通百九通あり。内凡六十餘通は實に豫州子弟の教育に關するものなり。先生の豫州子弟教育の爲に盡せる至れり盡せりといふべし。惜しい哉。天年を假さず、僅かに四十一歲を以て永眠せられたるを以て、是等有爲の子弟も玉成の機會を失しその志を爲す能はざりしなり。中川謙叔・加世季弘・中村叔貫の三氏は希世の明君芳烈公に事へ、門下の偉人熊澤蕃山を輔けてその學ぶところを實地に應用するを得たりといへども、その他多くは依然として鄕貫に止り奉公の道に從へり。偶々先生歿して九年明暦二年に至り僧盤珪招かれて大洲に入り、寛文十二年を以て如法寺を創建せり。大洲侯深く之に歸依し尊信殊に厚かりしかば、上下靡然として之に歸向し多年薰陶せられたる良知の學風茲に一頓挫を來すに至れり。森村太兵衛が瑣々たる違算の廉を以て御暇を賜はりしが如き明かに此の間の消息を洩せるものなりとす。川田雄琴の止善書院記に曰く、先生去ニ茲土一。既百有餘歲。物換星移。流風漸衰。俗習日滋。文獻拂レ地而空。禮樂典章廢而不レ講。其間譚ニ性命一論ニ經濟一者。非ニ緇徒之說法一則兵家者流之賞罰。誣レ民誑レ人爲耳。先生之德澤。於レ是乎幾絕矣。と以て當時の事情を知るに足るべし。然りといへども多年培養し來れる潛勢力は、一旦晦冥に歸することありといへども容易に絕滅し去らるゝものにあらず。此の間新谷藩家老德田彥六寄隆あり。常省先生の教を奉じて、邸内に祠堂を設け祭祀を懈らず。陽明の奧義を會得して能く子弟を教養せり。これと相前後して、享保十七年に至り大洲侯聘を厚うして川田雄琴を召す。雄琴は王學の泰斗三輪執齋の高弟なり。乃ち師命を奉じて大洲侯に事へ、止善書院を創建して、祠堂を築き先生の學を再興せり。是に於て、大洲の君臣欣然としてその學に從ひ、弦誦の聲絕ゆることなく、良知の學再び盛に行はるゝに至りたり。市井の民また雄琴の說に感動して行を勵むもの少からず。孝子節婦の輩出するもの實に四十餘人の多きに達したり。

前既に云へるが如く、豫州の士にして先生の門に學びしもの少からざりしといへども、先生早く歿せられて玉成の機を失したると、禪學旺盛を極めたるとを以て、その學びたるところを實地に施すの機會を失し、遺憾多かりしが、幸ひ門下中川謙叔・加世季弘等の秀才あり。何れも二男なりしを以て父祖の家職を繼承するの要もなく、熊澤蕃山の薦によりて備前少將光政公に事へたり。而して豫州に在りては到底試錬の餘地なかりし幾多の事項につき、その理想の實現に微力を致し、以て藤樹學の眞價を知らしむるの端緖を啓きたるは、聊大洲人士の誇となすに足るべし。

二九、横山子

横山子の事本全集卷之二送行の文に據るに寛永十九壬午年夏疾に因て攝津の溫泉に浴す。嘗て學に志して先生を慕ふこと多年なりしを以て此の機會に丁り藤樹先生を小川村に訪ふ。濡滯三旬孝經の心法を講明し大

に得る所あり。別に臨み先生詩を作りて之を送る。正保四丙戌年その家炎上す。先生之が爲にその本心を失はん事を憂へ書を以て之を戒む。按ずるに横山子何國の人なるを詳かにせずといへども伊豫大洲または新谷の士にはあらざりしか。

加藤家臣錄元の所載を左に掲げて參考となす。

横山氏　　横山某 名不相知

知行高不相知

曹溪院樣御代於江州被召出候

一、知行百五十石　　實子　横山小左衛門 實名不相知

大衆院樣（貞泰）御代

要關院樣（直泰）附被仰付家督相續之儀於新谷二男一左衛門百五十石被下置候

一、知行百五十石　　小左衛門嫡子　横山佐右衛門正次

小左衛門儀新谷江被遣佐右衛門儀大洲ニ被差殘折知行百五十石被下置候

といひ、また加藤公御侍記新谷へ引越す給人中に横山小右衛門あり。參考すべし。

（原補）　本全集卷之十八。

三〇、淺野子

本全集卷之一に愼獨「此是格物致知之實功云云」の文あり。安井氏所藏心學錄には此の文を與淺野子に作り、同じく本全集卷之五に忍「者箇是以道制欲之勇心云云」と題する文あり、與淺野子と識せり。また、本全集卷之十八正保丁亥の一通あり。鄉貫事蹟今考ふべからず。

三一、赤羽子

山田九右衛門書狀

門弟子并研究者傳第十八項參照
（近江　山本源内氏保管）

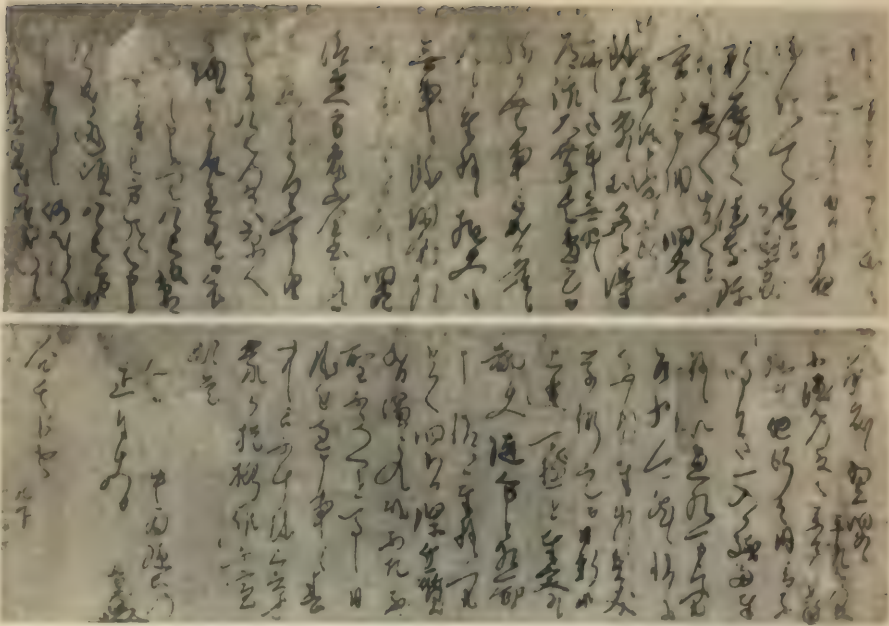
中村又之丞書狀

門弟子并研究者傳第二十二項參照
（同　上）

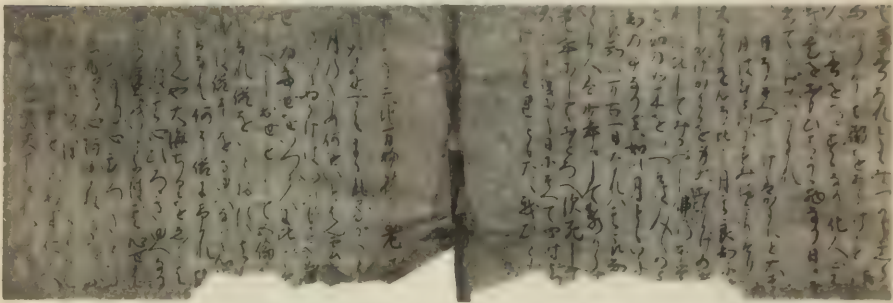
谷勘兵に與へられたる藤樹先生眞筆書狀

門弟子并研究者傳第二十五項參照
（据大正八年十月發行雜誌陽明學第百二十八號）
（會津學派所傳　東京　故齋藤一馬氏藏）

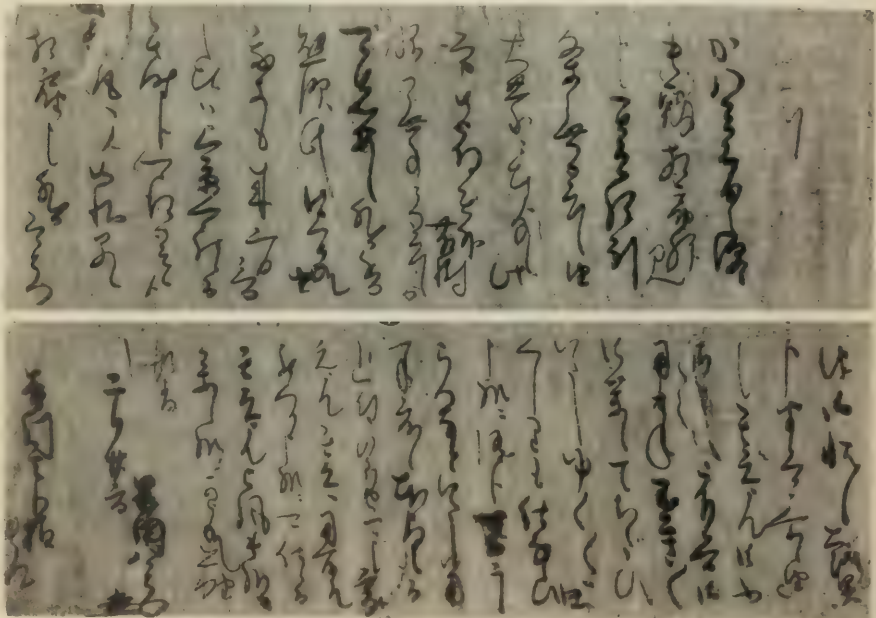
中西常慶書狀

（近江 山本源内氏保管）

門弟子並研究者傳第三十二項參照

道歌註

（委員 小川喜代藏氏藏）

門弟子並研究者傳第四十二項參照

岡田仲實書狀

（近江 山本源内氏保管）

門弟子並研究者傳第五十一項參照

本集卷之四「送赤羽子」書に赤羽氏、名道益の註あり。春日氏本實錄俗名道益に作り、同上卷之四十七門弟子詩文集には長に作れり。按ずるに赤羽子道に志して先生の門に遊ぶこと年あり。嘗て孝經講筵の末に侍し、講終りて庚辰（寛永十七年）の春に逢ひ、詩を賦して志を言ふ。寛永二十年春中庸を講明して未だ半ならざるに、不幸手足を煩ひ、醫を攝陽に求む。先生文を作りて之を送れり。赤羽子郷貫詳かならざれども、加藤家臣錄に左の文あり。參考として之を揭ぐ。

赤羽金左衛門

一、四十石

生國不ㇾ詳赤羽村ト申所之地頭ニ而御座候由

曹溪院樣御代被ㇾ召出ㇾ候　其外之義ハ不分明御座候

金左衛門養子

赤羽覺內

一、五十石

家督以後十石御加增被ㇾ下置ㇾ候ヘ共何レ之御代ニ而御座候哉不ㇾ相知ㇾ候

三二、中西常慶

中西常慶通稱孫右衛門。家世々今の三重縣宇治山田市岩淵町松木にあり。中西太夫と稱するもの卽ちこの家筋なり。此家もと神宮權禰宜の家なりしが分家して平師職となりしものなり。常慶寛永二十年江西に來りて教を請ひ、（事年譜並行狀事狀等に詳かなり。就て見るべし。）又正保二乙酉年夏鄉に歸らんとするや、先生文を作りて之を送れり。その文に曰く、「中西子謂不吾鄙遠辱輔仁之訪。不佞雖不能成其美。而喜益友之奇遇。而相與講習討論。以得摩厲之助。既五閲月而今將歸云云」と。元祿八乙亥年十二月二十三日卒す。一擧坊の墓地にその碑あり。後裔養子常光は明治維新の後まで外宮奉行と末社の祝部に就職せり。同四年神宮改正の後は神宮主典拜命、その子に孫太郎あり、讓一と改名せり。現戶主を健一といふ。東京府北豐島郡高田町一六〇〇番地に住す。

略系

○貞元（檜垣三河）
├常信（一禰宜）
└常保（權禰宜檜垣彌五郎　後中西十郎左衛門）─常光─常堯（平右衛門）

常弘（平右衛門）─常慶（孫右衛門　元祿八乙亥年十二月二十三日卒）
├常辰（利兵衛）─常泰
├僧春能
└常全

常與─常倫─常定─常延─光良

常光─常朝─常健（當代健一）

（原據）　三重縣内務部並末裔健一氏報。

（參考資料）

五十嵐養安の會津同志に與ふる書に曰く、

一、謂₌山田諸君₋曰、御當地御同學中、去年以來別而御進德之趣、田舍に於て令₌承知₋、何等之御大幸ぞや、珍重々々。其故は昔中西氏江西に被ㇾ學候節、山田は宗廟のある所、先々常々此道興起あらん事を欲し給ひしさ也。是以これをおもふに、山田は葦原の神德の根本にして万民の尊信する所、京師は帝德によりて千里民の止る所、武江は大樹の威によりて諸民の集る所、道なくて不ㇾ叶處にて候。（五十嵐養庵先生語類文集上卷八丁）

三三、盲人素績　附　研究者三宅石菴

素績姓を上月といひ素跡・素蹟又は素碩に作る。二見直養先生芳翰集卷上に曰く、「素碩事先師之門人にて候得共岡山公御在世の時より相互に疎遠成事兼て及ㇾ承申候。最早疾に被ㇾ致₌死去₋候。其門人米屋作衞と申仁有ㇾ之

候。講會も有之候得共、門人は右作衞計殘居申候處、三宅碩庵（碩庵は先哲叢談には石菴とあり。）と申は三宅九十郎（即ち觀瀾事。）の兄にて、大儒にて王學に成申候。此人三輪子之誘にて候。彼作衞を信被申候て藤樹學を信ず。此門弟中井忠藏（即ち甃菴事。）と申候我等懇意にて候。去年大坂にて町屋敷を拜領仕候て、學問講會を建て諸生を集め申候。右素碩翁は奥院に成居被申候。又去々年忠藏咄に素碩の言三輪氏良知と新右門（直養）良知とは違ひ申哉と被申候由、如何にも御遠察の通一重外にて候と答申候へき。又素翁は王子を信被申候哉と相尋ね候得ば、是は陸子を被信候由咄被申候。只今も毎月六會（回の誤か）は翁問答會有之候由近所土屋樣御内近藤源助下向にて及承申候。」（二十二丁）と。また難波叟議論覺書下に「此人先師の學と不云して王學とのみ云るを以て岡山師道統之眞をあをく此黨の意思には肌不合覺ゆ云云。」（二十丁）といへり。尙湖學紀聞を參照すべし。

（附）三　宅　石　菴

三宅正名、字は實父、號を石菴又は萬年といふ。九十郎觀瀾の兄なり。藤樹先生歿して十八年寛文五年正月十九日を以て京師に生る。少うして學に耽り家道を顧みず。是に由て產遂に蕩盡す。乃ち家什を鬻ぎ以て舊債を償ひ餘す所數金のみ。從容として弟觀瀾に謂て曰く、今貧極るといへども短褐疏食以て數年を支ふべしと。堅鑽止まず。愈々窮するに及び兄弟相攜へて江戸に至り帷を垂るゝこと數年にして石菴獨り京都に歸る。尋いで大阪に至る。名聲籍甚弟子雲集せり。石菴初め程朱の學を奉じたりしが三輪執齋と交るに及び素績の門人米屋作衞に親炙して藤樹學を奉するに至れり。嘗て藤樹先生の書簡の諸家に傳ふるもの往々異同あり。得失あり。甚しきは讀むべからざるものあるを見て、同志加藤氏等と謀り、一善本を得て佐るに五家の藏るところを以て參互考證して、誤る者はこれを除き、正しきものはこれを收めて、分類をなし、次序を立てて、五十餘通を得たり。名けて藤樹先生書簡雜著といふ。時に正徳三年冬十月にして石菴四十九歲實に三輪執齋の傳習錄開版に後るゝこと僅かに一年、岡田季誠の藤樹先生文集自序の成れる年に後るゝこと二十九年なりとす。門人中井甃菴等相謀り官に請ひて學校を建て懷德堂と名づく。衆皆石菴を推して祭酒となす。後中非氏之を嗣ぐといふ。享保十五年七月二十六日歿す。享年六十六。

學統

藤樹先生——素績——米屋作衞——三宅石菴——中井誠之（號甃菴）——中井積善——佐藤坦。

（原據）藤樹先生書簡雜著端。二見直養翁芳翰集。先哲叢談。日本教育資料（儒學源流）。

三四、井　上　眞　改

井上眞改は新刀の名工にして、大阪に住す。隔月毎に江西に來り、同門の友船木村（今本庄村大字南船木）松下仲伯の家に寓し、先生の教に浴したりとは今尚口碑に存し、松下家並に舊大溝藩士故横田耕次郎氏の記録にも此の事を明記せり。また先生の爲に大小各一振を鍛ひて獻じたりといふ。此の刀劍古來藤樹書院に保存せられたりしが、今は散佚せり。天保二年卯六月の書院寶物扣に「大小一通吟味物」との文字あり。一通とは一そろへとの意味にて、此の記事はその紛失せるをいへるなり。眞改の事、雜誌「陽明學」第一七四號に載せたる依知川朝陽氏の文に委し。此の一篇は朝陽氏が眞改の末孫宮崎市和知川原に住せる井上俊次郎氏より材料を得て、起稿せるものなり。左に之を轉載すべし。

井上眞改

依知川朝陽

井上眞改は舊飫肥藩の劍工なり。父を和泉守國貞と云ふ。宮崎郡木花村西教寺の住職道入の弟なり。出でて京都藤原國儔に鍛刀の術を學び、技大に進む。肥後細川侯三百石を以て之を招く。飫肥藩主祐久百石を與へ、益々其業を修めしむ。世呼んで初代國貞を大和泉と稱す。眞改少にして父に學び、既にして技却つて父に超えたり。初め父の名を襲ひて國貞と稱し、和泉守と云へり。後世之を二代國貞と稱す。後に熊澤蕃山と友たり。蕃山曰く、子は刀工なり。而して國守號を稱し井上氏にて藤原氏を稱す。共に不可なり。蓋そ用ふるに刀工相應の名を以てせざる。と。眞改喜んで名を請ふ。蕃山撰ぶに眞改の二字を以てす。蓋し之を改むる敢て虛僞に非らざることを字の如きを表せるなり。爾來銘して井上眞改と云ふ。居を大阪小人坊に卜して鍛刀を業とす。當時の刀工其右に出づる者なし。時人呼んで大阪正宗と稱す。蕃山亦稱して近世第一の名工となせり。嘗て一刀を作り之を朝に獻ず。詔して十六葉菊の徽章を賜ふ。（此時刀三振を打ちし事、家の記録にあり、南蠻鐵にて作り、鵜戸窟の神水を大阪に取寄せ、精神を籠めて三刀を鍛ひ、一を禁裡に獻し、一は伊東家に納め、一は陰の太刀と名づけ、永く子孫に傳へて家寶となすとあり。只今拙家に藏するもの右の一振にて、菊花の徽章と井上眞改の銘あり。）

眞改の刀を作るや、若し自ら心に慊たらざる時は輙ち地點し千鍛百錬意に滿つるに非らざれば之を人に示す事なし。故を以て出す所悉く一世の名作ならざるなし。時に鈍刀の流布するものあるは子孫其遺棄せるものを出して一時の窮を免れんとしたるが爲なりと云ふ。家に傳ふる所にては、眞改の子亦鍛刀の術を學ぶ。而も技遠に及ばず、奇峰と號す。此人眞改沒後其遺棄せるものを取り銘を打つて世に出せりとあり。眞改の後其子孫皆伊東氏に仕へ禄百石又は百三十石を給せられ夫々藩の要職（三代目の孫本藏は大阪留守居役を命ぜられたり。）に列せられ居たるにより家計に窮しての業には非らざりし樣に思はる。

眞改又傍ら陽明學を學び、深く中江藤樹の人となりを慕ひ、隔月江州小川村に至りて其教を受け、同地中野伯伯（霖水曰く、氏は先生の直門松下仲伯のことなり。）の

家に留る。常とせり。又嘗て藤樹の爲に大小二刀を作れり。其蕃山と相知りしは卽ち此時にして所謂同門同學の友たり。互に相推重せり。集義外書に曰く、「近世鍛冶は刀の精神をうしなひ、研は刀の利を亡す事出來の、是鍛冶と研との罪のみにあらず、武士の道を失てたさしむるものなり。（中略）剛ばかりにて柔なかれざるは石のかたきがごとくにて折つてきれず、柔過剛すくなきはほれをきらず。剛柔かれて精神あるを上作とすべし。是なきたび能といひ鍛にほひにあらはるゝ成べし。眞改云きたひは知なり。にへにほひは仁なり。きれは勇なり。上作は知仁勇の三德備るといへり。眞改は本武士なる故に古主より知行をたまはり鍛冶は物ずきにてうつことなれば、古作の法を守るものない。」といへり。父國貞は亦德義に堀部安兵衛武庸と親し、武庸討入當時佩ぶる所の刀は卽ち國貞の作なりと云ふ。蓋し眞改父子は尋常の工匠に非らざりしが如し。眞改又書に巧なり。遺墨あり。愛すべしとす。寛文十二年病んで大阪に死せり。

（附記）眞改の墓は大阪市天王寺區上寺町淨土宗重願寺内にありとの事末裔井上俊次郎氏報として前記朝陽氏の文別項に見ゆ。

三五、石川常安並同吉左衞門

日本の陽明學は吾が藤樹先生に淵源せることは天下の知るところなり。獨り肥後に於ける陽明學に關しては其の說區々にして一定せず。只北島雪山を擧げてその代表者となすのみ。巽軒井上博士はその著陽明學派の哲學に於て北島雪山の學問は陽明の遺書によりて感奮興起せるものにして江西學派と何等の關係なきものとなせり。また山田玉川氏は明治四十五年五月の雜誌「陽明」（大阪陽明學會發行）誌上に於て雪山派の王學系統は雪山の書師兪立德より傳承せるものなることを論述せり。偶〻熊本市に上妻博之といへる篤學の士あり。大正五年五月熊本修身硏究會席上に於て縣立熊本中學校長野田寛氏の「肥後の學風」と題せる講演中に於て肥後の陽明學は宮本武藏等の禪的武士道に胚胎せるものならんかといへるに疑を起し、爾來專心硏究に從事し、終に山崎貞嗣翁より貴重なる資料を得、又細川侯爵家文庫の記錄を讀み種々推敲の結果肥後の陽明學もまた藤樹先生の系統を引けるものなることを確信するに至り、大正九年十月「肥後藩之陽明學」と題する小冊子を發行せり。編者頃日之を畏友加納恒三郎氏に得たり。本章を草するに至りたるは一に上妻氏敎示の賜なりとす。

石川家記錄に「石川常安近江國浪人に而中江藤樹之門人に有之云云。」といへり。常安子なし。吉左衞門を

養ひて嗣となす。吉左衛門本姓は横尾、母は京都嵯峨大覺寺宮の坊官永田法眼亮智の叔母なりといふ。「吉左衛門もまた嘗て小川村にあり、藤樹先生に師事せり。」とは是また同家の傳ふるところなり。初め朝山意林菴の姪永田亮智に嫁して一子を生む。之を朝山次郎左衛門となす。正保三年十三歳にして肥州細川侯に召出さる。是に於て吉左衛門實父永田氏の囑を受け師傅として附添ひ肥後國熊本に下れり。時に年歯まさに三十二なり。偶、寛文九年十月六日藩主命して朝山次郎左衛門・北島雪山・本庄四郎兵衛・小笠原勘介等約二十名に對し、御暇を賜ふ。世傳へて陽明學禁止の命となせり。吉左衛門乃ち次郎左衛門と相携へて復た山城國嵯峨小淵村に歸る。元祿五壬申年正月十五日卒す。享年七十八。同所淨土宗稱念寺に葬る。子理兵衛寛文十庚戌年召出されて藩士に列す。

（參考資料）

石川吉左衛門の墓碑は稱念寺にありしも近年湮滅に歸したり。左に子孫遙拜の爲に設立せる熊本市山崎養壽院に存するものを揭ぐべし。

正面　忠勝院顯譽宗故居士
　　　妙光院永室壽爵大姉

石川常安、姓者源、氏者石川。寢病歿於近江國焉。其初有故而爲處士。横尾吉左衛門者、常安之嗣子也。降誕於近江國、而後居處移于山城國嵯峨、而棲焉。居無幾、同邦大覺寺坊官永田了智之子次良左衛門朝山齋養而爲子之也。有時乎肥後國侯就于封國、方是時從駕而至于其國、臨視官事。寛文九戊酉年見除秩祿。乃不歷時日、離國委擎。猶父與次良左衛門相俱復歸于山城國嵯峨小淵村。元祿五壬申年正月十有五日罹病死矣。則同國淨土宗稱念寺葬焉。

其婦者豐前國小倉之産也、姓者藤、氏者野間曰妙解公入于國之日未笄而至于肥後熊府。而後爲吉左衛門之婦。正德五乙未年八月三日寢病死矣。越府城之南岑于養壽院法…（以下不明）

孝曾孫　石川茂村　拜稽

石川家記錄

石川常安近江浪人ニ而中江藤樹之門人ニ有之候處大覺寺御門跡坊官永田了智之近親横尾吉左衛門、右常安養子と成。常安死去後近江より京都へ罷越候處、了知子次郎左衛門朝山齋之養子と成、肥後侯被召抱候節吉左エ門も隨從して肥後ニ下り候處、寛文九年十月六日御暇被下、卽晩御國立退候節吉左衛門儀從類殘置京都へ罷越、山城國嵯峨小淵村ニ居住、元祿五年申正月十五日同所ニ於而病死淨土宗嵯峨町北ノ山稱念寺ニ葬る

松山宗故と諡す。其子理兵衛十八歳ニ而細川侯ニ被召抱數年御役相勤、新地百石菊地・合志兩郡ニ於而賜り候。（上妻博之氏報）

略系

○石川常安――吉左衞門 實ハ橋尾氏――理兵衞 茂良――理兵衞 茂材

―李平 茂次――源之進――逸助――壽提彦 重照――清

―茂足――茂房 當代 今八代町ニ住ス

（上妻博之氏報）

按ずるに、北島雪山等肥後を去りし時未だ十九歲の青年なりし山崎半彌勝政といへる人の遺稿に晚嘯集といへるものあり。今僅かに一冊を存するのみ。中に自譜錄といふ自叙傳ありて「十有八歲而業受藤樹先生之門下。始而聞心術之要樞矣。」の語あり。上妻氏以爲らく肥後の陽明學もまた中江藤樹先生の系統に屬すること明かなり。然れどもその學脈を傳へたる人の何人なりしやは氏名を記載せざるを以て知るべからずといへども吉左衞門を措いて他に求むべからず。といへるは頗る肯綮を得たりとなす。編者また山崎子の「諭同志狀」並「石・山議論」を熟讀するに藤樹先生を呼ぶに先師又は藤夫子を以てせるあり。殊に格物の解の如き純然たる藤樹先生の思想に外ならず。されば肥後の陽明學が藤樹先生に淵源せることは毫も疑を挾むべからざるなり。

吉左衞門退去後に於ける肥後藩の陽明學者は一掃されたかと云ふにさうではない。今から推察して見れば御暇の出た時に、同人間に強硬派と溫和派とあつて、強硬派の人丈けが御暇となり、溫和派の人々及び幼年者は表面廢學を扮うた樣である。山崎半彌の自譜錄中に、「以官暇即會同心之友切磋已十餘年。」とあり。又た其の遺稿中に延寶六年に作つた「諭同志狀」や延寶八年に作つた「石・山議論」を見ると同志の人々櫻子を先達として、絕えず講習して居たことが知られる。」といへり。而して櫻子とは淵岡山の門人櫻井半兵衞なることは樋口覺書に左の文あるに依りて明かなり。「從京都之書翰」と題せる一節に、

頃日肥州より學生上都每日得閑話候。於彼地櫻井氏之憤發厚意至る儀筆頭ニ難申盡候。第一拙者共浮氣しつまり申樣ニ覺此度の多益と存候。

といへり。以てその講學の連綿として絶えざりしを知るべきなり。

因みにいふ石・山議論中の石子とは恐らくは吉左衞門の子理兵衞氏の事ならんか。

（關係書類）

自譜錄

勝政、名者半綱、字者謹佐、藤原姓、其先者中國人也。自號玩水軒矣。父者山崎氏貞親、母者眞下氏之女也。於肥後國隈本生。于時慶安四辛卯歳正月二十有七日未時也。兒時、多病而苦於父母。性靜而不好戲遊。七歳之春二月、母竹女受勞欬之病、療養雖盡心、無少減、而竟同三月二十有五日逢大患。誡號云眞性院宮月妙等昭信　離懷中兄弟、不堪哀慕、哭血泣、更無歸。翻同月二十有八日、父貞親依君命、押涙捨兩子、趣旅途、而到江府。兄弟者遺閭因、不日而父者册遠境、隔千里、無所措手足。祖母安竹兩氏抱之矜之、再滿春秋、而貞親歸鄕而得悅也。幼稚而性好書籍、讀國史而爲樂。成童而特孝經論語大學中庸而尊之。十有五歳之春正月十有八日、隣鄕有出火而人集、爲防友家之火災到、彼而歸路逢狼狽之族、互交其怒、彼被疵二箇所、群行隔逃而失其與黨、歸家療養超月復本矣。貞親依風疾常患行歩七歳也。十有七之秋九月、父之疾病也、雖莫醫而不瘳焉、其疾莫全治、而同七日逝。大哀俯天伏地、哭泣雖欲斷魂、更莫由服喪如法、育兄家、受祖母之介保、而長成。十有八歳而業受藤樹先生之門下、業受一字、當倒置始而用心術之要樞矣。初聽則欲得其人、得其人則欲受其語、受其語則雖欲自得於其意味、其道廣大、其理深奥、而不克窺藩籬、且夕奪于師友、而探自疾、見他病、切磋而終日。然十有九之冬十月初七日、師友分散而請心疾之殘友、僅二三子而已。憂師友之別、三日絶食、二三子疑請心疾、切磋有力、而雖猶不曉遺教、所受有異同、而一向慕洛友。茲歳寛文九年己酉十有一月二十有七日、始附微祿受書職、翌年加於江府之供奉、而七月五日、道途經信州木曾之嶮阻、到武州矣。今年十有一月二十日、祖母竹女終去、於江府聞訃音、而哭哀將傷性。吾歳二十也。從幼時至冠歳、何哀慟哭泣之累、到如此乎。命而已。隨俗葬封諸浮居之手、非無遺憾、哀哉道之廢。吾見此一帖、不覺懷舊之涙沾袖。嗚呼、而勤役無恙、而翌年五月晦日、立江府、隨君歸國。明年又依命於江府之供奉、二月二十有三日、發隈府、到武州、而勤役無欠事。翌年六月十有四日、立江府、從君至濃州之舊路、歸肥州。太守君明年春二月十有四日、發駕棲江城、御臣者留國而在家。此秋七月依官務、毎日戴星辰登城、及黄昏退休、何餘官職不當依之得吏事之賞矣。秋九月君歸國、而勤役莫遺漏。明年春二月十有三日、依命供奉到江府、官務無欠。明年依宿願、請參宮之暇日、先于君五日、八月十有四日、出江府、詣大神宮、直到洛陽、九月十日始拜謁于京

師。而與心友話舊情、忘世慮、五日五夜。從江府辱蒙嚴命、歸帆著隈城下九月二十有四日也。此間累歲、勤書寫之公用數卷、以官暇即會同心之友、切磋已十餘年。然幼稚之時、夙傷在右腕、而行年次第衰、書業不能叶心。且亦貧窮、而難育倍僕。因茲欲致勤役身滯於林間。報。咸相寄議拘留、告曰、敢向明時、輕紳綏、從勤勞乎、祗緣多病、欲乞致役而已。到此屈理而無言。因以延寶五年丁巳冬閏十二月十六日、上書尙奉請退休。同後臘月二十有八日蒙尊命曰、依病貧雖乞退休、爲病無欠事、平日勞勤委身之旨趣、依及嚴聽、加稱倍祿御云云。謹承命、辭無語、僅上述謝言。同二十有九日、獻乾魚以拜伏矣。明年戊午四月、受命書寫於小野篁之題字之詠集一卷矣。同六月二十有八日、始於尊前書御許諾。延寶六年七月、君駕發肥國到武城、同七年八月歸肥國御矣。同八年七月十八日、扈從君駕而發肥州、赴於武府。到大阪旅途可經於信州碓氷坂給云云。依驛路險難、減從者之員。故城貞福與我可嬰東海道義定矣。故八月朔、於江州草津拜送於君駕赴東海路。八月十有一日著江府。升駕十有三日入武府。勤事莫欠。茲歲嚴有院殿薨。五月初八日也館林相公代立。有將軍宣下。故列侯催中樂大宴會矣。大君即十一月廿一日廿五日有兩日之宴。從上大老下至商人、皆賜以饗應珍好。家臣各賜以襦袴與綿衣、又有差矣。三齋宗立卿之譜三策、使白元草爲、命三侶翟而寫之。以與之於行孝一策得以書之。亦或人齎持家君之系譜一冊矣。及尊覽使我寫之。延寶九年正月十一日、吾以沈痾之病、求良醫用藥石。憔痛三十日、大半得驗。同年四月十九日、大將軍以阿部氏爲使節、賜歸國之暇。拜授於數品之賜。馬一匹・小刀來國光代八百貫、駿銀五十兩、同月二十有九日發江府、五月二十七日著御肥國。勤役無欠事。同七月五日伯父貞德賜秩二百石稅米。爲大目付。同年十二月以座列置於使番之上。令知郡國諸般之勘定矣。十月以延寶之年號改元于天和。於江府傳之肥國以十一月朔日。天和元年也。天和二年二月十五日、次加祿五十石賜于兒。今年有江府供奉之命。三月六日發光駕我即附休暇。三月二日祖母安女、病痾。眩暈時發吐逆亦繁。至霜月止。七月十八日姪千世以熱病至十一月痊。八月十二日嫂風疾、同月廿日終焉。天和三年二月改元貞享矣。貞享元年三月十日、尊駕發肥城、同十四日到于鶴崎。同日解纜出龍舟。同二十日到大阪、翌日經平方路到伏見。四月六日昧爽著江府。以爲供奉勤役。無間斷矣。貞享二年四月十日、松姬君掩粧。同廿五日以上使戶田城州賜歸國之暇、且有數般之賜物如例。同五月廿二日發江城、同廿九日到參州赤阪驛、大君患痢疾、留此兩日、六月二日申刻發赤坂到岡崎驛寄宿。以次同十日到于大阪、同十六日龍舟入于鶴崎、同廿一日歸肥城御矣。我又從而著鶴崎。自此地以命先發鶴崎、十九日著隈本矣。同年九月十有一日賜家宅之地。同十四日獻乾魚以拜伏矣。以十月四日徙家。伯父貞德亦同矣。

（附記）　貞享三年三月廿五日歿、享年三十六、葬於熊本市外橫手村長國寺。法諡淸雲院淨春。

諭同志狀

區區近來胸膈痛患日重、且脫肛與痔疾時發、益疎愈遠矣、嚴冬漸謝、向陽春、胸裏之愁怨、何敢謂乎、竊聞足下日進、二三子之會不衰、極幸、極幸。區區依病患、久不受誨諭。同志之訪稀、而難得交修之益、自暗自隨、然幸良知未墜地、故時晦時明、晦明俱以漸漸獨樂、誠先師之遺恩也、可仰可信。頃審竊窺足下之氣象、性俊傑高才、而志道厚、植根深、有志及天下、而營々終日無厭、何幸如之哉。誠先師之所願者也。志道而孰不尊之乎。我亦憶焉者也。近世道衰、莫識實理者、以文字為學久矣、哀哉。今世猶不及孟軻之時、孟子之時者、人君闇、萬民逢虐政、而戚々。故孟子教以仁政、則闇夜如得燭、而民得為悅乎、故有事半而功必倍之語。而已。今世者卻而人々為文學者多、才逕而強、辨朱陸之異同、故傲氣日募、道益衰也。豈以言語可諭之哉。無成者卻而生害乎。惟化以德而已。德得也、所得天之理、所謂良知良能也。學致良知耳也。如何俟人乎。道之廢興雖在人、實有命也。有德之人以受命也、致良知則所以教垂於萬世也、良知者天地萬物一體之理。致者盡性至命之事。何有餘蘊哉。良知之學者格物而已。格正也、物事也、事五事也、貌言視聽思而已。於五事格不正、而歸正、是聖賢相傳之祕藏樞範也。於其學之、以文會友、以友輔仁、近時同志之會、未見輔仁者、發先賢之語以私見裁之、氣合則相感去而為益、裏面駁雜之塵芥、無意自掃除之、實足下之所患者也乎。此罪雖在二三子、實繫於足下矣。俊豪實志、於肥國舍足下亦誰哉。然非思道求益汲々人、如何者全自放下、而不遺毫髮、則同志相和誘掖、悅而歸之。足下之德化日日增長光輝及四方矣。未聞足下放下於一事者。似脊々于外、而遺於內、希反之矣。昔守兎者有兩人。一人者好博奕、一人者樂文書、玩奕書、終失兎。其所好雖有是非。及其失守者、其罪同。事外則其言雖曰或實理、或支離、何分以寸乎。自明德則德不孤、自有相助者乎。任道垂教者、千古聖賢之志。自然之化有德、則就之必在何意之哉。深可思先師之志。自除卻好惡之念、而為省、內汲々焉、孳々焉、則庶幾有小補歟。無小補者卻有益於我歟。書者不盡言。言者不盡志、不悉。誠恐頓首。

竊臘中浣日　延寶六年書之、不贈而止之。

石山議論

石子一日訪予疾病、暫語生平。既及議論、彼子志在山林。君子之道至大、雖曰一生委身心勵功、非可至君子之地位。然則何益有之。卻而可成害乎。潛身於林間者、無可無不可、無益、亦不可有損乎。答曰、當時人情甚下落、無由迪於人。如足下之所言、潛身於山林者、身心共以可為清潔。予志亦有似之者。前稔詣于天照皇太神宮、綴和詠、而獻拜祈誓而曰、世乎遠茂婦、爾加比乃美千奴須奥奈良者阿多奈久多過稱

和加多末乃緒與世を思ふ類の満ちぬ末ならば、あだなく絶えむ我が玉の緒よ（編者）。此與志一般乎。石子曰、否。思世之志、都是何物哉。藤夫子之於道、雖以利導於人民化垂於萬世、吾志願非然。欲人與我兩相忘。答曰、成己成物之功、豈吾夫子而已乎。堯舜終身之患、是何患乎。不曰欲己立立人。欲己達達人矣。聖謨賢範、凡何爲而述作哉。是何據乎。石子曰、以櫻子論之、爲繼藤夫子之緒志、役々於外、而朦々於内矣。甚以漏多而已。爲他人爲益。夫執援爲乎。都成害而已也。以爲日附。曰、見於櫻子止之乎。石子曰、全體以爲惡。曰、其所以爲惡者如何。曰、無以他可目之。曰、然則何不格乎。格之格之。彼無益有益此。何不格之乎。請試論之。夫櫻子全體、以惡不可目之。目之則爲下愚乎。非下愚。未有非下愚而滅性情人者矣。不曰性善也乎。見櫻子之未委也。櫻子所以爲尊者志而已。今二三子、憑此道所以切磋勵功者。非彼子之誘掖而何乎。彼子所以爲愚者機智而已。勿爲夫庶幾乎。機智用事。則他受之以爲毒氣。足下看之而曰全體惡。勿謂全體惡。誠豪傑有益之友也、惜哉。忘都先學之思而自下。全放下而不除自己之病矣。以彼子比物。縱令如河豚魚。河豚之爲物。肥滿而其味淸絶淡平而有毒。故人知有毒。容易不用之。一知其味者。滿腹而不飽。一當其毒者。終身而不食。能用之者。去其毒用之。終身用之。無有害。而養心體有益。嗚呼使此魚勿此毒。饗王公而不陋。不能入於下民之口腹。可礎尤者也。足下者以河豚全體爲有毒乎。石子云、禮曰、聞來學。未聞行而教者。聖者如此。況其下乎。曰、是同志之罪也。櫻子自不居師範之位。故以文會友。以友補仁之心乎。石子曰、然則臨會座。全放下而不求交修之益於會座、安先學之地、外以誇同志。内以不能盡於親子妻妾奴僕之愁。曰、此暫勢之不能已而已。噫。學者溫恭自虛。而以寡欲爲主哉。請以此論記而可送。櫻子不可無省悟之意思乎。我立兩間裁之。誠恐實惶頓首。庚申稔三月遊同門山卑子誌焉。庚申者延寶八年也。（山崎子齡正而立）

三六、池田子

藤樹先生の門下中池田子と稱するもの二人あり。その一は筑州の人にしてその二は攝津の人なりとす。左に之を解說すべし。

其一

池田子名は與兵。藤樹先生年譜寛永十三年の條下に秋先生京師に行き舊友池田某の筑州より入洛せるに會し、又始めて島川子に遇ひ易を談論し月を閲して歸れることをいへり。また大洲町村上長次郎氏の所藏に係る書簡眞蹟斷片に左の一節あり。

一、妖賊之島原濫軌令落城之旨定　玄蕃樣兵部樣もはや其元へ御下着可ㇾ被ㇾ成と奉ㇾ存候。如何貴樣御一門中打死ノ衆多御座候哉無御心元奉ㇾ存候。當地にて八落城之刻ノ樣子一圓不ㇾ存無御座候。少手眉度存候。（本全集卷之二十、第六十二頁參照）

といひ、その跋に「此藤樹中江先生所自書以贈其門人池田某生也。」といへり。按ずるに島原の平ぎしは寬永十五年二月にして先生三十一歲小川村にあるの時なり。文中玄蕃樣・兵部樣といへるは加藤玄蕃・大橋作右衞門とていづれも大洲藩樞要の地位にある人々にして「其元へ御下着云云。」は有雨士が兵を率ゐて筑州に下れることをいへるなるべし。下井小太郎翁の談に「大洲藩主月窓公は何時にても命令一下直ちに出陣し得べく準備を整へられしもその事なくして止みたるなり。」と。惟ふに先生近江にあり。遠隔の地なるを以て既に出陣せるものとなしてかくいひおくれるなるべし。而してその後文等併せ考ふるときは池田子なるもの大洲と何等かの因緣ありしなるべく、先生との親交淺からざりしも故ありと思はる。

池田子早く隱退の志ありしと見え、先生の之を戒められしことは前揭村上長次郎氏所藏の書通にまた左の一節あり。

一、はや御牢人（ママ）の御志御座候旨沙汰之限にて御座候。先々御堪忍被ㇾ成御内室などをも御取結被ㇾ成御尤ニ存候。大不孝ニ御おちいり不ㇾ被ㇾ成樣ニ御分別御尤ニ奉ㇾ存候。（同上）

先生の慶安元戊子年三月十九日池田与兵に與へられたる書通に「島川丈如何被ㇾ成候哉。」といへるにて年譜所載の池田子と同一人なるべきことは既に徵餘篠原氏の道破せるところなりとす。

（疑義）　年譜所載の池田子を本全集卷之二（文集二）並に艸稿集等すべて藤田子に作り川田雄江書年譜また之に從へり。是非いまだ知るべからず。暫く疑を存す。

其　二

年譜寬永十四丁丑年の條に是年池田氏來て學を問送行の詩ありといひ、文集二に送池田子（丁丑之春）文に「池田子有ㇾ故以ㇾ義赴於江戶。因訪陋巷。淹滯一二日。講論大學之心法。而有輔仁之益。愚雖ㇾ不ㇾ有朋自遠方來之德。尤足ㇾ喜ㇾ得莫逆之樂也。」といひ、岡田氏一本頭註に池田子者攝津人といへるもの卽ち是なり。

三七、島川子

年譜寛永十三年の條下に、先生京師に在りて始めて「島川子に遇ひ、易を談論す。」といひ。文集二に同年の作として送二藤田・島川兩生一の詩あり。その序に、「會二藤田子於洛一而又邂逅逢二島川子一皆心友也。」といひ。而して岡田氏一本頭註に、島川藤右衞門黑田甲斐守家士。といへり。また同文集に寛永二十癸未年秋酬二友人島川子一の詩あり。本全集卷之十八に戊子夏與二池田子文一に「島川丈如何被レ成候哉云云。」の文字あり。倶に參考とするに足る。由來先生は常に門人を遇するに心友または同志を以てせられたるのみならず。こゝに兩生とあれば、門下の士たること明かなりとす。

（附記）文集松下氏本に島本に□（不讀）二川島子一との傍記あり、或は島川子の誤記にあらざるか。但しは別にその人ありしか。今明かならず。

三八、山脇氏

慕賢錄に藤樹先生歿せられし後、中川謙叔以下數輩蕃山の薦によりて、備前に事へたることを載せたる中に、「山脇佐左衞門 行狀聞傳山脇左右衞門に作る。 山脇亦右衞門食祿各貳百石。」といへり。

三九、又四郎と益田紋次〔益田義則〕

大溝町倒扇原田知近氏傳來古寫本雜記藤先生の門人衆と題せる條下に、「又四郎東江州マシタの人。」とあり。また同書に於二小河一名月の會ありしに又四郎にかはりて讀玉ふとありて「見るやいかに撰ぶかたなく照月の浪ある水に影さゝじとは。」との歌を擧げたり。小島芦穗氏は縣史に精通せる人なり。說を爲して曰く、「マシタ」とは滋賀縣下蒲生郡北比都佐村大字増田の事なるべく、同地は今尙「ましだ」と稱すといへり。また、志村竹涯著書院記事に「益田紋次義則蒲生郡益田村人、今の喬可は五世の孫也先生乙酉雞旦詩の眞蹟を所持す。」といひ、巽軒井上博士祕藏に係る餘姚學苑には文政庚辰三月端午錦城老人大田元貞の撰に係る題二藤樹先

生眞蹟文あり。曰く、「淡海益田喬可五世祖義則。從學先生。家世藏其乙酉雞日詩。先生眞蹟世已希有。則是天下之鴻寶也。可不珍重乎。」といへり。然れども前記又四郎と、こゝにいへる益田紋次義則とは一人なるか。將た二人なるか。未だ明かならず。〔益田義則については本全集卷首再刊の辭にも其の他の處にも屢記述しおけり。猶本冊末尾再刊追錄參照。（藤陰）〕

四〇、善住治郎作

志村竹涯著書院記事に善住治郎作と題せる條下に「直義號廿水。湖東益須郡森山驛人。（今の野洲郡守山町）先生より明明德の眞蹟を拜受して今に傳ふ。」といへり。家筋並子孫今詳かならず。

四一、三崎佐太郎

志村竹涯著書院記事に、三崎佐太郎と題して、「伯應。湖東益須郡小田村の人。」と識せり。按するに今滋賀縣野洲郡北里村大字小田に三崎英一といへる人あり。世々襲名して佐太郎と稱すといふ。恐らくは此の人の祖先ならん。事蹟詳かならず。

四二、法勝寺

本全集卷之二十に與法勝寺二書あり。既にその附記欄に詳記し置けるが如く天台宗眞盛派本山西教寺に管長たるものは同時に法勝寺の住職をも兼ね來れるものにして、こゝに法勝寺といへるは住職その人を斥せるものなり。殊に「御同志御中」の文字あるによりて考ふれば、先生の門下中方外の士少からざりしを察すべく、熊澤蕃山の元政上人に於けると同じく面白き對照をなせり。

（附記）編者嘗て道歌之註と題する端本一册を反古中に得たり。紙質、書風倶に先生時代のものに彷彿たり。大正十一年四月東正堂翁また藤樹先生古歌問答（藤樹先生の名を冠するは當らず）一册を得て予に示さる。之を一讀するに全く同一にして前者に比し末尾二三葉を加ふるの差あるのみ。而して全編佛語を假りて陽明學の思想を敍述せるものなり。左にその一節を摘錄して參考となす。

日にそへてかげはかわれど（まゝ）大ぞらの
　　月はひさつにすみまさりけり。

大ぞらな心に比し、月其良知に比し、かげかわるを身のおもかげの老少に比してみるべし。佛の本覺・眞知の如來をいへるは人々の良知の事なり。眞知の月ともいふ。良知は万古一日なれば其良知にいたる人は（まゝ）少年にして若からず、老年にしておとろへず、死してほろびず、誠に〳〵

日にそへてうつりかげかわれども只我ひとりすめり、天地万物秋に老て月なをすみまされるがごとし。

　　しばしこそかげをもかくせわしの山
　　　たかれの月は今もすむなり。

わしの山は釋迦佛のいませし靈鷲山なり。たかれの月は佛をさしていふなるべし。今是を私が歌として詠（まゝ）はわし山を我が身に比し、月を良知に比し、意欲の光をかくすを雲の月かげをかくすに比し、山のふもとは雲にくらけれども雲より上の高根はいつもさやかなるを凡心にも良知あるに比してみるべし。凡心のいま□いてみれば聖人の良知あるべしともおもはれれども（まゝ）さげどもうするかず、くりにすれどもくろまざる本體はいまもすむぞ。人つれにすまじき事をしてあさにくやしきは情欲の雲におゝはれて一たんくらけれども其よくをさげ其雲はれて後高根の月あさのちりをてらすによりてくやしくはづかしき心有。其ひかりをはじめに用べき事君子實學なり。

以上の文は法勝寺に關係はなけれども、先生の門下に宗教家ありて、佛教の方面より良知の學を研究せるものありしことを、立證するの參考となるべきを以て之を掲げたり。

四三、岩佐光伯

岩佐光伯通稱太郎右衛門近江國高島郡領家村（今は川上村大字濱分の一部）の人なり。家世々太郎右衛門を以て稱す。初め光伯の祖父廣齋領主佐久間勝之に仕へて用人役となり父光次家老職に拔擢せらる。同家傳來熊澤蕃山の書狀に岩佐文太夫宛のものあり。而してその系譜に文太夫なる人を載せざれば、今的確に記載する能はざるを遺憾となす。編者嘗て岡田季誠氏の事蹟を調査せんと欲して、同郡青柳村大字青柳淨土寺に抵りしに、同寺に祀れる岡田家の位牌中圖らずも左の一基を見出したり。

　萬治四丑年
養安院惠觀智光信女
三月八日

施主　領家村　岩佐氏
圓光常智大姉

按ずるに同寺過去帳の識すところに依れば、養安院惠觀智光信女は熊澤蕃山の妹野尻美津女のことにして實に岡田季誠氏の母堂なり。而して圓光常智大姉は恐らくは季誠氏の同胞にして岩佐氏に嫁し、その母の位牌を作りて之を菩提寺に納めたるものならん。末裔岩佐定一氏の報に妙性院圓光常智大姉は元文五申八月三日歿との事なれば、季誠氏の卒去に先つこと八年なりとす。

（附記）因みに同家傳來寫眞先生書狀に居相瀬三郎宛のものあり、藤樹先生墓所云云の事を載せたり。（藤樹先生補傳第二十六項參照）而してその居相某については傳ふるところなし。

略系

○廣齋（岩佐太郎右衛門　佐久間大膳殿に仕官）――光次――光伯（岩佐太郎右衛門）――伯勝（西村助右衛門　松平若狭守殿に仕官分にて播州明石に住居　又江州に歸る）――長一（堀田備後守家來分にて江西の領家村に住）――通種――○――○――○――定一（當代）

同家傳來の遺物左の如し。

一、夙興夜寐箴圖　　一枚
一、藤樹先生詠草（中川謙叔より岩佐光伯におくれるものゝ寫。本全集卷之十七倭歌三補遺參照）　　一枚
一、大學考　　一冊
一、明德圖　　一冊
一、大學寫本　小本　　一冊
一、橫笛　傳藤樹先生所持　　一管

一、横笛十二調子之名目並笛穴之圖　一枚
一、横笛七穴拾貳調子配之圖並五調子之名目　一枚
一、熊澤息游軒先生書通　岩佐文太夫宛　一通
一、中川權左衞門謙叔書通　二通
一、中江常省先生書狀　居相瀨三郎宛　一通
一、中江常省先生書狀　岩佐太郎右衞門宛　一通
（原據）岩佐氏系圖。高島郡誌。

四四、中村仲直

中村仲直は所左衞門と稱す。近江國高島郡五番領村（今の安曇村大字五番領）の人なり。昔近江源氏佐々木氏の臣山崎兵庫守五番領村に居る。高島七頭の一たり。後姓を中村と改め農に隱る。仲直實にその裔なり。仲直藤樹先生と年歯相等し。嘗て孝經の講筵に侍し其の聽き得たる所を筆錄して一卷となす。寛文五年十二月十九日卒す。享年五十八。甥伯常四郎右衞門と稱す。孝經講義聞書其の他同氏の筆寫によつて今日に傳はれるもの尠からず。弟季貫作禁右衞門と稱す。兄と共に常省先生に學ぶ。亦同氏の筆寫に係る先生の遺著多し。享保六年大溝分部光命侯に出仕し、光庸公に歷仕す。其の子德勝、鸞溪と號す。家名を承け新に邸地を賜ひて光實公の侍講となる。その學堀川學を宗とし安原霖寰・伊藤東涯等に師事せり。爾來奕世分部侯に臣事す。今伯常の後裔を喜六と稱し、季貫の後裔を德通（滋賀縣高島郡大溝町大字勝野）といふ。兩家とも先生に關する遺書を藏するもの頗る多し。
（原據）系圖。舊記。孝經講釋聞書の奥書。近江人物誌。

略系

中村喜六氏の世々奉祀せる神主

顯曾祖考　仲實府君神主(一)

陷中に　故中村新右衛門諱中實字以下不可讀

顯曾祖妣　吉村孺人神主

陷中に　故中村正室吉村氏夏娘字清受神主

顯祖考　伯常府君神主

陷中に　故中村新右衛門諱平字伯常神主

顯　考　厚齋府君神主

陷中に　中村厚齋諱景君神主

顯　考　脩齋府君神主

陷中に　義質字新右衛門神主

尙此の外に神主四基あり。之を略す。要するに中村氏は明治十七八年頃に至るまで儒式を以て祭祀を行ひ

しものなり。

藤樹先生に關する藏幅並遺書。

（甲）　中村喜六氏所藏の分

一、中江常省先生書狀　一通

一、孝經藤樹先生語聞書之寫　伯常筆　一冊

一、藤樹先師之花翰詠歌　伯常筆　一冊

一、藤樹先生全書（文集）上下　二冊

一、藤樹先生書簡集　一冊

一、藤樹先生別集　一冊

一、大學中庸論語　合本（藤樹先生之解）　一冊

一、古本大學全解（漢文）　今散逸す（東正堂翁此書を底本さしたる寫本を藏す）　一冊

一、古本大學旁訓　今散逸す（藤樹書院及東正堂翁此書を底本さしたる寫本各一本を藏す）　一冊

一、岡山先生書簡　今散逸す　三冊

（乙）　中村德通氏所藏の分

一、翁問答　斷片　一枚

一、左　傳　傳藤樹先生眞蹟　一幅

一、誠　中江常省先生眞蹟　一幅

一、常省先生書簡　一幅

一、藤樹先生全書（文集）上下　二冊
享保庚子中□中村作樣右衛門季貫謄之
一、藤樹先生書簡集　季貫筆　一冊
一、藤樹先生別集　一冊
一、藤樹先生卒去悼之文　慶安元年子八月　一冊
一、藤樹先生年譜　季貫筆　一冊
一、藤樹先師御行狀　季貫筆　一冊
一、藤樹先生事狀　季貫筆　一冊

四五、安　原　伯　正　附　仲武・霖寰

安原伯正は近江國高島郡南市村（今安曇村大字田中の内）の人にして世々權兵衞と稱し、膳所領の稅官たり。寛永四年を以て生る。藤樹先生より少きこと十九、贄を先師の門に通ず。事蹟詳かならず。天和二壬戌年五月三日卒す。行年五十六。その子飾齋孫文煥等常省先生に師事したりしや否や詳かならざれども、常省子晩年京都に在り家計不如意なりしを飾齋父子の庇護により歸り歿せられたること行狀聞傳に見えたり。その他藤樹書院の維持修覆並遺族に關し常に同志と謀りて配慮を怠らざりしもの丶如し。近世に至り權兵衞の三男に安原喜藏あり。別に一家を立つ。明治二十五年有志と謀り、杉浦重剛翁の稱好塾の後援を得て月刊雜誌「藤影」を發行し世道人心に資せんことを圖り、また書院の保存等につき有志と企圖するところ少からざりしも不幸にして天年を假さず。人皆之を憾とせり。弟に太一あり、家を嗣ぐ。子なし。滋賀郡木戸村木戸秀成の二男啓次郎を養ひ

てその女に配す。大阪市西區阿波座下通一丁目三番地に住す。

伯正の弟に治兵衛孝光あり。別に一家を立つ。其の子に淺右衛門仲武あり、常省先生に學ぶといふ。その事蹟伊藤東涯撰碑文に詳かなり。墓碑に刻せるもの即ち左の如し。

（附）仲武

翁諱小治。字仲武。稱淺右衛門。父曰孝光。母田原氏。世居江州高島縣南市邑。幼而孤。而鞠于伯父伯正之家。踰月而伯正亦逝。相其遺孤以克有立。伯氏家世掌邑事。翁常代任其職克理。翁天性温厚謙卑。自牧好學。亹々不倦。晩年兼醫術。人稱其能。乃至書算衆技。靡不綜練。常誡子弟曰。汝曹爲學。須要求其放心。寧失不文。愼勿流俗學。其所立蓋如此。前時中江子隱居小川邑。專倡新建之道。翁私淑其旨。誘掖後生。其學行蓋有所淵源云。娶熊谷氏。子男二人。長曰貞平。嗣伯父伯照業。次曰義平爲嗣。女二人。早夭。藤氏原田氏其婿也。享保十七年壬子十一月初六日卒于家。享年六十四。葬于村南滿願寺故址先塋之左。貞平嘗從予受業。今事松平侯于信之上田。掌文學事。近寄書幷行狀曰。願有以碑于墓也。予嘗遊其邑。而熟其爲人。及其請也。不得辭。於是掇其大者。俾鑱之墓上云。明年癸丑長至日京兆伊藤長胤誌。

男　貞平　建
　　義平

受業生若干人捐貲助刻

霖寰

霖寰または省所と號す。元祿十一年戊寅三月四日南市村に生る。父は仲武。初め伯父伯照男子なきを以て養ひて子となしその女に配す。霖寰幼より聰敏學を好む。享保元年三月同志相謀り始めて夜學會を藤樹書院に開くや安原文煥中村季貫等の同志と共に經義を攻究す。同三年二十一歳始めて京都に伊藤東涯に見えて教を請ふ。同六年八月東涯子弟を率ゐて藤樹書院に來謁したるは一にこゝに因由す。また時々歸省して古義を郷黨朋友の間に講習す。是より堀河の學風郷黨を風靡し高島の郷學に一新紀元を劃するに至れり。同十七年二月信州上田侯其臣井上宜休を遣はして霖寰を招聘す。霖寰既に出でて他家に嗣たるの故を以て之を辭せしが、養父伯照曰く、我が一門の子弟未だ藩府に仕ふるものあらす。汝既に業成り聘せらる。是れ父母の榮とするところ宜しく往いて仕ふべしと。霖寰是に於て聘に應じたり。時に年三十五。往いて歡良公に事へ江戸に侍講す。爾來節に從ひて上田に往き或は公の參覲に陪從して江戸に赴き、常に老臣以下近臣を集めて論孟の古義を講じ循々として倦むことなかりき。享保元文中東叡淮三宮公遵親王召して經史を講ぜしめられしことあり。安永九年十月二十七日卒す。壽八十三。著書並

詩文にして藤樹先生に關するもの藤樹別集一册並謂藤樹先生之墓・藤樹先生書院記等あり。其他與窓隨筆・客館漫錄・先侯累世實錄・詩文若干卷あり。また東涯の釋親考二卷を校正し、之が序文を撰して刊行せり。その人と爲りに就いては桂金溪は「溫厚和順。雖造次顚沛之際。寬綽從容。未曾見惱色。不衒聲譽。」といひ、藤善詔は「天資質直敦厚。不與物忤。交友寬篤。」といひ、男龍淵は「先君天資溫和敦素。恭謹純正。事親孝。治家嚴。奉身節儉。與人仁恕。」といひ、奥田三角は「君氣英才大。日夜研精。勉而不怠。進而不已」といひたり。此の數氏の言ふところにより概ね霖寰の爲レ人を知るべきなり。

編者竊に以爲く霖寰は藤樹先生學徒の家に生れたり。將にその德望と學殖とを以て專ら良知の學に從事したらんには必ずや江西の學一異彩を放つものありしならん。然るに霖寰何の見る所ありしか、初め藤樹書院に會合して同志と共に學に從ふところありしといへども、忽ちにしてその家學を捐てゝ伊藤東涯の門に奔れり。而して孜々としてその學ぶところを鄕黨朋友の間に扶殖せんことを圖れり。當時近鄕の同志等相謀りて藤樹書院を修覆し、祭祀を營み、時々書院に會合し講學に努むるところありしといへども、霖寰の德望と學殖とは同志の景仰して措かざるところ、而して霖寰先師の講堂に於て古學を講じ以て先師に背く所以なるを曉らず。享保六年八月東涯の來謁したるが如きも實は霖寰の方寸に出でしや論を俟たず。その堀河學の爲にせる至れりといふべし。之を岡田季誠が先師の遺著を蒐集するに渾身の努力を致し終身敢て渝はるところあらざりしと同日の談にあらざるを知るべし。然りといへども當時陽明學が危險の學とせられて爲政者の間に誤まれ易かりし時代に於て古學を唱道して高島の鄕學を一新し二百年間文敎の基礎を固めたるは霖寰の力なり。かくの如く霖寰は先師の學徒にあらざりしといへども而も先生を推尊して「三代以上の人物」となせるが如きまた藤樹別集を編し、或は藤樹先生書院記を作り、或は詩に書通に先生に對する敬虔の念の掩ふべからざるものありしは、遉がに門下の血を享けたる士といふべし。その家學を改めたるについて奥田三角の記するところを見るに「吾友省所安原君。江之高島郡人也。其旁邑有二藤樹書院一。近八九十年前有二藤樹先生居一焉。其學亦雖レ不レ免三於出二後世之見一。其行義足レ表二子一方一也。故君之宗族諸老皆嚮レ學焉。君長二乎其間一。獨疑二乎後世之學一。旣而負レ笈上レ京。與レ余同事二東庄(マヽ)先生一餘二十年一矣。君氣英才大。日夜研精。勉而不レ怠進而不レ已。時歸倡二道其鄕一。左近邑人悉棄二其學一。而聽二於君一。曰。若乃聖人之道也。又飭二其子弟一曰。若乃聖人之徒也。至下於或曰使二藤樹先生在一焉。亦聽三子講二古學一。必將中訢々然上也。呼。化之速二於置郵一。蓋躬行之所レ致乎。」といへり。その先生の學を以て後世の學となせるが如き、是卽ち古學の見のみ。霖寰が未だ東涯に見えざりし以前に於てかゝる識見を有し而して東涯の門に入りし者なるか。果して然りとせば霖寰の思想は東涯の敎を俟たずして東涯の學と契合せるものにして恰も先師の思想が陽明學に接せざりし以前に於て陽明の思想と一致する所ありしとその歸を一にするものなり。聊識して後考を俟つ。

略　系

主として同族安原七右衞門氏保管に係る宗家系譜並に笠井劼氏著安原霖寰に依る。

伯知
- 伯正。（權兵衛。天和二壬辰年五月三日卒。行年五十六。）
  - 節伯（久六。寛文三癸卯年生。稱權兵衛。號節齋。元文五庚申年八月十二日卒。七十八。）
    - 文煥（權兵衛。八十二歲。）
      - 元長……權兵衛
        - 喜藏
        - 太一
          - 啓次郎（當代養子）
- 仲武（所子となる。）
- 孝光（分家）（治兵衛。天和二壬辰年四月三日卒。享年四十三。）
  - 伯照（茂助）
    - 善平
      - 茂八郎
      - 希曾
  - 仲武（淺右衛門と稱し伯正の所子となる。享保十七年十一月六日卒。）
    - 霖寰（貞平）
      - 龍淵（子孫信州上田にあり。）
    - 義平（仲武の祀をつぐ。）

（原據）安原氏系譜安曇村大字田中安原七右衛門氏保管　安原家傳來春風と題する卷物一卷末裔啓次郎氏所藏　藤樹書院日記並書院記事。安原霖寰筆藤樹先生書院記。笠井助氏著安原霖寰。湖學紀聞。墓碑銘。安原子贈言。原田知近氏所藏　西川式四郎・早藤貞一郎・志村寛次三氏の直話。

四六、早藤氏

早藤氏世々茶右衛門と稱す。藤樹先生の門人たり。然れどもその名傳はらず。近江國高島郡田中村今安曇村大字田中小字南市の人なり。領主膳所藩本多侯に事へて世々代官を勤む。宗家の承繼者早藤貞一郎氏曰く、「茶右衛門家は分家にして今より二百八九十年前宗家に嗣子なかりし時此の家より出でてその祀を存せり。而して後茶右衛門家もまた家運めでたからず、今より四五十年前末裔良藏といへるもの丶時に至り、京都に出で終に絶家するに至れるを以て古傳の書類等湮滅して傳はらず。」と。大溝舊藩臣原田知近氏傳來の雜記古寫本に、藤先生之門人衆と題する一條あり。「早藤理兵衛江州田中村之住。」と識せり。編者おもへらく、本全集卷之二十に早

利兵宛の一書あり。之を精讀するに早利兵なる人近鄕に住居せるものなることを知るべく、或は理と利と相通じて用ひられたるものにあらざりしか。早藤貞一郎氏曰く、「茶右衛門家の檀那寺を勝滿寺といふ。古き過去帳を燒失せり。また茶右衛門家の記錄散逸せるを以て藤樹先生時代に理兵衛なる人ありしや、否や明かならざれども、昔田中村といひし區域内には此の家を除きては他に適合する家あるを見ず。」と。

早藤貞一郎氏は藤樹先生の筆蹟その他熊澤蕃山の書幅等多く珍藏せり。編者一日氏を訪ひ之を質したるに氏曰く、「今より四代前卽ち天明の頃通稱貞助名元幹字貞卿といふものあり、學を好めり。余が家藏に係るものの多くは此の人の蒐集せるものなり。されどもまた間〻茶右衛門家傳來の遺品もあらん。今詳かならず。」と。また貞太あり。大鹽中齋に從學せり。

四七、万木孫七郎

万木（ゆるぎ）孫七郎は贈正四位佐々木廣綱の後裔にして世々近江國高島郡横山村（今水尾村大字武曾横山の一部）に住し鄕士たり。諱は範宗藤樹先生に學ぶ。先生より少きこと四歳。元祿九年十一月二十一日歿す。享年八十五。その長男を孫右衛門といふ。常省先生の學徒たり。寶永五戊子年七月十九日歿す。壽六十四歳。常省子答賓問の文を藏す。（常省先生文集參照）傳說に閭里に茂右衛門といへる惡徒あり。獰猛奸譎人を苦ましむ。孫右衛門の長男を孫太郎といふ。面詰之を戒しむ。茂右衛門大に之を含み寶永元甲申年七月二十日夜終に之を殺害す。弟嘉左衛門激怒し直ちに之を復讐す。常省先生書を裁して之を弔し且つその學を歎賞す。子孫今尙その書を藏す。卽ち左の如し。

一筆致ニ啓上一候。然者御同姓孫太郎殿御事當廿日之晩不慮之義に而御果被レ成候由驚入御笑止千般絕ニ言語一貴様御心底致ニ推察一候。急遽之變御座候處御働無ニ殘處一様子承及愈不レ勝ニ歎惜之至一彌御舍弟加左衛門殿早速御出會御報讐之由御本意成義御座候加左衛門殿へも宜御心得可レ被レ下候。爲ニ御悔一可ニ申入一如レ此御座候。恐惶謹言。

七月二十八日　　中江彌三郎季重　花押

万木孫右衛門様

後裔に才右衛門秉文あり、學を好めり。松庵先生と稱す。文化元年九月十三日卒す。現戶主を良知といふ。

數百年來の日記を藏せり。編者嘗て藤樹先生時代の日記を一覽せんことを請ひしことあれども、未だその機を得ず。頗る遺憾となす。

略系

贈正四位
○佐々太廣綱…………………範○宗（孫七郎）——範次（孫右衛門）——昌命（範次一男　孫太郎、室無し）
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　——範秀（範次二男　嘉左衛門）

——範種（嘉左衛門一男稱三五郎）——秉文（範種一男　才右衛門又號松庵）…………良知（當代）

傳來の關係書類

一、中江常省先生漢文書簡（謹答前田賢叔之趣向本全集卷之四十七常省先生文集參照。）　一枚
一、同眞蹟答質問（酬万木子　同上參照。）　一枚
一、同孫右衛門宛書通　前出。
一、蕃山先生實錄　岡田季誠筆。　一冊

（疑義）志村竹運の書院記事に万木才右衛門範道常省先生に師事せしことを載せたり。今明かならず。暫く疑を存す。

四八、徳田氏

徳田氏は近江國高島郡南古賀（今廣瀨村大字南古賀）轟池（トヾロイケ）の人にして東万木村朽木氏の臣なり。藤樹先生に學ぶ。此家もと先生の書翰一通（松茸を贈れるときの禮狀）を愛藏せりといへども今散逸せりといふ。系譜を按ずるに昌次及びその嫡子昌清宗兵衛あり。藤樹先生時代の人なり。然れどもその何れが門下なりしや明かならず。此家末裔に至り二派となる。今その一を万次郎といふ。大阪市に住す。その二を養子小二郎といふ、同地廣田榮

五郎の二男にして小學教育に從事す。

（原據）　末裔德田万次郎氏所藏系圖。門下末裔故松下岩之進並廣瀬村大字南古賀澤清一同西澤忠三及び末裔德田万次郎氏の實弟安曇村大字西万木清水織部の四氏直話。

四九、松下仲伯

松下仲伯。諱は珍。（また幼名珍太郎に作る）通稱武兵衞。俳名を正之といひ、野々村立圃の門人にして父を家次といひ氏は其の嫡男なり。近江國高島郡船木村（今本庄村大字南船木）の人にして藤樹先生に學ぶ。後故ありて姓を中野と改む。京極高和公に仕へて播州龍野にありしが、八十に及べる老母の郷に在るを以て致仕し醫儒を以て業とす。岡部內膳正酒井讃岐守等祿を以て招きしも節を持して應ぜず。元祿八乙亥三月二十七日卒す。邸內先塋の側に葬る。

改當家由緒書に曰く。

一、小川村藤樹先生ニ入門いたし道義を諸人ニ教諭し寛永十三丙子年十一月神農之像讃ヲ乞、附レ今其贊之眞蹟其外先生之筆跡書籍所持す。

一、備前岡山池田光政公江府御往來之刻先生大津へ罷出於ニ御旅館一御目見其砌仲伯隨身いたし御目通御免被ニ成下一候。（?）

改正靈簿略傳に曰く。

神主　顯考仲伯府君　孝子闔奉祀

法名　慈月了應居士

神主　顯妣仲伯孺人山中氏　孝子齋奉祀

法名　無生永言大姉

其の子鑑伯幼名闔七また珍太郎といひ了齊と號す。姓を松下に復し齊宮（イツキノミヤ）と稱す。延寶八年秋十一歳にして常省先生に隨ひ對州にあり。勤學八年歸國して益々學に從事す。後醫を學び父の業を繼ぐ。元文四年己未三月二十八日歿す。年七十。

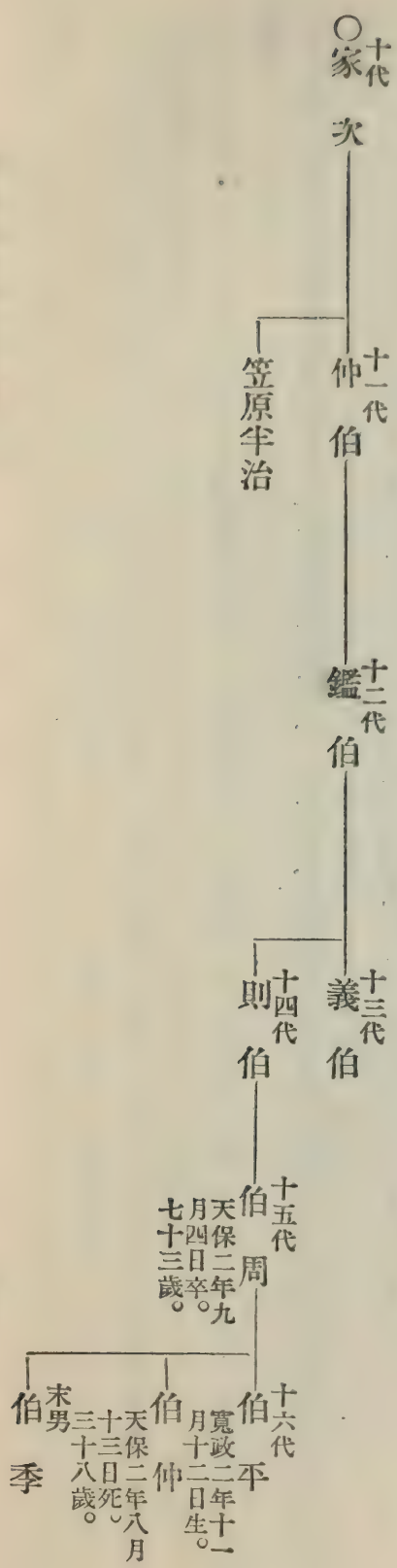
改當家由緒書ニ曰く。

一、仲伯儀松下齋宮鑑伯壯年之砌中野圖七ト名乘家名相續し松下ト復姓ス。延寶八年庚申藤樹先生之子息常省先生學術秀才之儀ヲ宗對馬守殿被レ及ニ聞召一御客分ニ而彼地ヘ下向之刻鑑伯十一歳之處隨身し對州公之許ニ罷有。然處對馬守殿先生之學才ヲ被レ成ニ御感稱一朝鮮國ヘ御遣シ可レ被レ成之儀有レ之候ヘ共家臣ニ相成朝鮮ヘ罷越義古主備前公之御咎如何ト御暇ヲ願被レ致ニ歸國一候鑑伯先生に隨身し對州ニ罷在勤學する事八年ニノ歸國す。

改正靈簿略傳ニ曰く、

神主　顯考鑑伯府君　孝子藤奉祀
法名　了齋鑑伯居士
神主　顯妣鑑伯孺人　孝子藤奉祀
法名　天如喬運大姉

鑑伯の後義伯則伯を經て養子伯周に至る。與八郎と稱す。俳名圓丈賀穀舍と號す。弱冠の頃堀川學を好みしが、晩年に至り陽明學に轉じ、末男伯季と計りて藤樹・熊澤二先生を始め三輪執齋の著書等自己の藏書に洩れたるものを購求し、寫本の得難きものは門人の家を尋ね借り來りて之を寫し、概ね全きを得たり。また皇朝の學を尊信し本居宣長撰古事記傳の寫本を借り來り、伯季と共に六帙まで寫し終りたるも殘り二帙はその寫本得難きにより寫すことを得ざりきと。その他加茂眞淵の冠辭考等若干卷を淨寫して家に藏したり。末裔岩之進に至りて子なし。明治四十四年五月四日死す。祀終に絶ゆ。

略系

(附記)

一、刀工井上眞改の大阪より來りて藤樹先生に學ぶや松下家に滯留せりといふ。(本卷第三四項井上眞改傳參照)

一、松下伯季のこと同家記錄に唯末男とあるのみにて事蹟詳かならず。按ずるに伯季は篤學の士にして版本孝經啓蒙(書院所藏)、心學文集(青柳村山野源七氏藏)藤樹先生行狀聞傳(青柳村田中竹松氏藏有)等に參考となすべき多くの書入をなせり。また聞見錄と題して藤樹・蕃山・執齋三先生の逸事の諸書に散見せるものを收錄せり。特に川田雄琴子の藤樹書院に贈れる止善書院に關する記事一册は幸伯季の筆寫し置けるものありて漸く湮滅するを免れたり。

一、松下家に藤樹先生眞蹟神農像贊を藏せり。艸書筆蹟亦賞すべし。明治三十年九月二十五日藤樹先生二百五十年祭の折遺物展覽會に出陳を見たるも今その所在明かならず。その他先生に關する資料多かりしも盡く散逸し了りたるは誠に遺憾なりとす。

一、按ずるに改正憲簿略傳の載する所に依れば松下家に於ては天保の頃まで儒儒式によりて祭祀を行へるものゝ如し。

一、松下家の記錄改正當家由緒書、改正憲簿略傳の二册はその他の書類と共に一括して同地天台宗眞盛派西光寺に保管せり。本記事は全く此等の書類より得たるものなり。

(原據) 右記事はすべて松下家の記錄に據り松下岩之進氏の死亡年月日は本庄村戸籍簿に據れり。今一々之を擧げず。

五〇、中西又左衞門

近江國高島郡河原市村(今新儀村大字安井川の中)の人なり。橋南溪東遊記に見ゆる馬子の話を以て著はる。事本全集卷之四十三藤樹先生補傳第九項熊澤蕃山の入門の條に見えたり。參照すべし。

五一、岡田仲實

岡田仲實通稱八郎右衞門。門弟子詩文集並に淨土寺に保管せる岡田家の神主に傍記せる岡田猪とは恐らくは此の人のことならん。近江國高島郡東万木村(今青柳村大字青柳の中)の人にして朽木氏(郡東万木村にあり。食邑三千石。元祖を與五郎友綱といふ)の老臣たり。(諸書多くは誤つて小川村處士となす)父は岡田又右衞門道了實は船木覺兵衞長政の子なり藤樹先生に學ぶ。寛文十庚戌年四月二十八日歿す。室美津女は熊澤蕃山の妹にして野尻一利の三女なり。萬治四年三月八日歿す。享年三十二。

(附) 季誠(スエシゲ)

岡田季誠は仲實の第二子にして母は野尻氏なり。諱敬通稱十之丞兄直政の准養子となりその家を繼げり。幼より道を信じ學を好む。嘗て元服を藤樹書院に行ひ常省子之が賓たり。僚友笠原義叔招かれてその髮を理む。常省子文を作りて之を激勵せり。季誠幼より常省子に從ひ道を學べり。長じて先師の遺文を集輯するを以て志と爲す。その編纂に丁り苦心せる有樣は三輪執齋の藤樹先生全書序文に詳かなれば茲に贅せず。今存する處の稿本を見るに精粗種々あり。その粗なるものは初年の稿にしてその精なるものは晩年に錄せるものなるべし。而して晩年の稿に老筆を以て傍記せるところ以て畢生用力の迹を見るべし。延享四丁卯年十月四日終に歿す。藤樹先生一百年の忌辰に後るゝこと僅かに四十日。貞享乙丑正月自ら藤樹先生文集に序せしよりこゝに至り六十三年を經たり。（文集三靈符疑解附內外八景注に岡田氏本の註を載す。曰く「丁卯夏於洛編文集成。」と丁卯は貞享四年なり。）壽詳かならず。今假りに母氏終焉の年に生れたりとするも八十七歲を算すべし。その自筆の藤樹先生全書原稿一部は世々傳へて之を家に藏したりしが時の高島郡長河毛三郎氏の斡旋により明治三十九年八月現戶主元誠（モトシゲ）氏之を藤樹書院に寄附せり。その他藤樹先生書簡拾遺一冊、三宅石菴著藤樹先生書簡雜著拔萃一冊、熊澤蕃山著孝經外傳二冊、熊澤氏事依レ尋答一冊、川田雄琴著藤樹先生年忌說一冊（以上藤樹書院所藏岡田元誠氏寄附）蕃山先生實錄一冊（万木良知氏所藏）等の自筆寫本あり。また以て篤學の一斑を知るに足らん。元誠氏實は大溝分部侯の家老澤井猪左衞門元允の長男なり。今京都市上京區衣笠殿町七九に住す。

（論評）

一、岡田氏全書の價値については緖言編纂總則に委しければ茲に呶々せず。加藤主任曰く、「全書の分類法を靜觀するに前後統一あり、文集成書等の配置亦動かすべからず。編者たる季誠氏が極めて論理的なる頭腦の所有者たりしを知るに足る。」と。

一、年譜の中先生の辭職歎願書の艸書體極めて美し。季誠氏の能書之によりて知るを得。

一、藤樹先生年譜末尾の部分卽ち先生四十歲及四十一歲の條を自記して「私ニ記」の三字を置き且つ白紙一枚を隔てゝ儼然前の部分と區別せらるゝを見る。卽ち前人の著と自己の記述とを峻別したり。是れ同氏が編

纂上私意を挾まざりしことを明證するものにして全書全體に亙りて信を置くに足る所以亦此にあり。

一、他人の筆寫したるものを見れば謹書すと云ひつゝ猶且つ誤字脱文多きものあるに反し、岡氏の全書には文字の脱落若くは衍文と見做すべきもの極めて少し。氏の緻密なる性格を想像するを得。

（附記）

一、淨土寺に保管せる岡田氏の神主、位牌並過去帳

顯考道了光信府君神主
　陷中に　故又右衞門尉岡田氏號道了諱若字光信神主
　孝子　岡　田　猪　奉祀

本生考　舟木長政府君神主
　陷中に　覺兵衞尉舟木氏諱傳字長政神主
　岡　田　猪　奉祀

編者曰く。岡田元誠氏所持の過去帳に正保元甲申年五月七日舟木覺兵衞とあり。岡田猪が甲申之夏丁二父憂一といへる門弟子文集中の文と能く合致す。これ猪を以て仲實と爲す所以なり。

顯妣　船木長政夫人岡田氏神主
　孝子　太　奉　祀
　陷中に　岡田光信甫孺人桑原氏神主

編者曰く。こゝに船木長政夫人岡田氏といへるは系圖に女子船木覺兵衞長政室といへると合致すれども陷中に岡田光信甫孺人桑原氏といへるは解し難し。或は疑ふ。此の神主もと又右衞門氏の室を奉祀せるを後その表面の文字を削りて長政氏の室を奉祀し而してその陷中の文字を削ることを忘れしものにはあらざりしか。また孝子太といへるは船木太を意味するものにして次に掲ぐる野尻氏を祀れる岡田太と區別すべきこと勿論なり。

皇妣　仲實公夫人野尻氏神主
　孝子　岡　田　太　奉祀
　陷中に　故野尻夫美津大宗婦二祖神主

また淨土寺に奉祀せる位牌あり。左の如し。

万治四丑年
養安院惠觀智光信女靈位
三月八日
裏　施主　領家村岩佐氏
圓光常智大姉（本巻第四三項岩佐光伯の條參照）

淨土寺過去帳八日の條に左の記事あり。

萬治四丑年　寺内に土葬す。

惠觀智光信女　三十二歳

三月　岡田安右衛門　母　備前人也。

二、系譜（主として岡田家所有の系譜に據る）

光國　岡田又右衛門
後號道了

女子　船木覺兵衛長政室

女子　長谷川善六室

編者曰く、光國　神主光信に作る。

仲實　岡田八郎右衛門

實父　船木覺兵衛長政

母　岡田又右衛門光國娘

室　備前公臣　熊澤了介伯繼娘（編者曰く、娘は妹の誤）

仲實領主朽木河内守元綱公二男從與五郎公被召。賜長尾邑内五十斛。則以印結鳳書爲縣令。芳文今猶在于家。
寛文十戌四月二十八日仲實卒

直政　岡田安右衛門

父　岡田八郎右衛門仲實

母　熊澤了介伯繼女（編者曰く、女亦妹の誤）

室　山中膳左衛門女

父仲實歿後卿命趣江府仕事正綱侯。既五甲依病致仕。正德壬辰四月三日直政卒。

某　子　半之丞早世

女　子

女　子

女　子

某　　　早世

季　誠　初安之丞・七郎右衞門・十之丞・岡田八郎右衞門（マヽ）實は仲實の男

父　岡田安右衞門

母　山中膳左衞門娘

三、岡田氏の邸址とその墓地

岡田氏の邸宅は今の青柳村青柳尋常高等小學校の敷地内にありしものにして、墓地はその隣接地にありて仲實季誠二氏の墓もこゝに存せり。また季誠氏の實母野尻氏の墓はその隣地淨土寺の境内にあり。

四、季誠氏母の爲に賀筵を張る。

季誠氏は享保五年その養母山中氏の爲に八十の賀筵を張れり。今その歌集を得たれば序文並に和歌二三を抄出して參考となす。

祝賀和歌序

壽は天にかゝりて五福の第一たり。こゝに江陽琵琶湖の西高島郡万木の里岡田子季誠の母君ことし八十のことぶきにのぼり給ける。先考仲實君ハ藤樹先生の門に遊びて其姻友息游子とゝもに文學びたまふ事年有て義を以て其婦をいざなひ給ひしとなん。それは過しむかしにて岡田子いはけなかりしを母君のみにて養育したてたまひぬ。母君女德の功高く仁義のこゝろざし篤きを以ていとけなきより文まなばせ萬の御こころ用ひもふかく貞婦のみさほかはらざるも先考の德のをよぶ所も淺からぬなるべし。そのいさをしにてひさゝなり家もゆたかに子孫もさかゆく事すべて此はゝ木のかげによれり。岡田子愛日のこゝろざしふかく古稀の年を超て八十に滿たせ給ふ事をかぎりなく悅びこれを賀せんとて中院源亞相通躬公に祝賀の題をこふ。公そのこゝろざしを感じたまひ鶴遐年友といふ題を賜ふ。一族朋友につげて和歌を勸しみづからもよみて賀莚をひらき氏族とゝもにそのむしろにのぞみてみきすゝめ奉りいく千世もとことぶきせらる。やつがれ相まじはる事年久しく親しければ此おもらまし奉つられてよそのもとめいなびがたくて拙き筆をはせて書つく事しかり。まことに岡田子の孝心にこたえて万木の森の松風もけふさらに千世をよばふなるべし。

享保五年庚子十一月十有四日丁丑　　京兆　松井政豐書

鶴遐年友

君にたれつれて千とせの杯なへん　おもへば鴫のうらの友鶴。　　希賢

八十ふる老も若えて末となく　なれて契れよ千世の友づる。　　政豐

老の波たちそふかげを水かゞみ　よはひくらぶる千代の友づる。　　慶安

幾千とせ馴て久しき友なれや　よはひかさぬる鶴の毛ごろも。　　女いよ

幾千代と君をいはひて久かたの　くもゐに遊ぶ友鶴の聲。　　女たき

ちぎりをくをのが千年のよはひをも　君にかされよつるのけごろも。　　徳通

この宿の松に馴ぬる老づるは　千世に八千代の友と成らん。　　鑑伯

常盤なる松に馴ぬる友鶴は　幾千代かけて色もかはらじ。　　女りう

をのが經ん千世のためしもたらちめの　すぐるよはひにゆづれ友鶴。　　季誠

もろともによはひ契る友鶴よ　千世万代の末もかはるな。　　すゑしげ妻

追加

みづから八十とせの賀に鶴遐年友といふこゝろを人々詠じておくりたまへば追て加へ侍る。

椿らじよわが八十島の老の波
　　　　またたちかへる千代の友鶴。　　　　季誠母

右歌集すべて三十三首を載す。今十一首を拔萃せり。

（原據）岡田氏系譜並過去帳。墓碑。淨土寺保管岡田氏神主。淨土寺並德正寺過去帳。祝賀和歌序文。常省先生文集並岡田氏藏稿。蕃山先生實錄。北小路俊光日記。藤樹先生全書序。朽木修理系圖。

五二、中　江　三

藤樹先生の叔父に中江三郎右衞門といへる人あり。寛永十三年三月七日行年五十九歳を以て逝けり。本全集卷之四十七門弟子詩文集中に中江三と識せるもの三ヶ所あり。而して氏の作として題₌淸水物語₋己卯建卯月と識さるゝものあり。己卯は寛永十六年にして中江三郎右衞門の歿後三年なれば、此の中江三なる人恐らくは三郎右衞門の子仁兵衞を斥せるものなるべし。

（原據）本全集卷之四十三藤樹先生補傳中江氏系圖。

五三、崇　保　軒

中江治之元立、崇保軒と號し右門と稱す。文集二崇保軒門弟治之に作る。小川村の人なり。京都にあり。堂上に事ふ。藤樹先生の叔父なり。先生に學ぶ。按ずるに崇保軒のこと諸書傳ふるところ區々にして一定せず或は信古又は好古を以て同一人となして崇保軒の子となすものあり。文集二送₌信古₋文あり。文集四に答₌賓問₋の文あり。其の題註に族弟好古といふ朱書あり（岡田氏本）參考すべし。

（原據）本全集卷之四十三藤樹先生補傳中江氏系圖。藤樹先生行狀聞傳。湖學紀聞。

五四、中　江　數　馬

中江數馬、諱は立重、與市といひ玄庵と號す。小川村の人なり。藤樹先生の再從兄弟にして京都に在り。久

世家に事ふ。本全集卷之二文集二儒聯句並漢和聯句に見えたり。

（原據）藤夫子行狀聞傳。志郁讓子倹補校中江藤樹先生年譜。

五五、谷川　寅

谷川寅本姓は小川、字は惟直、通稱を儀左衞門といひ、又玄卜といふ。一に玄朴に作る。谷川次郎右衞門重久の子にして小川村の人なり。父はもと尾張の人なり。惟直小川老慶の養子となり谷川家の始祖となる。重久嘗て松平石見守に窺仕す。偶〻公の病死により家斷絕し宗家備前少將光政公の臣となる。玄卜從へり。玄卜寬永十五年小川村に歸り藤樹先生に師事す。系圖に曰く「備前之國守少將光政公ゟ御醫師被ㇾ召出ㇾ賜二百五十石一被ㇾ附ㇾ一條樣御方一大猷院殿猶子實は光政公女也。束髮被ㇾ仰付ㇾ賜ㇾ加ㇾ增百石一。都合二百五十石。將軍公ゟ御使者被ㇾ仰付ㇾ每年家職罷下。大猷院殿嚴有院殿ゟ度々御目見云云。」といへり。元祿六年九月二十九日京都に於て死す。百萬遍に葬る。行狀聞傳に京都東山黑谷に葬るに作る。子孫永く備前侯に事ふ。その遺物は小川村に在る同族山本・堀田の諸氏之を保管して今に至る。中川善兵衞貞良・中西孫右衞門常慶・山田九右衞門・中村又之丞・吉田新兵衞・岡田八郎右衞門仲實以上藤樹先生の門人板倉重矩熊澤蕃山の門人にして京都所司代野尻藤兵衞熊澤蕃山の父二郎八は丶蕃山の母とうのせうは丶・三宅可三等の書通あり。その一二を除き何れも修養に關する語句の散見せざるものなし。以て江西の學徒が如何に受用體認に重きを置きしかを察すべく、また一面玄卜その人の爲ㇾ人をも推知すべきなり。

玄卜また敬神の念極めて厚く、嘗て小川村氏神日吉神社へ兒馬チゴウマを獻じたり。谷川平助の同族におくれる書通の一節に、

（前略）然者其御村氏神祭禮之節兒馬と申而子供に冠を着せ白衣を着し馬に乘申ㇾ候由是は寬文年中谷川儀左衞門惟直一條關白ゟ拜領致し氏神へ奉納祭禮兒馬を初め申候よし云云。（山本源內氏保管書通）

右故例神事として今に存せり。（藤樹先生行狀聞傳參照）

（原據）藤樹先生年譜。藁賢錄。諸氏の谷川玄卜におくれる書通。小川譜（山本源內氏保管）。山本紋二良氏所藏系圖。

（疑義）文集二に送ㇾ谷川子ㇾ詩あり。その序に予ㇾ貧仕ㇾ於豫方ㇾ とあれども谷川子が豫州に事へたりとの事は明かならず。暫く疑を存す。

（參考資料）

（一）板倉重矩の谷川玄卜におくれる書通

先月二十一日之御返札殊に書物共御取被ㇾ下忝存候御受用躰具ニ被ㇾ仰聞ㇾ親切成儀一段得ㇾ益申候我等何茂無事ニ其□寄合勵申事御座候。

一、三社託宣板出來次第御取可ㇾ被ㇾ下旨滿足仕候。

一、其元板屋ヘ書物目錄之通入銀仕置候間御六ヶ敷候共右之本屋共ニ御尋、出來之物御座候はゞ御請取候而此方ヘ御届可ㇾ被ㇾ下候賴入存候。

一、助右方ヘ先日遣候狀則便候而被ㇾ遣被ㇾ下候由忝存候。又此狀用之儀申遣候間慥ニ御届可ㇾ被ㇾ下候。每度御六ヶ敷儀ニ候ヘ共賴入候。折節憚入早々申入候。恐惶謹言。

八月七日　　板倉主水佐

重矩　花押

谷川玄卜樣

人々御中

（二）河村平兵衞の谷川玄卜におくれる書通

尙々□々受用躰申入度候ヘ共折節難ㇾ去憚入候故申殘候いろ〳〵御床敷存計ニ御座候。以上。

新春之御慶目出度申納候。其御地彌々可ㇾ爲ニ御無事ニさ奉ㇾ察候。當地別條無ニ御座ㇾ候。先以貴樣御祝言首尾能相調申由承候て目出度珍重ニ存事ニ御座候。將又此度中村氏御上り緩々さ御咄可ㇾ被ㇾ成さ存候。其許御受用体無さ奉ㇾ察事ニ御座候。私義隨分さハ存候ヘ共少心見ヘ申程種々の病根數〳〵あぐみ申事ニ御座候。日用心上ノ□違申事皆細か成病ゆヘさ存候ヘども存儘にわきまへがたく氣之毒ニ御座候。にぶき志さ存事ニ御座候。熊澤氏も少其許ニ逗留可□由御座候定而緩々さ御咄被ㇾ成□□らんさ存候。江戸も彌〻興起ノ由大幸ニ存候。予ハ同心相半加不ㇾ參候段氣之毒に存候。恐惶謹言。

二月五日　　河村平兵衞　花押

谷川玄卜樣

尙落合丈御無事之由拙者方ヘも切々□□□さハ一入透無ニ御座ㇾ候由御受用も彌々進み申□存候。岩田氏も爰元ヘ當年ハ御越候はんやさ存候。左候はゞ落合氏も可ㇾ在ニ御越ㇾかさ存候事に御座候。以上。

五六、谷川左

谷川左助は小川村の人なり。字惟照、初名市之丞實は堀田七藏の子にして玄卜養うて嗣となす。門弟子詩文

集中に谷川左とあるもの卽ち此の人のことならん。

（原據）谷川氏系圖（山本源内氏保管並山本紋二良氏所藏）

五七、山　本　茂　助

本會顧問文學博士井上哲次郎氏著日本陽明學派之哲學所載藤樹門人の條下に小川茂助を擧げ、澁井太室が儒林傳の語を引き「醇乎純矣」とありといへり。按ずるに小川茂助（後山本茂助と改む）は小川村の人にして谷川寅と同族なり。系譜を案ずるに小川茂助諱義政小川久左衞門と稱し後山本久太夫と改む。山本九左衞門尉政秀の子なり。松平石見守に仕へ知行二百五十石を賜ふ。寬永二年石見守病死其の家斷絶するに及び本國に歸れりといふ。後ち嗣絶ゆ。茂助が先生に學びたりとのことは明かならざれども、その年代と環境より考へて有り得べきことなり。暫く識して後考に備ふ。

（原據）山本氏系譜。（山本源内氏所藏）

五八、笠　原　竹　友

笠原竹友は小川村の人なり。松下家の舊記卽ち（改正）當家由緒書に南光坊天海僧正の甥とす。また口碑に戰國時代の落武者ともいへり。藤田一正撰熊澤蕃山傳承應二年の條下に左の記事あり。

初伯繼在近江。與笠原竹友同學友善。及執岡山之政。從君赴關東。祿位既優。騶從甚盛。途宿大津。竹友聞之。摭漬魚腸。苞以竹皮。掛杖頭而荷之。蹩躠徒步。詣逆旅主人。求見伯繼子。逆旅主人見其微。而輕之不為禮。乃陳姓名。良久之得之。伯繼驚曰。笠原先生來耶。何不速告我也。躧履出迎。竹友不拜曰。吾疲矣。直踞堂廉。伯繼手為解其鞋。竹友笑而謝。相攜升堂。開尊命酌。竹友素諳伯繼嗜鮫鰊。乃出向所攜者為下物。相與和舊。終宵劇談。罄歡而罷。見者莫不嗟異焉。

以てその爲人を知るに足らんｏまた左の一文は常省子の備前より賜暇歸省せる時の贈答とも見るべくして頗る翁の面影を偲ぶに足るものあり。

高島や小川の里の遺跡にしばらく休暇の命ありてかへりたまひ、聲なきに聞き、形なきにまみえ、ひさりむかしなおもひ出でらん時しも、藤

の花ざかりにて下行く水にかけひたし紫の浪立ちてこれぞかはらぬしろ人とはみたまふらむ。

高島や小川の水のきよければ
ながれにうつろふぢのかげかな。

紫の色に心やそめつらん
ふぢさく宿のおやさ子の道。

こゝに、笠原の翁はさらにおもひ奉りし藤樹にわかれてより此のかた三十に及ぶ。さしはふれどもなほながらへて侍りぬれど、鰥寡孤獨の四のものひとりの上にとゞめぬれば、あるかなきかに門さしこめて侍りしを、からのやまとの名に高く心あるさまの人によせ二首の詠にこと葉がきをそへてたまはりぬ。翁よろこびにたえずおもひ侍りけれど、師曠が耳もおとろへ、離婁が明も色をわかず、つくもがみのよはひと老いぬればことの林はつきならなくに硯の海も名のみして、水ぐきの筆のあともかきたえぬれば、我にかはりてとうちうなづくをたよりとして、腰折におかしき言葉がきをそへ御わらひ草の種までならし。

老樂の宿にしあればおのづから
門はむぐらの道となりぬる。

世の中のすぐにしあらば呉竹の
うきふし身をもいかでいとはん。

（原田知近氏所藏斷片）

翁天和二壬戌年五月二十九日卒す。謚して養玄院山仙竹友居士といふ。邸内に葬る、室師岡氏貞享二乙丑七月十六日卒す。謚安養院覺法理正大姉と稱す。子なし。同門の友中野仲伯の弟半治義叔を養ひて子となす。今參考の爲め松下家記錄改正靈簿略傳の記事を添ふ。

一、笠原義叔。

中野家次次男幼名大五郎、通稱半治、上小川邑笠原竹友ノ養子ト成ル。武備ヲ好テ常ニ着コミトヤラン離サレズ。若州之家老都筑氏ト學友ニメ往返セラレシトカヤ。則中江君ノ門人タリ。若州御家中板倉氏ノ女ヲ娶リテ一子アリ。市良ト云。後大五郎伯諱一ト改ム。不如意ニ付大溝分部侯ニ暫仕官ス。後江府ニ在リテ高島正因ト名乘リ醫ヲ業トス。（頭書ニ正因元文元年比太田備中守家中ニ有）（中略）義叔寶永元甲申年十二月十六日卒。法名正翁義貫居士。墓銘笠原義叔墓ト有リ。兩親ノ側ニ葬ル。義叔沒後二十八年ヲ經テ三人ノ石碑ヲ建。其祝文。

維

享保十有六年歲次辛亥越已辰朔七月十有六日丙丑岡田季誠志村氏松下鑑伯同姓義伯敢昭告ニ于

笠原竹友神位
笠原義叔神位
理正孺人師岡氏靈位。
今茲營ニ建石碑ヲ、祇以清酌柔盛謹用仲ニ奠獻ス
尙クハ
饗ケヨ。

（附記）因みに笠原氏の墓地は滋賀縣高島郡青柳村大字上小川字愛神にあり。

五九、志村吉久　附　研究者　仲昌及儉藏

志村吉久は小川村の人なり。通稱忠左衞門延寶七己未年二月六日死す。竹涯の書院記事に藤樹先生の門人中に數へたり。また同書に其兄次郎兵衞秀次吉久嗣清兵衞久重は常省先生門人と識せり。湖學紀聞に志村周介。藤樹先生再從弟也。同弟仲昌師ニ事常省子ニ。仲昌號ニ常耕ト。周介之後。世爲ニ書院長ト。予所ノ識者名ハ周治。字ハ世賴。世賴之父名周助。字可教といへり。世賴の子を善繼字周次といふ。天保三年大鹽中齋の藤樹書院に來謁して學を講ずるや。周次就いて學ぶ。天保八年二月中齋亂を起すや之に與みして大阪に横死せり。享年二十六。その孫を數太郎といふ。朝鮮に仕す。秀次の後裔に貞子あり。久重家の神主を保管す。

仲昌通稱治左衞門岡田季誠と友とし善し。篠原氏本全集に依るにまた別に藤樹先生全書を編纂せるもの〻如し。その書今傳はらず、殊に惜しむべしといへども、孝經啓蒙・四書啓蒙・文集等の篠原氏本註解に散見せるによりて何れも其の良書を傳へしことを知るを得べし。また晩年藤夫子行狀聞傳一卷を著はせり。明和六己丑年八月十八日死す。享年九十歲。同鄉志村清五郎はその系統に屬すといふ。

顯祖考　吉久府君　神主。
　神　主
陷中に　故志村忠左衞門諱吉久神主

顯祖妣　淵田孺人　神主

陷中に　故志村吉久妻淵田氏神主

顯　考　久重嚴君　神主

陷中に　故志村清兵衛尉久重神主

顯　妣　中江室人　神主

陷中に　故志村久重妻中江氏諱加免神主

（志村貞子氏保管）

略系

- 志村久治嫡子。志村忠左衞門。○吉久　延寶七己未年二月六日死。
  - 志村次郎兵衞　秀次　元祿五壬申年三月八日死。
    - ○ ― ○ ― 鈎之助
      - 三治 ― ○ ― ○ ― ○ ― 貞子（當代）
        - 寛次
      - 士儉　明治十四年十一月二十七日死、行年七十八。
  - 志村清兵衞　久重　享保十二丁未年八月二十一日死。行年八十一。室名龜中江仁兵衞女。
    - ○ ― ○ ― 志村周助　可敎　寛政十戊午年六月十五日死、行年六十。
      - 志村周治　世賴　天保二辛卯年三月二十四日死。行年六十。
        - 志村周次　善繼　天保八丁酉年二月十九日於大阪大鹽横死。
        - 周次 ― 數太郎
    - 志村周助　伯重　延享三丙寅年二月二十二日死。行年七十七。
    - 志村治左衞門號常耕　仲昌　明和己丑八月十八日死。行年九十。
      - 伯誠

（志村貞子氏所藏系圖）

（**疑義**）名古屋市恒河吉毅氏所藏佐藤一齋翁の藤樹先生眞蹟跋に「翁西江小川村人。而志村氏其比鄰也。八世祖秀久七世祖正吉從翁學焉。」となすは系譜と合はず。

附　研究者　志　村　儉　藏

（編者は昭和十年五月一日阪急百貨店古寫本即賣會場にて士儉志村謙編纂の藤樹先生全書自筆五冊（自第二卷至第九卷）を見付けて藤樹書院に購入す。惜むらくは第一卷を缺く。拙稿藤樹研究の新資料參照。（藤陰））

志村儉藏は吉久の後裔にして諱は士儉或は讓といひ、通稱七之丞竹涯と號す。幼より讀書を好み長じて詩を能くす。嘗て朽木氏の台に應じて

藩學校の教官たること五年。明治十四年十一月二十七日死す。享年七十八。著書纁水舘雜抄、新聞錄、藤樹先生年譜(補)(校)(滋賀縣高島郡水尾村万木良知氏所藏)書院訓事(在朝鮮鎭南中江藤氏所藏)集補藤樹先生書翰集之(大阪市石崎西之允氏所藏)等あり。また三宅石菴編藤樹先生書簡雜著寫本(同上石崎氏所藏)一册あり。大鹽中齋の來たるや年齒二十九歳なり。篠原元博氏の來るやまた資料を供給せるもの丶如し。

(附記) 編者おもへらく、竹涯老が藤樹先生の遺著を涉獵して諸處注記を施せるもの參考となすに足るものあり。然れども先生及び遺族、書院門人等に關する史實については種々首肯し難きものあり。或は後世を誤るものあらんを恐る。依てこゝに附記す。

(原據) 神主並志村氏系譜。万木良知氏所藏蕃山先生實錄奥書。川越治吉氏所藏軸物極書。大鹽中齋致良知三大字跋並寄附狀。竹涯筆藤樹先生書翰雜著。湖學紀聞。

六〇、小川庄治郎

小川庄治郎は小川村の人なり。佐々木氏の臣小川城主主膳正源秀康の裔にして世々郷士たり。諱は惟孝後に秀宗と改む。八右衞門孝則の子なり。祖父九左衞門嘗て豐臣氏に事へたりしが大阪陣の節故ありて暇を請ひ此の地に隱れてより世々節を持して仕へず。秀宗醫を業とし、また武者修業を爲して參河邊に至りしこともありしといふ。先生歿して後遺子皆出でて他にありしを以て同門の士笠原・志村の二氏または先生の隣家たる淵田氏等と相謀り或は近郷の諸氏と協力して春秋の祭祀を營み或は書院の修覆より先師一家の內事に至るまで深く考慮を拂ひたるものの如し。常省先生書簡の一節に、

一、講堂春之祭礼も何も御出會被レ成候而御執行被レ成八月忌日之祭奠ニ同志中御來會貴樣降神御務被レ成候而御執行被レ成被レ下候由寔御厚情之至不レ勝ニ感謝一候。然ニ講堂之やれ損じニ付致ニ修覆一可レ然と思召候而積り被ニ仰付一候よし委細源兵衞方より申越致ニ承知一候云云。

といひ、中江數馬書簡の一節に、

其元講堂之義諸事賴上候。同志中へも乍ニ慮外一宜預ニ御心得一□(不讀)

といひ、また常省先生母堂の書狀の一節に、

そもじ樣こその外の御きも入御せわになされ候。みか樣御きも入御くろうになされたのもし御さりたて彌三郎末〱までのためおぼしめし下され候よしかたじけなさ心入のだんかんじ入御禮申つくしがたく悅入申候。彌三郎も聞候はゞさぞ〱そもじ樣がたの心入一入かたじけなく

悅申候はんとぞんじまゐらせ候云云。

といへるにてその一斑を知り得べし。庄治郎は特に常省先生卽ち彌三郎氏と親交深かりしと見え、その書狀今尙傳へて近鄕諸家に藏するもの少からず。元祿十六年九月十五日歿す。享年詳かならず。子孫永く志村氏と共に藤樹書院の守護たり。五世の孫に城太夫秀則あり。大鹽中齋の來謁するや久しく此の家に止りしもの丶如く後大阪に至り洗心洞に於て宇津木氏の講を聞けり。天保八年中齋亂を起さんとするや事に托して秀則並志村周次を招く。周次急遽彼の地に至り事に與みす。秀則は二三日後れて伏見に至り亂を聞きて竊かに逃れ歸り事なきを得たりといふ。

略系

小川主膳正
○源秀泰……八右衛門孝則——庄治郎秀宗——助左衛門豊綱——城太夫秀綱——
——城治郎秀盛——城太夫秀則——勝治郎秀陳——〔養子 喜代藏——秀和〕

（疑義）

イ、神主に顯考任量府君神主と識せるもの一基あり。その何人なるや明かならず。

ロ、慶安三年版傳習錄並承應二年版王陽明先生文錄鈔の各卷末に、肉筆もて小川孝則と識し花押あり。之によりて之を觀るときは秀宗の父孝則もまた陽明學を嗜みしもの丶如し。暫く疑を存す。

當家傳來の藤樹先生眞筆その他左の如し。多くは各編の解題に詳かなり。

一、丁亥元旦詩　藤樹先生眞蹟　一幅
一、中庸解　同上　一冊
一、學術便蒙斷片　同上　一幅

一、四書啓蒙　同　上　表紙共十九枚　一冊

但内三枚門人の敬寫補筆にして其の一枚には藤樹先生の正誤書入あり。

一、熟語解　同　上　八　枚　一冊

卷末に和歌五首半句を載せたり。

一、論　語　傳說藤樹先生眞筆となす、恐らくは誤。門人の筆ならん。　一幅

一、愼　獨　藤樹先生眞筆寫　一幅

此の幅いつの頃にや東京附近某の有に歸したり。惜しいかな、その住所氏名を逸せり。今その副本を藏す。

一、大學考並解　藤樹先生眞筆　一冊

明治三十八年七月下の中庸續解と共に藤樹書院へ奉納せり。

一、中庸續解　一冊

門人の敬寫に係り、先生の眞筆題簽あり。又綴込の部分に眞蹟もて枚數記入せらる。今眞蹟整理本と呼ぶ。

一、孝弟論　寫本　一冊

一、常省先生母堂書翰　一通

一、中江數馬書翰　一通

一、常省先生書翰　三通

一、泉仲愛書翰　一通

一、中西常慶書翰　一通

一、論語郷黨翼傳　寫本　一冊

一、集義和書　書簡の部　寫本　一冊

一、藤樹先生全書　文集　寫本　一冊

一、花園會約　御家流寫　但前文を缺く　一卷

一、道歌之註　寫本　但端本　一冊

一、傳習録　慶安三年本　一部
一、王陽明先生文録鈔　承應二年本　一部
一、醫方大成論　寛永三年版 書入あり　一冊
一、神道大義　寫　一冊

右神道大義は傳説によれば藤樹先生眞筆となす。恐らくは誤、今たゞその寫を存するのみ。

(原據) 舊記。小川氏系圖。過去帳。口碑。城太夫の中齋に宛てたる禮狀の副本。

六一、吉村氏

享保年間の書院の記事を最も詳細に記述したるものに書院日記あり。之によれば、

享保五年九月二十五日門下末葉相議して講堂地子御免の願ひを領主分部侯に出したることあり。翌六年辛丑七月十三日講堂地子の儀御免あり同十八日同志相會して右地子御赦免を賀し且つ大溝御役人中へ御禮の相談をなせる中に吉村佐野右衞門あり。また藤樹書院所藏古文書中に分部侯家中別所久右衞門氏より安原權兵衞外三名に宛てたる謝禮に對する挨拶狀の中に同名の士あり。而して志村竹涯の書院記事には拜戸村(今滋賀縣高島郡高島村大字拜戸)禪智院宮家臣と明記せり。されば吉村佐野右衞門は門下の後裔にして同氏の父祖は必ずや先生若くは常省子の門人なるべしと思はる依て編者は一日禪智院宮舊臣田原重道氏を介してその末裔を訪問したるに戸主正紀氏(十四代)は名古屋市に在りて北堂獨り留守宅を守れり。遺品とては之なく唯僅かに系譜一卷あるのみ。之を通讀するに佐野右衞門なる人なし。然れども古くより吉村姓を稱するもの近郷全く之なければ其の間猶研究の餘地を存す。左にその系譜を摘錄して後日の參考となす。

初代	元和五己未年八月死	吉村九左衞門	源元道
二代	承應三乙午年十一月死	吉村新左衞門	源次道
三代	元祿九丙子年十月死	吉村太左衞門	源正次

(以下略之)

六二、未詳十七人

〔新に發見したる藤樹先生の眞蹟其の他によりて門人中に永田權右衞門部安兵衞正眞の存したるを知る。第二冊倭書五五八頁並に本冊卷末再刊追錄參照。(藤陰)〕

落合左　藤樹先生年譜(本全集卷之四十二)寛永十五年の條下に「今年始テ谷川寅・落合左兄弟來テ業ヲ門ニウク」

とあり。また河村平兵衞の谷川玄卜に送れる書狀に「落合丈云云」の語あり。郷貫事蹟倶に明かならず。

富　貞　庵　書翰集補遺（本全集卷之二十）に見えたり。按ずるに淵岡山の門下に富松祐庵あり。京都の人なり。富貞庵は或はその尊族にはあらざるか、暫く疑を存す。

齋　藤　玄　門弟子詩文集（本全集卷之四十七）に寛永二十癸未年元旦の詩あり。此の詩は藤樹書院の隣家淵田岩次郎氏傳來の藏幅中にありて、今尙同氏の愛藏するところなり。

晦　養　軒　書翰集補遺（本全集卷之二十）に一書通あり。書中令室高橋氏の死を云へるものあれば先生の此の書を裁せるは恐らくは正保三年なるべく、また「勢ひにまかせ近年之内致上京候て互のすゝみも申承度候。」といへるによりて、晦養軒は京都に住せる人なるを察すべし。今その文を精讀するに受用體認の深き士にして先生會心の門人なりしなるべし。

仲　純　編者嘗て一小冊子を篋底に得たり。披き見るに藤樹先生の眞蹟にして、聖學上の術語を列記し之に略解を附したるものにして、末尾に和歌五首半を載せたり。之を精讀するに、先生晩年の思想に屬するを知る。表紙に仲純の二字あり、或は疑ふ。仲純なるもの先生の門下にして親しく之を拜受したるものに非ざるか。然れどもその如何なる人なるか、復知るべからず。

木　下　氏

田　中　氏

牛原氏老母　志村竹涯編藤樹先生國字書簡纂補に伊勢人に作る。

中　山　氏　前に同じ。

以上木下氏以下四氏藤樹先生師之花翰詠歌に見えたり。書翰集拾遺（本全集卷之十九）參照。

加　藤　氏　倭歌正編に（本全集卷之十七）出づ。寛永十三年丙子之春先生の和韻あり。

土　肥　氏　倭文集雜著心氣理想論（本全集卷之二十一）參照。

吉田道悅　原田氏所藏雜記に「越前ツルガノ人」と見えたり。

杉原玄齋　書翰集正編答友人寄旅愁倭文（本全集巻之十八）に見えたり。岡田氏本題註に寛永十一年甲戌冬に作る。

替友玉井子　文集二丁亥秋悼替友玉井子早世（本全集巻之二）の文あり。

玄　佐　書翰集補遺斷片（本全集巻之二十）に「一、玄佐去冬極月中旬にもどし申候。今ほど与州に被居候はんと存候」とあり。

左　太　書翰集正編與池田氏（本全集巻之十八）並同補遺斷片（本全集巻之二十）に見えたり。

長尾氏　文集五（本全集巻之五）「吾」の頭注に與長尾子と見えたり。

六三、藤樹先生全集編纂者篠原元博

篠原元博字は以禮通稱坦藏。姓は篠原大阪の人なり。世、閭里の書師たり。讀書を好み書室を澂餘といふ。（東京經濟雜誌社發行大日本人名辭書正書塾に作り同文明堂書店發行日本儒林名鑑正書塾に作る。）著書藝祖基命錄一卷、程蘇學辨四卷、朱陸年譜通攷五卷、藤樹先生全集十七卷、附錄二卷あり。私塾に藏す。老いて子なし一女あり。里久子といふ。嘉永五壬子年四月朔朱陸年譜通攷の謄寫を畢る。此の年九月壽六十五なり。壽藏を玄德禪寺祖塋之北に建て自ら之が記を爲る。安政二年卯五月十八日卒す。壽六十八。歿後二十年を經て明治八年九月某日息女里久子自ら遺著藤樹先生全集、朱陸年譜通攷の二部を携へ藤樹書院に參拜して之を寄進す。蓋し遺命に依るといふ。

（原據）碑文。寄附受領證書寫。松下氏聞見錄。朱陸年譜通攷奧書。大日本人名辭書。傳說。

（參考資料）

（一）碑　文

澂餘篠原翁之墓

翁名元博。字以禮（マヽ）。姓篠原。大阪人也。世爲閭里書師。歲丁未試筆詩曰。六十書師業弗構（マヽ）。歲朝徒爾喜安寧。依然便被兒曹誘。尺幅揮成老復丁。詩題試筆出元風雅。老復丁用急就篇字。蓋紀實也。翁好讀書。書室曰澂餘。取諸邵子詩。嘗編藝祖基命錄一卷・程蘇學辨四卷・朱陸年譜通攷五卷。又纂藤樹中江

氏之舊人。寡欠其文。定爲十七卷附錄二卷。藏於私塾。翁老無子。有一女。常自悼焉。歲壬子翁年六十五秋九月爲壽藏於玄德禪寺祖塋之北。自爲之記。略敍既往。徵見志業乃爾。如事未定者。則姑俟卽窆之日。亟屬工具石。工告石竣矣。於是乎刻。

友人　大阪　澤　愨　書（藤樹書院所藏碑文拓本並玄德寺墓碑參照）

(二) 書　翰

辰三月十日大阪篠原延藏[一]より小川村志村世賴に始而書通之拔書

一、御所藏之珍書五種歸宅後津川氏へも披露いたし候處同段大悅被レ致候。今暫御恩借可レ被二成下一候。近日御返璧可レ仕候。

一、春風之一書當時勸善錄と改名印行いたし候。外に津川氏に寫本有之少々同異御座候。是は貴邑ニ無二御座一候趣承知仕候得ば能々校合仕全集中ニ收入可レ申候。夫故此度ハ不レ指上一候。追而全集脫稿一部奉納仕候節御覽可レ被レ下候。

一、大ニ御面倒之御事御繁用中恐入候得共、早藤氏並貴邑御舊家ニ藤樹先生遺書共何卒御吟味御恩借被二成下一候義重疊奉レ賴存候。津川氏よりも此段宜御賴申上候樣被二申居一候。右再應御求索被二成下一候歟有無之御返書に因而草々校正繕寫いたし全集奉納仕度候間又々御願奉二申上一候。

以上

一、當夏五月廿日之御翰早速到着仕卽　藤樹先生遺書大本並早藤御氏御書御屆被二成下一忝奉二拜見一候。以二御蔭一未承及不レ申珍書共熟讀全集之擧ニ於ゐ稗益不レ尠大悅奉レ存候。漸く兩三日已前抄寫校合功畢候間早速御返璧仕候。每々乍レ憚早藤御氏へ右遺書七本並愚札一通御轉致被レ遊宜御致意可レ被二成下一奉二冀上一候。

(一) 編者曰、延藏とは微餘子の一名か、後記過去帳參照。

先生著書ノ義大阪篠原氏へ申遣ノ下書

小醫南針　　三卷

捷徑醫筌　　六卷

南針ハ石河氏傳寫ノ先生行狀ニ不レ出、醫筌ハ先生沒故八年目明曆元年出板ニテ田中文內トアリ。今書林ニ無レ之由正德ノ目錄ニ中井半右衛門逃トアルハ中江与右衛門ノ誤之。右醫筌首卷ノ跋ニ先生南針中醫筌ニ勝レリト云レタル條ヲ出ス由見ユ。醫筌ハ与州ヨリ大野了佐來テ醫ヲ學ブ此人ノ爲ニ發明アリ。此度入二御覽一候。

日用要方　　一卷

醫書名寄本ニ中井与左衞門作ト有ル由誤リ之。未レ見。

神方奇術　一巻

拙宅傳來ノ寫本脱丁セリ。岡田氏全本所持ノ由。

文　録　一巻

先生行狀ノ終ニ出。或人ノ筆記ニ五巻ト〆文集ノ事ナラントアリ。拙宅文集所持一巻モノ之。

書　翰　一巻

拙宅所持跋文正德三年冬十月石巻題トアリ。今所レ刻書簡雜著總五十余篇ト、右跋文ニ出レバ刻本トナリタルト見ユ。書林未吟味セズ。又端書アリテ追加十編アリ。

右書翰ノ中三十五篇心學文集ニ出。書翰集・心學文集引合セ誤脱異同ヲ朱ニテ書入タル本所持イタス。御覽下サルベク候ハヾ後便可ニ指上一候。書翰集答ニ小川氏ニ書ヲ心學文集谷阿宣ニ作ル。幸井氏ヲ垂井氏ニ作ル類アリ。

詠　艸　一巻

先生行狀ノ終ニ出ヅ。拙宅所持歌集百四首アリ。

安原貞平輯録
別集中　花園會約

熊澤了芥著書

寫本皆々集メタリ。紫女物語ノミ未ダ得ズ。御所持ノ方候ハヾ拜借仕タク候。

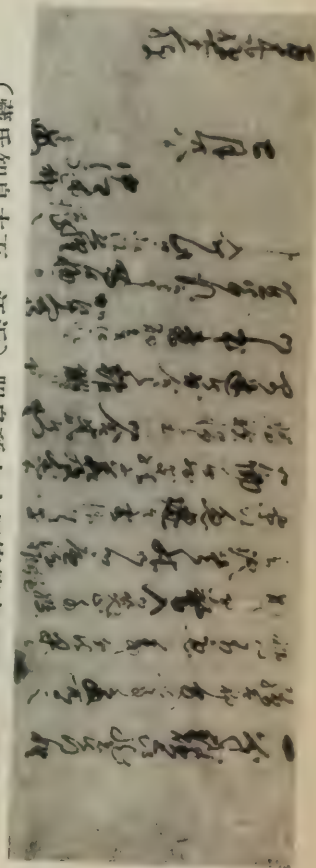
古板
翁　問　答

拙宅所持〇朱ニテ文段ヲ添削シメタリ。

（以上三通聞見錄所載　今藤樹書院所藏）

（三）　寄附受領書寫反古

證

安政貳年卯五月十八日篠原理藏殿御死去ニ相成其後一女ノ篠原里久殿藤樹全書並朱陸年譜通攷共兩部藤樹書院ヘ納候條奇特之至ニ候間永代可ニ

與万木孫右衛門　常省先生眞筆

（近江　万木良知氏藏）門弟子並研究者傳第四十七項參照

岡田季誠氏筆同氏母堂賀壽歌集

（京都　岡田元誠氏藏）

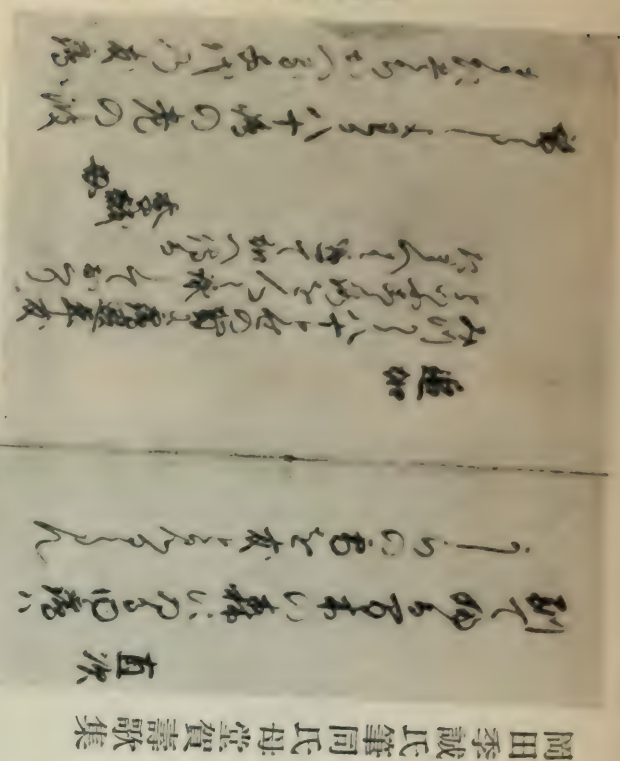
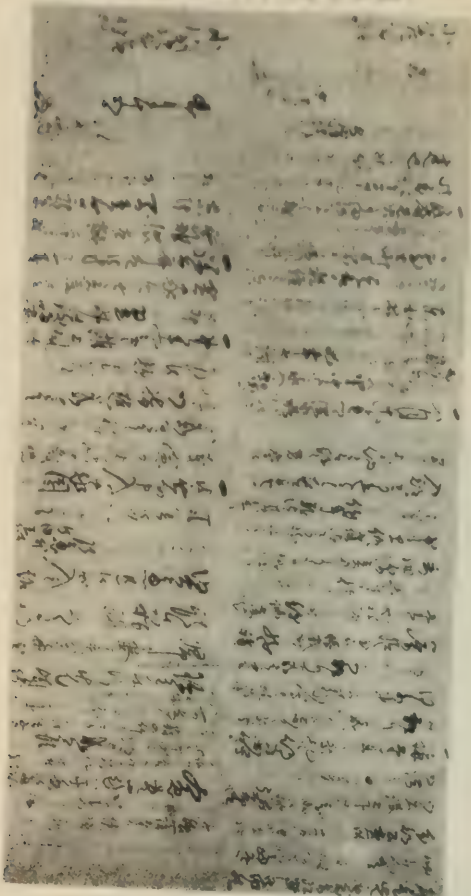
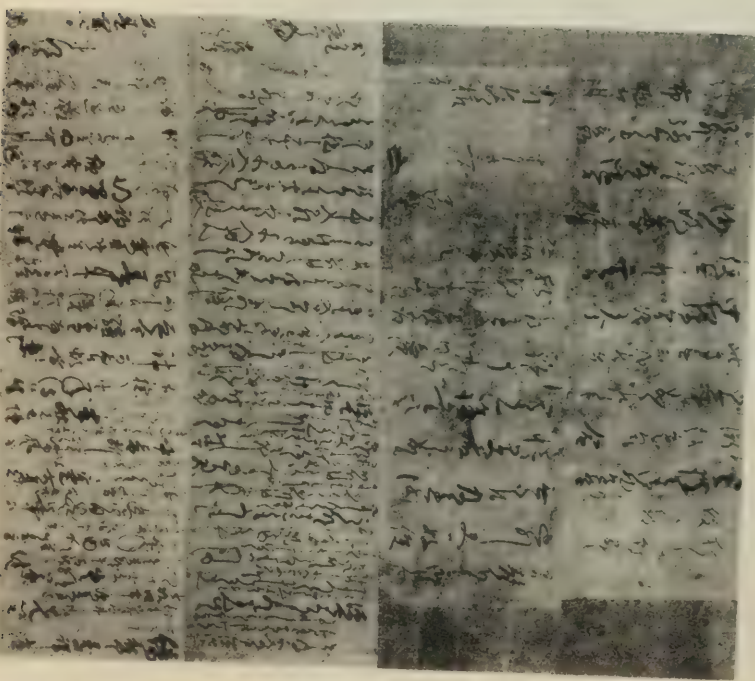
門弟子並研究者傳第五十一項參照

中江數馬・藤樹先生令室別所氏並常省先生書狀

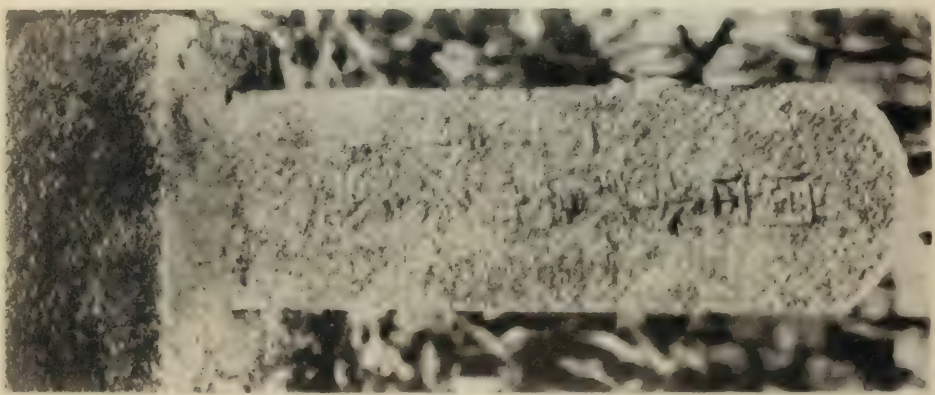
（委員　小川喜代藏氏藏）

與小川庄治郞　常省先生眞筆

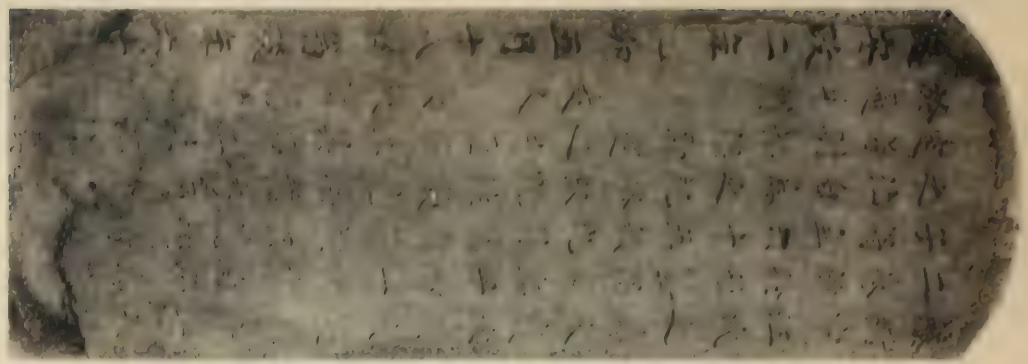
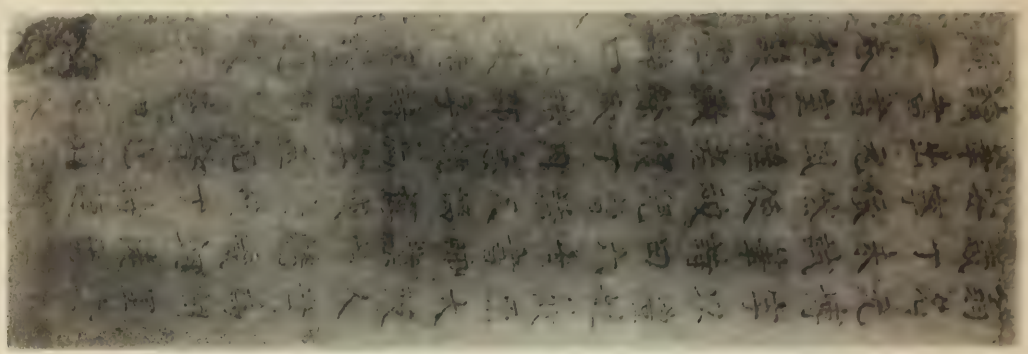
門弟子並研究者傳第六十項參照

（委員　小川喜代藏氏藏）

「藤樹先生全書」編纂者岡田季誠氏墓碑

(所在　滋賀縣高島郡青柳村大字青柳　岡田氏墓地)

門弟子並研究者傳第五十一項參照

「藤樹先生全集」編纂者篠原元博氏墓碑

此碑銘は明治八年九月息女里久子の携帶したる拓本に據り撮影せり

同上碑文

(所在　大阪市天王寺區生玉前町禪宗妙心寺派玄德寺)

此碑文は原田知近君の厚意に依り玄德寺の墓碑に就き撮影したり

門弟子並研究者傳第六十三項參照

篤書院什物ニ者也。右ニ依テ正ニ受納可レ仕候也。

明治八年九月　日　　藤樹書院

大阪南久保（寶?）寺町三丁目

篠原里久殿

（藤樹書院所藏）

（四）澂餘篠原元博氏の墓に就いて

澂餘篠原元博氏の墓は、大阪市天王寺區生玉前町玄德寺境内無緣塔の中にありたり。編者は昭和二年五月書を以て在大阪畏友倒扇原田知近君に碑文の書寫を依賴したりしに、直ちに快諾せられ態々同寺を訪問して香華を供し碑文を石刷として送付せられたり。後、昭和四年一月また碑文の撮影方を委囑したりしに、氏は本全集編纂に關し有力なる功績者たる學者の墓が無緣塔中に在るを遺憾となし、種々考慮を重ねられたりしが、茲に同市北區梅ヶ枝町住龜井ゑふ（滋賀縣高島郡本庄村大字川島出身）といふ一婦人あり、その施主たらんことを申出で、且つ永代祠堂として金壹百圓を同寺に寄進せり。原田氏大に喜び住職某と相圖り、地を相して墓碑を移し樒を供へ回向をなせり。是に於て今後永遠に亙り每年五月十八日を以て追善を行ひ英靈を慰むることを得るに至れり。左に原田氏の送付せられたる玄德寺過去帳拔書を揭げて參考とす。

玄德寺過去帳寫

文化二年十二月十日
貞室惠吟信女　　篠原旦藏伯母

文化五年五月十日
大雄雅齋信士　　篠原旦藏

文化七年九月廿一日
頓倫妙悟信女　　篠原延藏母

天保六年十一月十七日
果道義恪信士　　篠原坦藏悴

安政二卯年五月十八日
澂心紹餘信士　　篠原坦藏事　六十八歲

安政六年十一月晦
守節貞孝信女　　篠原坦藏祖母？

倒扇原田君曰く、尙此の外に丹藏と云へる方一人あり。卽ち同音にて丹・旦・坦の三人有レ之云云。

(五)　篠原元博編藤樹先生全集に就いて

篠原氏が全集編纂に從事せる徑路並年次についてはその記載あるべしと思はるゝ同氏編藤樹先生全集第一卷散逸して傳はらざるを以て明かならず。書翰集與二法勝子一並與二池田某一書の標目題註について見るに文化文政の頃の記事見ゆ。また津川仲通なる人ありて此の擧を援助したるものなることを知る。

（疑義）東京經濟雜誌社發行大日本人名辭書並巽軒井上博士著日本陽明學派之哲學に篠原元博を以て鎌田柳泓の門に學ぶとなし、之と相關聯して柳泓行實を以てその著となせり。而して名古屋市加納恒三郎氏は嘗て同市其中堂書肆に於てその書（寫本）を一見したりといへり。然れども今その書の所在明かならざれば眞僞俄かに斷定すべからず。獨り怪む。元博自ら碑文を撰して著書を數へ、而して柳泓行實に及ばざるを。予また嘗て藤樹圖書館に於て元博の自筆に係る朱陸年譜通攷を通讀したるに卷五、六丁に左の文あるを見たり。

余舊識平安處士西信休及尼榮壽者二人師二事ス鎌田翁一（名鑑圖南紀伊人）云云。

此の文によりて之を察するに元博を以て柳泓の門人となすこと尙研究の餘地あるものに似たり。聊識して後考を俟つ。

門弟子並研究者傳　終

湖學雜纂　解題並凡例

〔解題〕一、本卷は篠原元博氏が藤樹先生全集附錄として編纂したるものゝ一にして、其の載するところのものは、編者篠原氏が各〻其の題註に於て說明せるが如く、同氏が藤樹先生全書序二篇並拔本塞源論私抄序は三輪執齋の雜著中より採り、以下祭文三通並止善書院記と卷末の追加一篇は川田雄琴子の藤樹書院に送れる冊子より採り告二同志諸君先師年忌一說は同じく雄琴子が書院に送り來れる藤樹先生年忌說と題する一冊子より收錄せるものなり。

一、川田雄琴の藤樹書院に送り來れる止善書院に關する冊子は散逸して今傳はらず。幸松下伯季の筆寫せるもの一冊同氏の子孫の家に傳來し、今藤樹書院の所藏となれり。年忌說も雄琴子自筆のものは散逸せりといへども、岡田季誠氏が永眠の年に反古の裏に筆寫せるもの一冊あり。これまた明治三十九年八月同氏編藤樹先生全書と共に藤樹書院の藏書となれり。篠原氏の當時に在りては或は雄琴子自筆の冊子尙存して之より取材せるものなるやも知れざれども、或はまた前記二家の傳寫本に據りしものにはあらざるか。但し先師年忌說に在つては、之を岡田氏本に對校するに漢字と假名との出入極めて多く、何れとも斷言するを得ざれば、暫く疑を存す。

一、本卷は前述の如く篠原元博氏が藤樹先生全集附錄として編纂せる上下二冊中の上冊中に載する所のものなり。二冊とも表紙には藤樹先生全集附錄の文字を明記しあるも、下卷に在つては卷首その題簽を表示すべき個所を切斷し、たゞ湖學紀聞の四字を題はせり。今編者は整理上の必要より、上

卷に附するに新に「湖學雑纂」の名を以てし、下卷「湖學紀聞」と相對峙せしむることゝなしたり。

一、卷首載するところの三輪執齋の藤樹先生全書序二通は、藤樹先生門人岡田仲實の子にして熊澤伯繼の姪たる岡田十之允季誠氏が、畢生の努力を拂ひて先生の全書を大成したる由來を詳記せるものにして、今回刊行の全集をして稍〻完璧に近からしめたるその源を探究すれば、實に季誠氏の功多きに居るといふべく、讀者の一讀を請はざるを得ざるところとす。

一、拔本塞源論私抄に於ては三輪執齋の藤樹先生を推尊せる衷情を見るべく、祭藤樹先生文二通と止善書院記と卷末の追加一篇とは何れも川田雄琴子の作にして、先生歿して一百年大洲に於ける斯學再興の由來を知る上に於て極めて重要なる史料に屬す。今左にその大略を叙して讀者の參考に供せん。

　大洲の地は先生在世の當時に在りては、上下競うて斯學に志し先生之が指導に畢生の努力を拂はれたりといへども、不幸早く歿せられたるを以て、中途にして挫折するの止むなきに至り、其の後禪學の盛に行はるゝあり、幾多の歳月を經て風教振はず、醇厚の美風漸く地を拂ひ、志あるもの痛嘆措く能はざるところなりしが、加藤遠江守泰溫公の代に至り、公は學を好み、江戸に於て三輪執齋の講を聽き大に感ずるところあり、禮を厚うしてその高弟川田雄琴を召し儒官に任せられたり。雄琴は半太夫資深と稱す。享保十七年七月聘に應じて大洲に至り學を講ず。偶〻執齋齡七十を超え痰咳の患あり。病勢日に熾なり。乃ち疾を冒して京師に歸る。一日雄琴京師に之き病を訪ふ。執齋曰く、「吾が病奚んぞ憂へん。憂ふべきものは此にあらざるなり。」と。因て囑して曰く、「汝善く斯

道に從事して豫州に興起せよ。豫州は卽ち中江子出身の地なり。必ず祠堂を建てゝ祭り以てその德を無窮に傳へよ。」と。是より雄琴孜々として斯道の宣布に從事せり。延享元甲子年侯命を拜して書院の建設を計畫す。不幸藩侯疾に罹り延享二年六月を以て逝けり。嗣君泰衍公遺志を奉じて有司をして之を經營せしめらる。その落成するや同志松本久豊の贈呈に係る藤樹先生眞筆に因みて止善書院と命名し、堂は師執齋の江戶に於て經營せる舊號に從ひて明倫堂と名づけ、藤樹先生の家藏たりし孔夫子の像を正位に、王陽明・藤樹先生の像をその左右に奉祀し永く敎化の淵源となせり。是より大洲藩士の敎育は此の處に於て行はれ雄琴並その子孫は之が敎育の任に膺り以て藤樹學の鼓吹に努めたり。

一、先師年忌說は川田雄琴の著にして延享四丁卯年は藤樹先生歿後一百年王陽明先生歿後百八十年に相當するを以て虔んで祭事を營み追遠の意を致したきも、吾が儒三代の制に於ては年忌の祭なきを以て猥りに之を行ふを得ず。是に於て雄琴以爲らく壽を賀することまた古制になきところなれども後世和漢とも之を行ふ。而して人その先王に出でざるを以てそしらず。夫れ禮は三代同じからざる事あり。此は時の宜に隨ひて制すればなり。されば程子已に義を以て起すの說あり。今年忌の祭も人情已むを得ざるところにして祭の本義に背くものにあらず。道學に於てもまたその人を先師と仰ぎその道を祖述憲章せんと欲する門人弟子がその百年百八十年の忌日に當り、その人を愛念しその人を追慕するは止むに止まれぬ至情なるを以て、本年八月廿五日同十一月廿九日の忌日に兩先生の爲に祭を行ふは至當の事なりとせるものにして、以て其の眞摯なる態度を窺ふに足るべし。

〔凡例〕一、底本漢文の部分には返點あるのみにして、句讀點も送假名もなし。今皆之を加ふると共に、附點法の不備なるものは之を訂す。

一、底本和文の部分には、もと句讀點なし。今之を施す。假名文字には濁點なし。今之を附して讀下に便す。

一、底本載する所の目次は、之を其の正文と對照するに、大に異同あり。（目次中の某鄕二字當に峯鄕に作るべし。鄕の字或は卿の字に作るものあり。何れが正しきか今判然せず。）正文の標目は本冊卷頭の目次中に掲載するを以て今再錄せず。唯底本載する所の目次をそのまゝ茲に存して參考に資す。

藤樹先生全集附錄目次

昭和三年七月十日　　小川喜代藏謹識

藤樹先生全集　卷之四十五

湖學雜纂

藤樹先生全書序

三輪執齋

按執齋中年復在江戶。大倡姚江之學。享保乙巳。偶歸京師作是序。今就其雜著中錄之。後並同。

藤樹先生全書若干卷。吾友江西岡田季誠所輯也。先生嘗講學於江西小川時。季誠之父仲實從師事之。季誠生在先生既沒後。而仲實卒亦在其幼時。然而季誠能繼其志。從先生季子常省軒季重子。得聞其道。信之篤。懷之深矣。嗚呼。先生生於江西。長於豫州。後復歸江西養母終焉。其學初尊信朱子。潛心於集註章句。至合大全而講誦之也。然猶憂無所得諸其心也。一日探書肆。遇陽明全書始入本邦。及一見。數年之疑難。渙然氷釋。眞如大寐得醒矣。仍欲獲此書。而家實貧困無可以充書價。乃脫所帶大刀。而充之。手親携笈歸焉。詳覽熟讀。殆忘寢食。於是從事致良知之訓數年矣。超然默會。沛然融釋。得接其心傳於本邦百餘年後也。然後以導後學。無不感發而興起矣。惜哉。越不惑僅一年而沒焉。則未見大行於當時也。其著述書。贈答文。固不少。而國傳家藏。未有輯集之者。若其翁問答・鑑草・大學中庸祕解・論語要語解及鄉黨解・孝經啓蒙・璺筌・春風等諸篇。則固雖既印行於書肆。或不成編未定書。而不見其全矣。聞其餘有殘篇遺文散在諸家

者。則雖片言隻字。季誠必無不求而獲之。其或渉疑貳者。必遺質之。常省子及先生門人泉仲愛・加世季弘・中村叔貫在備州。必取正於斯。而止焉。乃與其家所藏。合而錄之。名曰藤樹先生全書。此書成時。先生長子宜伯。次子仲樹共既卒。季子常省獨存在江府。季誠以此編寄之。并請之序。時遇江府大火。而其書亦罹災。不亦傷乎哉。季誠於是又採其艸稿。再成編。而得復全焉。于時常省子亦既下世。則徒藏之家。多經歲月矣。近頃聞僕尊文成公之道。竊信先生之學。輒寄此編。求之序。僕固雖信其學。非有分寸所得者。則何以加鄙言於君子之書乎。仍固辭之。而季誠猶求之不已。僕又惟之。小人鄙言。固雖不可以汚君子之書。而季誠實大功於先生之書。則又不可沒之。而有後之序此書者。因以爲案。則亦僕大幸矣。於是述其概。序以贈之云爾。享保第十乙巳四月望。後學洛陽三輪希賢九拜謹書。

⊖ 季誠の下或は誠の一字を脱す。下文國字序には「季誠の誠實大功は又これを空しくするに忍びず。」と見ゆ。（紫水）

藤樹全書國字序

按此序年月かの漢字の序に先たつこと四年にして、其命意行文も亦大に異なることなし。是必説有べし。故に併てこゝに載すと云。

藤樹先生全書若干巻は、我友江西の岡田季誠のあつめし所なり。先生道を江西の小川に講じ玉ひしとき、季誠の父仲實従て師としつかふ。季誠の生る、先生既に沒せるの後にして、父仲實にも又幼年にて離るゝといへども、先生の三男江西常省子に親炙して、其道を聞ことを得て、是を信ずること厚く、慕ふこと深し。嗚呼。先生江西に生れ、豫州に長じ、又江西に歸りて母を養ふて終れり。其はじめ朱子を尊信して、心を集註に潛め、大全を合て是を暗誦す。然ども未心に得る處無きを以て、疑ひ止こと能はず。廣く書肆をさぐりて、陽明全書の始て本邦に渡りぬるを得たり。詳覽熟讀して、數年の疑惑盡く解釋す。こゝに於て聖門階梯の適

路を陽明夫子致良知の學に得て、其敎に從ふこと數年、超然として默會し、其心傳を本邦百年の後に接せり。蓋先生德崇く學正しうして、實に本邦道學の淵源たり。かくて是を以て當世に敎へ玉ふに、靡然として其風を慕ひ、其德を崇み、輿起服從せずといふことなし。惜哉。其不惑を越ぬるのみにして卒し玉へば、大にそのかみに行はるゝことを見ざることを。されば先生の著せる書、贈れる文、もとより多しといへ共、家々に納め、國々に傳えて、これを集輯する人なし。かの翁問答鑑草大學中庸の解孝經啓蒙醫筌春風などの書は、既に書肆に印行すといへども、或は未定の書或は不成の編にして、いまだ其全書をみず。其餘殘編遺文の所々に散在するを聞ては、季誠必もとめてこれを獲ずといふことなし。或は疑はしきものは、則これを江西常省子に正し、或は先生の門人泉仲愛加世季弘中村叔貫の備州にあるに送り正して、其家に納めたる處と合せ正し、是を錄し名づけて藤樹全書とす。此書のなれる時、先生の長子宜伯及二子仲樹ともに卒して、季子常省軒季重獨江府にあり。依てこれを送り正して其序を請ふ。其比江府大に火ありて、其書も又灰燼となれり。又痛ましからずや。季誠また其草稿をあつめて、終に編をなし、再全きことを得たり。于レ時常省軒子も亦すでに卒せられければ、空しく家に藏して年月を經たり。近年予が文成公の道を信じて、竊に先生を慕ふことを聞て、其全書をよせてこれが序を求む。予もとより其道を信じ、其學をしたふといへども、寸分の得る所有ものに非ざれば、如何ぞ、鄙言を君子の書に加ふることを得むや。仍て固辭することあまたゝび、季誠尚これを求めて止ず。予又退て思ふ。予が鄙言もとより君子の書を汙すべからずといへども、季誠の誠實大功い又これを空しくするに忍びざれば、後の此書に序せん人の案にもやならむと、しばらく其始終をしるしておくり侍ることとしかり。享保七年壬寅十月中旬執齋の三輪希賢謹書

拔本塞源論私抄序

按陽明年譜嘉靖四年九月答ニ顧東橋一書。其末繼以ニ拔本塞源之論一。卽謂レ此也。又按ずるに執齋雜著私抄を逸して、はつかに是序を收む。又外□一編あり。○是序藤樹先生を推尊すること至れりと謂べし。且當時湖學の流弊亦こゝに槩見せり。故にこれを錄す。

學は心學也。致良知ハ其功也。良知の學政と通ず。夫良知の妙內外二事なく、彼我別人なし。此故に明德を万民應接の事業に明にすれバ、天下即平にして、天地もわが心裡に位す。人民を一念精微の誠に親しめば、明德即天下に明にして、万物もとより各其所を得る也。明德以て其本體を立て、親民以て其受用を達す。これを致良知と云。若夫明德を以て經濟法令の外とする者ハ、明德の量を不知者也、老佛の學是也。政事を以て誠意正心の外に修する者ハ、亦是親民の仁を不知者也。霸功の徒是也。宋の數君子其偏廢の弊を察して、德を精微の內に明にし、業を法令の末に講じて、內外各功を用ひて、道の全を盡さんとす。誠に似たり。されど內外を二にして生意自然の感通に本づかざれば、亦不復聖學之本旨。明の陽明王文成公獨こゝに見ことありて、孟子良知の說をかりて、大學格致の功を掲げ、大學を古本に復して後儒の誤をたゞし、拔本塞源の論を述て、王道の眞をあらはせり。實に前世聖學の恢復也。其門人德洪汝中の輩皆能其旨を得たりといへども、再傳の後終に其統を失ふ。吾江西の中江先師、遺經によりて其緒を接、致良知の學を本邦百年の後に興起し、訓詁詞章の陋を改めり。從學の徒、孝弟忠義の德、良知に發し、忠信愛敬の實、感通に出ざることなし。されど其時を得玉はざるを以て、治平の效を一世にみずといへども、其沒已に八十年にして、其鄉の民父母を慕ふが如くにして、其流を汲む者ハ、又かの忠孝の德、敬信の實を一念感通の良知にこゝろみざること無れハ、先師の治蹟從て知べし。是先師の學、老佛霸功の偏弊に落ず、內外支離の作爲に涉らずして、誠に本邦の王文成公、夫此人に非ずして誰ぞや。惜哉。再三傳に及でハ大義未そむかずと雖、本旨漸失ぬれバ、良知を談ずる者は、聖經を外にして二氏の空寂に流れむとし、治術を講ずる者ハ事業に局して霸功に落むとす。甚しき者は先師の學ハ王氏に非ずと云へバ、二夫子の微意も、將に亦泯滅せんとす。豈痛ましからずや。これを以て身の不肖をわすれて、竊に大學古本に訓釋し、又此論に註解して、共に國字を以てこれを書し、これを兒輩に授て、知行合一の訓、心業不二の良知にそむかざらしめむと欲すと云。享保六年辛丑四月三日三輪希賢書。

祭藤樹先生文

此及後諸篇並大洲教授川田資深作。說各見本篇。今得其手錄寄湖西書院者載此。

維

延享四年歲次丁卯八月己酉。越己未朔二十有五日癸未。大洲教授川田深敢昭告于
藤樹先生。曰。嘗聞聖希天。賢希聖。士希賢。恭惟
先生長于茲土。深希聖賢。遂悟良知之外更無知。致知之外更無學之本旨。木鐸大振於海內。諸
生日益衆多矣。嘗告門人以天下第一等。人間第一義。無別路之可走。無別事之可做。嗚呼。盛
哉。德業輝當世。餘訓逮今日。雖駑劣如深者。良知之明。較知所嚮。況景慕篤信之士耶。可謂大
賜後世。恭惟
先生卒距今一百年也。而今日適値其忌日。先是
先侯既有建祠堂之命。而邇者堂宇新成。嗣侯亦有繼述之孝。今日安
神靈於此堂。使臣川田深祭之。命臣永田某代拜於是。深與同志諸友式陳酒肴。用以揭虔。伏惟
神如在。永奠厥祠堂。世萬無極。尙祈鑒嚮。　謹告。

止善書院明倫堂成。告文成王公　藤樹江先生文

維

延享四年歲次丁卯九月六日。大洲教授川田深敢昭告于大明

文成王公與

日東

藤樹江先生。曰、嘗聞、德有本。而學有要。不於其本。泛焉以從事。高之而虛無。卑之、而支離。終亦
流蕩喪源。勞而無得矣。恭惟

二先生德業輝當世。餘訓流萬邦、所謂自非德有本而學有要者。誰能至此。嗚呼。盛矣哉。我故大
洲侯夙有志於此學。使深每侍講其側。十年於茲。嘗開講帷於客舍。自有司以下至於官屬
小吏及艸莽市井之匹夫匹婦。使知有此道矣。蓋撫育於鰥寡孤獨廢疾者。大洲固行之矣。又
比年賜孝子貞婦謹愿之徒。旌其善行。以盛名教。旁至一藝之士。無有不稱焉。所以誘掖獎勵
者深也哉。加之亦　侯自書教諭三四條。而下之。有司其言曰。有司馭下以仁。順其心而利導
之。使下民勤爾桑禾。謹爾室家。而親屬相親。朋友相睦矣。下民愛吾用。不足而忠乎吾事。我固
知之。有司宜慈愛之。蓋邦君本於躬行心得之餘。所以施於政事者。大率若此。且滕大夫高茂
歷事三四世。從政五十有餘年。進則陳其善。閉其邪。退則與諸臣咨之謀之。未嘗憚吐握之勞。
年既七十有餘。而猶有夢見周公之氣象焉。同僚橋大夫易清亦敏而好學。使深講經於其家。
集有司最任重者。講習討論。不敢廢焉。可謂君臣道合也哉。嘗　侯擇地若干步。命深築

文成藤樹二賢祠堂。永無廢弛而欲令　侯孫子能繼述之。而庶臣亦無不有以知其有本有要
之學而各俛焉以盡其力也。伏惟

藤樹先生。乃　侯五世祖故出羽守月窓公之臣。而長于茲土也。　侯信道之篤。不使

先生此於不敢名之臣。今建祠堂。恭祭神靈。傳其德業於不窮矣。嗚呼。
先生卒距今百年也。而其道亦大弘於茲。豈不復未曾有之一大美事也。諸同志相謂曰。我君嘗
竊乏時。自不寧居。躬節財用。爲祠堂之資。表明賢人君子之迹。以勵士習。於其講堂書院。亦我
君所急也。雖然不忍於費財傷民。猶自苦節日積月累。欲徐圖焉。爲人臣者坐視非道也。於是
捐金鳩材。以經營之。先是長濱小民某某。柳澤山鳥陸里長某某。城東賈人播磨屋權兵衛之
徒。首出銀以助作。從而應之者。亦不鮮矣。夫以田野市井之民。終歲勤動。尚不足以養其妻子。
是以惟利之圖。何暇講學問道。然其切磋砥勵。欲本乎良知之訓。而不違於聖賢之道。雖士君
子。殆有不讓者矣。加之每臨其席。或五錢或三錢。頭會斂畜。以待此舉。與夫佞佛媚神。有爲而
然者可同年而語耶。深　聞之喜曰。甚哉誠之易以感人也。甚哉人之易以誠感也。有司者。賦民
奉國。鞭笞累縶。不能得。則反仇視。今上不出一言。下悅服焉。舍其利而趨其義。沛然若百川之
歸海也。某月某日。堂院已成矣。謂其堂曰明倫。謂其書院曰止善。我　師三輪執齋氏振鐸東
都。與同志諸友經營之。命以明倫而祭
王文成公之肖像。爲講學之處也。一日罹疾。欲歸京師。以深　嘗講易乎斯。賜其肖像及其扁額。副
以金二十五兩。以再修此堂爲意。深　固辭不獲。謹受之。今也得時。以開幽懷。故從舊號。以明倫
名焉。止善者。大學之綱領也。昔有黃鳥之瑞。而乃者又得
藤樹先生眞蹟之贊。因以命之云。事具記中。夫草創此堂者。固我　侯之勤也。成而守之者。大臣
以下庶士之任也。且
先生親炙門人之孫子。綿々存乎今。豈不樂茲學之有成。而忠義有諸己。思以喩諸人。表其祠宇。

樹之風聲也哉。庶民諄々。庶士彬々。有司大夫亦欣々然。而嗣侯大悅此堂之成。然後天人順應之理。陰有以相協。而雨暘維若。燠寒維時。民無疾病。五穀豐昌。地愈靈。人愈傑。山川神威。亦宜自今日始。（宜恐宣誤。）然則祠宇黌舍之有成者。實闔郡後進之大幸也。深前日所獲三生氏

藤樹先生家藏之
聖像。安諸正位。置
王江二先生像於其左右。謹以清酌茶果（菓(伯)）。虔告落成之由。於
二先生。自今而後。
二先生之道。益明乎海內。而至治之澤。蒙乎生民。是祈。

止善書院明倫堂成。祭執齋先生文

按。執齋非藤樹門下士也。而世儒知宗湖學者。無執齋若爲。且止善書院之成。實賴其力。故錄之。

嗚呼。我執齋先生爲斯道。苦其心也甚哉。所謂知我者。謂我心憂。不知我者。謂我何求。於先生乎有見焉。先生初游于佐藤直方氏之門。業既成。事厩橋侍從酒井侯。後私淑王子之學。喜其多益於己。而竊講求其道。於是爲佐藤氏所絕。言既遂至于暴矣。（元博按。正德享保間。執齋納欵新建。直方始終率徵國。於是互相詰難弗已。有往復書數十卷。曰正享問答。執齋家藏焉。）往。欲之愬。則亦逢其門人之怒。困于株木。擠于疾棘者。幾年於茲。然後佐藤氏漸悟其絕學之意。非爲名。非爲利。實爲己而然。遂相見如故矣。佐藤氏病革之日。命子弟先

告先生。先生終夜侍於柩前。有愁傷之和歌。信哉至誠而不動者。未之有也。先生退隱於洛之神山。六年而倍用力斯學。元博按執齋有日用心法及執齋記。並在神山作。時年三十三四矣。京尹篠山源侯篠山侯名信庸。兼任紀伊守。正德中爲京尹。大有譽望。篤信此學。以先生爲師。自茲而後。先生之學。如泉之始涌。如日之方升。雖然詞章記誦之習。淪浹於人之心髓。相矜以知。相高以技能。而獨先生以心學欲有濟於千百年之弊。其勢之不可及也。如容拳突重閑矣。況是朱非陸之說。天下靡然皆然。猶水之與油不相和也。猶方枘圓鑿不相容也。其間雖有如三宅尙齋子與先生友善。一論學。則必譏王子。或謂爲好異。或目爲爲名。至於其最甚者。乃謂王子爲大賊大姦。謂先生爲痴愚狂夫。雷同附會。遂慍羣小。亦前後十數年 覲閔既多。門人小子亦無以慰其心。獨先生立於荊棘之間。而確乎不變。犯海內之誣笑。而泰然不動。然後大振鐸東都。至於門人之多不暇屈指。既而設講舍於下谷泉橋北。門人益進。先生齡過耳順。嬰痰咳之患。病勢日熾。遂輿疾歸京師。當斯時。東方之法燈將滅矣。深 以鹵莽不美之質。而聞道亦晚。雖然先生知愛之厚。忝充門人之數。以斯學徵大洲侯。而徙居於西豫州。適之京師。問其病。先生曰。吾病奚憂。可憂者不在此也。因囑深 曰。汝善從事於斯道。而興起豫州。州郞中江子出身之地也。必建祠堂。而祭以傳其德於無窮。乃手自授王子之肖像及中江子之眞蹟。深 雖固辭不克。謹曰。諾。恐不堪命。甲子年恭承我先侯嚴命。今日祠宇新成。而先生既亡矣。嗚呼痛哉。蓋先生少爲王江二先賢冒天下之非譏。而不顧。以富貴不爲意。及晚雖荊居苟有。家無玩器。倉廩中惟有此肖像耳。今屬深 祭之。而厥身已爲烏有。嗚呼悲哉。向中江子自發明乎王子書以來。學者雖知有良知之説而信之。而中江子既沒。僅百年矣。吾黨各以己見立説。或以無爲良知。或以有

爲良知、或以有無之間爲良知、其間稍見本體者。不勉于克己之功、適用力於克己者、亦蔑如於本體、皆背良知之要旨、而遂畏聖門止於至善之明教、噫亦已過矣。是以近來海内同志之士。雖相講於此學、則亦如僅々晨星、乍明乍滅、未見其能光大也。時有先生出而有以接乎王江之傳、而實以唱斯學爲任。自勝其有我之私、而遂不知己之爲人師、人之師於己、一與海内同志之士、方將因藉毘賴以共明此學、而先生忽逝矣。門人之痛、何可言哉。雖然王江之道。粲然于海内、則先生之有功於斯道、豈小小哉。宜無憾矣。其又窔少(伯)悲乎。深之所爲長號涕洟而不能自已者。雖深不肖無報先生知愛之萬一。而今爲堂院有成。小逢附託之命、而惜(伯)先生不在焉。嗚呼哀哉。夫以道無間隱顯、豈幽明異心乎。藁(伯)先生有知。其尚能啓深之昏、而警深之惰、宜使同志各得志、大行翼斯文、於悠遠。謹以清酌茶果、虔告堂院有成之由、於我先生、言有盡而意無窮。尚饗。

止善書院記

深恒慨東西都。文華之盛。世不乏其人也。而我豫州西海邊夷。地僻人頑。與聞斯文者希焉。惟藤樹先生長於此。旁無師友。而自尋濂溪明道之宗旨。開考亭姚江之蘊奥。探洙泗之淵源。推鄒魯之本根。遂悟無聲無臭之本然。无方无體之妙要。不知不識之帝則。於自己固有之良知矣。不獨善其身。雖東西都人士。竊取法於此者。亦不鮮焉。何必彼夏而此夷哉。然　先生去茲十既百有餘歲。物換星移。流風漸衰。俗習日滋。文獻掃地而空。禮樂典章廢而不講。其間譚性命論經濟者。非緇徒之説法。則兵家者流之賞罰。誣民誑人焉耳。　先生之德澤。於是乎幾絕矣。先是本

邑始有黃鳥。來止於大洲世臣藤大夫之室。睍睆好音。聞者悅焉。深嘗謂是斯道之再興于茲土之先兆也哉。辛酉秋故藤大夫高忠張黃鳥之幨於席上。而召深曰。請爲吾作止於至善之說而賛之。深固辭弗獲。遂書以贈之。且曰。大夫之室。乃　藤樹先生舊宅之東鄰也。而既有黃鳥之感。今亦講止於至善之學。深竊悅乎斯道之將興也。大夫曰。諾。顧　侯之德一日新於一日。臣見其進而未見其退也。然則道之大行也。可立而俟耳。[3]甲子之冬陽復之月。深辱承嚴命。營　文成公與　藤樹先生之祠堂。不幸　侯羅疾。事未成而卒。今年夏五月。[4]橋大夫與有司議而經營之。今既落成矣。茲者同志[5]松本久豐以藤樹先生書緡蠻章[6]於黃鳥之畫而自爲之釋者。（元博按全集第三卷所收綿蠻章着語恐卽此）與深曰。是我先大人之家藏也。今也　先生之堂及講學之書院成矣。因以屬之子。深曰。時哉時哉。祠堂及書院成矣。而未得其名。深謂夫名者實之賓也。觚不觚。而謂之觚。夫子既嘆之。然則雖一物之微。豈可容易名之乎哉。矧於講學書院名敎之所繫者乎。向深賛黃鳥之畫。以應大夫之需。今子亦以　先生所書黃鳥賛贈深。先兆後徵。如合符節也。語曰。國家將興。必有禎祥。斯道果可以興歟。因名曰止丘書院也已。頃之顧丘先聖之諱也。不可不避。蓋綿蠻詩止於至善之傳文也。從經而可謂止善書院矣。　先生嘗以母疾乞骸骨。其書曰。母卒再來仕于茲也。不幸先　其母者命也。然則此地固　先生當止之處也。而今日祭其　神於茲。豈非　先生之素志也哉。於是書嚮所著止於至善之說。併以爲之記云。其說曰。或問如之何可以止於至善。曰。純一無雜而已矣。敢問曰。至善無定體焉。而止亦無定處焉。蓋至善者。天命之本性也。而其發見靈昭不昧者。是乃明德之本體。卽所謂良知者也。純一無雜于其本體良知。則無往而非止於至

善矣。蓋文王之止於仁敬孝慈信是也。所謂安身立命之靈樞也。人惟不知至善之無定體。止之無定處焉。又不知至善之在吾心用其私知求之於外。以爲事々物々各有定理也。求至善於事々物々之中而欲知所當止之處。是以揣摸天下千萬之理而搜索天下千萬之止。支離決裂。錯雜紛紜。遂昧天然自有之中。喪民彝物則之極。噫亦過矣哉。諸同志須先知止於至善之說。此說一明則庶幾學必有所本矣。王子曰。止於至善以親民而明其明德。是之謂大人之學。若欲明明德而不知止於至善則驁乎過高。失之空寂而無有乎家國天下之施。若欲親民而不知止於至善則溺乎卑瑣。失之權謀而無有乎仁愛惻怛之誠。故止至善之於明德親民也。猶之規矩之於方圓也。方圓而不止於規矩爽其度矣。明德親民而不止於至善亾其則矣。（元博按陽明大學問明上原疊用明字。則作本極穩。皆不可改。）大人之學。何以成之。且曰。大學之要。誠意而已矣。誠意之極。止於至善而已矣。能止於至善則意誠心正身脩家齊。國治天下平矣。是故曰。止至善之說一明。則庶幾學必有所本矣。此說也。雖本於先賢之意深不嫺文字。必有買櫝而還珠者。覽者幸正諸。（元博按通篇原乎陽明大學古本序及大學問而作。然文字不免和習。拔萃亦多有未穩。讀者須即本篇審之可也。）

(一)家老加藤高忠　(二)寬保元年　(三)延享元年　(四)家老大橋氏　(五)松本七左衛門大洲臣食祿百五十石　(六)松本山雪(一)畫今愛媛縣新谷町河內宇十郎氏所藏。本個集卷之一第四六頁及插繪參照（紫水）

告同志諸君先師年忌説

先師ハ乃藤樹先生を謂なり。又説中播の梁田先生と稱するハ、卽赤石文學蛻巖梁邦美なり。栗郷此道を蛻齋に學べりといへども、文學は蛻巖を師とせるなるべし。

吾このからだわが此の血ハ、乃父母のからだ父母の血なり。溯て祖曾高に至り百年といへども貳なし。神靈これに依り、我神靈を載て神靈常に在す。故に祭れバ其感格ある事間に髪を容ず。たとへば火と燧の如し。金と石と倶に冷て更に火ありともみへざれども、鑽ば斯に火を發す。されバ古の人齊する事三日にして乃其爲に齊する所の者を見る。祭義曰。祭之日。入室。僾然必有見乎其位。出戸肅然必有聞乎其容聲と。固より誣べからず。我物學びし播の梁田先生我高祖考妣百年忌詩序にこれをいふこと詳なり。夫祭に吉禮あり。凶禮あり。皆愛敬を致して本心の誠を盡す所なり。君子の喪に居る三虞卒哭の祭あり。而一周忌の祭あり。三年忌の祭あり。我儒これを小祥大祥といふ。月を間てゝ禫の祭をなし、これより吉禮を用ゆ。冬至に始祖を祭り、立春に先祖を祭る。高祖より已下四世固常祭ありて、忌日も亦必祭る。忌日の祭ハ悲しみの祭にして、君子これを終身の喪といふ。其外禰の祭あり。又朔望俗節の薦あり。その吉禮凶禮によりて飮福受胙、祝文嘏辭各其別あり。如斯禮備り、儀節詳に、愛敬の誠を盡すの道至らざる所なしといへども、初めて喪に居るの後、小祥大祥の祭の外、更に七年十三年乃至五十年百年等の年忌の祭ある事なし。蓋年忌ハ近世浮屠の說に出、おもへらく人家のために忌齊を修する久しく遠きを以て貴とすと。おもふにかの近世浮屠の說も其論いまださだかならざるか。按ずるに七七齊瑜伽論にみへ、又祖忌齊あり。又盂蘭盆經に是佛弟子修孝順者。應念々中常憶父母乃至七世父母。年々七月十五日以百味飲食安于蘭盆中。施佛及僧。以報父母長養慈愛之恩。といへり。皆死せる人の爲に冥福を祈り且本を報ずるの祭なれども、いまだ五十年百年等の遠忌の據とす

るに足す。もとより我儒の論せざる所なり。雖然十ハ數の終にして、百ハ數の滿る所なれバ、五十年百年の忌に値てこれを祭るもの未必しも義に於て不可なりとすべからず。且其間瓜瓞綿々として不絕。其骨血をうけつぎたる孝子慈孫、豈遠しとして其先を思慕せざらんや。祭義曰。霜露既降。君子履之。必有悽愴之心。雨露既濡。君子履之。必有怵惕之心。註者謂此言君子感時思親也と。それ秋に祭り春に祭る。孝子悲傷驚動の誠意を盡すのみ。蓋悲傷驚動する者ハ仁也。これ人の心なり。苟に人にして斯心を具ふる、世に古今あれども、斯心に古今なく、地に東西あれども、斯心に東西なし。いまだ嘗て茲に怵惕悽愴し悲傷驚動せずんばあらず。此を祭りの原といふ。先王これが爲に祭祀の禮を作り玉へり。悲哉。後世人僞俗漓本を報じ遠を追ふの誠意浸おとろへ、かの士君子たるものも虛文を事とし、或はこれを實にかへすこと能はず。先王禮を制する祭の原たる所以のものを廢するに至る。夫禮は三代同じからざる事儘多し。如何となれバ、時の宜に隨ひて制すればなり。されバ程子已に義を以て起すの說あり。今年忌の祭りも人情所不得已にして所謂祭の原に於てこひねがはくはそむく所なからんか。我しゐて蕃禮に左袒するにハあらず。梁先生又曰。苟得其原而弗失。則禮俗雖陋。儀節雖缺。亦無傷也。吾不詢其禮果出於正與否。所擇者。在乎仁不仁而已。と。蓋今の世儒士の外先王の禮ある事を知ず。畢て浮圖の說に從ひ、所謂七七齋より五十年百年忌をもて纔に愼終追遠の孝情を慰す。もしこの事無んバ、民間誰か本を報じ恩に感ずるの誠を知らん。獺の魚を祭り、豺の獸を祭るにだにも劣りなんかし。我執齋先生祭薦の卷（元博按ずるに祭薦書一卷執齋其門人播州姬路管氏のため晨謁朔望俗節忌日時祭盆會等凡八條に分てり。）に著す。盆供の說に於ても略此旨を述玉へり。世のすこしき學才あるもの臂を攘げ腕を扼り、幸術として彼を禮を破んと欲しをのれかへつて悽愴怵惕の實すくなく、時に感ずる春秋の祭にだにも、其誠を用ゆる事の疎なるあるハ、是何の心ぞや。噫亦不仁なるかな。實に聖門の罪人也。或曰。吾子が此論其理なきにしもあらず。雖然三代の無所、下りて春秋の世に至りても、いまだ其說なし。冀くハ猶これを論ぜよ。深曰夫人の子たり、弟たるもの、父母のいのちながくして、或は下壽或は中壽上壽を得る、其懸弧設帨の辰にあへバ置酒本饍てために其壽を祝す。人の臣たり、

門人たる者の其君の爲にし、其師の爲にするも、又しかなり。祝壽の禮經に於て見ることなく、春秋の間も亦聞ことなし。詩大雅に虎拜稽首。天子萬壽といひ、豳風に爲此春酒以介眉壽と見へたれども、年を賀するの據とすべからず。杜氏の通典に灼然たる明文に非ざるのよしみへたり。但史記淳于髡が傳に髡對齊王侍酒于前。奉觴上壽の語及び楚莊王置酒。優孟前爲壽の事あれども皆戰國の時の事なり。されば年を賀するの禮三代のなき所、先賢のいまだ言ざる所。降りて春秋の世に至りても其事なしといへども、後世方にこれを祝す。殊に孝子忠臣賢子弟皆この事ありて和漢人敢て其先王に出ざるを以てそしることを聞かず。蓋長生に祝し久遠に祭る。其理もとより二にあらざれば、今その愛念追慕の年忌の祭をなす、古これなしといふとも概してこれを不可なりとせんや。且我此論をなすこと他にあらず。今茲延享四丁卯のとし近くハ藤樹中江先生卒後一百年遠くハ　文成王公百八十年也。謹て考ふるに、藤樹中江先生ハ　後光明帝慶安元年戊子に卒し玉ふ。我先大人出生の年也。大人行年六十八にして正德五年乙未に終り今年卒後三十三年也。これをもて考ふるに年數たがひ有ことなし。文成王公ハ明の世宗肅帝嘉靖七年戊子に卒し玉ふ。日本　後奈良帝享祿元年にあたりぬ。藤樹先生の生年慶長十三年戊申を距こと八十一年なり。これも亦年數たがひあるまじきにや。嚮に所謂孝子慈孫其先の年忌に値て其神を祭る而已にしもあらじ。道學に於ても亦其人を先師と仰ぎ、其道を祖述憲章せんと欲する門人弟子其百年其百八十年の忌日にのぞみ、豈其人を愛念し其德を追慕せざらんや。これ亦不得已の仁心なり。されば先儒未其事なしといふとも、年忌の禮祭、義をもて起すべきか。名目姑らく浮屠によるといへども、我必しも念經稱名して佛にけがれ諂はんとにはあらず。たとひ同志盛にして年々忌日の祭祀綿々として不怠といふとも、人心常に馴れば誠敬いつとなくうすらぐ習ひなるに、まして年月累なるにしたがひ、老輩の同志も多く泉下の客となり、忌日の祭禮も次第におとろへ、まことに心細く覺へ侍ればなり。されば只今の同志今年　兩先生の年忌にいざなはれて、其人を愛念し其德を追慕するの心、新に憤發すとならば、愈鼓舞作興して愈其憤を發し、愈其志を立べし。必明日ありといふべからず。夫憤を發し

志を立るは學問の本根にして、所謂愛念追慕の誠もこれに因てなる。八月廿五日十一月廿九日ハ兩先生の忌日也。其期に臨で、僞に其誠を求めんと欲してハ臍を噬とも及ばずして、かへつて神明を汚し己を欺くべし。よつて固陋を忘れ漫にこれが說を作り海内諸賢のそしりを犯し、且同志諸君の耳目を驚かす。辱も同志諸君深が愛念追慕の感激に於て一も採る所あらバ、姑らく漫說を罪する事なく、不得已の志を憐み、協力同寅して所謂學問の本根を立、此道の興起を圖り玉はんかし。

丁卯二月　　琴鄕藤深北窓翁　謹識

此父琴鄕の筆にして藤樹書院に寄する別幅の書なり。當時大洲君臣俱に先生を尊崇するの梗概此に因て見つべし。たゞ其中所謂別記なる者予いまだ見ることを得ず。ゆへにかの詳なるを知ることあたはず。實に憾むべし。

追加

一、丁卯之年八月二十五日御祠堂新成、　先師百年御忌日之御祭禮執行ニ付、先期同志之習禮壁書警戒之書付、當日御祠堂へ奉徙候趣、且主人代參拜禮之姓名並御備物儀節、有司之姓名等具ニ別記有。

一、同九月六日先期て日をトし同志之習禮等前之通相調、當日　聖像王子御像新ニ成候御祠堂ニ奉徙候趣、聖像王子藤樹先生並三輪執齋氏併祭り奉告落成候。御祭禮御備物儀節並有司之姓名等具ニ別記有。

一、此度止善書院へ致安置候　聖像ハ、御門人淸水子へ御讓被成候　先師御家藏之聖像ニ而候。淸水子ハ先師爰元御暇之節先師を慕ひ御願を申錄(ま、)を指上、近江へ引越御側ニ附添被申候親炙之御門人也。（元備按するに淸水子の事年譜にみへず。はつかにこゝに見ゆ。年譜の闕を補ふべし。）元文五年庚申八朔に其姪孫三生重種より深へ傳はり、此度御祠堂へ納申候。先師御沒後百年に至り、此度　神靈を此鄕に奉祭御家藏之　聖像亦於御祠堂奉祭候事、冥加至極未曾有之不可思議ニ候事。

右聖像委細之來由並淸水子之始末具に別記有。

一、同安置　王子肖像之事。是は我三輪執齋子數年心を盡し、先年石河土州侯長崎御奉行之節御賴申、周雪

畫致ニ出來候得共、冠服等之吟味とくと不ニ相調一候。其後細井因州侯長崎へ御越之節、折節　公儀大清會典之御用ニ而（元博按ずるに鳩巣手簡ニ高玄岱父子　徳廟の敎を奉て長崎に至りて大清會典を譯進すること見ゆ。正に此時の事なるべし。）唐山より被ニ召呼一候擧人沈燮菴（名丙）在留ニ付、段々吟味相調、慶山と申唐畫師之畫二幅出來、一幅ハ江戸下谷明倫堂に安置し、一幅ハ寛保元年酉三月廿七日江州藤樹書院へ納レ之。深これを持參せり。右明倫安置之御像執齋氏より深へ附屬し、此度此地ニ明倫堂再興ニ付亦これを安置せり。（元博按ずるに先哲叢譚に執齋嘗屬ニ長崎鎭臺一得ニ王文成公畫像二幅於彼邦一。一則藏ニ諸大洲明倫堂一。一則藏ニ諸近江藤樹書院一。今尙各存。さいへるハ此と略〻合り。但二幅ともに彼邦より得たりとするは誤れり。一齋佐藤君嘗て予に語らく、執齋彼邦より得たるものハ、彼文成祠中の塑像を摸せり。藤樹書院所藏の者ハ又彼本によりて畫ける也。其人現に大洲に在りと聞と。此まさに栗鄕云所とあへり。たゞ慶山といへる畫師のことはいはず。其人現に大洲に在りと云るは傳聞の誤か、はた予が聞所の審ならざるか、おぼつかなし。覽ひと予が著せる湖學紀聞を以て併考ふべし。）

右肖像委細之來由具ニ別記有。（周雪畫も深所ニ持之一）

一、同安ニ置スル　先師御像之事。元文五年庚申同志阪井尙房於ニ東武一狩野友甫を寓居に招き寫得し肖像也。

右　御像之義是亦別記有。

一、先師御母君の爲御暇御願ひ書案紙之寫。

右　御眞筆當所中村文五郎代々傳ニ來之一。右之御文中ニ有レ之。數人之姓名御實名前後四人。今其子孫等具ニ別記有。

一、先師御眞蹟黃鳥之贊當時町奉行松本七左衛門久豊家藏（深へ）之附屬し、此度止善書院ニ納レ之。

右御眞蹟之寫並先年我朝黃鳥はじめて大夫加藤玄蕃庭前之喬木ニ來り止りし子細具ニ別記有。

一、先師親炙御門人之孫子一堂に相集り、此度御祭禮相勤候。右姓名並役儀錄等具ニ別記有。且先師漢文和文にのり候御眞筆銘所持之分略別記ニこれをのす。

一、大夫加藤子此度（深へ）附屬之　先師御眞蹟孝字並釋。

右之寫並委細之來由別記有。

一、米錢祭器等寄附之姓名別記有之。

一、止善書院と申額此度これをかけ申候事書院記中ニ具ニ見え候。

一、明倫堂之額。是ハ先年江府下谷講學之書院へかゝり候。細井廣澤手蹟ニ候。執齋氏より深く附屬し、此度かけ申候。是亦記中ニ具ニ見え候。

右別記一卷事永くかき高ニ候而此度御同志方へ得懸御目不申候。此度御祠堂漸出來其餘之間所未出來不仕、今以大工遣等致申候。何とぞ此度之次而ニ當地所々ニ致家藏候御眞筆取集世上ニ有之候先師之御書簡と引合所寫之違を相改申度と同志打寄申合候。此前少々引合せ正し候も有之候へ共、今以多用ニ候故、とくと校合相調不申候。尤引合候分ニハ謹家所持と申事を記可申候。御書簡に載り不申御書ニ甚御深切成御書拆も御座候。是亦追加致し候積ニ御座候。近來米湊火災之節も彼是御眞筆致燒失殘念ニ存候事故存立申候。各樣御方角ニも御眞筆御座候はゞ世上流布之本御校合御正被成爲御知可被下奉賴候。元博云當時此擧ありて終に果さず、世復善本無からしむ。實に憾むべし。於是輯編全集の擧止むべからざるをますます自から信す。

一、先代褒美賜り候當地山野市井之孝子貞婦誠ニ感涙ニ禁ざる事跡共ニ候。依之先年草稿一冊相認置申候。數人之事ニ候故未とくと清稿相調不申候。此度御祠堂之儀にさして頁も不申事之樣にも候へ共、王江二賢へ告奉り候文ノ中へも略其義をのせ、且其書之序ニも、一時に孝子貞婦謹愿之士之相顯候事、偏ニ先代篤く道を信ぜられし故と書申候事ニ候。元博按するにこれ大洲好人錄の序に謂なるべし。琴郷の筆にして卽印本の首に載たり。御同志之内　先師之御餘光と存候へバ可默止樣も無御座此儀ニ及候。私事甚及老衰旦夕を計りがたく覺候故、是亦入御覽度存事ニ御座候。當下不憚番をかきね候。先是迄ニ而閣筆候已上。

㈠年譜寬永二十年清水氏來學のことを載す。㈡大洲傳來王陽明先生畫像。神戶市在住河內陽一氏所藏大洲町中町三丁目城甲文友氏保管。
㈢大洲町故中村四郞太夫氏秘藏。㈣御眞筆今愛媛縣新谷町河內宇十郞氏秘藏。（紫水）

湖學紀聞　解題並凡例

【解題】一、本卷は湖學雜纂と同じく篠原元博氏が藤樹先生全集附錄として編纂せるものにして、書中識すところは藤樹先生及び江西學派に關する史料の漫錄にして、或は資料を典籍に得たるものあり、或は口碑傳說に得たるものありて參考となすに足るもの少からず。然れども間〻誤傳に屬するものなきにあらざれば、編者はその見るところを各項の末尾に識しその長文に亙るものは解題中に記述して讀者の參考に供す。

一、本卷中「中江氏先塋舊在其宅後云云。」の事古傳の書記述する處なけれども、今尙傳說の存するのみならず、笠原氏及び編者の家の如き、又青柳村大字青柳岡田氏（岡田季誠氏の裔）本庄村大字舟木松下氏（松下仲伯の末裔）の如き、孰れもその邸内に墳墓を有したる例もあれば、先生の先塋がその宅後にありたりとの事信ずるに足る。編者の祖父小川城太夫秀則の手記に「明曆中邸内に葬むることを禁ずるの御觸れありたれば一般に相成らず。それ故先生の御墓も玉林寺に移したり云云。」とあり、參考すべし。

一、本卷中「志村仲昌者因置田掌其事云云。」は祭田を置きしことを云ふ。此は拙稿藤樹先生景慕錄に「寶曆三癸酉年大阪鴻池彥右衞門同宗吉より金拾五兩中井忠藏五井藤九郎三宅才次郎懷德堂社中より金二百疋江戶三村市右衞門市川小右衞門長尾傳藏三輪爲之丞より金貳兩祠堂として寄附祭田。」といへるものにして、此の資料は大溝舊藩士故橫田耕次郎氏の舊記によりたるものなり。橫田氏は舊幕

時代に於て藤樹書院に關する事務を管掌せり。尙本全集卷之四十景慕詩文集中に祭文あり。參看ありたし。此の記事三輪執齋の事蹟と混淆する處あり。依て一言こゝに及ぶ。

一、本篇記事往々誤謬あり。また研究を要するもの少からず。今本文中必要に應じて右方に㈠㈡を附し、各項の末尾に編者の所見を識して讀者の參考に供す。

【凡例】一、底本もと句讀訓點なし。今新に之を附す。

一、底本には中江氏譜系中志村竹涯老人筆にて書入せるところあり。今（　）を附して之を區別す。

一、對校せる諸書は左の略符を以て之を示す。

眞蹟（眞）　　藤夫子行狀聞傳（行傳）

一、年譜以下の諸編に在りては註記をなす場合に例へば本全集卷之四十三若しくは本全集卷之四十四と明記したれども本卷に至りては簡略に從ひ補傳又は門弟子並研究者傳となしたり。讀者之を諒せよ。

昭和三年八月一日　　小川喜代藏謹識

湖學紀聞内容細目

湖學紀聞

藤樹中江先生集十七卷。既已脫藁。予嘗爲之究心幾十年。凡事有係湖學源委者。每聞見。輒錄之。得若干。則題曰湖學紀聞。萬年有言云。學不同道者稱。生不同時者望。後之君子試讀是編。乃知萬年之言。實非先生。弗足以當之矣。元博謹識。

藤樹書院慶安紀元春肇鳩工度材。及其成焉。則先生夢奠矣。於是即其東偏爲祠而祀之。寛政中正二位右大臣一條藤公(忠良)奉　旨書德本堂三大字以賜之。初蒙　旨將賜　御書扁額。有故懇辭。遂得寢㊀罷。尋有是　命下。蓬華之堂。被玆榮渥。可謂　特恩異數矣。近聞侍讀伏原清公(二位宣光)賜致良知三大字。使懸於衡門之上。方今謀摹刻云。

㊀ 寢は恐らくは寑の字の誤。（紫水）

書院屋背。有蔬圃數畝。即先生宅趾也。其北有小篁㊁。篁之西北有古藤緣木。書院之名。實由此。中江㊂氏先塋。舊在其宅後。先生歿亦葬此。明暦中改葬玉琳寺。

㊁ 今空地、補傳第四十項挿畫藤樹書院舊圖參照。㊂ 今廢して盛土を爲す。㊃ 解題參照。（紫水）

慶元糙擾後。文運漸盛。然僻邑寒鄉。無有知學者。先生歸田。諸州之士。稍々及門肆業。多武弁子弟。佩刀往來。衆咸注目。至於郡吏使人覘之。後知其敎人彝倫常事不啻。異議遂息。亦有從游者。化及鄉邑矣㊃。大溝侯在江戶聞先生之名。慚不識其人。還藩召見。屢請得遂待之加禮。

㊄ 年譜正保三年並事狀參照。（紫水）

先生之道。諸侯能知而師之者。當時有吉備烈公。先生家居。公賜書下問。幾無虛月㊅。每入覲東下。至大津驛。輒延先生於驛館。論學達旦。西上日亦如之。先生歿。公奉神主於西城而祠之。今遷奉和

氣郡八木山村影堂中。

(七) 門弟子傳池田光政の條參照。(葉水)

後儒深知先生、而尊之者、莫若執齋之若也。執齋嘗謂先生祠爲邑人講大學。(一)元文六年三月、使

門人川田資深 字〇〇(二)。號某郷。稱半大夫、仕大洲侯。 來捐貲、以佐葺費。邑民志郡(三)仲昌者。因置田。掌其事。執齋又藏

大成殿圖(四)、先聖像、兗郕(五)以下從祀諸像、王新建像於書院。俱皆漢人筆。寛政中有旨上之。即經

御覽、大加叡獎、勅反賜之。(六)

先哲叢譚、執齋嘗屬長崎鎮臺、得王文成公畫像二幅於彼邦。一則藏諸大洲明倫堂。一則藏於近江藤樹書院。今尚各存云。又執齋嘗抵近江小川村、集士民講學。四座皆感泣服之。翕然相謂爲藤樹先生再生。予嘗錄此二事、以質之於書院長志郡世頼。世頼即答予者如有。後江戸一齋佐藤君語予曰、頃遊湖西書院、觀所有大成殿圖及兗郕諸子像、皆粗工所作。但先聖像、是元人筆。極爲精絶。非神手不能也。又曰、王文成像、執齋得於彼邦者、即彼摹其祠中塑像來。藤樹書院所藏者、是又依彼本畫之。聞其人見在大洲執齋家。又有文成像一幅。其像極大。軸清刻全書本所收縮圖。絲髮不差。是乃眞正肖像也。又曰、叢譚乃某門人著之。然如羅山鷲峰鳳岡諸公傳、實出某筆。其佗亦多商量。如執齋藏文成像書院條、後覺有誤。業已刊布。雖悔奚及。予謂由是攷之、世頼說與叢譚合者、蓋偶誤答耳。若其佗說、盡足據信云爾。

(一) 補傳江西に於ける藤樹學の消長云云の條參照。(二) 底本には字の下二字を缺字となし號を某郷に作れり。志村竹涯、字を某卿とし號を雄峯と改め書せり。今採らず。(三) 解題參照。(四) 文宣王廟圖を指す。(五) 兗(顏子)郕(曾子)以下從祀諸像に關しては天保二年同十四年の寶物目錄に見えず。また記錄の徵すべきなし。(六) 叡覽に備へたるは先聖像と藤樹先生の像のみ。(葉水)

先生妣北河氏。奉佛甚虔。剃髮名榮松。每詣佛寺、燒香聽僧說法。輒先生侍行。(七)和氣婉容。見者感動。先生不得終養。齎恨而逝。妣峇丁十八年亡。寛文乙巳十二月廿二日。享年八十八。

㊀ 祠堂創建恐らくは先生歿後の事ならん。㊁ 恐らくは謬傳。（紫水）

淵宗誠（稱源兵衛）陸奥會㊀津人。師事藤樹先生。又㊂奉神敎。初居洛之雙岡（補正參照）。號岡山。後家一條葭屋町。先生㊁去豫。慮有後命。寓淵氏待之。閱月而歸。先生下世。宗誠思慕弗已。立祠園中。㊃傍曰高千穗大明神。歲時祭薦。作詩紀之。詩卑陋不成語。故不錄。以謂 皇國神人。西土聖人。其揆一也。天生藤樹。以明聖道。卽明吾神道也。蓋 神武帝以降。邈不可得者。而今一覩之矣。豈可不尸而祝之哉。其尊信如此。宗誠子孫世業儒。天明戊申之災。其家爲焦土。先生祠獨得不燬。衆固以爲祀稻荷。於是翕然盛傳有靈云。

㊀ 會津藤樹學派の書類はすべて仙臺の人となす。㊂ 岡山が敬神のことは見ゆれども神敎を奉じたりとのことは示敎錄等に見えず。恐らくは謬。㊁ 淵宗誠卽ち岡山が先生を知りしは後年の事なり。此の說非なり。㊃ 行狀聞傳參照。（紫水）

㊄陽明學聞書。有野條勝眞小倉一信岡田定好辻憲尙數輩。竝京師人。受業淵氏之門。又有大內玄淳者。見識卓絕。議論英發。善讀姚江藤樹之書。且論其異處。又能辨諸人倍藤樹說者。良可敬也。卷末載諸州學者姓名。寶永寬保之際。幾三百人。除京師湖西外。陸奥江戸爲最。伊勢次之。大和攝津越後美作淡路又次之。

㊄ 編者いまだ此の書を見ず。今此の記事に依れば、京都に於ける淵岡山學派の事蹟を記述せるものの如し。博雅の士の指敎を待つこと切なり。（紫水）

㊅執齋在京師。屢詣葭屋町。渠鄕亦嘗一詣焉。見於聞書。

泉仲愛。（稱八右衛門。熊澤伯繼弟。）世稱德行君子。同兄事藤樹先生。與中川謙叔加世次春。委質備藩。俱見任用。烈公政理。於是可觀。按仲愛謙叔言行。見烈公遺事松崎堯臣窗吟等書。

(九)門弟子並研究者傳第三項參照。

井上國貞。（稱和泉守後日眞改）浪華刀匠也。（國貞與熊澤友善。其所鑄刀。曾經熊澤指點。遂變得如此精良。）師事藤樹先生。刻苦爲學。浪華距高島約廿六七里。國貞一月家居治產。一月在高島受業。擔囊來去。五年弗輟。在高島每寓淵田(二)氏家。（熊澤亦寄淵田氏。）一日主人戲之曰。吾食子有年。何用見報。國貞曰諾。吾將有報。後三五年。際造大小刀各一口贈焉。國貞近世良匠。名聲大譟。而莫知其好學者。故著之。

(一)門弟子並研究者傳第三十四項參照。(二)淵田氏は松下氏の誤。（紫水）

淵宗誠家藏藤樹先生眞(三)一幅。吾友津川仲通。嘗就德岡氏得請寫之。先生儀容。豐頤朗目。疎眉東髮。著肩衣及袴。垂手端坐。瞻仰之。不覺起敬。（一齋佐藤君云。書院藏先生故衣數稱。皆極闊大。意疑何等軀幹。解穿了遺樣衣。後瞻茲像。方信其堪用。）又書院有先生著深衣像。大失其眞矣。

(三)補傳第三十八項參照。（紫水）

書院有伊藤東涯書竹簡二鐫之懸于東西壁。曰。神之格兮。不可度。（東壁）曰。夫無常享。享克誠。（西壁）志郡(四)氏家有東涯(五)詩一幅。云。宿安原氏宅。翌年到小川。尋藤樹書院。江西書院聞名久。五十年前訓義方。今日始來弦誦地。古藤影掩舊茅堂。辛丑八月十一日長胤書。

(四)藤樹書院藏幅なり。志郡氏と爲すは誤。(五)東涯の下底本誤つて涯字を衍す。今刪る。（紫水）

東(六)涯誌安原仲武墓云。時中江子隱居。江西邑曰小川。專倡新建之道。人稱篤行君子。其書院尚在。翁諱小治。字仲武。世居南市。與小川地相接也。其屬高島縣。翁私淑其道。誘進後生。遺風餘俗。恂々如也。按仲武生於先生歿後。此私淑云者。蓋師事常省子也。仲武長子貞平。字伯亨。受業東涯。校刻釋親考。後仕信之上田侯。東涯作序贈焉。予嚮遊書院。因訪其家。得其手筆藤樹別集一卷。

題云。享保庚子季秋安原貞平伯亨輯。以附諸本集之後。

伯亨作書院記曰、唐虞三代之學、實學也。所言必踐、所知必行。故其立言、論道、愚夫愚婦之所能知能行。而不出日用彝倫之外。漢魏以來風俗日薄。訓詁文字之學盛行。而質直誠愨之敎漸衰。所言不必踐、所知不必行。故其立言、論道、不膚淺陋劣、則騖高遠。過精微。雖有過不及之不同、而道之不明則一也。爰稽本朝在昔禮樂文物之盛、雖不讓漢唐、然聖人之道、未全闡明。或流詩賦、或陷異敎。躬行實踐之學、則寥如也。惟藤樹先生傑出于草莽之中、首唱彝倫之學。脩己之篤、爲人之忠、一出至誠、而無涉安排僞飾者。不爲流俗移、不爲汚世鑠。實可謂三代以上人物矣。海內望風、桃李滿門、遂回千載之視聽、而復淳古之實學。其功不亦偉哉。以慶安戊子歲卒。琶湖之濱小川之邑、先生所居之地。有書院尚存焉。傍有祠堂。門左古藤儼然。乃所由以稱藤樹先生者也。邑北有墓碑。數十年間、堂宇不脩、寖就廢圮。享保辛丑歲。邑侯左京亮忠朝臣光新出文券、永復祠地租稅、以爲祭奠之資。四方慕風者、聞而感之、戮力緝理書院祠堂。墓畔繞石欄、以復其舊。春秋二仲享祀不廢。書院楣間揭先生之學規約。每月五十日會讀講習。嗚呼。邑侯一唱、而四方應之。荒廢一旦修擧、士氣翕然興起者。如此其速也。亦可徵先生之遺澤遠蒙海內、而永爲本邦之泰斗矣。邑人屬予以紀其事云。享保丙午夏六月安原貞平謹識。按此記論先生之學、娓々累數百言。畢竟說出骨髓不着。以其非湖學之派也。而推尊先生之德、則至矣。故載之。

(六) 紹述文集並墓碑大同小異。(七) 今滋賀縣高島郡安曇村大字田中の一部。(八) 按以下篠原元博氏の筆。(九) 安原貞平の子孫は信州上田に在り、こゝにその家さいへるは生家權兵衞を斥す。(十) 伯亨自筆藤樹先生書院記故原田弘藏氏寄附。今書院に藏す。(紫水)

分部吉命字仲穀、稱玄蕃。以庶孽故出嗣肥後國宰某家。先哲叢譚、藤樹同里人、來江戸嗣某家。蓋傳聞異辭也。　橘南谿東遊記

載肥後都井某詣一國宰家。談及藤樹先生行實、見其人出示先生眞蹟、禮敬甚至。乃竦然改容、郎謂此人也。嘗扁祠堂曰藤樹書院。又題壁曰、大哉先生之爲德也。歿後百有餘年于今。右堂續儼然。余辛巳之年、初拜謁祠堂。實八月十九日也。鄕隣諸生祭祀畢而降胙、飮福薄言息。門下老圃常耕者、告余曰、堂無扁。冀書以奉焉。吁。余也不敏、何應其請。雖然老圃之志如之何。夫子曰、三軍可奪帥也。匹夫不可奪志也。至矣。飽食煖衣、無所用心、余常所懼也。於是乎遂書以塞責、可耻之甚也。時寶曆十三年。癸未春三月下澣。分部昌命拜書。

㈠ 分部昌命筆藤樹書院扁額今藤樹書院の楣間に在り。（紫水）

書院有藤樹規。後人書也。

書院東軒小牕上有致良知篆横版。鐫之、就牕觀焉。則點畫透版背粲然。相傳藤樹先生篆也。或疑先生摹明人書。然則可謂加奇矣。

和版書籍考。辛島宗意著。元祿十五年刊行。載先生翁問答、引永祿中近江佐々木臣三上大學秀氏著一書上之。其主名曰翁問答。因疑先生所著者、雖創意立言、而命名蓋祖此。予謂此事未見出處。想必後人杜撰。若姓三上名大學、以證其湖人而能識字。可謂乖巧矣。然一遇明眼者、僞飾照然。蓋其刻意僅就者。適足以自供耳。自昔湖人好著僞書。若江源武鑑、擧皆誣妄。亦可驗也。

世曰先生近江聖人。不是當時爲然、至於今日煒々矣。偶記足利治亂記有熊谷高實者。湖人也。仕佐々木。食邑鹽津。稱備後守。天資英敏、好學自脩。學者蝟集其門。一時稱爲近江聖人。足利公屢召講經。應仁初高實抗疏言、絕女謁、簡冗費。語極剴切。大忤公意。竄死南國云。按此似本於應仁記杜撰以媲先生者。姑錄俟攷。

中江氏名湖人。而非一姓也。㈠中江是湖東地名。天文中有城壘。故士族家焉者。多因爲氏。紹述文集有，岷山中江翁墓誌。謂其先出志賀源氏。又小川郷邑㈡萬木有中江某。㈢本居宣長門人世爲邑之著姓。而非藤氏也。

㈠今湖東此に適合する地なし。尚研究を要す。 ㈡一に東万木といふ。青柳村大字青柳の一部。 ㈢中江某名は千別。

吉備國學㈣有藤樹先生手筆孝經版。予從一齋佐藤君得一觀之。經從古文。去數子曰字及章名。首載江氏誦經威儀。悉皆若啓蒙本。字極細楷。首尾完存。憾歲月久遠。浸漫漶爾。跋云。此孝經江西藤樹先生之筆蹟也。先生每旦澄心慮。拜禮此經。先生沒後。高弟中川子自祠堂之中拜受。而命工鏤梓以頒行四方。同志既滿于千數。其後先生之學。遍雖知于世。物換星移。人心日薄。而信之者鮮矣。故某獨尊敬茅屋之中。年已久矣。竟患爲田舍之塵。于茲寬文十三年。秋七月下旬。從中江子請奉納備陽之學校。最所令兼望也。欣躍不斜。則附屬先生之嗣子中江彌三郎。洛西隱士何陋軒。按何陋軒。不知爲何人。豈淵氏之徒也歟。

㈣國學とは岡山藩學校をいふ。泮池の内又伴宮とも見えたり。寛文九年の開校にして蕃山事を督す。編者昭和二年一月岡山市に至り、此の書を求むれども見るを得ざりき。（紫水）

芳洲雨氏云。藤樹賢人也。隱居近江。隣里鄉黨。稱爲佛子。有所交爭。必聚於其庭以質焉。嗚呼。無得而間然也。此事於㈤諸書。俱不載。

㈤橘牕茶話卷中並近世叢語卷四に載す。（紫水）

㈥嬾齋藤氏著孝子傳。載藤樹先生致仕顚末。贊云。淡海吹起。陸王儒風。豈翅善身。誨人有忠。爲母顚祿。旋鄉色愉。于嗟篤孝。性乎學乎。又作論云。或謂余曰。我嘗聞之於中江氏之徒。曰。先生恒言。自己之德性。卽是父母之天眞也。是以養吾性。所以養親也。尊吾性。所以尊親也。孝莫大焉。勿拘夫

奉事于膝下與否斯言詎與其辭祿歸養者相矛盾乎。曰。明儒汪廷訥曰。世以問安視膳爲疎節。不知此中有實心相流通者是中江氏之所以有此說歟。然慕父母人之性然。不假强爲。古人一日之養不換三公所以依々於膝下也。宜哉。惟命口雖任詳而身不能不歸養也。亦猶桑門說入無爲是報恩。而反有陳睦州朗法師等行。豈足怪哉。曰。所以行不如言者。既得聞命。敢問其爲母辭祿之一節。無乃足爲漢儒之盛行以入茲選乎。曰。今之學者。或以所謂家貧親老爲祿仕者爲口實。求富貴於遠方殊鄉。使親念己不忘者。固不爲尠。想夫人子一觸人之羅網。則不但不能數歸省。且雖聞疾聞喪。亦不得容易赴之。孝云乎。故孝子有不肯居官。如宋范純仁謂知武進縣而不赴。易長鳥又不往之類是也。考亭夫子答毛明壽書亦曰。就補遠行爲榮親計。然古人有所謂不以得於外者爲親榮者。亦不可不知也。而今惟命其謀於始雖不及范氏而明知其不以得於外者爲親榮。則與夫世間往而不反者。豈無逕庭。斯編之所以不逸斯人也。大抵爲人子者。皐魚游諸侯以後其親之失不可不鑑骨矣。按先生九齡父許之至伯耆爲祖翁所養。亡幾翁嫗相尋沒。年十八又丁外艱。唯母獨在。侍養無人。於是致仕。則於其出處之際。固不容議矣。而懶齋病其謀於始不及范。蓋弗深攷也。且夫自己德性即父母之天眞者。又是一說。與辭祿歸養者自不同。而其語最出晩年。攷諸文集可見。今乃不辨此。而反引陳睦州輩事斷之。不亦迂乎。但以是警世人則善矣。讀者審諸。

〔六〕 起筆懶齋は底本のまゝとす。當に懶齋に作るべし。文末誤らず。（紫水）

錦城大田氏題藤樹先生眞蹟云。藤樹先生人品德行之高天下所知也。予又何贊。當此時天下大亂之後。文運未啓。辭章之學鬱轄不通。遠不及今之兒輩。如羅山春齋諸先生大梗皆然。以此窺

彼以輕蔑之心。則爲大惡矣。淡海益田喬可五世祖義則。從學先生。家世藏其乙酉雞日詩先生眞蹟。世已希有。則是天下之鴻寶也。可不珍重乎。唯其詩朴拙。則時使然也。非先生也。使先生生于今日。其詩文豈出今日風流才人之下乎。惜哉。文政庚辰三月端午。錦城老人大田元貞識。

予謂錦城之學。於大綱上有欠。如將衆善解仁。雖其最得意說。然暗中摸索。實無所見。宜其於先生。不能知夫眞面目而言之。而徒惜詩文不如今日也。然能尙德不喜才。知時運不同。略無輕蔑意。則其見高世俗一等矣。是可尙也已。

㊀ 門弟子並研究者傳第三十九項參照。（紫水）

享保辛丑秋伊藤東涯。同弟長準。門人木邨重經。來謁書院。東涯有詩。予既已錄之。頃從志邨士儉得書院記錄數則云。享保戊申三月。伊藤蘭嵎同奥田三角來謁。蘭嵎講孟子滕文公篇。三角有詩。云。漫遊來此地。百歲欽高風。床上青氈古。梁間絳帳空。河汾誰續響。日月德比隆。沙汰秦灰冷。大經道不窮。

享保甲辰三月。三輪執齋同男某。爲之丞加藤某。來謁書院。元文庚申六月。執齋再來謁。竝見記錄中。按先哲叢譚執齋講大學於書院。此則略無槩見。恐偶遺之爾。

藤樹先生子孫。甚不繁衍。予嘗攷諸書。略得其實。以記之。間者從志邨士儉名讓。世賴之姪。得其先世所錄說及大溝侍讀別所氏世譜者。於是參採舊聞。作中江氏譜系。視舊雖加詳。尙未免闕疑。望知者補之。

中江氏譜系

○吉長

稱德左衞門、嫁祠堂神主書、諱松者、蓋其小字稱德松也、世爲近江人。仕伊豫大洲侯、爲風早郡宰。食祿百五十石、娶小島氏、生三子、元和八年秋九月歿。年七十五（一）按藩翰譜天正十七年加藤貞泰朝臣守高島城。兼任遠江守、吉長委質侯家、蓋在是時也。

―吉次

稱德右衞門、嫁祠堂神主書、諱丞者、蓋其小字稱德之丞也、家居不仕、娶北河氏、生藤樹先生及一女。寬永乙丑正月歿。年五十一。一或作二。

―某

稱三郞右衞門、按邑有世稱仁兵衞或傳七者、即其裔也。

―元立

稱文六、號崇保軒。

―治之

稱右門、號信古又好古。仕主人某家、寓京師。

―女

名房（廣野　後稱貞圓）

―立重（与市）

稱數馬。

―某

稱總八。實穗積某男、後冒高橋氏、仕伊勢龜山侯。食祿百七十石、致仕寓京師。

―女

名珠。適穗積某。（賴母ヽ云久我亞相家臣）

―藤樹先生

初仕大洲侯。食祿百五十石（一）。後致仕娶高橋氏、先亡。又聘別所氏。繼室。○別所氏父友武。稱彌次兵衞、仕大溝侯、爲物頭役、先生下世。別所氏再適西郁某、有子。名高信、稱藤兵衞、即爲季重異父弟、按陽明學圖書、高信亦湖學中之人、

（一）百石の誤。（紫水）

―女

名葉、適小島士郞右衞門某、後祝髮名淸心、善事母氏。（義武）

○中川謙叔娶小島氏、即某女也。在小川、舉一子、名來助、後改權太夫。

宜伯　小字虎之助。稱二太右衛門一。寛文四年。甲辰五月歿。年二十三。

仲樹　小字鐺之助。稱二藤之丞一。仕二備藩一。食二祿二百石一。㊀一云百五十石。寛文五年正月。歿二於京都一。年二十。葬二黒谷一。

○按伯仲倶高橋氏出。先レ是高橋氏舉二二子一。不レ育。

㊀行狀聞傳新知百五十石に作る。（紫水）

季重　稱二彌三郎一。別所氏出。在二備藩一。娶二長谷川氏一。生二子女各二一。寶永己丑六月歿。年六十二。

九郎大夫

女（名染）

女　名瑠璃。夭。

女　名染。㊁適二大溝臣藏田清左衛門一。某後睽離。㊂之二備前一。養二母氏家一。

○藏田某聞書作二倉田清兵衛一。誤。

㊁竹涯染の字を抹殺し捨の字に作る。㊂竹涯筆睽離の二字を抹消し新寡に作る。（紫水）

某　小字龜之助。㊃稱二貞平一。仕二對馬侯一。食二祿二百石一。後爲二大目附役一。賜二四百石一。㊄又賜二名藤介一。娶二宗田氏一。按二聞書一以爲レ冒二宗田氏一誤。㊅

㊃對州中江家傳來の系圖には常省先生の小字となす。（紫水）㊄二百石の誤補傳（附）四參照。㊅行狀聞傳宗田氏を冒すとなす。（紫水）

某　稱二彌九郎一。寄二長谷川氏家一。夭。

某　稱二爲右衛門一。

某　稱二文内一。祇二役江戸一。夭。（享年二十有六）

丙㊆戌正月。湖西志郡士儉。以テ二備人某所一レ寄スル中江宜伯墓誌銘ヲ見ルレ示サ。仍テ錄スレ此二。碑表書ス二中江氏宜伯之墓

誌云、中江子小名虎、字太右衛門、諱宜伯、江州高島郡小川人、考與右衛門、諱惟命、始仕于西豫、早有解印之懷、辭官歸鄉、高尙其志、專以講學論道爲事、其敎崇德義、厲節行、儒有游其門者、學徒或稱藤樹先生、嘗娶高橋氏、以寬永壬午十一月廿三日寔生子、於小川、子幼有知、資稟溫厚、擧止閑靖、不好庸兒之嬉戲、頗有成人之風標、甫齓夙孤、累遭閔凶、事祖母恭謹、及長劇好道學、敎尙行實、讀史誦經、日乾夕惕、孳々無倦、深以纂前緒成考功爲志、其朴質寡默、恩愨謙抑、自有以過人者、庚寅之歲、筮仕于備陽、（烈侯遺事、宜伯敏達有才藝、公用熊澤伯繼薦、厚幣招之、待以賓禮、假司長兵）二弟仲樹季孝、並皆成宦、（官（行傳））資敎悃到、友于尤篤、子平居危坐、終日無怠惰偃側之容、接人持己、動以法度、履有餘行、則馳馬、試劍、講肄軍禮、可謂能游於藝矣、寬文四年甲辰五月十二日、以疾卒于家、享年二十有三、未娶、無嗣、嗚呼痛哉、早天即世、胡不幸之至、遂窆(△)於岡城東南平井山之麓、學士僚友、會哭相弔、叄酌喪儀、以禮治葬、因考其狀、乃掇其槩、刻碣表墓、且系以銘、銘曰、惜哉若人、弱冠英特、志學奮然、忘寢與食、纘緒懋功、共爲子職、盡規存心、強有臣力、脩文偲々、講武翼々、色溫氣剛、行敏言默、天奚嗇年、無成其德、平井之丘、遺此幽刻、按誌中弟季孝、即謂季重、豈其初名也與、碑不載撰人姓字、或云、蕃山撰、恐非是、

㊀ 丙戌は文政八年なり。中江氏宜伯之墓誌は行狀聞傳に出づ。文字の出入少からず。（紫水）

㊁常耕紀聞云、仲樹仕烈侯、恩遇無比、嘗賜以手題畫軸、仲樹亡、季重葆藏之、侯復賜和歌、曰、乃氣許多那、阿多矢打葉禿外、革々索里紀、搖所那粉地打尼、革達蜜乃而賴奴、

㊁ 常耕紀聞とは行狀聞傳をいふ。㊂ トテ行狀聞傳トハに作る。和歌の振假名は竹涯老の筆。（紫水）

季重父子事蹟、諸書往々載之、然語焉而不詳也、近讀常耕紀聞、得悉其顚末、季重年甫十一、仕烈

侯爲近習。（烈侯遺事。季重年最幼。公賜月俸。至九歳時。召之於本藩。及長陞物頭。司長兵。）弱冠同泉仲愛、爲泮宮奉行。食祿百五十石。後有疾致仕。時對馬侯素尚藤樹學。因聘季重備顧問。待以客禮。亡幾歸鄕。又寓京師。變姓名曰江西文内。學者稱常省先生。盛倡家學。作廼翁學庸解補。名曰狗尾。（蓋取於狗尾續貂之義也。）對馬侯京邸留守木原壽軒。得而上之。侯乃復延季重。使其子貞平仕。賜名藤介。㊀眷遇甚厚。陞大目附官。食祿四百石。㊁季重從侯之江戸。時柳原邸火。季重所齎先人圖書藏侯庫中者。於是殫燼矣。（季重在江戸。岡田季誠寄藤樹全書。請爲之序。會季重家遭災悉亡。後復類次其藁成編。即今所傳本也。見於執齋序中。又先生所蓄書籍十三經。陽明全書。性理會通之類。予嚮遊書院日。即索一觀。倶無有焉。世賴云。是等書常省子齎之江戸。一旦罹災。悉爲烏有矣。正與此合。）季重衰老。遂辭歸鄕。後復僑居京師（四條御旅町。）數年。竟沒於小川云。

㊀ 誠明の誤。 ㊁ 二百石の誤、補傳（附）四參照。

熊澤伯繼去備藩、至京師、棲遲於御靈祠外。一時鉅公名卿多與來往締交。中院内府（通茂）贈和歌云、革々而別紀之奇立多矢頼銕、烏多古那密、四骨矢銕濕搖和、々慕乎古也矢索。伯繼和云。㊀一埋和塔尼賣他識那勿別紀、搖和也遍奴、和慕外迭四奇矢木革矢骨也濕多。此予聞之伯繼姻族岡田氏。按蕃山寔錄（マヽ）。事蹟考。及傳竝不載。

右の歌意を按ずるに、㊀ 斯かるべき、契さ知らで、疎くのみ、過ごしてし世を、思ふ悔しさ、㊁ 夢をだに、見て忍ぶべき、世をや經ぬ、思はで過ぎし、昔悔やしさ、なるべし。右二首の萬葉假名は萬葉集に用ふる所とは異なりて淸朝時代の支那音を以て模擬したるものなれば、現時の歌道の知名の人も讀み難く、又二首の意も曉り難しさ云ふ。（惺軒記）

岡田仲實娶熊澤氏。即伯繼妹也。㊀熊澤氏年躋八袠。嗣子季誠請諸家作歌詩爲壽。參議通躬賜題、

曰、鶴遐年、友執齋三輪翁贈歌曰㊁吉蜜爾黄俺紫禮鋏之獨斯那阿氣和遍奴和慕夜白尼和那湖瀬那多木紫而。

㊀ 熊澤氏は、三十二歳を以て逝けり。此の賀は繼母の爲に行へるものなり。門弟子傳第五十一項參照。㊁ 此の歌讀み難し。執齋和歌集並岡田季誠筆歌集には「君にたれつれて千させの姝なへんおもへば鳩のうらの友鶴」とあり。（紫水）

執齋雜著有治教論。載浪華有素績者㊂、姓字不詳其人。雙瞽、好學、受業藤樹先生。先生歿、素績建精舍於有馬町。隷天滿。在堀川東。此先三淵氏建講堂京師。凡十餘年。以講其學。素績歿來五十餘年。至享保初、弦誦不絶。精舍遺趾今歷訪之、竟無有知者。常耕紀聞云。大洲有瞽博一㊃者、至高島、師事藤樹先生。性穎慧、從諸生受句讀、一聽便成誦、又自作家訓。左手摸紙、右手寫字、至數十行不爽。觀者驚異。先生下世、博一歸大洲、建講堂以講習云。

㊂ 姓上月。事蹟門弟子並研究者傳第二十三項參照。㊃ 行狀刪傳博市に作る。

瞽之隸官者、率募富民醵金納之、而後畢生衣糧可坐而得也。山東有二瞽、俱欲隸官。於是裹糗、嚢金西上、抵湖宿一逆旅。里中有學藤樹之門者。此夕先生偶在鄰舍講書、微言抄語、纚々動聽、二瞽隔壁耳之。至講畢、各自憤嘆羞與衆瞽與伍、遂不至京師而返、乃還金其主、各留其婦守家。復西之湖、進謁先生、備述其故、遂得僦居受業。二婦尼之至湖、善事其夫云。二瞽俱失姓字。此事予聞之小川人某。按藤樹之門、除素績博一二瞽外、有玉井氏者、蚤亡。先生作詩悼之、要之皆偉人矣。豈不奇哉。

執齋作藤樹全書序、說先生脫刀買陽明全書、與年譜行狀不合。恐誤。

馬夫還遺金事、見東遊記。蓋取於邑人口碑。

當耕紀聞渠郷云。大洲有藤樹先生故宅。士民過其門者。必磬折致敬。又云。大洲婦女輩。各家每月一次輪流集會。讀春風鑑草等書。名曰藤樹講。

紀聞又載。二見直養稱新右衛門㊀。會津人。受業淵宗誠。後居江戸。大傳馬町倡湖學。幕府及諸侯之士。信從甚衆。時執齋在下谷。講餘姚學云。

㊀ 伊勢人に作るべし。（紫水）

孝經講義一卷。藤樹門人中郁某所左衛門錄。又見紀聞。

㊁ 本全集卷之十五に載す。（紫水）

續翁問答七卷。湖西足立某㊂著。藤井政武號愼齋又以求子。者。爲之序。享保戊申刊行。頃某生以其本見示。予一夕寓目還之。蓋其人淺學無識。不夢知先生者。而造作一種陋言腐語。以擬先生書。金屎之別。不待識者辨矣。

㊂ 某名漁叟。近江國高島郡北畑村の人。（紫水）

淵氏之徒。有大內玄淳者。既已錄之。頃讀執齋平埜含翠堂記。有大內某嘗爲邑人講書。蓋謂此人也。

藤樹先生乞致仕書。渠郷云。中郁文五郎者。藏其眞蹟。予詢之。豫人則云。其書見存。今中郁氏者。名眞人。

藤樹先生書中和二字。墨刻。浪華懷德書院藏。萬年三宅翁有識語。曰。右中和二字。藤樹先生所書諸木郁氏得於豫人藏焉。或者以其巧拙爲議。余曰。先生之爲人也。中和而其所寫者中和。此謂自畫傳神亦可。乃眞文字也。如吾人作是字者。雖其工過鍾王米蔡。亦猶沐猴而冠耳。奈不稱何。

是則先生之書之所以爲貴非耶。石菴記。

文政甲申三月大洲侯臣某致書云、吾侯固慕仰藤樹先生、頃者以其我世臣、而欲祿其裔孫使復仕也。湖州乃先生故里、若有其人子爲吾侯周旋。予卽答以湖西有姓中江者、是先生族人、家先生子孫在對馬、世仕侯家、天明戊申京師災、其人東上祇役、與志邨可敎一相見、爾來幾四十年。杳無音耗、不審其家存否也。後數月、某復致書云、承諭先生之裔乃在西州、卽日告諸江戶邸、爲對藩細詢。未知邸報竟何如耳。予謂侯之眷々賢裔、實爲盛德、設使竟不得其人、此誼可弗傳乎。故書之。

志邨周介、藤樹先生再從弟也。同弟仲昌師事常省子。仲昌號常耕。周介之後、世爲書院長。予所識者、名周治、字世賴。世賴之父、名周助、字可敎。

⊖書堂巳閱百星霜、私淑吾來晉謁香。遺愛藤棚荒徑古、孤標松幹老逾蒼。氣常和處春長煥、月正霽時風亦光。今尙士民敦禮讓、入疆不問識君鄕。一齋佐藤君詩也。跋云、文政辛巳秋仲、過湖西小川村、謁藤樹書院。院今寘翁神位。江都一齋藤坦拜題。

⊖傍記したるものは現在書院所藏の一齋先生の眞筆に見ゆるものなり。篠原氏の見たるものは、之と別物なりしならん。又孤松の二字庶本には枯松とありしを志村竹涯枯の字を粉書抹殺して孤の字に改む。今從ふ。眞筆亦然り。（紫水）

予謁湖西書院、宿志邨氏家。有詩云、欽想先賢德澤深、一鄕不受點埃侵。吾來慚愧竟流俗、塵事乘間頻上心。過比良嶺下作云、衝風冒雨過湖西、每到三叉路欲迷。四顧杳無人影見、春山處々亂鶯啼。

南郭服元喬撰加世穀軒墓誌云、君考默軒君。元博按、默軒卽藤樹別號、而季弘胄之、必有說。諱次春、字季弘、臣事備前君

學篤行修。兼通音律。爲市令。然吏事之餘。猶出入侯側。議禮肄樂。替成其志。遷督學校事。十餘年而卒。養兄子。是爲毅軒君。君諱次英。字某。爲人强力。有吏才。以嚴整率人。少從默軒君學經術。故其治職頗雜儒雅云。元博按加世氏之先。爲甲斐人。或上野人。至季弘始爲伊豫人。又按藤樹先生有送加世伊右衛門歸鄕詩。年譜有加世五者。五郎季弘。或稱八兵衛。疑後改者。若稱伊者。豈季弘之父兄也歟。

伊豫人淸水季格。後冒西川氏。深惡熊澤伯繼。著和書題非二卷。痛排其學倍師說。別成一家。然季格之學。庸陋孤單。非伯繼匹。且其於和書。先懷忿疾讀之。卒爾立言。多不中肯綮。若四勿誠意章。藤樹原自有說。讀和書中云云。卽藤樹之說。而季格不之知。反力詆之何也。㈠初藤樹之去豫也。季格獨思慕弗已。卽告侯辭祿之湖。遂受業。藤樹歿。至元祿初。乃著是書。㈡蓋其進取之銳。親炙之久。諸弟子少及。而視其所成就者。淺々如此。亦可異也哉。當時淵宗誠。亦不喜伯繼。故其徒多議之。而料其所見。畢竟讓伯繼遠矣。

㈠ 此の說湖學雜纂追加中の文に依れるものなるべし。而して年譜と合致せず。 ㈡ 元祿四年辛未春中旬の序あり。（紫水）

會津藤樹學道統譜（附）會津外藤樹學道統譜　解題並凡例

一、本篇は會津藤樹學派最後の繼承者たる三浦親馨の編纂にして、天保七丙申の序あり。而してその末裔たる當時在東京故齋藤一馬氏が傳來の稿本について之を淸寫したるものなることは、その附記に見ゆるが如し。此の書は先年本會顧問正堂東敬治翁が前記一馬氏より收得し本全集の資料として特に提供せられたるものなり。

一、本篇は會津藤樹學道統譜並會津外藤樹學道統譜の二篇に分ち淵岡山子を中心として藤樹先生學統傳承の經路を簡明に記述せるものなり。岡山子が藤樹學上に於ける功績の大なることは此の書により て明かに知るを得べし。然れども此の書藤門の巨擘たる熊澤蕃山を擧げず。況んやその他をや。されば本篇は唯岡山學派の影響を鳥瞰すべき有力なる資料に屬すといへども、是を以て先生の學域全體を盡すものとはなすべからず。惟ふに近世日本の陽明學は、三輪執齋・佐藤一齋・大鹽中齋・春日潛菴等の大儒によりて啓發せられたるもの頗る多く、而して此等大儒は何れもその源を藤樹先生に發したるか、或は陽明の書を讀みて發憤し、後先生に私淑するに至れるかの二途を出でざるべし。されば先生の學域全體を精細に觀察せんと欲せば、啻に本篇を通讀したるのみを以て足れりとせず、本全集に在りては宜しく門弟子並研究者傳及び敬慕詩文集等を玩讀せざるべからず。

一、本篇に在りては植木是水翁を以て若州の人となせり。然るに同じく三浦常親（親馨の初名）の筆に係る「北川子示教錄」には美作の人に作り、後に載するところの「植木是水翁行狀略」には「翁は本州（備前國）赤坂

郡周匝の産にて中比美作の國へ移り又周匝へ歸り住めり。」といへり。されば本篇に若州の人となすは傳寫の誤なること明かなり。右植木是水翁行狀略は編者が大正十五年一月岡山市縣立圖書館並池田侯爵家事務所に於て寫本「泮水餘波」一部を得て之を閲讀したる際發見したるものなり。その他尚美作の人に松本以休あり。備前岡山の人に市川小左衞門あり。されば岡山藩に於ける藤樹學の影響は熊澤蕃山に淵源せることは固より言ふを俟たずといへども岡山學派の影響もまた考慮の中に加ふべきものにはあらざるか。

一、本篇には干支の誤特に多し。今一々之を訂して註記を施せり。其他の誤謬に屬するものもまた同じ。

一、本篇は嘗て正堂東敬治翁の經營せる雜誌陽明學附錄として世に出でたり。今對校して傍記を施したり。略符(雜)を以て之を示す。

一、巻末に前記「植木是水翁行狀略」及び「岡山學派に關する著書」二項を添附して參考に資す。

昭和三年十月一日

小川喜代藏謹識

藤樹先生全集　卷之四十六

會津藤樹學道統譜序

昔孔聖告曾參曰。有至德要道以訓天下。民用和睦。上下亡怨。孔聖敎此道於曾子。以一箇之孝。孝則百行之源。非至德要道何哉。天下之人。皆赤子孩提之時。豈有無愛其父母之良心者哉。孟子所謂。所以人皆爲堯舜也。一時不失此心。則一時之君子。一日不失此心。則一日之君子也。越時累日。終身不失此心。不欲爲一生之君子。而曲己性。爲一生之小人。亦不嘆哉。我　藤樹先生憂之。茲有年。敎之諸生。以有人皆有固有之良知。此敎之大也。治國平天下之法。轉小人必爲君子之良術也。傳曰。古之欲明明德於天下者先治其國。欲治其國者先齊其家。欲齊其家者先修其身。欲修其身者先正其心。欲正其心者先誠其意。欲誠其意者先致其知。致知在格物。其本皆是有正心誠意致知。然則誠意致知之道。孔門傳授之心法也明矣。雖然人皆不免意必固我之煩。意知之兩路同出。而繆以千里。堯曰。人心惟危。道心惟微。堯以是傳之舜。舜以是傳之禹。禹以是傳之文武周公。文武周公以是傳之孔子。孔子以是傳之曾子。曾子以是傳之子思。子思以是傳之孟子。孟子死。雖不得其傳。宋明間。周子、程子、朱子、王子、諸賢與。傳之綿々而不絕焉。我日域。神國之德風秀萬國。百王一世。而有聖王賢臣。而良民衆。茲我　藤樹先生。生數千年之下。繼彼

聖傳。知覺孔門傳授之心法。讀王氏之書。說良知之幽妙。藤夫子以是傳之岡山子。岡山子以是傳之會津三子、難波先生、田中善立。田中子以是傳之二見直養。三子以是傳之島影子。島影子以是傳之井上安貞。井上子以是傳之中野義都、坂內親懿。其間雖諸子多。不有認得良知之微妙乎。如左所著（著、雜）中古以來。綿々而其統不絕。嗚呼悲哉。近世藤學微。而無繼其傳者。冀有後之君子與此學繼道統者。何幸如之哉。天保七年丙申十一月朔日。會陽藤門後學。三浦親馨謹記。

一馬附記

左記道統譜所載數十人。蓋會津北鄉藤學中之錚々者。而要之數十人中。五十嵐、遠藤、東條、（葭卿曾祖）三人。親炙岡山先生。所謂北鄉三子者也。當此時。藤學風靡北鄉。其盛可知。三子後至曾祖恕三君。其間四五十年。雖非無學徒繼業者。比之三子時。如頗有遜色。於此時。恕三君出而一振之。奉藤樹先生遺墨。結一社。以大糾合同志。而舊業又振。恕三君沒後。至先人親馨君。其間二三十年。斯學又頓挫。先人慨之。常志恢復。收錄遺書。編道統譜等。頗見苦心之迹。而不幸遇維新騷亂。其心不能伸以沒。可悲也。又曰。左譜係先人編。其記已處。固非可詳序以自語功。故僅々十數字而止。今一馬謹補記所知。以見其概略。亦人子之至情也。大正五年二月。

會津藤樹學道統譜

三浦親馨編

藤樹先生

姓藤原。諱惟命。氏中江。稱與右衛門。父諱吉次。母小川氏。(一)慶長十三戊申年三月七日。生江州高島郡大溝屬邑小川。及長仕豫州大洲城主加藤左近太夫貞泰。寛永十一甲申年。致仕歸江州小川。以孝事母。舍庭有藤樹。(雜)故門人稱藤樹先生。幼而穎悟。長爲大儒。人皆稱近江聖人。慶安元戊子年年四十有一。秋八月二十五日卒。葬小川。嗚呼天何不假之以年。而不幸短命哉。門人數百人。

(一) 小川氏は北川氏の誤。(紫水)

岡山先生

氏淵。諱惟元。稱四郎右衛門。有故改岡源右衛門。住洛外岡山。故門人稱岡山先生。奧州仙臺之隱士也。至江戸。仕幕臣一尾伊織。江州有伊織食邑。先生以主命屢赴之。見藤樹先生。受業於門。爲夫子高弟。如孔子有顏回。夫子沒。至京師。造營學館。建先師祠堂。廣其道於二十餘國。實當世大賢。爲藤學之宗。貞享三丙寅年十二月二日卒。葬東山永觀堂。門人數百人。

大河原養伯

會府之人也。嗜醫術。與荒井眞庵。祈諏訪神社。求實學良師。得神宣。共至京師。謁岡山先

生。學良知之微妙。同歸而告矢部總（一作宗）四郎。自是藤學周流會津。與荒井子。共爲會津藤學之祖。子孫仕會侯。世醫官。

㊁養伯、「北川子示教錄」杏庵に作る。（紫水）

―荒井眞庵

會府之人也。亦嗜醫術。與大河原子二人。而一人。實爲異體同功之人。

㊀眞庵、「北川子示教錄」親庵に作る。（紫水）

―矢部總四郎

會津北郷小荒井町之人也。諱惟方。聰明異常人。聞荒井大河原兩子之言。赴京師。學于岡山先生。先生曰。可謂使四方不辱君命者。歸會後。告五十嵐養安、遠藤謙安、東條長五郎三子。以岡山先生學德。三子上洛謁岡山先生。得斯道之微妙。矢部不幸短命而死。然德化不朽。實爲會北藤學之宗。延寶五丁巳年十二月二十九日卒。正堂補曰、葬岩崎大用寺山。嘗予親謁其墓而知之。

―五十嵐養安

會津北郷小田付町之人也。姓平。諱直元。稱覺兵衞。其上洛學于岡山先生。如矢部條所記。其名鳴于都鄙。京洛儒者。與遠藤東條。同稱會津三子。寶永五戊子年三月朔日卒。年六十七。葬岩崎大用寺山。

―遠藤謙安

會津北郷岩崎村之人也。爲村長。後移住漆村。爲小沼組郷頭。諱玄道。稱庄七郎。使嗣子常尹襲郷頭職。自號謙安。其學于岡山先生。如矢部條所記。事父母至孝。會津中將嘉賞之。其事蹟載于會津孝子傳、及日新館童子訓。正德二壬申㊀年十一月二十七日卒。葬岩崎大用寺山。

㊀ 壬申は壬辰の誤。（紫水）

東條長五郎

會津北郷上高額村之人也。爲村長。諱方秀。其學于岡山先生。如矢部條所記。以孝聞。會津中將嘉賞之。事載于會津孝子傳。兄田邊一夢。爲新井田村長。深於禪學。元祿九丙子年二月十七日卒。著十八個條問記。今尚存。

親炙三子。信藤學者。藩士有落合權太夫、伴清左衛門、一柳氏、名不明 大原六太夫、牧原源六、著（雜）同只右衛門、村越七右衛門、外數輩。其係藩士者除之。落合德行。詳于中野義都著藤門像贊。

遠藤松齋

謙安先生子。討（雜）諱常尹。稱孫三郎。亦篤信藤學。能誘導諸生。其病篤時。星某來告。邑諸生講學討論不怠。松齋喜曰。聞諸子研鑽進德。死不恨。享保十九甲寅年卒。葬岩崎大用寺山。

森代松軒

五十嵐養庵先生二子。諱元好。稱平兵衞。有故冒森代氏。住熊倉村。亦篤于藤學。屢至京師。問道于岡門。延享三丙寅年七月八日卒。年七十一。葬岩崎大用寺山。

東條清助

方秀先生嗣子。諱方義。爲熊倉組鄉頭。才德竝高。母某氏。亦有貞淑譽。衆皆稱東氏一家盡賢也。年十三。奉父母命。至京師。親炙岡山先生。先生甚愛其才德。及長博識非凡。三子後有松齋松軒方義。各繼其學脈。其功大也。享保三。戊（戊雜）年十一月十七日卒。年五十四。

小池七左衞門

會北高吉村之長也。諱常矩。信藤學。受教于三子。講席必列。能導後進。心志剛健罕比。寬延三庚午年五月六日卒。年八十五。

田中泰庵

會府之人也。嗜醫術。來上高額村。入藤學。常曰。上醫醫國。其次醫人。非吾儒何醫國疾。享保壬子年九月二十二日卒。年八十一。

平塚多助

藩士坂氏之家宰也。始入禪學。後慕三子之德。歸於儒門。與島影子同時。

矢部文庵

小荒井町之人也。諱惟定。稱甚次郎。家業酒造。總四郎先生之甥也。師事二見直養。業

成。後教授會北諸生。其在江府時。賓名恒久。一見服其德。後來會津。訪文庵。會病篤。不能語。恒久大息歸府。寶暦四甲戌年七月十五日卒。

島影文石

藩老西郷近張之家宰也。稱安右衛門。博學多識。親炙二見翁。能體認良知之眞。亦三子後之一人。門人頗多。有二見翁芳翰錄著。

東條清藏

（まゝ）

諱次賢。爲熊倉組及小沼組鄉頭。方秀孫。方義子。性嚴正。組中人皆畏憚。奉父祖教。篤于藤學。延享二乙丑年閏十二月二十三日卒。

東條東休

清藏異母弟。諱成徽（まゝ）。稱清右衛門。亦篤于藤學。家貧而不改樂。天明三癸卯年卒。年八十五。

淵貞藏

東條次賢長子。諱惟傳。篤學有德行。岡山先生子半平無嗣而沒。岡門諸人。迎貞藏配半平女。以繼家。諸公卿屢延貞藏。以爲講學之師云。天明六丙午年年七十有餘而卒。子良藏。諱惟倫。孫深藏。諱惟佳。

坂內親懿。卽北川恕三。嘗赴京師。與惟倫父子外數輩。會談講學而歸。此時會者。親安喜安。一橋玄賀。野原三右衛門。渡部嘉兵衛。野村又四郎。平田此右衛門。小野右衛門尉。

村上勾當等也。

東條新左衛門

次賢二男。諱方堯惟傳淵氏之弟也。爲熊倉組鄉頭。本藤學。有善行。安永七戊戌年八月十七日卒。年六十一。

井上作左衛門

小田付町長。諱友信。號國用。安貞之兄也。兄弟談道講學。如明道之於伊川云。辭職孝養老母。寶永壬卯年七月十五日卒。年五十四。葬岩崎大用寺山。

㊀ 壬卯恐らくは辛卯の誤。（紫水）

井上安貞

友信之弟。諱國直。稱忠左衛門。受藤學於島影文石矢部文庵。友中野義都矢部湖岸東條次愼坂内親懿等。講究研鑽。惟日不足。亦三子後之一人也。多門人。寛政二庚戌年。正月十七日卒。年七十四。正堂補云。葬北方東町萬福寺境内。蓋吾嘗親謁其墓知之。

矢部湖岸

矢部文庵猶子。實五十嵐養庵季子養元之三男也。諱直言。稱覺右衛門。友中野義都井上國直坂内親懿等。講學無虛日。有官命。教授村子弟。以孝悌忠信。藤學會座不一日缺。以勵諸生。德行之君子也。享和二壬申年九月十六日卒。年八十五。葬于岩崎大用寺山。

㊁ 壬申は壬戌の誤。（紫水）

―栗村伊右衛門
北郷鹽川町之人也。信藤學。有篤行之名。人皆信其言不疑。正堂補云。葬于岩崎大用寺山。

―鈴木佐助
北郷下窪村長也。信藤學。以義勇有名。七十餘而卒。

―五十嵐忠右衛門
北郷上高額村長。實高吉村小池氏子。諱常成。村民慕德。安永九庚子年七月二日卒。年七十九。

―東條新十郎
諱方知。方堯之嗣子。繼父祖。信藤學。

―北川親懿 又坂内氏。恕三。
北郷漆村之人也。稱助十郎。爲小沼組鄉頭。孔子家語有三恕之道之語。取以爲號。遂以號行。又嗜醫術。聰明而博識。多讀和漢書。賦詩。詠和歌。殊信藤學。識得良知之微旨。北郷諸生尊信親懿。進學者甚多。藤學於是大興。與中野義都井上安貞有水魚之交。中野奉遂于神道。悉傳之親懿。實當時斯道之泰斗。其名溢于國中。悲哉親懿沒而藤學微。諸生無不恨暗夜失燈者。門人甚多。著書雜錄若干卷。藏於家。文政元戊寅年。八月二十五日卒。年八十一。葬漆村本宮山。謚功龍神靈。

―東條武右衛門
諱次愼。上高額村長也。少時稱權右衛門。諸生呼謂權州云。博識多藝。師井上安貞中

野義都。義都授其本朝神道傳。會津中將容頌公。命撰日新館童子訓時。載次愼之德行於書中。不幸早世。義都爲慟哭云。安永五戊申年。二月二十九日卒。年四十七。

㈠戊申は丙申の誤。（紫水）

一栗村以敬

鹽川町之人也。諱珍英。稱谷右衞門。信藤學。有德行之名。能敎導諸生。官命北鄕幼學校助敎。文化十一甲戌年。三月二十六日卒。年七十八。

一東條廣右衞門

東休之猶子也。家貧。然不爲動心。信學益篤。事父母至孝。不辱父祖者也。

一矢部德次右衞門

湖岸嗣子。諱直麗。亦能勤學超衆。

一中野義都

會津藩士。稱理八郎。後改作左衞門。號惜我。有故住北鄕上高額村。二十餘年。深與井上安貞矢部湖岸坂內親懿交。始聞藤學。遂悟其眞旨。義都從吉川從安從門二子。得神道奥祕二事相傳。又博讀和漢書。賦詩。詠和歌。能射。達兵學擊劍。實多學多藝之人也。身貧而容貌容與。如樂天命者。亦當世之偉人也。寬政十戊午年。六月六日卒。年七十一。葬城東大窪山。著書甚多。

一加藤銀藏

北郷雄國蘆平村長也。從坂内親懿學良知。從中野義都學神道。吉川從門。授狀證其神道講得。好詠和歌。師茅園先生。得古今傳授法。寬政十㊀卯年。二月十二日卒。年五十。

㊀ 卯は恐らくは戊午の誤。（紫水）

――新明半兵衛

北郷某地之人也。諱宗廣。信藤學。切瑳琢磨。功日新。不幸短命而死。坂内親懿愛惜不措。

――長島平七

小荒井町之人也。諱富修。信藤學。研鑽不怠。

――石川與左衛門

北郷金川村長也。事坂内親懿。勤學不倦。

――五十嵐仁右衛門

北郷上高額村長也。有篤學之名。殊信藤學。

――矢部甚次郎

總四郎先生之後也。諱惟督。安貧樂道。歎藤學日微或遂絶其統。其病篤也。傳藤夫子眞翰於親馨。託以學事。親馨泣受之。

――坂内伊兵衛

親懿嗣子。親馨父也。諱親陽。與朋友交有信。能紹父業。寤寐守良知教。其瀕死。尚與親馨謀。以藤學再興之事。如不知死期已迫。郷里皆服其德行。天保七丙申年卒。年七十

一。葬漆村本宮山。

—井上忠左衞門

安貞嗣子。繼父業。篤信藤學。正賞補云。葬萬福寺。

—矢部覺左衞門

小荒井町之人。直麗之嗣子也。信藤學。篤信義。

—穴澤準説

鹽川町之人。後移小荒井町。嗜醫術。信藤學。

—三浦友八親馨。後常親。

北郷入田付村之人也。諱親馨。後改常親。實坂內恕三之孫。親陽之二子也。

一馬附記。會津之爲藤學也。自彼北郷三子。至曾祖恕三君。其致道欝然而興。學徒不下數百千人。恕三君沒後。雖有諸子繼業者。實不免爲告朔餼羊。先人親馨君深慨之。常有復舊之志。然嘉永安政以降。國家急於外事。天下騷然。尋藩主松平公。任京都守護職。擧國武備是務。不復暇講學。未幾。會津四方受兵。城遂陷。先人又罹痼疾。不能出褥。明治十七年。以齡七十七沒。而斯學絕。先人恨可知。然幸草本譜藏於家。雖不知其爲定本否。纔得窺知會津藤學之一斑者。亦先人之賜也。先人有德行。博涉書史。善書。著書雜錄不少。遠近人有事不能解。則曰。請往而質之三浦子。其感孚服人可想。一馬生而養於他家。遠在若松。不能膝下受教。碌々以老。今修寫本譜。至

此不覺感涙滂沱如雨也。大正五年二月。

眞宮謙長

北鄕稻田村之人也。業醫。

穴澤元章

準說子也。後襲父名。號準說。

一馬附記。藤學傳統者。以藤樹先生手束裝卷所在爲證。茲雖傳至穴澤元章而止筆。以此時元章病篤。直返之眞宮謙長。謙長受而卽時再傳之先人。蓋先人在焉。他人不敢有也。事詳於手束卷末所記。

無可傳統。一馬附記

會津外藤樹學道統譜

三浦親馨未定稿

一馬附記

左會津外藤學道統譜。亦先人所編以付會津譜者。未以爲定本也。會津僻在東北。先人亦不能遠出游四方。所見聞不多。故其所收錄。蓋不免有疎脫。今公之世。或非先人之志。然亦手澤存者。不忍遽削除。暫仍舊。以待諸賢刪補。又曰。本譜中收會津人四人。蓋以與北鄉諸子異其出處。故然歟。未詳也。大正五年二月。

○藤樹先生

事蹟詳於會津藤樹學道統傳。

—岡山先生

事蹟詳於會津藤樹學道統傳。

—齋藤玄佐（げんさ）

京都之人也。初爲浮屠氏。後師岡山先生。歸于儒。常與藤尾富松二氏。侍先生。自諸邦來執贄於先生者。必先依三人云。㊀元錄十三庚辰年十月二十九日卒。

㊀ 元錄は元祿に作るべし。下同じ。（紫水）

—藤尾久左衛門

京都之人也。元祿十五壬午年。八月二十九日卒。年七十七。

富松祐庵

京都之人也。常侍二先生一。爲二先生一掌二書翰往復之事一。好詠二和歌一。有下與二會津長臣友松氏興一贈答之歌上。名曰二鸚鵡返一。元祿十六癸未年。九月七日卒。

（氏興藩祖正之老臣、正之治レ國、多頼二其力一）

氏興贈歌　歌の道誰にか問はん古の道を學べる人ならずして。

祐庵返　「誰にかは問はん。」

石河文助

生二于農家一。至二京都一。受二教於岡山先生一。學德日進。後應二勢州安濃津侯聘一。任二儒官一。賜二祿二百石一。同藩久世氏玉木氏外門人頗多。子文左衞門。孫權太輔。曾孫右門。世業レ儒。藤學不レ絶。

田中全立

岡山先生高弟。日向國延岡城主牧野侯。招聘。命二儒官一。執二客禮一。爲二江府藤學之認(?)一。門人頗多。二見直養其尤也。葬二淺艸淺草寺(雜)門内壽德院一。

二見直養

姓度會。氏二見。諱忠直。稱二勘兵衞一。後新右衞門。初伊勢山田之祠官。後住二江府一。受二教于田中全立一。深得二藤學之旨一。藤學至二直養一益明。門人會津島影文石。集下直養與二諸生一應答書上。題曰二直養芳翰一。享保十八癸丑年。七月十八日卒。年七十七。葬二江府谷中感應寺内

養善院。

市川小左衛門

諱時保。備前岡山新田池田丹波守臣。師直養。

川村武右衛門

勢州桑名之人。師直養。

赤城誠意

稱宗兵衛。住若松北小路町。爲其名主職。師直養以孝聞。行狀詳于會津孝子傳。

難波先生

氏木村。諱勝政。稱宗十郎。大阪之人也。就岡山先生。體認良知之眞旨。諸生稱曰難波翁。實岡門第一之弟子也。世云。良知之學。藤夫子唱。岡山子述。難波翁繼。又曰。夫子之學。至岡山木村二子而備。門人甚多。享保元丙申年。六月二十五日卒。年七十九。葬大阪寺町專念寺。

松本以休

作州之人也。美作守臣。致仕赴京都。受教於難波翁。學術日進。享保三戊戌年。八月三日。卒京都。

植木是水

若州之人也。難波翁高弟。生於商家。不讀書。不作文字。而爲人聰明。深信良知之學。常曰。萬卷書皆是心之註解耳。又曰。行者本也。文學者末也。雖不學賤民。不妨入君子之域。

（一）恐らくは作州の誤。解題に詳かなり。（紫水）

野條忠右衛門

京都二條城兵士也。難波翁沒後。講斯道於京都者。忠右衛門居其一。得太虚寥廓性靈一貫之旨。其沒也。直養甚惜之云。

―大嶋如水

會津北郷中之明村長也。受教於木村松本二子。與嶋影文石赤城誠意同時。

―井口七右衛門

江府之人也。常懷大志曰。欲傳藤學於異域。而天不假年。短命而死。藤學之不幸也。

―櫻井半兵衛

肥後國某藩士也。親炙岡山先生。篤信藤學。人告以己過。則書告人姓名與其日月。以自戒而常携之云。

―森雪翁

會府之人也。諱守次。稱與兵衛。親炙岡山先生。以孝聞。享保年中。撰會津孝子傳。

―磯部源左衛門

會津北郷筧川組郷頭也。稱八九郎。親炙岡山先生。事父母孝。性忠勇。師藩士樋口義

光修兵學劍法。又作家訓戒子孫云。

右道統譜係會津三浦親馨翁所編。故其於會津特詳。而外又附記之。予嘗知藤門有岡山子。而疑其傳必存會津者久矣。故苟逢會人必先訪之。而無一知者也。蓋廻而尋交翁子齋藤子。見出此書。予乃躍然曰。是也。顧予平生欲知而未能知者粲然駢列無餘也。非獨會津而已。我將往携之以究諸子學行之蘊。此其津梁也。

大正四年十二月　　正堂識

（附）植木是水翁行狀略

萬波世美

植木是水翁人となり篤實純粹年二十あまりにして、藤樹先生の學徒に從ひ良知の學を聞奮然としてをもへらく、不肖の身にしてかゝる尊とき教をうけ意知の兩路を知る事冥加至極なり。しかれば知るに從ふを主意とし好物を退治するより外なし。師友の切磋第一といひながら約まる所は手かせぎにありと思ひ、日用動靜語默の際に試み先學に就て正すとなり。其頃良知はうきあがり小法師のごとくどちらへたをしてもをきあがるものなれば、意念を知る卽ち良知言語におよばぬものとの試あり。工夫の精切なる皆此の類なり。又良知はたふときものなれども格致の功第一なり。或時家内彼是わづらひしに程なく皆々快復し折しも月朔なれば家内打連社參せしに悅ばしさのあまり神の惠もいとたふとく、

千早振神の惠をそのまゝに
　　なを道ひろくなりにける哉

と思ひつゞけ硯にむかひたれば水なし。水入に水を入るゝに茶碗へ水を入其中へしつめとりあげて見れば、茶碗のそゝぎ様たらずして底に茶のしみたるあとあり。是を見て驚き、かゝるとふとき事をかゝる水にてかきがたし。善事にても浮躁にして外へさそはれぬれば本うすくなる事をおそれて、

兎や角と思ふ心は春雨の
　　ふるとおもはゝ花やかこはん

とおもひつゞけて、操則存舍則亡との教ありかたく覺えしとなり。かく指手引手に心を用ひ力を盡されける

は起憤忘食ともいふべし。又一念の懈怠一生の不足なれば可戒事也とおもひ、それより一歩も退くと覺えし事はなしとなり。又人生全く天に委てあるものなれば富貴貧賤に心をとめず唯人々日用當下の天職を務る外なし、日用の運行日夜一息の間斷なし。人々それに隨てゆくものなれば少の懈怠も勿體なき事なり。しかれば何事も眞向に戴てかぶりのふられぬ事にて水一滴も命の外なし。唯戒愼恐懼して天命を奉行するのみ。又我平生ふみおこなはざる事つゐに口に出さず是等常談なり。又貧窮患難少も心を動かさゞる事箪瓢陋巷其樂をあらためずともいはんかし、又我幸に長壽にして形は老衰すれども心はいよ〳〵道の難有事を覺て獨處の折などありと思ひつゞくれば文筆の才あらばしるしをきたき一ふしもあれど本より不才なればいかんともしがたし。是亦命とおもひて日用他念なし。

うれしやとおもふ心になにもなし
　香もなし欲のうかむ間もなし

是我當下の心なりとなり。かねて作られしいろは歌あり。皆自得の意を述(よこ)べり。德容の盛なる敬畏の密なる短筆に盡しがたし。されども或人の命いなみがたくそのあらましを記しぬ。皆年比親閑せし事なり。翁は本州赤坂郡周匝(今の岡山縣赤磐郡周匝村)の產にて中比美作の國へ移り後に又周匝へ歸り住めり。

太守其行實を賞して銀若干を給ふ事あり。一時の同志信從するものはなはだ多し。享保八十八(まゝ)にて天年をもて終りぬ。(泮水餘波附錄)

岡山學派に關する著書

一、岡山先生書簡集　上中下　三冊

原本近江國高島郡安曇村大字五番領中村喜六氏の家に藏したりしも今散逸せり。明治三十四年十月大溝町笠井勘氏謄寫して之を藤樹書院に納む。此の書の發見に依り端なくも岡山先生學派を世に紹介するの機會を得たるなり。

北川親懿編

一、岡山先生示教錄　七冊

原本　福島縣耶麻郡岩月村三浦氏に在り。

加藤雄山照海編

一、岡山先生示教錄追加　一冊

原本　同上

一、難波叟議論覺書　上下　二冊

原本　同上

島影文石編

一、二見直養芳翰集　上中下（別錄）　三冊

原本　同上

三浦常親編

一、植木是水松本以休兩先生示教錄　一冊

原本　同上

三浦常親編

一、東條子十八箇條問記　一冊

原本　同上

矢島直言編

一、五十嵐養庵先生語類文集　上下　二冊

原本　同上

一、遠藤謙安先生覺書　上下合本　一冊

原本　同上

一、遠藤常尹覺書　上下合本　一冊

原本　同上

三浦常親編

一、北川子示教錄　一冊

原本　同上

一、北川子文書集　一冊

原本　同上

東　正　堂　抄

一、北川親懿翁雜記思案錄抄　一冊

原本　同上

三　浦　常　信　編

一、先賢豊語集　一冊

原本　同上

東　正　堂　編

一、井上國直言行略傳並碑藤夫子筆蹟授受證書合本　一冊

原本　福島縣耶麻郡喜多方村井上末孫の家及び同郡岩月村三浦氏に在り。

一、藤門像贊　一冊

原本　三浦氏に在り。

島　影　文　石　編

一、諸子文通　一冊

原本　同上

一、樋口覺書　一冊

原本　福島縣岩瀬郡仁井田村館ヶ岡寓居嘗て陽明學員たりし五十嵐哲太郎氏に在り。然ども今其所在を知るべからず。

石河定源門下某編

一、席上一珍　一冊

原本　三浦氏に在り。

右岡山學派著書凡十九本の副本共に東京市牛込區河田町十二番地正堂東敬治氏藏春閣及び滋賀縣高島郡青柳村大字上小川藤樹書院に現存せり。

常省先生文集　解題並凡例

〔解題〕 一、本書は藤樹先生の三男常省先生の文集にして、底本は寫本一冊「江西小川講堂會約」と題し、滋賀縣高島郡大溝町大字勝野中西直厚氏の所藏に係る。此の書もと大溝藩士前田勇吉氏の家に傳來せるものなり。編者大正五年八月倒扇原田知近氏の紹介によりて、之を借覽し謄寫し置きたるものありしに據れり。今新に常省先生文集と改め題す。

一、本書は編者詳かならざれども、書中掲ぐるところの前田長好・原田知辰等其他大溝の藩臣多きによりて考ふれば、此の書或は同藩士等の手に成りしものにはあらざりしか。

一、藤夫子行狀聞傳によれば、常省先生嘗て乃父藤樹先生學庸解の末尾完結せざりしを患へて、之が註解をなし、狗尾と稱せられたりといふ。然れども其の書燒失して今傳はらず、されば先生の家學を繼承せる常省子の學を窺ふべきもの、唯本書の存するあるのみ。

一、續編は編者嘗て得るに從つて收錄したるものにして、都て十三章あり。內一章は故忘村竹涯翁の筆記中より取材したるものにして、その他はすべて諸家に藏する常省先生の眞蹟中より得たるものなり。最後の與二德田彥六一一通は明治四十一年十二月愛媛縣大洲町藤樹會長下井小太郎氏の盡力によりて、新谷町河內宇十郎氏の藏幅中より得たるものなり。

一、卷末に掲げたる〔附〕花園會約について說明せんに、藤樹先生の長子中江宜伯の備前に召抱へらるゝや、芳烈公は花畑といへる處に學校を建てゝ、藩士の敎育を施せり。此の會約は當時その學校に掲げられし額にして、熊澤了介の撰文なりといふ。今その額は池田侯爵家の所藏なり。昭和二年一

月編者岡山市池田侯爵家別邸に於て得たるものを底本とし、之に對校するに安原貞平編藤樹別集を以てしたり。その符號は下の如し。

藤樹別集（別）

一、眞蹟に標目なきものは新に之を附し且つ（　）を附して編者の新に加へたることを示す。

一、書中江省夫または中省・省と署名せるものあり。此は皆常省先生の名なり。

一、常省先生大學三綱領の歌五首と意の歌一首並道・善・義・履霜堅氷至の文は、藤夫子行狀聞傳に見えたり。今こゝに再錄せず。

一、常省先生の墓所移轉に關する書狀は藤樹先生補傳第二四項に載す。參看せられたし。其の他學術に關係なきものはすべて之を載せず。

〔凡例〕一、卷末擧ぐるところ愼獨の贊並道の二文は、藤樹先生の文にして偶々混入せるものなり。依て標目の上に△を附し、且つ他と區別する爲め特に小なる活字を用ひ、又その旨を末尾に附記せり。

一、本文集中標目なきもの數項あり。今（　）を附して之を補ふ。

一、底本平假名交のところと片假名交のところとあり。今改めず。

一、底本所々題註並傍記あり。今從ふ。

一、底本句讀・訓點・振假名あるところとなきところとあり。今盡く之を附す。

一、附記は編者の新に加へたるものなり。

昭和三年丁卯十一月一日

小川喜代藏謹識

常省先生文集

江西小川講堂之會約

夫以文會友、以友輔仁者、先賢之明訓也。今一二之同志、孝弟之餘暇、交會於此、其志以爲、從古訓、講習討論、相倶切磋琢磨、而除去於氣習之昏蔽、而復本然之性、至孝弟之極處焉。故筆會約數件、揭之於壁間、以爲吾人之勸戒。

一、自反愼獨、入聖通神之大竅、換骨顯神之靈方也。夫自反則良知之明鏡洞然、妍媸不得遁影、是以凝氷忽泮、焦火倏滅焉。凡情之衆魔、不得爲祟矣。愼獨則外物不得投之、應事接物、盡天理、流行、而無入而不自得焉。當要拳々服膺而無須臾離矣。

一、博學審問愼思明辨篤行者、道學之終始也。當要讀誦聖經賢傳、玩味其意味、浹洽涵泳、而以滌淨琢磨於凡習之汚滯、審問辨於同志之中、而渙然氷釋焉、倍愼思之、怡然理順焉。以學問思辨之功、天理人欲、判然明辨之、篤行之其身焉。

一、口能興戎出好、吉凶榮辱、惟其所召也。當禁躁妄言、內不靜專、發躁妄也。且勿論辨誹議於當

世之政事矣。不在其位、不謀其政矣。勿誹謗人之過失。自求厚則何有暇于求人哉。勿俳優戲言。戲言出於思也。勿談無用之俗話。

一、容皃要從容端正焉。表正則影正。是自然之應效也。譬心如帥、四肢百骸如卒徒。帥正則卒徒隨命嚴肅也。若以不正之帥、驅迫卒徒之不整、則遂致乖敗之禍矣。忘正其心、徒求於外皃之端正、是外本也。必失卻其心理乎。且老者以筋骨不爲亂。漸就易安。

一、或討論心術、或論辨書義、或過失相質。或讀誦經傳、或學習進退之節、或試射、或揮戈。

一、少者習洒掃應對進退之節。是學業之一事也。當聽從長者之命、而可服其勞矣。

一、若交席移時、及餔時、餕喫白粥南都茶等之食、救其飢。不可求美味、而事口腹矣。

延寶辛酉孟春日

（附記）　眞蹟、藤樹書院所藏

天和二戊之春

酧前田長好

一、來喩の件々、皆學者の通病にして、その病因ハ致知の功間斷有て心外に放てる故なり。苟致知の功密ならば、大陽出て魑魅魍魎不得爲怪ことわりにて、病魔おのづから消滅すべし。夫獨座の雜慮强て思を斷靜ならんことを索れば、却而雜慮盛ニ或ハまた槁木死灰となりぬ。意有ての靜ハ誠の靜にあらず　如何となれば、思ハ心の官にして、理にしたがへば、善念と成、氣にひかるれば雜念と成、何ぞ一向に靜をねがわんや。平生致知の功おろそかにして雜念おこらば、正に良知に至るべし。知に至れば、必善念興起す。是にしたかへば思無邪。おもひ邪なければ、事終ておのづから虛靜なり。虛靜のこゝろより發すれば、次の念頭もまた善なり。かくのごとくなれば、自然に雜慮なく、思惟多といへども、皆心の用にして、德の養

と成。是大極動而生陽。動極而靜。々而生陰。靜極復動之謂也。善を思ハ心の用にして、大極の動なり。事おわりて虚靜なるハ、心の躰にして大極の靜なるなり。かくの如くなれば、虚坐もおのづから謬て（底本く字に作る、今改む。）淋きの憂なく、應事接物の際、浮躁なるの累もなし。又間暇のおりふし、傳習錄學庸の解など、一覧あれば、書に對せらるゝ時のみにて、退れてハはや心いなものになられぬると、これ看書の時専心を文字上に放着せらるゝものならんか。讀書の時心文字上に放着すれば、文義を解する事詳なるに似れども、識知のみひらけて德の養と難成。しかる故に書を離るれば、また舊習にかへるなり。心、腔子裏に存して書に對すれば、縦文字十分通徹ならざるも、句々（々底本と字の如く見ゆ。今改む。）おのづから氣習を琢磨する砂石となりて、德の養すくなからざらんか。又道ハ易簡にして、樂しきとのみおもわれぬる故か、困勉百倍の功おろそかなる様に覺られぬると、易簡は道の本然、樂ハ心の實理にして、困勉百倍ハ氣習を除去の實功なり。志篤實なれば、おのづから用力下手の功、困勉百倍にして、心ますく〳〵樂み、その道易簡なり。たとへば求ぬる事有てかしこに至らん事をねがへるもの、その求はなはだしければ、道路の艱難險阻を經歷すれども、そのかしこにちかづく事をよろこび、その勞苦をはゞからず、其事業いとたやすきにもたぐひなんか。猶能賢察多幸。

天和二壬戌孟春中沅（正堂翁曰く沅は元又は浣の誤。）

（附記）此の眞蹟拙歸と署名す。大滿家中前田勇吉氏の家に傳來し、今同町前田節氏藏。長好は前田節氏の祖先にして孫右衛門と稱す。享保四己亥五月二日歿す。大滿分部侯の臣なり。

答同人書

來諭曰。當下被奪於他之善惡順逆。而自己之受用不快活。却而責他之非。失言之弊不少矣。仁者其言也訒之聖謨。治病之適方也乎云々。所說之病。皆是以自反愼獨之功不切實。而天理人欲苦

樂之辨。未適實。正堂錄曰當作的實。好惡適莫之意未去之故不能尊德性而修己眞實也。若修己切實則何有暇於責人。失言哉仁者其言也訒。亦是尊德性而修己之成熟而至極之效也。如高見能認得此理則所說之病必可克他而已矣。然不近其理而徒以言訒之迹爲警戒則東滅西生之弊難免乎。希猶能商量。

江省夫再拜

（附記）眞蹟、滋賀縣高島郡水尾村万木良知氏所藏。但謹答前田賢叔之趣向と題せり。

又

來諭曰。受用無斗方世間に拘牽せられ、將迎念慮多、習魔事を用ゆと。是皆道を事理の當然に求て、率性の道たる理躰認たしかならざる故なり。率性の道たる理、底に徹しぬれバ、必德性を尊ぶこと實にして、内に省る功間斷なく、一向に欲盡己のみなるべし。然時は有必事焉。而助長し正し忘れ外に求るの病なく、世間の變態浮雲の太空を過るがごとし。かくの如くならバ拘牽將迎念慮の病何よりか生ぜん。心の神明、かく照著ならバ、習魔もいかんしてか祟りを成んや。又曰。靜なる時ハ氣沈み自反の手段效有て、万欲放下しぬるとおもへるは、未發の中を喜怒哀樂の外に求め、氣機の感通を閉却したるを放下しぬるとおもへる成べし。しかる時ハ、無聲無臭の實体にあらず。さるによりて、欲根ぬけずして、物來てまた興發せるのみ。夫未發の中は喜怒哀樂の中に存す。是におゐて未發の中を求れバ無往而不克己之地して欲根去中常に存し、靜なる時は休し、物來時ハ即發見流行必和なるべし。又曰。藝術修練不及人と。夫藝は道の一端なり。道德ハ其全體なり。故に據於德而當遊藝。然る時ハ、その當務においてはいかんぞ修練せざらん。若不據於德してたゞに藝術の修練を求めば、たとひ藝術に精しくとも、却て德性を賊んか。猶よく商量有べし。

同

御實志難レ立騷動之境に御觸、放心易レ被レ成由、吾人の通病ニ御座候。何も致知之工間斷切實ならざる故と存候。致知切實に候はゞ性之天命たる事著明にして、鳶飛魚躍之實理易レ認、自實志立可レ申候、左候はゞ尊レ德性ノ事切實にして隱微の戒懼間斷なくして、動靜順逆之境あづかる事なく、騷動之境も忍レ性衡レ慮修行之端となり、却而進德之媒と可レ成レ事と被レ存候。以上。

元祿七乙亥年

同

一、近年凶變打續候に付、御迷も出來申樣ニ被ニ思召一候由、御哀戚之餘左樣之事も御尤ニ御座候。併大本に御志だに篤候はゞ、德性感通之哀戚厚可にて、就ニ世變一の動ハ無レ之理ニ而御座候。境變に動ハ未外ニ心之馳にて、事理に依着仕候より起る事と存候。君子ハ死生利害毀譽得喪底之事ハ度外に措と申語のごとく、德性に本づきて、人ハ修レ己可にて外境に精神の滲漏無レ之故、境變又は變怪底之事に觸ても、動無レ之、愈入ニ精微一砥石とも成候と相見申候。委曲拜面ならでは難ニ申盡一候。

答ニ都築氏質問一　若州之大守之親臣外記

答ニ靜座一之件

一、靜座乃就ニ氣之靜時一求レ復ニ於寂然不動之體一也。靜時比ニ動時一易レ認也。於レ是認得。則其惑渙然氷釋怡然理順。樂ニ天理一惡ニ人欲一切實也。是以最培ニ養本根一。

答好靜之件

一、吾子所說好靜之靜、與知動靜之靜。一般也乎。否若一般看則謬矣。又靜中之動、動中之靜。此兩句難曉。待蒙面論耳。暫以鄙意論之。喜靜厭動之病、不知本体之靜。而徒喜氣之靜。故有厭動之病。公所說之知動靜之靜。是本体之靜也。乃靜者誠也。誠者無爲也。若自反愼獨之功切實。則當至此。至則一毫無適莫。何有厭動之病乎。學問之道無他矣。克去人欲之擾亂。而復本然靜而已。

答存養之件

一、存養與收歛。非兩箇之事。高見適當。然先后之說。猶不穩當。寧爲一事之始終看則可也乎。收歛者。存養之始。存養者。收歛之終也。

答敬之本體之件

一、戒愼恐懼者。敬之實也。心充實而一物不可敢入。是敬之本體也。

答殺身知仁之件

一、臨死棄義用氣力、於仁則非仁。如賢誨。夫仁者、於死生無一毫適莫。但天理流行而已。故其生也樂。其死也安。然徒向這上求仁。不可也乎。仁者。乾元也。包括天地萬物。其感動也愛耳。若能克此心、則無物不愛。而其輕重差等。猶權衡不待按排而適中。

答禮之件

一、如賢誨。禮者以性之感動爲實。以其著見於動容周旋品物爲文。此自然之天則。日用躬行。小大無不由之。由之則心和順而事無乖戾。是禮之所貴也。下手之功夫。致知而行其正情耳。

答別所子戶

示惠掌ニ落テ、吾子日用ノ功夫、用力ノ切ナル㕝ヲ知、喜慰不レ少。被レ示所大段可也。本体ヲ見ルトイヘルハ未レ親切ナリ。本體ヲ見付タルト思ハ畢竟虚見ニシテ非二本体一。文王望レ道而未二之見一。是即本体ニ至リ給故之。故中庸ニモ及二其至一也。雖二聖人一。亦有レ所レ不レ知焉ト云リ。夫無聲無臭ノ本体、如何ゾ知見ヲ以認得ンヤ。故ニ本体ヲ見ント求ルハ誤之。本体ニ至ランヿヲ希フハ、主意トスベキ所之。本体ニ至ランヿヲ希ハヾ、志ヲ可レ立。志ヲ立ルハ、學ヲスルニアリ。學ヲスルハ當下致知格物ノ功間斷ナキ之。凡志ヲ立ルト、學ヲスルト二ツニアラズ。志立旼ハ學ヲスルヿ間斷ナク、學ヲスルヿ間斷ナキ旼ハ、志立。其心ニ就テ志ト云、其功ニ就テ學ト云而已。志ノ起ルハ、吾子ノ云ル如ク、吾人性善ノ妙ニシテ民之秉レ彝。好二是懿德一ノ謂也。然レバ志ハ即未發ノ中、良知ノ實体也、苟ニ此心ヲ不レ失旼ハ未發ノ中蔽塞セラレズシテ、若氣ニ動クヿアレバ必其非ヲ知ヿ適切ニシテ、本体ニ復ルベシ。夫學問ノ道豈他アランヤ。然レモ志ノ起ル、純粹ナルヿ難シ。若シ秉彝ノ好德ニ本ヅカズシテ知見ノ聰明氣節事爲氣象ヲ慕ヒ、或ハ心ノ苦痛ヲ免レ安樂ナランヿヲ願フ意念ノ交リコリ起ル旼ハ、畢竟名利ニ根ザシテ自私シ自利スルヿヲ不レ免、故ニ文才識見氣魄境遇等ニ靠リ却テ文才ノ博識見ノ富ル、氣魄ノ厚、氣質ノ美、境遇ノ德ナル、皆德ヲソコナフ媒ト成。縱ヒ聖賢ノ形迹ヲ認行トイヘモ、模倣比擬ノミニシテ、遂ニ凡情ヲ增長シテ、本体ニ遠リヌ。異端ニ入、郷愿トナルモ、皆此迷ヒヨリシテ至リス。苟ニ秉彝ノ好德發見ニ本付テ起リ、致二良知一旼ハ、文才ノ拙キモ、才識ノ不レ備モ氣魄ノ不レ厚モ氣質ノ偏駁モ、境遇ノ德ノナラザルモ、憂ル所ニアラズシテ、志立學ニ進ミ本体ニ至ルヿモ其中ニ有ヌベシ。

（附記）別所子戶は大溝分部侯の臣なるべし。今明かならず。

答原田知辰書

元祿十一戊寅

本月初七之示教落掌。備審下知吾子用功之親切而學之長進上。幸甚々々。獨ハ非二對レ人之獨一。以レ無レ對爲レ

獨高見最適切也。蓋學者未有得此意。則信良知不親切。徒以有正忘助長之病。或遇事乃攙奪而志亦有起伏爲憂。此无他。以獨爲對物之獨。而分別於彼此內外。以爲兩截。以獨爲一物也。是以專用克治之功。於其病上。而遂離却本体。陷於意必之魔窟。而難復。猶庸醫猥用攻病之藥。而戕賊其眞氣。病勢迫裏而斃焉。夫獨之爲言。純一无雜。渾然无對耦。无不不該貫之謂。而良知之實稱也。故戒愼恐懼之切實而能克治正忘助長意必攙奪起伏之病者。獨之良能也。是以愼獨則常有事。而酬酢於万境。悉皆爲切磋琢磨之地。而正忘助長攙奪起伏之病自消。內外渾一。而時措之宜也。若能如此。則其可進德矣。然則學者之憂。非正忘助長攙奪起伏之間。而在不知良知之實体。而致知之功不親切而已。

（附記）　原田知辰通稱平八郎大溝分部侯の家臣也。

元祿十一戊寅

答佐治氏。

延平問答御覽ノ由、終日危坐以驗喜怒哀樂之前氣象如何ニ一段日用御受用有度由。尤是モ一義候得共、未切近究竟之工夫ニテハ無之。縱雖驗得畢竟虛見之閑工夫ニテ可有之ト存候。良知卽无聲无臭之本体所謂未發之中ナレバ、當下致知格物上之工夫無間斷切實ナラバ動靜不異、外內合一ニメ其德高明篤實ニメ万境ニ感通去テ更無被遮蔽而中常存發而皆中節ノモ自可庶幾哉ト被存候條。希ハ延平之示教ニ御從事候ハンヨリハ今一等頭腦ヲ御認候ヘカシト存候。

（附記）　佐治氏は後記佐治思凡と同人なるべく恐らくは大溝分部侯の臣なるべし。

致知之解　与原田知辰

知者心之神明。孩提知愛。及長知敬。感於四端。閑居之小人。見君子。知其惡。厭然猶亦如見其肺肝。是也。致者復至之謂也。此知也。所得於天。而聖凡更無加損。存則爲聖。放則爲凡。存放之間咫尺。聖凡懸隔也。吾人苟能反求於己則復矣。愼獨則存矣。存則昭著適實也。昭著適實。則五事必整正。而已矣。五事之整正者。知之實也。今反求於己。而良知發露。然不能從之。而五事不整正。是愼獨之功不切實。忽得忽失也。

知止之解　与原田知辰。

知者思繹燖温。心至焉之謂。止者心之本體。寂然不動之名。自反愼獨眞切篤實。則心之神明昭著。而人欲消滅。天理發露。猶晦霧快霽。而日光瑩然。於斯無少間斷。欲根淨竭矣。本體自若矣。謂之知止。知止則志孳々爲善。而無疑惑變遷之病。心恬靜坦易。而無動欲。擾亂危惧罔殆之憂。處事精詳熟成。而無差謬闕漏之弊矣。天下之大本斯立矣。天下之達道斯行矣。知止之義大哉至哉。

答原田知辰

一、格物之説ノ條内ニ當下ノ非ヲ放過シヤスク、偶〻其非ヲ知ルトイヘトモ、念慮ノ差ニテ、屑ニモアラヌヿヲ苦ミ、或ハ少事是非分明ノ處ニテ、苦ムベキ理リナシト知トイヘトモ、猶惑難解一日二日過テモ不快心セマリヌル故、過去タル事ニテモ間暇ニ其是非損益ヲ能對算スレバ、心自ラ快足ニシテ拘攣解ケヌ、培養ノ助ト

モ成ベキヤト。是故知ニ本カズシテ徒ニ格物ヲ事トスルノ弊ナリ。王子曰、不本於致知而徒以格物者。謂之妄。又曰至善也者心之本体也。動而后有不善。而本体之知未嘗不知也。意者其動也。物者其事也。致其本体之知而動無不善。又曰格物者致知之實也ト。故ニ致知之功夫切實ナル時ハ、神明常ニ主トシテ、一念ノ微動モ其是非照サヾル㕝ナク、善ハ必行悪ハ必去事明鏡ノ妍媸ヲアヤマラズ、來レル物トシテ照サヾル㕝ナク、妍キ者ハ快ク、媸キ者イトワシクサレルガ如シ。過去ノ不善ヲ間暇ニ對算スルハ徒ニ放過センヨリハマサランカ。然レ圧是猶將迎ノ病ニシテ當下ニ専ナラズ。培養ノ助ト成難カラン。

一、間居靜坐ノ節工夫スベキ㕝アレ圧、工夫専ナラズ。間思慮トナルノ條、如高見天命之性ニシテ率性之道ナレバ、須臾モ離ルベカラザル㕝ヲ知徹セザル故ニ、志不立ノ病ナリ。

一、志ノ進退ニツイテ試ル、說ノ條内。

志退タル時、念慮ニテ處事モ易ク覺ルハ、氣機ニ乘ジテ凝滯ナクヤスラカナルナリ。然レ圧主タ、ザレバ、妄行ニシテ日至善ニ遠ヌ。伶利ナル人ノ、道ニ入難ク氣機ニ乘ズル㕝盛ナルニ至リテハ、大ニアヤマルモ此理ナリ。志進時、事々物々ニ念慮多、少事ニモアヅカルハ事物當然ノ理ヲ道トスル事ヲ主トシテ、専流行ノ上ニツイテ功夫ヲ用ル故ニ、事物ニ拘攣セラル、ナラン。天命ノ性ニシテ率性ノ道ナル事ヲ能知徹シテ不睹不聞之地ニ戒愼恐懼セバ、志ノ進ルニ隨テ、心廣體胖、無入而不自得焉哉。又事非ナリトモ自欺ヿナクバ畢竟實非ナルマジキカトノ論アヤマレリ。事ノ非ナルハ自欺バナリ。無自欺則思無邪シテ言動視聽自ラ非禮有ルマジ。

季夏上澣

同人答

一、如賢諭爾來書音隔絶疎情之至、將亦心術之義示諭之通、吾人之通患ニ御坐候。如高見志ダニ切ニ候ハ

ハ放蕩ニナガレ候モ、却テ舊發ノ緣トモ可ニ能成一トカク志ノ不ニ篤實一患ニテ御坐候。志ノ不ニ篤實堅固一ハ不純粹ト、又ハ當下ノ躰認不レ專底ニ徹不レ申トヨリ進モ無レ之候。來月ハ何トゾ罷下リ、得ニ心話一度候。

正月廿三日

（附記）同人答は常に答ニ同人一に作るべし。以下之に倣へ。

（失　題）

一、先頃之御書中被レ示候御心術之趣委細承知仕候。動靜語默無ニ入而不ニ自得一焉樣快思召候處、京都ヘノ御使者御勤被レ成候以後怠惰被レ成次第ニ專一ナラヌ樣ニ有レ之候。其病因省察被レ成候ヘ共、據處モ無レ之、事ノ繁冗ニマギレ御失候カト思召候由、如何ニモ賢察ノ通ニテ可レ有レ之候。事ノ繁冗ニアヅカリ取失候ハ臨レ事候節、事業ノ成敗ニ心ヒカレ、良知ノ省察カロク成候故、作業順テ快候時、却テ不レ覺不レ識本体ヲ取失モノニテ候。其時力量上ヨリシテ過ヲ悔候ヘバ又一病ト成リ本体ニ復候事難レ成候。能省察仕候而事之快ニ被レ移候故本体ヲ取失候義ヲトクト會得仕リ候ヘバ卽本体ニ復候。

一、前簾快活ニ御覺候時モ、本体ヲ明ニ御認覺無レ之候。平日不レ動ニ於欲一不レ滯ニ於物一時、心之本体ニテ可レ有ト思召之由、如何ニモ本体ニ復候故、不レ動ニ於欲一不レ滯ニ於物一候。又怵惕惻隱ハ氣機之發動ニシテ仁ノ本躰ニアラズ。惻隱之本源純一無雜之心ヲ仁ノ本体ト、大學小解ニ見ヘ候段、始ノ一句ハ聞ヘ候、後ノ一句疑布思召候由、如何ニモ示諭之通、井ニ入赤子ヲ見テ氣機發動惻隱ノ心アルハ仁心ノ感動ニテ候。然レトモ氣機發動ノ處ヲ仁ノ本体ト存候ヘバ感動スル處ニツイテ早本体ヲ失シ前ノ快活ノ節却而本體ヲ被ニ取失一候モ氣機ヲ認ルアヤマリヨリ起候ト存候。王子大學古本序ニ至善ハ心之本体也。意ハ其動也。動而后有ニ不善一。ト書玉フトヲリニテ候。ソレ故惻隱ハ仁ノ端ト孟子說玉フモ就ニ不レ慮而知ル處ニ而其本源純一無雜ナル事ヲ知リ、復ニ本体一候タメニ言ヲ立ラレ候。

十一月十九日

（附記）㈠ 慵は惰の誤。
㈡ 簾顧問東正堂翁曰く、簾は廉に作り、かどと訓むべし。

同人答

一、如賢諭往歳ハ彼是紛擾書音疎逖罷過候。然ハ御心術御變被成候叓モ無御坐、唯流行底ニ依着被成、率性之理徹不申ノ由、吾人ノ通患御坐候。兎角志純粹篤實ナラザル故精神外へ漏洩イタシ候ト存候。率性ハ固有之天眞ニ率ラレ自然ニ感通スルノ義ニテ御座候。タトヘバ火ノ燥ニ就キ水ノ濕ニ流ル、如ク、鳶飛魚躍ノ從容自適スルノ理ト同ジ。然レバ道ハ有爲ノ私ニ生ズルモノニテハ無之、天眞自然ノ感通ナル叓無疑候。此故ニ戒愼恐懼乎不睹不聞之地。而獨知之神明ニ歸住スルヨリ外ニ率性ノ道ヲ得ル手段ハ有之間布ト存候。

元祿十五午年

同人答

一、如示教先頃ハ於京師邂逅會晤、得賢慮珍重奉存候。併御務多冗之中手前モ紛擾ノ節故緩々ト不得心話御殘多存候。御志之大段ハ日用應接ノ中御忘不被成候へ𪜈當下ノ實功良知上ニ手ヲ御下シ難被成思召候。至于此ハ不待他自己篤信篇故ト思召候由、高見之通御座候。徳性良知之自己實躰ナル叓徹底イタシ候ハヾ、須臾モ不離理ニテ候へ𪜈、未此理不徹底故ニ志切ナル樣ニテモ賓ト成習ジ之形氣イマダ心裏ニ主ト成候テ有之故ニテ御座候。然𪜈急迫ニハ難得義ト存候。分上之良知感通之上ニヲイテ實ニ認候ハヾ縱ヒ起伏間斷有之候テモ終ニハ賓主交替イタシ候テ進德之効モ可有之事ト存候。

九月十日

答二佐治忠几士一

心喪之義事上ニテハ令辰ニハ香奠之誠敬ヲ盡シ外事吉慶之饗應遊興酒宴等ニ不レ與、心上ハ哀戚思慕之情無ニ間斷一ニテ候。喪與二其易一也寧戚ヨト曰シゴトク、喪ハ心ノ哀戚本實ニテ、事上ハ必トスル義ニアラズ。香奠接待等ノ事ハ時俗ニモシタガハザレバ難レ成事ナレバ彌〻求メ盡ス所ハ喪ノ本實ニ有ベシ。哀戚ノ實ヲ求ルハ致二良知一ヨリ外ハナシ。致二良知一スレバ放心收リ本來ノ性情感通シ喪ノ實立テ事上モヲノヅカラ時中之條理可レ被レ行。イカントナレバ遭二大喪一哀戚思慕之切ナルハ本來德性ノ自然ナリ。シカラザレバ心外物ニ動テ本然ヲ失フ故ナリ。喪祀本ヨリ道理ヲシテ作爲シタル事ニアラザレバナリ。

答二恒川氏一

來書曰。身安ク心清淨ナランヿヲ求レモ舊習ノ魔障多ク或時ハ進ミ或時ハ退キ本心ヲ失ヒ墮落ガチナリ。又曰ヿ愼獨ノシヤスキ道ヲ示セト。身安ク心清淨ナランヿヲ求メラル、是レ工夫ノ本然ニアラズ。一己ノ私ナリ。故ニ工夫則煩トモ成テ墮落シ安シ。愼獨ノ工夫篤實專一ナレバ自ラ心清淨ニシテ身安キ効求ザレモ備ルベシ。愼獨ノ工夫手ノドリガタキハ志ノ純粹ナラザルニヨレリ。志ノ純粹篤實ナラザルハ愼獨ノ義ニ明ラカナラザレバナリ。愼獨ノ義粗〻左ニアラハシヌ。此意味ヲ克御得心アリナバ工夫ノ一助トモナリナンカ。夫人ハ天理ノ流行一氣之純粹至正凝聚シテナレル者ナリ。故ニ天理則心ノ主宰トナリテ万物備リヌ。是故人爲ノ私、意必ノ障ナク外物ニヒカレザル時ハ事物ノ來ルニ隨テ自然ニ感通シテ、子トメハ孝ニ父トシテハ慈ニ君トメハ仁ニ臣トシテハ忠ニ人ト交レバ信ニ言忠信ニ行篤敬也。是ヲ道ト云。若氣ニ動キ習染ニヒカルレバ心ノ本然ヲ失ヒ德スタレ道行レズ。然レモ主宰天君ノ靈明ハ滅スルヿナシ。其靈明純一無雜ナル故ニ獨ト云ニ其昭スヿ

知識聞見ヲカラズ。故ニ獨ト云。人シラズ已レ獨知ル故ニ獨ト云。此獨知ヲ尊信シテ常ニ自カヘリ見テ獨ヲ守ル上ニ志專ニシテ他念ナキヲ獨ヲ愼ト云。獨ヲ愼ヿ篤實專一ナレバ心上ニキザス所ノ私一念微少ナルモ必是ヲ知ル。知則必其私消化シテ善ニ移ル。常々如此ナル時ハ氣質習染外物ノ障蔽日ニ薄ク成リテ善ニ明ラカニ德ニ進ベシ。然ル時ハ人欲功名利害毀譽得喪死生等ノ念淸ク竭テ心常ニ淸淨ニ日用ノ應接悉ク道ニ叶フ。故ニ身モ亦常ニ安シ。若シ愼獨ニ功ヲ不用シテ心淸淨ニ身安カランヿヲ求ル心先ダテバ氣象意味ノ淸淨ナルヲ認テ快シトシ、身ノ安ラカナルヿヲ境界ノ上ニ得タルヲヨロコブ。故ニ終ニ實德ヲ離テ心虛高ニハセ、或ハ境遇ヲ擇ミ世間ヲ厭ヒ外物ヲ惡ミサケ喜靜厭動ナドノ病出來テ、心ヲ汚シ煩シメ淸淨ノ本体ヲ失ヒ日用モ亦道ニアタラズシテ身モ亦ヤスカラザルモノ也。

（附記）恒川氏恐らくは大洲分部侯の臣ならん。

答恒川士

元祿十一戊□冬

示教ヲ審ニシテ吾子功ヲ用ラル、ノ切ナルヿヲ知ル。欣幸々々。事々物々ニヲイテ善ヲ善ト知リ惡ヲ惡ト知ラル、ヿ胸中ニ明カナルニヨリ此ニヲイテ惡ヲ退ケ善ニ進マレタキ志アレ氏、自欺ノ病有テ善惡又混雜シテ習ニヨリ惡ニ移ラレ易シ、然氏近來ハ自欺少シ止ス。此ニ至テ外ニ不倚惡ナル物ヲ退ケ善ナル物ヲ擧用尊信シテ進行(マヽ)レバ良知ナルベキカ。良知卽天君カトノ義大段是ニ近シ。然氏功夫適實ナラズ。如何トナレバ本來事々物々ニ善惡ナシ。己ガ心ノ善惡ニ就テ善トナリ惡トナル。若事物ノ善惡ヲ擇ンデ善ヲナシ惡ヲナサヾランヿヲ求ル時ハ、心ヲ以テ事物ノ役トナシテ善惡アキラカナラズ。其善トシ惡トスルトコロ意識ノ私ヨリ出テ、事善ニ似タリトイヘ氏實ニ善ナラズ。剩ヘ善ニ伐ル意生ジテ驕敖ノ病ヲ釀シ成シ、日ニ德ニ遠ルベシ。但一毫ノ意知ヲ不加シテ提天命尊德性信良知其功夫此ニ專ラナルトキハ自然ニ思無邪不睹不聞ノ地ニ戒愼恐懼スル事

無少間斷。シカル時ハ耳目口鼻四肢スナハチ天則ノマヽニメ聲色臭味安逸ニ掩ルヽ憂ナク善惡兩路ノ迷モナシ。此天君泰然トシテ百體令ニ従フノ謂ナリ。天君良知本來一ナリ。其主宰タルニ就テ天君ト稱シ、其靈明不測ナルニ就テ良知ト稱スルノミ。

思

無邪孳々爲善也。若無此主則一念轉爲萬欲。念々輾轉无止。遂陷於陷阱而不知。苟克念則消。理明而無思無爲、寂然不動。感而遂通天下之故。

鳶飛魚躍

形而上者道也。形而下者器也。道器一体更無間隔。鳶魚也。飛躍也。器也。其所以飛躍也道也。故鳶魚飛躍、從容自適。不待按排矣。耳目也。鼻口也。形骸也。皆器也。所以視聽聰明動正言忠信者道。從迪則吉。無入而不自得焉。乖道則凶。猶鳶魚易地而楚(一)煩懊遂至死亡矣。

附記 (一) 顧問東正堂翁曰く、楚の上恐らくは苦の字を脱すと。

△愼獨

大虛廖廓之皇上帝。太一元神之一。厥靈光稟受人生之月窟。而玅用一貫。無所倚。無所待。无思。无爲。活潑々地。獨往獨來者。謂之獨。所謂惟一一

德一貫獨樂。皆是也。

（附記）此の文庶本に從ひてこゝに載す。實は藤樹先生の作なり。文集一（本全集卷之一）に見えたり。

自反

自反者。自省于內之謂也。行有不得者。皆反求諸己者也。君子之學爲己。而不爲人。曾子之三省。自反之切實者也。孟子云三祀人而橫逆尙到我。必自反吾必不忠。是亦自反之至也。以物見物。以己不見物。卽万境無不自得。若一毫有因外尤人。非自反工程。

愼獨

愼獨者。古來學術之要語。而聖凡可法守者也。愼者戒愼之義。獨者心之本体。一念入微之地也。心本如明鑑止水。物來順應。且一念獨知。雖隱微通貫於天地鬼神。故潛雖伏矣亦孔之昭。君子所不可及者。其唯人之所不見乎。小人自欺。且以欺人。正相反于愼獨者也。

△道

道非外。率性之謂道。々譬如水也。人譬如魚。々在水。則悠然而樂。離水則苦。離而久。則死。人率性則坦蕩々。而常樂。

子曰。知者樂水。此之謂也。離道則滿腔子。是倒懸之苦惱。離而久則死。　子曰。人之生也直。罔之生也幸而免。此之謂也。蓋學者洗濯氣習名利之舊染。而克愼獨。則貌言視聽思。皆率性。而無入而不自得。而無倒懸之苦。若毫髮頤外之念。舊染之心。未淨盡。則長戚々之患猶涸魚噫。

（附記）此の文庶本に從ひてこゝに載す。實は藤樹先生の作なり。文集五（本全集卷之五）に見えたり。

「常省先生會約」常省先生眞筆

常省先生文集並補傳第四十四項參照

（藤樹書院藏）

與岩佐太郎右衞門　常省先生眞筆

（近江　岩佐定一氏藏）

答原辰秀才　常省先生眞筆

(近江　志村清太郎氏藏)

瞽瞍底豫　常省先生眞筆

瞽瞍底豫天下之為父子者定

(近江　早藤貞一郎氏藏)

答質問　常省先生眞筆

(近江　万木良知氏藏)

常省先生文集續編參照

答德田彦六　常省先生眞筆

常省先生文集續編參照（愛媛　河内宇十郎氏藏）

藤樹先生門人詩稿

其一

（近江　淵田岩次郎氏藏）

其二

（近江　饗庭巳藏氏藏）

門弟子詩文集參照

跋藤樹先生致良知三大字眞蹟　大鹽中齋筆

景慕詩文集參照　（藤樹書院藏）

常省先生知行高古文書

其一

其二

常省先生長子誠明知行高古文書

（在朝鮮　嫡流中江滕氏藏）

補傳附（五）中江家累代之折紙參照

答原辰秀才書

來書曰。謂學問之頭腦。於心上認得爲本體者。而平生存養之。失此体者。爲放心。爲人欲。而欲省察克治之。然未得於心上恰好處。自朝至暮。遂不得可當本体之心也。蓋謂縱雖至得本体。離今此心別非可有云本体者。然則是非工夫之本然必也。雖然不能開發其謬。是故常有尋求之氣象。而不自得。心狹窄而不快足云云。夫學問之頭腦者志也。志純粹則必尊德性。尊則奉承篤實親切也。然則心收斂而不容一物。(一)郭然無聲臭。是心之本体也。故不被遮蔽於人欲。若爲外誘被動。則必知之適切也。適切則復。復則人欲頓滅也。於此無少間斷。則其熟處從容自得。聖賢之域。亦可庶幾而已矣。如高見。至得本体。則復於心之本然耳。如何離當下之心。而別求爲本体者哉。若欲於心上認得爲本體者。存養之。此於心裏尋求於一箇本体。乃樓上架樓。騎驢覓驢之謬也。若辟此。則必陷溺於老佛。或爲意見理障之累生也。是所以有窄挾煩瑣固滯之患也。伏乞切体認德性之爲天命。仁義之爲安宅正路也。於此克徹底。志自純粹。於心上求爲本體者之惑融釋。而秉心塞淵。操則[以下闕。]

(附記) 眞蹟、滋賀縣高島郡青柳村大字上小川志村清太郎氏藏幅。

岡田氏冠禮 其一

本朝之俗。庶士已下。自成童至於弱冠之比。薙除其額髮。以爲成人之容飾。强比冠禮。稱謂元服。吾

友岡田子年既當加首服、且有官命。是以從國俗、行於薙除額髮之禮、乃倣古儀擇賓。然無當可之擯乎。乃請予來於予先考曾所築之藤樹書院、行其禮矣。是乃以其志信道德、慕家父之學脉也。蓋冠禮者、成人之儀也。宜也哉、擇之之審、寔可賞矣。然有始能有終鮮矣。人情之常也。但願吾子自今已往、斷棄其幼志、日進善修德、遂爲大成之人、不背其初志矣。乃又招僚友笠原子、以受其理髮。予雖非呈祝辭之器、以主於先人之遺宅臨席之故、不得已妄祝辭曰。

吉月令辰、斯始行薙除額髮、成人之禮。乃比元服。當棄爾幼志、順爾成德、无息則得天爵之尊榮、以受天之慶、景福无疆。

乃字謂季敬。敬者奉持天命之性之謂也。於戯、不美而善也哉。吾子若能從字、充其心、則至於宇内之至尊、亦難乎。伏乞勉之哉。々々々。

同　其二

夫冠禮、成人之道也。本朝自中葉已降、及成童弱冠之比、薙除其額髮、以爲成人之容飾、強比冠禮、稱謂元服。是武夫庶士以下之俗也。

吾友岡田子、仲實君之次子。

同　其三　（岡田氏命名）

諱　餘納　訊

親信　音和相生

今爲岡田生擇名。得親信兩丁字。繙之歸納於訊字。親者愛之實也。信者忠之實也。訊者問也。蓋忠則言行中正而不違理。故信也。而其交於人也。德愛感通。而親愛必有常。然則物我無間。是以好問而辨惑。進德而自得焉。可謂切□己之字也。苟能據之。而提撕警覺修整無少間斷。則庶幾爲名必可言之人而已矣。請勉旃哉。

丁亥陽月穀旦、　江省夫

呈岡藤秀才。

（附記）丁亥は寶永四年にして常省先生時に年六十歲なり。

誠

未有學養子而後嫁者也。然察於赤子之寒暖飢飽。適其情。无他。其愛之誠也。

（附記）眞蹟、滋賀縣高島郡大溝町中村德通氏所藏。

敬

畏天命。尊德性之謂也。敬則天理存。精一無適。是以物來順應。無物不體矣。

（附記）大阪市北區旅籠町田中宗一氏祕藏。岡山地方より得たりと云ふ。

再奉復呈佐公常賢伯研硎。

再蒙明誨。義論詳明。文辭亦玲瓏。最堪嘉尚矣。就中好惡之一件。以有好惡爲實体。以無好惡爲假

說疑語意未純粹乎。敢致鄙意、瀆高覽、以希折衷。夫爲人好仁惡不仁、爲善不爲惡、是性之自然也。好惡與爲不爲。是就其既然之跡而名之假說而已。性中豈有其意乎。譬水之就下而避高、火之就乾而避濕、就其跡見之、則似有好惡。然水火豈有好惡乎。蓋所使其性之然也。學者亦能致其知、則誠立、必好仁而不仁爲善而不爲惡之跡顯著矣。是所以大本立而達道行也。若就好惡上用力、則意主張而其所爲不實、流功名涉虛飾之病。難免矣。君子無適也無莫也義之與比。堯舜由仁義行。非行仁義也之聖謨。所由發也。

中省　頓首

（附記）眞蹟、滋賀縣高島郡本庄村大字川島中田友益氏所藏。又藤夫子行狀聞傳松下氏第二本に之を載す。

竹

猗々者。淇園之菉（マヽ）（竹？）。盛德至善不能忘者。切磋琢磨之君子也。

（附記）眞蹟、滋賀縣高島郡青柳村大字上小川淵田岩次郎氏所藏。

瞽叟

瞽叟底豫。天下之爲父子者定。爲天下無不是底之父母也。

（附記）眞蹟、滋賀縣高島郡安曇村大字田中早藤貞一郎氏所藏。

（大學八條目之解）

古之欲明明德於天下者、先治其國。欲治其國者、先齊其家。欲齊其家者、先修其身。欲修其身者、先

正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物。

古指古昔之盛世、稱古有勸戒之意。欲者願也。明明德於天下、交接於天下之万事万境。而无不盡明德昭明之量。而天下之事悉從理也。治國、敷德施仁政。使父父子子君君臣臣兄兄弟弟夫夫婦婦也。齊家、使兄弟和樂妻子好合奴僕臣妾安其心。而使親順也。修身五官盡其職。言忠信。行篤敬也。正心、除去人欲之邪蔽、而復本然鑑而衡爭之德也。誠意、感通之際不以動爲主。而常眞實无妄也。致知、歸至于性之靈覺良知上。而不移也。格物、從良知之所照。而正五事之非。而行正。是致知之實也。此節擧學問之本末。示本立而道生之所以、使知務本之義。齊家以上末也。修身以下本也。而誠意爲其要。致知格物爲工夫用力之實地也。畢竟三綱八條非隔時之工夫。皆是一時之工夫也。暫擧本末始終、而以示其全体也。

（附記）眞蹟、所有者前に同じ。

答質問

一、氣質悪敷故講習討論の時ハ觸發せられ、融會の效有之ながら、退てハ舊習に復せられ、道學篤信の心不興起、放心妄行耳なりと云々。志だに立ぬれば、氣質は害をなす事あたわざるものなり。氣質をとがむるハ誤なり。退て舊習に復し、講習討論の益なき事ハ、外に向て理を聽曉さるゝ故に、徒に一場の説話となりて益なし。若内に向て曉す時ハ、理義の其心を悅ばしむる事芻豢の口を悅ばしむるがごとくにして、聽得時卽德の培養となり、日に善に進不尊德性ことあたわず。

一、父母に事られ何事も背かれざれども、格式の勤ばかりにて溫和の色なくて、實孝を云がたしとおもわれながら、實体を得られがたしと。如何にも格式ばかりを勤るは實孝にハあらず。且何事にても父母に背ま

じと事の上に孝を求るもあやまりなり。父母の事にても道にそむける事ハ不ㇾ從ㇾ之して、諫ぬる事孝なり。事の上に求られぬる故に、父母の事に背かれ候事なくても、心父母を離るゝ故に、格式ばかりにて愉色あらわれざるなり。孝の實体は心父母を愛敬するなり。内に向て修ㇾ之、愛敬の心を不ㇾ失時ハ、左右に就養の業までも自然に理に適ひ、若父母過ありて諫むれども、愛敬の心爲ㇾ主故に、父母の心に逆事なく愉色婉容もおのづからあらわるゝなり。

一、學術捨おかれず、時々書を見られ、家父著述の書にて自反愼獨之理信じられぬること、如何にも自反愼獨の工夫さへ間斷なければ、一念の惡もかならず知てこれを克去、一念の善もかならずこれを行志立、志立ぬれば日新の効有ぬべし。

一、獨坐の時雜慮起、寂然不動の体に歸着難ㇾ成こと雜慮蜂起する事ハ吾人の通病、寂然不動の本体に歸着する事ハ自反愼獨の工夫成熟の極効なり。假初に心力を用て至がたし。雜慮の起る、强てこれを制すれバ猶止がたし。自反則善念興起す。善をおもふは心の官なり。終日おもふとも道を盡すなり。善をおもふ時ハ事おわりて自然無念にして靜なり。自反愼獨の功專なれば動靜云爲寂然不動の本体自若にして皆性の感通なり。

仲夏晦　　　　省

酧ニ万木子一

（附記）眞蹟ハ滋賀縣高島郡水尾村大字横山万木良知氏所藏。

答ニ分部氏一書

爲ニ年甫之御慶一早々被ㇾ通ニ貴翰一辱致ニ拜見一候。先以貴家御平安貴樣愈御康安御超歲被ㇾ成候由目出度珍重奉ㇾ存候。藏田惣八方並親戚共何も無事致ニ加年一候由被ニ仰聞一忝存候。貴樣ニも當年ニ御當地へ御越可ㇾ被ㇾ成候由

御大義奉レ存候。野夫義も無二恙一致二加年一候。來月初旬ニ罷登可レ申候條、多分參達候而得二御意一間敷かと遺憾有レ之候。如レ命前田丈時々預二御訪訊一得二御意一併御務急迫候故毎も倉卒なる義ニ而御殘多存候。

一、去夏大凶ニ御逢被レ成候而柔墮に御成り候而、心氣惱亂御苦痛被レ思召一候。此節御修用可レ有レ之事と思召候由、御尤なる御心付にて候。大凶ニ御逢被レ成候而哀戚甚故ニ御取失被レ成候樣ならバ、當下ハ尤なる御事ニ候。然ども惱亂之体ニ御成候而氣柔墮に御成候ハ、情ニ陷り性を滅すあやまりにて不孝にて候。本來心之實体は患難憂戚に觸ても、其感通流行のみにて氣弱く心惱亂することハ無レ之ものヽ。然ども平生志なく心收歛せざれハ、情にひかれ心を惱し苦しめ、感通の正路をも取失ぬるものヽ。夫陰氣に乘ずれバ安樂を好み陽氣に乘ずれバ功名を好みぬ。安樂を好より柔墮に入、功名を好より驕暴に入る。本心にハ安樂功名の良能備りぬれバ外に安樂功名をもとめ好む意なく、克柔克剛にして其時に感じて其道行はるものヽ。然る故ニ本心に復る志切なれバ、道義主となりて安樂功名の欲去。坦蕩々として無爲平安ヽ。然る時ハ安樂をもとめずして樂常に存し、感通とく理に當る。故に功名を求ずして功名其中にありぬ。外に求て得る安樂ハいまだ不レ得ときハ得んことを憂ひ、既ニ得る時ハ失はんことを憂ひ、得るところの樂皆苦の媒となり禍もまたしりへに隨て來りぬ。外に求る功名ハいまだ不レ得ときハ僞の媒となり。既ニ得る時ハ功に伐り名に溺れて、心を失ひ功名もまた難レ遂、苟に心、本來正しくして將迎なく、意必なく、靈明常に昭々として、應接必其理に中りぬる物なる事を信得すれバ、外に向ふ心ひるがへり專内に向ひ心を存す工夫たしかになり、志次第に進み本体に復る事も其期有べし。存心の切近なる工夫ハ致良知の三字に歸し、致良知をしばらくわけて說バ自反愼獨也。心の本然を信得すれバ、他念なく一途にこれを得たく志し、外にわたる迷なくおのづから自反す。自反すれバ、獨知の靈竅開達しぬ。本よりこゝに至りたき志なれバ、精神いよいよ斯に歸着して、一毫も外に滲漏することなく成ぬる、是愼獨の義ヽ。自反愼獨の工夫親切にして間隔なければ良知に致りぬ。良知に致れば心裡の意必私欲きよく去。伏藏することあたはず。故に當下の五事悉正し。五事正ければ應接悉理に當りぬ。斯に至り得れバ剛然之氣充塞し無レ入而不二自得一焉。本体に復るとも

いふべきか。御質問に任せ鄙意のあらまし入高覽候。御体認の工夫切に候はゞ御志たち此底の見解其儘解可申候。見解の分にてハ實得の益ハ無之、畢竟御体認涵養專一に存候。猶期後信之節候。恐惶謹言。

二月十日　　中江彌三郎　季花押

分部又四郎様

尙々愚子藤助義被懸御心御噂忝存候無事罷在候由申越候。以上。（志村竹渓編、纂補藤樹先生書翰集。）

（附記）志村竹渓編、纂補藤樹先生書翰集の頭書に、「常省子は先生歿後、稚穉より岡田仲實方に寄育せられ、十一歳にて備前へゆき亡兄仲樹の跡を嗣仕官せらる故、家學は蕃山歟、中川謙叔歟に傳學ばれしなるべし。著す處の學庸狗尾は書院になし、僅書約一篇あるのみ。此簡大溝分部氏にあり。其家學の概略を見るべき爲に、餘帋あるを以てこゝに附載せる也。」といへり。

（答徳田彦六）

季春十一日之貴翰落手辱拜見、先以愈御壯健御務被成、殊貴家累葉之顯職御相續之公命を被蒙候由、幸甚珍重奉存候。御任載を御大切被思召候由御尤ニ存候。國郡大小異なれども道ニ差別は無之候へバ、御大任ニ而御座候。愈御愼可被成候。境遇に大小精粗難易有之ども處此は我心身の成事なれば、究竟の守り處は愼獨の一路に歸候。何之境にても自反愼獨の修用切實に立徳盡己より外之義は無之候間、愈御志を立られ當下切近の御修用無間斷事專要に御座候。不才にて無御心元思召候由、立徳の功夫切實に候得者徳の立にしたがいて才はおのづから生々いたし候。才は本來徳の妙用なれば、本立而道生ずる理りニて候。今時は徳と才と兩箇の事と存候故、氣に屬したる運用の活潑なるを才と心得、徳有ても才なければ經濟の道は難成と心得不才を憂ひ候。才を求る時は、日に氣に渉り徳を失ひ政事の紀綱弊れ多事煩擾にして無用の事ニ人民を勞し利害上より見ても眼前の小利を得れども却而後來の害を釀し候。然れども功利の凡心にては、眼前の小利に溺れ後來の害もいまだ知術の精しからぬ故と思ひ、愈才を求め終には機知小慧に陷り道を失ひ國家人民を戕賊しぬ。徳より生ずる才は天眞の靈感なる故に應事接物皆天理の流行なれば易簡無事にして能事理に當り政

事の紀綱立之に隨て小節内節に中りぬ。然時は人民其德に化し其政令の善に由て風移り俗易治平の効を得ることを歴然なり。故に大學には斷々兮無他技之心休々焉の良臣國の子孫を保ち黎民も亦利を蒙ることを稱す。孟子は樂正子魯國の政を任ずることを喜たまふに强や知惠や聞識を以てせずして好善一ケの良心を稱して優於天下而況魯國乎とのたまいぬ。又は生於其心害於其政發於其政害於之事ともの給ぬ。是にて經濟の道非才して在德のことを軆認したまふべし。氣に屬したる才と德の妙用本然の才との肢膚をしばらく小技藝の上にたとへんに、劒術者の手足眼目の働かしこく所作の利たるは氣に屬したる才なり。勝負の意念意必の私なく、盡己上より位を得、別而所作のあやらしくかしこき事はなく、臨機應變節に中りぬるは德の才なり。所作の秀でたる分にては何程すぐれても位を得たる劒術者に對しては所作の秀たるが却而害になり必負るものなり。是にて氣に屬したる才は道を害し己をそこなふものなり、德より生ずる才は理に當りて實用を成ことを辨らるべし。

一、貴境學問すたり御同志も無之由、何國も同然之事と聞へ申候。世上にひかれ御志荒み候はんと思召候。御公務繁候へバ書を御覽被成候事さへ成かね憂歎思召候由、何とぞ心樂を被得候得者益と思召候も同志の輔有之は幸甚、無之は不幸に候へども、爲仁由己而由人哉之聖謨を軆認し得ば、强而憂るも誤りなり。世上に學のすたれたるも歎敷義ながら一己の修行におひては强て歎べきにもあらず。書を看る暇なきも同意の事にて候。學問の道は無内外無大小精粗順逆の境に不涉只自己心身上ニ就て當下致良知の功夫切實に無間斷ときは順逆の万境悉學問の地となり、明善進德修業の事と可成候。若這箇の志立候はでは同志の集會も議論講明皆一場の說話となり、經傳を看熟するも書物ずき道理ずき見解の長ずるのみにて玩物の類ニひとしく自得の益には難成候。心樂の義も樂を求る志にては氣上の樂ニ陷り、高ときは虛高に馳て老佛に入、卑ときは情識に入、倶に天地萬物一軆至公の本軆にそむき自私し自利して樂を求め苦を避るの惱まぬがれずして眞樂にあらず。夫樂は心の本軆なれバ人々固有の事にして七情の樂みにある□□(不讀)とも、又七情に外ならず。故に致良知の功夫間斷なければ人欲の私克化し天理に復す。しかれば心常に存して郭(まゝ)然大公なり。然る故に物來て

能順應し、七情中和にして人事全し。若如此ならば凡欲の惱は不及言、一毫も意必適莫の累なく無入而不自得焉。是樂を求めずして樂おのづから存するの道なり。天壤の間何の樂かこれに比すべきことあらん。

一、色念の事、好色を見てよみするは性の欲なり。此をよみして妄なるは氣に動たる情欲なり。凡七情皆然り。此故に心存する時は七情皆中和にして無過不及すなはち道なり。若氣に動く時は情欲の感通にして人欲の私不義となる。しかればゝ色念の妄動を制する功夫は尊徳性畏天命の志を立不睹不聞の實躰に復るより外は無之、本心の實躰は本來無偏倚過不及時所位に順應して外物を防ぐこともなく、けがるゝこともなく、無聲臭無内外万理通徹具足する事を能躰認信得せばおのづから不睹不聞上の戒愼恐懼親切にして愼獨の功間斷有まじけれども、人々氣上に就て善惡を擇み、氣上に意力を加へて善をなし惡を去んことを求む。これ泥水を以て泥をあらふがごとし。其見解明なるに似たるも、終に本心の清明にいたりがたし。居常難制欲もたまへ本心に悚動することあればゝ忽克化す。されば尊徳性の志切ならば氣質にひかれ妄動の萠ありとも、良知の照す所適實ならん。此におひて其知を不離して徹底せば、おのづから格物の効ありて正路に歸るべきことうたがひなし。

一、祭祀無御懈怠御執行被成候由幸甚存候。元來如在之敬に有て儀節にはかゝわらぬ事と思召候へども、格式に入り誠敬を御取失し信のすくなき故かと思召候由、如高見追遠の實よりも礼格の理に適ひ可觀を喜び慕ふかた全き故本をわすれ末に牽れじと存候。別紙蒙命候件々鄙見之通別幅に書載入高覽候。東武に而被遣候書付も此度致還納候。野夫義痛綿々と差發尤氣分に惱みは無之候へども痛苦難凌筆硏等も愈堪不申候故呈謝簡之義も意外に緩怠罷成候。愈退居之願も相達心儘に致在洲候。病氣爲養生幸ニ存候。比日者先痛も間斷快方罷有候條被勞御遠念間敷候。寡妻並愚子義御尋忝存候。何も無異罷有候。藤助義は當年東武供被申付候得共又簡略之計出候て供大分減少故其内に而當年は罷越不申候來年留守番などに越可申哉と祭申候。猶期後信候。恐惶謹言。

五月廿三日　　中江彌三郎　花押

御回答

倘々野生義病氣故一入他と參會仕候事も無之故好學の人も有之候噂も承不申候。此邊も學問は不及申文學も心懸候人少成候由にて前々より話し候度少く御座候間時々來至語申事も御座候。間散の境に有之候へども病氣に悩み默々として一□一暮候までに御座候。以上

（附記）眞蹟、愛媛縣喜多郡新谷町河内字十郎氏藏有。

（附）

花園會約

一、古人の善をなす、日を不足とするものは何事ぞや。良知の人心にある、其職に居て其職に任せざるは皆不快所也。〔故(別)〕〔△(別)〕此に我輩弓馬の家に生れて武士の名を得人なれば、武士の德に昧く武士の業を不勤は自良知に耻る所なり。夫武士は民を育む守護なれば守護の德なくては不可叶。〔△△△△(別)〕其德の心に有〔在(別)〕を仁義と言、天下の事業にあらわるゝを文武と言。故に明にして慈愛あるは文德なり。明にして勇强なるは武德なり。良知明なれば此德素より我に備れり。是故に今諸子の會約致良知を以宗とす。まことに得難き〔寔に難得(別)〕此生を得、難聞聖敎を聞難遇同志數輩あつまれり。三難之時いかで〔爭(別)〕默止すべきや。三難の福を得にあたつていたづらに悠々として俺煖を安じ此生を空せば天威明也。其罪豈一生而已矣〔のみならんや(別)〕、可恐可戒の甚き者也。夫文武に德あり、藝あり。德は猶苗の生意のごとく、藝猶耕耘のごとし。文武を以て耕耘の事として、心の生理を生長養育し、敎學相長じ、偕に聖果を結ばむ事何之幸か如之哉。

一、毎日清旦に盥櫛し、衣服整て聖經賢傳を熟讀すべし。文才拙きものは、或は孝經四書の經文を讀、〔△(別)〕或は

先覺著述の假名書を讀み、觸發・栽培・印証の三益を求て心を冊子上に放在することなかれ。

一、食後には射を學ぶべし。時過て後鑓太刀等を習ふべし。馬鐵炮は人により時によりて難（別）習ものなれば勢にまかせて可也。武藝は治平の具、戈を止の儀なれば、相和し相輔て敢て爭心殺氣を挾ことなかれ。

一、書數は文武之藝術に於ゐて其便少からず。時を以て是を習ふべし。（以可習之（別））

一、禮樂は六藝の尤重き物なり。禮は心の敬を顯し樂は心の和をのべたり。禮樂を學ん（なば（別））と欲する人は、先此心を存養すべし。たとひ禮樂を學ぶ事不能人も若敬和の德あらば、事毎に無躰の禮を行ひ、日々に無聲の樂を皷せむ。故に君子は其身をはなれず。（禮樂不離其身（別））

一、禮用軍用缺くべからず。困窮を恤み下民を救事分限に應じて可在（有（別））之。家居飲食衣服器物妻子（別）の私用に於ては、儉約を專とすべし。若爰におゐて儉約ならずんば或は禮用を欠く（缺（別））（別）廢人か或は軍用を廢する（別）人か或は慈悲の利濟のこゝろなき人なるべし。世俗其耻にあらざるを耻て、耻心亡。能顧て惑ひを辨ふべし。

一、朋友の交人我敬讓有て相和睦し溫恭自虛にして益を得を本とす。威儀恣にして言語卑しく爭心浮氣を以て交は下流の凡俗なり。他人之是非世間のあだ事は敢て口に置事なく恭敬の誠を盡すべし。色欲の雜談かたく禁之。況哉婬行をや。風は必す心に由て見れ、言は心の聲なれば其耻を知べし。

一、朋友の交一躰の心を存し其困窮を相救ひ其業を相助て物我の私意に蔽はれ便利にひかるゝ事なかれ。若物我の意念發る時は一躰の良知を昧し同胞の親愛を亡す魔障也と深く提撕警覺すべし。

一、朋友の交過を規し善を勸を以眞實の親みとす。あやまちを見て規す事なく、善を知て勸ざるは、同志相切磋するの本旨に非らず。徒に其非をとがめ其是を爭ふも又同志切磋する始願に非らず。是を規に和を以し是を勸むるに時を以て、みだりに論辨をなさざれ。議論稍不叶事あらば心を虛にしてみづから反せよ。

夫良知の愛敬は万物を以一躰とす。我手足傷時は是を治る心平愈に至らざれば不息。人の心病を療するも

忠告て善導くの意案をめぐらすべし。過を聞人も良藥口に苦を不厭して病に利ある事を樂むべし。過を規シ人に向ふて蓄藏して外を愼むはたとへば病者の醫師にあふて其病症をかくすが如し。心事光明にして内外なく自心に耻て念上に格去すべし。

右會約今時花園之諸學士對症之藥方當服食之時（不讀）□□故揭出其略以標示于諸生若等閑讀去而實不施其病症鞭勉其退托之氣則終無益而廢了於志吾黨欽哉。

（本冊末尾補遺並補正、前田久彌宛書狀參照。（藤陰））

常省先生文集續編　終

門弟子詩文集　解題並凡例

一、編者嘗て隣邑滋賀縣高島郡安曇村大字西万木來迎寺住職某の所有に係る傳藤樹先生眞蹟と稱するもの一幅を見たり。先生の筆蹟に酷似すれども首肯し難き點少からず。且つ谷川寅・中川熊等門下の名を列記せるものなり。此の幅後に同郡青柳村大字上小川玉林寺住職河合戒觀師の珍藏するところとなりしが、不幸大正十五年四月同寺炎上の節烏有に歸したり。大正四年一月編者また隣邑水尾村大字宮野深見市藏氏の所有に係る藤樹先生眞蹟と題する軸物を見たり。此の軸後にわが郷中江八十八氏の愛藏するところとなれり。次いで惺軒高瀨博士より京都市寺西亮吉氏の藏幅を筆寫して寄せらるゝあり。また近邑新儀村大字藁園古物商上原某を訪ひ屛風に貼布せる一帋を見たり。此の屛風は後に同郷𦾔庭巳藏氏の有となれり。以上四種の斷片によりて從來門弟子詩文集なるものゝ存在せしことを推定することを得たり。惜しい哉。今や散逸して傳はらず。唯僅かに藤樹先生眞蹟と題する名の下に重襲せられて、片影を止むるに過ぎず。

一、本書は前掲門弟子詩文集の斷片と推定すべき資料に加ふるに、諸家に藏するところの軸物並に古寫本等に散見せるものを收錄し、以て間接に斯學研究の資に供せんとす。唯集義和書並集義外書等其の他多く世に知られたるもの、又は岡山先生示教錄並岡山先生書翰等成書に屬するものは之を採らず。

一、本書收むるところは斷片的にして資料極めて少けれども、寛永十六年より正保元年に至る門下詠

學の詩を含み、熊澤二二（蕃山）、中川熊（謙叔）、岡田猪（仲實）、小川仙・谷川寅・加世氏等門下有數の士あり。能く讀む者之を玩索すれば、得るところ鮮少ならざるべし。今題して門弟子詩文集となしたれども既に世間に流布せるものは之を採らず。

一、本書は古字略字等頗る多く、讀下また容易ならず。今傍記を施して、原本の体裁を存す。また以て當時門下の修學振を窺ふの一助ともなるべきものあらん。

一、本書は各項の末尾に資料の出處並に所有者の住所氏名を明示せり。

一、原本標目なきものは必要に應じて新に之を加へたり。而して編者の加へたるものは、（　）を附してもとありしものとの區別を明かにしたり。

昭和三年十二月一日　　小川喜代藏謹識

〔湖東谷田家に傳來したる中川謙叔作己丑元旦敬慕詩並序、及び愛媛縣立大洲高等女學校教諭近藤信氏所報に係る「藤樹先生書簡」に載せたる門人の詩並に小川仙及び覺の國字牘數篇を本冊末尾再刊追錄中に登載す。（藤陰）〕

門弟子詩文集

詩

（小川仙再拜謹答）　斷片

前文闕炙之者乎。觀感之功。亦不可勝計。吾子庶幾勿玩心於章句之末。惟昔季秋。金氣慓冽。草木黃落。實天道之至誠。以足觀至德要道之本原。予亦本吾子於火旺之時。觀天經地義之本然。推而知之。有補仁之益。不勝喜悦之情。小川仙再拜謹答。

題清水物語　己卯建卯月　　中江三

其理盡清水物語。世人笑鼻缺猿哉。假饒有誤施黒子。孰若俗儒取鬚埃。

和山内子持敬躰認之和歌。　　赤羽長

尊性畏天威。神明無顯微。敬之雖不睹。聖道蹈仁歸。

和韻　　中江三

天命太嚴威。可祇發動微。一毫千里誤。何日厥初歸。

（庚辰鷄旦詩　並序）

幸受上帝之眷命而得侍於願軒先生首經講筵之末。愚雖不敏、似略有所心會矣。明講終而逢庚辰之鷄旦。試毫之次、綴鄙詩一絕、以爲體認之一助云爾。

孝哉百木發生辰。柳綠花紅自得春。万物盡寧不如物。惕然懃懼欲明倫。

赤羽長

（失題詩）

格致誠脩德日親。赫然心鏡照天眞。一團和氣程明道。觀感儒門有脚春。

谷川左

（以上滋賀縣高島郡青柳村大字上小川中江八十八氏藏幅）

（附記）本全集卷之二詩第二頁丙子歲旦之詩參照。

（辛巳之春鷄旦詩　並序）

我輩幸得侍藤樹先生四書講筵之末。而只愧天資拙而无日新之益焉。大學之明講已終篇。而論講學而之篇未半。而逢辛巳之春鷄旦。試毫之次、綴野詩、以庶幾躰認之万一云爾。

東皇天下物皆新。寒苦氷魂已得仁。梅蘂有靈應笑我。德香未發徒逢春。

谷川寅

和均　照鑑惟幸

長?
。□尾張

心友相逢切琢新。八荒在闔本然仁。公能出類何使似。梅自百花頭上春。

（和　均　並序）

惟時寛永十有八年歳次辛巳三元之晨。嘿軒門下之彩子作詩以供試觚之事也。尊師之門非學作詩、只假詩法而言志。以爲致知躰認之一事矣。所謂行有餘力。則以學文之意也。谷川惟直甫方志深。其行篤誠同門之益友也。故予叨賡其佳作之均礎。以庶幾希賓勵志之一助云。

和均　伏乞莞爾。（卷末、再刊追錄己丑元旦敬慕詩並序參照）　中　川　熊

君克則師學日新。威仪棣棣輔吾仁。朝來相証鶉鷁語。桃李不言惣是春。

（壬午之春元旦詩　並序歌）

守師廖廓之仁。雖以小子不敏。犹尋容而迂方門焉。而逢壬午之春元旦。試毫之次。綴絶句野歌。

冐供同志之坐笑云爾。　（同　人？）

培根藤樹迖枝春。吾儕因□□本眞。青旦微風惻侃象。便惟滿地滿天仁。

毛路古之茂、於奈之心農春加世耳、那遠飛土志保能藤樹濃以路加奈。

（編者譯して曰、もろこしもおなじ心の春かぜになほひさしほの藤樹のいろかな。（紫水））

（壬午之春詩序）　斷片　（作　者　未　詳）

吾從顧軒先生有年于此焉。學化雖日新。不能反三隅。故其文章猶未能深得。況於性與天道乎。適逢壬午之春。因有感。綴鄙詩一絕。以庶幾（矣？）等師。（以下闕）

（以上滋賀縣高島郡青柳村大字上小川玉林寺住職河合戒觀師舊藏）

（失題詩）　清水士

冬往春來如夢幻。人生七十又幾年。自憐心有萬乘樂。終歲營々入倒懸。

（失題詩）　加世五

古來靈驗如明鏡。福善禍淫天道常。慚愧吾人不興起。寒梅雪裡發清香。

（丁父憂乙酉元旦詩　並序）

甲申之夏丁父憂。前此嘗聞聖人之學。是以雖有志于三年之喪。而因國俗不可違。而不克除服。不得已而欲盡心喪之誠。而又哀戚之情甚鮮。且愧且懼。不能自安。因循而逢乙酉之元旦。一旦參神而不見其顏色哀戚甚深而悔非轉切。於是綴吝嗟詠嘆於絕句。聊述鄙懷云爾。

岡田猪

聞說良知玄又玄。只憂五備不能全。點茶斟酒父何在。出對梅花憶舊年。

（以上京都市上京區小川通一條上ル寺西亮吉氏藏幅文學博士高瀨武次郎氏報）

㊀克の下恐らくは不の字を脫せん。（紫水）

（失題詩　並序）斷片

前文闕。生之斧正同志擊節稱嘆而思齊焉。是以予忘愚騃而塵高韻。以庶幾成美之万一云爾。

俯仝軒集。

赤羽長　再拜

公今事毋益知眞。受用首經更絕倫。宜矣須臾不忘孝。敬心純左右逢神。

中江三

（失題詩）

禍淫福善命無爽。正變難知眼疾忡。必以吉凶勿論德。大賢顏子一簞窮。

和韻　中川熊

稟受吉凶雖有變。益遷善忘一朝忡。聊將舊聞爲君說。賢哲恬然亦固窮。

（詩序）斷片　（同人？）

先生遠見惠書於潮信。於其楮尾筆諸子和先生試翰高韻之詩。因吟詠之語麗理確。愈讀愈喜。存。（以下闕）

（以上滋賀縣高島郡新儀村大字藁園饗庭巳臧氏藏）

（癸未之春鷄旦詩　並序）

情相契合無離意。

不佞竊有志于心學。壬午之春末拜謁於先生而受業。時遇癸未之春鷄旦。試觚之次。同志皆賦詩。以各言其志。予亦不得已賦野詩一絶。言希賢之志。以請尊師之慈斤者也。伏乞慈斤。

相期平日聖人堂。一點靈明學脈常。羨且堪慚梅蘂色。百花頭上發淸香。

齋藤玄　拙草

（滋賀縣高島郡青柳村大字上小川淵田岩次郎氏藏幅）

敬依尊韻。

熊澤二　再拜

侍講離鄕逢此春。卓然先覺稱天民。誰知格致詩三百。象得天山出世人。

（岡田季誠末裔京都市衣笠殿町岡田元誠氏藏幅）

（附記）本全集卷之二第十五頁甲申歲旦の詩參照。

（失題）

加世氏

志學年來幾會春。生生至道不安臻。梅花卻從東風發。仁意孤因舊習巡。

（滋賀縣高島郡大溝町大字勝野原田知近氏藏、藤樹先生遺稿抄）

語錄

（失題）

熊澤了介

吾齋之中不尚虛禮不迎客來不送客去。賓主無間。坐列無序。眞率爲約。簡素爲具。有酒且酌。無酒且止。清琴一曲。好香一炷。閒談古今。靜玩山水。不言是非。不論官事。行立坐臥。忘形適意。冷談家風。林泉高致。道義之交。如斯而已。羅列腥膻。周旋布置。俯仰奔趨。揖讓拜跪。內非眞誠。外徒矯僞。一闕利害。反目相視。此世俗交。吾斯屏棄。

了介 花押

（松下氏傳來滋賀縣高島郡本庄村大字藤江早藤友三氏藏額面）

（附記） 底稿としたる眞蹟には誠矯の間外徒の二字なし。唯末尾に「誠矯之間失外徒二字」の九字あり。今取つて補ふ。（紫水）

中村子三幅一對之文。

蹐聖躋賢。 自反愼獨。 倣仙成佛。

（滋賀縣高島郡大溝町大字勝野原田知近氏藏「大學考雜記」）

（附記） 蓋し元來四字を以て一幅とせるもの三幅ありしならん。（紫水）

〔再刊補遺〕

卷末再刊追錄中に門人十二人計十九首の詩を載す。（藤陰）

著作

全人論　　謙叔 中川權左衛門

（附記） 正文は服部博士古稀祝賀記念論文集中拙稿「全人論に就いて」參照。（藤陰）

門弟子詩文集 終

景慕詩文集　解題並凡例

〔解題〕　一、本卷は藤樹先生に關する諸家の詩文を輯錄して、以て追慕の跡を明かにし、先生の傳記と相俟つて、世道人心に及ぼせる影響の一端を窺ふの資に供せんとす。

一、本卷は全篇を序・跋・書・題・記・碑文・祝文・祝詞・書翰・語錄・詩・賛・頌詞・和歌・今様歌・俳句・琵琶歌・雜等に分ち、略〻年代的に之を配列したり。遺著の編纂又は刊行に關する序文は、特に藤樹學の發展を見るに便なるもの多きを以て繁を厭はず之を掲げたり。

一、本卷は三輪執齋・大鹽中齋・佐藤一齋・春日潛菴等、各時代に於ける日本陽明學を代表すべき大家は言ふに及ばず、尾藤二洲・古賀精里・龜田鵬齋・廣瀨淡窓・賴杏坪等、錚々たる異流學者の手に成りしものをも含みたり。

一、異流學者の文章中に在りては、往々先生の思想識見について批難するものなきにあらず。是れ學閥思想より起り來れるものにして、實に已むを得ざるなり。然れども翻つて思ふにかゝる思想を以て正鵠となし敢て怪しまざりし時代に於て、その中心人物たる學者が、たとひその思想に於て讓らざるところありたりとするも、いづれもその德行に敬服せるものあるに至りては愈々先生の大を物語りて餘りありといふべきなり。

〔凡例〕　一、原本標目なきものは必要に應じて新に之を加へたり。而して編者の加へたるものは（　）を附してもとありしものとの區別を明かにしたり。

一、標目あるものは多くは原本に從ひたれども末尾に附せるものにして之を最初に移したるものなき

にあらず。是れ體裁統一上已むことを得ざるに出でたり。

一、原本句讀・訓點あるものは之に從ひ、また足らざるを補ふ。無きものは新に之を附す。

一、本卷は各條の終りに（　）を附して原本を明示し眞蹟または珍本に至りては、その所在を明かにしたり。

一、必要ありと認めたるものは、各條の終に編者の私見を加へて、讀者の參考に供したり。

一、本卷載するところの和歌題詠藤三十首は明治四十一年九月滋賀縣高島郡清風會々員上原信順、早藤貞一外五氏等相議りて獻詠せる和歌集より採りたり。此の歌集二百七十九首を含めども今その全部を輯錄することは到底なし能はざることなるを以て、編者の私意によりて之を採擇したり。擅越の罪免る能はざれども亦實に已むことを得ざるに出づ。伏して寬恕を乞ふ。

一、本卷引用せる陽明學に關する雜誌に二種あり。一は本會顧問正堂東敬治翁の經營せられたるものにして陽明學と題し、一は東國石崎酉之允氏の主筆にして陽明と題せり。

一、同じく引用原本中編者稿「藤樹先生景慕錄」中より抄出せる詩文は、主として近鄕大溝町大字勝野故横田耕次郎氏所藏の古記錄に依りたるものなり。

一、本卷載する外先生に關する詩文尙多しといへども、今はその適當と認むるもののみを掲げたり。然れども編者の寡聞なる尙有力なる資料の逸せられたるもののあらんことを恐る。伏して識者の是正を請ふ。

昭和四年一月一日　　小川喜代藏謹識

〔卷尾再刊追錄中に春日精之助、布川角左衛門兩氏の所藏に係る佐藤一齋外數氏の題跋並に大田錦城外二氏の識語及び若山狩野博士外二博士並近藤大倩正の詩を初版集錄の次に從って收載す。（藤陰）〕

藤樹先生全集 卷之四十八

景慕詩文集

序

藤樹先生文集序

夫人之有此形也。无不受得明德之灵照。然因氣習之昏蔽。而不能昭明。或入異端。或泥格法。朱子専以格法爲道。衆生悉用之。然因格法。則其道切迫。不能至廣大之學。唯吾藤樹先生者。尊信王子良知之學脉。以示廣大之學。予生先生沒世之後。雖淺學膚才。略聞藤樹之學脉。喜而不寐。取著朮之書平日讀之。夫子生年之間。有作記文解經語答問之草稿。然落散四方。而鮮知者。予憂之。以著朮之尤直而易入得者。裒集之以分五卷。最有編次年次之差多而已。然書集以與同志讀之。思有切磋之益也。庶幾後學同志校正之。貞享乙丑春正月江西岡田敬序。

（岡田季誠編「藤樹先生全書」）

心學文集序 儒生雜記序同

梓人某持草稿一編。來而請予曰。願吾子名之序之。則見之近世之名儒中熊二氏之常談。且詩歌尺牘也。或以漢字。或以倭言。蓋字字言言皆教戒之一端而已矣。予題號心學文集。儒生艸（儒生雜記序）昔自代結繩成文。聖經長存。賢傳遠教。若無字者。何以存焉。若無言者。何以教焉。雖然弄字巧言。則害理喪道。亦不

可不察也。此故有篤實者。不好博覽。求聲名者。只羨廣學。唯叨走空文者。暗千萬卷。有何益乎。全修性學者。雖一小冊。豈到爲不足哉。昔元祿二年春正月十日兵氏無射滌毫於江都養愚亭。

(元祿二年版心學文集)

學庸解叙

夫學庸二書者。孔門授受之心法。而學者體道入德之鈐鍵也。程朱二夫子表章考定論說詳盡矣。我藤樹先生有所未慊於心也。作倭字解。授與門人。蓋欲易通讀也。舊書肆所梓行之本。羨文誤字。錯亂僭膠。頃歲與二三之同志。讎較而改正。且冠於其首以大學考。再附剞劂氏。廣其傳也。大學主古本。而不從宋本。則先生於考既詳辨之。讀者審焉。而此解大學止於正修之傳。中庸畢於第一章。亦焉知先生之微意不在於茲哉。嗚呼。儻知先生之學術者。或有取焉。享保戊申三月韜齋書。

(享保重改刻學庸解並考)

鄕黨翼傳序

鄕黨翼傳者。藤樹先生之註解也。藤樹先生者。江西小川之產。氏中江。名原。字稱與右衛門。幼稚而從於祖父。適豫劦矣。其爲人也。敏而好學焉。獨坐有鄕思。屈指羈旅十有八年于此矣。偶然憶得皐魚之事。而讀其傳。至樹欲靜而風不止。子欲養而親不待。而三復之。而悔悟昨非焉。去豫劦歸于江西。從時安身定省於母堂。窮居于鄕黨小川之草廬焉。孝經曰孝通於神明光於四海無所不通。孝子之名達於天下。故四方之學士來往於小川之僻壤而親炙聞心學於藤樹下之草廬。或越月或越歲。濡滯將不足日矣。蓋江西之師範立本於隱微。生道於講論。或與其進也。不與其退也。與其潔也。不保其往也。而不爲已甚。或語上或不語上。或舉一隅以待其反。或憤悱而后啓發之。或進之或退之。或如時雨化之。或成德或達財或答問焉。敷之如灌漑萠芽拱把合抱各隨其分答之如鐘聲

音之大小必隨其扣育之。如水潤物遲速由物而不至於浹洽不已約之在本于無言之宗。而不失人亦不失言。格物致知敎學相長以與致中和天地位焉萬物育焉而已矣。諸生請講易經先生諾焉於此建書院矣。先生疾病而不講易經而卒年四十一。時慶安元年八月二十五日。葬小川邑之北地庭前有藤樹故諸生稱藤樹先生焉書院不破壞而存於今焉。信先生學術輩稱江西小川之講堂焉。先生嘗曰經有心有迹有訓詁而講明其迹者初學未知文字者之所務也。已曉文義則於正經上體認玩索須求心心融會之妙矣。竊按此謂心學憤君子之學術也。或於正經上曉文義而已無體認玩索不爲求心心融會之妙而泥格法典要或泥仁義禮智之名徒生解不能脫凡塵是謂襲迹之俗學焉。君子之所不貴也。蓋所謂鄉黨一篇者記者寫照之妙手描畫聖人之容貌辭色以寓聖心於其中孔門諸子親切玄妙正宇宙第一之大典也雖然古今患無明解故學者不通于聖人之行狀無言之敎育焉。夫子嘗曰吾無行而不與二三子者是丘也。此聖語鄉黨一篇之欛柄也。雖以子貢之賢不通于無言之敎況其餘乎。子曰予欲無言子貢曰子如不言小子何述焉子曰天何言哉四時行焉。百物生焉。天何言哉。夫子抑子貢之文學指示無言之心學焉。無言之心學與襲迹之俗學霄壤懸隔。程子曰鄉黨一篇分明畫出一箇聖人圖解曰鄉黨一篇天然一幅聖象藤樹曰皆渾淪說無心迹之辨予欲啓童稚之蒙故分別心迹說分別心迹說之五字窮經之法而所以吾先生之爲學術矣大概聖經者人性之註解萬世之師範矣分別心迹而不說則尊信雖篤受用雖勉而不能免膠柱之弊也又曰夫孝始於事親中於事君終於立身此篇先學鄉黨次學宗廟朝廷次及威儀衣服飲食是乃境遇之序倣孝經者也此言先儒之所未發明也奇哉妙哉依此解而夫子之至德要道孝悌忠信躍如於章句之外嗚呼儻不好俗學而志于心學有欲行至德要道孝悌忠信之道之學者捨此翼傳無別事之可做無別路之可走實止於至善之準的時中之舟楫也宜熟讀體認焉此書今分別而本註爲上卷考註證爲下卷。欲易通讀也予常恐翼傳之湮滅故不顧固陋而附剞劂氏廣此傳云寛保二年壬戌秋九月洛下石川惟元謹叙

（京都帝國大學圖書館藏有寛保二年版論語鄉黨翼傳）

藤樹先生年譜序

詩曰。彼茁者葭壹發五豝于嗟乎騶虞。言及恩禽獸者聖人之德也。旣甯國諸侯承文王化。脩身齊家治國而其仁民之餘恩。又有以及庶類者也。抑藤樹先生者江州小川之產也。生穎悟謹篤。文質彬彬。餘德溢四海。通神明矣。不顯哉。夫子之德。佑啓後人。咸以正無缺者歟。於是遠近諸生。慕風化來而受業於先生者不鮮矣。所謂仁民之餘恩及庶類者歟。就中岡山先生繼其統。出京師。周施其教餘慶流會地者。夫子之德也。夫以會津左中將正之源君。貴介顯族。而武林模楷也。自幼讀書知道。專攻濂洛關閩之書。用力於敬。功夫日新也。其言曰。主一無適則存得未發之氣象。動亦定靜亦定。聖人無情而性者其庶幾乎。又曰。智藏而無迹。識此而後可以語道體。可以論鬼神。又曰。仁知交際。萬化幾軸。此合天人之道。嗚呼可謂說約矣。知此要約者。朱門蔡季通仲默眞希元之後。未有斯人也。於　日本神道。究卜部家者流秘蘊。迴五十鈴川之流。弓兵政所崇道盡敬天皇以後一人耳也。令嗣左中將正容源君。潤顯考之美。爲人廉直溫恭。改過不吝。有功無矜。尊崇儒道。特善神道。深窮其理。常踐其實。故會津再歸神代古風。異城魯邦豈遠乎。易曰。同聲相應。同氣相求者歟。當是時。會北五十嵐養安遠藤謙安東條方秀。赴京師。遊岡山先生之門。歸會津。其訓迪誘掖之心。無不至焉。於是。邦內潤三子之餘澤。近百年者也。不佞自會城郛郭來北鄉。居草廬。二十有餘年。學神儒道。欲寡其過者矣。甲午冬訪坂親懿。井上國直東條次愼會矣。皆藤門豪傑之先覺者也。講習討論之序。閱藤樹先生年譜。其書哉眞實丁寧。雖然。其文鄙俚而煩。見迂闊也。於是。謂三子曰。是萬世之龜鑑也。嗚呼惜哉草稿而不潤色乎。雖不佞不類。可潤色其文哉否乎。三子曰。何痛乎。於是點筆草稿。納匣底。日久矣。一日同門先覺五十嵐常成來矣。出匣底談之焉。常成曰。惜哉韞之於匵而藏。猶璞石含玉。古鏡藏光。子若淨書而備同志觀覽。宛乎如生玉鏡光。豈不天下大幸乎。所予素望。不得措筆。頓日淨書畢焉。庶幾同志于我者。善繼改之則周諸子幸甚爾云。

安永四乙未夏六月朔日　　東奥陸州會津山郡隱士　平義都自序

（「雜誌」陽明學」第拾號）

刻藤樹遺稿序

書云。言之非難。行之惟艱。蓋夫學者。躬不自行。而口徒言之。誰其難之矣。惟口不輕言。而躬篤行之。則古今之其人矣。藤樹先生。湖西人也。性聰好學。少而仕于大洲。偶有思親。輒解印綬。而歸鄉焉。自是潛心於孝經一經。專脩愛敬二道。至溫清定省甘旨色養。莫不盡其心矣。於是乎。鄉黨感其行。四方化其德。有醜行者。竊變操強盜者。嘗改行云。夫巧詐不如拙誠。詐難以服人。則若先生。誠可謂口不輕言。而躬篤行之。俗自改。人自化者也。余友某等。應人需。校其遺稿。而語余曰。此書疑數傳寫。今有其誤。難改盡者。且恐不合時好焉。余曰。何傷也。校書。如塵埃風葉。固難以盡矣。然疑以疑傳。信以信傳。是之謂實錄也。且諸君以當世風。皆爲華文浮靡之流耶。安知其間無有朴實淳厚左文右行之君子。喜爲帳秘者哉。何爲其不傳於是乎。遂授之梓。因書此爲之序云。寛政辛亥之孟夏。

近江　西希顏謹撰

（「藤樹先生遺稿」寛政七年版）

藤樹先生年譜序

藤樹年譜一卷。蓋門人所錄。而闕其名。覃獲諸友人山田君忠所。按懶齋藤井氏孝子傳曰。中江氏。姓藤。諱原。字惟命。江州高島郡小川人也。自少讀書。頗有所發明。其學宗王伯安。凡(一)　本朝諸州之王學。惟命倡之。有母事之而孝。嘗仕加藤某侯于豫州大洲城。欲迎母以就養。(二)母曰。吾聞婦人不越疆矣。願守之也。惟命不逆。即請還職以歸田里。主客其才。不敢許可。惟命勃然曰。(三)我雖不孝。豈一日能忍爲祿所縻以曠定省哉。乃爲一書。具述其不容與母索居之意。留之潛遁。遂歸隱于小川以獲

母悅。時年二十又八。寬永某年月也。事詳譜中、而以爲二十七歲時事。當以譜爲正。藤樹寓居于京師一條葭屋町。其址尙存。嘗自江州乘轎至京。道語轎夫以性善良知良能事。轎夫感悟至垂淚。其實德感物如此。世人目曰近江聖人。譜逸其事。故附于此。江戶大田覃識。

（京都帝國大學圖書館藏在「藤樹先生年譜」木版本）

(一) 北川親懿翁雜記抄並藤夫子行狀聞傳序參照。
(二) 大に眞相を誤る。
(三) 藤樹先生補傳參照。（紫水）

藤樹先生手簡序

藤樹先生手簡若干。輯錄爲一冊者。余門人岡本經年藏于家久。戊戌之秋余取而讀之。卽廢而嘆曰。先生之德。誰不知之。而是冊也湮沒沉晦。數十百年。而不顯世也。海內賢豪。騷雅才子之詩賦若文。與夫傳記稗說雜書之類。往々鋟梓而流傳。如何先生之德。而是冊之久不顯世也。雖然。彼詩賦若文者。爛然當時。而數十百年之久。其不湮沒沉晦者果幾何也。則如先生之德。雖斷編片簡隻字之餘。有不湮沒者在矣。然後知顯于世者。非文章也。而以文傳者。猶不傳也。余也近年奉姚江之教。竊不自量。有志斯道。今讀此冊。益以沛然有不可遏止之思矣。蓋夫致良知者。姚江之旨。而近世談良知者。率知良知。而不知致之。則以私知爲良知。失姚江之旨者。亦不鮮矣。先生是冊。論良知者。篇々皆是。而其言致之者。何其少也。然則先生之文章雖顯世。夫姚江之旨。不幸晦於天下。余於是乎。乃欲起先生于九原。而質余說也。噫。讀此冊者。弗徒談良知。而深思實踐。使不若視夫傳記稗說雜書。庶其可矣。因爲之序。

（「濟菴遺稿」卷一）

餘姚學苑序

夫良知造化之妙機。而天理之本體也。良知之在人心。粹然至善。靈昭不昧。在聖而不增。在凡而不減。能施格致之功。則可以爲聖。可以爲賢。若外之而爲學。則猶蒸沙爲飯。豈可得乎。明王文成公始揭致良知之三字。以闢百聖相傳之秘。其示爲學之要。簡易直截。一言而無餘蘊矣。所謂繼往聖。而開來學者。王子其人也。我皇國有王子之學。以中江藤樹先生爲嚆矢。先生以純粹賢明之資。專宗王子之學。首唱良知之說。反躬實踐。德盛仁熟。至乎人稱以近江聖人。於今海內服其德。無敢間然。此足以觀良知眞修之效也。先生唱良知以昭孔孟之正脈者。豈不百世之偉績哉。了芥熊澤先生受業其門。廓而大之。藤樹之道。更振於世。先生以英才卓器。親用大藩。盛著治績。儒者之學。施諸實用。而著其效驗者。未有若先生者也。故後儒之言人才者。莫不以先生爲稱首者。而先生之於事業。皆出良知之功用。則又足觀良知眞修之效也。嗚呼。若二先生。則可謂命世之賢哲豪傑矣。而二先生之後。修王子之學者。爲執齋三輪先生。先生德行純篤。亞於藤樹先生。是亦世所遍知也。其外講王子之學。而名於世者。前後輩出。其德業亦多可觀者。祐之雅敬信王子之學者。有年於茲矣。每觀藤樹以下諸先生言行遺事之載於群籍者。莫不愛慕焉。故其於言行遺事。無大小。無輕重。抄寫以爲一卷。名曰餘姚學苑。置之座右。時々展觀之。而鑑省自己之蒙昧。則眞如受嚴師友之教誡。其得益不少焉。於是反躬責志。自加鞭策。欲致本然之良知矣。

天保十五年歲次甲辰　伊東祐之謹識

（巽軒井上博士藏有「餘姚學苑」）

餘姚學苑叙

吾友潜龍子齋來一書示余。且乞叙其首。閱之肇纂輯王陽明及其弟子數人學術事功。引而集

錄

吾邦藤樹蕃山其它諸君子傳記。詳悉無遺矣。吁勉矣。其厚於學也。而其書已有自叙及伊予靜荒士良之序。撰著之意盡矣。吾又何言。雖然此擧也。余深有所感焉。是不可不言也。蓋夫學術離事功。儒家之通病也。苟學儒而不達事功。或耽詞章。或錮窮理。訐白摘黑。無所裨益於世。雖多亦奚以爲。若夫陽明氏出則爲名將。攘却寇賊。入則爲學宗。敎育子弟。其所施設。大匪諸儒所逮。而其高第弟子。各修師說。成就其業。或治効。或篤行。所在必見思於人。儒而如斯。又何加焉。而

吾邦藤樹中江氏初志實行之學。衷心有未慊焉。中得陽明全集研究之。遂致近江聖人之名。爾後蕃山之經術執齋之篤行。其它諸君子各出於其門。成其業。悉爲世之模範。見尊信于後世。皆是學術之不離事功者。不亦偉乎。潛龍子有所慷慨乎此。欲大耀其徒之學術事業。以修實行之敎。矯世之浮華矜飾之弊。是以有此撰。而

吾邦闡陽明學。藤樹爲其嚆矢。尋而蕃山振其翼。執齋履其尾。而後藤樹之名益顯焉。故此書三先生之行事片言隻字。悉收而無遺。蓋潛龍子之志也。余雖未能伺王氏之學盡其蘊奥也。於其志。則能知之。已知其志。則此事不可不言也。叙之亦何辭焉。亦何辭焉。

安政乙卯秋八月　　七十八翁新納時升伯剛題

印　印

（巽軒井上博士藏在餘姚學苑）

藤樹先生年譜序

自藤樹先生之歿二百有餘年於此矣。近江聖人之名。藉藉膾炙人口。其遺宅在我封內者。邑民奉守。號爲藤樹書院。而春秋祭祀。至今不衰。嗚呼盛矣哉。然氓之蚩蚩。目不識丁。有他邦人來訪者。叩

以其事跡。則茫乎莫之能答。間或有答之。亦往往以訛傳訛。未足取信。余嘗憾焉。今者黄薇川田毅卿來寓於我藩。屬之編先生年譜。譜成。考据詳而叙事簡。足以觀先生之所以爲先生矣。廼授剞劂氏公之於世云。

安政五年歳在戊午春正月

標嶺分部光貞撰

（「藤樹先生年譜」活版本）

序（藤樹全書）

志郁齋藤二生。編藤樹全書。其初編刻成。來徵一言。余也譾劣。安足序先生之集。然余江人也。私淑先生非一日。其遺著散逸不傳於世。竊以爲平生之憾。今而得全集。非特可爲斯道賀也。蓋本朝所謂漢學。概不過記誦詞章。其講道學者。專在慶元以後惺窩羅山以下。而吾藤樹先生崛起江西。僅十一歳。感奮于天子庶人壹是脩身之句。謂聖人可學而至。於是所學莫非躬行實踐。始也修程朱究理之學。終主王氏良知之説。誠意所感。至馬丁轎夫亦化德。蓋先生之學。痛斥記誦詞章之弊。深期治心作聖之功。故其訓諭多生。亦皆深切提撕。不減王氏之傳習。則若熊澤蕃山。實出先生之門。大振興黄薇雄藩之風教。是亦可以見先生學德之餘光矣已。

國家中興之初。天下靡然倣歐西之風。尚智育。重法治。令日繁。而詐日長。其學亦流工藝詞章之末。德厚之風。殆掃地矣。有　鑑于此。新渙發
大詔。首勸忠孝。若先生之學。亦將行于世。遺著見于今。蓋非偶然。而二生之勤。豈謂之小補。乃述平生所以私淑。令置諸卷首云。

明治二十六年五月撰并書于京都之如意山房。

谷　鐵　臣

跋

藤樹先生書簡雜著跋

藤樹先生書簡一卷。或人從浪華攜來矣。元良小川子得之示余。而余見之。浪華碩菴老人之所輯錄。而篇次不與吾黨之所傳之書同。間亦附己意。所論許多也。故與二三之同志。相共繕寫。而備校考云。元文四己未年穐七月望日石河定源書。

（文學博士　井上哲次郎
文學博士　蟹江義丸共編「日本倫理彙編」）

跋（戊子之歲旦）

嘗聞諸葛武侯自比管仲樂毅。而實過之。吾藤樹先生常慕明道陽明。而優及之。此詩先生之作之書也。後人所必恭敬。豈桑梓而已呼。

安永癸巳冬十月

大阪　三宅正誼拜書

（雜誌「陽明」第二卷第一號）

同

藤樹先生德業之懿。無以尙焉。一時從游之士。仰霽月。坐春風。則灑溪明道之遺韵。兒童走卒皆稱之。則司馬涑水之流風前修。所謂匹夫而爲百世師。磤礚已降帷。先生足以當之。猗嗟盛矣哉。斯一幅先生之自製親墨。一展令人凜々起敬。其千山萬水唐虞春云者。實先生胸中之瀟。自非知德者。其孰能與之。先生既以詞章爲可鄙。生又當文運未啓之時。則辭之過朴。固其所矣。世之咀春華遺

秋實者。彫章琢句。沾沾自喜。是俳優耳。或者反病先生以其不為俳優。獨何與。讚岐平田君子文獲斯幅寶之。求題一語。乃薰沐拜書。以致區區崇奉之意云。

安永甲午之夏　　大阪後學　中井積善 敬書

（雜誌「陽明」第二卷第一號）

跋（藤樹先生遺稿）

召伯之棠。民猶愛之。孔子之杏。世共寶之。慕德之馨也。先生之集雖質。然其言無不本名敎者。則起人之敬。何啻棠之與杏。余欽先生之德久矣。今聞此集之上刻。不勝歡喜。謹跋數言。

橘　春暉

（「藤樹先生遺稿」寬政七年版）

跋藤樹先生致良知三大字眞蹟

備藩之石黑君。余未嘗相識。頃介人見需余跋于其所藏中江藤樹先生致良知三大字之眞蹟。因展觀之。徑信是為其心畫矣。何以徑信是為其心畫乎。余狂愚。而亦竊從事陽明王子致良知之學。而初聞其學於東方者。乃先生也。微先生。余安得與聞斯學。故受其賜亦厚矣。向側聞先生之墳墓與書院。猶存於江州小河村焉。小河村者。先生之桑梓也。想像之久矣。致仕後。天保壬辰夏六月。泛湖往小河村。謁其墳墓。上其書院。而奠于神主。其事略載於陋撰洗心洞劄記中。今不贅。以故得觀書院所傳之其舊衣裳及書畫。中有致良知三大字之橫幅。而無款識。問諸其門人之遠孫志村周二曰。是誰筆乎。答以先生之眞蹟。因請得其筆勢墨色矣。而今觀此卷之三大字。頗相類焉。故徑信是為其心畫也。嗚呼。先生之書此三字。非徒筆之。眞躬行心得焉者也。然而世儒惡王子致良知之說。以併駁先生者。間有之。故余請辨之。夫道者載於四書五經。似太散漫而無要。而有至要者在。至

要者何。喜怒哀樂而已。喜怒哀樂者。亦惟仁義禮智而已。仁義禮智者。亦惟仁義而已。仁義者。亦惟孝弟而已。孝弟者。亦惟孝而已矣。而孝非外鑠者。不學不慮之知能。而孩提之童。無不知愛其親之良也。其良者非他。天之太虛靈明焉耳。善致其良知。則情性皆得其正。舜是也。不善致其良知。則情性皆不得其正。深山野人是也。故野人過富貴利欲。值憂虞禍害。則棄其父母而趨避焉。與鹿豕無異矣。雖學士大夫。好色則慕少艾。有妻子則慕妻子。仕則慕君。不得於君則熱中。於是其孩提知愛父母之良心。將何在。故孟子曰。大孝終身慕父母。予於大舜見之矣。又曰。天下大悅而將歸己。天下悅而歸己。猶草芥也。惟舜爲然。不得乎親。不可以爲人。不順乎親。不可以爲子。盡事親之道。而瞽瞍底豫。瞽瞍底豫而天下化。又曰。舜視棄天下。猶棄敝蹝也。竊負而逃。遵海濱而處。終身訢然樂。而又終結放勳重華之要曰。堯舜之道。孝弟而已矣。陽明王子亦初開發於有子孝弟章。惜不忘父子其懷之所自來。盡其愛乎父。而孝矣。又移之其君。而忠矣。至於討叛蕩之大勳勞。要從其孝生出來也。故自以爲千變萬化皆徹乎一孝矣。其立致良知之學㊀以此也。眞是孔孟之血脈。而堯舜之嫡傳也。然而世儒不深察其要。譏忌之。豈非意見勝心之爲祟乎。且雖忌之。其日用各不能逃乎良知之發見。是又非行之而不著焉。習矣而不察焉者乎。嗟乎。可謂惑矣。然遺孝以語良知者。決非王子之旨也。隆萬以還。私淑後學之輩。或有背馳者焉。於是其學荒矣。豈圖先生遠生乎東方之異域。獨得良知之蘊。躬行心得。反勝乎其親傳之弟子過高者。就年譜見之則彰然。先生嘗仕大洲侯。而身在豫。其母老而在小河村。東西相隔數百里。無昆弟可養之者。然不欲往大洲受先生之養。而要先生之就養。於是先生之哀慕。徹髓刻骨。乃上歸田養親之疏數回。其大夫沮而不允。不得已決然自敝蹝其俸祿。以竊歸故里。在母膝下。得遂其奉養溫凊之誠。是豈非不失孩提之愛。而實心大舜之心。而善學王子之學者矣乎。故富貴憂虞。少艾妻子。何能得奪其良心哉。而其波及於鄉隣之老幼。而老幼各成孝慈之風。以至于今。亦惟此一副眞誠之孝而已矣。故先生之學。化天下國家以孝。是其本意也。母沒後。縱有用之者。聘之以千鍾之祿。萬室之邑。必不復起矣。以錢穀獄訟之司。固不復起矣。

以禮樂制度之任者文學掌故之官亦復然矣只以孝弟之道任之而不掣肘焉則雖一命之士一縣之令必復起而仕矣是豈可與世之辈糟粕弄筆墨而遺孝殉物者論之也哉石黒君珍秘其三大字蓋非徒愛其墨痕亦慕其善致良知也慕而眞致其良知則居處必莊事君必忠涖官必敬與朋友交必信不幸而臨戰陣則必勇及其細也伐樹以時殺獸以時如此則如與先生相反而善學先生者也於石黒君蓋必所不難焉也今應其需徒亦論其字體筆勢之工拙濃淡而已則豈學致良知者之所爲也哉是故說到先生之學之所淵源乃如此終書之以還此卷於石黒君癸巳冬十二月浪華大鹽後素

右跋既入刻儒門空虛聚語之卷首矣門人志村周二乞予曰先生親書之乃揭諸藤樹書院以貽將來學斯學者規範焉予猶豫不果今茲甲午秋八月初五之夜予夢上藤樹書院而謁先生先生謂予曰聞子再興致良知之學某之喜幸豈踰之也冀猶出死力以勉之予因請先生自書一語默不答伩請乃揮筆書無體之字以賜予拜而受夢忽覺不覺淚下黎明懸先生墨本之手帖其齋壁率弟子拜奠焉且有所感不強拒周二之乞齋沐書是跋以乃納于書院嗚呼予雖不肖豈敢忘其所告之語哉

天保五甲午秋八月廿有五日先生忌日也　浪華　大鹽後素

（藤樹書院所藏眞蹟・儒門空虛聚語・全書志村氏本）

(一) 禁は渠の誤。（紫水）

跋（原謹以遡言餞熊澤氏之行）

中江氏古之所謂隱君子乎孤峻自好不求聞達於諸侯及其得熊澤氏然後其道始行乎天下而流於後世古人有云山高水遠二先生之才以喩也京兆小野氏藏中江氏餞熊澤氏之書久矣裕請而見之欽其文之不飾而意有餘手摹上石以惠同志之人云爾

癸卯之晚春

山鹿補識

高補　子修

〔附記〕高補は素水と號し、山鹿素行六世の孫にして安政四年七月二日歿す。壽六十二。癸卯は恐らくは天保十四年のことならん。（紫水）。

（京都市上京區寺町通丸太町南入山本臨乘氏藏摹刻）

書

（書藤樹書院扁次）

謹書藤樹書院扁次

大哉先生之爲德也。歿後百有餘年于今。古堂猶儼然。余辛巳之年初拜謁祠堂。實八月十九日也。鄉黨諸生祭祀畢。而降胙飲福。薄言息。門下老圃常耕者。告余曰。堂無扁。冀書以奉焉。嗚呼。余也不敏。何應其請。雖然老圃之志。如之何。夫子曰。三軍可奪帥也。匹夫不可奪志也。至矣。飽食煖衣。無所用心。余常所懼也。於是乎。遂書以塞責。可耻之甚也。吉

寶曆十三年癸未春三月下澣　分部昌命拜書

（編者摘「藤樹先生景蹟錄」）

書藤樹先生眞蹟

爲古賀淳風　尾藤二洲

藤樹之德。近世無匹。今觀其書。猶覺餘韻有在。（「靜寄軒文集」卷五偲軒高瀨博士寄）

（書致良知眞蹟）

右藤樹中江翁眞蹟也。寛保中三輪執齋寄納諸德本堂。堂在江州小川邑。翁之鄕祠。而係大溝侯封内。翁啓手足二百年於茲。而土人奉祠至今。其追慕之深。可知矣。大溝侯好讀書。鋭志躬行。有深慕翁。乃恐是蹟之或逸也。將摹刻以傳示與而徵跋。展而觀之。筆力遒勁。足以見其充養之厚。蓋致知大學也。良知孟子也。而致良知則王文成之所獨得也。翁之學有得於此。則有是蹟。豈偶然也哉。因敬書其後。

安政戊午仲夏上澣　　昌平黌教官　河田興拜識

（藤樹書院藏「致良知」木版額面）

書藤樹先生手簡後

向予得藤樹先生手簡若干輯錄爲一册者於門人岡本經迪之家。取而讀之。蠹敗脫謬。未得其全。今茲恒河健來自西江問學于予。予因問先生書院亙跡及遺書。乃得先生年譜。行狀。實錄。幷此書。於是彼是校定。始完全。嗟乎。先生之學至矣。其在王門。當與徐橫山相伯仲。而此書沒而不見者。㊀殆百十數年。今而漸見于世。非其有不可沒者在耶。雖然。非識先生之學之至。誰知予言之眞然也。庚子季冬潛菴書。

（「潛菴遺稿」卷三）

㊀ 庚子は天保十一年なり。（紫水）

書藤樹先生手書後

弘化乙巳孟冬十月。恒河子健自江西携此集來。予置之案頭。未及閱。十二月十四日夜。齋中孤座

無事乃呼塾中藤武兩生挑燈倶讀此集且讀且評因嘆先生識見學術如此天若假之以年其造詣不可測又嘆予生平病羸雖讀聖賢之書顧躬行無力日月逾邁而年既三十又五矣今讀先生集慨然有起予者夫天下之讀書者千百輩其人不爲少矣而拔群起秀之才何其不多見也豈非以躬行不勉耶予嘗謂如先生躬行固無倫比而其識見之超卓學術之正大亦絕古今然則今世之躬行不勉者蓋以識見之庸陋齷齪學術之偏侫也此非可亦重嘆也哉讀了與兩生語時過三更遂書其語以貽子健潛菴源襄識

（藤樹先生遺文）

題

題藤樹遺墨　古賀精里

先儒藤樹中江先生講學近江享壽僅四十餘時人欽仰以近江聖人稱之蓋其天資有大過人者獨其學宗新建不滿識者之心云云

（精里初集抄卷二）

題舊製　佐藤坦

碩人已矣幾星霜　景慕今顏德本堂　遺愛藤棚荒益古　孤標松幹老逾蒼
氣常和處春長煥　月正霽時風亦光　今尚士民敦禮讓　入疆不問識書鄉

（藤樹書院藏幅）

題藤樹先生眞蹟後　安積艮齋

藤樹先生絶意仕途。退而講道於荒村老屋之下。惟是一布衣耳。於是時。富貴功名。震耀于一世者何限。自餘年後皆既與秋草倶泯。而先生道德之懿。赫如日星。學者欲摳衣從之。且不可得。卽獲其零縑隻字。不啻拱璧。觀者肅然改容。是見士之所重。固在此而不在彼也。近世學術。靡々幾乎壞矣。景仰先哲。撫卷慨然。

（「艮齋文略卷中」）

題藤樹翁墨跡

白齋　河田　興

爲恒川君

縱行心畫見精醇。　流轉歸鄕如有神。　展覽使人猶起敬。　當時何怪化邦民。
優游道德是眞儒。　欽仰遺風起懦夫。　何料餘姚江萬里。　遠分流派入琶湖。

（名古屋市加納恒三郎氏藏藤樹先生眞蹟跋寫）

題中江藤樹先生肖像

東　澤瀉

留得一封終養章。　湖南愛日侍萱堂。　誰知滴滴姚江水。　流到東溟波更長。

（「澤瀉先生全集」）

寄題藤樹書院

後學　谷　鐵臣

群山廻護小川邨。　藤樹依然書院存。　鄕黨長留風俗厚。　兒童猶仰聖人尊。
學依大學掃枝葉。　知致良知澄本源。　堪憶當年熊伯繼。　慕師三日立師門。

（藤樹書院藏幅）

記

（藤樹書院參拜記）

（大鹽中齋）

壬辰之夏六月。予以閑逸無事。發浪華至伏水。而之江州。泛湖以訪中江藤樹先生遺跡於小河村焉。小河村在西江比良嶽北。先生我邦姚江開宗也。謁其墓。想像其容儀道德。涙墜沾臆。其書院雖存。而今無講先生之學者。其門人之苗裔業醫者。乃監守之。如守祧然。於是予賦詩。詩曰。院畔古藤花盡時。泛湖來拜昔賢碑。餘風有似比良雪。流滅無人致此知。歸時於大溝港口。復買舟。予與所從之門生及家僮四人耳。更無同舟人。再泛湖南向坂本。將還吾鄉。而自大溝至坂本。水程凡可八里。此卽我邦里數。而非異朝之里數也。當異朝之里數。則六十八九里矣。解纜結綱。既未中際。而日晴浪靜。柔風只颯颯而已。至小松近傍。北風勃起。闔湖四山各飛聲。而狂瀾逆浪。或如百千怒馬衝陣。或如數仞雪山崩前。他舟船皆既逃而無一有。其張帆至低三尺強。而乘其怒馬。踏其雪山。以直前勇往。如箭馳者。只是吾一舟而已矣。忽到鰐津。嘗聞鰐津雖平日無風時。回淵藍染。而盤渦谷轉。巨口大鱗之所游泳出沒。乃湖中至險也。而況風波震激時乎。推篷見水面。則爲所謂地裂天開之勢。奇哉。颶風忽南北兩面吹而軋。故帆腹表裏饑飽不定。是以舟進而又退。退而又進。右傾則左昂。左傾則右昂。如踊如舞。飛沫峻濺。入篷侵牀。實至危之秋也。舟子呼曰。他舟皆知幾。故避之。如某獨誤不能前知焉。而乃至此耳。命也哉。雖然無面目對客耳。吾察其言意。似不免其葬魚腹之患。因却慰喩舟子曰。爾誤至此命也。則吾輩至此亦命矣。倶無如之何。只任天而已。何足患哉。門生家僮。既如醉惡酒。頭痛眼眩。其心如慮覆溺者。雖予實以爲死矣。故不得不起憂悔危懼之念。是時忽憶於藤樹書院所作。無人致此知之句。心口相語曰。此卽責其不致良知之人也。而我則起憂悔危懼之念。若不自責之。則待躬薄而責人却厚矣。非恕也。平生所學將何在。直呼起良知。則伊川先生存誠敬之言。亦一時幷起來。因堅坐其飄動中。乃如對伊川陽明二先生。主一無適。忘我之爲我。何況狂瀾逆浪。不

敢推于心、故憂悔危懼之念。如湯之赴雪。立消滅無痕。自此凝然不動。而颶風亦自止。柔風依然送舟、終著坂本西岸。此豈非天乎。時夜既二更矣。門生家僮皆爲回生之思。以互賀無恙。遂宿坂本。明早天晴、登天台山。盡四明之最高、而俯視東北。則乃湖也。疇昔所經歷之至險。皆入眼中。風浪靜而遠邇朗實一大圓鏡也。漁舟點點如黶子。帆檣數千。東去西來。易乎平地。似無可危懼者焉。於是門生謂余曰。昨憂悔危懼。抑夢乎。亦天譴吾師乎。余曰。否非夢而眞境也。非天譴而金玉我也。何者非逢其變。則焉窺得眞良知眞誠敬哉。又焉得眞對伊川陽明兩先生哉。故曰。眞境而非夢也。金玉我而非天譴也。然則福而非禍也。賢輩亦毋徒追思憂悔危懼之事而可也。無益于身心也。且賢輩盡復視城邑乎。其亦在杖履底。如蜂窩蟻垤者。富貴貧賤所同棲也。故我則却得小魯之興。心廣而身裕、眼豁而脚輕。賢輩亦宜共同是興味焉。於是又賦詩。詩曰。四明不獨盡湖東。西眺洛城眼界空。人家十萬塵喧絕。只聽一禽歌冷風。（最高雖夏。氣如秋末。）胸中益灑灑然。覺無一點渣滓。因謂。吾輩纔卽其境。呼起良知、存誠敬。猶且忘了至險。而雖登嶽再顧萬死處。不心寒股慄。而湛湛悠悠。却心得聖人同焉之興。而況如伊川先生。通晝夜。徹語默。存誠敬。則其謂雖堯舜之事。只是如太虛中一點浮雲過目。實見而非虛論。斷可知矣。因適記先生涪州之水厄。遂又及余湖上之事。此非比焉而夸言也。只欲俾人知致良知。卽是爲誠敬。存誠敬。則良知照照然如日月。初無二致也。故詳述以告同志焉。所從之門人白履松誠之。

（「洗心洞劄記」下）

藤樹先生畫像記

笛浦　野田　逸

是爲藤樹中江先生之肖像。近江州橫田生之所刻也。世之稱先生者。或稱其溫謹慈祥。或稱其恂恂孝悌。至稱爲近江聖人。然其所謂聖人者。特鄉愿之流耳。稱之者愈侈。而其視先生愈陋矣。余嘗讀先生之行實。想見其風采。必也恢奇絕特有出於尋常尺度之外者焉。是以雖以當時好文諸侯

如大洲加藤公。亦不能使展其全才也。公之不用也。適足以見先生恢奇絶特有爲之資矣。先生致仕歸養其母於近江。遂以終焉。則先生之業。湮鬱不見於世也。然而先生之業。自有不可掩者矣。今觀此像。狀貌魁梧崖然可畏。果恢奇絶特有爲之偉器也。豈世之所謂鄕愿之流哉。先生之學出於王子。而傳之於熊澤氏。王子當朱明之代。擒叛賊。攘群孼。其功雷霆於一代。熊澤氏翊贊備前芳烈公。端風化。厚國脉。號稱道儒。而獨先生則不見功業顯然之迹焉。故世知其有王子之學。而不知有王氏之業。知其有傳熊澤氏之學。而不知其有傳熊澤氏之業。甚矣其惑也。使先生有得王子之學。而無得王子之業。則何爲學王子。使先生有傳熊澤氏之學。而無傳熊澤氏之業。則何爲傳于熊澤氏。蓋先生之在大洲也。少時能代祖父擒盜。又有賊自鄰邑逃來者。邑人追捕。先生令扼渡船要路。果得賊於船中。是王子擒賊之小者。亦其所以極力下種。而使熊澤氏收其實也。故王子之業則可證先生之業於前矣。熊澤氏之業。則可證先生之業於後矣。先生之業。果可證耶。乃肖像之魁梧崖然可畏者。可以證其恢奇絶特有爲之資。而吾亦有以自信持論之不誤矣。信矣哉。像之不可以已也。微像先生則鄕愿之流而止耳。雖然像特心之影而已。像何能悉心。後之觀先生者。就此像。求先生之心。就先生之心。而求先生之業。則先生之眞。於是乎出矣。亦勿稱先生爲移且陋也夫。

（名古屋市加納恒三郎氏藏在藤樹叢傳）

右今世名家文鈔七に見ゆ云云。

（附記）　藤樹先生補傳、藤樹先生の畫像についての條參照。（紫水）

德本堂記

（川田剛）

德本堂者。藤樹中江先生之祠也。初先生棄官歸養老母。及先生歿。邑人以其宅爲祠。祠堂所藏聖像。及先生像。寬政中

光格帝御覽。使右大臣一條藤公書德本堂三大字。以賜焉。堂在大溝侯封內近江高島郡小川邑。

今茲丁巳冬。侯命剛輯先生年譜成。侯曰。是足以傳先生言行矣。顧祠堂之所以名。世或未之知也。子其有記之。剛唯唯而退。謹按孝者德之本。是取於孝經之語也。先生之道。以事君則忠。以事長則順。以處夫婦朋友間。則別且信矣。況其進退去就之潔。學術言論之偉。可以矜式於天下。豈特孝云乎哉。然先生篤信孝經。其所自得。在愛敬二字。故剛觀先生之德。不視諸其言行。而視諸愛敬之孚於人者。愛敬孚於人。不視諸當時。而視諸後世。不視諸學士大夫。而視諸愚夫愚婦。何則言行外也。愛敬內也。天下固有務其外而內未至者。雖取悅於一時。而不能得信於後世。學士大夫之待人。善善從長。其內之至不至。或置而不問焉。唯愚夫愚婦。則漠然無意於其間。感孚之心動於內。崇信之迹應於外。故至於德感愚夫愚婦。則其所蘊之深且厚可知矣。剛嘗以先生忌日。過小川邑。將入境。父老正服跪路側以迎。至則灑掃淨潔。洞開門戶。設神位於中堂。左右列圖書衣服。及其他遺物。井井不亂。闔邑男女來拜者。群集盈庭。而其禮貌之恭。不異乎臣子在君父前。嗚呼先生之道。非有福田利益以應民祈。而蚩蚩者。又求福田利益之外。不宜有所知。乃二百載之下。猶能奉祀。致洋洋之誠。蓋充於內者。必溢於外。是故入則父子兄弟。出則君臣朋友。脩而爲進退去就。發而爲學術言論。壹是皆以愛敬爲本。命曰德本。洵當矣。抑剛之不德。揭姓名於大賢祠。宜慚懼辭謝之不暇。然嘗聞之昔者婺源大夫周某。作周程三賢祠。屬文於朱子。朱子以地非其鄉。非其寓。非其所嘗遊宦。與祀典未有秩焉辭。不敢作。苦請再三。然後記之。今堂即其宅。地即其鄉也。而
天子之命。公卿之賜。固非尋常祀典之比。況侯之崇先賢。遠過於周。剛其何說以辭之。但剛之文。理淺詞拙。萬萬不望朱子後塵。無以副侯所以命之之意。是實可慚且懼焉耳。堂凡若干間。門廡各若干間。傍有古藤樹。蓋先生嘗讀書於其下云。

（「藤樹先生年譜」活版本）

碑文

藤樹先生碑

藤樹先生中江氏、名原、字維命、生于江西大溝小川鄉。幼喪父。爲大父所養、移在于伊豫。大父臣事豫之大洲加藤侯。大父卒、先生繼事。初母北川氏懷居、不欲遠移、留在小川。既而先生乞辭祿仕歸養、不許。固陳乞而去。既歸、家貧而菽水盡養。母氏安焉。鄉黨稱孝。先生亦以此遂隱而不出。講學鄉里爲業。先生少好學、稍長博學無方。比弱冠、得明王陽氏學、悅之。遂舍其他、專修其道。中歲得王氏全書、協符夙志。益倡其學、爲任以終身。先生躬行之德亦甚篤至。於是四方仰慕其學德、負笈至者益衆。家有古藤樹、乃設書院其下。相共講業、因以號焉云。先生溫厚愛人、因亦聚鄉民、諄々誨之以孝悌家倫之道。父老子弟雖蠢愚翁嫗、皆能承奉。家修戶行、隣里鄉黨翕然更化。其化漸及數十里、莫不尸祝先生者。民皆識字、稱爲易使。時分部侯食封大溝、以先生在其邑、厚加尊敬。而弟子散在四方者、多爲諸侯師。於是海內遠近、愈益欽仰。慶安元年八月卒。年四十一。卜邑北之地葬焉。又相共就其書院、建堂祠焉。沒之日、遠近數千家哀慕如喪父母。後邑侯爲書院墓域、永不廢、復其所在地籍、供祭費。先生行狀家譜及其著書、詳具其徒所記錄。予嘗聞此事。及嗣就封、以吾江西之封隣接大溝、遣鄉吏祀先生。且聞之鄉吏之言、曰、先生沒後暨百年、書院墓域儼然如舊。而其俗不渝、民奉先生之誨、守以至今。春秋祭祀、隣里男女百千爲群、如有事社稷。吾疆場民亦皆與在其中云。夫挾經稱師儒、其教唯止乎讀書者而已。氓之蚩々、不識一丁。何以至于耳入心通、如家人承父母命者乎。惟是斯民也、三代之所以直道而行也。雖夫婦之愚、固有與知能行者。則以先生之化視之、無不可敎之民、可知。然亦先生篤誠之至、化豈能如此乎。古者祀鄉先生於學、國無則與隣國合。且隣於善、民之望也。況吾封民被先生之化舊矣。可不尊敬乎。唯疆場有彼此、故命吾鄉吏立石

勒レ碑標孔邇之地、令三吾封民亦無レ諼二先生之德於無窮之世一。因爲二之銘一曰。

孝悌行レ家、　道不レ遠レ人。　身雖レ可レ隱、　顯々其仁。
以レ誠動レ物、　化及二愚民一。　民亦盡レ誠、　如レ在者神。

寶曆某年某月某日　江州膳所城主本多下總守藤原康桓（タケ）撰。

（滋賀縣高島郡大溝町大字勝野横田壽亭氏所藏「鴻溝錄」）

祝文

慶安元年子八月　藤樹先生卒去悼之文

あふみの國高島の郡小川村といふ所に、中江氏のなにがしひとり有けらし。いと若かりしころほひ、伊豫の國にて世のおぼえめでたき御方に宮づかひまそかりて、武士の矢たけ心の一筋に、君臣の道を守り忠をつくしおはしましぬ。しか侍れどもあげまきのはじめより學びの道に御心ざしふかくまし〳〵て、餘力ある折から、いたづらに時をうつしたまはざりけるとなん。さいつとしの比よりか古郷近江に御母壹人おはします。孝行を盡したく思召たち給ひて御いとま申㊀蟬のながれきよくにごりなき道を世にひろくおこし給ふべきとの御志ざしにてや侍りけん。故郷に引籠り給ふて御母公への孝行朝夕におこたりたまふこと更になく、もろこし人の跡をしたひかべをうがちてハ月をまねき、窓をひらきてハ雪をあつめ、世上に其名も高島や万木の森の鷺にハ引かへてゐをやすく打ふし給ふようすがもなし。こゝろの玉をみがきたていとまめやかに書を講じあかしくらさせ給ひしかバ、朋遠方よりあつまりて學校日々にさかへ侍る。誠に孔孟のむかしもかくやと世こぞつてたふとみ侍りけるに、おもはずも此（葉）は月下の五日に世をはやうさり玉ひぬ。夢かとおもへバ現うつし心かとおもへバまことしからず。浮世の中のあるにはかなきありさまハ、たとへていわんもいまめかしくことのはも絶てさら也。漸まどはぬ御年に一とせあまり玉ふとなれ□（不讀）名とゝる月の夜半に雲がくれ、そ

のかみ天[三]てる御神の岩戸に引こもり玉ふてとこやみとなり侍りしにことならず。かなしみてもあきたらず、なげきても猶あまりあり。彼吉田のなにがしの書をける文に、人はよそじにたらぬほどにてしゝたるこそ心よけれと侍るはかゝるわかれは侍らざりけるかと今更いぶかしくこそ侍れ。予はあひ見たてまつる事も侍らざれど、心ざしは門弟にも露たがはず。又やつがれが事をも人々のつてにてかつしろしめしたると聞しほどだに、今のわかれはむねつぶれ心も空になり侍る。まして御身のうち又は門家につらなり玉ふ人々の御心のうち、はかるもいとおろかならん。しかはあれど、したふによしなく、なげくに益侍らざる世の掟なれば、たゞ御跡のみわざとりおこなはせたまわんこそ本ゐならめ。愚意としてかゝるいさめはゞかり多くもとより生死になづみ玉ふべき人々ならねば、いひ出さんもおこがましく侍れど、つかのほとりに六とせろせしも物のかずかはなど、おもほし玉ふてつれ〴〵と御いみにこもります人々たちのかくかたはらいたき物にもしば〳〵御目をうつしたまはゞ露の間のおもひのやみもはれさせ玉ふにやと、例の狂句ひとつつゞりて御靈前にそなへ、他の嘲をもかへりみず、おろかなる志をのべ侍る物ならし。

　消て猶くもり氣やなき玉の露

先生身まかり玉ひぬれど、學びの道は絶ず人々とりをこなひ、もとよりせんだんは二葉よりかんばしとやらん。わきてさかしきおさなひのおはし侍るといとまめやかにかしづきてをふしたてなど、をの〳〵つぶやき合され侍るよし、ほのきこえぬれば、餘所ながらもいとうれしくて又こしをれ一つかきそへ侍る。

　淵は瀨となるは常なき世のならひ
　　小川の水のながれ絶すな

松村適雪拜

（滋賀縣高島郡大溝町中村德通氏所藏寫本）

慶安元年子九月　日

㊀ 蟬のながれ、新古今集に「石川や瀬見の小川の清ければ月も流れを尋ねてぞ澄む」（鴨長明）とあるに出づ。石川や瀬見の小川とは加茂川の別名なり。蓋し同名鴨川の小川村附近を流るゝあれば轉用せる者なるべし。

㊂ 先生の逝去を以て天照大神の天岩戸にかくれましゝに比せるは畏し。以て崇敬の念の極點に達せるを見るべし。

(三) 兼好法師の徒然草を指す。
(四) 孔夫子に對する子貢の心喪を指す。(紫水)

百年祭祝文

維 延享四年歲次丁卯八月己未朔。越二十五日癸酉。鄉鄰諸生。敢昭告于
藤樹先生之靈。恭惟 先生聰慧精敏。器宇弘深。浩浩焉。汪汪焉。勃興於寒鄉之中。首唱新建之學。躬行實踐。德崇業宏。海內知名。生徒雲集。靡然嚮風。其功嗚呼偉哉。嗚呼 先生沒一百年于茲。物換星移。其道之盛。堂宇儼然。遺風猶存。嗚呼。微 先生。後來何受其賜。靈德洋洋。永慕無極。不勝感愴。謹以淸酌庶羞。敬伸奠獻。尚饗。

右代諸君 中村德勝 拜書

(原本藤樹書院藏)

告祭田之資文

維寶曆三年。歲舍癸酉。二月丁亥朔。越十有九日。鄉鄰諸生。敢昭告于 藤樹先生之靈。嗚呼。 先生英邁之資。高才偉度。私慕新建王公之學。鼓振鄉里。爲之主盟。德崇業廣。駿聲四馳。海內嚮風。嗚呼。天奪哲人。于今百有餘年。遺澤尙存。生徒綿々。蘋藻雖微。祭祀不懈。追慕之深。恐後來不絕如綫。寒鄉允由謀在苒度年頃幸浪華及東都同志數輩。戮力遙獻祭田之資。吁。尊先生之厚。信道之深。實千載不朽。不堪感庶 幾此誠衷。謹告。

代諸君 德勝 譔

(滋賀縣高島郡水尾村大字鴨水谷平藏氏藏幅)

讀祝（百五十年祭）

俯伏　志村可敎　周助

維時寛政九年丁巳秋八月己酉越丁酉朔二十有五日辛酉。門下同志後裔等敢昭告于　藤樹先生之靈。恭惟歲時代謝于茲一百有五十年。名聲赫薰。上聞于　天朝。聞者右府藤原忠良公含勅書藤樹書院扁額曰德本堂。賜之而後　先生學。則令聞彌偉哉。然則吾曹荷餘風者。不啻謹以清酌庶羞。幷及此言。奠祭薄儀。尙饗焉。

（志村竹涯編「書院記事」）

百五十年祭祝文

維

寛政九。歲次丁巳。八月己酉。越于丁酉朔。二十有五日庚申。於井上金亭。末葉門人一同。敬告于

藤樹先生。

歲序流易。終焉之後。既當百五十年忌。諸生等臨追遠。慕德澤。先師良知之學。其敎輝海內。聞之者。一毫無不信。人皆由正路。不惑他岐。因之無不安者。仰祈尊上主德。育英才。下庇此民。天下泰平。時和歲豐。民安物阜。次冀門生改過移善。明實義。嗚呼　先生之恩澤。昊天罔極。謹以酒茶庶羞。用伸奠獻。尙饗。

右於小田村井上忠右衛門宅。諸生格出を以て、百五十年忌の祭祠す。恕子司之。

（「北川氏示敎錄」）

（二百年祭祝文）

源有善　九拜

藤樹先生は海内心學の鼻祖不佞が先人岡山も其門に入り道をきく事數年にして、先生世を辭し給ふ時に

升不數十年、聖學日々に盛んに行はれ、心學を尊信するもの多く、天下の人近江の聖人と稱し、先生の厚德を慕ひ、陽明王氏の學術を學んで、四方より笈を負ふもの少からず。此に於て同志相商り心學の絕なんとするを歎き、京師葭屋街に祠堂を建て先生の神位を安置し、傍に寮を設け其生徒を鳩め置き、先生の心術遺說を講じ、學脈綿々として儒業五代祖父惟倫に至り、何ぞ圖らん。天明戊申の春祝融の爲めに祠堂空しく成り、時に惟倫歿して惟清尙幼なれば、速に再建なさん力なく、家の門人の會津に在るを賴み補助を得て再び祠堂を造るといへども、孤弱なれば有道に就き家技を學ぶの俸資匱しく、たま／＼樞機のあるにまかせ榕亭福井先生に從ひ、始めて醫を學び、星霜十六年を經て舊街に產をひらきしかども、不幸にして早く世を去り、嗣子なく未亡の守る家となりぬれば、祠堂も漸く敗壞して今は神位と尊像而已殘れり。不佞も亦榕亭先生に從事すること十餘年因ありて惟清の跡を繼ぎ、先生の忌每に香華を典し奉る事怠らず。今年仲秋は殊に二百年の忌辰なれば、如何にもして舊の如く祠堂を修營なし參らせ度との願ひも、世塵の祟りに妨げられて望も果さず。さあれども心の祭薦は惰るべからずと、去る二十三日には正忌に先ちて神位尊像を拜し、正當のけふは遠く小川の廣前に北面して拜禮をなし奉り、今を視てふるき昔を想像り感淚に堪えず。敬み／＼て鄙詞を申し奉る。

　　經りにける二ももとのせの秋もけふ
　　　なく蟲の音はかはらざりけり

（「編者稿藤樹先生景慕錄」）

㈠ 源有善は河原敬治といふ。淵岡山の末裔をつげる人なり。門弟子並研究者傳淵岡山の條參照。（紫水）

（祝　文）

維安政四年龍集丁巳秋八月念五日。黃薇鯫生川田剛　謹以ニ淸酌庶羞之奠一。祭ニ　中江藤樹先生之靈一。嗚呼。先生之德。語ニ其大一。則汪汪然如ニ琵琶湖之不レ見ニ津隈一。語ニ其高一。則巍巍乎似ニ比良峰之不レ可ニ

攀躋。孝不遺老親膝下之侍養誠厚。忠不負舊君。備前之徵聘之辭。況其所陶冶薰染爵成良材。大者可以爲廊廟佐。小者亦足爲學者師。自　先生之逝。二百年於茲。名聲藉藉。在人口。如前日事。苟非不世出之大賢。其安能使後世欽慕如斯哉。吾聞　先生二十有八歲讀㊀徐姚之書。有悟於良知。今吾之年適及焉。而良知之說。亦嘗聞之矣。然猶拳々唯紫陽之服膺而不疑。豈其賢愚之相懸覺。有早晚而然耶。將先入爲主。迷而不回耶。抑王氏之說。未必是。而朱子之學。未必非也。易云君子豹變。小人革面。吾也小人。變與不變。皆未得其宜。設令　先生假之耄耋之壽。則吾安知其晚年之見不一變於舊時。世人之嗷々。仰不能瞻道德之盛大。俯不能察義理之精微。顧以見聞之不博。文字之不美。而譏之吁。記誦詞章之學。先哲之所不取。　先生非力不能爲而不爲。雖能爲而不屑爲焉耳。不知今之所謂學者果孝於親。如　先生者誰。果忠於君。如先生者誰。敎育後進。人材彬彬乎輩出。如　先生者。又果誰也。吾仰止高山。有年矣。及來江西審聞遺風。葵藿之誠。不能自持。爰値鄉俗釋菜之日。聊陳鄙詞。以拜其祠。嗚呼。言有窮。而情無涯。尙饗。

（藤樹書院藏幅）

㊀ 二十八歲にして王子の書を讀みたりさするは、事實を誤れり。卷之四文集四書解題並凡例參照。（紫水）

祭中江藤樹先生文。

維明治十三年六月五日。下總國匝瑳郡蕪里村良知書院社中山崎男三郎金杉重平次。謹以茶果之薄奠。祭中江藤樹先生靈。伏惟

先生創基良知之心學。而探造化之蘊奧。去聞見支離之弊。而全無方無體之天眞。溫乎如玉。純乎如金。千聖一滴之眞血脈。方待先生。而始傳焉。數百歲之下。其餘風遺澤。波及乎民庶者。尙迄于今益著矣。足以徵其不誣之盛德焉耳。夫良知造化靈德。而個々圓成。無聲無臭。而良背適應。縱橫自在。活潑潑地。苟擴充之。則足以奏脩齊治平之效焉。雖然致良知之難。猶迴逆流矣。苟非超脫禍福

藤樹先生卒去悼之文　　松村道寧

慶安元年子ノ九月日

松村道寧拜

景慕詩文集參照

（近江　中村徳通氏藏）

祝文　　甕江　川田剛筆

維安政四年龍集丁巳秋八月念五日黃薇鯀生川田剛謹以
清酌庶羞之奠祭　中江藤樹先生之靈嗚呼　先生之德語
其大則汪汪然如琵琶湖之不見津涯語其高則巍巍乎似比
良峰之不可攀躋孝不遺老親膝下之侍養誠厚忠不負舊君
備前之徵聘之辭況其所陶冶薰染甄成良材大者可以為廊
廟佐小者亦足為學者師自　先生之逝二百年於茲名聲藉
藉在人口如前日事苟非不世出之大賢其安能使後世欽慕
如斯哉吾聞　先生二十有八歲讀餘姚之書有悟於良知今
吾之年逮及焉而良知之說亦嘗聞之矣然猶拳拳唯紫陽之
服膺而不疑豈其賢愚之相懸覺有早晚而然耶將先入為主
迷而不回耶抑王氏之說未必是而朱子之學未必非也易云
君子豹變小人革面吾也小人變與不變皆未得其宜設令
先生假之耄耋之壽則吾安知其晚年之見不一變於舊時世
人之嗷嗷仰不能騖道德之盛大俯不能察義理之精微顧以
見聞之不博文字之不美而議之吁記誦詞章之學先哲之所
不取　先生非力不能為而不為雖能為而不屑為焉耳不知
今之所謂學者果孝於親如　先生者誰果忠於君如　先生
者誰教育後進人材彬彬乎輩出如　先生者又果誰也吾仰
止高山有年矣及來江西審聞遺風葵藿之誠不能自持爰值
鄉俗釋菜之日聊陳鄙詞以拜其祠嗚呼言有窮而情無涯尚
饗

景慕詩文集參照

（藤樹書院藏）

祭藤樹先生文　天遊　山崎勇三郎筆

景慕詩文集參照

（藤樹書院藏）

同上　天台道士　杉浦重剛筆

祭藤樹先生文

近江聖人歟日本聖人歟東洋聖人歟抑亦宇内聖人歟聖之所以為聖古今東西蓋一其揆已為近江聖人所以為宇内之聖人壽僅四十其德千古尊仰之彌高鑽之彌堅雖然賢不肖不在大人一能之己百之人十能之己千之果能此道矣聖人亦可追後進非無欲企及者矣先生之靈幸照鑒

杉浦重剛拜具

景慕詩文集參照

（藤樹書院藏）

生死由一波不動。標胸灑落。與造物者共遊乎無何有之郷者。則豈安能與知之乎。宜哉。
先生振鐸于海內。將後一綫之學脉絕無而僅有。寥寥乎如晨星落月哉。我社中積年從事於良知
之學。而立志專一。眞切用功。致命遂志之節。斷々乎截鐵截釘焉。而常浴
先生之遺教。而渴望其高風久矣。今也萬里江山。跋涉而來拜。以果其平生之宿志焉。而遺容嚴雅。
宛然如在。想像其德義風采。感發不少焉。嗚呼。悠々乾坤。世運變遷。而四海唱開明。功利縱橫。而機
詐百出之秋。眞致此良知者。今有否。雖然天運循環。而往來有常。嚴霜大凍之中。必催春陽溫和之
基。以是雖有汚隆之異。致知。良知之明。不可得而泯矣。早晚其德之流行。猶質于蓍龜焉。然而道本
無為。必待人而行。是以無任其責者。則其道不明矣。苟有感於聖賢之苦節者。則不可不與其奮發
勇往之志。而任其興道之責焉。此吾儕所以忘其量之不足。而憤悱鞠躬也。敢修造筵席。以陳區々
獻芹之誠志。虔布肺腑。書不盡意。尚饗。

良知書院社中　山崎勇三郎

金杉重平次　誠惶百拜

（藤樹書院藏幅）

（二百五十年祭祝文）

維明治三十年九月二十五日。近江國高島郡祭事委員長川越庄右衛門。敢昭告于
藤樹先生之靈。恭惟
先生重儒教。講道德。躬行實踐。風化閭里。延及后世。吾曹等不勝感慕。今茲以丁二百五十年忌辰。
謹以清酌庶羞。祇修祭典。先生之靈。來格尚饗。

（「編者稿藤樹先生景慕錄」）

祭藤樹先生文

近江聖人歟。日本聖人歟。東洋聖人歟。抑亦宇內聖人歟。聖之所以為聖。古今東西。蓋一其揆。已爲

近江聖人。所以爲宇内之聖人。壽僅四十。其德千尋。仰之彌高。鑽之彌堅。雖然賢不肖。不在天。人一能之己百之。人十能之己千之。果能此道矣。聖人或可追。後進輩無欲企及者矣。
先生之靈。幸照鑒。

杉浦重剛　拜具

（藤樹書院藏幅）

（祝　文）

維明治三十又六年十一月八日。平安書生　春日仲淵。再拜稽首。敢炤告藤樹先生之靈。淵先人晉菴。夙欽慕先生之遺風。以講明斯學爲己任矣。淵承其遺志。夙夜黽勉。與同志之士。相共闡明斯學。斃而後已矣。淵竊憂世風日降。人心陷溺。至不辨道義之爲何。今日不回狂瀾於既倒。則至國家之元氣消耗。元氣既消耗。其何以維持國家也。伏惟先生之至德。乃扶植綱常於萬古。是其關係世道人心者。如何哉。嗚呼。先生之高風與大湖之源泉共長。比良之山頭共高。今也淵歷遊縣下。訪先生之遺跡。過墓下。祭先生之靈。以叙向往之意。如此。尙饗。

（京都市春日精之助氏報）

（祝　文）

維明治四十三年三月二十七日。不肖東敬治。謹再拜告。
藤樹先生之靈。伏惟
先生大精神之所以雷勵風行於宇宙之間。而能振動無限賢豪。能興起無限偉人。豈有他故乎哉。
蓋
先生之德。則至高至弘。而其教。則至近至約。猶日月中天。而草木微物亦不遺其照。是以百世之下。苟聽其風者。感發神速。有自然之妙也。不肖敬治。平日服膺先君子之遺訓。仰慕

先生之末光。有年于茲。頃不自量。將欲講明斯道。以裨補世道人心之幾分。而未得其方。徒齎其志。
以遑々竊有所感愴。今謹奉先君子遺像。致之於
先生之傍。必知
先生欣然返眄顧。而先君子亦樂侍其左右。共爲同心話。無間旦暮。唯悲不肖獨在塵網。無由就附。
意徒空切。而志徒空薦。雖然夫人亦孰無精神。苟果有振動興起于我。則
先生之精神。不在
先生。而在我身。伏願
先生其哀鑑此心。

不肖 東　敬　治 再拜

（原本藤樹書院藏）

（洗心洞同志祝文）

維大正八年十月二十六日洗心洞同志香華庶羞の典を設て、恭しく藤樹中江先生の靈を祀る。伏して惟みるに、先生は我邦陽明學の開祖なり。其學深く、其德高く、特に孝親の心厚くして、利祿の情薄し。夙に仕途を遁れて故郷に歸り、孝養の傍ら學を講じ、英を育し、純孝至誠・實踐躬行・一言一行能く人を感化するものあり。故に猶は世に在せし時、既に近江聖人の尊稱を受けさせらる。嗚呼。大哉先生の德。盛哉先生の化。先生歿後二百七十二年の今日、其の德化は愈々廣大なるものあり。我等同志平素姚江の流を汲み、先生の高風を慕ふ者相携て此所に詣て親しく墓前に拜すれば、恍として英靈に接するが若し。今や世界の大戰は、既に終熄せしと雖、餘毒猶ほ未だ去らざれば、人心安からず。道德振はず。我等をして轉た憂懼に堪へざらしむ。是を以て益々先生の遺敎を宣揚し以て人心の安定道德の振興を圖らんことを冀ふ。
尚饗。

後學 高　瀬　武　次　郎 謹白

（原本藤樹書院藏）

誥文

維レ大正十一年五月二十一日藤樹神社創立協賛會長滋賀縣知事從四位勳三等堀田義次郎縣社藤樹神社ノ鎭座祭ヲ修シ、謹テ其靈ニ誥ク。

縣社藤樹神社ハ贈正四位中江先生ヲ祀ル所ノ祠ナリ。先生ノ學、良知ヲ致シ純孝ニ歸スルヲ以テ其要トス。學行並ヒ立チ、子弟道ニ進ミ、鄕黨風ニ化ス。今ヤ先生逝ショリ茲ニ二百七十有餘年、其德炳々トシテ彌々顯ハル。豈復盛ンナラスヤ。余思惟スラク。先生ノ若キ、當サニ是レ祠ニ祀ルヘキ者ナラント。乃チ旨ヲ高島郡長佐野眞次郎ニ授ク。之ヨリ前キ鄕黨モ亦既ニ此志アリ。此ニ於テ翕然トシテ呼應シ、立トコロニ胥ヒ謀リ、其祠ヲ靑柳村小川ノ地ニ刱建センコトヲ官ニ請フ。官允准シ縣社ニ列ス。遠邇之ヲ聞キ齊シク相競テ資ヲ寄セ、力ヲ輔ク。乃チ工ヲ鳩メテ經營シ、今茲四月竣ヲ告ク。之ヲ望ムニ鳥革翬飛嚴々翼々タリ。象設亦備ハリ。森々肅々タリ。爰ニ完ク享祀ノ所ヲ得タリ。其四方ヲ延攬スルニ、東ハ則チ膽岳湖外ニ峙チ、南ハ則チ鴨河大地ニ横ハリ、西ハ則チ秦野明霞ニ連リ、北ハ則チ竹生島煙波ニ浮フ。而シテ琵琶湖ハ則チ其ノ環圍ノ中ニ滉洋瀇漫タリ。此數者ハ皆固ト萬古不易ナリ。卽チ以テ先生洪德ノ無窮ナルニ配スルニ足ラン乎希冀クハ英靈照鑑シ、民庶益々孝友敦睦、各々其ノ業ヲ樂ミ、共ニ永ク聖世ヲ謳歌スルヲ得ンコトヲ。

（原本藤樹神社藏）

祝詞

藤樹神社鎭座祭祝詞

掛麻久毛畏支藤樹神社乃大前爾神職鳥居淸憲畏美畏美毛白左久、大神乃高支尊支大稜威乎、慕比奉里仰支奉禮留藤樹神社創立協賛會乃人等思議里弖彌遠永爾齋支奉良牟止是乃

宮地乎朝日乃日向布處、夕日乃耀久處止、下津岩根爾宮柱太敷立、高天原爾千木高知弖、天乃御蔭日乃御蔭止瑞乃御殿作仕奉里弖、八十日日波在禮止毛、今日乎吉日乃吉時止撰定米氐、是乃新神殿爾御靈代乎坐奉里鎮奉里、大前爾齋麻波里清麻波里弖獻奉留幣帛波、御饌御酒乎始米、種々乃味物乎横山乃如久置足波之弖奉良久乎、平久安久聞召宇豆那比給比弖、今與里往先、此乃大宮乎静宮乃常宮止長久爾鎮座世止、畏美畏美毛白須。

（藤樹神社所藏原本）

皇后陛下御使御差遣祝詞

掛卷母畏伎縣社藤樹神社乃大前爾、社司野呂周一恐美恐美母白左久。

八十日日波有禮杼母、今日乃吉日乎、生日乃足日刀撰定米給比氐、皇后陛下乃御使、皇后宮職御用係吉田鞆子乎差遣波左惠氐、大幣帛乎令奉捧給布賀故爾、謹美敬比御祭仕奉里、御饌御酒乎始米、海川山野乃種種乃物乎、高机爾置足波志氐、今日乃御饗止大前爾獻良久乎、平介久安介久聞食氐、千代田乃大宮爾座氐、明御神刀大八洲國知食須、皇御孫尊乃大御世乎、彌遠爾、彌長爾、嚴御世乃足御世爾、守里給比幸倍給比氐、天津日嗣乃大御光乎、天地乃限里照里輝加志米仰賀志米給倍刀、恐美恐美母白須。

（原本藤樹神社所藏）

久邇宮良子女王殿下御作文御下附奉告祭祝詞

掛卷母畏伎縣社藤樹神社乃大前爾、社司野呂周一恐美恐美母白左久。

大神乃高伎御稜威乃、尊伎御高德波志母、國内萬人乃只管爾仰岐奉里尊美奉禮留中爾、曩爾

久邇宮良子女王乃、大神手敬比奉里慕比奉里給布事乃由手、物志給比志有難伎御文章爾依里氏、無止事邊乃、如何爾大神手慕比奉里敬比奉里給邊留歟手、窺比奉留事手得留爾奈牟。今回女王我御自良是手清米認米給比氏、神社爾納米奉良志米給布。大神乃大御威德乃、彌我上爾輝伎坐左牟刀共爾、世乃教育乃道手資久留事乃、實爾多伎手致左牟事波、最刀母芽出度最刀母尊伎事乃極美爾古曾有介禮。今日波志母、大神乃現世爾生出坐志志、芽出度尊伎日爾志有禮婆、今日乃吉日手生日乃足日刀撰定米氏、神食神酒種種乃物手捧獻奉里、謹美敬比氏此事乃由手奏上奉良久手、平介久安介久聞食志相宇豆奈比給比氏、皇孫命乃大朝廷手始米國民爾至留麻傳、夜守日守爾守給比導給比氏、教育乃道手彌益益爾揚志米給比、皇國乃大光輝手彌高爾彌廣爾輝志米給邊刀、恐美恐美母白須。

（原本藤樹神社所藏）

書　翰

常省先生書翰一節

全書序文之義、拙夫作候而も如何に候條、藤井懶齋へ所望可レ申と存候。是もいまだ思案決不レ申候。追而御相談可二申入一候。

（京都　岡田元誠氏藏幅）

常省先生書翰

乍レ去先無二別條一相務申候。御内樣助左衛門殿へも御心得可レ被レ下候。當冬分部公京師火消に御上京被レ遊候由、御大役上下大義成る事と存候。彌太郎殿も御供之由御苦勞存候。

一、講堂[一]春之祭禮も何も御出會被レ成候而御執行被レ成、八月忌日之祭奠同志中御來會貴樣降神御務被レ成候而、御執行被レ成被レ下候由、寔御厚情之至不レ勝二感謝一候。然ニ講堂之やね損じニ付致二修覆一可レ然と思召候而積り被二仰付一候よし、委細源兵衛よりも申越致二承知一候。少も早修覆仕候て可レ然存候へども、先當年者作毛難レ仕候。來春は入部にて可レ有レ之と存候。左近罷登可レ申候間、其上にて何とぞ致二了簡一修覆致候樣可レ仕候。

一、八月十八日貴鄕洪水鴨川堤切にて損毛多、里中へも水入候而、貴宅へは御床へ上り候由難義致二推察一候。凶年打續一入御作廻も御苦勞可レ有二御座一と存候。東國筋之他國ニも風水の損毛夥敷沙汰ニ候。其故か穀價高直ニ候而、處士町方別而可レ爲二困窮一と不レ堪二憂患一事ニ候。

一、當府先火事沙汰も少く靜ニ御座候此元仁兵衛せがれ甚右衛門罷登候。這邊之樣體御物語可二申上一と存候條不レ及二多毫一候。恐惶謹言。

霜月二日　　中江彌三郎

（編者藏幅）

小川庄次郎樣

(一) 講堂とは藤樹書院を斥す。（紫水）

中江數馬書翰

猶々對面便相待申事に御座候。

其後は御物遠罷過漸趣二寒氣一申候。愈御無事被レ成二御座一候哉。此方無二異儀一罷在候。中江彌三郎儀于レ今便無二御座一候。定而海路無事着岸可レ被レ致と存候。隨而日外彌三郎方へ被二仰越一候布晒出來申候間差下申候。さらしやより延引又は好便無二御座一及二遲引一申候。憚に御受取可レ被レ成候。其元講堂之義諸事賴上候。同志中へも乍二慮外一宜預御心得候。猶得二後音之時一候。恐惶謹言。

十月二十三日　　中江數馬花押

（編者識語）

小川庄次郎樣

人々御中

板倉内膳正の松平日向守に宛たる書翰の一節

彼者（熊澤蕃山を斥す。）之義勿論下人迄も他所へ往來無用と可被仰付候哉との事、かの者對公儀へ（まゝ）少も御とが無之、尤其身に何之あやまりも無之候間其身他所への往來は不及申、下人も心次第に可被成候。其身大かた他所へ參間敷候。然共父母の所、また江州小川と申候所師之居申候舊跡候而、はかまいりなど、年に一兩度程もいたし申候。其元へ參候はゞ遠所になり申候間是もたゞ今のごとくはまいり申まじく候。（「熊澤蕃山幽居始末」）

（附記）編者云ふ。此の書狀によりて察すれば、熊澤了介が常に先生の遺跡を訪ひ、墓參をなせるものなることを知る。

御墓園垣建築に關する書翰

去七日出之貴札忝致拜見候。先以殘暑甚敷御座候へ共、御家内御安泰被成御座候由、珍重奉存候。如來諭御在京中は始終に得貴慮忝奉存候。且御賴申上候先師御墓園垣之事彌々仰付被下候由、諸事御世話のみと奉察候。貴面に伺上候通永久の御事に御座候。殊に列國之同志御墓參被致候ても恥相成る致方と被思不申樣に念入置申度候。たとへ直段は少々極より增候て成共、いつ迄も〳〵破損無之樣に被仰渡可被下候。

別而みがきなども能仕候樣に奉賴候。

一、門之事石にて可被成候由、被仰下候。尤石にては永久に可有御座候へ共、重候而建明白由仕間舖奉察候。木にて可然かと奉存候。夫迚も御丁簡次第に被成可被下候。

一、手付銀百匁渡し申樣に被仰下則相下し申候。彌八月廿五日前に出來掃除をも可仕樣に仕度事に御座候。

私共も御祭後に罷下り中心得に御座候。貴公にも私□御登京被レ成候哉、其刻萬緒可レ得二貴意一候。頓首。

七月十日　　河合德右衛門　花押

大森周介様

御報

（志村竹涯翁編「書院記事」）

年始狀

春陽之御慶重々申納候。貴境御祠堂御安靜諸君彌、御清福御加齡被レ成欣然之至奉レ存候。當地學館無二故障一諸生無異加甫仕候。今日者如二恒例一於二學館一讀書初諸友集會仰二師恩一候。且自反愼獨は學者入德之眼目、作レ聖之眞路共可レ申候所、吾人志之强弱工夫之疎密によりて其功之有無顯然たる事恐入耳に御座候。唯冥加を祈之外無二他事一奉レ存候。貴境春來御勵進之粧被二仰示一可レ被レ下候。尚期二永春之時一恐惶謹言。

正月十一日

淵　貞藏　維花押　　同　良藏　維花押　　野村又三郎　信興花押
渡邊嘉兵衛　　桂　甚右衛門　　野村傳兵衛
伊庭三郎兵衛　　野原三四郎　　平田此右衛門
藤林道壽　　親康喜安　　小野左衛門尉

志村周介様
安原善七郎様
諸　君　几下

（志村竹涯翁編「書院記事」）

編者云ふ。此の書通は享保年間京都葭屋町の同志より江西の同志に送れるものにして、當地學館さいへるは葭屋町の講堂を斥す。尙藤樹先生行狀聞傳　頁を參照すべし。

三輪執齋書狀

新暦御慶不可有休期候。御全家御揃御安全に御越年可被成と、目出度奉存候。拙者無異儀加年仕候。貴意可安候。去年九月廿日出之貴札十二月十四日に相達忝致拜見候。岡田十之允殿舊冬參府久々にて對話御噂承之大悦仕候。御志も無御間斷八月先師御諱祭之節は講堂へも御會合被成候由奉感心候。此方同志も無怠寄合候へ共教導非其德候故博取不申候。而此道の益にも不相成不本意恥入存候。何卒一分之德を不失候樣にと責而之志願に御座候へ共、夫さへ退勝にて、加るに老懶日々增惡筆所々の報書も遲々と難仕每々失禮而已と打過申候。去年も先達而頃貴札之御報一日〳〵及延引又々申譯而已仕候。諸事御宥恕可被下候。頓而岡田氏可爲歸鄕候間其節御聞可被下候。此道易簡直切親切明白自致良知之外無他事候。取入之一路には少々存意も有之、岡田氏とは申談候御聞可被下候。各書被下候へ共乍慮外一紙に及貴報候。御宥恕〳〵。猶期永日之時候。恐惶謹言。

猶々御內樣第二男樣へも宜奉賴候。世悴共へも御傳語忝奉存候。可然御禮申上候樣に申候何も打揃無爲に罷在候。尙期永日候也。

正月十八日　　三輪善藏希賢　花押

原田平八郎樣
原田多仲樣
貴酬

（滋賀縣高島郡大溝町原田知近氏藏幅）

㊀ 岡田十之允とは岡田季誠氏のことなり。（紫水）〔前文初版脫漏あり〕原田知近氏の厚意の報告により諸處訂正す。（藤陰）

大鹽中齋書狀

貴報被下及歲陰貴地寒威十倍各樣御揃彌御健全被成御勤仕奉敬賀候。然者藤樹書院へ社弟共申合寄附金爲特相納候義御聞取ニ相成預御賞奬赧汗之至ニ御座候。當地相隔居候義ニ付何卒右寄附之寸衷不朽候樣仕度書院相守候周二。城太夫等へ猶宜御教置可被下一入奉賴候。

一、先儒之說纂拙筆相揮乍序獻呈仕候處、早速

若狹守樣に御差上御座候處、御皆被爲成候處、御叮嚀ニ被仰下承知仕是亦奉恐入候。扨此節備前岡山藩臣石黑後藤兵衞所藏藤樹翁致良知之三大字並右翁より熊澤了介子へ被送候俗文を上卷ニいたし、先年より三都並國々士類儒者有名の人々跋を染筆いたし有之、手筋を以僕へも賴越則佐藤一齋も染有之、一齋始一同翁之致良知に大眼目之處は不書顯、只其字畫筆勢墨色巧拙美惡を論せサラバト綴而已にて、一向翁之心學緊要ハ捨置不相見段□□し人も右藩にては重祿執法家ニて志有之向にて少し不滿足ニ付僕之狂人へ賴越候と相覺是も天時と奉存候。　附別紙寫之通跋文綴右卷軸書卷ハ直ニ返却則一昨昨日一齋ハ跋文送遣し候。

若狹守樣ハ獻呈仕候致良知之義右にて御承知被爲在候樣乍憚被仰上可被下候。　明春暖和ニ再び書院へ參候はゞ右孝之一字を講義可仕積、此節幾內侯家藩臣重役之內憤發入門致良知之學ニ志向出來近衞殿領知攝州伊丹豪富之者並其地一同良知を信奉仕候樣相成弟子共敎授ニ遣し御座れニ付蒼生菜色飢餓之時一方一村成共孝悌之道を心得躬行爲致置候はゞ心得違て不法仕候もの自ら少く右ニ而者藤樹翁の宿志往々可被行哉と奉存候。　是全若狹守樣御決斷にて先頃御招經義口述御聞始被爲成れより段々右翁之致良知學再起いたし掛候基ニ相成於僕大悅仕候。退隱之身外ニ慕且望候事更無之講學一事而已にて只上下共孝悌之風を起度素心ニ御座候。神も感有て歟右之外勢州邊ニも段々興起之者共多乍序御物語得貴意置候。　且一齋へ遣候右文通中當秋參殿誠意並大學衍義御勸申上置候旨認遣し候。　一齋ハ誠意良知之義を藤樹翁之通りニ當障り之無遠慮說示しれ義者不致よし。依而津藩之學者向にてハ沙汰不宜候ニ付今般前書跋文送猶良知之義を嚴敷申遣れ。扨々儒者も俗人同樣名利榮辱之念を不離實地ニ忠孝仁義をいたしれ者稀なるハ如何成ル事哉と旦暮長大息仕候。若狹守樣御若齡之御義各樣並御老臣被仰合御輔佐ニ御精神を御盡し明主賢君之御德譽天下海內ニ推移候樣御心掛乍憚肝要と奉存候。　左候はゞ始而拜謁御目通經義口述仕候如僕隱者乍蔭如何斗歟欣躍仕候。　失敬之義ニは候へ共、僞君子之者共儒名を冒世上に不少必爲御惑不申樣御心掛御忠義と奉存候。　僕は素々狂者忌諱を不避冒昧汚嚴聽候。　吳々妄言之罪は御仁恕可被下候。　先は右御挨拶旁御再含如此御座候。　恐惶謹言。

十二月廿四日　　大鹽平八郎後素　花押

前田小右衛門様

恒河羽太様

原田太仲様

長野主税様

（大阪市森下博氏藏幅）

（附記）編者按ずるに此書恐らくは天保四年の書通ならん。

春日潜菴書狀

先月一日付之御來書同月六日ニ相屆致二欣誦一候。殘暑酷候得共先以愈、御淸適珍重御義存入候。過日は御出京日々御來訪御篤志之程深感入候。但拙者未熟之學御遠來之情ニ相負候様覺候。乍レ去自レ是互ニ勉進可レ申と存相娯候。此學衰頽、確實ニ工夫を下候人實ニ寥々、方今確二信姚江一如二吾子一人誠ニ海内幾人嘆息ニ不レ堪候。且貴郷藤樹翁之郷ニ而我東方姚江之嗣此度吾子之志非二偶然一深以感喜ニ不レ堪候。此頃ハ拙も氣力快壯讀書之業も前日ニ倍候様相覺、此様子ニ而十年二十年之工夫ヲ下候ハヾ、少しは相進可レ申と存候。後日面晤可二相悉一候。時下殘熱千萬御自愛勉進相祈候。草々不乙。

八月八日　　春日讃岐守

恒河惟江様

倘々刮目凡例御回シ御面倒ニ存候。此節不圖主人家へ西河合（全？）集買入申候。其中ニ傍註之事有之候全ク僞入之由ニ相見候。然レバ右上木ハ相止メ可レ申哉とも存候。如何。

（京都春日精之助氏藏幅）

(吉村秋陽書狀)

前月念一日華帖同第五日ニ無相違相達拜見仕候。秋炎驕張之候、硏北御淸適御淸修之義抃賀無量〻〻。老生依舊先無事故送光仕候。誠當年は珍敷暑氣病軀大ニ困頓夫故季夏之末以來は今以一切諸家之來往も相絕戶外へハ寸步不相移日々適意消暑之計而已ニ御座候。右ニ付先書ニ申進候通貴境へ再遊今度は無覺束奉存候條、然ル處此御書中之趣是非御踐約可仕旨縷々被仰下厚意溢御紙表汗赧之極ニ御座候。藤樹翁正忌且村人へ薄約も御座候旁是非其頃ニ一遊助賀之一役にも相加候義本意ニ御座候間無兎角承知可仕筈ニ御座候得ども、歸期既ニ當月末より九月初一二には是非ニ相迫居其前七八日は乍旅中雜用も少し有之何分にも遠遊六ケ敷實は憚署計にても無御座候。右之樣子ニ付とても今度は罷出候義難相叶御座候。御手帖相達候以來是迄色々都合之處細考とふぞ高意通ニ仕度と奉存夫故御再答も延引仕候。不應高意候失敬は御海□被下度候來秋より明後春頃は又々此度之用向にて上都可仕心組居候故其節は必書院へ瞻拜可仕御便も御座候節、村人へも御謝置被下度候。

拙文其外御托之義承知仕候。歸鄕之上何レも取計可申候。

御所藏之藤樹眞蹟之文字遺忘仕候間、御序之節眞蹟御寫寄被下候樣奉煩候。（乍御面倒何卒双鈎にて御寫寄相願度左候得ば兒輩へも相示度御願候。）村人三人へ拙書遣候義相含居申候。其外書院之拙作少し腹稿も御座候間相約候條々は遲速難計御座候得ども、追々踐言可仕左樣御承知被下度候。扨右之樣子御座候得ば先書ニ申進候通中秋後ニ五六日にても御命駕何如。左樣無御座候はゞ御再會も先暫隔絕可仕、何卒御一書希度候。一昨日春日氏も來訪折角貴兄之御噂有之とふぞ御一來相成候樣と申合候事ニ御座候。先要旨拜答如此時氣御加愛被成御凌候樣□祈之至候。頓首。復。

八月初八　　　　　　　　晋

恒　河　契　兄

梧　右

（京都春日精之助氏藏幅）

（追啓略す）

（附記）　此の書恐らくは天保十四年の書通ならん。（春日精之助氏報）

春日潛菴與岡本經迪書

昨西江恒河子健來。爲予語曰。彼家藏藤樹年譜。其譜云。先生始讀晦翁書每疑之。年三十有四。得龍溪集。三十又八。得王子全集。乃脫然深信斯學。年四十又一而沒。予聞之爽然如失寢而不寐。蓋先生奉斯學。僅三四年間耳。且未知王學。而發疑於朱說。何其聰明特達也。予嘗觀徐橫山出身承當。以聖學爲己任。與王子論大學宗旨。踊躍痛快。如狂如醒云。私竊悲之。以謂天下古今。獨有一橫山而止耳。何者龍溪心齋其始猶疑王子。如念菴始而慕之。中而疑之。及至工夫純熟而後洞然無疑。夫在乎當時賢哲猶且然也。而況於其他乎。又況於百世之遠乎。今如藤樹超然獨與孟子所謂豪傑之士。非耶。吾人幸從事於此學。而未覩自得也。此豈非以立志未堅定也耶㊀。此予所以爽然如失。寢而不寢也。雖然。方今可與共語此者。幾何人哉。想吾子亦聞之。必爽然矣。詩云。招招舟子。人涉卬否。人涉卬否。我俟我友。嗚乎。吾邦涉於朱說之士。不啻十百。如藤樹者。豈非我友也耶。子健立志不凡。非區々於陳編蠹簡者。是亦我友也。吾子以爲何如。十月某日。襄白。

（『潛菴遺稿』卷二）

㊀ 詩は邶風匏有苦葉の篇。此書中年之作年次未詳。（紫水）

藤樹書院再建に關する山崎天遊の書狀

尺素拜啓過般辱雲章薰讀數過、藤樹書院再建之事百方斡旋之由、審領高誼之深切喜慰不可言。不肖春來より書院新築ニ取懸冗務多端不圖致答書遷延欠敬御海容希候。未接丰儀候得共先以益御清福奉賀候。却說先志村氏より申越候寄附金之義、卽今金五十圓郵贈致し候間御落手可被降候。土木經營之義兼て御着手ニ相成趣諸賢御擔任之事故定めて容易に致落成義と遠察罷在候。跡金は便塾生持參可申ニ候間請御諒察。方今道義

陸沈人情澆漓之際衆心を團結して一大美功を奏する事、其勞心拮据深く想像仕候。頑鈍不肖の如きもの、若し壤地を接して自操版挿萬一之力を添申度も、奈せん千里江湖外に在て鞅掌する能はざるを。幸に有諸賢之在而結構仍舊規神主儼然祠堂に安ずるは豈非諸君之偉功乎。陽明王子曰。良知之明萬古一日。今於諸君乎視之、其篤志豈得不贊歎乎。不肖死守王陽明氏之良知學。既十有餘年。其生平之功夫□□□□更無逡巡假借鞭勉罷在候得共、未ダ無得力之處汗顏之至り候。雖然得確乎定志意之方向而窺湛然靈明之天体者。偏以有藤樹先生之着先鞭而發揮導引之故也。此我黨之士生平所以欣仰而鞠躬拜趨也。願くは諸賢察□芹之衷情速介得聞落成之報ば其喜可知のみ。此段偏に奉合掌候。草々頓首。

山　崎　勇　三　郎

木　戸　良　峯　様

侍　史

（編者稿「藤樹先生景慕錄」）

倘々金不足にて造營差支候はゞ、社中及び私友人等相勤盡力可致候也。

（附記）編者云ふ、木戸良峯氏は滋賀縣滋賀郡木戸村の人にして當時高島郡長の職に在りたり。倘前掲祭文を參照すべし。

（式部長三宮男爵書狀）

餘寒嚴敷御座候處、益御清康大慶之至奉存候。陳は兼而御出願相成候
御下賜金之義、本日金貳百圓丈中江藤樹遺跡保存之爲
御下賜相成候。右被仰出候。御互ニ誠以難有冥加之至候。縣知事ゟ表面之達可有之御座候へ共、不取敢
此段爲御知申入候。草々頓首。

三十四年三月六日　　義　胤

川（河）毛　三　郎　殿

（藤樹書院所藏影摹手束）

（附記）編者云ふ、河毛三郎氏は金澤の人にして當時高島郡長の職に在りて藤樹書院維持確立の爲め專心盡力せられたる人なり。藤樹先生補傳第三十四項參照。

語録

拔本塞源論私抄

三輪執齋

朱文公漢唐已來雜博卑陋の風をかへして、儒風誠に一變せり。されど是を心に求めずして事物に求むるより、其學派は眞を不得ところあるが如し。韓退之古之爲民者四。士農工商今之爲民者六。加老佛と云て、其六を四にかへさんことを願へり。夫後世の知識を事物の間に推究るの學に從はゞ、君に事へて暇なき者、農工商の渡世に逐はるゝ者などは、其勢ひ不能ところありて、別に學者となりて學びざれば、其責を塞ぐ事不能、是今の爲民六の上に又此儒者を合はせて七となれり。然れば是亦與異端合與並び馳る類ならんか。王先生拔本塞源論を述給ひて、老佛覇者の目を覺させり。實に聖人に志す徒考て見るべし。惜朱子の學其門人より私淑するの徒に至るまで、道に入德を成者もとより不少して王子の門も亦才德兼備はる人歷々として可見也。其末流の弊を論ずれば、亦各々其なくんばあらざれば、弊へを以て其是非を定むること難かるべし。然るに聖人の道每人に學ぶべく、皆以堯舜となるべくして、彼七を四にかへせる功は獨於王先生見之のみ。王氏の學脈は道統の說に於て論之故に略之。

本邦儒者の傳、阿知岐王仁の昔はいざ不知、遣隋唐使の所傳來は其本漢儒の學術なれば、吉備菅家の才德と云ども、天性の好質に加るに博文を以てして、本朝千歲の儒宗となれり。其傳る所聖學の正脈にあらざるを以、如斯にとゞまれり、可惜事也。其後絕てなし。近世文明の化時至て、諸士の學を以て鳴者多し。此時に當て、惺窩先生出て、能僧衣を脫而儒に歸し、陸子を尊びて以成德、然るに未純一所ありしを以て、其門人其博文詞章をのみ傳へて、道德の眼を開る人は未聞之、その後山崎出て、朱學を唱て、雜博の風を反して、經書につゞめたれども、其第一乘を殘して、德行亦間然すべき事多ければ、道學を以て名のる人に非ず其比吾藤樹先生出て、始て王學を發明し、純一に孔孟の心傳を說り。其造創にありて且蚤世し給ふ故、其全

備を不レ見、惜むべき事也。其江西に退居し、徒を聚めて道を講せる、遠方の學徒從レ之て成レ才者不レ少。其講舍今尙存す。先生有二三子一長子は備陽君以二客禮一待レ之、仲子と末子は亦臣レ之、長仲は蚤く卒す。末子は一二歳の時喪レ父て門人熊澤氏に成長して、其學脈をつげりしが、多病なるを以、しば〳〵つかへ、しば〳〵辭して、終に江西に終れり。是を以て學者其治績を不レ見ことを惜む。其子仕へて對州にあり。先生の學、記誦詞章を事とせざるを以て、俗學の徒蒼生を愚にするなど云そしり有は、誠不レ足レ論。而彼七つを四にかへせる功は、亦本邦の王文成公とも云べし。然に其徒の或は聖書によらざることある者は、末學の弊也。先生及其徒のあらはせる書世に行はる。これを考べし。

（高瀨惺軒博士編「三輪執齋」）

（室鳩巢と三宅石菴）

河口子深

藤樹先生（中江与右衛門惟命、近江の人。）陽明王氏之學を以て、榮利を脫落し、外慕を絕して德化自然に人を感動し、世これを近江の聖人と稱す。豪傑多く其門に出つ。淵源右衛門（京師に住して子孫あり。）中川權左衛門（備前に仕ふ。）等承り及ぶ處なり。其外此教に從ふ人聲名を求めざれば、傳へ聞事を得ざる者多からん。熊澤先生（熊澤次郎八息遊軒。）其傳を得て幸に一國ニ柄用せられ、功業天下の知るところ也。藤樹の餘澤遠しと謂べし。鳩巢先生嘗て大坂の老儒三宅石庵と（石庵は觀瀾先生三宅九十郎緝明字用晦之兄なり。觀瀾始は絅齋に學び、見識異同あつて交絕し、後に順庵門下となる。觀瀾歿後石庵惜く東來して其孤を撫す。時に鳩巢先生と會して此議あり。享保三年也。中井忠藏石菴の迹をつぐ。）諸子を評論し曰、百年來人の間然せざるは只藤樹一人也と。然れども其學術之謬あるに至ては又明に辨じて少しくも隱さず。彼は人物に就て論し、此は見識に依て辨ずるなり。

（「斯文源流」寬延三年八月九日後學河口子深記）

壬戌四月岡元軌稿抄出

小川村藤樹先生舊居講堂獨存。醫生志村某者守焉。云二先生門人之後生一。延レ上レ堂焚レ香拜二神主一。書曰藤樹先生神位。櫝面曰。先生姓中江。名原。字惟命。稱二顧軒一。号二藤樹先生一。慶安元年戊子八月廿五日卒。葬二邑東北玉琳寺一。堂可二二十筵一。堂後有レ室。先生所二燕息一。門墻庭階。亦不二狹隘一。而其所レ謂藤樹。乃

在養篁中矣。堂上有竹聯。(一)偶失其語。東匪翁所書。(三)郡守分部侯爲置祭田若干頃。以供歲時之用。嗚呼。先生之德之行。山斗仰之。在學者固其所也。乃至村甿野僮。尙以聖人如來稱者。自非至誠感人者。何以至於斯也哉。今也歿已百五十餘年。流芳遺韻。猶能令人自然起肅敬之心。去拜墓側有其嗣常省先生墓耳。夫先生孝性淳篤。宜子孫繩々。而至其嗣無(四)子。天道無知者非耶。噫因意王新建之說。行於本邦者。先生實爲首倡。其門人之杰有若熊蕃山學術吏業。人所皆知。而今世絕無傳其學者何也。

（松下伯季川見錄）

(一) 壬戌は享和二年なり。藤樹書院藏幅中に詩あり。岡崎元軌に作る。本編第四八頁參照。
(二) 神之格不可度。矧無常享。享于克誠。
(三) 祭田を以て分部侯の置くところとなすは誤。
(四) 其嗣無子とするは誤傳なり。系圖參照。（紫水）

（道德邵高）　角田九華

中江藤樹。道德邵高。雖野人婦女也。一見如飲醇酒。盎然而醉。當時呼曰近江聖人。

（「近世叢語」卷四文政壬午冬十月刊行）

（讀藤樹集）　摩島松南

偶讀藤樹集。每篇片言隻語。亦必歸道德。其氣象純粹可想也。然當時文運未開。行文之間。未免疎謬。詩亦直述其志。殊乏風致。余唯愛其明德首尾吟一絕。曰。原是太虛月一團。怒雷陰雨甚無端。西風雲霽後。原是太虛月一團。此篇或傳爲赤穗義士作者誤矣。（摩島長弘著「娛語」卷二天保三年壬辰自序）

翁問答　山崎美成

吾邦にてはじめて陽明王氏の學を唱へ心法を專に敎さとしけるは中江藤樹なり。近江の國の人にてそのころ

世人德を崇みて近江聖人とよべりといへり。その人物おもひやるべし。猶行狀のくはしきことは年譜あり。藤樹年まだわかかりしより心に守り身に行ふべき道理をもとめて釋敎を學びしが、その道人倫日用にたよりあらずとて儒道に入り遂に一家をなし敎へて倦ず勉めて怠らず迷ひをわきまへ德に入るべきことをむねとして老翁の物語に託し、かな書きに聖經の語意を和らげしるして翁問答といへり。其書に心學は凡夫より聖人に至る道なりとあり。かな書にはあれど實に類ひなき心法傳授の書ともいふべし。今心學といふものおこなはるれども、心法の學ははやく藤樹におこれりといふべし。心學の書くさ〴〵多かる中にこの翁問答に及ぶものなし。

（山崎美成著「世事百談」卷之三天保十四年刊行）

詩

謁二藤樹先生之墓一

孟子闢二義外之說一而曰。仁人心也。學問之道無レ他。求二其放心一而已矣。本　邦古來雖レ不レ乏二博士一而或雖二浮屠一或驚二於辭章一而未レ知二聖人之心學一。莫下足二以稱二眞儒一者上矣。我藤樹先生自レ幼穎悟不凡。篤レ志力レ學直繼二洙泗之正統一深達二陽明之精蘊一。視聽言動。非レ禮不レ爲焉。辭受取舍。非レ義不レ由焉。進說二道乎豫州牧守一退設二敎乎江西藤下一門富二豪傑一聲動二遠近一實可レ謂二本　邦儒宗一也。慶安戊子之秋以レ疾卒。年四十一。曰暴風倒二秀嶺貞松一乎。曰飛雲覆二千天之明月一乎。嗚呼。天不レ与レ道。何其促也。豈不レ痛哉。予謁二其墓一大喜二其開二聖學一。又歎二其不幸短命一。因綴二野詩一絕一謹抒二追慕之情一。遠藤謙室君。松井原泉丈各和レ之。併錄二于此一云。

安原貞平 再拜

古藤吹起卓眞風。　負レ笈擔レ囊如二水東一。
天產二玉芝一何易レ槁。　墳生二蕭艾一却芃々。

和之。　　　　謙　室

儒宗自作一家風。　脈々餘流西又東。　塚上茅庐人不見。　秋情長引草芃々。

同　　　　原　泉

學規多補國家風。　刻石令聞鳴日東。　天客才使後世恨。　馬鬣墳上草芃々。

（松下氏傳來本　滋賀縣高島郡本庄村大字南船木矢島源治氏藏）

望藤樹先生之閭有感　享保戊戌秋　　　　遠　藤　謙　室

陽明學脈依君東。　豪氣英才誰競雄。　家塾尙存江北地。　行人遙揖讓餘風。

（「書院日記」）

奥　田　士　亨

（百歲欽高風）

漫遊來此地。　百歲欽高風。　床上青氈古。　梁間絳帳空。
河汾誰續響。　日月德比隆。　沙汰秦灰冷。　六經道不窮。

（「書院日記」　享保十三年之條）

分　部　昌　命

（德彌敦）

英雄罷官隱孤邨。　千歲古藤今尙存。　宿昔遺文傳世處。　尋來堪感德彌敦。

（編者稿「稿藤樹先生景慕錄」）

拜藤樹先生神主恭賦　　　　岡　崎　元　軌　稽首

舉世稱其德。何唯化一郷。辭官專孝養。論道□(要?)精詳。
青草封塋域。紫藤陰講堂。悠悠百年後。景仰爲焚香。

(藤樹書院藏幅)

(後學可正冠)

雲華　釋　大　含

江翁絃誦地。十畝小川干。博愛餘藤樹。遺芳自杏壇。
明侯曾免賦。後學可正冠。我亦徘徊久。門墻子細看。

(編者稿「藤樹先生景慕錄」)

(知賢者)

鵬齋　龜　田　興

早辭羈官歸田野。日日談經藤樹下。不獨門生慕素風。郷閭亦自知賢者。

(編者稿「藤樹先生景慕錄」)

(江西千古一名賢)

杏坪　頼　惟　柔

提刀守冦丱童年。辭祿歸郷三百錢。百行皆從勇處得。江西千古一名賢。

(編者稿「藤樹先生景慕錄」)

讀先哲叢談

淡窓　廣　瀨　建

昔聞臧武仲。人喚爲聖明。出門値風雨。終失前知名。

虛譽泰山重。　忽復鴻毛輕。　名實有終始。　我敬中江生。
至理絕文字。　遺言化民氓。　綠林革其面。　黃耳無吠聲。
于今墳墓下。　芻蕘不敢行。　誰道佛菩薩。　獨存普濟情。
（廣瀨淡窓著「遠思樓詩鈔」卷下天保丁酉刊鐫）

（孝唯將一母）　　春草　後藤機

孝唯將一母。　忠不事二君。　積穀歲俸償。　上表吾情陳。
童齡讀大學。　知學在脩身。　宜哉父老語。　淡海出聖人。
勿尤信王氏。　行實我所忻。　蘋蘩何處薦。　太湖渺白雲。
（編者稿「藤樹先生景慕錄」）

辛巳秋仲過湖西小川村詣藤樹書院　　江都　佐藤坦

書堂既閱百星霜。　私淑吾來晉瓣香。　遺愛藤棚荒益古。　孤標松幹老愈蒼。
氣常和處春長燠。　月正霽時風又光。　今尙士民敦禮讓。　入疆不問識君鄉。
（藤樹書院藏幅）

過江州小河里弔藤樹先生遺跡　　大鹽中齋

姚江波及海之東。　即是先生開導功。　天意久令流派潤。　後生尋脈小河中。
朽木溪邊不朽名。　良知流出至今清。　前湖浪靜如圓鏡。　在世心容參兩晴。
院畔古藤花盡時。　泛湖來拜昔賢碑。　餘風有似比良雪。　流滅無人致此知。

過江州小河里弔藤樹先生遺跡

大鹽中齋眞蹟

景慕詩文集参照（大阪市 田中一宗氏蔵）

伊藤東涯詩

藤夫子行狀聞傳並湖學紀聞參照（藤樹書院藏）

三輪執齋書狀

景慕詩文集參照（近江　原田知近氏藏）

大學孝經將魯論。　泰州王末愚中王。　英材曾聽道之簡。　愚者亦醒知的良。
私淑西河該禮樂。　親傳東廓富文章。　一斑稱聖君還憾。　始有知音弔舊堂。』

藤樹先生之弟子之耳孫志郁周介主其書院事。警以此詩。又書以與松浦誠之。尊德性。道問學之功不可以不困勉也。是吾一家言哉。遊新建侯之門。劉氏曉亦後云爾。于時天保三壬辰夏六月五日洗心洞中軒。

（眞蹟舊泉州外山忠三氏所藏現大阪市北區旅籠町田中宗一氏藏幅）

訪德本堂賦排律以述感

甕江　川田　剛

拜跪羞蘋藻。　油然仰止情。　姚江心學傳。　淡海聖人名。
德遍薰州里。　門多出俊美。　故居新廟貌。　遺愛舊藤樹。
壁讀留類字。　額看賜號榮。　低回徒自愧。　章句稱儒生。（編者稿「藤樹先生景慕錄」）

讀藤樹先生傳

甕江　川田　剛

致仕侍慈母。　藹然孝子情。　姚江心學訣。　淡海聖人名。
志大期救世。　道尊能育英。　斯文今墜地。　孰不仰先生。（志村巳之助編「藤樹全書」）

有此作距今五十七年大正甲寅冬錄之

八十五叟　中洲　三島　毅

憶昔先賢住此間。　授徒養母掩柴門。　窓前滿地生青草。　堂背何邊種紫萱。

陽明洞古人稀至。　白鹿院源書尙存。　剪伐不加遺愛樹。　一棚藤蔓綠陰繁。
（藤樹書院藏幅）

藤樹中江先生

後學　三島　毅　拜草

良知倡敎化頑氓。　淡海聖人不負名。　一孝脩爲百行本。　王門曾子是先生。
（藤樹書院藏幅）

明治十七年八月過湖西書院

富岡百錬　拜草

當季曾罹祝融難。　今日書堂還舊觀。　知得先生文德洽。　士人捴做杏壇看。
（藤樹書院藏幅）

明治卅年九月廿五日藤樹先生二百五十年祭日謹賦鄙詩一章以奠

正七位　富岡百錬　拜

學有淵源德亦全。　且存遺澤兩餘年。　孔門諸子誰相比。　風采或同曾子賢。
（藤樹書院藏幅）

明治三十年九月二十五日擧藤樹先生二百五十年祭典江州藤樹書院賦此以代蘋藻

黃石八十七翁　岡本　迪

實踐躬行道德淳。　日東終古玉麒麟。　前三千歲有大聖。　後二百季無若人。
節操淸同喬嶽雪。　胷襟潤比太湖春。　流風遺韻今猶在。　豈啻鄉閭仰聖仁。
（藤樹書院藏幅）

明治三十年九月廿五日藤樹先生二百五十年祭賦レ此以奠

市村水香 拜具

碩學規模百世師。終年講レ道隱ニ茅茨一。誓レ天不レ仕義如レ此。事レ母雖レ貧歡盡レ之。
敎及ニ士民一致ニ禮讓一。化敷ニ閭里一重ニ威儀一。千秋崇祀仰ニ遺德一。猶以ニ聖人一傳ニ口碑一。

（藤樹書院藏幅）

奠ニ藤樹先生廟一

後學正五位 南摩綱紀 薰沐拜手時年八十一

明治三十六年四月六日

蛇谷峯東湖北郵　斂レ襟拜跪薦ニ蘋蘩一。德從ニ至孝一立ニ仁本一。學自ニ良知一窮ニ道源一。
遺廟蕭條留ニ古像一。老藤繚糾映ニ高軒一。俳徊懷レ舊不レ能レ去。如レ聽ニ當年笑語溫一。

（藤樹書院藏幅）

如レ春慰レ母笑談情

南條文雄

童子耳熟聖人名。六十今年始到レ黌。遺愛依然藤樹在。如レ春慰レ母笑談情。

（藤樹先生贈位奉告祭記念帖）

明治四十一年七月將レ訪ニ小川村藤樹先生書院一湖上作

正堂 東 敬 治

昔賢遺跡那邊尋。夢寐多年契濶深。今日幸欣償ニ宿願一。片帆截レ波度ニ湖心一。

明治四十一年七月過小川村謁藤樹書院
遂講孝經首章於其德本堂有感賦之

正堂　東敬治

敢謂抗顏上講筵。鄙心亦自慕先賢。無端立盡古藤下。風景依稀似昔年。

（藤樹書院藏幅）

訪藤樹書院賦所感

後學　圓了道人

江西書院絕塵埃。護境古藤猶未摧。隔世先生必應樂。有朋常自遠方來。

（藤樹書院藏幅）

次井上甫水韻

梅窓　杉浦重剛

郊村地僻隔塵埃。遺俗流風猶未催。（ママ）借問江西書院客。先生知己幾人來。

（藤樹書院藏幅）

大正己未十二月㊀洗心洞諸賢往拜藤樹先生遺跡
叟微恙不得隨行賦蕪詞一篇以贈

鈍知　九十三齡　岡郁達拜識

都鄙人民率贊揚。近江聖人不呼名。昭代瑞兆眞儒出。異端紛々敢抗衡。
玩弄詞章誇博洽。不知學脈在一誠。洗心洞派同盟士。景慕舊蹟結隊行。
書院攀階肅拜久。各陳所見極研精。祠堂僻在小川里。學德洋々溢四瀛。

（藤樹書院藏幅）

㊀十一月とあるは十月の誤なり。（紫水）

大正九年三月七日謹祝二藤樹先生三百十三回誕辰一

惺軒　高瀨武次郎

比叡降レ神生二偉人一。　終身大孝更無レ倫。　先生夙唱二良知學一。　遺德千春祝二誕辰一。

（滋賀縣高島郡青柳村青年團上小川支部藏幅）

贊

中江藤樹先生像贊

東澤瀉

終養留レ疏。　隱不レ違レ親。　閑居授レ徒。　學在二明倫一。
嶄然惣角。　所レ志已異。　溫乎老容。　厥德益粹。
顯微無レ間。　乃神乃精。　忘助雙斷。　自靈自明。
陸王傳燈。　心宗爲レ主。　鏡湖虛涵。　空月千古。

（「澤瀉先生全集」）

贊

梅窓　杉浦重剛

何要二後進贊一。　和光而同塵。　早已有二天爵一。　曰二近江聖人一。

（藤樹神社藏幅）

藤樹先生贊

後學　高瀨武次郎

嗚呼大哉近江聖人。　終身愛敬克孝克仁。　唱二良知學一發二揮道眞一。　後世仰慕崇祀爲レ神。

（藤樹神社藏幅）

頌詞

藤樹神社鎭座祭頌詞

高瀨武次郎

比良嶽北。琵琶湖邊。民俗淳樸。美哉小川。維天降聖。生吾儒先。
萬人極敬。祀爲神焉。新廟奕奕。巨棟直椽。於穆堂宇。允淸允堅。
四方來拜。可以致虔。維時大正。壬戌之年。五月念一。薫風拂田。
藤花垂垂。紫白爭妍。先生之靈。是日此遷。既居且安。芳躬臨筵。
厥薦是何。有俎有籩。醇酒既芳。鮮菜既全。鐘鼓喤々。簫管嘵然。
古舞洋々。妙合雅絃。肅雝和鳴。神聽靜專。嗚呼大哉。聖智既圓。
致知之訓。在於遺篇。庶幾自今。歷世萬千。感化益廣。教義長傳。
德澤無疆。浩如湧泉。謁者不絶。享祀無愆。

大正十一年五月二十一日　（原本藤樹神社藏）

和歌

弘化三年七月二十三日藤樹書院へ詣でてよめる　豐後龜齡軒　花月菴

さゝなみや近江ひじりを仰ぎ見れば
　いよ〳〵高し藤の下かげ

弘化四年八月廿五日二百年祭の折よみて奉りける　一井貞溫

君ませしそのいにしへに生れあはゞ
　つかへて道をとはましものを

名におへる跡のしるしの藤の樹に　安見宗愛

かけて昔の秋ぞしのばる

参拝の折よめる

玉鉾の道ある御世にあふみなる
ひじりのあとをけふ尋ね來つ　河村敏貫

中江藤樹

世々をへてくもらぬものは高島の
小川の水のかゞみなりけり　亘忠秋

藤

花の色もことにけだかくみゆるかな
めぐみの露にかゝる藤波　正二位公爵　山縣有朋

高しまのなかえにさける藤の花
色のゆかりの深くもあるかな　正二位伯爵　東久世通禧

あめのした香らぬ方もなかりけり
近江の海にあまる藤波　御歌所長從二位男爵　高崎正風

そのかみに君がめでにし藤の花
いまもさかえて世にかをりけり　正三位男爵　小畠美稻

くらゐ山高くのぼりてかをるなり
世にこえにけるふぢ波の花　典侍從三位　柳原愛子

いやひろくふみの林にかをりけり
御代にあふみのふぢなみの花　權典侍正四位　千種任子

芳しきにほひをよもにのこしけり
小川の里のふぢ波の花　權命婦正六位　生源寺伊佐雄

さゝ波のあふみひじりのかたみとや
　老木の藤の色あせずさく　御歌所寄人從五位　阪　正臣

くだちゆく人の心にかけてみん
　いろかもふかき藤波の花　御歌所參候從六位　萩原嚴雄

咲にほふゆかりの藤の花みても
　ひじりのあとを誰かあふがぬ　御歌所寄人正八位　大口鯛二

ぬけいでて世に高しまの藤の花
　雲井の風になびくはるかな　御歌所參候　須川信行

のどかなる御代にあふみの藤の花
　位山にも咲かゝりけり　從七位　猪熊夏樹

藤樹神社の鎭座祭を祝し奉りて

あたらしくいつきまつれる神垣に
　かけてかしこきふぢなみの花　高瀨勝子

皇后陛下藤樹神社へ御代參の節つゝしみてよめる

あなたふときさいのみやのみつかひの
　詣でましつるけふのみやしろ　小川鯛三

ひたすらに大御心をかしこみて
　仕へまつらん神の御前に　社掌　小川喜代藏

きさいの宮の御代拜をかしこみて

みめぐみの露もかゝりてふぢ波の
　花こそよゝにさきさかえけれ　上原信順

大正乙丑五月廿一日藤樹神社に詣てて

詣藤樹書院

佐藤一齋筆

藤樹中江先生

良知信教化頑詖洗滌聖人不負名一孝悌為百行本王門曾子是先生

三島中洲筆

獻詠和歌

（藤樹書院蔵）

常省先生鎗術免狀其他

常省先生鎗術免狀其他

對州 中江清齋氏所藏

中江清齋氏ハ實ニ藤樹先生ノ三男常省先生（中江彌三郎）七代ノ裔孫ニシテ現ニ對州鷄知ニ居住ス

（在朝鮮 嫡流中江勝氏藏）

（藤樹先生贈位報告記念帖所載）

大鹽中齋寄附狀

覺

一 拾五金

天保四癸巳

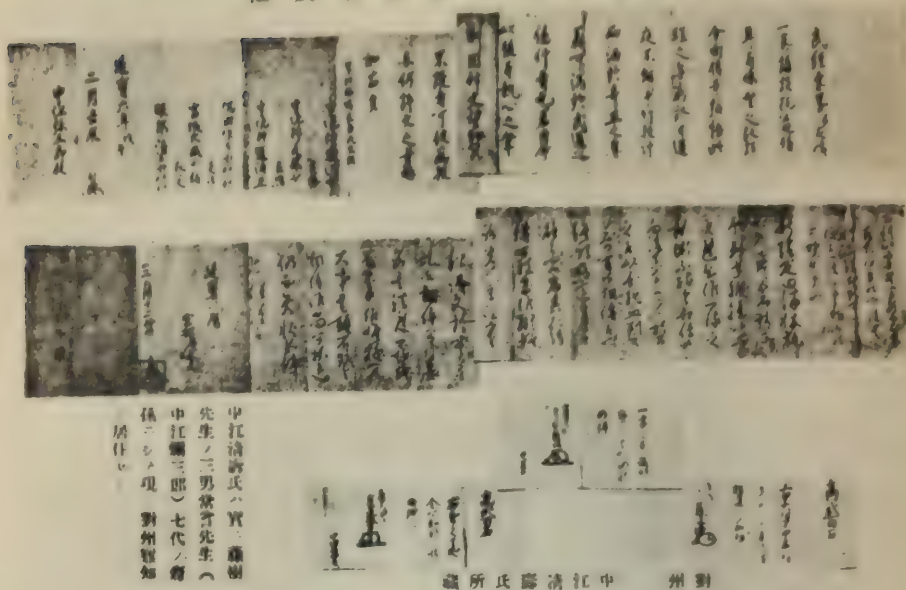
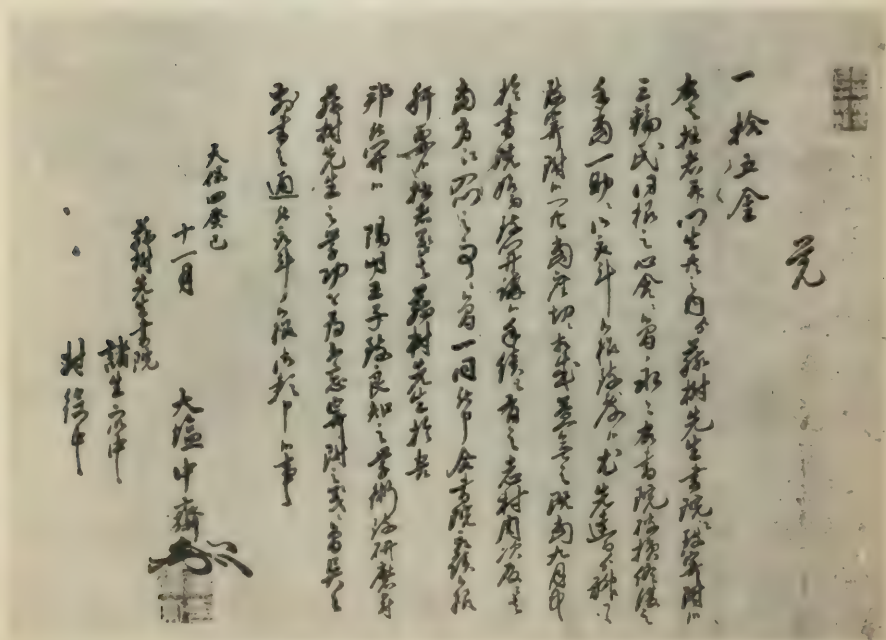
十一月 大塩中齋

藤樹先生書院

諸生中

村役中

（藤樹書院藏）

景慕詩文集（雜）參照

まさきたさにふりしきりたる雨にぬれて
にほふもゆかし藤のまさかり　中村啓次郎

今様歌

藤樹先生頌徳の歌　明治卅三年秋日起陽作　松浦辰男

大人(きみ)を淡海の聖ぞと云ふはうべなり。誠也。
後の世までも先の世に教へし道ぞ遺りける。
あふげば高き藤の花徳になびかぬ人ぞなき。
徳になびきし民草はいまも教を守る也。

大正九年三月七日藤樹先生三百十三回誕辰の折よめる　高瀬武次郎

千代萬代に仰ぐべき近江ひじりのかたみとて
老木の藤は今もなほゆかりの色ににほふなり。
教の恵いとふかく徳の光のかゞやける
近江ひじりのあれまし丶今日を祝はん諸共に。

俳句

藤樹先生二百年祭の擧げられし折

藤の實のはじける日なり秋の風　起蝶
尊さや霜おく藤の二百年　呂逸
參拜の折
藤ふりて徳本堂に風薫る　天地菴

百里來て拂ふ御墓や霜の朝　十湖

思ひがけぬ大きな秋の社かな　呑空

近江聖人

たゞらばや雪に聖の足の跡　小波

汝成汝我爲我

霞みけり松は自ら松にして　芋錢子

琵琶歌

近江聖人

元藤樹神社創立協賛會理事長　佐野眞次郎

學藝德行は千載なり　富貴顯達何かあらん　頃は慶長十三年
花の彌生の三月七日　名にし近江の高島郡　小川の里に呱々の聲を
擧げ玉ひける近江の聖人　中江藤樹先生は　げに人生の短くて
道藝の永劫なる理りを　わきまへ知りし人にこそ　そも聖人の生育や
如何にと跡を尋ぬれば　德川幕府開かれて　世は太平になりぬるも
まだ文敎の光りには　浴しかねたる時なれど　生れながらに備はれる
自然の品位は里人の　目をそばだつる計りなり　時しも祖父吉長は
加藤侯に仕へまつり　伯耆の米子にありけるが　或時たまの里歸り
まだいとけなきこの君の　起居動作見るにつけ　末頼母しく思し給ひ
惜しめる父母に請ひ受けて　己が子として養ひぬ　是より祖父に從ひて
大山の國米子より　後には伊豫の大洲まで　藩主の國替あるにつれ

共に居所を移されけり
尊き教へに感泣し
いそしみ勵み給ひける
夫れ孝は百行の本とかや
思ひは深き父母の
斯くて十四の秋祖母を失ひ
故郷にまします父上が
孝心深き師の君の
積る憂のかず／＼も
勵み給ふぞ健氣なる
亡き父君の後を弔ひ
詮方なくも其まゝに
大洲へ迎へ申さんと
心の底にかゝれるは
立ち居も空の心なり
辭任を願ひ出でられし
樹靜まらんと欲すれど風止まず
哀れ御いとま賜はれど
されば小川の里に歸りては
教への道を廣めしかば
其講堂は畏くも

御年十一の時にして
發憤興起せられつゝ
其有樣は中々に
古賢の教への數々を
限りしられぬ惠みこそ
一年の後には祖父に逝かれ
歸らぬ旅に立たれしと
心の中や如何ならん
身を玉にする賜と
漸く二十二歳の時
母を慰め參らせつ
言葉の數をつくしゝも
おのが任所に歸り來て
故郷に殘しゝ母が上を
遂に深くも意を決し
其玉章の言の葉は
子養はんと欲すれど親待たず
心のたけを云ひ殘し
只管母君に仕へまつり
慕ひ集ふ者數しれず
時の御帝の勅に依り

始めて大學の書を讀みて
只管文武の兩道に
世の常人にあらざりき
聞かるゝにつけ彌增さる
いとゞ心を動かしけめ
又もや十八歳の正月には
悲しき雁の音信に
思ひ遣るだに涙なり
心の駒に鞭打ちて
小川の里へ歸り來て
這度は母を伴ひて
母上うけがひ給はねば
君に忠勤を勵みつゝ
思ひめぐらす其時は
佃家老の手許まで
人のなさけの極みなり
切なる心根をくみ給ひ
大洲を逃れ出でられたり
其傍らに聖賢の
やがては門前市をなす
德本堂と名を賜ふ

晩年にいたりては陸王の　其學説を尊信し　良知の道を吾國に
始めて唱へ玉ひけり　學德一世に卓絶し　行ひ道にかなへども
剛健の氣また如何せん　悲しや宿痾に惱まされ　慶安元年八月廿五日
四十一歳を一期として　此世を神去り給ひけり　老いも若きも諸共に
萬民草地に伏して　悲しまざるぞなかりける

嗚呼先生の歿後二百七十有餘年　藤樹の御社嚴乎として造營の容を整へ
書院の藤花垂々として千歳の色を變へず　嗚呼偉大なり近江の聖人

清風滿レ座忘ニ炎蒸一　明月當レ天絶ニ世塵一
同志偶然乘レ興處　不レ知不レ識帝堯民

津々浦々の果までも　學びの園の神として　君が御德は長しへに
譽輝く高島や　藤樹神社といつきまつり　千歳ほぐこそ尊けれ
高き御德を琵琶の音に　語り繼ぐこそ畏けれ

雜

大鹽中齋寄附狀

落款

覺

一　拾五金

右は拙者並門生共之内ゟ藤樹先生書院ニ致ニ寄附一候。三輪氏同樣之心含ニ候間永々右書院破損修復之手當一助ニ御取立候樣致度候。尤先達而ゟ跡ゟ致ニ寄附一候へ共、當座切ニ相成益無レ之、既當九月中於ニ書院一始而致ニ開講一

候子細も有之、志村周次殿には當方へ入門之事に候間、一同申合書院取續候樣肝要候。拙者義は藤樹先生於吾邦被開候　陽明王子致良知之學術致研磨候に付、藤樹先生之學功を爲不忘寄附之義に候間、吳々前書之通被取斗候樣御賴申候事。

天保四癸巳十一月　　大鹽中齋　花押　印

藤樹先生書院

諸生衆中

村役中

（藤樹書院藏幅）

景慕詩文集　終

資料一覽表　解題並凡例

一、題して資料一覽表と言ふも、固より中心となれる資料のみを指し、茲には左記の數種を載す。

（一）「藤樹先生全書岡田氏本目錄」全一冊（底本のまゝに登載す）

（二）現存せる岡田氏本（中には整理本あり又未整理本もあり）によりて新に編成したる目次（編者が實物について調査したる結果を取纏めて記載す）

（三）藤樹先生全集篠原氏本によりて編成したる目次（同前）（附）岡田季誠氏編嘿軒文集目次第一次草稿本

以上三種は之を上中下三段に列記し、以て比較に便し、且つ其の出入を明かにす。篠原氏は年紀順に排列したれば、岡田氏の目次と前後せるもの頗る多し。篠原氏本には標目題注並に訓點あれども、今は省略に從ふ。（表中（　）の内は編者の加筆なり）

（四）藤樹先生の眞蹟

編纂委員同人の目睹したるものにつき、特記したるものゝ外は、眞蹟と斷定して誤なしと認めたるものゝみを記載す。されば世間一般に認めて眞蹟なりとなせるものにして猶且つ採らざるもの亦多し。又「記念帖」の文字を附したるものは、明治四十二年藤樹書院發行に係る「藤樹先生贈位奉告祭常省先生二百年祭記念帖」に載せらるゝを示す。（本全集中コロタイプ版に附したるものある時は、記念帖にあるものも別に之を示さず。）

一、資料の性質及び編纂上の處理に關しては第一冊卷頭の編纂總則並凡例及び各冊各篇首の解題並凡例に詳記したるも、更に直接資料の調査に便すべき箇所を全集中につきて指摘すれば、大略左の如し。

〔第一冊〕編纂總則二―一二、

七―八、七九―八、一一四―五、一六〇―一、二一四、二五九―六一、二九九―三〇一、三

九七―八、五〇一、五四九、五七七―八四、六二七、三三三、七〇七―一二、

〔第二冊〕五―八、五三三―四、九一、二〇九―一〇、二四三―四、二六三、二九一―四、三三七―六八

五七七、五五九―六三、

〔第三冊〕一―一四、三八―五二、二九七―三一五、四六七―七〇、五〇一―二、

〔第四冊〕一―四二、

〔第五冊〕一―五、四九―五一、六九―七〇、七七―八一、一一九、一二五―七、一三一―三、一五五―八、二〇六―一六、二四一―三、二四七以下各項に亙り（原據）として示したる參考資料其の他卽ち

二四七、二五一、二五二、二五七、二五九、二六三、二六七、二七〇、二七一、二七八、二七九、二八一、二八五、二八七、二八八―九一、三〇〇、三〇二、三〇三、三〇六、三〇八、三一六―七、三一九、三二三、三二六、三二八、三三四―七、三四一―四、三四六、

三五一―四、三七三―四、三九五―六、四一七―八、四一九―二〇、四五一―二、四六一―二、

一、尙一々の資料については卷之五十總索引によりて檢索せられたし。

昭和四年三月三十日　　編纂同人　謹識

藤樹先生全集　卷之四十九

資料一覽表（表中の○は底本見ゆる所に從ふ）

(一)「藤樹先生全書(岡田氏本)目錄」

藤樹先生全書目錄

卷之一

文集一　經解

○格物致知　三條

明明德　二條

明德　二條

艮其背　三條

艮背敵應

○誠意　三條

人心危道心微云々

浩然之氣

保合大和乃利貞

人之生也直罔之生幸而免（幸ノ上也字ヲ脫ス）

天下有道丘不与易

毋意必固我

神之格不可度思矧可射思

(二)藤樹先生全書(岡田氏本)目次

藤樹先生全書序（三輪執齋作）

藤樹先生全書目錄（岡田季誠氏晩年ノ筆）〔一册〕

卷之一

文集一　經解　年次不詳

格物致知　三條

誠意　三條

明明德　二條

明德　二條

艮其背　三條

艮背敵應

人心危道心微云々

浩然之氣

保合大和乃利貞

人之生也直罔之生幸而免（幸ノ上也字ヲ脫ス）

天下有道丘不與易

毋意毋必毋固毋我

神之格不可度思矧可射思

(三)藤樹先生全集(篠原氏本)目次

（＊は底本に存したる題註を本全集中に登載したるを示す）

藤樹先生全集卷第一（佚）（或詩集歟）

〔以上壹第一册〕

藤樹先生全集卷第二　文集一

攝津　篠原元博以禮　編

雜著

安昌弑玄同論＊

林氏剃髮受位辨＊

荅小川氏疑問＊（所疑似無意義）

明日又與仙（昨疑問來呈之時）

與小川子＊（從來語或人）

甲戌春答仙＊（疑問之書語不詳）

乙亥之春二月十六日謹賛　文宣王尊像此後諸篇在高島作

荅小川子＊（來諭所說得時措之宜）

丙子之冬十一月念五日謹賛　神農尊像

丁丑之夏析衷於小川子疑問＊（疑問所說

六十而耳順
大學三綱領
致中和
允執其中
愼獨　七條
自反　二條
仁者樂山知者樂水
愛敬　二條
至善
衣錦尙絅
爲己爲人
緡蠻（𦆿）黃鳥止于丘隅子曰云々
主忠信
知止
一貫
欽崇天道

卷之二
文集二　詩　附贊連句
寄友　壬申冬
癸酉之歲旦
舟中見水月有感
乙亥之歲旦
首尾吟二首（追加）
於洛偶成　乙亥春

六十而耳順
大學三綱領
致中和
允執其中
愼獨　七條
自反　二條
仁者樂山知者樂水
愛敬　二條
至善
衣錦尙絅
爲己爲人
緡蠻黃鳥止于丘隅子曰云々
主忠信
知止
一貫
欽崇天道
藏密

卷之二
文集一　詩　附贊聯句
寄友　壬申冬
癸酉之歲旦
舟中有水月有感　甲戌之冬
乙亥之歲旦
於洛偶成　乙亥之春
寄友　乙亥之秋

二

深爲有理）
析夷於小川子疑問＊（疑問之說甚無意義）全書作答小川氏質問拾遺同（本注有孟子萬章篇一經之善士章九字按此亦丁丑作）
原人＊
指敬圖說＊
明德圖說＊
藤樹規＊
學舍坐右戒＊
答小川子書＊（孟子梁惠王之下篇）
大上天尊大乙神經序＊
靈符疑解＊
附　內外八景＊
論坐禪＊
達磨贊　此爲止見全書而不審何年作但以其命意近論坐禪故書之於後云
壬午之夏析夷於仙疑問＊（論語述而篇文莫吾猶人也章）
答族弟好古質問＊（君子不離席而登九天之上）
原謙以通書餞熊澤子之行＊（不佞雖非溫故知新者）
送森村子＊（森村子遊原之門）
贈赤羽子＊（赤羽子志於道）
癸未之秋謹贊　文宣王之聖像　秋下一有玄之十四字遺稿止作贊文宣王聖像

三月盡（追加）
上巳對桃花有感（同前）
寄友
丙子之歳旦
送信古　丙子春
送藤田嶋川兩生
和朋友問寒歌
丁丑歳旦題草稿
送池田子
戊寅之鷄旦讀孝經偶成
偶成　戊寅春
送中川貞良
五福六極吟
論學
送吉田子
送崇保軒門弟治之（追加）
己卯之歳旦
送中村子
題竹生嶋
送森村子
庚辰之歳旦
題菅廟
辛巳之歳旦二首
參拜大神宮準祝詞
玄默敦牂之歳旦（壬午二字ヲ傍記ス）

丙子之歳旦
送信古
送藤田嶋川兩生
丁丑鷄旦題草稿
送池田子
戊寅鷄旦讀孝經偶成
偶成
送中川貞良
五福六極吟
論學
送吉田子
己卯之歳旦
送中村子
題竹生嶋
送森村子
庚辰之歳旦
題菅廟
辛巳之歳旦　二首
參拜大神宮準祝詞
壬午之歳旦
送谷川子
送熊澤子　壬午之夏
送中川謙叔
送横山子
癸未之歳旦

送佃子＊（佃子遠辱心友之訪）
送山田子＊（山田子遊於原之門）
贈國領子＊（古日大覺々于小覺）
書清水子卷＊（孝）
送中西子＊（中西子謬不吾鄙）
送森村子歸郷＊（親之愛其子仁也）（知止）
書森村子卷＊（謙）
送森村子＊（森村子會同志于講論者）
書野尻一利卷＊（知意）
書土橋子卷＊（大舜有天下 太極動而生陽）
艮其背不獲其身行其庭不見其人无咎＊

（以上第二册）

藤樹先生全集卷第三

文集二

彌津　篠原元博以禮　編

雜著

此卷所載文字大率未審何年作即隨得錄之至如其初晩分辨有稍可推知者輒妄不自揣且注之「云恐是初年作疑必出晩歳」庶以省覽者探討之勞矣凡卷中之文有屬辭成篇不著題目當冠以論若説者有或累數百言或廿片言隻行横渠所云心中有所開卽便劄記者有五四言爲句或韻或否者有答人問目者凡如此類不勝縷擧今一仍其舊不復區別者恐失其眞也若夫律以諸家文集之例可謂非深知先生之學者矣

（底本貼紙アリ「、、、此字書ヌク」ト見ユ亦同氏ノ筆ニ係ル）

知止章之辨＊

送谷川子（送ノ字初与字ニ作リ後送ニ改ム）
送熊澤二（同前）
送中川熊（同前）
送横山子（同前）
癸未之歲旦
和嶋川子詩　癸未秋
甲申之歲旦
乙酉之歲旦
丙戌之歲旦
偶成（追加）
同　（追加）
偶成　丙戌夏
題認字（追加）（認當ニ忍ニ作ルベシ）
丁亥之歲旦
又戲作
送加世子歸鄉（送ノ字初与字ニ作リ後送ニ改ム）
悼聟友玉井子早世
戊子歲旦
夏夜見月
明德首尾吟（刪除ノ符號附ラル）
死生吟（同前）
孔聖尊像贊　二章
神農尊像贊

酬友人嶋川子　癸未秋
甲申之歲旦
乙酉之歲旦
丙戌之歲旦
偶成　丙戌夏
丁亥之歲旦　二首
送加世子歸鄉
悼聟友玉井子早世
戊子之歲旦
夏夜見月　此以下之詩年次不詳
明德首尾吟
死生首尾吟
三月盡
上巳對桃花有感
和朋友問寒歌
送崇保軒門弟治之
偶成
同
題忍字
文宣王尊像贊　乙亥
二（追加）
神農尊像贊　丙子
擯薪翁贊
達磨贊
儒聯句

四

論養氣　按此篇語多不可曉但以有質問字攷之是必答門人問目者亦少作也諸本皆無篇名今且著以論養氣三字云（原質問）
い答人持敬說書＊（來論持敬之說略得其理）
は答原長秀才書＊（來書曰）
に代門人答西銘疑義＊（熊澤子質問）
ろ答中川貞良甫書＊闕
は依丸藥示工夫＊（底本貼紙アリ、標目ヲ連書シ且いろはにほノ字ヲ朱書シ此間次第如此御心得置下さるべくいト記ス）
五常＊（德性有五常）
愛敬＊（性譬如飴餅）
習＊（下貽己逍）
格物致知解＊（格者正也）
又＊（物者事也）
誠意＊（誠者本心之實德）
誠意＊（這是善惡之關　一而不貳）
致知格物　性命雙修妙術＊
明明德＊（明德之全體）
又＊（譬如平地）
明德（本與大虛同體）
又（坎離交泰）
艮其背不獲其身行其庭不見其人无咎＊（艮者居其所而不遷之意）
又＊（背者中之象）（薮原氏貼紙記曰、此篇當移入第一條末）

撥蘇銘賛（追加）
達磨賛（同前）
儒聯句
漢和聯句
倭漢聯句
隔句
又
又
卷之三
文集三　文
三　原人　寛永十年戊寅夏（削除ノ符號附セラル）
一　安昌弑玄同論
二　林氏剃髮受位辨
四　藤樹槼
五　學舍坐右戒
七　論坐禪
六　大乙神經序
卷之四
文集四　書
○○答中川貞良甫（削除）
答小川子疑問　壬申
二　丙子
三　丁丑
四　同

漢倭聯句
倭漢聯句
隔句
又
又
卷之三
文集三　文
安昌弑玄同論　庚午
林氏剃髮受位辨　辛未
藤樹槼　己卯
學舍坐右戒
大乙神經序　庚辰
論坐禪　辛巳
卷之四
文集四　書
答小川子疑問　壬申夏
明日又與仙
答小川子　丙子夏
折衷於小川子疑問
答小川子質問　丁丑
答小川子
答小川子疑問　壬午夏

又（右千聖心法之秘妙）
艮背敵應
人心惟危道心惟微惟精惟一允執厥中
保合大和乃利貞
大學之道在明々德在親民在止於至善
致中和＊
允執厥中
愼獨（此是格物致知之靈樞）
又＊（心之良知）
又（大虛廖廓之皇上帝）
又（這箇是入聖之正路）
又（此是入聖通神之大竅）
又（古日仰走者躓）
又（太陽一出）
自反（焦火即滅）
又＊（僅願乎外）
仁者樂山智者樂水＊
爲己爲人
主忠信
知止
一貫
欽崇天道
當下良知＊
孝（者箇是人根）
又（這箇是人與禽獸所由分也）

五　己卯
六　壬午
○与仙（上ノ○ハ此題目ヲ卷首ニ入ルベキヲ示セルモノナラン）
答質問　不知爲誰人
○答中川貞良甫　甲戌（削除）
餞熊澤子之行
送森村子
二　丙戌
三
書森村子卷　丙戌
送赤羽子（送字初与字ニ作リ後送ニ改ム）
送佃子　甲申（同前）
送山田子　甲申（追加）
送國領子　乙酉（送ノ字前ニ同ジ）
与淸水子　乙酉
送中西子　乙酉（送ノ字前ニ同ジ）
書森村氏卷（削除ノ符號附セラル）
書土橋子卷　二條丁亥（二條ノ字削除）
又
書野尻一利卷
答書　不知爲誰人
卷之五
文集五　雜著
孝　七條

答質問　不知爲誰人
餞熊澤子之行
送森村子
送森村氏歸郷　丙戌
書森村子卷
送森村子
送赤羽子
送佃子　甲申
送山田子　甲申秋
送國領子　乙酉
書淸水子卷　乙酉
送中西子　乙酉之夏
書土橋氏卷　丁亥春
又
書野尻一利卷　丁亥春
答書　不知爲誰人
卷之五
文集五　雜著　年次不詳
孝　八條

六
又＊（孤子似無養親之事）
又（此是三才之至德要道）
又（三才一貫之端的）
又（道筒是儒家第一之心法也）
又＊（太虛之神明）
又＊（援神契曰）
心（心坎離性中神水神火）
又（世寶道徼）
又（心坎神水心離神火）
又（得此名者）
天君＊
中（天地萬物）
又（道字訓解）
又（道是神明不測之靈性）
又（至誠無息之殊稱）
道（道非外）
又（人之於道）
樂（世界本來樂土也）
又（毋意毋必毋固毋我）
又（如好好色）
又（心之本體）
又＊（此是道心自有之光景）
又（學者向樂中求樂）
獨樂（學而不入得道裡）
又（道心本自有獨樂）

心
天君
中
道
樂
獨樂
意
忍　三條
學　二條
仁
五常　二條
敬
謙
虛
夢
惑悟
習
名
欲
易簡
藏密（削除）
大勇
藥
吾
忘

心（四條）
天君
中（四條）
道（二條）
樂
獨樂
意
忍　三條
學　二條
仁
五常　二條
敬
謙
虛
夢
惑悟
習
名
欲（追加）
易簡
大勇
藥
后丸藥示工夫（此ノ項大勇ト藥トノ間ニ追記挿入。且ツ后ノ字附セラル、今改メ從フ）

意
忍＊（這箇是以道制欲之勇心）
又（善用此字）
又（這字从刃从心）
學（學者覺也）
仁
五常（德愛曰仁）
敬
謙
虛
夢
惑悟
名
欲
易簡
大勇
藥
吾
忘
立志
志（志有眞假）
又＊（志者氣之帥也）
聖經
經傳
賓

立志（追加）
志
經傳
聖經
賓
一貫（削除）
嘿識（追加）
莊子曰顏淵曰云々章
援神契……章
易字解
天地人万物解
大虛天地人物解
灵符疑解
卷之六
　經解成書　一
　孝經啓蒙附翼傳　寛永十八年辛巳三十四
　歲秋（八ヲ九ニ辛巳ヲ壬午ニ四ヲ五ニ改
　メラル）
卷之七
　經解成書　二
　鄕黨翼傳　寛永十六年己卯三十二歲秋
卷之八
　經解成書　三
　鄕黨啓蒙翼傳（此條下年譜三十二歲ノ條
　ヲ引ケル注記アリ）

吾
忘
立志
志
聖經
經傳
賓
嘿識
莊子曰顏淵曰云々
易字
天地
大虛天地人物
靈符疑解
　　　　　　　　　　（以上一册）
（以上ハ「整理本」第一册卷頭目次ニ依
ル）（整理本未整理本共三册現存）
卷之八（現存ノ書ニ示サレタルマヽ）
　經解成書一
　孝經啓蒙　附首章宗意（初稿本）（存）
　　　　　　　　　　（一册）
（鄕黨翼傳）（佚）
四書啓蒙論語翼傳（存）
　　　　　　　　　　（一册）

謙意
嘿識*
題莊子語舊無此字
　今且著之
易
天地
大虛天地人物
子曰人之生也直罔之生也幸而免
子曰天下有道丘不與易也
子曰毋意毋必毋固毋我
神之格思不可度思矧可射思
子曰六十而耳順
愛敬（春到人間無棄物）
至善
衣錦尙絅
緡蠻黃鳥止丘隅子曰云云
藏密
四十二病*
經書摘語*（用九見群龍）
又*（定　寂然不動）
又*（太極動而生陽）
雜說*
楊貴妃油銘*
　　　　　　　　　　（以上第三册）

卷之九
經解成書　四
孝經考
大學考
四書考
讀四書法
卷之十
圖說　一
四書合一圖說（追加）
大學朱子序圖說
五性圖說
明德圖說
持敬圖說　寬永十五年戊寅夏
原人（追加）
卷之十一
倭文　一　經解　一
補拙　解宋本
大學考
同　蒙註
卷之十二
倭文　二　經解　二
學庸論要語解
卷之十三

首經考（存）
（孝經考）（存）　〔以上一冊〕
（大學考）（存）
（四書考）（存）
（讀四書法）（佚）
（四書合一圖說）（佚）
（大學朱子序圖說）（佚）
（五性圖說）（存）
（明德圖說）（存）　〔一冊〕
（持敬圖說）（存）
（原人）（佚）
（補拙　解宋本）（佚）
（大學考）（佚）
（大學蒙註）（佚）
（學庸論要語解）（佚）
卷之十二（現存ノ書ニ示サレタルマヽ）

藤樹先生全集卷第四　文集三
攝津　筱原元博以禮　編
雜著
聖學圖說 止見心學文集疑非先生筆故刪去
首經考＊
孝經小學合一圖說 止見全書岡田氏本
孝經考＊
藤樹先生全集卷第五　文集四
攝津　筱原元博以禮　編
雜著
大學考（漢文）
四書考
讀四書法
四書合一圖說
大學朱子序圖說＊
大學序宗旨圖＊
五性圖說　〔以上第四冊〕
藤樹先生全集卷第六　經解一
攝津　筱原元博以禮　編
論語鄉黨翼傳＊　〔以上第五冊〕
藤樹先生全集卷第七　經解二
攝津　筱原元博以禮　編
孝經啓蒙＊

倭文　三　文集　一

倭歌

癸酉之秋答友
於故郷偶成寄洛友
題明徳首尾吟(追加)
題死生首尾吟(同前)
和加藤子歌
送貞良歸郷十八首
題不知在首　丙戌冬
題意必固我　丁亥春
超脱閒附
送福本子
丁亥秋代諸生答淵子之寄歌
題人間世　三首
送戸田子　六首
倭歌拾遺(削除)
夏夜見月(追加)
題知本
題明徳
題時
超脱利害心
毋自欺
知恥
貞而不諒
大勇

倭文集　一

倭歌

答友
於故郷偶成以寄洛友　乙亥之夏
和加藤子歌　丙子之春
送中川貞良歸郷　丙戌之秋
題しらす　丙戌之冬
意必固我　丁亥春
超脱陰陽　丁亥夏
送福本子　丁亥秋
答淵子之寄歌　丁亥秋(追加)
人間世　丁亥
送戸田子
明徳首尾吟　此以下失年紀
死生首尾吟
知本則如盪舟逐末則事々皆陸沉
明徳之應接如明鏡照万形
夏夜見月
題時
吟超脱利害心
毋自欺
知恥
貞而不諒
大勇
有所イ感時花濺涙　此歌可除古歌なり

一〇

藤樹先生全集巻第八　(以上第六册)
經解三
攝津　篠原元博以禮　編
大學考*(以下國文)
大學解*

藤樹先生全集巻第九
經解四
攝津　篠原元博以禮　編
中庸解*
(以上第七册)

藤樹先生全集巻第十
經解五
攝津　篠原元博以禮　編
論語解*
(以上第八册)

藤樹先生全集巻第十一
國字書簡
攝津　篠原元博以禮　編
原序*
書藤樹先生書簡雜著端凡十二則亦萬年著はせり
國字書簡
上細某*(今度私御暇)
甲戌冬答友人寄旅愁倭文*
答小川子*(讀書なば)
與國領大*(御志うはの空)
與國領大*(彼人今程)
答國領子(御取入)
答國領(貴樣心術)

有所
欲明明徳於天下
題凡情
題頑空
自反（追加）
安宅　二首（同前）
愼獨（同前）
題不知　十三首（三ノ字初八ニ作リ後
三ニ改ム）
題自反（削除）
義經軍歌追加
巻之十四（十四初二十五ニ作リ後十四ニ改ム）
倭文四　文集　二
倭書
答友寄旅愁倭文書　甲戌冬
答國領太（答字初メ与ニ作リ後答ニ改
ム）
二
三（初与國領子ニ作リ後三ニ改ム）
答谷川寅
答岡村子
二
三

明明徳於天下
名利
凡情
頑空
自反
安宅
愼獨
一念入微
弄丸
止於至善
良知無知無不知
題しらず
源義經軍歌追加　（以上一册）
巻之十三（十三初二十ニ作リ後十三ニ改ム）
倭文集　二
倭書
答友寄旅愁倭文書　寛永十一年甲戌冬年廿七
答國領太（答初メ與ニ作リ後答ニ改ム）
答谷川子
答國領太
答國領太（太字初子ニ作リ後朱書ニテ
太ニ改ム）
與國領子
答谷川寅
答岡村子

與國領子（今程御懈怠）
答國領子＊（御志進申旨）
與谷川寅＊（八幡濱にて）
答谷川寅＊（工夫間斷のみ）
與谷川氏＊（或人御志立候由）
答岡村子（心喪の儀）
答岡村子（御志うはの空）
答岡村子（志だに御勵）
與岡村子（御在江戸）
與岡村子（外の願を）
與岡村氏（卯月兩通）
答岡村氏＊（進脩の功）
答垂井子＊（彼人の物語）
答佃叔＊（色念）
答佃叔＊（色々の妨）
答佃叔＊（小川子への）
答佃叔＊（同志議論の）
答佃叔＊（講論之砌）
答佃叔萬年本註一作佃子〇按原本雜記共作報佃子（御受用底）
答佃叔　原本作答佃子〇按ずるに此已下
の三書雜記逸せり（御志の立やう）
答佃叔（忍の字）
答佃叔（委曲なる貴札）
答田邊子（心法の取入）
答田邊（御持病）

四五（追加）
答佃叔
与岡村子（削除）
二
三
四五六七（追加）
答小川子
答田邉子
二
与横山子
答森村子
二
三（追加）
答山田權
答佃子（削除ノ符號附セラル）
二　（同前）
三　（同前）
答國領子（削除）
答早藤子
答中西子
答淵源
答清水子
答中村子
二　（追加）
送中川貞良甫歸鄕　丙戌秋

答岡村子　二
答岡村子　三
答岡村子　四
答岡村子　五
答佃叔
答佃叔　二
答佃叔　三
答佃叔　（叔字初子ニ作リ後朱書ニテ叔ニ改ム、番號ヲ示ス數字ナシ）
答佃叔（同前）
答佃叔（同前）
答佃叔
答小川子
答田邉子
答田邉子　二
與横山子
答森村小　（小字初子ニ作リ後朱書ニテ小ニ改ム）
答森村子　二（削除）
答森村小　三
答山田權
答早藤子
答中西子
答淵源　イに諸生に代て
答清水子

與横山子（其許令恙上）
答森村子（心法の取入）
答森村子（工夫間斷）
答森村氏＊（學問の工夫）
報森村小＊（心術病痛）
答森村長＊（先破除世間之情）
答早藤子（心法の把柄）
與中村子＊（中西氏への）
答中村子＊（知止之功）
答一尾＊（未能章顏）
答一尾（善にうつりがたく）
答中西常慶＊（御病氣再發）
答淵宗誠＊（奈良茶の）
答清水季格＊（舊習に）
與吉田子＊（御志厚）
與吉田新＊（御受用底）
答山田權＊（心術の）
報淺野子（心術）
與熊澤子（淵子お下候條）
與熊澤二＊（頃來）
答清水十　以下竝雜記本（御受用底）にもらせり
答中川貞良老母＊（居生の事）
與牛原氏老母　此已下書たゞ書簡續集に載す諸本竝にもらせり（平生の御心）
自間瀨氏育女之歎之由にて求予弁正＊

与森村子（刪除）
與吉田子
答一尾子
二
答中川貞良老母
與國領子（刪除ノ符號附セラル）
与國領子（追加）
答（同前）
与吉田新
報森村小（刪除）
送岡村子（刪除ノ符號附セラル）
二（同前）
報佃子（同前）
報淺野子
答垂井子
與戸田子
送岡村子　戊子夏
与中村重（刪除ノ符號附セラル）
与土肥子（同前）
巻之十五
倭文五　文集　三
雜著
日用工程（追加）
性氣理物論（同前）
戒書後

答中村重（重字初子ニ作リ後朱書ニテ重ニ改ム）
答中村重
答吉田新（新字初子ニ作リ後朱書ニテ重ニ改ム）
答吉田新
答一尾子
答一尾子　二
答中川貞良老母
答淺野子
答垂井子
與池田子
送岡村子　戊子夏（以上下文雜著ト合シテ一册）
藤樹先生倭文書簡拾遺
答木下氏
答田中氏
答田中氏　二
自間瀬氏育女之歌の由にて求予斧正
与牛原氏老母
寄友　辛丑之秋
答田中氏
答中山氏
答岡村氏　（以上一册）
藤樹先生全書巻之（巻數ヲ示スベキ數字ナシ）

答木下氏（向より）（よしあしさ思ふ心）
答田中氏（他の非た）
又（靜坐は）
又（色欲）
答中山氏（師友の）
與土肥子＊（性は）
與富貞庵＊（此道や）
與法勝寺＊（今月十六日之）
與某氏＊（學問工夫）
答中川貞良＊（當月朔）
答中孫右＊（中小森）
與池田某＊（あまり久布）
附　熊澤伯繼書＊　（以上第九册）
藤樹先生全集巻第十二　國字雜著上
攝津　筱原元博以禮　編
朱子格物説解＊
辛丑之秋寄友＊
與森村子日用工程　〇此已下並に全書諸本書簡原本及萬年定本に見えたり
送岡村子＊（岡村子仕途に）
與中川子＊
送戸田子＊
萬物皆備於我矣反身而誠樂莫大焉
立志

女訓

春風並陰騭解

卷之十六

倭文　六

成書　一

鑑草上

卷之十七

倭文　七

成書　二

鑑草下（下字初ニニ作リ後下ニ改ム）

卷之十八（此ヨリ卷之二十一ニ至ル迄削除ノ筆加ヘラル、蓋シ最初鑑草ヲ一ヨリ六迄ニ分類シタルモノヲ後上下二卷ニ分チタルニ由ル）

倭文　八　成書　三（削除）

鑑草　三（同前）

卷之十九（同前）

倭文　九　成書　四（同前）

鑑草　四（同前）

卷之二十（同前）

倭文集　三

雜著　失年紀

（大全朱子曰格物云々）

戒書履

女訓

心氣理惣論

日用工程　丙戌冬（上記倭書ト合ス）

春風並陰騭解（存）　〔一册〕

（鑑草上）（佚）

（鑑草下）（佚）

信道不篤焉能爲有焉能爲亡

存養省察

女訓＊

戒書履×

藤樹先生全集卷第十三　國字雜著下

攝津　後原元博以寧　編

春風＊

陰騭＊

辨惑立志

陰騭解

種子方

親親仁民愛物　〔以上第十册〕

藤樹先生全集卷第十四　（佚）

藤樹先生全集卷第十五　（佚）

藤樹先生全集卷第十六　（佚）

藤樹先生全集卷第十七　（佚）〔以上册數不明〕

藤樹先生全集附錄目次

藤樹全書序　執齋下同

同國字序

拔本塞源論抄序

祭藤樹先生文　栗鄕下同

大洲止善書院明倫堂成告陽明藤樹二先生文

答執齋文

藤樹先生百年忌日說

與湖西同志書

倭文　十　成書　五（同前）
鑑草　五（同前）
卷之二十一　成書　六（同前）
倭文　十一（同前）
鑑草　六（同前）
卷之十八　成書　七（十八初二十二ニ作リ後十八ニ改ム）
倭文　八（八ノ字初十二ニ作リ後八ニ改ム）
翁問答上　寛永十七年庚辰三十三歳秋
卷之十九（十九初二十三ニ作リ後十九ニ改ム）　（翁問答上）（佚）
倭文　九（九ノ字初十三ニ作リ後九ニ改ム）
翁問答下　（翁問答下）（佚）
卷之二十（二十初二十四ニ作リ後二十ニ改ム）
醫書　一
捷徑醫筌　一　寛永十五年秋（徑ノ字經ニ作ル、今訂ス、下同ジ）　（捷徑醫筌　一）（佚）
卷之二十一（一ノ字初五ニ作リ後一ニ改ム）
醫書　二
捷徑醫筌　二　（捷徑醫筌　二）（佚）
卷之二十二（二ノ字初六ニ作リ後二ニ改ム）
醫書　三
捷徑醫筌　三　（捷徑醫筌　三）（佚）
卷之二十三（三ノ字初七ニ作リ後三ニ改ム）
醫書　四
捷徑醫筌　四　（捷徑醫筌　四）（佚）

右上卷（編名無シ、今湖學雜纂ト名ヅク、此ノ目次ハ卷頭載スル所ニ據ル）
（以上一冊）
湖學紀聞（第五冊三七五―六頁内容細目參照）
右下卷
（以上一冊）
（以上十一冊現存）

（附）
岡田季誠編　嘿軒文集目次
經書註解類
○孝經啓蒙　○鄕黨啓蒙　○同翼傳
抄之類
○大學中庸論語要語解
作無類
○孝經考　○大學四書考　○四書合一圖説　○明德圖　○太乙神經序疑解　○書翰　○翁問答
○鑑草　○春風並陰騭
醫書類
○醫筌　○神方奇術　○日用要方　○南針
○年譜　○草稿（詩文語賛 和歌鄕詞）

巻之二十四（四ノ字初八ニ作リ後四ニ改ム）
醫書　五
捷徑醫筌　五
巻之二十五（五ノ字初九ニ作リ後五ニ改ム）
醫書　六
捷徑醫筌　六
巻之二十六（二十六初三十ニ作リ後二十六ニ改ム）
醫書　七
南針上　寛永二十年癸未三十六歳
巻之二十七（二十七初三十一ニ作リ後二十七ニ改ム）
醫書　八
南針中
巻之二十八（二十八初三十二ニ作リ後二十八ニ改ム）
醫書　九
南針下
巻之二十九（二十九初三十三ニ作リ後二十九ニ改ム）
醫書　十
神方奇術附五臓圖正保元年甲申三十七歳
巻之三十（三十初三十四ニ作リ後三十ニ改ム）
醫書　十一
日用要方

（捷徑醫筌　五）（佚）
（捷徑醫筌　六）（佚）
（南針上）（佚）
（南針中）（佚）
（南針下）（佚）
巻之三十一
外集醫書十
神方奇術（存）　（一册）
（日用要方）（佚）

巻之三十一（一初五ニ作リ後一ニ改ム）

附録

年譜

藤樹先生全書

文集序（岡田敬序）

〔以上全一冊〕

巻之三十三

附録

藤樹先生年譜（存）　〔一冊〕

（四）藤樹先生の眞蹟

○與倚松庵（茶事に關する書翰）　第二冊　五三六―七（五四七）

京都市左京區岡崎入江町八二　廣瀨俊吉氏

○池田子に贈れる書翰（摹刻）　第二冊四三〇―一（四四〇）

愛媛縣郡中町　松村鹿太郎氏より藤樹書院に寄贈其の他

○與池田子　第二冊（五四〇）（記念帖）

愛媛縣喜多郡大洲町　村上長次郎氏

○一尾小太におくれる書翰　第二冊四三〇―一（四三三）

靜岡縣新居町　岡部讓氏

○詠　草　第二冊三三四―五（三三〇、三三三、三三九、三三一）

一、委員　小川喜代藏氏

○詠草（寫）　第二冊三三四―五（三三四―六）

（排列は五十音順による、濁音は同列中の末尾におく）（初の數字はコロタイプ版、（　）内の數字は正文の所在を示す）

○易　卦　圖　第一冊七〇七―三

滋賀縣高島郡川上村大字濱分　岩佐定一氏

藤　樹　書　院

○大洲藩家老大橋作右衞門におくれる書翰（答作右）

第二冊五三六―七（五三七）

愛媛縣郡中町　栗田與三郎氏

○與岡七兵　第二冊（五四九）（記念帖）

滋賀縣高島郡青柳村大字上小川　中江伊喜知氏

○（傳說）翁問答原稿斷片　第三冊五六―七　藤　樹　書　院

○翁問答古寫本斷片　第三冊五六―七

滋賀縣高島郡大溝町　中村德通氏

○思ひきやの歌（詠草を見よ）　第二冊（三三〇）

○晦養軒におくれる書翰　第二冊四九二—三（五三四）
名古屋市東區餅屋町三丁目七　加藤芳治氏

○格物致知解　第一冊　卷首（九）　藤樹神社々寶

○格物致知（性命雙修妙術）　第一冊四六—七（一三）
（東都大震災燒失）　舊大洲藩主子爵　加藤泰秋氏

○假名書き孝經　（眞蹟折本）　第二冊二六二—三（二四七）　藤樹書院

○學舍坐右戒　第一冊二三四—五（一二五）　愛媛縣郡中町　宮内環氏

○學術便蒙　第一冊二二〇—一（二四九）　委員　小川喜代藏氏

○歸鄉豫報の文　第二冊四九一—三（四九二）
滋賀縣長濱在南方　田中四一良氏

○送熊澤子序（序）　第一冊（九二）（記念帖）
滋賀縣大津市　郁田六之助氏

○倭熊澤子（印本）第一冊二二〇—一（一七三）（「六論衍義大意」所載）

○熊澤了介におくれる書翰　第二冊五五四—五（五五一）
京都府宇治郡醍醐村大字三寶院　大溪博明氏

○熊澤了介におくれる書翰　第二冊五五四—五（五五二）
山形縣鶴岡町　角田俊治氏

○小島七郎右衛門歸鄉豫報の書翰（歸鄉豫報の文を見よ）

第二冊（四九一）

○孝經（自文眞蹟折本、第二冊二四六—七（二四七欄外））　藤樹書院

○孝經啓蒙（敬寫）（記念帖）　藤樹書院

○附點孝弟論　第一冊四六—七（四七）
愛媛縣大洲町　近藤規矩丸氏

○黃鳥畫贊（緋襟黃鳥）　第一冊四六—七（三四）
愛媛縣新谷町　河内宇十郎氏

○孔夫子尊號（至聖文宣王）　第一冊九四—五
岡山市　池田公爵家別邸

○好問（詠草を見よ）　第二冊（三一三）

○吾（ワレを見よ）　第一冊（一三九）

○五性圖說　第一冊六四—五（六四二）　委員　小川喜代藏氏

○答作右（大洲藩家老大橋作右衛門を見よ）　第二冊（五三七）

○四書合一圖說（敬寫本）　第一冊五七六—七（六三三）　委員　小川喜代藏氏

○至聖文宣王（孔夫子尊號を見よ）

○捷徑醫筌に關する書翰（與某氏二）　第二冊五五六—七（五四八）
京都市左京區岡崎入江町八二　廣瀨俊吉氏

○（伊藤公爵寄贈）心畫孝經（孝經及假名書孝經を見よ）

○辛巳歳旦詩　第一册九四—五（八九）
大阪市北區旅籠町　田中宗一氏

○愼獨（此是格物致知之[illegible]楷）　第一册　卷首（一九）　藤樹神社々寶

○愼獨（太虛寥廓之皇上帝）　第一册四六—七（三一）
一、滋賀縣滋賀郡伊香立村大字途中　藤田　信好氏
一、副　本　委員　小川喜代藏氏

○（丙子之冬十一月念五日）神農像賛　第一册（一〇三）
滋賀縣高島郡本庄村大字北船木　松下巖之進氏舊藏
（今其の人亡く其家絶え眞蹟亦見るに由なし）

○神方奇術（記念帖）
滋賀縣高島郡本庄村大字北船木　松下巖之進氏

○持敬圖說反解　第一册六七四—五（六八四、六八九）
滋賀縣高島郡青柳村大字青柳　岡田元誠氏

○自反（詠草を見よ）　第二册（三二一）

○熟語解　第二册五九〇—一（五八七）
兵庫縣武庫郡打出濱　森下博氏

○熟語解　第二册五九〇—一（五八八）
滋賀縣東淺井郡小谷村　佐野眞次郎氏

○熟語解　第二册五九〇—一（五九〇）
大阪市外石切町　吉川又平氏

○熟語解　第二册五九〇—一（五九一）三重縣名賀郡藏持村　岸本千秋氏

○熟語解　第二册五九〇—一（五九二）　委員　小川喜代藏氏

○熟語解（記念帖）
滋賀縣高島郡本庄村大字北船木　松下巖之進氏

○壬午之歳旦（愚竊有ㇾ志㆓于心學㆒）　第一册九四—五（九二）
滋賀縣高島郡水尾村　万木利一氏

○誠意（一而不貳）　第一册　卷首（一四）　藤樹神社々寶

○誠意（誠者本心之實體）（記念帖）　第一册（一三）
（藤樹先生を語る參照）　一、下總　坂本左狂氏
（中村重を見よ）　一、滋賀縣坂田郡長濱町　下鄕共濟會

○聖經　第一册　卷首（二四一）　藤樹神社々寶

○谷勘兵衞に與へられたる藤樹先生眞筆書狀第五册
三〇〇—三〇一（第二册五〇一）　雜誌陽明學第百二十八號所載

○與㆓谷川氏㆒　第二册（四九九）　雜誌陽明學第百二十八號所載
會津北鄕藤樹學派所傳　東京　故　齋藤一馬氏

○送㆓谷川子㆒（仲子曰云々）　第一册九四—五（九一）
滋賀縣高島郡水尾村　万木利一氏

○樂しみもまた苦しみもの歌（詠草を見よ）第一册（三一九）

○大學解　第二册八—九（一三）　藤　樹　書　院

○大學啓蒙（斷片）　第一册二一〇—一一（二五三）

滋賀縣高島郡青柳村大字上小川　淵田岩次郎氏

○（和文）大學考　第二冊八―九（九）　藤樹書院

○大學朱子序圖説　第一冊五七六―七（六三六）（向つて右）　委員　小川喜代藏氏

○大學朱子序圖説（敬寫並眞蹟補筆）
第一冊五七六―七（六三六）（向つて左）　委員　小川喜代藏氏

○大學序説（敬寫本）　第一冊五七六―七（六三二）
滋賀縣高島郡水尾村大字鴨　北川馬吉氏

○參₂拜太神宮₁準₂祝詞₁　第一冊九四―五（九〇）
一、滋賀縣高島郡水尾村　万木利一氏
一、兵庫縣六甲菩樂園　森下博氏
（記念帖）一、滋賀縣大津市　郡田六之助氏

○斷片　第二冊（五四一）
愛媛縣松山市唐人町　井門イチ氏

○斷片　第二冊（五四六）
東京市外杉並町字馬橋三四〇　中川泰輔氏

○致良知（各冊見返しの圖案は藤樹書院欄間より採る、もと先生の眞蹟に係る）

○陽明學時代の教學綱領「致良知」　第一冊　巻首
藤樹書院

○致良知（舊藩主分部光謙氏寄附版木）

第五冊英文（三一一―三二）　藤樹書院

○茶事に關する書翰（與₂倚松庵₁を見よ）　第二冊（五四七）

○中（此是神明）　第一冊二〇―二（三二）
大阪市住吉區平野郷町　土橋保氏

○中庸解　第二冊八―九（五五）
委員　小川喜代藏氏

○中庸續解（門人敬寫、眞蹟補綴）　第二冊五四―五（一二三）
藤樹書院

○送₂佃子₁　第一冊　巻首（一八二）
一、藤樹神社々寶
一、愛媛縣伊豫郡郡中町　宮内小三郎氏

○佃子に贈れる書翰　第二冊三六八―九（三九五）
愛媛縣大洲町　程野彦太郎氏

○佃子に贈れる書翰　第二冊三六八―九（四〇二）
大阪毎日新聞社々長　本山彦一氏

○上₂佃某₁（敬寫か）　第二冊（四七九）
（記念帖）愛媛縣大洲町　故　中村四郎太夫氏

○丁亥正月吉試翰之次偶成　第一冊九四―五（九六）
委員　小川喜代藏氏

○戸田子に贈れる長篇和歌　第二冊三〇〇―一（三二四）
一、愛媛縣郡中町大字灘町　篠崎吉夫氏

(記念帖) 一、滋賀縣高島郡青柳村 岡田元誠氏

○朱子學時代の敎學綱領「藤樹規」 第一册三四—五(一三三)
(第五册補遺) 愛媛縣喜多郡内子町 曾根高重氏

○藤樹神社々寶(在中の各題目について見よ)第一册 卷首

○藤樹先生古歌 第五册一六六—七(二〇七) 藤樹書院

○藤樹先生令室別所氏(常省彌三郎母堂)書狀
第五册(三四八—九) 委員 小川喜代藏氏

○道統傳 第五册六八—六九(六七) 滋賀縣高島郡水尾村大字鴨 北川久兵衞氏

○中川貞良におくれる長篇和歌 第二册三〇〇—一(二九六)
一、東京市外杉並町字馬橋二四〇 中川泰輔氏
(記念品) 一、滋賀縣高島郡青柳村 岡田元誠氏

○中川貞良におくれる書翰(與中善兵)第二册三三六—七(五四四)
愛媛縣郡中町 西谷正道氏

○答中川貞良 第二册(五四二)
(記念帖) 舊大洲藩主 加藤泰秋氏

○送中川子 第一册六四—五(九三)
京都市東三本木丸太町上ル 雨森民雄氏

○中西常慶におくれる書翰(答中孫右)第二册四九二—三(五二三)

○中西常慶におくれる書翰(與中孫右)第二册四九二—三(五二四)
藤樹書院

○中村重におくれる書翰(絕筆書簡)第二册四三〇—一(四二八)
(誠意を見よ) 京都市麩屋町通二條下ル 下郷傳平氏

○代門人答西銘疑義 第一册六四—五(二〇八)
滋賀縣高島郡青柳村大字上小川 淵田與惣吉氏

○早利兵におくれる書翰 第二册四九二—三(五二〇)
愛媛縣大洲町 須之内實三郎氏

○安分身無辱
知幾心自閑
雖居人世上
却是出人間
(同じ軸中に常省先生の前田久彌に宛てたる書簡及び附點あり、第五册補遺並補正を看よ)
(記念帖) 滋賀縣高島郡水尾村大字武曾 万木長茂氏

○與某氏(捷徑醫筌に關する書翰を見よ)第二册(五四八)

○某年元旦作 第一册六四—五(一〇八)
滋賀縣高島郡青柳村大字上小川 淵田與惣吉氏

○明德圖說 第一册六四—五(六七五)
滋賀縣高島郡新儀村大字太田 足立平左衞門氏

○題明明德(明德之全體)第一册 卷首(一七) 藤樹神社々寶

○緡蠻黄鳥（黄鳥書賛を見よ） 第一册（三四）

○代門人答西銘疑義（西銘のところを見よ）

○答山田權 第二册（四一四）會津學派傳來眞蹟
雜誌陽明學第百六拾號所載 東京 故齋藤一馬氏

○送山田子 第一册二一〇—二一一（一六五）
愛媛縣西宇和郡八幡濱町 村田吉右衞門氏

○吾 第一册二一〇—二一一（三三九）
愛媛縣大洲町 鎌田五郎氏

〔再刊補遺〕

○乙酉元旦詩（拙稿藤樹研究の新資料參照）
（遺墨帖）第一册一七三 大阪市北區旅籠町 田中宗一氏
滋賀縣蒲生郡桐原村 碓田孝夫氏

○詩小雅魚麗之什、采薇角弓苑柳三篇臨寫
（遺墨帖） 滋賀縣大溝町 勝野 福井市之進氏

○以物觀物、不以己觀物
（藤樹研究第六卷四號及八卷四號京都たより參照）
第一册卷首 滋賀縣立藤樹高等女學校

○禡文の臨寫
（遺墨帖） 同 校

○春秋左氏傳（桓公二、三年）
（遺墨帖） 滋賀縣高島郡青柳村 小島[illegible]吉氏

○（藤樹先生手澤本）詩經 序一之一（拙稿中江藤樹と十三經注疏參照）
第一册卷首 藤樹書院保管

○（藤樹先生手澤本）四書 大學（藤樹研究第四卷一號拙稿京都たより參照）
同 上 滋賀縣高島郡青柳村 小川秀和氏

○祖父に宛てたる書簡
第二册五八—六二 東京文理科大學助教授 加藤仁平氏

○何陋軒記臨寫
（遺墨帖） 滋賀縣高島郡安曇村田中眞迎寺 中西坦水氏

○文四宛書簡（名家手簡所載）
（遺墨帖）

○染仲用默齋說云云
（遺墨帖） 滋賀縣高島郡青柳村 志村三次氏

○中川寒翁宛書通
（遺墨帖） 帝國學士院

○癸未之歳旦（藤樹研究六卷四號京都たより參照）
（遺墨帖）第一册八四 滋賀縣立藤樹高等女學校

○詠草
（遺墨帖）第二册三〇二 同 校

○送森村氏（藤樹研究六卷十號京都たより參照）
（遺墨帖）第一册一七 同 上

○四句訣並誠意圖釋　東敬治主幹雜誌陽明學第二號所載
第一册卷首

○誠意　東京廣瀨氏所藏品賣立目錄所載
第一册卷首

○送横山子並餞熊澤子　兵庫縣六甲苦樂園　森下博氏
第一册二〇—二

○永權右宛書簡（藤樹研究第八卷一號參照）　同上
第二册五六〇—六一

○聖經（遺墨帖）　伊豫八幡濱市　得能喜信氏

○心法圖說　滋賀縣高島郡水尾村　澤太助氏
第二册六三六—七

○某氏に與ふ　愛媛縣伊豫郡南伊豫村上野　阿部經紀氏
第二册六二六—七

○丙戌歲日詩序（遺墨帖）　先哲書影所載

○中々に猶の雪ときえぬまゝちりてあくたの名やをしき花（第一册卷首再刊の辭追記參照）　愛媛縣大洲町城山　西尾正敬氏

○畫贊・詩・文・書・雜著・長篇和歌並送森村子　一册（墨附六十四枚）
○孝經啓蒙　一册（墨附五十四枚）
○大學考　一册（墨附九枚）
○大學蒙註並解　一册（墨附二十八枚）
○中庸解　一册（墨附十二枚）
○倭文書翰　一册（墨附二十九枚）
○陽明要語　一册（墨附二十五枚）
（第一册卷首再刊の辭追記參照）

（第一册卷首影印）（藤門戸田孫助正度拜受傳來）
愛媛縣喜多郡新谷村　香渡冨子氏

（以上、第一册卷首再刊の辭追記並藤樹研究第八卷五號京都だより參照）

資料一覽表 終

編纂事歴大要

藤樹先生全集の編纂は藤樹神社創立協賛會第二期事業の一として着手せられたるものなり。回顧すれば去る大正七年森正隆氏滋賀縣知事に任せらるゝや、先づ高島郡を巡視し、親しく聖人の跡を訪ひ、藤樹神社の創立を決意せり。當時予は乏を愛知郡長に承けて其の任に在りしが、森氏の推挽に依り高島郡長に轉任を命せられ、爾來其の機の熟するを待てり。後幾何もなくして森氏去り、堀田義次郎氏本縣知事に任せられ、森氏の志を繼ぎ、愈々藤樹神社の造營を企劃し、旨を予に授く。予乃ち地元の有志と謀り淵田竹次郎氏外十六名のものを崇敬者總代となし、大正八年十二月二十日神社創立の願書を提出し、翌九年六月十日始めて內務大臣の允許を得たり。依て直に藤樹神社創立協賛會を組織し、會長には知事堀田義次郎氏、副會長には內務部長故島內三郎氏を推し、淵田竹次郎氏外五名の官民有志を理事とし、予は理事長として百般の會務を掌理し其の第一期事業として藤樹神社創立、第二期事業として一、德本堂改築　二、藤樹文庫建設　三、藤樹先生全集出版　四、基本財產造成の各項を揭げ、全國各種の學校を始め一般篤志者の贊同を求め直に神社造營に着手すると同時に、文學士加藤盛一・同高橋俊乘・柴田甚五郎・小川喜代藏の諸氏に委員を依囑し、加藤文學士を主任とし以て全集の編纂を始めたり。

抑々神社の造營は先生の英靈を公祀の班に列し其の遺德を千載に崇くし、以て民德の磨礪に資するに在り。全集の編纂は先生の學術の淵博にして德化の偉大なるを中外に宣揚し、以て文教の興隆を助くるに在り。而して其の先生を追慕景仰し社會風教の發達を助成せんとする精神に至りては兩者異なる所なし。斯くて曩に神社の造營就り、今復全集の編纂了る。豈に斯道の爲め慶賀に勝ふべけんや。特に大正十三年秋十一月　今

上陛下攝政宮におはしまし〻比、陸軍大演習御統監の爲め北陸の野に行幸あらせられしとき、時の本會々長滋賀縣知事末松偕一郎氏　鶴駕を名古屋驛頭に迎へ奉るや、畏くも御車中に於て藤樹神社並に全集編纂に關する御下問あり。剰へ優渥なる　御諚をさへ賜はりたりと側聞す。本會の光榮實に之に過ぐるものなく、委員の恐懼感激亦其の頂に達し、天恩洪大、衷心斯業の完成を誓ひ奉れり。而して今や業成らんとす。微臣等夢寐漸く安きを覺えずんば非ざるなり。

思ふに全集編纂の事たる、各地に散逸せる資料の蒐集より之が調査研究に至るまで實に尋常の業に非ず。此の間加藤主任は滋賀縣立今津中學校長より高知高等學校教授に轉じ以て斯業の進捗に便せんとしたるも、材料の蒐集及び内容の研究意の如くならざるを知るや、斷然職を辭し洛北北白川に寓居を定め、專念斯業に從事し、高橋委員亦京都に在り、分擔の部分に就き透徹せる頭腦を以て特殊の研究を遂げ爲に有力なる發明をなせるもの尠からず。柴田委員は學界の中心たる帝都に在りて常に資料の蒐集と其の報告に力むるあり、特に親しく會津地方に往き同地の藤樹學に關する資料を探訪して通報せり。小川委員は聖人の故鄕に住し、特に史實の究明に餘力を殘さず、且つ壯年時代より研究せる成果を擧げて全集に附載し以て一大光彩を加へたり。實に本全集は聖人偉德の權化なると共に委員諸氏多年苦心の結晶と謂ふを妨げざるべし。予は大正十二年春家事を見るに忙しく爾後單に一理事として諸般の商議に參劃し、新に高島郡長に任せられたる松山藤太郎氏代つて本會理事長たり。同氏は後本縣事務官に任せられしも同じく會務に鞅掌し始終一誠意、斯業の進展に全力を盡し以て今日あるを致せり。今や協贊會の事業として未だ着手するに至らざる德本堂及び藤樹文庫建設の二事業ありと雖も、必ずや近き將來に於て之が實現を見、以て本會の事業を完成し聖人の遺德を顯彰するに足るべきは信じて疑はざるところなり。終りに全集編纂事業の實行上に關し始終特別の注意を與

へられたる本會顧問故杉浦重剛先生及び編纂顧問文學博士井上哲次郎、同狩野直喜、同高瀨武次郎、東敬治諸先生に對し深甚なる謝辭を呈すると共に、本會歷代の會長副會長並に役員諸氏の特別の指導と援助とに對し謹んで敬意を表す。

昭和二年九月二十日

追記　昭和二年九月編纂の業を畢へ直に印刷に着手すると同時に、全集の豫約募集を發表したるに、滋賀縣出身の弘世助太郎及び吉川又平兩氏が特別の厚意を寄せられしも與つて力あり、豫想以上の應募者數を得たるは吾等の光榮之に過ぎず。然るに實際印刷に付するや、內容非常に煩雜にして校正上の困難言語に絕するものあり、少きも七八校、多きは十數校を重ね、印刷所たる內外出版印刷株式會社の特別の奉仕と編纂並に校正全員の必死の努力とに拘らず、滿一年の後即ち昭和三年十月末日を以て印刷發行の完了すべき筈なりしに、終に豫定を超ゆること半歲以上に及びたるは偏に讀者諸賢の寬恕を請はざるを得ず。此の間に在りても、校正に寸隙を餘さざるの傍猶且つ資料の補入に餘力を殘さず、藤樹書院の近鄉に於て有力なる材料を得て之を追加したるのみならず、全國的に取材に努むること磁石の針を引くに異ならず。特に卷末に附したる詳密なる總索引の如き其の編纂と配列と校正上の苦心とは到底他人の想像を許さざるものあり。かくて俛焉も忠實に斯業の實質的改善に向つて健闘せられし委員諸君の貢獻に多大の謝意を表せずんばあらず。又協贊會の實務に當れる諸君が終始熱心に其の事に當りて事業の圓滿なる進行に寄與せられたるも多とすべく、別して松山理事長が加藤主任と共に多年の懸案たりし全集篠原氏本を再び藤樹書院の藏有に復歸せしむるに成功したるは特筆すべき事件たり。

協贊會が全集の豫約募集を發表するに際し前帝國教育會長文學博士故澤柳政太郎氏、前京都帝國大學總長醫學博士荒木寅三郎氏、現京都帝國大學文學部長文學博士小西重直氏及び大阪每日新聞社々長本山彥一氏等より懇篤なる推薦書を寄せられたり。此は永く記念として保存すべきものなれば、左に之を附載して

敬謝の微忱を表す。

最後に斯業の進行中、加藤主任は長兄を喪ひ、高橋委員は令室永く病褥に懊惱せられ、小川委員は長女の他界を悲しみ且つ二男の重患に惱むに遭ひ、編摩の苦心に重ぬるに此の如き家庭上の慘事を以てす。而も屈せず撓まず終に完成の今日あるを致せり。予も亦愛親に永訣して特に委員諸君の心事に同情するものあり。聊か記して其の憂思を慰め、且つ重ねて十星霜の心勞を多謝す。

藤樹神社創立協贊會

昭和四年三月三十日　　前理事長　佐　野　眞　次　郎　敬記

推　薦　書

中江藤樹先生の德行は夙に世人の景仰する所でありますが、其の淵源たる學術思想に至つては未だ學界に知悉せられて居ませぬ。これは寔に聖代の一大恨事であります。滋賀縣官民之を遺憾とし、曩に藤樹神社創立協贊會を起し、先づ藤樹神社の造營を終へ、尋で藤樹先生全集の刊行を企て藤樹書院所藏の寫本を始め弘く正確なる資料を蒐集し、之を底本とし、傍ら諸本を比較研究して、傍記又は頭註を施し、解說を加へ、一事一項苟もせず、拮据十年の功を積みて、茲に完璧に近き全集の發刊を見るに至りました。藤樹先生の學術・性行はこの全集によりて始めて大觀することが出來ることゝなり、學術上・教育上裨益する所大なるは勿論、世道人心の振興上、利する所が多大であると信じます。

思ふに本書の如きは相當の學校及圖書館にありては、必ずこれを備ふべく、個人としては學者・教育家は勿論、廣く一般人士も必ず一本を左右に備へ、以て我が先覺者の精神生活を回顧欽仰するの資となされんこ

とを深く希望し、本書發刊の來歷を述べて御推薦申上ます。

昭和二年十月二日

帝國教育會長　澤柳政太郎

滋賀縣教育會長　今村正美

藤樹先生全集の新撰成を告ぐ。學界の爲に慶ぶべし。顧ふに明治二十六年の發刊に係る「藤樹全書」は、啻に印刷に魯魚の誤多きのみならず、或は明人の所説を混じ、或は蕃山の著述を加へつゝ、却つて先生自撰の大作を逸したり。されば是の書に據りて先生の學術を論定したるものには往々にして錯誤に陷りたるものあり。識者以て學界の一恨事と爲せり。藤樹神社創立協贊會深く此に慨あり。社殿の造營竣るや、直ちに本全集の編纂に着手し夙夜拮据十年を積みて乃ち成れり。余披いて之を讀むに、底本の討究至らざるなく、編次亦法有り。諸本を對校して審に傍記又は頭註を施し、加ふるに新に發見したる幾多貴重なる資料を以てす。先生學術・性行の全豹を窺ひ我が國人最高の精神生活を爲せる近江聖人の大人格を知るには寔に當代の第一書たるを疑はず。

夫れ豪傑の士は文王無しと雖も猶興る。學ぶに常の師なく、而も淵深なる思索と篤實なる體驗とを以て、本邦陽明學を自から創建し自から大成したるもの藤樹先生其の人に非ずや。先生は年僅に四十一にして歿せられしも既に天下の廣居に居り天下の正位に立ち天下の大道を行へり。宜なる哉、其の片言隻句も心ありて之を玩味すれば、終身之を行ふに餘あるをや。明治維新の鴻業を翼贊したる豪傑吉田松陰・西郷南洲等が陽明學を以て其の精神を修養したるも、亦先生の遺敎に負ふもの尠からず。余平生先生に私淑し、今此の書の能く先生の學術・人格を表明するを韙とし、因て一言を寄せて世の先生を景仰するの士に推奬すと云ふ。

京都帝國大學總長　荒木寅三郎

藤樹先生の他の方面に關しては姑らく是を舍き、今は主として教育家としての先生の特徴に就いて予の所見の一端を略述せんに、

先生が高遠にして而も實行に適切なる教育の理想を掲げ、且つ燃ゆるが如き愛の心を以て子弟の薫陶に寢食を忘れられたること其の一なり。

常に教育原理の討究を怠らず、教育の本質が德化に在ることを主張し、且つ之を實行せられたること其の二なり。

藤樹規・致良知の如き特色ある教育の綱領を掲示し以て子弟の適歸すべき點を明示すると共に、時・處・位に應じて活用すべき根本原理を教示せられたること其の三なり。

女子教育の必要を提唱し、又其の教育の實際に對して考慮深き方法を示されたること其の四なり。

熊澤蕃山・淵岡山以下篤學有爲の士を薫化せられたるのみならず、大野了佐の如き低能者の教育に渾身の努力を拂ひ、又能く之に成功せられたること其の五なり。

口述教授の外、自から教授用書を編述し、又書簡に依る通信教授の方法を實行して、教育の徹底と其の永續に苦心せられたること其の六なり。

經書の解釋に於て訓詁の吟味を重んずると共に思想の通觀を忘れず、分解と綜合の兩方法を併用せるが如き、教授の方法に於ても亦觀るべきもの亦尠からず。此等を理論的に解剖すれば、幾多の活教訓を見出し得べきこと其の七なり。

之を要するに、先生の教育は孔子とペスタロッチーの長所を併觀するの概あり。予は年來教育の史的討究特に偉大なる教育家の研究を推奬し來れるものなるが、今本全集の内容を觀るに、幾多貴重なる研究資料の

提供せられたるを知ると同時に、編纂委員諸君が各々教育の理論と實際に通じ、每篇首懇切なる內容の解說を加へ、以て先生學術の精蘊を發揮したるは、本文を熟讀する暇無き人を利する所大なるべきを信ず。

文學博士　小西重直

近江聖人は我が國陽明學の開祖なり。彼の熊澤蕃山・三宅石菴・三輪執齋・佐藤一齋・大鹽中齋・春日潛菴・山田方谷・吉村秋陽・東澤瀉・池田草庵・奧宮慥齋・梁川星巖等著名の學者は皆その繼承者ならざるはなし。維新前後の勤王愛國の諸豪林子平・佐久間象山・吉田松陰・高杉東行・鍋島閑叟・西鄕南洲・雲井龍雄等の如き亦陽明學を以てその精神を修養したるものにして、藤樹先生の大德實踐躬行の感化敎訓が三百年間我が國民の敎化善導に力ありしこと實に大なるものあり。余輩が曩に陽明學會を興し、更に彼の大鹽中齋の洗心洞を再興しその事業について力を盡しつゝあるも、亦心を致良知の學の研究に寄せ、藤樹先生の遺業を擴充せんとする微衷に外ならず。今日時弊匡救のために知行合一の說最も適切にして、先生の敎を究むる必要を痛切に感ずる秋に當つて、完璧に近き先生の全集の成るを見て愉悅に堪へず。その篇首每に詳細なる解題を附し、漢文の部分においては、特に內容を概說し、一般讀者のためを謀り、且つ營利を目的とせずして只管聖人の遺德を顯彰するにつとめ、內容體裁の完備せるに比して、その價を廉にせるは喜ぶべし。本全集は實に邦人が陽明學を修むる絕好の敎程なりと謂ふべし。子孫の爲に美田を買はざる士も、家寶として又學校においては敎育の資料として必ず一本を備ふべきもの、敢て江湖に推奬す。

大阪每日新聞社々長　本山彥一

聖人は太陽である。生きとし生けるもの太陽の光と熱とを享受せざるなきが如く、聖人こそは一世の儀表であり、千古の指針である。若し夫の太陽を喪へる世界が永劫の冬に沈むとせば、聖人の崇拜を忘れたる國

家社會や知るべきのみ。たとひ寒飈の枝を鳴らす夕、西山に舂くの日輪を慕ふことなしとするも、澆季を悼み世運を慨くの秋、哲人の見るべからざるを悲まずには居られようか。

「與右衞門様には嘘は申されず候」と無恥の農夫が投じたる一句こそは、宗教生活の眞諦であり、久遠に響く懺悔の聲であつた。果せる哉、藤樹の陰の繁くして、伊人逝くの三百年、小川村の「ひじり」は近江聖人となり、近江聖人は日本の藤樹先生として六尺の童子にも膾炙された。先生を知り先生に觸れむとする情熱は澎湃として四海に漲り、苟も先生の筆に成り、先生を傳ふるに足る者は、斷簡零墨と雖も九鼎の貴さを加へた。本全集の刊行は實に此の情景に感激して起された事業である。

さり乍ら現代の信仰は科學と矛盾することが許されぬ。原始民族は太陽の爲に禮拜壇を築き、二十世紀の科學者は光線の分析に賴つて利用厚生を教へる。本全集も亦最新の史料的研究法を適用し、十歳の星霜を拮据して、先生の眞善美を討究した。全五冊のそれ〴〵は精巧なるプリズムに映じたる先生のスペクトルである。

噫。先生こそはわが民族の生める掉尾の聖人である。先生の後復聖人を見ぬ。我々は此の全集を以て既に沒するの夕照を招く魯陽の戈とし、再造の力を新日本に齎らす黎明の光として、徧く之を江湖に捧げる。

昭和二年十一月一日

藤樹神社創立協贊會理事長　松山藤太郎

（昭和二年十一月十六日以降大阪每日新聞・大阪朝日新聞・東京日日新聞・讀賣新聞・江州日日新聞・近江新報・大連新聞等所載。）

藤樹先生全集　卷之五十

總目次

（詳目は各册の卷頭に見ゆ）

第一册　自卷之一　至卷之十一

第二冊　自卷之十二　至卷之二十一

第三冊　自卷之二十二　至卷之三十四

翁問答內容細目

第四冊　自卷之三十五　至卷之四十一

第五別冊　自卷之四十二　至卷之五十

The Life and Teaching of Nakae Tōju, the Sage of Omi. By Galen M. Fisher.

總索引

凡例

一、同音にありては字畫順及び册次により、又濁音を先にす。
二、總は第一册卷頭「編纂總則」、補・逸・追は第五(別)册卷末補遺並補正又は逸事・追錄を意味す。
三、第三册卷頭「翁問答内容細目」岩波文庫「鑑草内容細目」併看。
四、第四册卷頭「方目錄」(一一二四頁)併看。

ア

イ（ヰ）

エ（ヱ）

II五九
格致の功 II四一三
無事有事意念を省察克治して本體を存養し常々中和に離れざるを格致の要領とす II五七三
格致の要は愼獨にて候 II五〇
格知誠正ノ精義 V五四
格套 I二〇〇
格套 II五三一、V一三、二一、二三
格套(は)法式と云事 II五九三
格套典要 II一三
若一念失却則良知復知得便即改レ過不レ貳方是眞格物 I二三九
以二良知一照二察其意念之攙雜於接物應事之間一而正二其不レ中レ節者一致二其良知一此謂二格物一 I五〇三、五一〇
致知在二格物一(大學) I五一〇、五五五
致知之功必在二格物一格物之主宰必在二乎知一 I一二
格物者察二貌言視聽思之五事常不レ離二德惠一乎否上而至二乎此一而不レ違之謂也 I一六
格物致知(大學) I三、九、一一、一三、二九、一一八、一七四
眞志既立則格物致知 I一〇四
行レ着レ謂二接物應事每脩レ道而須臾不レ離也大學所レ謂格物致知是也 I一二一
(止二於至善者一)下文所謂格物致知傳所レ謂愼獨皆此工程也 I一八七
所レ惡是良知也毋レ以是格物致知也 I五三四
格物(モノヲタヾスを併せ看よ) II三一
爲レ善去レ惡是格物(四言教) II九七
格二五事之物一是格物(東正堂) II一〇〇
格物を致知の工夫とす II三三
洪範の九疇は五事を要領とし大學の八目は格物を本とす II九〇
格物卽致知の工夫なり II三六
格物と致知との差別 II五六五
八條(目)總括の工程唯格物なり II三六
格物も致知も皆理を窮るの工夫なり II五六九
良知の所レ知を主として五事の非を格すは格物の工程なり II三四
格物の功泛濫云々 II一六、一〇二
(四書)大全朱子曰格物只是就二一物上一窮二得一物之理一云々 II五六九
格物は物の理を窮て致知をもとむる也 II五六九
格物は物の理をきはめたるなり
致知の中の逐一の工夫也 II五六九
格物從二良知之所レ照正二五事之非一而行レ止是致レ知之實也 V四四一
格物致知之外無二別路可レ走無二別事可レ做 I二三三
夫れ大學一書の解釋は朱子學と陽明學との分岐點を爲す而して格物致知は特に其の焦點たり I五〇三
夫所レ謂知レ止者物格知至以後之效而格物致知者大學最初用力之地也 I一五三
格物致知(チチカクブツを併せ看よ) II三三、四一九、五〇〇
王子の所レ謂格物致知卽誠意の工夫 II五二六
格物致知は誠意の工夫 II四三
視聽言動思の道にたがふ處を正して良知の本體に至り隨ふを格物致知と申候 II五〇〇
誠意を以て主と爲し格物致知の工夫を用ふ(傳習錄中) II九五
格物致知の工夫五事の非禮を格して良知に致るにあり II一〇三、一三七
格法 II三八七
格法に拘泥するの迹 V一三九
有下泥二格法典要一爲レ學者上 I一九九
格法典要者明德感通之迹也 I二〇一
格法典要 II四三三
格法典要を道とす II六〇
道を求るに或は格法典要に泥み或は人倫日用の外に求る惑あり II五八

廓

廓然大公 I二〇四
廓然大公而物來順應 I二四
必廣意見淨盡廓然大公處 I五一六
廓然大公 V三八

赫

詩云(小雅節南山)赫々師尹民具爾瞻(孝經) I二七四、三三三
赫兮喧兮者威義也(大學) I五一八、五六一

覺

詩云(大雅抑)有二覺德行一四國順レ之(孝經) I二七六、三三八
覺右(中村覺右衞門を看よ) II四八六

學

學 I二一三、二三七、二二八
如レ切如レ磋者道レ學也(大學) I五一七、五六一
人之爲レ學曰レ立レ志爲レ本立志之始曰レ辨レ惑爲レ要 I二五〇
敎レ此(畏敬)是謂二人之敎一學レ此是謂二人之學一 I一三
敎レ此(一貫)之謂二眞敎一學レ此之謂二眞學一 I三六
(學有二本末先后之差忒一) I一九九
學有二一魔一舊習外議內外障害 I二三三
修身以上皆是學之事齊家治國方

キ（ギ）

筮古之旨非二吉凶悔吝之計一乎　I 一四八
吉禮　III 二四六
吉忠左衛門殿　V 二九五
吉備國學有二藤樹先生手筆孝經版一　V 三八三
吉備烈公(池田光政)　V 三七七

狐　(狐、狸、天狗のたとへ)　II 四〇一

君　君在則禮然(禮、文王世子)　I 五七、二六
敬二其父一則子悅敬二其兄一則弟悅敬二其君一則臣悅(孝經)　I 六六、二五九
君雖レ不レ君臣不レ可三以不二レ臣父雖レ不レ父子不レ可三以不二レ子(古文孝經孔安國序)　I 一一九
子曰事レ君盡レ禮人以爲レ諂也(論、八佾)　I 四七九
夫孝始二於事一レ親中二於事一レ君終二於立一レ身(孝經)　I 二六五、三〇九
要レ君者無レ上非二聖人一者無レ法非レ孝者無レ親此大亂之道也(孝經)　I 一六五、二五七
故母取二其愛一而君取二其敬一兼レ之者父也(孝經)　I 二六九、三三二

虐　虐(仁虐の項參照)　III 四四三

逆　逆(孝逆の項參照)
以レ順則逆民無レ則焉不レ在二於善一而皆在二於凶德一(孝經)　―

九　九有(山田權を併せ看よ)　I 二八二、三四九
九牛の一毛　II 四一六、四七四
凡爲二天下國家一有二九經一(中庸)　III 七九、二三四
九思欲レ復レ元(引二論、季子一)　II 一六九
明二明德一則欲レ升二九天之上一則　I 一〇五
升欲レ入二九地之下一則入　I 一七三
九命考　I 四一七

牛　伐冰之家不レ畜二牛羊一(大學)　I 五四六、五七五

休　其心休々焉其如レ有レ容焉(大學引)　I 五四〇、五七四
休寧の商人の妻の妬毒　III 三九五―九七

灸　灸法　IV 三

求　求嗣の方陰隲を本とす　II 五八一

宮　宮女　III 三六〇

舅　舅姑(シュウトを看よ)
舅犯曰亡人無二以爲一レ寶仁レ親以爲レ寶(大學)　I 五三九、五七三

廐　廐考　I 四七五

樛　樛木の詩　III 三八七

窮　窮理と篤行　I 一一三

舊　不レ念二舊惡一(論、公冶長)　II 三三五
(孝經啓蒙)舊本　I 一五六、一九九、三八五、三八六

居　居學の一助　V 一八五
第一則第二則は朱子の居敬窮理の境地を出でず　I 一五七

許　許由　III 三〇九―一四
(明)周海門許敬　II 一〇三
許文正(許衡)　V 六七

虛　虛　I 二三一
心術之要莫レ先二於除一レ滿致レ虛　I 一八二
惟虛也故溫恭能容、惟明也故稱レ物平レ施　I 一七八
虛見　II 五九九
虛生の苦惱　II 四四三
虛世之苦惱　V 一〇七
空虛異端之教也佛氏以二空寂一爲レ宗老氏以二虛無一爲レ宗　I 六二四
異端之虛無寂滅俗儒之記誦詞章管商之權謀功利　I 一三一
虛靈不昧　II 三七二
眞吾者虛靈不昧良知是也(引二大智度論一)　I 一三九

擧　先生雖レ生二長田野一擧止自異二凡兒一　V 三〇
擧止閑靖　V 九二
擧世稱二其德一何唯化二一鄕一　V 五二

凶　凶短折(六極の一)(書、洪範)　II 五八五、III 一五五、一五七
以レ順則逆民無レ則焉不レ在二於善一而皆在二於凶德一(孝經)　I 一八〇、二四九
凶年打續一入御作廻も云々　V 四九七

兄　兄弟　III 七五、九五、一〇〇、一七五、四五二

行　(藤樹先生)行狀　I 三〇三
十三經を通誦す(行狀其の他)　I 一五六
(習レ據二行狀一此作二習歎一)　I 二一三
(藤樹先生)行狀　II 一、九、三三、五五、六九、九一、五六三、五八二
志村仲昌著藤樹先生行狀聞傳　I 二五一
(藤樹先生)行狀聞傳　II 三〇八、五六三

杏　杏壇　V 五二一、五二四
杏坪賴惟柔(賴惟柔を併せ看よ)　V 五二一

夾　夾谷　III 一八一

京　京三郎　II 五七七
京都之如意山房　V 四七一
京都故友の家に寓而命を待事百日餘　V 八八
京都帝國大學圖書館(孝經啓蒙)本　I 二五五、二五六、三〇〇

狂　惟狂克念作レ聖(書、多方)　III 三三一
狂者、狂見　III 三三、一〇一、二〇九―三五、二四三、二五九
大唐の狂者は天笠の佛　III 三二四
狂者　V 四八

ク(グ)

ケ（ゲ）

コ（ゴ）

朱買臣の妻 Ⅲ三六九―六六
朱陸年譜通攷 Ⅴ、八〇、二一六、三四六

守
守節 Ⅲ三五三―八〇、三八一
守節は孝行の一 Ⅲ三五三
守節背夫の報 Ⅲ二九八―三〇〇、三〇三、三五三―八一
(守節の必要) Ⅲ三五三―五四

取
取捨の見地 Ⅴ二五三

洙
洙泗皆水名孔子敷二教於魯一之洙泗一故言二孔門一爲二洙泗之門一 Ⅰ六一五
洙泗 Ⅲ二三八
洙泗之正統 Ⅴ五〇九

酒
酒嚢飯袋 Ⅲ二〇二

首
首經とは孝經及び小學を指す Ⅰ五七七
孝經小學之於二七經四書一猶三首之於二四體百骸一是以名二首經一 Ⅰ五八七
首經不レ特二稱孝經一並二稱孝經及小學二編者) Ⅰ五八五
首經卽孝經、說見二孝經大全一(篠原氏說) Ⅰ五八五
首經考 Ⅰ五七七、五八五、六三一
得レ侍二於顧軒先生首經講筵之末一 Ⅴ四五四

種
種子方 Ⅱ五六四、五八五

受
受用 Ⅱ三九四、五〇七

儒
吾儒當下安樂の得益 Ⅱ四三二
儒學、儒教、儒道、儒門 Ⅲ一七、一九、五七、一〇六、二一三―三五、二四五、二六七、四〇九、四七六
儒道を行ふ工夫 Ⅲ二五一―五三
儒道と神信仰 Ⅲ二四五―四七
儒道の外に向上の道ありや Ⅲ一〇一―〇三
儒道は皇上帝の道 Ⅲ二一九
儒道は太虛の神道 Ⅲ二四八
儒道は名利の欲を棄つるが第一 Ⅲ二五四
儒道は日本にも行はるべきか Ⅲ二四八―五四
(儒と佛との比較) Ⅲ二〇九―一四、二一五―三五、二四八、二五四―六七、四九五
(儒道と仙佛との優劣) Ⅲ二六五―六七、四九五
(儒道に於ける欲望觀) Ⅲ二五四―六四
儒學者一般の傳統的精神 Ⅴ一五一
儒教主義の實行者 Ⅴ二四三
達則兼善二於天下一窮則獨善二其身一此謂二之儒者一 Ⅰ一一八
儒者之道以レ易爲二主本一 Ⅰ一四三
儒者、儒家(眞儒、俗儒を併せ看よ) Ⅲ一九、六三、六三、二一七、二八一
(儒者についての誤解) Ⅲ二八一、二八七、四九六
眞儒の職業 Ⅲ一一三―一四、四八八
(眞儒の務) Ⅲ二二八
儒家心法の端的 Ⅲ二六五―六七
(儒者の學問) Ⅲ六二
(儒者の心法) Ⅲ二五七
(儒者の本質) Ⅲ二一九―二〇
(儒者の本分) Ⅲ二八六―八七
(儒者の剃髮) Ⅲ二五二―五四
魯國の儒者 Ⅲ二八一―八二
儒書 Ⅲ二一九
儒生雜記 Ⅱ三四五、三七一、四七五
儒宗自作一家風 Ⅴ五一〇
儒服 Ⅲ二八一
儒門空虛聚語 Ⅴ四七五

孺
潛室陳氏曰如下孺子將レ入二於井一之事感上則仁之理便應云々 Ⅰ六四四、六五〇
孺人神主 Ⅴ三三四

壽
德明かなるときは名壽の二つも其中にあり Ⅱ一四九
爲二壽藏玄德寺祖塋之北一 Ⅴ三四七

十
(十一歲始て大學を讀みて志を立つ) Ⅴ七一
十一日 Ⅴ一一三、一三三、一六〇
十義(禮、禮運) Ⅱ六一五、Ⅲ七七
十三經を通誦す(行狀其の他) Ⅰ一五六
先生の讀まれたる十三經注疏は閩本なりとする考證 Ⅰ三九五
十三經の內 Ⅱ一一
十三經 Ⅲ三三、一七六―七七、二九〇
十三經の要領 Ⅲ一七七、二九〇
通二習十三經一 Ⅴ七一、八六
先生所レ蓄書籍十三經 陽明全書 性理會通之類 Ⅴ三八九
十六歲にて十三經を通習す Ⅴ三三
十方世界皆一つ Ⅲ二二四
曾子曰十目所レ視十手所レ指其嚴乎(大學) Ⅰ一三〇、二三二、五一五、五六一
十郎右(森村十郎右衞門を看よ) Ⅱ三八〇

戎
壹戎衣而有二天下一(中庸) Ⅱ一五〇

收
收斂者存養之始存養者收斂之終也 Ⅴ四二六

周
詩曰(大雅文王)周雖二舊邦一其命維新(大學) Ⅰ五二〇、五六二
(周の世家) Ⅱ一五一―五二
周易 Ⅲ一七六、二九〇
周易(寫本) Ⅴ二〇八
(明)周海門許敬 Ⅱ一〇二
昔者周公郊二祀后稷一以配レ天宗二祀文王於明堂一以配二上帝一(孝經) Ⅰ二七八、三四一
(舜武爲レ君之孝周公爲レ相之孝孔子素王之孝) Ⅰ六四
如有二周公之才之美一使二驕且吝一其餘不レ足レ觀也已(論、泰伯) Ⅰ一七一、一八三、二三一
周公成二文武之德一追二王大王王

ス(ズ・ヅ)

セ(ゼ)

西

性

五人ニ至テ故號ニ庶人在ニ官者一也ト（同前） I 二九二、三七二
疏云愛出ニ于内一慈爲ニ愛體一敬生ニ于心一恭爲ニ敬貌一（同前）（正義曰を併せ看よ） I 二九一、三七二
疏云夫子述ニ孝之時一至テ故曰ニ昔者一也ト（同前） I 二九二、三七二
疏云記聞傳稱至ニ則食也一（同前） I 二九五、三七八
疏云按問喪云至ニ五レ文也一（同前） I 二九六、三八一
疏曰王之府史胥徒皆官長所ニ自辟除一未レ得ニ王之命一（周禮大宗伯） I 四一八
疏曰朝服皮弁服（論語） I 四三七
疏曰黄衣狐裘至ニ葛帶榛杖喪殺也一（論、鄉黨） I 四三九
詁古今異言通レ之使ニ人知一（毛詩周南關雎詁訓傳第一條下疏） I 六一九
章明也總レ義包レ體所ニ以明ト情也句者局也聯レ字分レ疆所ニ以局言一者（關雎五章章四句條下疏） I 六一九
疏食飲水云々（論、述而） III 一二三

楚

楚書曰（國、楚語）楚國無ニ以爲ト寶惟善以爲レ寶（大學） I 五五九、五七三
楚女寵愛を求めて餓死す III 三六一—六三、四八七

麁

麁相なる致方 V 四九八

叢

（藤樹先生）叢稿集 I 六

宋

宋學の淵源は圖說に在り I 六三二
（宋儒於ニ鬼神之事一體認不レ熟明備惜ニ其非一而辨ニ其失一） I 一四六
宋の飽穌の妻の不嫉 III 三八三—八四
宋范純仁 V 三八四

爭

昔者天子有ニ爭臣七人一雖ニ無道一不レ失ニ其天下一（孝經） I 二九二、三七一

宗

宗對州侯 V 九三
陳ニ其宗器一（中庸） II 一五三
宗傳圖考 I 五九五
爲ニ之宗廟一以レ鬼享レ之（孝經） I 二九七、三七九
三者備矣然後能守ニ其宗廟一（孝經） I 二六九、三二〇
宗廟致レ敬不レ忘レ親也（孝經） I 二八九、三六四
（宗廟を祭る禮） II 一五五—五八
宗廟之禮所ミ以序ニ昭穆一也（中庸） II 一五五

曹

曹溪院天梁和尚 II 五五八、V 二、八六
曹溪院殿剛圓勝公大居士（加藤光泰） V 三一
曹溪堂頭 II 五五八

草

草果（集） I 總七、八、一一八、一二七、一六一、一六三、一六四、一七八、一八二、一八五、一九三、一九七、二〇三、二〇三、二〇四、二〇六、二二五、二三三、二三四、二三七
草木生レ之（中庸） II 二二〇

倉

倉公 III 一八五

桑

桑門 V 三八四

送

送行の和歌 V 一四七
送行文（眞蹟） V 一四六

莊

莊子曰顏淵曰云々 I 二四五
逍遙遊（莊子） II 三一八
坐馳の病痛（莊子人間世） II 五一九
莊子 III 二〇九—二四、二八一
莊遵 III 三七七—七八
莊子の大簡飛揚の論 V 逸

巢

巢父 III 二〇九—二四

造

靈像之神造ニ化天地萬物一主ニ宰禍福一充ニ大虛一徹ニ萬徹一 I 一三九
造化千變萬化皆易卦神明之所ニ經綸一而尊神之妙用也 I 一四三
太極は造化の根本陰陽は造化の具 II 五七

曾

諸弟子在レ側獨呼ニ曾子一者以下其素篤ニ於孝一而又明中全孝一而傳上道也正與下告ニ一貫一之意上同 I 三〇五
曾子自反而縮雖ニ千萬人一吾往矣（孟、公孫丑上） I 二三七
曾子曰甚哉孝之大也（孝經） I 二七二、三三七
曾子曰敢問聖人之德其無ミ以加ニ於孝一乎（孝經） I 二七七、三三八
曾子曰若ニ夫慈愛恭敬安レ親揚レ名參聞レ命矣（孝經） I 二九一、三七〇
曾子曰十目所レ視十手所レ指其嚴乎（大學） I 一三〇、五一五、五六一
其傳則曾門之諸賢取下曾子發ニ明聖學一之意上以記レ之 I 五一二
曾子曰夫子之道忠恕而已矣（論、里仁） II 八〇
曾子 III 一七八、一八九、二六七—六八、二七三
曾子之三省自反之切實者也 V 四三六
曾晳 III 二〇九—二四

葬

葬禮には父の位を以葬り祭には子の位を以祭る II 一五二

蒼

蒼生菜色飢餓之時 V 五〇一

僧

僧盤珪 V 一四二

慥

慥慥は篤實なる意 II 一三六

臧

臧獲輩梢和不レ褻（藤樹先生之風丰） V 七五

繅

繅者皆蒙ニ水草之文ニ云々 I 三九五、三九六、四三三
繅藉 I 三九六、四三三

總

總州古河 V 一〇〇
古本大學旁訓中の括意若くは總注は門人の作なるべし I 五四九

聽

先生聽慧精敏器宇弘深 V 四八七
先生非ニ獨德容可ヒ敬聽明才智亦不レ可ニ企及一者云々 V 三六

贈

（贈遺に對する先生の謝禮） II 五二〇、五三七、五四六、五四九、五五四

タ（ダ）

チ

ト（ド）

總篇一篇梢活ニ　I 四九四
ときの中みほきにみなし世わた
らん心の栓をとり〳〵のふれ　I 二二六
其の可に當るを時といふ(禮、樂
記)　II 九三
時措之宜也(中庸)　II 一九四
時使薄レ斂(中庸)　II 一七四
時の字工夫の準則活法　II 三〇七
時(天時を看よ)

得

得脫　III 三二〇
得居牛右衛門　V 一八五

德

有レ德此有レ人(大學)　I 五三七、五七三
知レ德者鮮矣(論、衛靈公)　I 一三三
口耳訓詁之學而不レ知レ德　I 一一九
是故君子先愼二乎德一(大學)
　I 五三七、五七三
子曰夫孝德之本也教之所二由生一
也(孝經)　I 二六四、三〇八
富潤レ屋德潤レ身心廣體胖(大學)
　I 五一五、五一六
明德者人性之總號德得也所レ得二
于天一　I 五〇五
樂記曰德者得也言人之所レ得レ
天而無二人而不一レ自得一也　I 一六三
德者本也財者末也(大學)
　I 五三七、五七三
德愛曰レ仁　I 二二九
周子曰德愛曰レ仁宜曰レ義　I 六五〇

愛出レ親而發則至公無欲而爲二德
愛一　I 三二一
就二德愛之至公無妄處一之謂レ仁
就二德愛之親切無欲處一之謂レ孝
其實一而已　I 三〇三
陳レ之以二德義一而民興レ行(孝經)
　I 二七三、三三〇
德義可レ尊作事可レ法(孝經)
　I 二八二、三五一
故能成二其德教一而行二其政令一
(孝經)　I 二八三、三五一
愛敬盡二於事一レ親而德教加二於百
姓一刑二于四海一(孝經)I 二六六、三一五
畏二天命一尊二德性一(論、季氏及中
庸)　I 一二二、一二三
尊二德性一道二問學一(中庸)
　I 三六、二〇〇
君子尊二德性一而道二問學一(中庸)
　II 三〇四
尊二德性一道二問學一之功　V 五一三
(道と德)　II 二〇三
德明なるときは名壽の二つも其
中にあり　II 一四九
德爲二聖人一尊爲二天子一(中庸)
　II 一四七
德は得なり　II 一四七
德(明德を併せ看よ)
　III 一二八—一三〇、一八六—一八九
德教　III 八七—八八

德治　III 一三四
德性　III 一六三、一七〇、四一三、四八一
德になびきし民草　V 五二一
(德より生する才)　V 四四四
德從二至孝一立二仁本一　V 五一五
德得也所レ得レ天之理所レ謂良知
良能也致二良知一耳也　V 三一〇
德岡主殿小野久風　V 一六六
德川賴宣　V 二四九
(中村)德勝(鸞溪を併せ看よ)　V 一七四
想二像其德義風采一感發不レ少焉　V 四九一
德行之君子也(矢部湖岸)　V 四〇四
德光ありて下位に嘿し給ふV 二三
德田氏　V 一七二、三三五
德田彦六　德田彦六寄隆を併せ
看よ(補傳第三十七項)　V 四四四
德田彦六寄隆　V 二八六
德風不レ盡萬斯年　V 一一四
德本堂御下賜に關する書類
　V 二二四
德本堂三大字
　V 一六六、一七七、二二一、四八三
寬政中正二位右大臣一條藤公忠良
奉レ旨書二德本堂三大字一以賜レ之　V 三七七

篤

窮理と篤行　I 一一三
若二夫篤行之事一則自二脩身一以
至二于處事接物一亦各有レ要　I 一三四
篤志の友(良知)　II 四八四

讀

讀四書法　I 五八三、六二〇、六三三
讀大學法(四書大全)　I 二五一、六二一
先生の讀書の態度　I 三九四
凡讀書之法先看二得主意一而后字
々句々詳玩將去則不レ失二其本
指一而得二其竅一　I 一六六
讀書不レ可レ貪レ多當下且以二大學一
爲上レ先(四書大全讀大學法)I 二五三
先生の讀書法　I 六二八
(先生の讀書法)　II 一〇三—一〇六
凡そ讀書の法先づ主意を看得し
云々　II 一〇四
讀書は本來吾人心性の註解　II 四〇六
讀書のみを學と誤解す(俗學、記
誦を併せ看よ)　III 二八六
(後柵)讀書錄(頭註)　III 三六五

獨

獨(シンドクを併せ看よ)　I 五
學者洗二濯氣習名利之舊染一而克
愼レ獨則貌言視聽思每率レ性云々
　I 二三三
故君子必愼二其獨一也(大學)
　I 五一三、五一五、五五九、II 六〇
獨字之者(十四)　I 一八九—一九〇
獨者一念獨知之靈明　I 二九
志者成德之種子而獨者種子中之
生性也　I 一八四

ニ

ヒ（ビ）

フ（ブ・プ）

へ（ペ）

ホ（ボ）

命

モ

ラ

世無二良知一一大欠事也　Ⅴ七三
良知（知及び致良知を併せ看よ）　Ⅰ五
孟子所レ謂良知是也　Ⅰ二〇、一一九
（知者不レ待二試爾一之良知一孟、告子上、盡心上）　Ⅰ一六
一體不レ可レ息之良知　Ⅰ五〇六
良知不レ滅玄　Ⅰ一八〇
至二治國平天下一亦只擴二充親愛之良知一　Ⅰ五〇六
指二至誠無息之良知一謂二至善一　Ⅰ一八五
指下所二以繼之嘉二母鷄一之良知上而困二示仁之無一レ不レ在　Ⅰ六六五
（身體髮膚受二之父母一）此一二句明下親子一體而無二物我之間一之理上以觸レ發愛レ親敬レ親之良知一也　Ⅰ三一〇
充二此良知一便是大孝基苗　Ⅰ六五
欲レ平二天下一者度レ之以二良知一良知卽所レ謂矩也　Ⅰ五三三
心之良知斯之謂レ聖　Ⅰ三〇
日用良知惟至誠　Ⅰ九七
人所二以不レ能レ入レ德者以下信二意念一信得不上レ及二良知一也　Ⅰ五一三
一貫之黨竅字レ之曰二良知一　Ⅰ一四
知良知也　Ⅰ五〇三、五一〇
所レ惡是良知也毋レ以是格物致知也　Ⅰ五三四

（善知二來學之義一）此知也不レ學不レ慮所レ謂良知也　Ⅰ一七八
蓋獨者良知之殊稱千聖之學脈也　Ⅰ一八九
良知之體純一無雜　Ⅰ二三九
獨者良知之別名　Ⅰ五一三
至善者良知之別名號誠二於中一形二於外一者也　Ⅰ一八六
敬レ親之良知日新　Ⅰ六八〇、一四六
良知之明萬古一日（王陽明全書卷二、及傳習錄中卷）　Ⅰ一五八
凡そ善惡是非の標準の如きは心の良知既によく之を知る　Ⅰ一五八
或問無レ量之分數何以知レ之乎哉曰人々固有之良知能知レ之　Ⅰ四五五
良知雖レ見二于方寸一與二天地鬼神一同レ體　Ⅰ五一五
不學不慮之良知良能　Ⅰ五二八
人人固有之良知良能也　Ⅰ二八〇、三四七
先致二其良知一　Ⅰ一八〇
致二其良知一則正命斯立矣　Ⅰ二〇三
君子唯致二其良知一而已矣命分豈足二論辨一乎哉　Ⅰ二〇三
以二良知一照二察其意念之攙雜於接物應事之間一而正二其不レ中レ節者一致二其良知一此謂二格物一　Ⅰ五〇三、五一〇
良知（孟、盡心上）　Ⅱ一三、一五、一六、六二七
愛敬の良知　Ⅱ一六
當住不昧の良知　Ⅱ四六
（氣と心と良知）　Ⅱ六〇三
（氣象と其の根源良知）　Ⅱ三九八
知レ善知レ惡是良知（四言教）　Ⅱ九七
知レ愛知レ敬是良知（東正堂）　Ⅱ一〇〇
己は身の私欲を云五事の良知を欺き道を離るゝもの　Ⅱ八六
彼事（良知）を知てからは侍の望も知行の望もなきことと也　Ⅱ六〇一
誠は良知を指す　Ⅱ四五
由レ人は自家の良知を不レ知不レ信して外に求るを云　Ⅱ八六
良知を主として意念の己に克を知に致ると云　Ⅱ三一
良知を善の本體として良知にそむくを惡の本色とす　Ⅱ一〇〇、四五五
一點虛明の良知原來天に得て至誠無レ息　Ⅱ一六四
心の良知知二此是非一　Ⅱ一三〇
人々不昧の良知卽ち聖人の胥と同レ體　Ⅱ一二七
良知卽善也　Ⅱ四五五
良知天然の師　Ⅱ五〇九
良知と云ものは夏かやの内にひとりころりとれたる様なるものなり　Ⅱ六〇〇

大學古本を信じ致知の知を良知と解しめされ候　Ⅱ四四一
（一體の心は眞是を知り眞非を知るより良知と名づく）　Ⅱ九三、一〇一、一三五
道は本體大學に所レ謂良知也　Ⅱ五九
有レ物有レ則（詩、大雅烝民）有レ則良知也　Ⅱ六〇四
人欲を克去て良知に致る　Ⅱ九五、一三七
良知に致る力　Ⅱ三九〇
習心の病物にて良知に致ことを不レ能　Ⅱ一六七
格物致知の工夫五事の非禮を格して良知に致るにあり　Ⅱ一〇三、一三七
良知を善の本體として良知にそむくを惡の本色とす　Ⅱ一〇〇、四五五
良知には隱見顯微なし　Ⅱ六二
微は念慮の微良知の感通を指て云　Ⅱ六二
良知之下知　Ⅱ四六八
良知の實體愛親敬親の心是也　Ⅱ五〇〇
現在之心不レ動レ欲不レ滯レ物時溫和慈愛恭敬惺々底の心良知の實體にて候　Ⅱ四五九
良知の所レ知を主として五事の

ロ

ワ
(ヰはイ、ヱはエの條下を看よ)

記號又は特別の文字の説明

〔再刊追記〕

索引中に「藤樹學源流考」參照と記したるものあり。是は皇紀二千六百年並立命館大學創立四十周年記念論文集中の拙稿に係る。全集全部の淵源的解説を試み、且つ藤樹先生讀書年譜に代り得べき内容を有す。全集愛讀者の必ず參考せられんことを望む。（藤陰）

總目次總索引終

補遺並補正（附）再刊追錄

十年あまりはぐくみ來にし此の文をいよ〳〵世に送り出さんとすれば、此をも持たせてあれをも添へてと、いとしの妹子を他家に嫁がしむる親の心地もて、さらでだに後れに後れし發行期日のいそがるゝをも顧みず、かくは掻きあつめつ。資料の所在を知らする人もあらば、此の後とても增補の事に從はんのみ。（編纂同人）

第一册

第八〇頁九行「門弟子齋藤亥巳が作詩の斧正を乞ひ先生が之を批正せられたり云々」と記したるは、第五册四五八頁に見ゆる傍記「情相契合無離意」の七字を以て先生の眞蹟なりと誤認したるに由る。精究の結果此の傍記は先生の眞蹟に酷似しつゝ猶且つ親炙の門人の筆なりと斷ずべき理由あり。卽ち先生の筆意をおのづから感得し體得したる某門人ありしことは、孝經啓蒙書院寫本特に大學朱子序圖說敬寫等に於て之を證するを得ればなり。されば斧正を乞ひたるは事實なるも、先生が之を批正せられたりとの一句のみは之を削る。

第一三四—五頁現存眞蹟の藤樹規は極めて貴重なる資料なれば原本のまゝ茲に轉載す。八脩目は八條目の誤、下文第二頁末行「其」の字と「如レ左」との間「別」の一字を逸す。功郊也は當に功効也に作るべく、脩列も亦當に條列に改むべし。

敬者敬其事也聖賢於事雖無所不敬而此又事之大者故特以敬言之

父子有親者　言有父子則自以慈孝有相親愛也是乃當然之則而自不容已得天所賦而非人所能爲者也言父則母在其中矣下放於此

親者愛也近也言父以慈育其子子以孝事其父而相愛近也

義者事之宜也君使臣以礼臣事君以忠皆合事之宜以成君臣不然則相離

有別　男女不雜坐不同椸枷不同巾櫛不親授受之謂夫婦無別則相瀆々則相離了

長幼者事兄以弟待弟以友之謂也

信以實之謂蓋朋友亦以義合交之不以信則失朋友道而中絕

藤樹規

藤樹者有所取法之称蓋規者正圓之器也此文於爲學猶規之於正圓故謂之規

大學之道在明々德在親民在止於至善　八條目包在此中矣

朱子曰堯舜使契爲司徒「舜之臣之「掌教之官之敬敷「者布之五教五教者父子有親君臣有義夫婦有別長幼有序「次第也出入門戸及卽席飲食則必後長者之謂也朋友有信是也學者學此「指五教而已愚按三綱領之宗旨壹「一切也是皆以五教爲定本而其所以學之術「指五教「者脩爲之方也存養「存養德性也以持敬爲主進脩「進ハ進德脩ハ脩身以致知力行而日新其別如左

畏天命「猶令之「者指上帝言尊德性「者恭敬奉持之意

德性者上帝之所以命人而人之所以臣受爲人之正理卽明德是也

右持敬之要進脩之本也

博學之審問之愼思之明辨之篤行之　學而又問則取於人者詳思而又辨則求於心者精如是而后可以行矣

右進脩之序「ハ次第之斈問思辨四者所以致知也若夫篤行之事則自脩身以至于處「制也定也事接物亦各有其要如左

宗本也又流派所出爲宗
持敬者謂拳々服膺本心欽明之德也
天命者上帝所賦之正理也無物不有無時不然
博學之者博於文也審者問必審而后有以訂其所學之疑也
愼者思必愼而后有以研學問所得而自得於心
明者必明而后有以別其公私義利眞妄於毫釐疑佀之間
忠者盡己之謂信者以實之謂
利者非謂貨財而已以私滅公適己自便凡可以害天理者皆利也
己者以己之心度人之心未嘗不同則不過推己以及人而已
記誦口耳之學之
詞章枝葉之文之

言忠信行篤敬懲忿窒慾遷善改過（則德日新之）（學問之道無他知其不善則速改以從善而已）

右脩身之要

正其義（義者事之宜）不謀其利明其道（道者日用事物當行之理皆性之德而具於心無物不有無時不然）不計其功（功效也）

右處事之要

己所不欲勿施於人行有不得反求諸己（○反求諸己者我待人省以不仁無禮乎之謂 ○行有不得者人之待我以橫逆之謂）

右接物之要

原竊惟今之人爲學者惟記誦詞章而已是以吾道之所寄不越乎言語文字（枝也）之間愚嘗憂之也深故推本聖人立敎之宗旨（指三綱領）而參以白鹿洞規（指此規言）條（行次也）刻如右而揭（擧也）之楣間庶幾與一二同志固守力行之也

寛永己卯四月二十一日　中江原謹記

（愛媛縣喜多郡内子町　曾根高重氏所藏）

第六三一頁第二行大屋督氏藏有「持敬圖說」は其の後同氏の邸に於て實物を觀たるに猶岡田氏本なることを知り得たり。○同文中の「獨」の字は「猶」の字の誤植なり。

第二冊

倭書補遺「與二谷川氏一」五〇二頁附記會津北郷藤樹學派所傳東京故齋藤一馬氏藏藤樹先生眞蹟には宛名を谷勘兵樣に作る。（第五冊（三〇〇—一）挿畫參照）

第三冊

「春風」の中の伊豆の淨土房の話は沙石集によれり。文章も殆ど原據のまゝなり。

一二〇頁　頭注　馬の段の圖。段とは馬の優劣の等級をいふ。織田信長の時、梶川彌三郎及び矢代庄助は共に無双の馬の目利たり。二氏の流儀についての說は可なり複雜なるが如きも、要は七段の考を立て、馬の形を圖に表現して相傳したるなり。これを段の圖といふ。（山鹿素行武家事紀による。）

三〇六頁　解題中、一三行の「二つあり」を「三つあり」とす。

一四行の「尙」を削り、「遊女との話」以下を次の如く改む。

遊女との話は沙石集に出づるものにして、文章も殆ど原據のまゝなり。尙卷二にある節を守る妾と守らざる妾との故事も日本の說話なるべし。名高き話にて安井息軒の睡餘漫筆にも引きたれども、未だ出所を考へえず。但し息軒の文は鑑草より詳しければ、息軒は鑑草によれるにあらず。

第四冊

「藤樹先生全書岡田氏本目錄」によれば「神方奇術」は正保元年甲申先生三十七歲の作となす。又五臟圖なるもの附せられたる由見ゆれども、今は傳はらず。

第五（別）冊

一、門弟子並研究者傳第四項「淵岡山」に就いて

岡山の出産地　編者本冊門弟子並研究者傳第四項に於て淵岡山の出生地を仙臺となしたるは、岡山先生示教錄追加・北川子示教錄・北川親懿翁雜記抄・會津藤樹學道統譜等の諸書に岡山を以て陸奥仙臺の產なりと明記せるものあるに據れる爲なり。特に北川子示教錄載するところに依れば、岡山自らの物語に仙臺に罷下り母に逢ひたることをいへるあり。（第二六一頁参照）而してその次に遠藤謙安老の直筆にて其節書記被レ致たる覺書を得たりとて左の文を載せたり。

天和三年亥五月十七日松島一見に宿を出、米澤に泊り、十八日上の山泊り、十九日川崎に泊り、廿日の九ッ過に仙臺國分町新井庄左衞門所へ着暫らく休息、夫より琵琶首之内小田邊權右衞門を尋ね、則樣子聞、村上傳左衞門殿御宅にて岡子へ懸二御目一候。廿一日に御一家衆御茶湯御振舞に候。廿二日之曉（まゝ）より神谷澤淸兵衞殿宅へ移寐起す。廿七日に松島へ着、洲崎町善兵衞と申者の所に一宿、村上氏父子は案内にて樣々馳走有、宿も二軒に成る、上下三拾人程、翌日早朝飯前に舟に乘り、海中大裡島にて食し、

岡公松島にて

君が御代をげに松島と詠れば月もおしまの磯にすむなり。

大裡島にて

さらでたに都の空のなつかしき雲のうへ島のぼり〳〵て。（初めにし、後御直し、）

塩釜へ九ッ時分着、明神釜などみて神谷澤へ歸る。廿九日仙臺ぢやくひ村上氏へ歸る。岡公御父子は神谷澤に御泊り、同道は田中全立叟・井口久右衞門・荒井七郎兵衞・森川市郎兵衞・東條次郎三郎（長五郎若名）矢部甚五郎（宗四郎弟也）某（是は庄七郎なるべし。）

私云、田中全立・井口・荒井・森川之四子は、京都より御供にて下向、遠藤・矢部・東條之三子は會津より御歸京之節御立寄之爲使仙臺へ被參候。御延引被成候趣田中子より會津諸生への書簡、是又子親よし自云致所持候、岡師會津御下りは右前後之内年號未考也。

仙臺町にて四番丁村上安太輔殿ひわくひ小田邊權右衛門殿小田邊勘九郎殿是は權右衛門ひわくひ嫡子歟、村上長九郎殿同弟次郎吉殿村上清兵衛殿同八兵衛殿嫡子 村上兵衛次男 大友三郎兵衛殿最上海道脇長谷藏にて 村上傳右衛門殿大町 杉山四郎殿八幡丁吉田新右衛門

私、右之衆中岡山先生之御親類と見ゆ。定て士官の方共にて可有之候。

又岡山先生示教錄追加に「吾儕老衰之身として今度陸奥の國まで罷下候は亡母之墓に詣ふの爲も候」との語あり。以上の資料に依りて併せ考ふる時は、仙臺を以て岡山の出生地となすには相當の根據あり。然るに昭和四年四月本冊將さに校了に近づかんとせる折しも、圖らずも京都市上京區寺町丸太町南入山本臨乘氏に面晤したるに談偶、淵岡山の事に及ぶ。氏曰く今より三四十年前「本朝儒名志」寫本と題する書を見たることあり。此の書は本邦に於ける儒者の傳記を國別に記載せるものにして著者並年代詳かならざれども、書中伊藤仁齋を載するも東涯を載せず。且つ載するところの公卿補任等の年次によりて考ふるに恐らくは寶永七年頃の著述ならん。中に淵岡山の生國に關する記事ありたりとてその拔萃本を示さるゝを見るに、

淵惟元名友姓大神稱岡山交名四郎右衛門生國攝津後在京前名宗誠

との文字あり。岡山の生國を以て攝津となすが如きは頗る異聞に屬するものなるを以て一說としてこゝに揭げ以て博雅の士に質し且つ後考に備ふ。

因みに編者一日京都帝國大學圖書館に就いて此の書の閲覧を請ひしに、該館に在つては、もと藏書中に在りしものなるも、今は現存せず、唯記錄中に左の文字あるを知り得たり。

本朝儒名志 寫本 一冊淺江種寛（可敬）著寶永丁亥（四年）の序あり。

淵叔繼甫之墓　編者は誤つて門弟子並研究者傳第四項に於て京都東山永觀堂なる淵氏一家の墓域中に標記の墓碑の存することを脱せり。卽ち左の如し。

淵叔繼甫之墓

淵岡山第三子姓太神諱惟統字叔繼稱二文三郎一延寶庚申九月五日誕。元祿己卯閏九月二十一日享年二十而卒。

岡山先生の姓　岡山は姓を淵と稱したる外また岡といひたることもありたり。北川子示教錄に「備前之熊澤了海聊之義有」之公儀より嚴敷御糺有」之砌、熊澤氏は先師之門人にて先生も御親しき人故御延引遠慮の事か被」成、栂尾是も洛外に有」之由と申所へ御引込被」成其節岡源右衞門と御改被」成候云々といへり。また既記淵叔繼甫之墓の碑陰に姓太神と誌さる。此は山本臨乘氏の示されたる本朝儒名志の抜華に姓大神とせると酷似す。されば淵岡山が太神姓を冒せるものなることは、また爭ふべからざるものならん。

岡山先生の名　本全集卷之四十二藤夫子行狀聞傳第二十一頁に丙辰年秋ノ季朔此地奉」勸二請高千穗大明神一云々の文に淵万再拜の文字あり。岡山先生が万と署名せるは唯こゝに見ゆるあるのみ。然るに既記山本臨乘氏の示されたる本朝儒名志抜萃には「名友」と識せり。山本氏曰く、友の字原本には反とも見え、また友とも見えたり。種々推敲の結果友として寫取りたるものなり。或は万反友の三字の一が轉寫の際草書によりて誤れるにはあらざるかと。

岡山先生の稱號　北川子示教錄に「岡山と京都近くに有之由中所に住居被成候に付諸生岡山先生と稱し候。」といひ、北川視懿翁雜記抄には「先師御終焉後は帝都岡山と云所に出給ひ、門弟子を集めて藤樹の學を任じ給ひ。」と云ひ、會津藤樹學道統譜には「住洛外岡山、故門人稱岡山先生」といへり。」と見ゆ。然れども由來洛外に岡山と稱する地なし。而して湖學紀聞に「淵宗誠略初居洛之雙岡、號岡山」といへるは別に據るところありしか。今知るに由なし。按ずるに雙岡は葛野郡に屬し京都一條西京極の西に在り。古來文人墨客の往々隱棲せるところなれば、淵岡山が延寶二年葭屋町に學館を築きし以前に在つて此の地に住して教學を張れりとなすは有り得べきことなるべし。また洛外に船岡山あり、愛宕郡に屬し大宮村紫野の西偏に在りて洛中千本通の正北に當る。或人曰く、「會津方面の書類に岡山といへるは或は此の船岡山を指せるにはあらざるか。」と。或は然らん。然れども、此は單に想像に過ぎざれば今何れとも定め難し。編者竊かに以爲らく、淵岡山が雙岡、または船岡山のその何れに住せるものなるか今詳かならずといへども、淵岡山が自ら岡姓を冒せる等のこともあればその住居せる地名と相關聯して終に岡山先生と稱するに至りしものにはあらざるか。

二、門弟子並研究者傳第五項「一尾伊織」に就いて

京都市山本臨乘氏の筆錄中より左の記事を得たればこゝに掲ぐ。

梧菴筆記（建仁寺僧也）

一尾伊織ハ御旗本ニテ三齋ノ傳ヲツギ茶事ニ精シク平素ハ至ツテ壯健ナル人ナリ死期ニ至ルマデ朝夕三杯ノ食ヲカヽセシ事ナシ只耳ノミトフクナリシト行住坐臥茶事ノミヲ樂シミ又細工ヲ好ミ茶杓花生ノ類ヲ多ク作ル一庵ト書スコレハいちいほりト書ク心ナリト琵琶ヲモ好ミヨク彈ジタリ云云。

三、常省先生の書狀

滋賀縣高島郡水尾村大字武曾万木長茂氏藏幅に藤樹先生の安㆑分身無㆑辱云々（資料一覽表藤樹先生の眞蹟五四九頁參照）の眞筆五言絶句あり。常省先生が之に附點して門人前田久弥に與へられたる書簡亦同じ藏幅に見ゆ。加藤主任の希望により昭和四年五月廿九日前記万木氏の親戚京都市大和大路松原南櫻井彌太郎氏令室秘軸を奉持して主任の寓を訪ひ、之を提示せられたれば、茲に附載して常省先生文集續篇に加ふ。

一昨日ハ得㆓貴意㆒珍重に存候愚夫儀も弥明日罷立候て頓て罷歸可㆑仰㆓賢慮㆒候然ハ先日之詩之點少付あやまり之樣ニ存候所候間左ニ改書付いたし候乍㆓少儀㆒意味餘程相違申し候故如此御座候尤不㆑及㆓御破㆒候恐惶頓首

二月十一日　　花押

安（スレハ）㆑分（ヲ）身無（ク）㆑辱（ハズカシメ）
知（レハ）㆑幾（ヲ）心自（ソノツカラ）閑（之）

（以上）

〆　前田久弥様
　　几下
　　　　　　　　中江弥三郎

（罫線の内の文字は紙を巻きたる裏面に認められたるものなり）

四、藤樹先生頌德唱歌

岡部讓作歌
山本正大作曲

一

良知の學を興しつゝ　近江聖人と稱へられ
名も高島に千木たかく　しづまりゐますたふとさよ

二

道德あつくをさめつる　かしこき蹟をめでたまひ
天皇命も位をば　おくりたまへるたふとさよ

三

神の御門に今も尚　さかゆる藤の花かつら
ながき世かけてかぐはしき　その功績のたふとさよ

（文部省檢定濟、滋賀縣下小學校唱歌科用）

五、唱歌　藤樹先生

堀澤周安作歌
鈴木重太郎作曲

一

近江聖人の生立ちし　郷は此の郷山川も
草木もなべて在りし世の　昔を語る心地して
遺る敎を仰ぎつゝ　辿るも嬉し人の道

二

城山高くいつかるゝ　君が御像を拜めば
古人に目のあたり　まみゆる如き心地して
何とは知らぬ尊さに　思邪なかりけり

（大正五年九月　大洲藤樹會發行
藤樹先生銅像除幕式記事所載）

補遺並補正　終

(附)再刊追錄

目次

國字牘

卷之四十八　景慕詩文集

序

跋

題

書

祝文

詩

藤樹先生逸事

先生幼年の頃、國主郡宰等の通行に逢ひ玉へば、路傍に跪き敬禮を爲し玉ふ。若室中に在りて之を聞き玉へば、其方に向ひて端座して遙かに敬意を表し玉ひき。

先生少年の頃、諸書の中より箴戒の語を取り、之を壁間に貼付し以て準則と爲し、强めて之を行ひ玉ひき。

先生母氏を思ひて止み玉はず。屢〻致仕を請ひ玉ひしかども許されず。國老佃氏に書を遺し遂に豫州を去り玉ふ。其文に曰く、

今度私御暇之儀言上被成下候得と奉願候に付而云々(文長し、錄せず)以下第二册四七九頁及本册一五頁參照

先生歸郷の後、子弟を集めて聖學を教授し玉ふ。遠近より來り學ぶ者日々に多し。先生諸子の爲めに一棟の長家を建て之を會所と號し、此所にて御講義あり。又折々諸子と此所にて御談話ありたり。

先生嘗て一人の農夫の務と自身の作用とは一般なりとの玉ひ、會所に在す時、一座の議論深切ならざるときは淀舟ばなしになりたり。我等は年貢をはかり申すべしとて表家へ歸り玉ひき。

先生深く先哲を尊崇し、床の間に道統傳の一軸を掛け、毎朝昧爽に起き出でゝ御盛服にて香を賁き禮拜し、次に孝經を讀誦し玉ひき。

先生毎朝孝經の感應篇を讀誦し玉ふに、始め御聲高かりしが、晩年に至り御聲特に低く御口の內にて誦し玉ふ。或時聲の高きは外に向ふの氣味ありとの玉ひき。

先生嘗て大學も中庸も經一章にてすむ事なり。論語は聖賢の言行を記したる所に今日に合はざること有りとの玉ひて、諸子に書きぬかせて其必要の所をのみ講じ玉ひき。

先生中庸を講じ玉ひし時、門人中に注解を見合せて御講義を聞きしものあり。先生之を不可なりとの玉ひき。

先生毎に門人に向ひ、凡そ何事にても取廻しある由をの玉ふ。又談話をなすにも拍子ありとの玉へり。

先生嘗て門人に告げ玉はく、世間をみるに何人と雖ども毎日の仕事あり。此學問も亦仕事なれば他岐に渡ることとなく、皆々仕事をすべしと戒しめ玉ひき。

先生嘗て門人に向ひ、天下の事皆主意あり。主意を知らざるときは事を爲し難し。必ず之を辨ふべしとの玉ひき。

先生初學の者に向ひては、學問の始めは志を立つるより先なるはなし。憤を發し志を立つるの法は、此學は天下第一等の學、人間第一の義にして、別事の做すべきなく、別路の走るべきなしと見るべしとの玉ひき。

先生孝經を御講義ありし時、非二先王之法服一不二敢服一と云ふに至り、此法の字は水を以て去といふ意なり。此字尤も着眼すべし。水は活潑周流して凝滯なし。聖人の法式は國風により時と位とによりて中正の極を立つ。毫厘も人情に違ひ逆ふことなきものなりと說き玉ひき。

先生或時萬木といふ所へ請待に應じて大學を講じ玉ひしことあり。時に門人五六輩從ひ行きぬ。門人等思ふやう、今日は此聖人の斯學を尊信すべき始めのことなれば、必定美々しき御議論もあるべしと窺ひ居たるに、常體にて矢張三綱領を御講義ありしのみなりき。

或時水無瀨中將殿御入來の由にて門人等庭前を掃除しけるに、先生御覽ありて斯く掃除すれば氣分も潔し。良知の學も亦此の如し。去り乍ら掃除をさへすれば潔くなるべしと平生に思ひ居るはまた異なことなり。居所の不掃除なるも旅屋と思へば與らざることとありとの玉ひき。

先生門人中川某(權左衞門?)が莊子の大簡飛揚論を悅びて狂見に走れるを憂ひ、或時門人中西某に向ひ、中川子の狂見に走りしは甚憂ふべきことなり。假令我子を失ふとも斯くは憂ふまじきなりとの玉ひしを、中川某傳へ聞きて大に驚き懼れて、先生に見へ怨言しけるは、私幼年より先生を信じ身を先生に委ぬ。是敢て名利を求むるの意あるにあらず。只正脩を求むるのみ。先生御異見の事あるは何ぞ烝(亟?)かに正し玉はずして此過ちに墜らしめ玉ひしやと。先生之を聞き顏色を正しての玉はく、然り君子は人の非を云ふに忍びず。我不肖なりと雖ども亦君子を學ぶものなり。故に妄りに言はざりしのみ。今にして之を言ひしは是實に止むを得ざるの良心なり。吾子之を思へよと。中川某悚然として其過ちを謝せしとぞ。

大濱侯の臣別府某は小川村の令なり。一日小川村に來りて事ふに當り村民某過ちて法に觸れ縲絏に罹る。村民等先生に請ひ別府某に說き、彼れが罪を免されんことを求む。先生其夜別府某の寓舍に往き談話して夜半に至る。一言罪人の事に及ぼさずして歸り玉ふ。村民大に之を異む。先生の玉はく、別府某の顏色解けたり。汝等憂ふること勿れと。翌日果して彼の者赦免となりぬ。或人別府某に其故を問ふ。別府某曰く、前夜先生の來られしは彼れの罪を謝せんが爲なるべし。然るに一言其事に及ぼされざりしは我が令たるを敬し玉ひてなるべし。先生禮儀を重じ玉ふ斯の如し。謝する○堪へず。故に彼れを放免せしなりと語りしとぞ。

先生或時の玉はく、日本國中は廣大なることなれば、野の末山の奥に至りなば聖賢の域に會ひたる人品も必ずあるべし。左樣の人品を求め得て親炙ありたきことなれども、左樣の人品は求め難き道理なり。如何となれば、其處の風俗により、書籍なども弄ばず。萬事不案内にして聖賢の域に會ひたる人ありとも、其を見辨ふこと能はざるべし。是を以て求め難きなり。世に鳴り渡りたる學者などは先は取に足らずとの玉へり。

以上の十有八件は行狀中に遺漏せしを以て玆に之を誌し畢ぬ。

（附記）以上、志村全書第一册より採る。底本句讀點なし。今之を施す。濁點傍記皆編者の私意に出づ。本全集第二册末尾志村全書の檢討及び其の取捨參照。（藤陰）

（附）

(一) 江湖先生祭儀

父母ニムマレテ父母ヲナミスルハ鳥ニダモシカズ。聖人是ヲナゲキ玉ヒ、教人以孝、夫孝者近以事父母、遠以事天地、孝之於人、魚如水中躍。離孝無身、離身無孝、父母存則事以和父母、父母死則事以安鬼神、シカリトイヘドモ父母之恩天ヨリ高、地ヨリ厚ユヘニ無終始。シカルヲ況僧出家ヲタノムヲヤ、烏反哺ノムクヒトテ生レテ飛フトキハ、三十日母ニ反シヤシナフ、人以孝無トキハ禽獸ニモヲトレリ。

(二) 同祭禮

朔月

若主人無暇ツマタルモノ夫ニカハリ祭之ソノトキハ不出神主ヲ不降神〆可也

朝 祠堂ヲ拂葉子ヲソナフ

降神 香ヲ焚茅砂ニ酒ヲソヽク

僾酒 トハサケヲ神主ノ前ニスヽメスユルナリ

出 祠堂ヨリヲリルナリ

辭神 トハ祠堂ヘアカル人ハ皆再拜ス

參神 櫝ノ戸ヲヒラキ主ヲ出シ皆再拜スシハラク默ス

俯伏 俯伏トハソコテウツムキヲカム少シ退キ再拜ス

點茶 ツマタルモノ神主ノ前ヘ茶ヲスヽメスユルナリ

入 祠堂ヘアカルナリ

望月

朝 前ニヲナシ

酒 ヲスヽメス

出入 共ニ前ニヲナシ

參神 前ニヲナシ

點茶 マヘニヲナシ

辭神 前ニヲナシ

三日齋戒 トハ三日前ヨリ身イサキヨクシ心ヲイマシメツヽシムナリ

一日前祠堂ヲ掃器ヲ洗ナリ

孝子 祖父祖母ニハ孝孫トカク　名今以遠諱之辰有事于

顯祖考 祖母顯祖妣トカク祖父祖母ニハカクノ如ク書ス　名ノリヲ書キ名ノリノ下ニ府君トカク

父母ニハ顯考顯妣トカクナリ

辭神 トハ祠堂ヘアカル人ハ皆再拜ス

望 月

朝 朔ニヲナシ

酒 ヲスヽメス

出入 共ニ前ニヲナシ

忌 月 祥月ノコトナリ

一日前祠堂ヲ拂器ヲ洗ナリ

朝 酒掃シテ櫝ヲヒラキ焚香告曰

孝子 祖父母ニハ孝孫トカク

名ノリヲカキ

顯祖考 名ノリノ下ニ府君ト書
祖母ニハ顯祖妣ト書

敢請神主出就位恭伸

追慕

出主 夫 祖父父ノ主ヲ出ス
妻 祖母母ノ主ヲ出ス

降神 茅砂ニ酒ヲソヽキ
朔月ノ所トヲナシ

初獻 主人注ノ持テ盞ニ酒ヲスヽム
其酒茅砂ヘ少マツル

亞獻 婦ダルモノ酒ノ酌酒少茅砂ヘ
マツル俛伏シテ一拜ス

侑食 婦ダルモノ審ヲサシ盞ノ中
ヘ酒ヲソヘ俛伏ス

出 出テヲルコト一飯ノ間

參神 前ニヲナシ

點茶 前ニヲナシ

辭神 前ニヲナシ

三日齋戒 トハ三日前ヨリ身ヲイサキヨク
シ心ヲイマシメツヽシムナリ

名今以遠諱之辰有事于

父母ニハ顯考顯妣ト書

參神 男ハ東ニ坐シ女ハ右ニ坐
再拜ス坐ニツキ默ス

進饌 夫 祖父父ノ饌ヲスヽム
妻 祖母母ノ饌ヲスヽム

讀祝文 俛伏シテ興シハラク
ソコニ默シテ再拜ス

終獻 一門マツルモノ前ニヲナシク酒ヲ
クム一門ナキトキハ主人祭ル

入 坐ニツキサテ主人茶
ヲスヽメ再拜ス

辭神　再拜ス

祝　文

維
年號何年歲次乙卯何月庚辰越戊未朔何月乙丑　孝子　何某
敢昭告于
顯考名ノリ名ノリノ下ニ府君トカク
歲序流易諱月復臨遠感時門天罔
極父母ノニハ永慕トカク不勝　謹以酒饌用伸奠獻
尙
饗

（附記）以上二項は門人郡正眞及び其子正屋の筆寫に係ると斷ずべき「藤樹先生書簡」と題する寫本中より採錄す。祭儀の文には新に句讀點を附す。委細は後文門弟子詩文集末尾に附したる卑見參看。（藤陰）

一、池田光政

伊豫近藤佶氏藏有且つ同氏帶同來示に係る池田光政公自筆の銀箔扇面に左の如き文字あり。前文後文並に芳烈公の筆とす。編者は大阪市田中宗一氏襲藏の增丹波守に宛てたる松(平)新太郎と自署せられたる書柬の文字と比較して正に同公の筆たるを證し得たり。かりに百歩を讓りて他人の模筆とするも、必ず此の如き事實の存したる證左なれば、先生と公との關係を知るべき材として茲に之を採る。此の扇面は田中氏の希望によつて同氏の襲藏する所となれり。

一君叶我命
安天隨之
　惟命

一君叶
我命安
天隨知
　光政 [印] □ 光政ハ白抜ノ字

思ふに前者は藤樹先生の示されたる語、後者は芳烈公が之に酬いられたるものに非ざるべきか。卽ち藤樹先生は、一君侯(芳烈公)が我が敎命に協和せらる。よつて我は天命に安んじ臣となり、此の君に隨ひ仕ふの意。是の意先生が親しく或は文書を以て公の前に披瀝せられたるものか。惟命は先生の字なり。先生は名をいはれしも、光政が之を記述するに特に字を以て呼ばる。之に對し光政公は、一君師(藤樹先生)が我が招命に協和せらる。よつて我は天命に安んじ弟子となり、此の師の明知に隨ひ敎を受くる意ならんか。以て明良相遇ふの一例とすべし。初め本全集門弟子傳中に芳烈公を加へたる用意意義ありと謂ふ可し。但し大洲侯に對し、誓つて二君に事へざるを以てしたる事實に鑑み、備前に往いて仕へられたるに非ざる

は明かなり。(藤陰)

四、淵岡山

淵岡山の研究に關する主なる書目

一、岡山師覺え書　一冊
一、岡山先生示教錄　六冊
一、同　追加　一冊
一、岡山先生書簡集　三冊
一、藤門像贊　一冊
一、五十嵐養庵先生語類上下　一冊
一、岡山先生と辨惑東條子十八箇條問記　一冊
一、藤樹先生行狀實錄　一冊
一、藤樹先生倭文集(大洲本藤樹全書の一部)　一冊
一、自反愼獨　一冊
一、雜記後篇案思錄　一冊
一、北川恕三覺書　一冊
一、無題の書　五冊
一、二見直養書簡集上下　二冊
一、北川子示教錄　一冊
一、井上國直言行略傳並碑　一冊
一、藤樹夫子筆蹟授受證書　一冊

一、樋口覺書　一冊
一、心學肝要鈔　一冊
一、席上一珍　一冊
一、北川子文書集　一冊
一、難波叟議論覺書　二冊
一、儒名志　一冊
一、陽明學術開書抄　一冊

備考　右記の寫本は何れも未刊行也

一、石川家記錄
一、醜嘯錄
一、御奉行所日記(熊本細川家)
一、家政實紀(會津松平家)
一、藤樹書院日記

(附記)　嘿天柴田甚五郎氏昭和十五年一月十二日帝國學士院に於ける研究報告書中より轉載す。(藤陰)

一〇、佃叔一

佃叔が新谷藩の家老たる事は明瞭なれども、叔と稱する者が佃小左衛門一永か、其の子の佃市郎右衛門賀永か、又は次子の德田彦六季一なるか、或は佃助九郎なるかは不明にて、全集中の研究題目として殘されたり。今、是に就き考證を加へん。

一、佃叔一は誤記なり＝藤樹先生全集遺教本（大洲中學本）並に別本、書簡雜著（三宅石菴本）藤樹先生御書簡（和田本）等に記されたる佃叔一は眞蹟書簡集及眞蹟詩文集（戶田孫助に與へし書）等を見るに佃叔、又は佃氏とありて叔一と記したるものなし。又、各種の書簡集にも叔一の文字を用ひず、是、佃叔が彦六季一なる爲に誤れるものならん。

一、佃小左衛門一永は佃叔にあらず＝元和九年大洲侯の歿するや次子直泰（時に九歲）には新谷一萬石を分封せられ、一永は家老に任ぜられしが、新谷に移住する六年前に死去せり。（藤樹先生三十歲）叔宛書簡はその死後にも多ければ一永は新谷家老なれども叔にあらざるは明瞭なり。

一、新谷に家老として移れるは佃助九郎なり＝寛永九年（藤樹先生二十五歲）に大洲藩士より新谷に分けられしは前記の一永以下二十二名（藤樹先生を含む）なりしが、寛永十年新谷屋敷の竣成により移りし者は四百石を受けし家老佃助九郎以下十九名と新谷藩記錄に掲げられたり。

一、佃叔と佃助九郎は同人なり＝正保三年三月八日付の藤樹先生の眞蹟書簡（大洲町程野氏藏）を見るにその宛名は「佃助九郎樣」とあり、藤樹先生眞蹟書簡集（戶田孫助に與へしもの）の同文を見るにその題目を「答佃叔書」と書かれたり。卽ち何れも眞蹟にて先生の肉筆にかゝるものなれば佃叔と助九郎の同人なるは疑ふべき餘地なし。

一、佃叔卽ち助九郎は德田彦六季一なり＝助九郎が新谷移住後の初代家老なるは明かなれども、大洲家臣錄及その他の公文書には家老、德田彦六季一とありて叔の文字なし。然れども新谷初代の家老たる事は三人とも同樣なれば、此の三者の同一人なる事を述べん。

一、佃姓と德田姓は同一なり＝佃氏始め德田氏と稱せしが、將軍と同文字を使ふを憚り佃と改姓せしが、後に新谷に於て德

田姓を名乘りしは藤樹先生歿後三年目の慶安四年、將軍家光の歿せし頃よりにして藤樹先生在世中は佃氏なり。

一、助九郎と彦六の同一人たる事＝小川覺及仙よりの書簡を檢するに助九郎、彦六は晩年、病氣にて致仕せんとして許されず焦躁せるものの如く、覺より慰問の書簡には佃助九郎と記し、仙よりは徳田彦六宛とせるに依りても同一人たるを證し得べく、且つ多數の書簡を檢討するに同一事情を記せる返書中に或は佃助九郎宛と徳田彦六宛の兩者を見るに依りても佃助九郎が後年、徳田彦六を名乘りたるを知るべし。

一、年齒より見るも助九郎、叔は彦六と同じなり＝正保二年（藤樹先生三十八歳）に叔に送りし書簡に「色念起り勝なるは少年の通病」とある如く助九郎、叔が年少なるを知るべく、彦六季一は時に二十歳前後なるにより同一人なる一例證にもならんか。

一、彦六の傳承＝佃助九郎、叔即ち徳田彦六季一は學徳共に高く、その切磋せる樣は書簡集によりても知るを得べく、現在俚謠中にも「新谷一萬石に過ぎたるものは神南山（カンナン）に徳田彦六」と謠はれたり。晩年、共に學問を行ふ者もなく、且つ病弱にて致仕を申出でしに許されず苦しみし樣子を小川覺、仙に書き送りし書翰あり。同條を參照されたし。

一、猶、細部に渉りての記述は藤樹研究にて發表すべし。

（附記）　右全文は愛媛縣立大洲高等女學校教諭近藤佶氏の記述に係り、且つ一年以上の日子を費し仔細に討究せられたる結果にして、新に門人詩文集中に採擇したる小川覺及仙の助九郎又は彦六に宛てたる書簡は寫眞に撮りて編者に示されたるもの、編者は此の佃叔一の稿には一字の訂正をも加へざりしものなり。（藤陰）

一六、戶田孫助（正度）

戶田孫助が江洲より歸國の際、藤樹先生より眞蹟を授與せられたることは、本全集第五（別）冊二八三頁に、平野家の記錄を引きて、之を明かにしおきたるも、果して如何なるものなりしかは、何人も知り得ざりし所なり。然るに旣に第一冊卷頭再刊の辭三四頁に記述したる如く、新谷香渡家に保存せられたる七巨冊を見るに至りて、たゞに和文章のみならず、經解詩文孝經啓蒙等多量に渉りし事を始めて知り得たり。

更に香渡寬氏の郵寄提示によれば、同家に新谷越大洲より御附ヶ人名記なるものあり。之に由れば織部正直泰公に隨ひて

新谷に移られし人三十人あり。實に左の如し。

佃　助九郎	長尾茂兵衞	國領五郎右衞門
加藤治左衞門	大野庄助	三田村六左衞門
平田助右衞門	安西長兵衞	田中右衞門作
戸田源左衞門	山田覺左衞門	森　覺左衞門
茂木權太夫	上原彌五左衞門	山上小兵衞
雨森仁右衞門	橫山小右衞門	大洞六之助
永井彦兵衞	鄕野三右衞門	岩田太郎兵衞
河村四郎左衞門	松久次郎右衞門	井上次郎兵衞
一柳三太夫	橫山源太夫	一井清左衞門
寺島長左衞門	村田三五郎	田神理右衞門

平野正臣謹書 ㊞

直泰公

右の正臣といふは新谷藩權大參事集議員議員たりし人にして、此の掛軸大の人名記の裏面に「但正臣舊藩勤務中此通りの書を認め纔に當時此の家の相殘る處の家十二家申合せ養源會と云ふを會而此通りの書を掛軸に作り、每年一回を催し祭典を行ふ。廢藩と共に此事止」の後人の筆あり。

近藤信氏の來示によれば、「藤樹先生二十五歲（新谷分封藩士決定）の際は二十七名にして、先生列中にあり、戸田氏なかりしも、寬永十九年先生三十五歲（新谷引越實現）の際は三十一名を正しとす。新に加はりし者、戸田（二〇〇石）茂木（二〇〇）雨森（二〇〇）岩田（一二〇）井上（一〇〇）一井（一〇〇）引移らざりし者、神山（一〇〇）中江與右衞門（一〇〇）とす。尙右兩回ともに名を連ねたる三生五郎兵衞（二〇〇）の名、上記の正臣手記の表に洩れたり。是れ恐らくは絕家したる爲記載せられざるものか。加藤家（大洲）文書、新谷文書等にも二十七名、三十一名は俸祿までも明記せらるれば表記の三十人は、事實は三十一人とすべし。」と。

抑〻藤樹先生は新谷に分封せられし際、隨從の列にありしも、分封移轉の後れし爲實現せざりしものなり。人或は先生が分封の列にあるを以て左遷せられし等の說をなすものあれども、決して然らず。同列中にも有力なる人材あり、又分封の確

定したる以前既に先生歸養の決心固きものありし等より見るも、信ずるに足らざるものなり。ともかく藤樹先生は新谷には引き移らず、却つて門人戸田(孫助)源左衞門が佃、加藤、平田の次に位せるを見る。されば新谷に藤樹先生の舊宅存す等といふ俗傳の信ずるに足らざるを知り得べし。

全集卷四十四第三十九頁に援引したる系譜の次に

二正の父は志津嶽七本槍の一人なる平野權平長泰とも云ひ、織田信忠の重臣平野勘右衞門とも云ふ。分明ならず。玆に兩說を記し置く。母は眞島彥太郎の女なり。眞島氏八萬石の領主なりしに、太閤より無故これを召上げて一萬石に減ぜらる。是に依つて一生にて眞島家斷絕と決す。加藤光泰は眞島氏の舅なり。依つて死後は眞島氏の娘二人光泰の孫なるにより引とり世話あるべく、甥二正は家臣として被召遣るべしと托したり。光泰これを諾す。幾許もなくして光泰朝鮮出陣中に於て眞島氏死去、光泰亦朝鮮に死す。こゝに於て眞島家斷絕し、二正年少にして眞島氏より加藤氏へ其の身の事等托されしとも知らず、京都に住居して浪々の日を送る。光泰の子貞泰濃州黑野に封ぜられてより、二正京都に流浪しをることを知り召して百五十石をあたへ家臣に列せしむ。貞泰の嗣子後の出羽守泰興の傅育に任じ、加之大坂出陣の軍功により貞泰二正にしば〳〵知行を加增せんとすれども、二百五十石以上の加增を固辭して受けず。依つて四百石の積にて、嫡子左兵衞へ百五十石、勘右衞門へ二百五十石都合四百石を與へ、其後貞泰自書して二正亡き後は嫡子左兵衞へ七百石を賜ひ、家老に任ずべき旨を二正及左兵衞に示す。二正曰く「これ以上の御奉公仕り得ず候らえども、左兵衞はその身了簡次第の儀に候」と感激して恩賞を受く。其の書付土藏雨もりにて文字不分明となり、この時すでに貞泰二正共に他界し恩賞もそのまゝになりたり云々。

と見ゆ。戸田孫助の父二正及祖父のこと以上にて明瞭なり。倘平野家系圖を得たれば、左に掲ぐ。

戸田(平野)家系圖

一代　戸田孫助正度(直泰公御代被召出　大洲平野勘右衞門二正ノ三男、平野左兵衞ノ弟)
——二代源左衞門正次
——三代勘右衞門正盈
——四代孫助正純
——五代勘右衞門正朝
——六代源之丞時敏
——七代小傳治忠順
——八代九郎助正邦(苗字譯有平野ニ復ス)
——九代忠右衞門忠安
——十代茂樹正臣
——十一代嘉七郎正玆
　　├長女富子(香渡寬妻)
　　└嗣子稔

（附記）是は一應原稿を作製の上、近藤信氏の批正を請ひ得たるものなり。參照、大洲史談會發行「温古」三號城戸通徳氏新谷分藩に就て（藤陰）

三九、又四郎と益田紋次（益田義則）

藤原姓益田系統（略）

∴長盛　増田右衛門尉、和州郡山城主、領二十萬石、豐臣家五奉行之一人也、關原陣後武州岩槻ヱ謫居、元和元卯年大坂夏陣子息篭城之故ニ因テ五月二十七日於謫所賜死、享年七十

- 盛次　兵大夫、大坂夏陣之節篭城
- 可村　土橋兵七郎、關原亂後變姓、古川村枝郷増田村ニ蟄居
- ・忠可　土橋又六郎、兄可村ト當村潜居
  - 是當家之祖也
  - ・可一　益田又兵衛
    - 此時本姓ニ復スト雖モ猶幕府ヲ憚リ増ヲ益ニ改、地名モ益田村ト改
    - ・義則　益田又四郎、業醫術、好和歌、西湖蔗樹先生之門人也
      - 一尾伊織通定君ヨリ父可一同様役儀被命相勤
      - 元祿十二年己卯十二月晦日
      - 法號　淨意居士
      - 可省　益田安右衛門　好文學　平野先生之門人也、
        - 可周　定平

- 可久
- 喬可　益田紋司
- 可平
- 可永
- 可宗　益田稻夫
- （現主　孝夫）

（附記）詳細は拙稿「藤樹研究の新資料」第七項參照。（藤陰）

六二、（附一）永田權右衞門

伊豫の大洲藩士で藤樹先生の門人となつた者は隨分多いが、今回新しく發見せられた永田權右衞門は異色ある者として特筆せらるべきであらう。次にその特色を列擧すれば

一、槍一本の功名により立身し、大洲初代藩主加藤光泰侯の孫娘の婿となつた。
二、大洲藩の門人では、最高祿の五百石を受け、藩席次は七席の高位である。
三、戰場馳驅の武弁のみ多かつた大洲藩士には珍らしい好學者。
四、先生の門人として最初期（二十四、五歲頃）に屬し、且つ最年長者（五十七八歲）。
五、壯年時代には氣骨稜々、一時は浪人までしたが、晩年に至つて文武を兼備し、稀に見る典型的の好武士となつた。
六、先生の幼年時代の恩師、天梁和倘とも交を結んでゐる。

永田權右衛門は先生と同じく生國は近江。嘗て佐々木氏に仕へたが、其の沒落後、大洲二代藩主加藤貞泰侯の濃洲黒野城主時代(文祿年間)に仕官し(二十歳頃)征韓役、關ヶ原の戰に拔羣の武勳を樹てて五百石を賜はり、藩主の姪を娶つて權勢を極めた。しかし此の權右衛門は米子時代(三十七、八歳頃)に暫く浪人する身となつた。その理由は

河田氏の屋敷甚だ能き屋鋪の風說ありし故、永田權右衛門はなはだ所望に思ひ願ひ上げしに、却つて兒玉氏に下されける。之に依つて權右衛門はなはだ鬱憤し、御暇乞捨にして立退きける。大峰公(藩主加藤貞泰、妻の伯父)怒り給ひ、攝津池尻南野御陣屋(大坂屋敷)を守り居たりし者に御書を下され「永田氏大坂に在る由、見合ひ次第、討つべき由」仰せ遣はさる。(大洲溫古集)

ところが間もなく大坂冬の陣が起り、芽出度歸參が叶つて復び五百石を賜はり、大洲に米子から着任したのは四十三、四歳で藤樹先生は僅に十歳であつた。

爾來大洲の上席藩士(七席)として平和な後半生を送り、當時の武士としては珍らしくも漢詩に興味を覺え、五十七、八歳頃には五百石の高祿者にも拘らず、孫の樣な藤樹先生(二十四、五歳)然も僅か百石の輕輩の學殖を認めて教を受け、詩聯句等を樂しみつゝ悠々自適した。

先生が大洲を退任して三年目の寛永十四年五月九日に歿し、年齡六十五、六歳。諡して何山玄肅居士。墓は藩侯の菩提所の大洲西山根、龍護山曹溪院に建てられてゐる。

爾來代々權右衛門を稱し、孫の代に到つて兄弟に分知した爲に權右衛門家は三百五十石となり、之より四代目の權右衛門は藩政革に盡力し、保守派の爲に殺害せられて家も斷絕した。弟の權太夫家は百五十石を繼いで、此の方は子孫も現存してゐる。

系圖

本國近江佐々木氏末葉、貞泰公御代五百石
永田權右衛門
- 八右衛門定俊 五百石
  - 女子 加賀八左衛門妻
  - 權右衛門正吉 三百五十石 六十一歲 ― 權右衛門貞好 三百五十石 四十七歲
    - 八右衛門貞觀 御馬廻 三百石 ― 權右衛門 三百石 ― 權右衛門 三百石
    - 龜也
    - 女子 山本嘉兵衛妻
  - 權太夫正常 分知百五十石 ― 權太夫正義 百五十石 ― 權太夫義教 百五十石
  - 女子 一柳源五右衛門妻
  - 女子 戸田又一郎妻（吉田家中）
- 平兵衛

室
開島彥太郎女
光泰公御孫

（原據）大洲祕錄・大洲藩家臣錄・大洲舊記・貞泰侯御代家臣錄
（附記）藤樹先生遺墨帖發行によつて永權右宛の眞蹟を得たり。以上は之をもととし調査したるものにして、全部近藤信氏の記述に係る。
委細は藤樹硏究第八卷一號參照。（藤陰）

（附二）郡安兵衛正眞

近藤　信

全集第一册及遺墨帖等に揭載せられてゐる藤樹先生の愼獨（此是格物致知之靈樞云々）の一文は門人郡子に與へられた由が、今回發見された香渡富子夫人祕藏の眞蹟本に記されてゐる。

然らば郡氏とは如何なる人か、その略傳を述べよう。元來、大洲藩には家臣錄が數種あるが何れも德川初期は簡略に過ぎ、常に調査の困難を感じてゐる。郡氏もその例に洩れないが、大洲家臣錄・大洲祕錄・貞泰侯御代藩士錄・墓石・過去帳及郡氏忠兵衛家譜等を參照して郡正眞の外貌を描く事とする。

正眞の祖先は不明だが、父作兵衛正則は伯耆の中村式部太夫に仕へて五百石を受け、慶長十四年斷絕後、米子城主となつた加藤貞泰の臣となつて三百石を賜つた。當時、三百石は高祿者（士分格百三十人中の第二十位）に屬するから、人物手腕共に秀でた者に違ひない。

先生門人の安兵衛正眞は此の正則の長男で、米子に生れ二、三歲頃に藤樹先生（當時は十歲）と一緒に、藩主に從つて大洲に移つ

た。父の歿年は不明だが、恐らく元服以前に逝去したのであらう、正眞は幼少につき五十石を減ぜられて二百五十石と藩士祿に記されてゐる。歿年は延寶三年一月二十五日。二子の年齢から推定して六十歳頃に歿した事になる。即ち先生より若き事、八、九歳である。墓は大洲妙香山に在り。碑面には顯考郡正眞公甫墓と記されて長子市兵衛正屋が建ててゐる。

正眞の傳記や逸話は極く少なく、僅に先生より賜はつた愼獨の一文と、後記の「藤樹先生書翰」の中には郡子が詩を作つたことを記したものが見ゆるのみである。

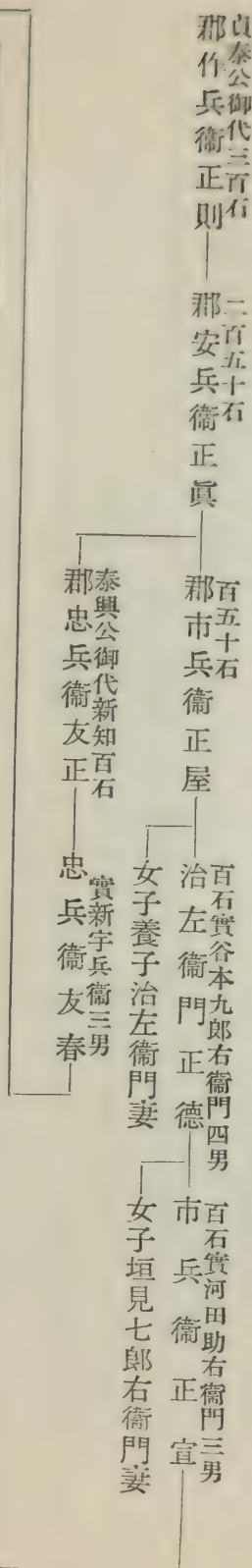
正眞は先生歿後、藤樹學を研讃し、その學術を長子市兵衛正屋に授けた。正屋も父の意を受け深く藤樹先生を敬慕して、大洲に存する先生の眞筆本を寫し、藤樹先生詩、文、書翰集の一冊を書き殘してゐる。時に寶永七年夏四月上旬で正屋は七十歳頃（藤樹先生歿後、約六十年目）であつた。正屋の寫した本は郡氏本として價値は高く、詩文集にも多數の好資料となるものが記されてゐる。父、正眞の墓標を儒者らしく顯考正眞公甫墓と建ててゐるのも興味がある。享保三年、七十七歳で歿し私に諡して空界玄識信士と稱す。

次に系圖を示して郡氏の參考としよう。

貞泰公御代三百石 郡作兵衛正則 ―― 二百五十石 郡安兵衛正眞 ―― 百五十石 郡市兵衛正屋 ―― 百石實谷本九郎右衛門四男 治左衛門正德 ―― 百石實河田助右衛門三男 市兵衛正宣

正屋 ―― 女子養子治左衛門妻

正德 ―― 女子垣見七郎右衛門妻

正眞 ―― 泰興公御代新知百石 郡忠兵衛友正 ―― 實新宇兵衛三男 忠兵衛友春

―― 深藏政任 ―― 謙造實 ―― 市兵衛哲 …………… 絶家セシガ ―― 鹿野氏二男 正勝（熊本醫專在學中）

―― 衛守正賢 ―― 忠兵衛正誼 ―― 衛守正房 ―― 繁治郎正方 ―― 正出 ―― 現戸主 正家（大洲豫洲銀行奉職中）

（附記） 是は香渡家秘藏本に愼獨の下に郡子の名あり。必ず先生の門人に此の姓を冒せる人あるを知り、又近藤氏所報、大洲某骨董商に得

たる「藤樹先生書翰」に「寶永七年庚寅蔭夏四月上弦郡正屋寫書之」とある由に付、正屋は前記の郡子と如何なる關係に立つか、或は父子ならんかを想像し、近藤氏に調査を依賴したる所、大洲の古記錄及び寺院を精査し、又大連に在る遺族にも交通して二旬を出でずして此の文を寄せられたるもの、又前記「書翰」の實物を郵寄して研究に資せらる。記して毎度の盡力を多謝す。尙「藤樹先生書翰」は卑見にては前半は父正眞の筆、後半は子正屋の筆とす。委細は藤樹硏究第八卷第八號拙稿京都だより參照。（藤陰）

詩

一、〔己丑元旦敬慕詩并序〕

謙叔　中川　熊

自二先師沒一。奄然既六閱レ月。時維己丑之元旦。感レ春哀慕轉深。嗚呼去年元旦及レ門之諸子。咸拜二尊顏于堂上一。嘉二新正一。有二先生試毫之詩一。則退而謹和レ之。有二自詩一。則敢進而請二斧正一。噫。今也則已矣。徒使下參二神位前一而追慕弗上レ及。慨焉永嘆。潸然涕泗。摧咽而痛貫中心骨上。去年正月。四方之諸友。畢來萃二於玆一。環二先生之講筵一而坐。或質レ所レ疑。或證レ所レ得。討習講論。切磋琢磨。於レ是乎憤者必啓。疑者遂悟。憂苦者。狹窄者。窒者。滯者。功利之習。嗜欲之染。殆融釋脫落。明快通利。故僉欣欣然跳躍。則無レ不下以二此學一稱二號人間第一義。天下第一等一。而欲上レ終二身于先生之門一。嘗與二同門之友一。私相謂曰。我國未レ聞レ有二聖人之學一。而民無レ知レ所レ向。幸今上帝革命。天地交泰。聿降二生我哲人一。肇使下開二闢講三明聖學於我日本一。幸哉。吾輩得二同レ時而生。受レ業且親炙一。於戲。微二夫子一。幾三于虛二此生一矣。休哉美哉。天下後世。亦從レ此永有レ所二倚賴一。天地鬼神。倘宜下眷二佑保三護我先覺一。而假レ之以レ年。使中大興二起乎斯文上。嗚呼。詎謂下夫子之壽。而遽止二于此一。夫子之志。而遂不レ得二大展一。嗚呼天乎。何至二此極一也。吾輩之生。如二偃草棘薪一。何益二于世一。胡不レ使二吾百身以贖一。而顧奪二吾夫子一之速。嗚呼。上天果無レ意二於斯文一邪。嗟夫。自レ今而后。道學將誰使二之振一。后生將誰使二之誨一乎。熊也不レ類。自レ幼雖レ親二炙於門墻一而無レ聞。近來覺二稍有レ所レ進。則夫子逝矣。已矣哉。吾復孰師事。孰刑儀。誰其箴二切我一教二導我一乎。吁嗟。予已無レ所レ進。予無下與樂二餘生一。靜吾思レ之。寐寤無レ爲。鬱鬱如レ癡。蓋至二於今日一。嗚呼。命也已矣。天實爲レ之。奈レ之何。所レ幸先師既盡發二聖之祕教一示二二三子一。二三子道雖レ未レ傳レ心。而德音猶在レ耳。固立二其志一。雖二聖人爰難一。今方矢レ靡レ他。與二我二三同門之友一共以三必爲二聖人一爲レ志。而相與傳二誦講三明於遺訓一。相與箴規砥礪。務致二良知一。而淨掃二除意欲之攙雜一。倘望下我四方諸豪傑同志。亦皆以レ倡二明此學一爲上レ事。庶幾使下我聖人之神道大二明大三行於天下一。傳二之來世一。以永庇中於無窮上。此固夫子未レ盡之志。而在二吾輩後死者一。終不レ得レ辭二其責一矣。宜下念レ茲在レ茲。戰兢深懼。夙夜匪レ懈。以冀上レ成二吾夫子之志一。乃門

犢之幸甚。實天下萬世之幸甚。吾黨勵勗諸。

今日參神禮已畢。退而閒坐。傷感攤慕之餘。薄綴二卑詩一。以洩二悲懷一。又聊述二吾所レ志。竊告二我同志一。且以相哭。且以相懋。

喪中春旋克永嘆。　雖則春旋師弗還。　今日譚懷轉無遺。　徒觀神主不觀顏。
花標官梅香非彈。　既萎藤樹澤漸乾。　斐哉吾黨孰師則。　所賴遺教聖學完。

（附記）（斯篇谷田義則題二中川子傷之文一）拙稿「藤樹研究の新資料」參看。（藤陰）

二、門人詩

中江先生於二洛令一傳二受箴儀於嶋川子一。臨レ別賦レ詩。嶋川子有二酬和一。（第一册八四頁參照）

和　（韻）　　　　嶋　川　某

玄談字々更彈丸。　恰似學金波玉瀾。　再會難期對君問。　須推周易一編看。

庚辰之鷄旦云々（第一册八九頁參照）

和　韻　　　　赤　羽　長　夔拜

識精溫故克知新。　敷教在寬師表眞。　天命先生開後學。　門人德色取仁春。

同　　　　谷　川　寅　再拜

邪說喧㕭命未新。　世人却厭五倫眞。　挺然獨立發心學。　天下儒風自此春。

同　　　山田權 褒拜

先生化導在寛新。弟子因材此得眞。和順積中發英處。樂花禮葉肺肝春。

同　　　小川辰 再拜

素聞不異進脩新。和氣從容内外眞。朋自遠方來萃處。成蹊桃李一枝春。

同　　　中川熊 四拜

異言俗學世惟新。卓我尊師明聖眞。天運循環寧不復。三皇政教若陽春。

同　　　谷川左 再拜

格致誠脩德日新。赫然心鏡照天眞。一團和氣程明道。觀感儒門有脚春。

森村子遊原之門云々（第一冊一七四頁參照）

惟時冬之中。寒氣嚴凝。雪霏々縱横。雖甚不便旅行。森村子從父命而歸枌里。臨別綴一章以餞行而已。

昭鑑惟幸　　　赤羽長 再拜

海陸寒天多少難。却因父令泰山安。家庭勿忘師門教。幽顯公私都一貫。

吾儕幸侍顧軒先生四書講筵之列。求心學。論講已終篇。及孟子之首篇。森村子從父命。遠催雪中之行。爲歸侍父母。臨別同志皆賦詩以餞行。予亦不得已綴野詩一章以效顰者也云爾。

看察惟幸　　　山田權 拜草

雪裡旅行省双親　寒苦甘心立厥身　交遊切々一貫孝　膝下致誠當通神

過二千年之孟冬一。雖レ以二愚之不肖一。然順二先生之命一。來而交二際於同志一。明年二月之下澣。大田氏有二東奔之命一。自患下離二同學一。而切磋日曠上焉。及レ別慰曰。詩云。他山之石。可二以為一レ錯。惟時實然矣。盍レ慮矣。乾坤吾人之大父母也。思子之東奔慈命也。可レ說。不レ可レ怨矣。於レ此不レ得レ已綴二野詩一章一以餞レ行云爾。

看察惟幸　熊澤二 再拜

應求遠近同志情　相逢未久公東行　恰如春燕與秋鴈　仁哉天玉女於成

侍坐之次。因二先生之話一。得レ聞二邵子試翰之佳作一。退而咏二嘆之一。知行日新之功。溢二於言表一。思レ齊レ焉之餘。聖二高韻一。遠附二於潮信一以述二德業相勸之情一云爾。

困鑑惟幸　赤羽長 再拜

諸生共冀孔門回　吾子先余心眼開　料識周還中規處　天經地義一枝梅

問詩可レ學否。程子曰。既學レ詩。須二是用レ功。方合二詩人格一。既用レ功甚妨レ事。古人詩云。吟二成五箇字一。用二破一生心一。又謂。可レ惜一生心用。在二五字上一。此言甚當。某素不レ作レ詩。亦非二是禁止不一レ作。但不レ欲レ為二此閑言語一。先生從二此賢範一。是以藤樹門下小子。雖レ未三嘗學二作レ詩。而志倦體疲。則效二顰於周程邵朱之詩法一。以當下游二於藝一之事上。而為二窮理之一助一焉。故道盆甫和二吉忠丈試觚之高詩一。予亦應二高韻一。以蒙二先生之斧正一。不レ忍レ錯二之於巾笥一。而遠寄二於坐右一。聊庶三殘責善之萬一一云爾。

伏乞採納　山田權 褒拜

禮門安宅克私回　業廣德崇正路開　傳說何求夢中遇　請君期待和羹梅

丁丑元旦　先生斧二正此詩一。有二溫故知新之功一。珍重。　小川仙

道唯在邇反求身。 百叓一原無極眞。 天若不誠奈何物。 萬紅千紫古今春。（紫紅千色是斯春）

又 （無作意之新味如何）

乃禽乃獸廢天職。 須存心以養其德。 惟精惟一執厥中。 聖學成功從此得。

戊寅元旦 （體認積於中發於詩者乎） 小川仙

感春磨盡鏡中塵。 照看忸怩陷溺身。 戒懼審幾宜止善。 克思作聖舜何人。

題仁人之安宅。 熊澤 拜稿

山立海受靈臺康。 上天元德人性綱。 昔無始今豈有墜。 堪慚春來梅花香。

（失題） 森村權

聖學興隆自北方。 芝蘭風化同春陽。 天命一德豈不散。 孔道富貴戰心鄉。

和韻 神山傳

古往來近不易方。 藤樹門弟化豫陽。 吾子先我德化馥。 請格非心成父鄉。

（失題） 國領大

藤樹南枝先逢春。 愚亦感風心志新。 猩々能言不別獸。 吾終欲殺身成仁。

昭陽協洽之三朝。 熊澤子斧正 神山傳

立春陽色今朝新。　先覺於寬化導眞。　遲速昏明後學錯。　損身道益鼓成仁。

（附記）　以上十九首十二人の作は近藤信氏發見に係る「藤樹先生書翰」中より收載す。題簽には書翰とあれども、中には經解、詩文等あり。而して編者の見る所を以てすれば、前半經解詩文和書の部分と大學考以下とは筆寫の人を異にするものの如く、大學考の末尾には萬治元年戊八月二十日の文字見え、（是は筆寫の年號に非ずして、底本に此の年紀あり、そのまゝ記入したるものならん。）次に江西先生祭儀同祭禮あり、次に林氏剃髮受位辨あり、此文の末に寶永七庚寅歲夏四月上弦郡正屋寫書之の文字見ゆ。次に語錄解義三行あり。次に經解艮其背不獲其身云々の一文あり、次に四書正文大學あり。古本大學の文なり。次に和文「君子」「小人」と題する共計二十首の短文あり。最後に衣川百首並序を載す。かくて後半は郡正屋の筆なるべきも、前半は何人の筆か明かならず。近藤氏の報ずる所に依れば正屋は藤門郡正眞の子なれば、或は前半は父正眞の筆かとも思はる。此の十九首中第十一首に赤羽長の詩あり。中に郡子試翰の佳作云々の語見え、又第十二首山田權の和韻の詩によれば、郡子を呼ぶに吉忠丈を以てせるが如し。而も郡子の詩の載せられざる點より見て、或は謙して自作の詩は之を載せざりしものに非ざるべきか。姑く臆見を附して識者を待つ。尙此の寫本によれば全集第一册二〇六頁和歌二首の中、後一首前に在り、而して加藤傳左衞門の作とす。前一首後にあり、先生の作とすると共に、世をわたる一の星は時の中とし、全集初版既載の讀み方と一致し、再刊本戸田氏本のひとつのせとやと讀むものと一致せず。（藤陰）

國字牘

三、（小川（覺）勘右衞門より佃彥六に送りし書翰）

〔一〕

大坂迄之便宜ニ大洲へ狀遣申候間致二啓上一候。其後者久々御書狀も不レ申二御意一、御遠々敷、御床布奉レ存候。彌々御無事ニ被レ成二御座一候哉承度存候。拙子も無異ニ罷在事ニ御座候。

一、國領五郎殿相果候由、大坂金左ヱ門方より申來、扨々驚入存候。今一度致二參會一可レ得二御意一と存候處ニ殘念至極ニ存事ニ御座候。跡目如何承度奉レ存候。息女ハ山上氏へ御有付候由承候。定而相續義も御座有間敷と存候。

一、貴樣御事近年御病者ニ御成候由、日外被二仰下一候。如何無二御心元一奉レ存候。拙子義もはや歲罷寄病者ニ成申候而、事之外草臥申候。昔之事なつかしく存出迄ニ御座候。

一、拙子事當地ニ罷申事難レ成存候故、當春三月ニ暇之訴訟檀那へ申入候。檀那釆女正江戸ニ被レ罷候付而、當地家老共方より檀那方へ申遣候。近年病氣ニ罷成奉公之務難レ成候間、暇給候樣ニト申入候處、釆女正、事之他、念ひぶりにて病氣ハ如何樣ニも心の儘ニ養生仕可二罷在一由ニて暇をくれ不レ被レ申候。押返漸而訴訟申候へ共、埒明不レ申、拙子爰元へ在付申候ハ、松平美作殿御息松平玄蕃殿之肝煎ニて御座候故、玄蕃殿へ暇之義、頼遣申候處ニ江戸ニテ玄蕃殿より釆女正方へ使者ニテ被二仰入一候ハ、小川勘右衞門義、御暇之訴訟申候處ニ念頃ニ被レ仰御留候由、則勘右衞門より申越承候。然共勘右衞門義ハ近年、病氣ニ罷成奉公之務も難レ成由ニ御座候。新參之義、一奉公も不レ仕候ニ御念比ニ被レ仰候とて其儘、彌々奉公も不レ仕、可二罷在一事、快も存間敷候。其上ニ暇申訴して緩々と心儘に致二養生一候ためにも御座候間、其身願之通、御暇乞を給候樣ニと被二仰入一候。檀那被レ申候は病氣は少も不レ苦候。いか樣ニも心次第ニ養生仕候樣ニ可二申付一候。暇ハ遣申間敷との返事ニて御座候。此上者もはや可レ致樣も無二御座一、致二堪忍一罷在事ニ御座候。來年に成候ハバ何とぞ致二分別一、訴訟可レ仕と存事ニ御座候。釆女事一段能主ニて何之氣遣も無二御座一候へ共、所がら惡布、風俗宜しからざる所ニて御座候故、拙子義ハもはや餘年幾程も御座有間敷候共、行々せがれ共居申所ニて無レ之と存候而之事ニ御座候。里レ仁爲レ美と文宣王の御示しニ候へ共、心に任せざる世の中、吾も人も何事も皆、如レ此ニて御座候。其元、同志も無二御座一候間、學術之御務、如何と無二御心元一存候。愈々今一度、以二面上一及二御話一度念願迄ニ御座候。猶重而可二申上一候　恐惶謹言

小川勘右衞門

六月十三日

佃　彦六樣

尚々久々、五郎右殿も不レ承、御なつかしく存迄ニ御座候。拙子義ハもはや一兩年の餘命と存候へば、一入〳〵御床敷奉レ存候。萬々期ニ後音一候。以上

〔二〕

大坂迄之便宜ニ一筆致二啓上一候、先以新年之御慶目出度申納彌々御無事ニ御越年、可レ被レ成と珍重奉レ存候。拙子義も無異ニ致二重年一候。去八月廿九日之貴札相屆對話之心地仕、致二圭復一候、貴樣御事御病氣に付而、御訴訟被二仰上一候由、ほど遠御座候へば左樣之義も不レ承候。御願かなひ不レ申御氣之毒ニ思召候由、御尤ニ奉レ存候。乍レ去、素二富貴一行二乎富貴一。素二貧賤一行二乎貧賤一。素二夷狄一行二乎夷狄一。素二患難一行二乎患難一。君子無レ入而不二自得一と中庸ニ發明ニ而御座候。か樣之格言能々御躰認被レ成、境ニ隨て自得之御愛用必□御座候。如レ仰、何方も惡布風俗、氣之毒ニ存候。爾爲レ爾。我爲レ我との柳下惠の發明、今時學者の端的ニて御座候。御友も無二御座一獨學一入御不幸ニ思召候段、御尤ニ御座候。拙子なども當所ニてハ學問のさたも不レ仕、遺恨千萬なる躰ニ而暮申候。以二面上一得二御意一度念願迄ニ御座候。もはや餘命

幾ほども御座有間敷被レ存候へば、一入御床敷、朝夕いにしへを存出迄ニ御座候。

一、國領氏跡目永田八右衞門殿、御末子ニ被二仰付一候由、珍重ニ奉レ存候。息女有仕候段も委細、被二仰聞一珍重至極ニ存事ニ御座候。

一、和田村與兵衞父子御かまひ御放免被レ遊候由、一段之義共ニ御座候。乍レ去、金左衞門、手前梓地ニても續不レ申候由、笑止千萬ニ存候。

如二來意一小太事存出苦々敷存事ニ御座候。

一、去秋之風損、其御地も過分之事ニ御座候由、當地も御同時ニて御座候。打續たる世間之爲レ躰、如何々々、萬々期二後音之時一候。

小川勘右衞門

猶以彌々可レ爲二御息災一と、目出度奉レ存候、去秋者卑妻方へ御言傳被レ成忝奉レ存候。被レ掛二御心意一奉レ存候由［不明］至極仕候へ共、先々無事ニ罷在候。何事も重而可二面上一候。以上

正月十一日

德田彦六様

解説

小川勘右衞門は藤樹先生門人の小川覺である。先生が大洲で仕官中から既に教へを受け、致仕されて、近江に歸られるや、跡を慕つて入門した最初の人である。時に寛永十三年、先生二十九歲であつた。

勘右衞門に關する記錄は小川與六、百五十石とあるのみで本書翰に依つて研究すれば其の外貌を掴む事が出來る。

書翰(一)は大洲へ手紙を遣す序に、隣藩の新谷(藤樹先生の致仕前の藩)の家老である佃彦六へ書いたと斷つてゐる。佃彦六は書翰(二)の宛名德田彦六と同一人で第一の書翰を送つてから半年目に改姓してゐる。新谷藩の家老である事は文中にある人物は全部、新谷藩士である點からでも決定ができる。この佃彦六が藤樹全集などに出て來る佃叔で、藤樹先生から特別の指導を受け、終に人格、識見共に高く實質上の新谷藩初代(名義上の初代は父の)の小左衞門家老として基礎を固め、その高名は今に俚謠として殘つてゐる點から見ても高邁、深遠な學德が偲ばれる。

新谷一萬石に過ぎたるものは神南山に德田彦六

神南山は新谷町の前方にある大きな山で一萬石の領地には大き過ぎる比喩で、德田彦六は說明を要しないであらう。斯く彦六が立派になつた事は、藤樹先生に師事した爲であり、且つ先生の歿後は、本文の如く小川覺に教へられる點が多かつた爲であらう。

扨、小川覺は大洲藩退任後は書翰(一)にもある如く美濃の竹中采女正に仕へてゐる。其の周旋方は松平美作守の息、松平玄蕃守と書いてある如く、任地は風俗惡布、伜の教育には不適當な地だから辭職方を申し出てゐる。然し理由はこんな簡單なものではなく、文意の奥に學問を以

つて奉公が出來ぬのを慨嘆し、自分を認めて働かせて呉れぬ土地に居る事の不本意を述べ、風俗頽廢の矯正の如何とも方策の無いのを述べて長嘆息してゐる點は同情される。

寄る年波に望鄕の念は去りがたく、夫婦共に大洲の故地を望んでゐる心情には一掬の涙を催すものがある。

書翰(一)の國領五郎殿は五郎右衞門で近江出身、國領次郎左衞門(百五十石)の長男で新谷藩士。大洲藩家臣錄には國領五郎右衞門斷絕となつてゐる。然し書翰(二)には跡目相續が出來てゐるが何かの都合で後に絕えたものと思ふ。五郎右衞門の從弟太郎右衞門は藤樹先生門人にて近江に遊學し、その妻は彦六(佃叔)の妹に當るから、家老として適當に取扱つたものであらう。

(一)の倘々書の五郎右殿は大洲藩家老千八百石大橋作右衞門の末弟で佃彦六からは義弟に當る。

(二)の和田村與兵衞の記錄は不明。金左衞門は大坂詰であつたが、何か不都合でもあつたか、自分の居た替地(現在の伊豫郡の一部)に代官にでも左遷されたが、是も失敗したので困つたものだとの事。

小太は近江蒲生郡の家老、一尾伊織。本全集にも屢々出て來る人。

四、(小川(仙)久左衞門より佃助九郎に送りし書翰)

貴書忝拜見候、其元御無事之由珍重ニ奉存候、當地無異ニ罷在候、御心易、可被思召候、吉田新兵衞方、無別儀罷在候由、被仰下大慶ニ存候、大久左事驚入候

一、御愛用底の有□□届候、御讀書ニて御合點申由珍重ニ奉存候、獨學ハ讀書ニテならでは成不申候、折角之勵行希候將迎のすくみ御座候由、その將迎に御心を被付工夫、被成候分にては成不申所にて候、外物を御忘れ無之故ニて御座候由、放下に力を御付可被成候、良知に力を御そむき跡にて御悔の心つかへ申由、悔ル心ばかりにては、さして益は無き物にて御座候、つかへ申所は悔の深き故にて孔子ののたまふ憤と申物にて御座候、能御體認被成、力を御出し可被成候、知行合一の發明傳習錄の外、別ニ可申樣も無御座候如好々色、如惡々臭の意ニて能々御體認可被成候、知行兩件ニあらざる事、明白ニ知申す意所ニて候、知行分テ兩件となすに因テ一念の不善あるをもいまだ行にあらはれずと思ひて油斷仕事に候、油斷して一念の不善を、たゞさざる所、卽行はれざる所にて御座候、然れば知行合一を能合點せざれば受用は成がたき事ニ候、能々御受用而上ニて、語り申度迄ニ御座候、戸田氏國領氏追付御供にて御下りを相待被成候由御尤ニ奉存候

一、市右衞門も無事の由申越候、定而追付下り可申と奉存候、大津へも人を遣候とて狀など相認忙々然故、擱筆候　恐惶謹言

六月十一日　小川久左衞門　花押

佃助九郎樣江

解說

小川久左衞門は覺の弟の仙で、任地は明瞭でない。藤樹先生が大洲を辭した翌々年に兄の覺は、早くも近江に遊學して、先生の最初の門人となつた。弟の仙も兄と同時か又は少しく遲れて入門し、學問の進むに從つて大洲藩以外の地に仕官したものと思ふ。播州赤穗らしくもあると小川喜代藏氏は述べてゐるが、書翰中にある、「大津へも人を遣すので忙しいから擱筆する」とある點から考へると近江より東國に當る事が推察される。

宛名の佃助九郎には異說多く、一說には先生の致仕した新谷藩(大洲藩の分家)の家老、佃叔とも言はれてゐるが、覺の書翰一、二から見ても新谷家老は佃彥六(德田)で助九郎は別に生存してゐる。卽ち大洲藩士、佃小左衞門の長子が、助九郎で次子が彥六である。小左衞門は新谷家老として藤樹先生と一緒に大洲藩より分れたが、新谷侯は十年間も矢張、大洲に住んでゐた。その間に小左衞門は死去し、長男の助九郎が新谷家老の家を繼いだが、大洲藩は小左衞門の功を認めて、長子助九郎(後に市郞右衞門貫永)は大洲藩に任用し次男の叔(彥六)を新谷家老とした。(近藤敎諭も一時は此の如く考へたが、後來精究の結果、別項門弟子傳に考證した如き定說に到着したものである。藤陰)

本書翰に出て來る戶田孫助は先生の門人で、娘は吉田新兵衞の長男の妻となり、國領太郎右衞門も先生の門人で妻は佃氏より貰つてゐるから、助九郎とは義兄弟となる。何れも大洲藩士で助九郎は是等が參覲交替で歸鄕するのを待ち望んでゐる樣子が知られる。

吉田新兵衞も先生の門人で近江を訪れて敎を受けた者、その妻は大橋又左衞門(大又左)の娘である。大又左は藤樹先生とは特別に關係の深い大洲藩の家老大橋作右衞門の弟に當り、新谷家老の佃彥六とも緣を結んでゐる。

市右衞門は作右衞門、又左衞門の叔父に當る。

以上の人達は全部、大洲藩士であり、藤樹門人で、大洲家老大橋作右衞門とも各交涉のある點は興味がある。

書翰を通じての小川仙を見るに、知行合一說の理路整然、結論は傳習錄に依ると斷定した所など蘊蓄の深さを示し論語を引用して、穩健中正な指導を助九郎に與へてゐる事を見ると、人物識見共に藤樹先生の高弟として恥づかしからぬものである。

先生が佃叔に與へた敎訓と久左衞門のものとが全く同樣の內容である事に依つて仙の學識の程度の證明とならう。(一四、一〇、八)

(附記)　以上國字牘全部並解說は近藤佶氏執筆に係る。(藤陰)

序

一、藤樹先生全書序（三五五頁參照）

三輪執齋

二、藤樹全書國字序（三五六頁參照）

三輪執齋

三、藤樹先生書卷序

鳳洲　士屋　弘

友人角田忠卿。奉㆓職於芳野師範黌長㆒。教務餘暇。喜蒐㆓前賢名蹟㆒。偶獲㆓藤樹先生書致良知三大字及手簡一道㆒。穀堂中齋小竹以下數十家。題跋具焉。有㆘辨㆓先生學術㆒者㆖。有㆘表㆓先生志識㆒者㆖。有㆘欽㆓仰其德㆒者㆖。有㆘稱㆓歎其行㆒者㆖。忠卿賞玩不㆑能㆑釋㆑手。遂跋㆓其後㆒。又屬㆔余弁㆓一言㆒。『夫藤樹先生之事。諸子贊論盡矣。余復何言。無㆑已乎。請言㆘此卷歸㆓忠卿㆒有㆗非㆓偶然㆒者㆖。蓋先生學出㆓於陽明王子㆒。王子學以㆓致良知㆒爲㆑主。先生所㆔以書㆓此三字㆒也。吾聞王子在㆓除州㆒也。與㆓門人㆒遊㆓遨瑯琊釀泉間㆒。日夕環㆓龍潭㆒而坐者數百人。歌聲振㆓山谷㆒。今忠卿所㆑居芳野稱㆓海內名區㆒。三朝皇居之跡。萬株櫻花之美。勿㆑論耳。其幽泉怪石。意者亦必不㆑讓㆓瑯琊釀泉㆒。而忠卿督㆓學於此㆒。雪之晨。月之夕。携㆓冠童㆒。遊㆓山水㆒。或咏㆓歌志氣㆒。或討㆓論學術㆒。蓋有㆘髣㆓髴於王子當日㆒者㆖。』吾又聞㆑之。熊澤伯繼爲㆓一代傑士㆒。而出㆓於先生門下㆒。其去㆓備藩㆒也。寄㆓跡此山㆒。講㆓良知之學㆒。則此卷到㆓此山㆒。豈可㆑謂㆓偶然㆒耶。』抑吾更有㆑望焉。黌內生徒進修不㆑懈。乃希㆘德行如㆓藤樹先生㆒。材略如㆓伯繼先輩㆒。彬々達㆗其才㆖。則此卷有㆑功㆓於世㆒。果何若乎。此蓋忠卿所㆓以賞玩不㆑能㆑釋乎。而屬㆓弁言於余㆒。亦非㆓偶然㆒也歟。

（鐵華書院雜誌陽明學第六號）

（附記）是春日精之助氏所報に係る。唯角田氏傳來先生の書簡は眞蹟なれども、致良知三大字は精究の結果敬寫若くは僞筆に屬するを知れり。世傳ふる侗友卷なるものの三大字亦是に外ならず。書簡は載せて第二册五五二頁以下に在り。景印亦同處に在り。三大字の筆蹟については藤樹頌德會發行「藤樹先生を語る」中の紫水君の論文（四九頁）參照。（藤陰）

跋

一、跋　言

愛日書樓

藤樹先生在二江之大溝一講レ學。尤以二德行一著稱。其所レ創書院今尙存焉。余往年漫遊來レ此。得レ觀二其遺書一。頃者大溝侯將下改二寫此編一存中諸院內上。文雖レ匪レ美。而其爲二德行君子一。則可レ知也。乃係以二小言一云。

安政五年戊午小春上澣

八十七老人　一齋藤坦　佐藤坦記　大道

（附記）是は木版刷より採る。遺書の何たるか不明なれども、京都山口淡水筆寫に係る「藤樹先生全書全」と題する一册の寫本（經解以下雜著に至る岡田氏全書と同一內容のものを記したる）の後にも此の跋言を載するあり。今は春日精之助氏所持の木版による。（藤陰）

二、跋二藤樹先生眞蹟一

秋陽　吉村　晉

右藤樹先生書蹟。凡六十八字。大溝藩恆河子健所レ藏。端整溫粹。有道氣象。流二露楮墨間一。俾二人仰企弗一レ已。乃固不レ可下以二楮墨一視上者矣。天保十四載。晉適二江西一。展二謁先生之墓一。問二所レ謂藤樹書院者一。躋レ堂拜二神主一。覽二遺物一。昔方春季。風日曛曨。屋後藤既老無レ花。亦舊物也。追二想曩昔一。低徊悲佇不レ忍レ去。已還二旅次一。子建偶出二此幅一。請レ題二識其後一。操觚之際。涙涔涔下。猶下過二書院一時上也。蓋夫有形之屬。有レ時而必聚散。獨不二待レ形而後立一者。終無二窮盡一。故能有二曠世而相感者一。是果何物哉。因復慨焉久レ之。（讀我書樓遺稿）

（附記）此の文秋陽先生の讀我書樓遺稿中にあるを知りつゝ、底本を求め得ず。後に廣島縣敎育會主事松井善一氏に依囑して、漸く本稿を成すに至れり。同氏は同會事務員を廣島市淺野圖書館に派して書寫せしめたりと言はる。玆に記して隆情を敬謝す。因みに秋陽先生は編者の恩師故吉村彰先生の祖父に當らせられ、所謂曠世にして相感ずる者あり、望鄉追慕の念に堪へず。（藤陰）

三、跋二中江藤樹先生手簡後一

白水　春日仲淵

右藤樹先生手簡。向吾得二江西大溝恒河竹陰之家一。竹陰先人潛菴翁之高足也。大溝距二小川村一不レ遠。而中氏（或中村氏）亦大溝人。先生之姻戚也。其子孫今尚在焉云。嗚呼。先生之風。高山仰止。景行行止。靄然被二人世一者。如何也。今此短簡遺墨亦可三以窺二先生德之一斑一也。丁酉仲冬平安後學白水源淵謹跋。（白水文稿）

題

一、題二致良知三大字後一

學師焉

近世淸國有二鐵保氏者一。（鐵保滿洲人、字冶亭、東鄂氏、滿洲正黄旗人、乾隆三十七年進士、以詩名、尤工書法、北人論書者、以劉石庵翁覃溪爲鼎足、）輯二一法書一。名曰二人帖一。盖取下自二宋范文正公一已下十數人上。皆以三其人之有二道德若事功若氣節一者上。而其徒以二書而已一者不レ與焉。余甚欽レ之。至二我皇國一。亦代不レ乏レ人。名賢筆蹟存二遺於世一。如二藤樹翁此蹟一是也。而今未レ聞レ有下彙輯勒レ石傳二諸將來一者上。若果有二其人一。則如レ翁者。必爲二之冠冕一。弗レ愧二夫帖中諸賢一也已。因漫題レ之。

癸未榴月朔

江都　一齋　佐藤坦識

佐藤坦記　大道

二、（題二致良知三大字及書牘一）

竹齊

篠崎弼

余家自二先人時一藏二藤樹先生筆乘一葉一。得二之於伊豫大洲之人一。大洲先生所二嘗筮仕一也。其所レ錄自反之說。末附二愼獨銘一。盖先生所二自著一。細字十餘行旁施二訓點一。余常欽二其語之篤實一。而惑二乎書之甚拙一焉。今觀二此致良知三大字及書牘一。筆意吻合。

乃信²所ㇾ藏之非²讒鼎¹。（韓非子、齊伐魯、索讒鼎、魯以其贋往、轉爲贋物之義。）而益可²寶襲¹。豈非ㇾ幸哉。牘中所謂熊左七。當²是蕃山先生¹。余未ㇾ得ㇾ觀²其眞蹟¹。備前藩必有²藏ㇾ之者¹。石君或獲焉。則亦請見ㇾ示。

癸未　復月　浪華　小竹學人　弼書　〔篠崎弼印〕〔承弼氏〕

三、（失題）　〔海屋〕　貫名海屋

五嶽天下之名山也。然有²方嶽之事¹。各有ㇾ所ㇾ奉。管晏天下之名臣也。然齊人固知ㇾ之。聖人之道。其流風餘韵。至²天下後世¹。莫ㇾ所ㇾ不ㇾ及。然常榯²之鄒魯¹。事固不ㇾ能ㇾ無²遠近親疎之差¹。非ㇾ以³其近者親者乃必其有²不ㇾ能ㇾ讓者在¹乎。藤樹先生天下之名儒也。愛²其人¹。施及²其書迹¹。殊重²於江人備人¹也。蓋有ㇾ類²於此¹矣。

歲乙未孟春之月上元之日觀畢題於鴨厓鬧口之寓樓　貫名苞　〔貫名苞〕〔　〕

（附記）以上三通は「尙友」卷中より採る。岩波書店編輯部布川角左衞門氏所報に係る。正文中の細注は編者の附する所とす。（藤陰）

書

一、（書²乙酉鷄日詩後¹）　大田錦城

藤樹先生人品德行之高。天下所ㇾ知也。予又何贊。當²此時¹。天下大亂之後。文運未ㇾ啓。辭章之學。鬱轖不ㇾ通。遠不ㇾ及²今之兒輩¹。如²羅山春齋諸先生¹大槪皆然。以ㇾ此窺ㇾ彼以生²輕蔑之心¹。則爲²大惑¹矣。淡海益田喬可五世祖義則從²學先生¹。家世々傳²藏其乙酉鷄日詩¹。先生眞蹟。世已希ㇾ有。則是天下之鴻寶也。可ㇾ不²珍重¹乎。唯其詩朴拙。則時使ㇾ然也。非²先生¹也。使³先生生²今日¹。其詩文豈出²今日風流才人之下¹乎哉。

文政三年庚辰三月端午　錦城老人　大田元貞才佐父識　〔大田元貞〕〔公幹〕〔錦城〕

二、（同上）

貫名菘翁

藤樹先生眞跡乙酉鷄日試筆作一首。湖上益田村益田可平氏家所㆑藏。卽其六世之祖義則。則先生之門人也。以㆓其傳之正㆒也。鑒識家亦以㆓此幅㆒備㆓攷證㆒云。頃介㆓小島子愼㆒寄㆓示余㆒索㆓題言㆒。夫明月之珠・夜光之璧。亦無㆑由而到。前人按㆑劍而視㆑之。是書ト雖㆑有㆓尤物㆒不㆑可㆑無㆓先容㆒也。以㆓聖人之明㆒。猶言㆓以㆑貌失㆑人。雖㆑有㆓令名君子㆒。覽㆓其書跡㆒。往々不㆑免㆓疑猜㆒。猜則不㆑信。不㆑信則無㆑神。今此幅於㆓展玩之間㆒。有㆓藹然欽挹㆒者。信㆑之也。雖㆑然非㆓不刊之良德㆒。安能得㆑如㆑此。

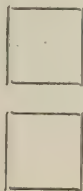
癸丑之正秋　　貫名苞題　［貫名苞印］［貫名君茂］

（附記）以上二項近江益田孝夫氏藏幅より採る。（藤陰）

三、（書國字餘醒經宿書牘後）

川田剛

以㆓藤樹先生之謹嚴㆒。且有㆓餘醒經宿之言㆒。可㆑知古人天眞流露與㆓夫僞君子務自拚飾者㆒逈然別矣。此書蓋小川邑民某所㆘與㆓尋常故紙㆒同補㆗貼於破篋㆖者。櫟嶺侯一見大驚。裝爲㆓掛幅㆒。實奇遇也。賞鑒家以㆓其糊痕汚紙字態不㆒㆑鮮。或致㆑疑。是皮膚之見。安足㆓與語㆒。所謂天眞者哉。

安政丁巳冬　　川田剛識

（附記）東京文理科大學助教授加藤仁平氏藏幅より採る。（藤陰）

四、書藤樹先生明德圖說持敬圖說後

春日仲淵

有圖說二葉。係㆓藤樹先生之著㆒。往年先人潛菴翁。得㆓江西某氏㆒。爾來藏㆑家久矣。今茲丁酉之春。吾來㆓東京㆒。偶訪㆓鐵華書院主青木子襄㆒。子襄宗㆓陽明王子之學㆒。其後交游不㆑絕。乃出㆓此圖說㆒以贈㆑之。因書㆓其由於後㆒云。（白水文稿）

五、書藤樹先生眞蹟後

大溝藩士　竹陰　恆河　健

使下人常存中慕二先生一之心上。則可下以不レ憂三德性之不二流行一也。使二人不上存下慕二先生一之心上。則不レ能レ袪三人欲之爲二蔽塞一也。詩云。有レ物有レ則。民之秉レ彝。好二是懿德一。人亦孰無二是心一乎。獨患レ不レ能二常存一レ焉耳。祖君所レ獲先生此蹟。其詞簡。而其義精。健等夙夜服膺。勉以不レ息。乃德之流行。可二以庶幾一矣。嗟乎。祖君之獲二此蹟一。其意固遠矣。健等可レ不レ勉哉。

（潛菴弟子錄）

六、（與二恆河子健一論二藤樹先生墨蹟一）

京洛上加茂　梧菴　山本季護

爲レ別累レ月。杳然缺二音問一。憫何可レ言。然千里猶二咫尺一。情懷常到。不レ知下吾兄之念レ僕如中僕之念二吾兄一否上。向忝觀二藤樹先生之書一。時方以爲天下難レ得之書也。何者先生之去レ今也。既二一百有餘年。而傳二於二一百有餘年之後一。且其幽淑奇拔之氣。充二溢於字畫點墨之間一。令二人敬歎不一レ已。豈以二書技之巧一而能然哉。蓋其德如レ此而已。後世以二書技一名二震一世一者。蓋不レ乏レ人。然而人與レ書視爲二二途一。故其人死而其書與レ名又隨湮滅。其存者鮮矣。嗚呼。書技之細。固不レ足二深感一。然其存與レ不レ存不レ能レ無レ感焉乎。吾兄購二得先生之書一。而日夕展二玩之一。所謂有レ感二悟於幽淑奇拔之氣一者乎。有レ自二得於字畫點畫之間一者乎。抑又欲乙以下先生之所二以存一者上而存甲焉乎。吾兄購二得先生之書一。其偶然哉。跋文一篇並附二左右一。吾兄正レ之刪レ之。又有二以敎一レ之幸甚。天保十三年五月山本季護白（山本梧菴遺文）

七、書二藤樹先生書簡册後一

洛南芹川處士　靜山　河野通亮

漁者持レ筌。欲レ得レ魚也。學者讀レ書。亦欲レ求レ道也。而道斯得焉。乃志二其書一。又猶三得レ魚而忘二筌也。而世之賤丈夫。爭二是非於文字之間一。呫々過レ日。而道之得與レ不レ得。漠乎不レ問レ此。論二牝牡驪黃一。而不レ求二千里之能一者也。此一册者。藤樹先生入二人於道一之魚筌也。言語之卑陋。文字之麁略。先生固所レ不レ論（在?）。惟以下易レ入二於道一者上爲レ要耳。蓋先レ實而後レ文者也。噫讀二此册一。私智之弗レ恃。按排之弗レ用。而良心以求二其意之所一レ有。而眞實用レ功。乃夫婦之不肖。皆可四以爲三善人二於道一也。況於下志二有道君子一者上乎。（河野靜山遺稿抄）

（以上四項春日精之助氏報—藤陰）

八、（辛巳元旦開講詩識語）

藤陰　加藤盛一

是爲ニ藤樹先生眞蹟辛巳元旦開講詩一。舊藏ニ京都伊藤氏一。明治戊申春ニ告先生贈位一祭。陳列示ㇾ衆。嘗經ニ影印一。載在ニ記念錄一。而原書則杳不ㇾ可ㇾ知矣。頃大阪田中君。齎ニ一軸一來言。是先生書。因求ニ鑑識一。受而觀ㇾ之。即祭時所ㇾ列物。肅然斂ㇾ容。薰誦數次。又喜ニ護持有ㇾ人也。爲書ニ識語一還ㇾ之。

大正十五年五月十日　　藤樹先生全集編纂主任　加藤盛一敬記

祝文

藤樹先生二百五十年祭典。恭賦ニ長句四韻一。竊述ニ景仰之意一。

後學　土佐　丁野遠影

滿街皆聖不ㇾ須ㇾ猜。照在ニ王家明鏡臺一。提ニ起天良一移ニ巨盜一。奉ニ承母訓一育ニ英才一。

乾元直遂易而簡。坤順謙卑藏又開。東海聞知叒木影。心齋夫子再生來。

（鐵華書院發行陽明學第三十九號所載春日精之助氏報―藤陰）

詩

一、謁ニ藤樹先生祠一

文學博士　君山　狩野直喜

山川鍾ニ秀氣一。千載篤生ㇾ人。傳ㇾ統王門學。探ㇾ源顏氏仁。

至誠能化ㇾ賊。純孝不ㇾ離ㇾ親。懿矣藤夫子。仰瞻俎豆新。

一、詠ニ藤樹書院老藤一

文學博士　豹軒　鈴木虎雄

孝德至靈通ニ鬼神一。一誠終始覺ニ斯民一。參ㇾ天院外蒼藤樹。標得江州大聖人。

三、訪二藤樹書院一

仰止湖堂孝德明。　皇國英豪無二算數一。　聖人稱獨在二先生一。

紫藤花靜夏風淸。

四、頌二藤樹中江先生一一百五十韻

文學博士　天淵　加藤虎之亮

太湖三萬頃。縹渺似二大瀛一。比嶽峙二其西一。蜿蜒列二翠屛一。湖嶽相距處。井畫通二溝塍一。土肥五穀熟。俗美人朴純。有レ邑曰二小川一。邑中有二古藤一。慶長戊申歲。藤陰生二人英一。藤樹中江氏。感レ夢號二嘿軒一。嚴君名吉次。樂レ天隱二農耕一。萱堂北川氏。內助稱二淑貞一。王父諱吉長。筮二仕米子藩一。父志不レ存レ祿。承レ祀以二其孫一。先生移二伯耆一。九歲辭二雙親一。是年始學レ書。成績夙拔レ羣。十歲遭二徙封一。從レ君大洲行。王父舉二郡宰一。隨二行風早廳一。就レ師受二句讀一。背誦書不レ繙。衆口齊贊歎。先生不二滿盈一。十一讀二大學一。所レ本在二修身一。聖人可二學至一。感憤淚沾レ巾。十二對二食膳一。自責投レ箸興。食是誰所レ賜。恩藉二父祖君一。三者恩鴻大。報謝須二肝銘一。姦民有二須卜一。受レ戮因二頑冥一。其子謀二報復一。先生努二警巡一。賊徒夜來襲。反擊加二痛懲一。智謀與二膽勇一。嘖嘖萬人稱。十三歸二大洲一。習レ禮愼二語言一。十四喪二祖妣一。哀悼莫二能勝一。十五喪二祖考一。號泣訴二秋旻一。比年遇二大故一。骨立見レ傷レ情。京僧巡二南國一。駐レ錫講二魯論一。先生參二講席一。希レ聖一心傾。四書得二大全一。拱璧不レ足レ珍。大洲俗尙レ武。不レ解二文質彬一。伍レ士晝講レ武。讀レ書夜對レ燈。十八丁二父憂一。哭泣傷レ心頻。寢レ苦致二哀戚一。動容儒禮遵。廿一注二大學一。啓蒙貽二友朋一。荒生揶揄諮。正レ義開二心盲一。乞レ暇省二母氏一。奉歸請二晨昏一。母氏懷二鄉土一。不レ欲レ去二故園一。孤影悄然反。望雲情難レ諼。致仕請二奉養一。愛レ才君不レ聽。棄レ官奔二膝下一。待レ罪滯二帝京一。逮問竟不レ至。安レ意歸二衡門一。所レ齎僅百錢。賣酒不レ免レ貧。鬻レ刀獲二銀十一。放債貸二小民一。居レ閒力二讀書一。同心相牽援。切磋學駸駸。德輝似二曉暾一。循循導二士女一。薰化被二近鄰一。弟子稍稍進。門前莪菁菁。三十始娶レ婦。據レ禮一謹循。內人高橋氏。溫順比二玉瑱一。會講亙二長時一。正レ容坐二深更一。垂レ帷古藤下。揭レ規如二日星一。時流倚二記誦一。誰復說二治平一。修身齊家訓。淸濁似二涓涇一。先生性理學。傾二倒朱考亭一。晩讀二陽明書一。斟二酌餘姚醇一。高慢爲二惡魔一。名利是畜生。愛敬非二二物一。明德人間根。無私致二良知一。此心常惺惺。孝本體二大虛一。無レ臭又無レ聲。一孝照二萬物一。鏡面妍媸分。文藝求レ道筌。誠敬通二神明一。寂然不動處。無我見二本眞一。先生踐履學。窮理爲二行因一。教學不二厭倦一。授レ徒

嘗讀讀。堪㆑儕野了佐。愚騃似㆓犬豚㆒。讀誦幾十回。一字不㆑出㆑脣。乃爲著㆓醫筌㆒。翹比三折㆑肱。了佐遂成㆑家。診㆑脈執㆓術仁㆒。化㆑鐵能爲㆑金。鍛錬由㆓一誠㆒。薫陶及㆓皁隷㆒。行客感㆓馬丁㆒。卓矣蕃山氏。入㆑門情殷殷。親炙雖㆑不㆑久。能得㆓先生神㆒。前後從游士。成㆑器道德敦。卅九失㆓伉儷㆒。持齋及㆓五旬㆒。繼室別所氏。大溝藩士媛。維時慶安元。仲秋下五辰。先生病勢革。溘焉梁山崩。享年僅卅一。魂昇侍㆓帝宸㆒。臨㆑終遠㆓婦女㆒。隱㆑几正㆓貌形㆒。殷勤勖㆓弟子㆒。誰能任㆓斯文㆒。言畢而瞑目。聞㆑訃遠近驚。喪儀用㆓儒禮㆒。埋㆓葬玉林塋㆒。備侯遣㆓蕃山㆒。厚賻禮容陳。闔鄕扶㆓老幼㆒。涕泣送㆓英靈㆒。修㆑宅爲㆓祠堂㆒。奉祀秋又春。鞬櫜日猶淺。文運未㆓芽萌㆒。先生在㆓僻壤㆒。任㆑道務㆓恢弘㆒。皇朝姚江學。江西拔㆓榛荊㆒。所㆑重學庸論。毎旦誦㆓孝經㆒。四經施㆓注解㆒。外彪而內弸。雜著十餘種。金玉響錚錚。流風山水長。遺德存㆓餘馨㆒。令嗣伯與㆑仲。玉折眞可㆑悽。季重繼㆓箕裘㆒。對州爲㆓師賓㆒。虎欽㆓先生㆒久。夢魂飛㆓湖濆㆒。昨春游㆓近江㆒。宿願始獲㆑伸。三友爲㆓東道㆒。就㆑境說丁寧。藤樹祠新建。神域威棱棱。盥漱行㆓拜禮㆒。悽愴氣絪縕。祝史展㆓祠寶㆒。匱盝㆓芳墨痕㆒。國母頌㆓高德㆒。靈筆稱㆓文勳㆒。餘榮及㆓身後㆒。不㆑負㆓聖人名㆒。去訪㆓書院址㆒。老藤勢崢嶸。懸花千百條。碧空紫雲翻。講堂係㆓再建㆒。手澤器物存。素樸意料外。相顧目瞠瞠。鞠躬拜㆓遺像㆒。苦欲㆑追㆓後塵㆒。諸家鑽仰至。揮㆑筆代㆓薦蘋㆒。更訪㆓玉林寺㆒。寺前謁㆓佳城㆒。石欄蒼苔古。細草敷如㆑茵。先生與㆓顯妣㆒。面㆑陽列㆓兩墳㆒。聖人遺愛地。惠澤垂㆓後昆㆒。民居皆瀟灑。邑里路縱橫。耕紡衣食足。禮讓家可㆑旌。人和雞犬穩。宛然堯時村。遺德謀㆓頌述㆒。㆓同人力㆓經營㆒。會長西博士。以㆑躬示㆓典型㆒。松本文釁長。幹理日忞忞。會員布㆓全國㆒。闡㆑幽日月新。遺著編㆓全集㆒。飛㆑檄及㆓率濱㆒。主任藤學士。拮据嘗㆓酸辛㆒。裒然五大冊。醫㆑渴博㆓好評㆒。重刊將㆓嗣出㆒。當㆑使㆓紙價騰㆒。今茲己卯夏。小川寮新成。講習會㆓同志㆒。日取㆓故書㆒溫。會者垂㆓一百㆒。泝㆓洄洙泗源㆒。不才囑㆓講師㆒。自愧㆓應諾輕㆒。蚤起會㆓祠前㆒。肅拜天未㆑昕。一齊誦㆓孝經㆒。琅琅聲入㆑雲。讀後掃㆓神域㆒。灑沃玉沙淸。祠頭田彌望。稻苗曉風靑。玉林假㆓講堂㆒。撤㆑障忘㆓炎蒸㆒。辰牌開㆓講席㆒。日午暫息停。孝經試㆓講解㆒。語高玉嶙峋。啓蒙說㆓大義㆒。言言可㆓服膺㆒。晝課起㆓未刻㆒。講演及㆓上申㆒。講師松本子。究㆓明斯道尊㆒。夜課復㆓孝經㆒。張膽餘勇振。研鑽逮㆓乙夜㆒。意氣靡㆓頹淪㆒。孝是百行本。孝門出㆓忠臣㆒。先生稟㆓至性㆒。鼓勵敍㆓彝倫㆒。虎也不肖質。負荷恥㆓析薪㆒。畢㆑講步㆓庭除㆒。月黑風樹鳴。前賢日已遠。斯文誰繼承。留連垂訓地。江山發㆓餘薰㆒。景仰無㆓已時㆒。偉哉江聖人。

皇紀二千六百年孟春訂錄舊作

後學　加藤虎拜艸

五、（訪二藤樹書院一）

大僧正　近　藤　亮　嚴

稽首人天師。　德風千古披。　謳歌昔日美。　只剩草堂碑。

何陋軒曰。此翁雖レ遁二身於方外一。嘗在二春日潛菴先生門一。聞二姚江之學一。其在二藤樹先生一私淑久矣。今讀二此篇一。情二於辭一。決不レ可下以二詩人常例一視上レ之也。

（附記）是は春日精之助氏の報ずる所、もと「禪林」に載せらるゝ淨土宗西山派禪林寺管長近藤大僧正の一夢錄より採る。「明治四十二年八月八日滋賀縣高島郡長の特請により郡教育總會に講話す。歸途藤樹書院に參拜、郡視學東道す。」と見えたり。（藤陰）

謁藤樹先生祠

君山　狩野博士筆

山川鍾秀氣千歳篤生人傳統王門學探源
顔氏仁至誠能化賊純孝不離親懿矣藤夫子仰瞻
俎豆新

狩野直喜拜書

詠藤樹書院老藤外一首

豹軒　鈴木博士筆

孝德至靈通鬼神一誠終始覺斯民
參天院外蒼藤樹標得江州大聖人

詠藤樹書院老藤

紫藤花静夏風清仰止湖堂孝德明
皇國英豪無算數聖人稱獨在先生

訪藤樹書院

昭和庚辰元旦錄舊製　加藤盛一君屬　豹軒虎

景慕詩文集(再刊追録三十七頁)參照

訂正

本插圖並びに次の插圖の參照頁は再刊追錄三十五頁、三十六頁の誤につき訂正いたします

頌藤樹中江先生一百五十韻

天淵　加藤博士筆

頌藤樹中江先生一百五十韻

太湖三萬頃淼淼似大瀛比叡峙其西蜿蜒列翠屏湖嶽相距處井畫通溝塍土肥五穀熟俗美人朴純有邑曰小川邑中有古藤

慶長戊申歲藤陰生人英藤樹中江氏盛學號黙軒厥考名吉次樂天隱農耕萱堂北川氏內助稱淑貞王父諱吉長並仕米子藩

父志不存祿承祖以其孫先生移伯耆九歲辭雙親是年始學書成績風拔萃十歲遭徙封從君大洲行王父擧郡宰隨行風早郡

就師受句讀背誦書不爲衆口奪賈歎先生不滿盈十一讀大學所本在修身聖人可學至感憤淚沾巾十二對食膳自責投箸興

食是誰所賜恩情父祖君三者恩滿大報謝須肝銘嘉氏有須卜受戕因頑冥其子謀報復先生努擊迎賊徒夜來襲反擊加痛懲

智謀與膽勇嘖嘖爲人稱十三歸大洲習禮慎語言十四喪祖妣哀悼莫能勝十五喪祖考號泣訴秋旻比年遇大故常立見傷情

京僧巡南國駐錫講魯論先生參講席希聖一心傾四書得大全拱璧不足珍大洲俗尚武不解文質彬伍士晝講武讀書夜對燈

十八丁父憂哭泣傷心頓寢苦致哀戚動容儒禮遵廿一注大學答蒙貽友朋荒生鄉檢語正義開心盲乞暇省母氏奉歸請晨昏

母氏懷鄉土不欲去故國孤影悄然反望雲情難諱致仕請奉養愛才君不聽棄官奔膝下待罪滯帝京逮問竟不至安意歸衡門

所齎僅百錢賣酒不免貧當刀獲銀十救債資小民居閒力讀書同心相重擇切磋學駿德輝似曉暾循循導士女薰化被近郡

弟子稍稍進門前莪菁菁三十始娶婦儀禮一謹循內人高橋氏溫順比玉瓊會講互長時正容坐深更垂帷古藤下揭規如日星

時流尚記誦誰復說治平修身齊家訓清濁似涇渭先生性理學傾倒朱考亭晚讀陽明書斟酌餘姚醇高慢爲惡魔名利是畜生

要訣非二物明德人閒根無私致良知此心常惺惺孝本體大虛無臭又無聲一孝照萬物鏡面妍媸分文藝求道筌誠敬通神明

寂然不動處無我見本眞先生踐履學窮理爲行因教學不厭倦授徒常諄諄堪偉野了佐愚駭似犬豚讀誦數十回一字不出脣

乃爲書醫筌賢比三折肱了佐遂成家診脈執術仁化鐵能爲金鍛鍊由一誠薰陶及卑隷行客感馬丁卓矣蕃山氏入門情殷殷

親炙雖不久能得先生神前後從游士成器道德敦卅九失伉儷持齋及五旬繼室別所氏大溝藩士孃維時慶安元仲秋下五辰

先生尚努筆遽焉梁山崩享年僅卌一魂昇侍帝宸臨終遠婦女隱几正貌形殷勤勖弟子誰能任斯文言畢而瞑目聞訃遠近驚

喪儀用儒禮埋葬玉林塋備俟遵蕃山庠肆禮容陳閭鄉扶老幼涕泣送英靈修宅爲祠堂奉祀秋又春韓秦日猶淺文運未半萌

先生在鄉壤任道務愷弘皇明姚江學江西拔榛荊所重學庸論每旦誦孝經四經施注解外彪而內郁雜著十餘種金玉響鏘鏘

流風山水長遺德存餘馨令嗣伯與仲玉折眞可憐季重繼其喪對州爲師賓虎欽先生久夢魂飛湖濱昨春游近江宿願始獲伸

三支爲東道乾坤說丁寧藤樹祠新建神域咸棲棲盥漱行拜禮悽愴氣氳氳祝史展祠寶匱韞芳墨痕國母頌高德宸筆稱文動

餘業及身後不負聖人名去訪書院址老樟勢崢嶸懸花千百條碧空紫雲綳講堂係再建手澤器物存素樸意料外相顧目瞠瞠

陶昭烊遺像吾欲追後塵諸家讀仰呈揮筆代爲頌更訪玉林寺寺前謁佳城石欄蒼苔古細草數如茵先生與顯妣面陽列兩墳

聖人遺愛地恩澤垂後昆民吾皆瀟灑邑里路縱橫耕紡衣食足禮讓家可雅人和雞犬穩宛然堯時村遺德謀頌述同人力經營

會長西博士以仍示典型松本女學長幹理日忽忽會員布全國闡幽日月新遺著編全集飛檄及率濱主任藤學士拮据嘗艱辛

裒然五大冊醫湯博好評重刊將硎出當使紙價騰今茲己卯夏小川寮新成講習會同志且取故書溫會者垂一百泝洄洙泗源

不才啗講師自愧懸諸轅蚤起會祠前肅拜天未昕一齊誦孝經琅琅聲入雲讀後掃神域灑沃玉沙清祠頭田疇望稻苗晚風青

玉林假講堂撤陳忘炎蒸辰牌開講席日午暫息停孝經試講解語高玉嶙峋啓蒙說大義言言可服膺晝課起未刻講演及上申

講師松本子究明斯道尊夜課復孝經張膽餘勇振研鑽迄乙夜意氣靡頹淪孝是百行本孝門出忠臣先生稟至性敦勵敍彝倫

虎也不肖質負荷秘析新畢講步庭除日黑風樹鳴前賢日已遠斯文誰繼承留連垂訓地江山發餘薰景仰無已時偉哉江聖人

昭和十四年歲在己卯仲秋

駿河後學加藤虎薰沐拜艸

景慕詩文集(再刊追錄三十九頁)參照

跋

我が大東神聖の域、太陽の出づる所、元氣の始まる所、天地靈淑の氣、蜿蟺扶輿磅礴して鬱積す。是を以て其の氣の發する所、彬々として瑰偉絶特の士を輩出す。吾が藤樹中江先生の如きは、就中尤も出類絶羣の一大偉人と爲す。而して流俗唯、漫然稱するに近江聖人を以てす。嗚呼天資卓犖先生の如く、學術醇正先生の如く、積德茂行先生の如く、過化存神先生の如き、之を我が神州日域の一大聖人と謂ふも誰か然らずと爲さん。豈啻に區々近江一國の聖人たるのみならんや。彼の馬夫の遺金を還し、剽賊の良民となれるが如きは、是れ先生德化の一端に過ぎざるのみ。若し先生をして肥遯道を講ずるの志を轉じて、天下の廟堂に立ち天下の大政を行はしめば、其の時雍の治を致さんこと、蓋し期して待つべきなり。盍ぞ試みに熊澤蕃山の岡山に於ける治績を觀ざるや。其の康濟の才、經世の略、識者之を古今に冠絶すと稱す。流に沿ひ源を尋ぬれば、先生の陶冶實に之が淵源をなすに職由せずんばあらず。孟子の所謂禹稷顏子地を易ふれば皆然らんとは蓋し先生の謂ひ歟。斯の師にして斯の弟あり。猗歟盛なる哉。昔者文中子隋末板蕩の時に在り、慨然として宏濟の志を抱き、退いて河汾の間に教授し、魏徵房玄齡の徒を

出せり。先生は則ち大湖の西に隱れ、帷を垂れ道を講じ、英賢蕃山の如きを出せり。東西古今其の揆を一にすと謂ふべし。張稷若曰く、言世法となり、動世表となり、存すれば其の人に儀し、沒すれば其の書を傳へ、流風餘澤久しうして愈〻新なるものは百世の人なりと。先生の如きは卽ち眞に其の人と謂ふべき哉。抑も予の先生に於て尤も欽服敬仰して措く能はざる所のものは、母氏と海山隔絶し、日夕定省を缺くことを憂へ、決然官を棄てゝ桑梓に歸り、貧窶困乏の間、終始怡然として歡を膝下に奉じ、以て孝養を終へしこと是なり。竊かに先生の心を忖度するに、蓋し孝養を盡さんがためには、眼中功名なく、富貴なく、軒冕も泥塗にすべく、爵祿も糞土にすべし。乃ち舜天下を棄つるを視ること猶ほ敝蹝を棄つるが如く、竊かに瞽瞍を負ひて逃れ、海濱に遵ひて處り、終身訢然として樂しんで天下を忘れんとするの情懷なるなからんか。於戲先生の如きは則ち眞に曠世の大孝と謂ふべし。夫れ孝は德の本なり。本立ちて道生ず。先生の學術、先生の德行、皆基を此に發し、遂に優に聖域に入り、百世の師表となれり。故に曰く、孝弟は其れ仁の本たるか、堯舜の道は孝弟のみと。嗚呼孝弟の尙ぶべき、洵に是の如し。而して輓近世衰へ、道微にして、邪說暴行荐りに作り、子にして其の父を殺し、弟にして其の兄を殺し、妻にして其の夫を殺すものあり。勢の馴致する所、竟に不軌を圖り國家

を顚覆せんと欲するものあるに至れり。魏相が所謂此れ小變にあらず、憂卻つて蕭墻の内に在らんとは、是れ我が國現時の情勢にあらずや。吁嗟是れ果して誰の咎ぞ。言を興して此に至れば、長大息せざらんと欲するも得んや。是の時に當り我が藤樹神社創立協賛會の企畫に係れる先生遺著全集の編摩竣りを告ぐ。眞に國家の爲に慶せざるを得ず。顧ふに先生賢聖の懿德を懷き、道を荒村老屋の下に講じ、殊に王學の壺奧を究め、深造自得、往々前人未發の見あり。而して該博の學、高邁の識、以て舊經を註し、新著を爲し、餘力の溢るゝ所、醫術本草等に及べり。其の氣魄の大、精神の王なる、淺人の得て窺ふべきにあらず。天若し先生に假すに尙ほ十數年の齡を以てせば、其の範を後世に垂れ來學を開く、蓋し測り知るべからざるものあらん。然れども其の遺著の浩瀚なる、旣に已に斯の如きものあり。以て天下萬世を裨益するもの、決して淺鮮にあらざるなり。今や幸に我が同人諸君の前後九星霜に亙れる拮据經營に賴りて、編摩功を竣へ、茲に剞劂に付し、普く天下に播く。眞に斯道のために賀せざるを得ず。我が神州日域の同胞諸兄冀はくば日夕之を繙讀し、聖賢の氣象に接し、其の流風遺韻を挹み、以て忠愛の摯情を涵養し、孝子順孫善良の臣民となり、以て皇國を富嶽の安きに置かば、我が藤樹神社創立協賛會の企畫幸に畫餅に歸せず、而して先生在天の英靈も、亦莞爾として笑を冥漠

に含まん哉。是を跋と爲す。

昭和四年三月三十日

藤樹神社創立協賛會長

滋賀縣知事　堀田鼎

How different the result of the two halves of his work! His metaphysic was soon superseded by other ephemeral systems, but his application of algebra to geometry led in the hands of his successors, Newton and Leibnitz, to the invention of the Calculus, the indispensable implement of astronomical and physical research. From these considerations, and in view of the trend of modern thougut, it seems a clear inference that the writers of the Ō Yō mei school will have no successors in the new Japan. But that does not detract from the value of the account of the school which Professor Inouye and Mr. Fisher have given us. Such work has a scientific value of its own; for science has now extended its methods and its domain to the phenomena of the human mind. The law of intellectual evolution was discovered by Auguste Comte, the mightiest of modern thinkers, nearly a century ago; it challenges either recognition or refutation. It alleges that the intellect of man begins with theology and passes through the stage of metaphysics to positive science. It is an induction mainly from the history of the European mind; but all the evidence that has since been obtained regarding the intellectual evolution of China and Japan has served only to confirm it. Mr. Fisher's paper is a valuable stone added to the fast accumulating evidential pile.

At the close of the paper, the Chairman voiced the thanks of the Society to Mr. Fisher for this, his first paper, which he hoped would be the forerunner of others equally as valuable.

Mr. J. CAREY HALL proposed the vote of thanks to the lecturer for his interesting and instructive paper. He said it was valuable for several reasons. First, for its connection with some excellent work already done by the Society in making known to us the nature of that Chinese ethical philosophy which was predominant in Japan throughout the whole period of the Tokugawa regime. Much light had been thrown on this subject by the papers of Dr. Knox, Mr. Kirby and Professor Lloyd published in the Society's Transactions; and Mr. Fisher's paper was a desiderated step in advance; for, in addition to the two ethical sects previously exemplified, it gives us for the first time an adequate insight into the remaining one of the three schools of thought which, between them, divided the allegiance of Japanese intellects in the pre-Meiji era. And the interest of such researches is not merely theoretical; it is practical as well. The present is the child of the past; and the hidden springs of the marvellous political developments of the generation now ending must be sought for in the intellectual and moral preparation made in the preceding age. The Meiji statesmen, from the *Genro* group downwards, had all been trained and moulded in the Chinese ethical schools with which these papers helped to make us acquainted. From them we learned much about China too; for Japan is China's most brilliant and distinguished pupil. The Tokugawa writers of all the three schools acknowledged Chinese thinkers as their teachers, and, whilst sometimes dissenting on minor points, gloried in their discipleship. The chief school, and sole standard of orthodoxy, was, of course, that of Chu Hsi—in Japanese, *Shu-shi*. This great thinker did for the philosophy and religion of Eastern Asia what Thomas Aquinas did for the religion and philosophy of Western Europe. Just as the latter welded into a coherent system Christian doctrine and Aristotelian philosophy, so the former elaborated a system compounded of the Confucian ethics and the metaphysics of Buddhism; and this system has for seven centuries held its ground as the canon of Chinese orthodoxy. But there have been dissenters; and the most eminent of them was Wang Yang-ming, the Ō Yō-mei so often referred to and quoted in Mr. Fisher's paper. His first disciple and propagandist in Japan, of whom so full an account has now been given to us, was a contemporary of the father of modern European philosophy. And Wang Yang-ming himself has been called the Descartes of China. In point of intellectual acuteness and ability as metaphysicians the Oriental and the Occidental thinker were probably on a par. But the difference between them is fraught with instructive significance. Descartes was not only a metaphysician; he was a scientist as well. Great as a speculative philosopher, he was equally great as a mathematician. Let us mark well, in his case, the contrast between the barrenness of metaphysics and the fertility of science. In metaphysics we only mark time; in science, we make great and permanent advances. In his speculative philosophy Descartes, like other metaphysicians before and since, put aside the labours of his predecessors and began afresh from the beginning of things: in his scientific work, he took up mathematics at the point where his predecessors, the Greek geometers, had left them, and added his own contribution to the sum of their labours.

years after "Great Learning" was written, and it was first precisely defined by Oyōmei, over a thousand years later. It is, furthermore, very doubtful if the two terms do mean the same thing. Thus, while we grant the subjective value of Tōju's unconscious wresting of the classics to his own ends, we should be somewhat chary of accepting him as an authority on their real meaning.

BIBLIOGRAPHY

Among the more important references named by Dr. Inouye are the following:

Shingaku Bunshu, two vols. A collection of writings by Tōju and Banzan.

Letters, etc., of Tōju, one vol.

Lives of Tōju and Banzan, one vol., manuscript.

Data of the Educational History of Japan, being Vol. V in a series compiled by the Mombushō.

Historical Data at the Tōkyo Imperial University: in part.

Educational Theory of Tōju, by Adachi Ritsuen, in Kyōiku Jiron, No. 445.

Yōju and Banzan, by the same, in the same magazine, No. 507.

Yōmei School in Japan, by T. Takase.

Ethical Ideas of Tōju, by Dr. T. Inouye, in Kyōiku Kōron, No. 6.

Religious Ideas of Tōju, by Ebina Danjō, in Rikugozasshi, No. 217.

Kumazawa Banzan, by Y. Tsukagoshi.

Spiritual education of Tōju, by M. Kaneko, in Kyōiku Jikkenkai, Vol. III, No. 3.

Visit to the Grave of Tōju, by T. Takase, in Yōmei Gaku, Nos. 65–67.

Biographical History of Modern Moral Education, by Adachi Ritsuen.

Development of Japanese Philosophical Ideas (German), by Dr. T. Inouye.

A Japanese Philosopher (English), by Dr. G. W. Knox.

[THE END.]

famous Confucianists. "The Histories may be read," he says, "for diversion and illustration of moral laws; all the other books are worthless." Such views sadly fetter the scope of learning, and utterly misinterpret the nature of historical writing.[80] Toju's system certainly has worth as a subjective ethical philosophy, but its intolerance toward objective scientific research is baleful in the extreme.

Tōju is excessively opposed to saichi (才知), cultivated wisdom, as being harmful to moral culture. He looks upon all intellectual culture without heart culture as cunning, and denounces it as the very root of evil. His ideal is something like the impossible utopia of intuitive wisdom and virtue dreamed of by Laot'zu. Simplicity such as he advocates would only cause suicide in this intense age. In itself there is nothing bad in the nature of intellectual culture; its goodness or badness is determined solely by the use that is made of it. Tōju's standards in literary criticism are equally warped. He has no room for the beautiful but only for the good. Consequently, he looks down upon poetry as having a temporary glamour but no intrinsic value.

Finally, says Dr. Inonye, Tōju's treatment of the classics is ingenious and spirited but not always according to the strict canons of criticism. Under pretense of giving an exposition of the classics he really manages to buttress his own system of philosophy. For instance, he takes "meitoku," enlightened virtue (德明), in "Great Learning," to be the same as ryōchi. But as a matter of fact the term ryōchi was first used by Mencius

80. These strictures by Dr. Inouye seem over-harsh in view of this passage in Okina Mondō, III:

"In the age of the gods imitation of the conduct of the sages was true learning. But now there are no sages; the classics have been written, and true learning consists in understanding these, and regulating our conduct thereby. To read and understand the classics and rule our lives in accordance with their teaching is to polish the illustrious jewel of our hearts, but to cast away the books of the sages and trust to our dark misled hearts is to cast away the candle and hunt in the dark for what is lost.

"Question: What of the humble folk who cannot read?

"Answer: Of old the officials taught the people in every little hamlet, and thus even these humble folk knew the truth though they could not read for themselves. They understood the meaning and obeyed: not reading it was as if they read. It was heart-reading, since the heart conformed to the heart of the sages. Mere reading with the eye while the heart is far away is not true reading: it is to read as if we read not."

Tōju's doctrine of ryōchi is subjective determinism, just the reverse of utilitarianism. Consequently, he tends to neglect the examination of the data of experience. But just because of his determinism, he was stoically superior to external circumstances. His teaching was perhaps of far greater value to the people's morals than the work of modern ethical scientists who busy themselves with the arrangement and comparison of ethical theories. Tōju's discussion of ryōchi is particularly interesting because of its similarity to the Brahman theory of bonten (梵天) or the Buddhist nyorai (如來). But he fails to solve the relationship of the individual ryōchi and the universal ryōchi. As the possession of individuals it is many, but as the substance of the world, it is one. How can one be many and many be one? Tōju attempts no answer.

In spite of his generally rational temper, Tōju does not altogether escape superstitions common to the religious devotees of his age. He holds earnestly to transmigration, confounding it with casual relationship in the physical world. For instance, "Those who violate filial duties will be changed into dogs."[79] He has another passage in "Shunpu" where he dilates on how virtuous men are protected by heaven from natural calamities. Somewhere else he says that those who are truly philanthropic and do their charity in secret will be blessed with children. Like other philosophers of his day, he failed to see the independence of physical and moral laws. Again, he not only believed in the personal Jōtei, but even worshipped an image of him according to a kind of ritual.

The Yōmei school emphasised moral discipline to the extreme of branding learning as not only unnecessary, but even harmful. This attitude was advocated first by Riku Shō-zan (陸象山), who thus founded a non-philosophical heart-learning (心學 Shingaku). Ōyōmei espoused and developed the same theory. Taking the cue from those fathers, Tōju strongly opposes the prevalent literary study of the classics, and confines his attention to morality. He raves against the tyranny of books. To his mind the only truly necessary books are, The Thirteen Classics, and the Seven Books, lives of

---

79. Inouye, op. cit. p. 158.

when transferred to Japan many of them are quite impracticable." Again, he says: "When time and place change, even saints' laws, if forced upon the world, are injurious to the cause of the truth." Tōju applied this principle to Chinese etiquette and literary style, even in violation of the teaching of Confucius himself. As, for example, when he writes: "The precepts and deeds recorded in the Analects are wise and sacred, but if they do not fit in with our times, I tell my pupils to omit some portions and I expound only the essential parts." Tōju recognized that the doctrine was made for the Japanese, not the Japanese for the doctrine. In this respect he differs widely from Christians who, professing a vague principle of universality, try to engraft western doctrinal Christianity bodily in Japan. Hence, to claim Tōju as an elder of the Christian Church is quite a superficial conclusion.

Of all virtues, Tōju put kō (filial piety) first, and his teaching, declares Dr. Inouye, deserves our assent. Kō is at the heart of ancestor worship and is most highly prized where ancestor worship prevails. If ancestor worship should cease, there would be no reason for esteeming kō. The destiny of a race is determined by the strength or weakness of kō. From the foundation of our Empire we have been one in traditions, language, customs and history, and have therefore formed one great family. We do not, like other peoples, present a record of discord and rebellion, but from olden times we have preserved one unbroken line. As this generation recognizes its ancestors, so our descendants will recognize us, and thus promote an ever growing glory. For these reasons kō bears the closest relation to our national destiny, and we must confess that Tōju was amply warranted in his high regard for it.

Chu (loyalty) broadens and fills out kō. Especially is it true in Japan that filial piety implies loyalty. For since the whole people is like one family, our attitude to the head of the nation corresponds to our attitude to the head of the house. The nation is just the family expanded. Hence it comes that chu-kō, loyalty-filiality, can be called a single doctrine. Since Tōju looked upon chu as merely one phase of kō, he laid his main emphasis upon kō.

Dr. Inouye continues: Observing these resemblances, some Christians may claim Tōju as a pre-Christian Christian, "an elder of the Church without hearing the gospel." But this would be a rash and unwarranted conclusion: as the proverb runs, "It knows two and five, but does not know ten. 二五を知りて未だ十を知らす" Tōju differs radically from Christianity at several points. Imbued with the social spirit of Confucianism, he aimed, like Christianity, to be sure, at the reformation of society, but his ideal of human equality does not like Christionity, make light of the relations of subjects to lords and of children to parents. Rather, he sought to cement these relations more firmly. On the whole, Tōju's teaching is concerned with this present world. If he soared into the realm of ultimate ideas it was simply that he might make the basis of practical ethics more secure. He never sought an unwordly or other-wordly solution. Christianity, on the other hand, aims to set up its kingdom outside of the social order. The relation of men to the Heavenly Father alone is emphasized and a disturbance of the peace, not only of the family, but also of the country, is not objected to.[78] 天父に對する關係のみを尊重し……一家の中は勿論一國の中さ雖も,不知を來たすを意させざるなり. The two roads may seem to diverge but a hair's breadth, but in their effect upon national welfare their goals are a thousand ri apart. Christianity sacrifices mundane to extramundane relations. If Tōju was living to-day, he would undoubtedly attack Christianity just as he attacked Buddhism, in order that his own doctrine might be saved from pollution. 佛敎を斥排せしか如く耶蘇敎を排斥せしならん. 人をして両者を混同するこさ莫らしめしならん Tōju was no slavish follower of the old masters. He insisted upon the necessity of distinguishing between the uncahngeable essentials and their changing application. He says: The "way" and the methods or forms are quite distinct. To mistake forms for the "way is a grave error. Although the methods may have been given by sages of the Middle Kingdom, they must be changed from age to age. Particularly,

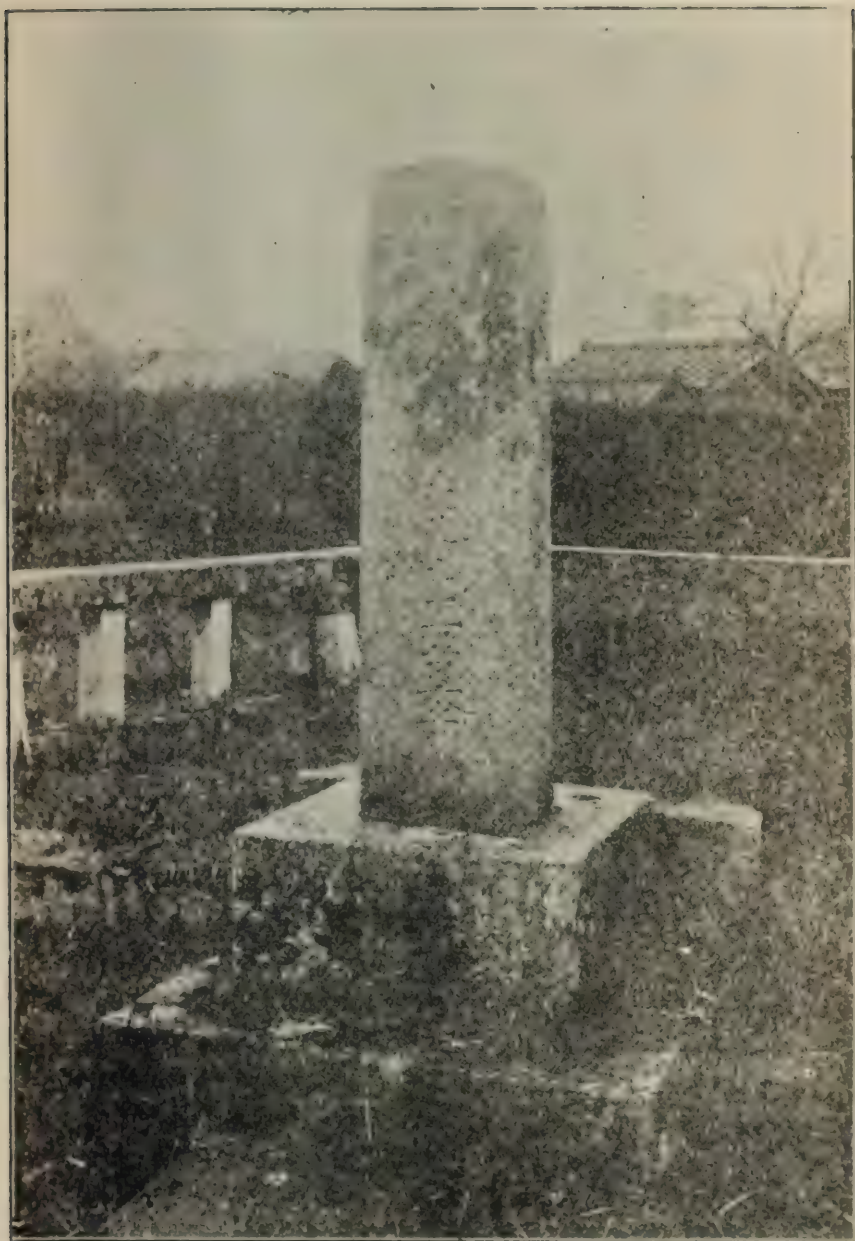
78. One wonders whether Dr. Inouye has carefully read the New Testament or the history of Christianity.

Tōju's philosophy, as we have seen, presents not a few points of resemblance to Buddhism, but they are more superficial than the points of difference. Buddhism is pessimistic, seeking for nirvana, which is deliverance from the evil world. Tōju is optimistic and upholds the present social order.

On the other hand, Tōju's views are not unlike Christianity. In the first place, his idea of God as Heavenly Ruler (Jōtei) and the Christian Heavenly Father have some similarity. The ancient Chinese seem to have believed in the personality of the Heavenly Ruler as attested by Shikyō, the "Book of Odes," Shokyō 書經 "Records," etc. Later, the philosophers of the Sung dynasty, e.g., Shushi, gave the term a morer ationalistic interpretation. But Tōju believes firmly in a personal Jōtei and aspires to union with him. (Although Prof. Inouye may be warranted in asserting that Tōju had so personal a conception of Jōtei, there are many passages which indicate a vague, pantheistic conception; e.g., "Ten (Heaven) distributes its mind throughout all creation. Therefore it has no (individual) mind. The benevolence (of Ten) is one with all creation. Therefore it has no (individual) desire." (Inouye, op. cit. p. 93.) And Prof. Inouye himself goes on to modify the statement as follows). But Tōju considers Jōtei to be the substance of his own self. That is, Jōtei is ryōchi, the commander of all his actions, descended from heaven and resident in his own heart. Obedience to ryōchi is therefore obedience to Jōtei within us, and is the source of all human happiness. "The true substance of joy and peace for a kunshi is found within his own breast."

In the second place, the Jōtei of Tōju is infinite love. "With true and generous love Jōtei created the world and fixed the bounds of mankind."[76] (Cf. Acts 17 : 23). But Tōju also declares that the universe was created by the filial principle, kō, which is infinite benevolence or love. Hence, Jōtei is infinite and absolute love, very much like the love of the Christian Heavenly Father. Moreover, as we have already seen, Tōju believed in the infliction of punishment by Jōtei[77].

76. Inouye, op. cit. p. 151.

77. This point is brought out in his "Genjin Ron" and "Taijo Taisotsu Shinkyō."

Tomb of Nakae Tōju

love we feel no selfish motive and our heart is at peace. In every state it keeps us content. For while honor and wealth give us the opportunity to educate others, poverty and obscurity give us leisure for our own improvement. In life we act our part and in death we rest. The kunshi never loses self-mastery." (3) " Tranquility is akin to courage, for without a certain knightliness, tranquility of soul is impossible. Common people do all kinds of improper things, but men of generous, gallant nature overlook their shortcomings, and magnify their good deeds. They are always magnanimous and mild and consequently exercise great influence over others. Their simplicity and equanimity take men captive. All these three virtues, honesty, love and magnanimity, must go together in a true man."[74]

Such is Tōju's argument. Some of the resemblances which he fancied he saw may seem rather far-fetched to a critical mind. And making all reasonable allowance for his semi-poetic tendency, we must conclude that Tōju's wish was at least step-father to the thought. But with the three Shintō symbols he comes nearer making his case : The mirror stands for the clear intellect, free from prejudice and illumined by wisdom ; the jewel represents impartial, generous love ; while the sword typifies long-suffering fortitude, and a knightliness that shrinks from wanton destruction.

Dr. INOUYE'S CRITICISMS

In concluding our survey of Tōju's teachings, we may profitably note Dr. Inouye's Criticisms, as much for the side-lights they throw upon Dr. Inouye's own views, particularly regarding Christianity,[75] as for their elucidation of Tōju. I summarize :

---

74. Inouye, op. cit. p. 146-8.
75. Dr. Inouye is said to have modified his views on Christianity a little recently.

been impossible: in proof, consider the systems of Kyō-yu and Soseki. At that time, as there was communication with Japan, the Buddhist system came hither also. Now these men, Shaka and Dharma, pitied the misery of mankind and sought by all sorts of devices to lead their fellows to virtue and the avoidance of sin. But they lived among barbarians and formed a one-sided system; the holiness they counselled was not genuine, but was rather opposed to the truth and an obstacle to the true way."[73]

Toward Shintō, however, his attitude was quite liberal. For some years he was averse to worshipping at any shrine except that of his ancestors. But later on his views changed and he paid a visit to the Imperial Shrine at Ise and to that of Sugawara Michizane in Dazaifu. He even went so far as to advocate a compromise between Shintō and Confucianism. In "Shintō Taigi" he makes an interesting attempt to syncretize the two. His argument runs thus: The three cardinal virtues of Shintō are honesty 正直, love 愛敬 and simplicity 無事. Corresponding to these in the "Doctrine of the Mean" are the three virtues (1) chi 知 (2) jin 仁 and (3) yu 勇. (1) In identifying honesty and chi, he says that honesty is like a mirror which reflects exactly, "i. e., knows fully, everything good or bad that passes before it. Thus the divine Light sees even the hidden thoughts of our hearts, and we ourselves know them too. Hence the superior man, whose heart is honest or enlightened, keeps a watch over himself, lest he do or think anything displeasing to the divine Light of heaven and earth or disgraceful in the eyes of men. Even when he has done something wrong, he will recognize it by virtue of his conscience (神知 lit divine knowledge), and will repent at once. Thus, if the divine Light in the heart shines unhindered, concealing neither good nor evil, honesty will prevail in public and private; body and mind will be sound are free from fear or shame." (2) "Love or reverence is at the root of all virtue. It fills us, when lower passions have been got rid of. It shows us the identity of ourselves and of otherselves, of man and the universe. When possessed by

73. Knox, op. cit. p. 252.

gospel to the people in the very robes in which he was dressed. A hermit's clothing had no power to make him more consecrated. Seclusion from society had nothing to do with his enlightenment. It was his own heart, still only partly purified, that defiled him, and not his living in a royal palace. His heirship to a kingly throne could not make him worse : it was his own heterodoxy that did so."[72]

Such was Shaka to sham-hating Tōju. He hurled similar criticisms against Dharma and other masters of the Zen School, who like Shaka seemed to Tōju to undermine the social order. He went so far as to denounce Buddhism as having been from the first an unmitigated curse to the world. In this, of course, he was extreme ; for was not Oriental art begotten by Buddhism, literature enriched by it and philosophy, including Yōmei, deepened by it ? But Tōju had in view only practical morals, to which Buddhism made but an infinitesimal contribution.

But Tōju was an impartial hater, holding many of the later Chinese schools, also, to be beneath contempt. In reply to the query " What do you mean by sciolist ? " he replies :

" Men with much knowledge of the surface of things, but ignorant of the essential principles. They have carelessly taken up the study of religion and become quickly learned. In China, Kyō-yu So-fu, Bokuhi Soseki and Shisoko Soshi, and in India, Shaka and Dharma were the chief representatives of this class. These men are somewhat less than the superior man.

" Question : How can you class those Chinese whose teachings never obtained much currency with the others, whose systems extended even to China and Japan ?

" Answer : The teaching of the sages are like the light of the sun. In India there were no sages, but only this superficial knowledge, and so in India Buddhism, instituted in accordance with the customs of barbarians, had great influence. By the decree of fate there were no sages or superior men in China, likewise, after the time Senkoku. In this time of darkness came the Buddhist system and prospered. In the noonday of the teaching of the sages its dissemination would have

72. Inouye, op. cit. p. 141.

from desire depends simply on loyalty or disloyalty to unselfish, righteous motives."

Shaka and Dharma were Tōju's particular bête noire. In Okina Mondō, III, he thus inveighs against Shaka:

"Shaka, when nineteen years old, forsook his throne and betook himself to the desert; at the age of thirty he proclaimed his system. At times he appeared as a beggar, but he did not insist upon the five virtues, and with many inventions he deluded the vulgar. His followers did not appreciate his purpose but copied his conduct and his inventions, and thus became worse and worse. Thus at last we hear of a matricide being praised as excelling in filial piety, and that the vilest criminals by the power of religion can enter heaven."[71]

"The fallacy of considering it selfish to keep one's social rank and unselfish to abdicate it, or the accumulation of wealth as selfish and the abandonment of it as unselfish, arises simply from the want of absolute independence of the mind from worldly concerns. It is because a man is not yet perfectly free from the charms of objects commonly sought by men that he suffers all sorts of anxieties about them. The mind of a seijin is not engrossed by such things. He is full of divine light; he is all gentleness. He commands a perfect mastery of himself in face of such attachments and anxieties. High rank is not condemned nor a lowly station assumed to be worthy in itself. Wealth is not considered as the mark of selfishness nor its abandonment as a proof of unselfishness. The spirit of obedience to the divine light in ourselves justifies everything who do and the opposite spirit makes all actions mean, whether positive or negative in their outward form. The selfishness or unselfishness of actions depends upon the state of the heart. ("As a man thinketh in his heart, so is he.") It is only a superficial view that would determine the moral worth of actions from their external appearance. Had Shaka been truly enlightened, he would not have deserted his palace. He would have looked upon the station in which he was placed as most holy ground. He would have preached his

71. Knox, op. cit. p. 255.

not indignant though their good deeds be unobserved. The lord of so greatly desired slender-waisted women, and the fleshy women of his court starved themselves to death seeking to reduce their size. Men who desire popular fame may be compared to these—they approve whatever their time applauds will small regard to right and wrong; we who know the Shingaku (heart learning) think such conduct shameful and carefully avoid it "[70]

In a little poem Tōju puts the same idea thus:

"A prison there is outside of prisons,
Large enough to hold the world;
Its four strong walls are love of fame
And gain and pride and selfish will.
Alas! So many sons of men
Are chained therein and mourn for aye."

ON HERESY

In common with the whole Yōmei School, Tōju was indebted for not a few of his points of view to Buddhism, especially to the Zen philosophy, but this very fact led him to emphasize the vital points of difference so as to make sure that no one could suspect him of proclaiming merely a new phase of Buddhism. One vital difference is his view concerning desire, already referred to under the head of "Ethical Teaching." While both Tōju and Buddhism aim to get rid of selfish desire, Tōju has no sympathy with the Buddhist doctrine of the extermination of desire, resulting in a benumbed manhood. He advocates a purification of desire and its energetic direction toward self-mastery and self-culture. He says: "The unselfish spirit of the way recognizes righteousness but scorns self-interest. Freedom from desire means following righteousness without a selfish heart. It means taking or paying what is rightly due, laying up what should be laid up, and giving away what should be given away . . . . Desire or freedom

---

70. Knox. op. cit. p. 348.

natural destiny. Virtue conquers talent, talent overcomes force, and force is superior to fate. If virtue and talent balance, fate wins; then, too, in the last extremity, as the destruction of a nation, fate conquers in spite of virtue and talents.

"Question: Suppose all four are equal?

"Answer: Like equal players at go, it is impossible to say why either wins.

"Question: Describe the sage, superior man, hero and adventurer.

"Answer: The sage excels all men in all things and is divine; the superior man is one degree below the sage and does not attain to the divine; the hero in other things is one degree below superior man, but in war is his equal; the adventurer has the military talents of the hero but lacks his virtues. Sage, superior man, and hero bless the land in war or peace; the adventurer is useful only in war and often brings evil on the land. He is to be employed for his talents' sake, but cautiously, and is not to be entrusted with too much power or given too high rank.

"Following duty, though a man be slain there is not a wound upon him; but wanting virtue, though he live to fourscore and die in peace he is as disgraced as the wretch who is beheaded or sawn asunder."[69]

On the besetting vice of the soldier and the ruler, the desire for fame, Tōju says:

"Question: But suppose with lust of place and power we forsake also the desire for the good of our fellows, shall we not fall into sin?

"Answer: Desire for fame is higher than desire for rank and wealth, and its results are often good. When a man without fixed principles becomes indifferent to the opinion of others, he falls into evil. But for the followers of truth there is a higher test. Truth and holiness from the substance, reputation is the shadow. Because the virtue regins in the heart the name is gained. Thus we have the approbation of the sages. Wise men do not desire the name without the virtue: they value it only as a reflection of truth; they are

69. Knox, op. cit. pp. 245, 166-167, 249-250, 350.

wisdom in all things, accomplishments, skill in law, in service, in overcoming difficulties and in conquering enemies. These are the pillars of the examination, and rank and salary are to be bestowed in accordance therewith. The heart of the ruler was the mirror of the law of old. If the mirror were clouded, all examinations must fail; if the lord excelled in virtue, it was impossible to palm off a false skill upon him."

"Question: It is related in the Analects that when the Duke of Yei asked Confucius about warfare he replied: "If you should wish to know how to arrange sacrificial vessels I will answer you, but about warfare I know nothing." How then can you say that he knew the art of war?

"Answer: In war the most important things are the heart and the time. When a virtuous heart accords with the right time we have virtuous war, but from an evil heart in rebellion against the proper time we have evil war, like robbery. In the case mentioned, the purpose was evil, and hence the reply of Confucius. He knew nothing of such evil warfare.

"Question: Should we not learn the art of war in the field without books?

"Answer: A one-sided opinion. Of course a mere study of the rules without regard to varying circumstances is useless. Even great talents are increased by study, as the dull grow duller by neglect of them. There never was a really great general not well read in his profession; like the physician, he must know the disease, the patient and the remedy, or he will be a terror and not a blessing. It is true that sometimes the patient of an ignorant physician may get well by the power of nature, and in spite of his ignorance, and so a general may gain the victory over a weaker foe by fate, though he is not well instructed; but it will not be true success.

"Question: If fate be with us, shall we not win in any case?

"Answer: We must consider virtue, talent, force, and fate. Virtue is this virtue of arms and letters as described above; talent is the power of moving men at will–wisdom in war, prescience of enemies' plans, knowledge of the forces of heaven and earth; force is preponderance of strength; fate is our

or earth, and though he face a million enemies he is like a wolf facing a fox. This bravery rests on the virtues and is called the bravery of jin 仁 and gi 義, and since it has no enemy in heaven or earth it is called great bravery. Youthful bravery is unreasoning like the bravery of a brute: hence it sometimes shows itself in rebellion, or if the man be of low rank, in thieving. Its foundation is lust; in time of victory it appears well enough, but in time of defeat it shows its ignominious character by deserting its lord. It seems like true valor, but it is properly called youthful bravery and little bravery.

"Question: Are both kinds of bravery useful?

"Answer: The great can never be out of place. There is no true righteousness without it. It is of use to general and soldier alike. The small is of use in the soldier, but if the general possesses it alone he never can conquer. From this cause many generals have been defeated both in China and Japan.

"Question: Is there an art of strategy and tactics, and how shall it be learned?

"Answer: The art of war came from the book called Yeki, and the old Chinese systems are of value, while the books written in Japan are useless. We may learn the principles from books, but these must be adapted to circumstances, or we shall be like the son of the famous general who was thoroughly instructed by his father, but becoming a general himself was defeated and became a laughing-stock to heaven and earth. So, first of all, we are to learn the Confucian learning and then we shall be able to master any particular science and its application.

"Question: What is the proper examination for samurai?

"Answer: There are three grades of samurai. The first endowed with great bravery, obedient to virtue, skilled in accomplishments. The second is not so well instructed in the truth, but loyal, unselfish, and skillful; but the third is selfish and full of lusts. As these last are many the lord has need for caution. Further, there are three examinations: in virtue, capacity and accomplishments. Virtue is the union of jin and gi, learning and arms; capacity, the power to govern with

importance of offspring, we see that it is proper for the higher ranks to have more than one, and this according to rank, the Emperor having most. And what disgraceful, brutish evils result from the precept denying a wife to the priests."[68]

ON MARTIAL VIRTUES

Man of peace though he was, Tōju was quite up on the art of the soldier. No doubt the rather distasteful military discipline of his boyhood at Ōsu left its impress upon him. At any rate, we find in Okina Mondō many shrewd observations on the character and work of the man of arms, sufficiently interesting to quote at length.

"It is often said that learning is for monks and priests but not for samurai, since those who love it are lazy. If a samurai is learned it is rather a reproach to him. Samurai sneer at learning from envy and the desire to conceal their own defects. Minamoto Yoshitsune and his great retainer Benkei far excelled all the men of their time in learning, and these were the paragons of samurai—always successful and never defeated. The proper place for men without learning is in the fields and cutting wood. There are brave men among those with accomplishments and among those without accomplishments, but if we have true learning we always have true bravery; as the Ron-go says, the virtuous man is always brave though the brave is not always virtuous. We have the distinction as stated between virtuous bravery and youthful, natural bravery."

"Question: What is the difference between virtuous bravery and youthful bravery?

"Answer: The bravery of the wise man consists in obeying the way, being true to principle and desiring nothing else. He is ready to give up life itself in the service of parent or lord. He neither loves life nor fears death, and thus has destroyed the root of cowardice. He fears nothing in heaven

68. Knox, op. cit. p. 256.

book-worms of our day, who, in the words of the proverb, 'Read the "Analects" but do not read them.'"

Closely allied to "Education" is the topic of "The Family," on which Tōju touches in Okina Mondō in a way that would hardly command assent from modern readers:

"The husband is to love his wife, and yet not overmuch, lest he neglect his parents and brothers. The men who have brought ruin on family and kingdom by disregarding this rule have been innumerable. And yet not to love at all is also an evil, since by the wife he has the blessing of offspring and the worship of descendants. But let the love have limits as above set forth. The wife is to reverence and obey her husband. She must be gentle, quiet and faithful. Her husband is in the place of heaven. His parents take the place of her parents, and thus obedience to father-in-law and mother-in-law becomes the first of her duties. She must be a peacemaker, practice the virtues of a good house-keeper, and raise children. A man has his duties out of the house, and a wife within; and so it is written in the third place "Fu-fu betsu ari."

"The younger brother is to reverence and obey the older, as is indeed always the duty of juniors to seniors but especially to the elder born of our parents. The elder has a twofold duty—something of that of the parent and something of that of the friend. He is to help his brother; befriend him, teach him, and most of all to guide aright. This is our duty to all who are younger, but especially to the younger born of our parents."[67]

When it comes to the purity of the family, we find Tōju bowing to the accepted doctrine of his age. He says: "Not to commit adultery and rei 禮 (propriety) look somewhat alike, but rei includes the duty of reverence and consideration for others, from the emperor to the lowest of men, with the duty of kindly intercourse, and all the ceremonies of life and death. To compare the two is to put a gill of water against the great sea. The command not to commit adultery is against nature, for it forbids the possession of more than one wife—a command adapted to the common people; but as we consider the

67. Knox, op. cit. p. 162.

Tōju also recognized the value of music, which, he says, "softens and ennobles the heart, and makes easy the changing of customs and the reform of bad habits." Moreover, it is noteworthy that Tōju was an ardent advocate of woman's education in an age when education was considered necessary to men only. "Composing poetry and reading songs may be ill-suited to woman's proper work, but many women have cultivated such arts and no one has thought it strange, and it would be unreasonable to condemn them, for they conduce to that control of the heart which is held to be woman's first duty. There are still other reasons for giving women a broader culture, Woman is an embodiment of the negative principle (陰氣 literally, obverse or shadow) and is by nature excitable, narrow-minded, violent, and prone to envy and bitterness. She is shut up in the house day in and day out and her training tends to throw her back upon herself: her outlook is narrow. Hence, it comes to pass that women of large tolerance and straightforward honesty are so rare. Buddhism has accordingly branded women as so steeped in sin that they can hardly hope to become buddhas. Therefore we must admit that it is quite unreasonable to deny women the broadening influence of moral culture."[66] Six volumes of his "Kanso" were specially devoted to this theme, so that Tōju may rightly be considered the forerunner of Kaibara Ekken's "Great Learning for Women."

Incidentally, Tōju throws light on the means of popular education in the idyllic ages of China, and perhaps, of Japan: "In the time of the ancient sages there was a school in every village. For the local official, the representative of the Government, himself acted as teacher of the way according to the classics, during the intervals of tilling the soil. Thus even simple men and women were enabled to grasp the central principles of the classics. Although they could not read a single ideograph, they mastered their real meaning and developed a nobility and self-control that have never been equalled by the ordinary

66. Inouye, op. cit. p. 136.

lower nature by what Chalmers would have called the expulsive power of a noble affection.

ON EDUCATION

As we should expect, Tōju's educational aim was the moralization of his pupils. Intellectual and physical culture were quite secondary. He summed up the teachings of the sages into one word, Practice the way. He tried to inculcate his convictions by example, even more than by precept. In Okina Mondō, I, he nobly asserts that "The true, fundamental education is moral culture, taught not by the mouth, but by living according to the way, so that our lives avail to change others. 根本眞實の教化は德教なり口にては敎へずして我身を立て道を行ひて人の自ら變化するを德教と云ふ."[64]

He clearly realized the importance of beginning moral trainining from the earliest childhood. In Okina Mondō, I, he writes:

"The first duty of the parent is to instruct the child in the "way." Temporary instruction and kindness without regard for the future is fictitious love—a mere fondness like the fondness of cow for calf. To neglect to teach the way and care only for accomplishments is to forget that if the child is not virtuous it will be cast off by gods and men and be hated at last by the parents themselves. The builder and the destroyer of the house is the child, so do not confuse the beginning and the end, and, making wealth and rank of first importance, think virtue of small account. All must be taught the way, yet with a due regard for natural capacity and endowments. Remember that the most efficient teaching is by example, and that the education begins at once and not with reading and writing." And he added a characteristically oriental point: "The parents must give a profession to the son and in time get him a wife."[65]

64. Inouye, op. cit. p. 134.
65. Knox, op. cit. p. 161.

In the supplement to Okina Mondō he writes: "The name Confucianist has reference to virtue, not to accomplishments. Literary culture is an accomplishment offering no great difficulties to a man endowed by nature with a good memory. But however proficient a man may be in literature, if he lacks a just and benevolent character, he is no Confucianist. He is simply a common man with knowledge of the classics. Whereas, an utterly illiterate man who has a pure and upright character is not a common man but an unlettered Confucianist."

Bold rebukes, these, to utter in an age when the jot and tittle were almost worshipped.

Contrasted with this, he goes on to describe "true learning" thus: "First, to fix the heart upon the illustrious virtue, then by the use of the classics as our teacher, ruling word and act, to polish the rough jewel, the illustrious virtue of our hearts." Again, in Okina Mondō, III, he says: "True reading is the reading of our heart by our heart. The heart of the old sages must be made the mirror where the workings of our own heart are reflected. Reading the letters with our eyes alone is no true reading at all."[63] Tōju's implicit confidence in the moral potency of the true learning is reflected in this illustration in the supplement to Okina Mondō: "Pain and anxiety are only in the feelings of men, are a self-inflicted sickness. The heart is like the eye which naturally opens freely and sees things vividly. But if a particle of dust gets into the eye it loses the power to open and shut freely and can no longer see clearly. The pain, moreover, is excruciating. But when the dust has been taken out. the eye regains its essential nature and opens and shuts freely and sees clearly again. Just so the original nature of the heart is to be contented and happy, but when the dust of passion gets in, all sorts of grievous pains arise. It is because learning shows the way back to original happiness by washing away the dust of passion that it will, if diligently pursued and heeded, restore the former happiness of the heart." To Tōju, communion with the spirit of the old masters was merely a potent means of letting ryōchi have full sway, driving out the

63. Inouye, op. cit. 130.

ON LEARNING

With Tōju, ethics is the only learning. As we have already noted, he uses the term learning in the sense of moral much more than of mental culture. Learning is the means of attaining to the height of a seijin or saint, through the cutting out of selfish appetites and the unfolding of inborn wisdom. So in Okina Mondō, III, he says, "The substance of learning is clearing off mental impurities and improving our actions." Or, as he elsewhere declares, "The essence of learning is the recognition of the central reality, i. e., of ryōchi, and its unification with oneself." Although, as this sentence shows, he was by no means a literalist, he enthusiastically devoted himself to the exposition and application of the classics, among which he studied most ardently "The Book of Changes" and the "Classic of Filial Piety." But he tried to pierce to the heart of the old masters. Unlike other scholars of the age he was not enslaved by the latter. He says: "What we read is in fact only a commentary on our inborn nature. The commentary is useful only so far as we understand the text. If we do not recognize our ryōchi, but lose ourselves in the study of old writings, it is just like studying only the commentators instead of reading the original text."[61]

And again, he hurls these biting words against "false learning." "It is an empty reading and writing and a mere imitation of the fashions of famous men. In China there are also all sorts of 'isms and 'ologies; here in Japan there is this empty reading and writing and the Buddhist learning, but only the first of these is commonly meant by learning. It is a priest-like mumbling of words—reading, writing and making verses for the sake of wages or reward; going over the classics and other books as an exercise for mouth and eye. A very haughty thing is this learning of the world."[62]

61. Inouye, op. cit. p. 129.
62. Knox, op. cit. p. 163

virtuous even without laws; if he is bad, laws are useless and sometimes evil increases with the severity of the punishment, as dirty water becomes dirtier with stirring and clears when left undisturbed."[59]

We cannot better end this section on Government than to quote Tōju's laconic answer as to how to study the art of government. "The Confucian learning," says he, "is the art of government. Learning polishes the illustrious virtue; the development of this wonderful, eternal virtue is the foundation of government."[60]

---

59. Knox, op. cit. p. 167.
60. Knox, op. cit. p. 168.

must hate and envy none. The lord must respect his ministers. To them he entrusts his dominion, reserving to himself only the powers of reward and punishment. As the samurai are the defence of his dominion, of course he will care for them; and as the commonalty are the wealth of the empire, he will cherish them as a hen her chickens. The duties of the samurai may be summed up in single-hearted loyalty, the sacrifice of self for lord and country. He must serve his lord as he would his parents, for the lord is the nourisher of the body his parents gave. The samurai of rank must counsel his lord, giving good advice even though it prove distasteful, and dissuading from evil even at the sacrifice of life itself. The lower ranks are to do their duty without question, and in time of war to fight bravely and skilfully, while the men in command are to mature their plans though the enemy be still far distant. The common people are to manifest their loyalty by obeying the laws, paying their taxes and following diligently their trades, for they too are really retainers, though without salary. The lord, then, is to treat his retainers with kindness and the retainers to obey loyally."[58]

With merciless logic Tōju, like Confucius, makes the ruler solely responsible for the weal or woe of his people:

"Especially must the lord be careful in choosing his ministers, since if they deceive him all manner of evils arise. Foolish rulers, however, choose men from fancy, as the magnet selects iron from the heap; but thus, though there are wise men, since they are not employed it is as if they were not. While if the bad are not employed they can do no evil; so after all the happiness and misery of the land rest on the heart of the ruler alone. He is responsible."

Tōju's reply to the question, "Should there be many and severe laws?" makes one wonder what he would say if confronted with the massive law codes of Japan to-day:—"All depends on times, circumstances and ranks. We cannot decide once for all. The heart of the ruler is of first importance. Since the subjects imitate the ruler, if he is good they will be

58. Knox, op. cit. pp. 161-2.

learning and arms are linked together like the two principles, in 陰 and yō 陽. It is impossible to conceive the one without the other."[56]

The severe ethical requirements of government are clearly expounded in Okina Mondō, I: "He who cannot rule self cannot rule an empire, and hence the emperor is to rule himself first of all. He should choose his officers with care, apportioning their duties according to their various obilities; he should rule justly and so that all his subjects may enjoy their natural rights and privileges; in short, as the father cherishes his children, so the father of the nation is to cherish his people. This is the virtue of kō as the son of heaven obeys it. The daimyō is to govern his own body and soul in accordance with the way, to see that the wealth of his dominion is preserved, to treat the officers of the emperor with respect and the lower officers with consideration, to look with pity on the farmers, and especially to care for the widows and friendless, and so to rule that the prosperity of the province may be long preserved. This is the duty of kō for the daimyō. The minister should be an example in conduct for other men. Thought, word and act must be for his lord and his country; nothing must be done for self, self-glory or self-interest. In times of peace the government is in his hands. In time of war he goes forth in command, and hence must be well versed in the art of war. He is to have a care that the worship of the gods and of ancestors is not neglected. The samurai must give single-hearted obedience; forsaking self, he must serve his master, he must be well versed in his duties, must be faithful to friends, careful of his words, seeking to do right in all things, and in time of danger be prepared to do his lord efficient service. The common people must do their work without laziness, accumulating wealth and not wasting it. They must fear the government and obey the laws."[57]

Again, further on in Book I he recurs to the subject, but with more emphasis upon duty and less on character: "The differences of rank and position are decreed by Heaven: so we

56. Knox, op, cit. p. 165.
57. Knox, op. cit. pp. 103–4.

VIEWS ON GOVERNMENT.

Ethics was the chief burden of Tōju's life and teaching. He rarely touched on politics, being made all the more reticent, perhaps, because the Yōmei doctrines were under the ban of the Government. But when he does discuss political principles, he bases them even more completely than Confucius or Mencius on ethical principles. He makes moral culture and government essentially one. "Government is the principle by which native virtue is clarified : learning (moral culture) is the art of governing the people of the world."[55] This reminds one of the naive views of Socrates and Plato, and it is encouraging to believe that modern rulers and scholars are sincerely espousing this same ideal, so deeply eclipsed in some periods of the world's history. Tōju extends this identity of learning and government by applying it also to learning and arms :

"Question : There is a saying that arms and learning are the two wheels of a wagon, the two wings of a bird. Are arms and learning two ?

"Answer : It is a popular error, for men think learning consists in reading, writing and poetry and a mild disposition, and arms to consist in a fierce disposition, horsemanship, fencing and the like, while really there is no distinction between the two. No true learning is without arms and no true arms without learning. Learning governs empire, province, family and self in time of peace, and in accordance with the way, while arms restrain the unruly, punish the evil and carry on war. The root of arms is gi 義 and of learning jin 仁, and these two virtues are one. From these roots come the leaves and branches—letters, horsemanship and the like. Some men have the root without the leaves : they seem to be weak, but have strong hearts, and such men are many. Some men have the leaves but not the root, the accomplishments without the virtues : thus they are like sheep in the skins of tigers. Thus

55. Inouye, op. cit. p. 124.

In this connection we naturally inquire what Tōju's ideas were on the future life. I think all will agree that he had an exalted conception for his time:

"Question:—The students of magic can live long and never die, and the Buddhist becomes a hotoke rid of his corrupted body. Can Confucianism give such rewards after death?

"Answer:—Thorough study of the classics will banish such heretical doubts. The aim of both these systems is to control the heart and clear the original nature, and this when accomplished is called long life and becoming a hotoke. But after all these men do not understand the holy heart and thus are one degree below the wise man. As the knowledge imparted by Confucianism is higher than that gained in the other systems, so is its reward greater. As the sages have said, "Agreement with the original principle is true reason. The great Spirit of the Universe fills all the sky, calm, imperturbable, the source of all things. When man conforms to this great principle, though he disappear he does not become extinct. He returns to the primal spirit as a drop of water into the sea, as a vapor in the sky melts away. He is not destroyed, but continues as fire entering fire. Nor is there reason why he should not appear again, as the scattered vapor gathers again in a different form. Man at one with the spiritual law behind the universe is as imperishable as the universe itself. True wisdom comprehends this truth and knows perfect peace."[54]

We have now surveyed briefly the whole range of Tōju's ethical teaching. There is certainly much to admire and little to condemn. But perhaps the best thing we can say about it is that the Sage succeeded to an unusual degree in exemplifying it in his own life.

---

54. Knox, op. cit. pp. 346, 347, 349. The quotation is from "The Book of Changes."

with contempt, but reverence them." If a man of such position could use such an illustration to enforce this duty, no exhortation can be needed by men of lower rank."[52]

Patience or Stoicism. Tōju holds patience or stoicism, nin 忍, to be the running-mate of humility. It not only begets an even temper but purges the heart of the impurities of the lower nature. His etymology of the term is striking and would seem far-fetched unless one recalled that the Japanese "nin" has a more positive content than the English "patience." Nin means to reject evil as well as to endure it. He says: "The ideograph 忍 nin is composed of 刄, a sword, and 心 the heart. That is, if the self-accusing heart, weighed down with its own wickedness, will make itself a sword to cut off the accretions of wilful desire, then the result will be complete freedom. The heart will be swept clean of the devil of fame-hunger and the thief of low desire. Hence nin is the gate to all the virtues." With this etymology in mind the following poem by Tōju becomes intelligible: "One act of patience harmonizes the seven passions; two acts of patience bring the five blessings in a troop; habitual acts of patience make one's whole nature beautiful as springtime, and Utopia is brought down from the clouds."[53]

On Worship. As we close this section on Tōju's Ethics, it is interesting to notice his frank advocacy of the worship of gods and spirits. "Belief in gods and spirits is a part of Confucianism. In the "Classic of Filial Piety," to worship the father as Heaven and to serve the gods is considered the essence of piety. In the "Book of Rites" directions for the worship of the gods are given at length. Emperor, prince, ruler, scholar and commoner are to worship according to their various ranks and possessions, each rank and place having its appropriate duties. In the worship of ancestors and the teaching of Shintō we find agreement. We must worship ancestors according to rank and the customs of the country in which we dwell. The Buddhist exaltation of the hotoke above the gods is blasphemy."

---

52. Knox, op. cit. p. 251.
53. Inouye, op. cit. p. 122.

Loyalty. Tōju says little about loyalty as a distinct virtue, for he considers it to be a part of filial piety. It remained for his successors to put loyalty above filiality and thus contribute to Japanese Confucianism its most striking difference from its Chinese prototype. Tōju clearly gives precedence to filiality, holding that the most dutiful child would make the most faithful retainer. It was in accord with this conviction that he left the service of his feudal lord in Iyo and returned to Ogawa to give himself to the care of his mother. In the letter justifying his act he wrote: "Filial piety is the weightier and loyalty the lighter duty."

Humility. Like all the old masters, Tōju gives a prominent, almost the first place, to humility. "Unless the scholar first purges himself of his self-sufficiency and seeks the virtue of humility, with all his learning and genius he is not yet entitled to a position above the slough of the commonalty."[50] And again, "True learning is disregard of self, obedience to the way and the observance of the five relations. Its eyeball is humility."[54] His definition and illustration of humility is interesting: "Question:—"What is the greatest virtue for men of rank? Answer:—Humility. Not proud of rank, unselfish, considerate, benevolent, full of pity for others, respectful, hearing advice, distrustful of one's own wisdom, loving good and hating evil—this is humility. Taishun was Dai-sei-jin, and yet he asked for advice even in trifles and did not despise the counsel of men below him, but examined carefully to see if it conformed to the truth, adopting it if in accord, and rejecting it if opposed. For this Confucius praised him as one of the sages. When the son of Shukotan went to his province, his father said to him, "My father was the emperor, Bun-ō my brother, the emperor, Bu-ō my son is the emperor, Se-ō and my own rank is Sessho-chosai. There is no one my superior or equal, and yet while my hair is being dressed I stop three times to receive guests, and while I eat I spit out my food three times that I may welcome the gentry who call; still more do I fear to be rude to a superior man. Do not treat others

50. Uchimura, op. cit. p. 172.
51. Knox, op. cit. p. 246.

first step in the way. The reason is clear, since our bodies are derived from them. We must clearly perceive that our bodies are a part of our parents, and then serve them with love and reverence. If we seek for the origin of things we find that, as our bodies are divided from our parents but still one with them, so are their bodies divided from the spirit of heaven and earth, and the spirit of heaven and earth is the offspring of the Spirit of the universe; thus my body is one with the universe and the gods. Clearly perceiving this truth and acting in accordance with it is obedience to the way. Thus we shall be loving and reverent to parents, respectful and loyal to master, true to friends, just to wife, faithful to husband, not speaking falsely nor acting wrongfully even in little things, obeying the way with word and thought and deed—all this is included in the virtue kō. Even lifting hand and foot we must follow kō. All the errors of mankind arise from "self" as we think "this is my body," "this is mine"; but kō slays self. Even learned men are not true scholars when ignorant of this philosophy, still more are ignorant men near to the brute."[48]

A little farther on he gives a quaint explanation of why he makes the care of parents the primary duty only in the case of the common people: "They are to take care of their parents, loving them better than their own bodies, and being ready to serve them even at the expense of suffering to themselves.

"Question:—Why do you confine filial obedience to the common people?"

"Answer:—All above the rank of samurai cannot need this admonition. They have enough wealth and feel no temptation to neglect their parents; it is only the poor who can need this counsel."[49]

The results of unfilial conduct Tōju paints in dark colors: "Filial piety is the root of a man. If he lets it die, he becomes liks a rootless tree. It were better for him to be dead in truth and escape such a living death. 這箇是人根若滅却此心則其生如無根之草木條不死者. 幸免而已."

48. Knox, op. cit. pp. 102-103.
49. Knox, op. cit. p. 114.

nothing more important than reverence to parents. We must put parents in the place of Heaven. The gods admire a filial spirit, and all virtue is included in this. To love others without loving our parents is mistaken virtue: Thus filial piety fulfills the law." And after exhausting his vocabulary in praising kō, he concludes his whole treatise with these words: "But when the sage appears, the divine, his virtue unites with heaven and earth, his light is one with sun and moon, he knows good and evil like gods and demons. Yet, after all, Confucius said: "Even in the virtue of a sage what is there beyond filial piety?"[46] More definitely, he says that kō implies "obedience, which is a debt we owe our parents. Consider how their pains and anxieties begin before birth, continue through childhood and youth, and how innumerable are the blessings we receive from them. Their love is higher than heaven and deeper than the sea. All men acknowledge the duty of gratitude, and filial obedience is merely showing the edge of gratitude. Even crows feed their parents, and lambs show their respect by stooping as they eat. It is the beginning of all the virtues, and when we forget it we cloud the soul with lust, dim the illustrious virtue, and are astray in the night. But man often forgets parents for the sake of those from whom he receives wealth, or for love of wife or concubine, forgetting that wealth is merely the ornament and the wife the pleasure of the body, while the body itself is the gift of parents. To neglect them is to show that we are not men. It follows that we are to be grateful and obedient even to those parents who forget their duties. Our duties to parents are to both mind and body. We are so to govern ourselves as to cause them no anxiety, to give them needful food, to provide medicine and nursing in illness, to mourn at their death, to bury them with the customary rites, to hang up the tablet and give it due worship; this is all included in filial obedience."[47]

Tōju's natural philosophy of kō in its practical aspect is a typical bit of naive reasoning: "Obedience to parents is the

46. Knox, op. cit. pp. 349, 350.
47. Knox, op. cit. pp. 160-161.

is the elder, reciprocal affection is the child. Thus, when we look at all things in the light of this principle kō, we see that apart from it nothing has been produced. If we appropriate this principle in our own hearts, the result is pity (toward those below) and reverence (toward superiors)."

In Okina Mondō, I, he identifies the mysterious "[illegible]法 reihō," the fundamental virtue or treasure, with kō. "Originally reihō had no name, but for the sake of teaching the ignorant, the sages called it kō. In these days, on the contrary, every one knows its name, even the young and foolish; but those who know its true nature are very few, even among the aged and learned. It may be considered as divided into "ai" and "kei." "Ai" is love and kindness to others, "kei" is reverence for superiors and consideration for inferiors. Kō is like a looking-glass: The glass reflects many shapes and colors, but itself is always unchanged; so kō reflects all the virtues but is itself unchangeable. All the virtues, obedience, loyalty, faithfulness, kindness, as they exist between the different ranks and relationships of society may be resolved into ai and kei, and these two are kō—the division into various duties being for convenience in teaching. And any one, even a little child five or six years old, can learn about this virtue, but even the aged and learned find its practice difficult.

"Question: I had supposed that kō meant filial obedience but now I perceive it embraces all the virtues.

"Answer: Kō dwells in the universe as the spirit dwells in man. It has neither beginning nor end: without it is no time or any being; there is nothing in all the universe unendowed with kō. As man is the head of the universe, its image in miniature, kō endows his body and soul, and obedience to the way is the very pivot of existence."[45]

In another place he says: "Kō is the fundamental principle in the universe; it has neither beginning nor end."

These passages all present kō in its transcendental aspect, in which it may be identified with ryōchi. But Tōju also makes it a very mundane virtue, second to none in practical life. Thus, "There is nothing greater than kō, and kō knows

45. Knox, op. cit. p. 102.

The Divining Sticks and Hexagrams used by Tōju in Studying "The Book of Changes."

may be seen in his "Kōkyō Shinpō 孝經心法," the first few lines of which are not unlike the prologue to St. John's Gospel:

"Before the heavens and the earth were conceived kō was the divine way of heaven. The Heavens, earth and man, yea, all creation, were conceived by kō. Spring and summer, autumn and winter, thunder and rain and dew had not been except for kō. Benevolence, righteousness, propriety and understanding are the principles of kō." He continues: "The five relationships 五典, and the ten virtues of relationship 十義 (i.e., lord and subject, parent and child, husband and wife, older and younger brother or sisters, older and younger friends, and their appropriate virtues), are the seasons of kō. The womb of divine reason was in kō. It cannot be expressed or named. But if it is arbitrarily given a form, it is called kō." Then follows this interesting etymological digression. "The ideograph for kō 孝 is composed of the two ideographs, 老 and 子, i.e., an old man 老 leaning on a child 子. When they were written together they were abbreviated (匕 being left out). The reason of heaven before the heavens and earth were opened up was the elder 老, and ki 氣, the passionate principle, was the child 子. When the heavens and the earth had been opened up, heaven was the elder and the earth was the child. The universe (乾 坤 the primitive cosmos) was the elder, and the six elements were the child. The sun is the elder and the moon is the child. Eki 易[44] is composed of the characters 日 and 月, sun and moon. The meaning of 老 and 子 is the same as 日 and 月. 易. "The Book of Changes" and 孝經, "The Classic of Filial Piety," constitute one indivisible truth. Mountains are the elder; rivers and the child. The Middle Kingdom is the elder; the eastern barbarians (Japan), the southern barbarians (India), the western barbarians (Europe?), and the northern barbarians (Mongolia and Manchuria), are the child. The ruler is the elder; the subject is the child. The husband is the elder; the wife is the child. In the realm of the shaping of another person's character, the man of benevolence

44. The character used to cover the whole science of divination and the laws on which it is supposed to be based: also, the title of the classic, "The Book of Changes."

water quiets the waves even below the surface, so the quiet heart calms all one's desires. 静なる心の水に住む月のかくるゝ波の時に定むる.

Perseverance. Perseverance alone will win the precious fruits of self-discipline. "In order to cultivate virtue we must act rightly every day. Every time we gain one in goodness we subtract one in evil. If right is day by day pursued evil will day by day retreat: the longer the day the shorter the night. If this were kept up long enough, how could one help becoming a good man? 吾人徳を修むることを思はゞ日々に善をせん而已一善益すときは一悪損す. 日々に善をなさば. 日々に悪退くべし. 是れ陽長ずるときは陰消するの理なり."[41]

Independence of Other's Opinions. What others think of us is often too strong a factor in determining our actions. Tōju rebukes such servility in these words: "What the people of the age admire is done and what they disapprove is not done, without considering whether it is right or wrong in itself. Such conformists are shojin, small men. Praise elates and condemnation worries them. They are anxious about the outward form, but know not the heart of the way."[42]

Repentance. "Repentance is the road which leads from misfortune. One should not brood over a misdeed too long after repenting and making amends. When we recall our misdeeds after experiencing a change of heart, they should seem unrelated to us; we should no longer have any pangs of remorse. But if the recollection of them arouses a sense of shame, the root of our misdeeds is still hidden in us."[43]

Filial Piety. In Tōju filial piety, 孝 kō, holds such an important place that it will be worth while to consider it at length. In the narrow sense, kō is reverence toward one's parents. But Tōju, enlarging upon the ideas of the Chinese work, "Kōkyō Enshinkei 孝經援神契," interpreted it in the broadest sense, making it a transcendental principle, eternally existent, but expressed and applied in human relationships. How deeply his mind was stirred by the contemplation of kō

---

41. Inouye, op. cit. p. 109. Cf. "Many a mickle makes a muckle," and "The little foxes spoil the vines."
42. Op. cit. p. 111.
43. Op. cit. p. 113.

nothing even were a Confucius to come to him. A true aspiration masters a man. Hence Confucius said, "A commander of vast armies may be defeated, but the aspiration of the commonest person is indomitable."— We must distinguish between the true aspiration after morality and the false aspiration toward the mean objects of life, which have only a temporary charm and lead us into endless disgrace." (Cf. John. 6:34.) "Think of yourself as a citizen of the universe (literally, a man living between heaven and earth); if Heaven is your teacher and the divine light is your companion, you will have no desire to make requests of other men."
天地の間に、己れ一人生きてあると思ふべし。天を師とし。神明を友とすれば、外人に頼る心なし。

Enlightenment. Next to aspiration the mind must attain enlightenment, that is, be made free from bewilderment and doubt. Passion and moral doubt may overcloud ryōchi, but as soon as they are dispelled, ryōchi sheds her bright light again like a cloudless sun. In Okina Mondō, Tōju declares, "Men may be divided into two classes, the darkened or bewildered 迷, and the enlightened or understanding 悟. The former includes ordinary, mean persons, while the latter includes the saint (seijin), the kunshi, and the buddha. Bewilderment come out of one and the same mind. When overclouded with passion, the light of conscience becomes indistinct and dark like a moonless night. Then we call it "mayoi no kokoro," the doubtful or bewildered mind. But when it is purified through accumulated moral culture, it is clear and bright with the light shed by the full moon of the heart. Then we call it "satori no kokoro," the enlightened mind."

Self-mastery. Enlightenment can only be won as the result of self-mastery, the taproot of all morality. "When we are tempted by external things, the fault is in us, and not in those things. If devils are driven out of our mind through self-denial, there is no demon under the sun that can disturb us."[40] As in often the case, Tōju best conveys the subtler shades of his thought in a verse: "As the moon resting on the

40. "But every man is tempted, when he is drawn away of his own lust, and enticed." James 1:14.

Thus he says : " There are six curses, viz, first, doing evil with a bad heart and being cut off in the midst of life; second, illness; third, poverty ; fourth, sorrow ; fifth, the willing choice of sin, great badness ; sixth, knowing the truth and acknowledging it, but not obeying it. These are the six punishments the way of Heaven always decrees to the wicked. These awards are eternal, unchangeable like the variations of the seasons.[37] But he believes that peace or pain is self-determined, for Heaven is generally only a name for the moral order. " The power of giving or denying gifts to men is in Heaven, but the secret of gaining or losing them is in one's own mind. If one improves himself by self-examination and watchfulness, one will gain heavenly gifts. But if one deceives himself and is distracted by worldly things, Heaven will take gifts away from him to hi, own loss."

In other places he makes the punishment even more clearly subjective, as in this striking verse :

" Tanoshimi mo mata kurushimi mo yoso narazu. Tada ichinen no jigoku gokuraku.
たのしみも又くるしみもよそならず. ただ一ねん. のぢごく, ごくらく."

This may be rendered :

" Pain and pleasure only from oneself proceed :
Hell and paradise are by the heart decreed." [38]

This sentence in Okina Mondō also suggests the same truth : " An evil heart includes all other curses. When the heart is darkened, sights and sounds are painful ; even without outward sorrow there is no rest. Thus it is that the law holds—virtue brings happiness and vice misery.[39]

THE PRACTICAL SIDE

Aspiration. The first essential in practical ethics is aspiration, that is, aspiring to be a seijin (saint) through moral culture. Tōju says, " If one have aspiration, everything in nature becomes his teacher, and if one lack it, he could learn

37. Knox, op. cit. pp. 170—1.
38. This puts one in mind of Milton's lines :
" The mind is its own place, and in itself
Can make a Heaven of Hell, and a Hell of Heaven." Par. Lost. Bk. I.
39. Knox, op. cit. p. 171.

ultimate source of evil and suffering. It is evident, however, that neither of these attempted solutions is conclusive.

When it comes to the overcoming of evil desire Tōju parts company with Buddhism and asserts that the will is not to be destroyed, but made pure, by the cultivation of ryōchi. And the best method of cultivating ryōchi is by "Chichi kakubutsu 致知格物." "Chichi" means attaining supremacy for ryōchi over the selfish will. "Kakubutsu" means making the five processes of seeing, speaking, hearing, thinking and appearance all correct.[35] "Kakubutsu" is the means; "chichi" is the end. Hence "Kakubutsu" may be considered the starting point of practical morality. Tōju finds support for this rather Buddhistic doctrine in the Confucian classics themselves, for instance, in the opening words of ' Great Learning." "To rest in the highest excellence 止於至善." He explains these words to mean the firm, motionless state of the mind in attaining to the substance of ryōchi, a meaning not unlike "Shikwan 止觀" or "Sammai 三昧" in Buddhism. But here again, despite apparent resemblances to Buddhism, Tōju conceives 止 (to stop or rest) not as the stoppage of all desire at a certain point, but as the determination of the right centre and foundation for all true desire and action.[36] It is not withdrawal from the world, but taking a right attitude toward the world. This is quite different from the nihilism of Buddhism, indeed, more like the positiveness of Christianity. He quaintly sums up the contrast in this verse:

"Shizen ni todomari nureba kurushimi no
Umi no mizu hite tanoshimino kuni,
至善ニ止マリヌレバ.苦シミノ.海ノ水ヒテタノシミノ國"

which may be translated: "To attain to supreme virtue and rest there impassive, would be as joyless as a paradise whose seas had been dried up."

But if the evil will is persisted in, penalty is inevitable, for Tōju believes in 因果應報 Ingwa ōhō, the law of cause and effect, or of retribution for the acts of all previous existences.

---

35. Cf. the Yoga of India, in which these processes are controlled by severe self-discipline.

36. He identifies 止 with 中 (the Mean) in "The Doctrine of the Mean."

is constantly lord of our hearts. 良致則ち善なり・良知を致せば善常に心の主たり." Obedience to ryōchi results in noble and transparent character; disobedience results in mean, depraved character. The wide difference between the superior man and the mean man all arises from self-watchfulness on the part of the one and self-deception on the part of the other, and hence the latter can surely be turned into the former if he fully obeys ryōchi. It is the shojin (mean man) who is afraid of the eye of others, and indulges in evil when alone. The very fact that he affects to be good and conceals his evil ways in the presence of a kunshi is proof that ryōchi is not dead in him.[33] But the kunshi is conscientious even when secure from the gaze of any other human being. The centre of the superior man is within. Conscious of the friendship of the divine light of heaven and earth, he acts with self-control because he reverences himself. Hence self-reverence[34] or fidelity to his true self, i.e., obedience to ryōchi, is the key-note in the character of the superior man. The question naturally arises, what leads a man to disobey ryōchi, if it is really the fundamental, inherent reality of his nature? How can the naturally good heart be the source of evil desire? Tōju attempts two solutions. The first is that desire has nothing to do with ri, the noumenal, spiritual nature, but originates in ki, the passionate, phenomenal nature. (Cf. St. Paul's "the flesh and the spirit.") And yet he will not admit that ki is essentially evil. The second solution is that desire lies latent in the background of the mind until aroused and brought into play by a selfish thought. That is, like Shaka and Schopenhauer, Tōju makes the will in its blind and carnal activity the

---

33. Inouye, op. cit., p. 95. The conclusion of this passage is striking: "The workings of ryōchi, though hidden in the bosom, are really evident to the eyes of all men.—The true nature of our mind, whether good or bad, can never remain long concealed. It may be hid for a while, but in the end it will be disclosed 善悪共ニ内ニ誠アリテ，外ニ顕ハルルコト，カクレナシ．外ヘ一旦ハ善悪共ニカクレテモ其實ハ終ニ知レヌト云フコトハナキゾ. This is a remarkably close parallel to Christ's words: "Fear them not therefore: for there is nothing covered that shall not be revealed; and hid that shall not be known."

34. Reverence 敬 seems to mean reverence for one's heaven-bestowed good nature, to defile which would be impious, much like St. Paul's exhortation to be pure because we are the temple of the Holy Ghost.

and joy for a kunshi is within himself 君子安樂の本體は吾人方寸の内にあり"; and again, "However illustrious our teacher may be, he cannot divine our secret thoughts. In distinguishing good and evil, if we revere the inner divinity it will prove to be the best teacher. 明師ありと雖も一念の微は知りがたし. 唯我れにありて善惡を知るの靈明を捧持する時は師我れにありて幽明の隔なし."[31] In passing, we may observe that Tōju asserts the brotherhood of man in as clear and eloquent form as any non-Christian thinker. He says: "Since all creation is from the same great root, all the men within the four seas are connected branches." 萬の物皆大本より生ずれば四つの海の人悉く連れる枝なり. "If we look upon Heaven and Earth as the great parents of all men, then we and other men, whosoever bears the human form, are all brothers. Therefore, sages welcome the thought that all within the four coasts are one family, that the Middle Kingdom is like one man. To set up a barrier between ourselves and others and look upon them with aversion and contempt is the sign of a mean, misguided heart."[32] Like Confucius—"All within the four seas are brothers," and Shaka—"Heart of pity toward all creatures," and Jesus—'Whosoever doeth the will of my Fathor who is in heaven, the same is my sister and brother and mother," Tōju, in theory at least, looks upon all races as equal. It would be interesting to know whether he literally believed this noble sentiment, or whether, like some, if not all, of the Chinese sages, he limited its application to the "Greeks" of the Orient and looked upon all others as "barbarians." As he never came in contact, so far as we know, with aliens, we can only say that his attitude toward all classes of his fellow countrymen, at least, was democratic and unbiassed.

The problem of evil was the knottiest that Tōju wrestled with. He faced it bravely, but with only partial success. His starting point is that "ryōchi is good; if we follow ryōchi, good

---

31. op. cit. p. 93.

32. 天地を萬民の大父母となして見れば,我も人も人間なる程の者は,皆兄弟然る故に聖人は四海を一家中國を一人と思召すとなり.吾れと人との隔を立てゝけわしくうとみ悔りぬるは迷へる凡夫の心なり. Okina Mondō, I, Inouye, op. cit. p. 57.

ETHICAL TEACHINGS

The Theoretical Side. In ethics the first thing to be settled, says Dr. Inouye, is the standard of good and evil. The idealist judges the goodness or badness of an action from the motive; the utilitarian, from the consequences. Tōju belonged heart and soul to the idealist school. He write: "Moral worth inheres in our heart and not in our acts. Every act centripetal to ryōchi is good, and every act centrifugal from ryōchi is bad."[29] Thus ryōchi stands at the heart of his ethics. Whether expressed or not, it is the meridian base from which he surveys the whole field of morals. Let us now scan a few of the deductions he draws from ryōchi.

Tōju holds that since ryōchi is the groundwork of the world all mankind alike are possessed of it, much as conscience is attributed to all men by modern intuitionists. If our ryōchi were fully developed, then we would be divine. The voice within which cries out against our self-deception is ryōchi (reminding one of Socrates' *daimon*). In "Great Truths of Shintō 神道大義" he writes: "The kunshi or superior man is watchful over the workings of his own mind, known alone to himself. He denies himself all thoughts displeasing to the divine light of the world. He refrains from doing anything simply to win the praise of men. He may have evil thoughts and commit evil actions, but the divine light will show their real nature to him sooner or later. Then he will recover his original purity of mind. The *hoi polloi*, "bonpu," think and act evil, and in shame conceal it from others because their own ryōchi convicts them. There is in all men, whether good or bad, a divinity like a clear mirror."[30] Tōju conceived this divine spirit as immanent in us, somewhat like Christ, when He said: "Behold, the Kingdom of God is within you." In a letter to Nakanishi he sums up the matter by saying, "The real source of peace

---

29. Inouye, op. cit. p. 89.
30. Inouye, op. cit. p. 90. Cf. Romans 2. 15.

includes both the transcendental and the empirical. After trying to amalgamate all the phases of ryōchi into one clear, consistent whole, one is more convinced than ever that Tōju was more of a mystic and poetic moralist than a critical philosopher. He is to be compared with St. John rather than with Descartes. Indeed, it is not straining the point to suggest that ryōchi bears some resemblance to the presentation of Christ in the Gospel of John as the Way, the Life, the Truth, the Light and the Logos.

On Knowledge. Tōju's view of the origin of knowledge or wisdom is evident from his conception of ryōchi. Knowledge being derived through ryōchi is, like ryōchi, transcendental or intuitive. What is not inborn but comes from external experiences casts a shadow over true intuitive knowledge. The kingdom of wisdom is within, waiting for experience and the need of action to bring it to light. In " Jindō Tosetsu " he says, in substance: " The natural mind is a clear mirror uncrossed by any image, except as it is full of the divine spirit. Everything is reflected as it is, without any action on the part of the mirror itself. It is better for the mind to be empty, since any accumulated knowledge hinders its natural action in reflecting things truly as they come".[28] This resembles Spinoza's doctrine that knowledge is inborn, and will retain its natural clearness if kept free from the disturbing influence of passion. Even Kant and Tōju, different as they are in general, are at one in their conception of the transcendence of knowledge. In this respect Tōju most closely resembles the Vedantic conception, that through self-knowledge we attain to supreme and universal knowledge. We can imagine that Socrates, too, with his " Know thyself," would be glad to own kinship at this point with Tōju.

28. Inouye, op. cit. p. 85.

and of the divinely illumined mind." "One who is enlightened 明德者 is a person in whom dwells Jōtei." And since ryōchi and meitoku 明德 are interchangeable terms, it follows that ryōchi is equivalent to Jōtei. As Jōtei is the lord of the world, the macrocosmos 大體, so ryōchi is the lord of man, the microcosmos 個體. In one of his letters Tōju identifies ryōchi and the Tathagata or Nyōrai 如來 of Buddhism. But he does not stick to any one meaning or term for ryōchi, as will be evident after glancing at the following terms, all of which he uses in one place or another.

1. Tensei 天性 or Honshin 本心, heavenly or original nature.
2. Ri 理 or Tenri 天理, law, or heavenly reason.
3. Ki 氣, the passionate, or formative element in the world.
4. Kokoro 心 or Dōshin 同心, the mind or heart.
5. Shingo 眞吾, the true self.
6. Makoto 誠, truth.
7. Hitori 獨, the absolute.
8. Meitoku 明德, enlightenment.
9. Chu 中, the central principle or the mean.
10. Kō 孝, filial piety as a universal principle.
11. Tenkun 天君, the heavenly or princely man.
12. Michi 道, the way.
13. Zen 善, the summum bonum, righteousness.
14. Setsuraku 説樂, joy or bliss.
15. Kōmei 光明, pure light.
16. Jin 仁, benevolence.
17. Rei 禮, propriety or harmony.
18. Zenchi 全知, omniscience.
19. Kōdai Muhen 廣大無邊, omnipresence.
20. Chōzai Fumetsu 長在不滅, the everlasting.
21. Seijin 聖人, the sage.

The above list is enough to show that the ryōchi of Tōju is in some of its aspects not unlike "conscience" as used by some modern ethicists, except that "conscience" is generally limited more particularly to the empirical side, while ryōchi

Chi Ryōchi, Attain Enlightenment. One of Tōju's basal precepts, written by himself in his youth.

from, he replies, not unlike a Buddhist: "Desire is the source of all evil and passion. When desire is aroused the mind is darkened and confused. But when the mind is not disturbed by desire, it is clear and every act is right and good."[26]

Equality of Opportunity. The homogeneity of human nature implies that all men have an equal right to attain superior character. Tōju is a democrat and holds that the humblest man differs in no way from the noble in his capacity to become a superior man or a sage. While this suggests Rousseau's conception of equality, Tōju never let his idea carry him into extreme individualism. He does, however, prepare the way for the fuller Christian teaching of the worth of every man. In commenting on "Great Learning" he writes:

"In ancient times the ideographs 人 (hito, man) and 民 (tami, plebs) were not interchangeable. Persons of rank were called hito, persons without rank were called tami. Rank is determined by man. When men are born, they are all, rich and poor alike, Heaven's people (tami). Hence hito implies an artificial limitation; tami implies no limitation" "The son of Heaven, feudal princes, nobles, ministers, and the commonalty, are the five ranks of society. They are ranked as honorable or contemptible, great or small, but in character there is not a hair's breadth of inherent difference."[27] Truly, Christian doctrine! Indeed, the similarity of parts of the Yōmei teachings to Christianity was one reason for the practical interdiction of Yōmei in Japan. As Uchimura says: "When Takasugi Shinsaku, a Chōshu strategist of revolutionary fame, first examined the Christian Bible, he exclaimed, 'This resembles Yang Mingism; disintegration of the Empire will begin with this.' That something like Chrisianity was a component force in the reconstruction of modern Japan is a singular fact."

On Psychology. Tōju teaches that ryōchi is not only a heavenly gift, innate in every man, but that it is Heaven itself. For example, he says: "Heaven and our mind are of one origin." "Wisdom 知 is the pure virtue of the heavenly reason,

---

26. Inouye, op. cit. p. 82.
27. Inouye, op. cit. p. 60.

in his conception of even the physical origin of man. He says: "It seems as if the infant were the production of its parents, but not so; the ruler of the universe, Jōtei, gives the command to heaven and earth, and from these man is born."[23]

The Natural State of the Human Heart. Both Mencius and Juncius agree in holding that all men are endowed with the same fundamental nature; but Mencius considers human nature to be inherently good, while Juncius[24] considers it to be inherently bad. Tōju agrees with Mencius that "Everything done according to innate human nature is good." He says, "Let us take counsel from our original nature, for it is still pure though we be ignorant and wicked." "The heart by nature is fixed neither on good nor evil, but it learns unthinkingly as it sees and hears and imitates those about it, as we color water red or green, though naturally it is neither. When the coloring matter sinks to the bottom, the natural color appears. So as evil settles to the bottom, the original nature appears."[25] As we shall see further on, this view gave rise to Tōju's chief metaphysical problem, one which he never solved.

The distinction between the superior man (君子) and the small or inferior man (小人) consists in the degree to which a man opens his nature to the guidance of ryōchi, which is infallibly right. If the heart *chooses* evil, the native goodness of ryōchi is neutralized, declares Tōju. Here is the rift in his monistic lute. He lets evil get into his system by admitting that the naturally good heart, strangely enough, naturally chooses evil. Right here he parts company with his master, Oyōmei, who allowed no evil to grow out of ryōchi. Tōju would fain rest in the same "closed system"; he dreads to seize either horn of the dilemma, but the facts of his own experience and observation compel him. Hence we find the not unusual phenomenon of a monist in theory stooping to dualism in practical ethics. When Tōju is asked bluntly where evil comes

---

23. Knox, op. cit. p. 254.

24. Juncius, 荀子, a Chinese philosopher who lived some time between Mencius, 371 B. C., and the destruction of the classics in 213 B. C.

25. Knox, op. cit. pp. 348–49.

man, are proud by nature. The fruits of the proud heart are an evil mind, discord, crime and madness. Let us beware lest we tread this terrible road leading down to the brutes and the dominion of the devils. Pseudo learning greatly fosters such pride but never awakens the determination to root it out. If, either with pseudo learning or with none, we invite the devils to our darkened hearts, our pride becomes more set; it sends forth evil habits like rank leaves and branches. Men become to us like dead worms. No one is worthy to hold up his head beside us. Intolerant toward our equals, scornful toward our parents, reviling our lords and ridiculing our friends, violating the precepts of filiality, of respect of loyalty and of fidelity, we come to keep company with devils and to act like them. We fall under the sway of devils. This tendency is especially strong in the case of men naturally clever and free from gross desires."[22]

On Man. The universe is made up of the two principles ri and ki. Man partakes of ki in his physical form and of ri in his mental and moral nature. Of all the creatures man alone can have ri in its fulness, with the consequent possibility of moral perfection. Man alone can hold ki under control, in perfect equilibrium. Hence man is the master of all nature, and can help determine the evolution of the world. The lower creatures also embody both ri and ki, but their spirit is blurred and cannot clearly perceive ri. Engrossed with carnal appetites, they are virtually blind to spiritual things. Man knows both life and death: if he dies, he knows it is not the end. Animals know neither life nor death; hence death is the end. They only know enough by virtue of their ki nature to grieve over death. Birds have even less understanding than beasts: they suffer, but they do not fear death. Fish have feeling but no understanding. Trees and plants have life only and not even feeling. Thus man is at the top of the ladder. There are, however, saintly and common men. The sage is one in whom the divine light, i.e., ryōchi, shines forth. The common man is one in whom the saintly has not yet been brought to light. The vein of idealism and spirituality which runs through Tōju crops out

---

22. Inouye, Nihon Rinri Ihen, p. 47.

within our own minds. 我心は則ち太虚なり天地四海も我心中に在り" Thus all distinctions between life and death, between existence and non-existence, are submerged. He holds that true insight would lead every one to the perception of one life and law underlying all phenomena. In all this we see his dependence upon Laot'ze and Buddhist philosophers. But his practical nature and his hatred of Buddhism kept him from falling, like them, into the snare of nihilism.

On the Divine Spirit. Though under various appellations,[21] he conceives Jōtei as the omnipresent, omnipotent creator, and the dispenser of judgment. Hence, reverence toward the divine is an important element of his doctrine. But as we might expect, in view of his pantheistic leanings, Tōju blurs the distinction between Jōtei and man. "Man is heaven in miniature: Heaven is man magnified." "Heaven or Jōtei is the pervading self; Heaven in us is the limited self. And the Heaven in us is our heart, or conscience, i.e., ryōchi. Heaven, earth, man are called the three ultimates. They differ in form but the divinity in them is the same. 天地人を三極と云ふ形は異なれども其神は一貫流通隔なし."

Tōju's view here is quite similar to the Vedantic conception of Brahm as both the substance of the world and the spirit of the individual. Holding Jōtei to be thus immanent in man's consience, Tōju finds it natural to believe in the possibility of perfect communion by man with the divine spirit. Although Jōtei is sometimes represented by Tōju as "our grand-parent" (Okina Mondō, III), and therefore, in a sense, as personal, he is really little more than the personification of the moral order. He has no concrete being. He is the world-soul, the governing principle of the universe, just as the mind is the master of the body.

On Evil Spirits. For the most part Tōju ignores evil spirits, notably in his developed doctrine of evil. But in Okina Mondō, III, we have what may be considered his earlier ideas on the subject: "All men, except the sage and the superior

---

21. For example: 天 Heaven; 皇上帝 Divine Sovereign; 太一尊神 Only Great Revered Divinity; 太上天尊大一神 Only Great Revered Divinity in Highest Heaven.

Being, or Sovereign (Jōtei 上帝),[19] a reality which may be called the world-soul. While he appears at first sight to be a dualist like Shushi, the world being conceived as composed of the two principles, ri and ki, a close investigation shows that he differs from Shushi, in making ri and ki proceed from Jōtei, of whom they are attributes. Tōju is thus kindred to Spinoza, who conceived mind and matter as attributes of the substance of the universe.

But sometimes, with characteristic indifference to the charge of inconsistency, Tōju seems to hold the unity of ri and ki as a merely logical necessity, and to rule out any personal source and centre of the world. Still, on the other hand, he tries to steer clear of a vague pantheism. He recognizes the distinction between the individual and the whole, as in this passage: "Althogh the universe (太虛), heaven, earth, man and nature are one, we can discriminate between them just as we can between the roots, trunk, branches, flowers, fruit and leaves of a single tree."

Tōju's decided tendency toward idealistic monism is seen in these lines: "The heart is the summary of all forms, another name for infinity. It unites ri and ki. It coordinates the mental powers and is called the lord of the body, but it really exists outside the visible world. There is nothing greater nor smaller. Indeed, Ten, the Creator, may be said to be within ourselves 心は統體の總號にして太極の異名なり．理氣を合して情を統ぶ．一身に主たりと雖も．其實は天地有形の外に通じ．其大外なく．其小内なし．即ち造化の天我れに在るを得るものなり."[20]

How near his idealism, like Yōmei's, verges upon absolute idealism may be seen again in these sentences: "Our mind is the universe. Heaven and earth and the four seas are all

---

19. Jōtei carries a different connotation from God, being less definite and personal, as will appear later, but it clearly implies a spiritual, infinite nature, and so, for convenience, may be rendered God. Legge, however, declares with reference to the same term in the Chinese classics; "I can no more translate ti 帝 or shangti 上帝 by any other word but God than I can translate zàn 人 by anything else but man." Vol. III, Pt. I, S. B. E., Preface.

20. Inouye, op. cit. p. 48.

loss of Japanese ethical thought, he lived only eight years after this, yet in that time he wrote several profound works. His philosophical attitude is marked by unusual impartiality. Although an earnest follower of Oyōmei, he did not depreciate his earlier master, Shushi. He criticised both of them, but reverently, as among the wisest of the sages. Thus, he writes: "Shushi was a great Confucianist and a wise man. Yōmei was a knightly scholar and likewise a wise man. But Shushi was too broad; he leaned toward natural science and got far from the laws of the heart. Yōmei was too concise (約); he was too tolerant and generous (仁) and leaned toward the heresies of Buddhism. But they both were wise enough to make heavenly reason (天理) the heart of their teaching, eschewing lower motives. Both alike would have rejected the lordship of the world if its acceptance were to cost the life of a single innocent person."[18]

His independence and eclecticism are further shown in these lines: "I follow Oyōmei in the old manuscripts (of Confucius), but adhere to Shushi in the selection of the later commentators (經傳). This shows that I am not a partisan. I simply wish to take my stand on what is genuine. If a text is not true I would be a fool to accept it." It was in conformity with this higher critical attitude that he expurgated the texts for use in his school.

His teaching is almost all of a practical turn, but is so tinged with mysticism and reverence toward the supernatural as to rise frequently into the realm of religion. It has, indeed, more in common with religion than with speculative philosophy. Students who can put up with his inconsistencies will find some of his philosophical views striking and worthy of study even to-day.

On the World. Tōju held a monistic world-theory with an idealistic tendency. "The universe, heaven, earth and man, are all one, and the study of them is the supreme, true happiness. To teach this is called the true teaching; to learn this is the true learning." He conceives an infinite and truthful

---

18. Inouye, op. cit. pp. 43-44.

had given him the manuscript of a new work, "Kanso," to reimburse him for the unused blocks.[17]

The most authentic complete edition of Tōju's works is the one compiled by Okada Kisei, with a preface by Miwa Shissai. When the first collection of Kisei was sent to the third and only surviving son of Tōju to receive his final revision and a preface, the manuscripts were burned up in a great fire, but the patient compiler laboriously collected the manuscripts again. The result is the thirty-five volumes which we now have. A newer edition of ten volumes was published in 1893, but it is not trustworthy.

There are many poems, both Chinese and Japanese, scattered through Tōju's works. But in most of them the artistic finish so highly esteemed by other literati of the time is sacrificed to the clear conveyance of moral ideas. There are, however, a few worthy to be memorized for their form as well as thought. As a prose writer, his style was lucid, and at times trenchant, especially when attacking cant. For example, he flayed Hayashi Razan, a Confucianist, for shaving his head upon receiving office, as though he were a Buddhist. In "Okina Mondō" he directed similar sarcasms against Buddhism. Indeed, the Sage of Ōmi was by no means the personification of meekness alone. For meanness and sham he had vials of stinging invective at his command.

17. A fuller account is given in this note appended to some editions of "Okina Mondō." "The Okina Mondō was written by our brother Tōju. He went to Kyōto and retired from active life. We, his brethren in Yashiu, having lost our example and teacher, asked him to write a book for us. So he wrote this Okina Mondō and sent it to us in the eighteenth year of Kanyei (1641). However, he was still dissatisfied with it, and when it was given secretly to the printer he was disspleased and had the blocks destroyed. He made certain revisions, but want of strength prevented him from thoroughly correcting it. After his death his pupils respected his wishes, but someone gave the book to the printer in the year 1650. We did not feel authorized to suppress the work, but made several additions and wrote this explanation of the Master's purpose."

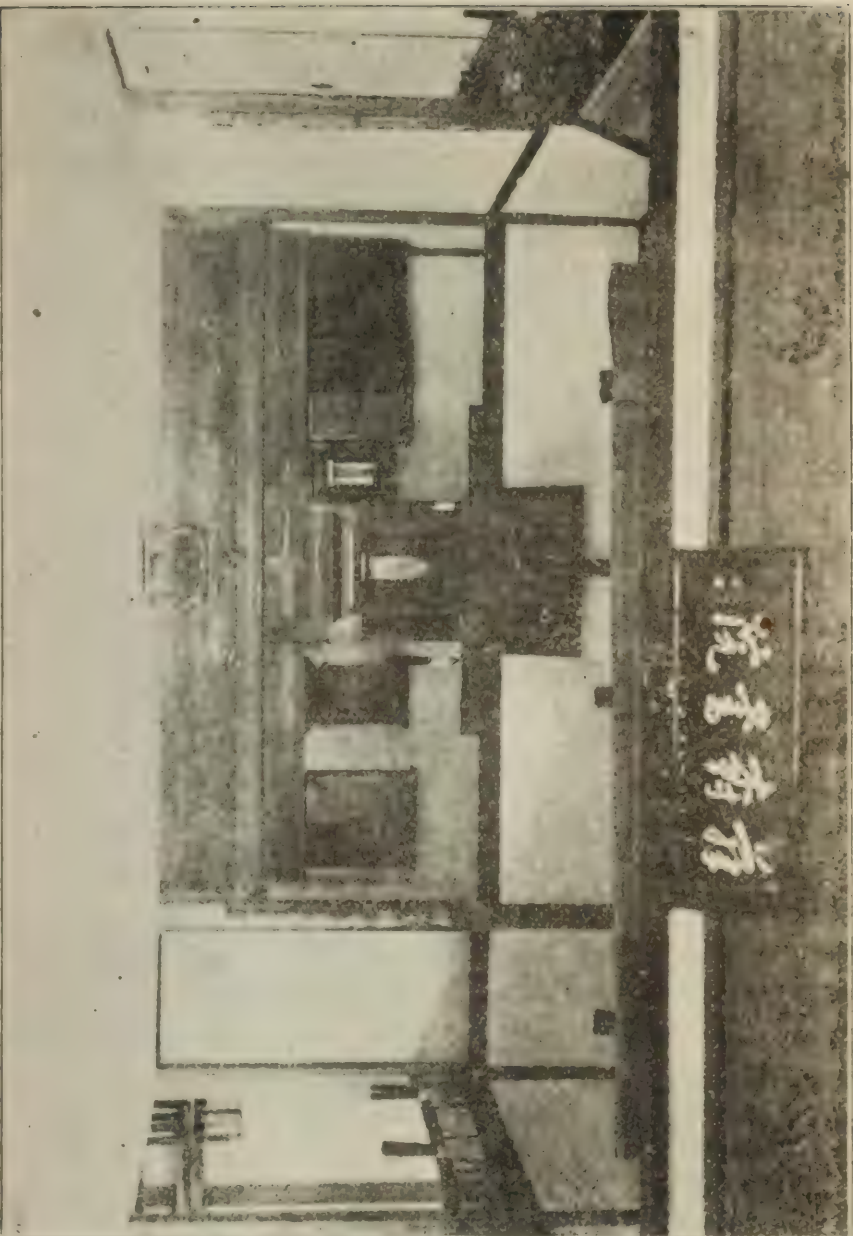
TŌJU'S PHILOSOPHY.

Tōju was a devout adherent of Shushi up to his thiry-second year, when he was converted to the Yōmei school and became its foster father in Japan. To the great

Among the other treasures the most noteworthy are the portrait of Tōju painted about 1640 by Obara Keizan of Nagasaki, and the large, closely written tribute to Tōju by Oshio Chusai, based upon the motto, mentioned above, 致良知, Chi Ryōchi. In the godown are several suits of Tōju's very clothes, both cotton and silk, some of them presented to him by princely admirers, but few of them as fine as every middle class gentleman owns now-a-days.

It was somewhat of a shock to find that the villagers living near the Shoin to-day were, for the most part, ignorant of the life and teachings of the Sage, a modern instance of the old proverb, " Tōdai moto kurashi. It's darkest at the foot of the light-house."

Writings and Style. The works by Tōju may all be classified into ethical, literary and medical. The ethical predominate. The five (in one edition, four) volumes of "Okina Mondō," were among the first from his pen. They are in the elegant colloquial of his time, the contents being moral talks fictitiously represented as taking place between Tōju and a friend in a neighboring village. The views, with the exception of the Supplement, are those which he had before his conversion to the Yōmei school. The central theme is filial piety, and the secondary aim is to criticise Buddhism in relation to filial piety. An exposition of Tōju's key doctrine, ryōchi, 良知, conscience, was appended to the last volume. The whole work is called in " Seji Hyaku Dan " " the best of all the works of shingaku, 心學 "[16]. But with the later progress of his thought, Tōju became dissatisfied with it and was about to revise it, when to his dismay he learned that the manuscript had already fallen into the hands of a Kyōto printer and been published. Tōju begged that the blocks might be destroyed, but the publisher would not consent until Tōju

16. Shingaku means, generally, moral philosophy, but refers particularly to the intuitive school of thought represented by Tōju. He himself defines it thus in Okina Mondō, II (Knox's translation p. 164): " True learning if so to understand this explanation that our actions shall be like the actions of the sages and our hearts like theirs, and hence the true is called heart learning, shin gaku, and sage learning, for by its help the common man becomes a sage."

The Shrine Room of Tōju Shoin. In the upper foreground is shown Tōju's crest, a wreath of wistaria sprays. In the background is the shrine. Directly above the shrine is the inscription 德本堂, "Hall of the Source of Virtue."

stands the Tōju Shoin on the very spot where Tōju was born almost exactly 300 years before: Unfortunately, the original house was destroyed by fire some twenty-seven years ago, but the present building is a close reproduction of it. The Shoin and the nearby godown in which the relics are kept stand in a plot of perhaps half an acre, which was no doubt part of the family farm in ancient times.

The entrance gate is of red stained keyaki and not remarkable except for the fact that Tōju's crest, two wistaria sprays bent into a wreath, appears in the carving, as it does also in the house itself. At one corner of the enclosure, near the street, still climbs the famous wistaria vine, said to have been planted by the Sage himself, and under whose shade he undoubtedly intoned the classics and composed some of his poems.

Entering the house, one finds a four-roomed structure, differing but little from an ordinary house except that the drawing-room contains a shrine. The shrine is simply a small cabinet in which hangs a tablet inscribed "Tōju Sensei Shin I 藤樹先生神位, To the Spirit of Tōju Master". Just below the tablet are the forty-nine sticks in a bamboo cup and the thin blocks inscribed with hexagrams, which Tōju used in studying the mystifying "Book of Changes". To the left of the shrine hangs a tablet to his son, inscribed: "Jōshō Shin Shu 常省神主, The Spirit of Jōshō".

The most precious relic in the room is the motto "致良知 Attain Ryōchi," i.e., Enlightenment, written in his early manhood by Tōju himself. Fragments of his later writing have been preserved, but they are now nearly illegible. To me, one of the most interesting relics was the copy of the "Classic on Filial Piety," written out by Tōju in a stiff, upright hand, the very copy, it is believed, which he used to read and ponder the first thing in the day, as a Christian reads the New Testament.

Over the shrine is the inscription "德本堂, Toku Hon Dō," written by order of Emperor Kōkaku by Fujiwara Tadayoshi. On pillars near the shrine hang two bamboo half cylinders with inscriptions by Itō Tōgai, a later disciple. One of them is from the "Doctrine of the Mean": 神之格思 不可度 Kami no Itaru, Hakaru Bekarazu." It is translated by Legge: "The approaches of the spirits, you cannot surmise."

children through his teaching, and our parents have taught us to honor him." The samurai had visited the town out of mere curiosity, but this experience filled him with such awe and admiration that he, too, worshipped Tōju and returned home feeling that he had been on holy ground.

The same writer had a friend, Murai of Higo, who had a similar experience. Mr. Murai called one day on a minister of the Kumamoto daimyō who had a son adopted from Omi, near Tōju's village. Murai asked the son : " Don't you happen to possess any hand-writing of Tōju ? " The young man drew himself into a respectful attitude and replied : " My ancestors have all held Tōju in great reverence. I am the fortunate owner of a roll of the hand-writing of the noble Master, which I received as a precious gift from my aged father when I was leaving home to come here. If you wish I will let you look upon it." Thereupon he left the room to fetch it. When he came back he was dressed in ceremonial dress. He hung the scroll up in an alcove and drew back to the other end of the room and worshipped with every mark of reverence. At sight of this, Murai washed his mouth and hands and joined in the worship. The recorder of these incidents, Nankei, flourished more than a century later than Tōju, which shows his lasting hold upon the popular mind. In " Lives of the Old Masters," also compiled over a hundred years after Tōju's death, it is said that in Ogawa Mura even the merchants were not salves to self-interest and that hotels kept forgotten tobacco pipes until their owners returned to claim them. I myself, adds Dr. Inouye, visited Ogawa Mura in 1897, two hundred and fifty years after the death of the Sage, and saw the Shoin and its relics and felt the spell of his enduring moral influence.

It was the writer's good fortune to visit Ogawa (more exactly Kami Ogawa) Mura in January, 1908. By the courtesy of the Secretary of Shiga Ken, an official accompanied me on the trip and procured the photographs which illustrate this paper. Taking a lake steamer at Otsu, a two and half hours' sail brought us to Takashima. After a ride of twenty minutes by jinrikisha we reached the farming village in the midst of which

And even as a village teacher Tōju found occasion to show his moral courage, for as his own unfettered thought led him to see that the precepts of the holy men of old could not all be applied to men of his day, he had the audacity to expurgate the classics, as it were, for the use of his pupils.

It is not strange that a man of such a character came to wield a strong influence, especially over the unspoiled peasants around Ogawa, from whom modesty and poverty could not hide true greatness. Miwa Shissai bears testimony to this as follows:

"Ogawa Mura of Ōmi had the privilege of being the home of Tōju. His literary remains are preserved there to this day. Although it is over seventy years since the master died and no one is living who over saw his face, for twelve or fifteen miles around men think of him with an affection like that they feel for their parents. Even the most unlettered men and women reverence him so much that they cannot bear to see his old home-school decay, and so they have cared for it and have repeatedly repaired it."

The famous pedestrian, Nankei Tachibana, writing of a visit to Tōju's grave, in his "Eastern Travels," narrates the following incident:

A samurai of Owari was passing through Ogawa Mura and asked a farmer where the grave of Tōju was. The farmer consented to act as guide, but first he retired into a hut near by. When he came out he had on a new kimono with a haori (a short cassock worn only on important occasions) over it. The samurai was suprised, but supposed that the peasant must be overcome at the honor of piloting such a distinguished personage. When they reached the grave-yard, the peasant opened the gate of the bamboo fence, and told the samurai to enter and worship Tōju. He himself sat in a reverential posture facing the grave. Thereupon the samurai, discovering that the peasant's haori and reverent air had been in honor of Tōju rather than of himself, asked the farmer if he had been a servant of Tōju. "No," the polite farmer replied, "but all the people of this village have been blessed by the honorable Nakae. We have all learned our duty toward our parents and

How joyous the heart that could sing on a winter day:

"When fading flowers ceased to be
The objects of my heart's desire,
How everlasting bloomed the spring
That all my quivering breast doth fire."

The following is in a similar strain:

"How little knew I that my life,
With sorrows sadly pressed,
By learning's help benign could be
Of deathless peace possessed."[14]

It is refreshing to find that Tōju not only faced the world with a calm, contented spirit, but that he carried over into his morality some of the militant temper that had been fostered by the samurai discipline of his youth. As we shall see later, this may account for his well-defined ideas on the art and character of the warrior. One can imagine that beneath the ashes of his firm self-control there slumbered the fiery passions of a son of battle. Once a friend was telling him of a clever way of avoiding hostile arrows. He broke in: "I have my own secret for doing that—simply go straight on and avoid nothing. Only one arrow of fate out of a thousand will hit me. If I try to avoid that one, then the 999 unfated arrows will strike me."

He has expressed a similar sentiment in these spirited stanzas:

"Press right on; though the way be drear,
Ere thy course be done, the skies may clear."

"Tightly draw, man, thy heart's string,
Prepare for a resolute march.
A case is known of an arrow piercing through a flinty rock."[15]

"He loves his life who his life forsakes
For the Way that no like or higher knows."

14. Uchimura, op. cit. p. 175.
15. Uchimura, op. cit. p. 169.

Tōju's deference toward his aged mother is one of the most marked and beautiful traits in his character. But, according to tradition, he dared to cross her in regard to one thing, and for it he deserves all honor. It seems that he was married, in accordance with Confucius' injunction, at the age of thirty. It so happened that his wife was not remarkable for her beauty, and the mother, anxious for the family's reputation urged him to remarry, as was not uncommon under similar circumstances. But Tōju flatly refused, defending himself by the maxim, "Even a mother's behest is not valid if contrary to Heaven's law." So the lady remained his plain but faithful helpmeet all her days, and brought up their three boys well—one of those wives "who shun all honors that their husbands may be honored thereby.

Time was so precious to Tōju that he lectured to his disciples until far into the night, sometimes even until four in the morning. His central themes were drawn from the character and teachings of Confucius and Ōyōmei, but as his mother was an earnest believer in Buddhism, he sometimes discoursed on the Buddhist scriptures for her sake, and even observed Buddhist festivals with her. His versatility and industry are also indicated by the fact that he studied and wrote about medicine, according to the crude notions imbibed from China.

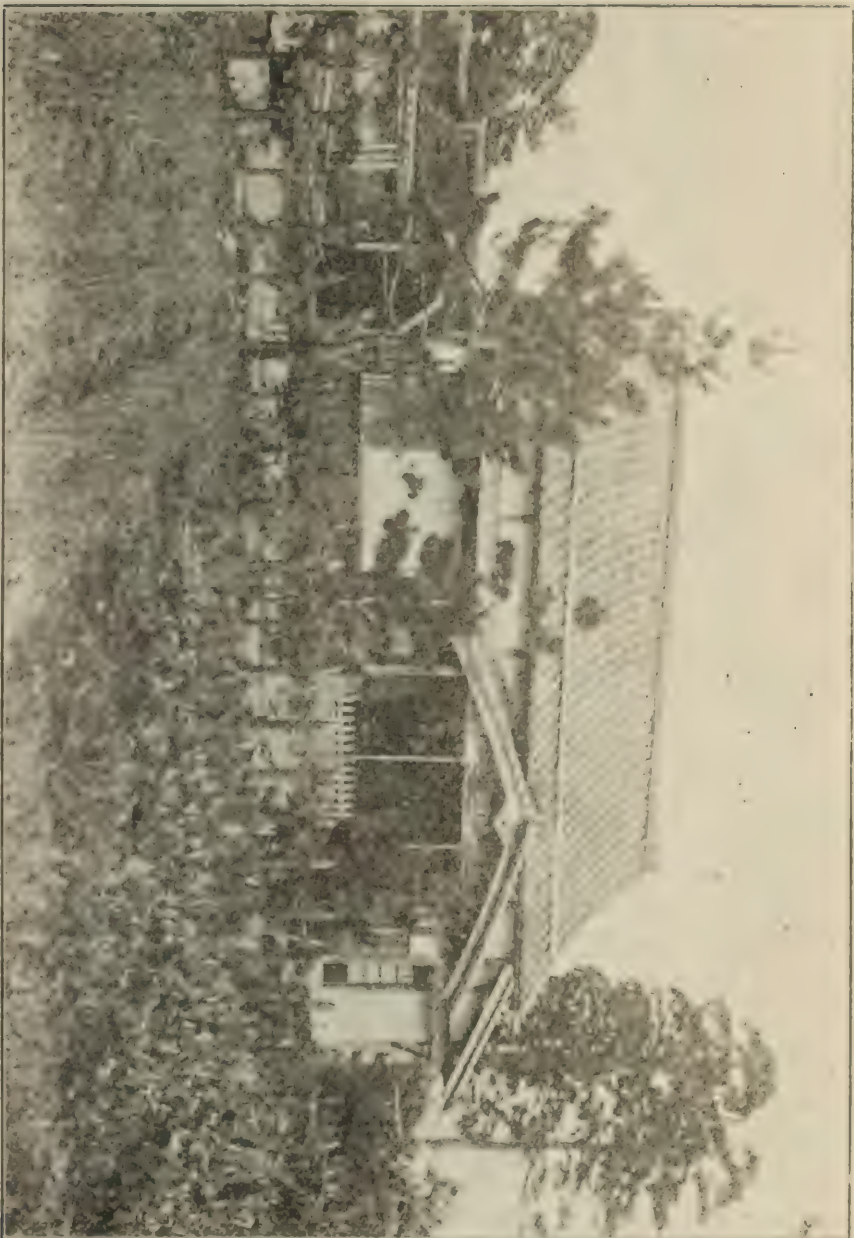
The morbid undertone of Tōju's earlier writing, due perhaps to his study of the Shushi philosophy, ceased from the day he came under the spell of Yōmei. No despondent note mars his later writings. He seems to have enjoyed life thoroughly, in his quiet, unruffled way. He has himself voiced his contentment in several poems that are worth quoting. This one was sung as he plied a boat on a moonlit night:

"A flaw in thought an inchlet long
　　A wake of a thousand leagues doth leave.

Let peace possess the depths of mind,
　　Let waves the cloudless moon not cleave."

known integrity enabled him to achieve indirectly what a more assertive man might have failed in. This is illustrated in the following anecdote:

There was a ruler of Ogawa Mura, named Beppu, who imprisoned a villager on account of a certain unintentional misdemeanor. His friends begged Tōju to intercede for the offender. So Tōju called on Beppu that evening and talked with him till midnight. But not a word did he say of the prisoner. The friends anxiously awaited his return. In reply to their questioning Tōju said: "Beppu's face became mild; have no further anxiety." And lo, the next day the prisoner was set free. Beppu told a friend who asked him how it had come about: "Mr. Nakae visited me last night, and I received him rather coldly, supposing, of course, he had come to apologize and intercede for the offender. But, to my surprise, he said not a syllable about the matter, out of respect toward me as ruler of the village. I was so impressed by his delicate consideration that there was nothing for me to do but pardon the prisoner."

For his pupils Tōju showed the tenderness of a father. One of them, Nakagawa, became enamored of an eccentric treatise by Sōshi 荘子, and was being carried away into fanaticism. Tōju was greatly troubled about him and told Nakanishi, another pupil, that he would rather lose his own child than see Nakagawa go astray. When this reached Nakagawa's ears he was offended and went forthwith to Tōju and said: "From my youth I have believed in you, Master, and submitted myself to you. I have not done this to gain favour but to discipline my character. O Master, why, if you saw anything amiss in me, did you not at once correct me, instead of letting me fall into this error?" Tōju's face flushed, but he replied with tender gravity: "A gentleman (kunshi) should not speak to another of his faults. With all my own short-comings I am striving to be a kunshi, and so I forbore to speak inconsiderately of your error. But at length my conscience forbade my remaining silent any longer and I spoke to Nakanishi. Ponder these things, my child." Nakagawa was deeply moved and repented of the error of his ways.

Tōju Shoin, or Tōju Memorial built in 1882, on the site and after the plans of the house occupied by Tōju and preserved by the villagers until burned in that year.

a farewell message. With a sigh he said: "Now I am leaving you. Who will take the burden of our doctrine upon him? See that my teachings be not lost to the land." Then he expired. Another account says that when he felt badly he used to lie with several pillows under his head, probably to ease his breathing. When he got better he took out the pillows one by one. Just before he died, his mother asked him how he felt. Dreading lest she should be worried over his condition, he took out one pillow with a feeble hand and replied, "Somewhat better, thank you." She was overjoyed at this and told him that he would be all right in a few days. But she had hardly left the room when he breathed his last. His fellow villagers showed every mark of reverence at the funeral, and his house, called Tōju Shoin, has been preserved and rebuilt again and again by the people, as the best memorial to their beloved sage. His simple, modest character had been to them a living ideal. They revered him like a god and called him Ōmi Seijin, the Sage, or Saint, of Ōmi.

Although some of the most striking anecdotes connected with Tōju doubtless have a considerable legendary element, still out of them there looms up a strong, consistent character. In his writings Tōju's plainness sometimes makes his thought seem trite, but in his actions his very ingenuous simplicity gave distinction to whatever he did. For the most part his conduct forms an admirable embodiment of his philosophy. He lived up to one of his ruling principles, that "Thought and action are one and inseparable 知行合一."

Tōju's sincere devotion to the doctrine that he preached, as well as his democratic temper, are shown in his incident: Once when travelling over the shoulders of Hiei San from Ogawa to Kyōto, he opened conversation with the porters of his palanquin, and led them on so impressively yet simply into his high conceptions of conscience and the inherent goodness of human nature that his untutored hearers were moved to tears of wonder and joy.

Tōju was undoubtedly the first citizen in his village, yet he seems to have arrogated to himself no arbitrary authority, but rather to have done all in his power to strengthen the hands of the authorities. At the same time, his tact and

influence was felt there for at least a century after his death. At Ōsaka also, Tōju's disciples spread the influence of the school.

The famous Arai Hakuseki was indirectly influenced by Tōju through "Okina Mondō," which he happened to read in his seventeenth year. Dazai Shundai, Kawada Yukin, Ōshio Chusai, Miwa Shissai and Satō Issai were also much indebted to Tōju, the last two being converted to Yōmei by his works. But the very originality and independence fostered by Yōmei principles militated against the building up of a compact school ruled by a single standard of orthodoxy. Hence we see not a few of Tōju's disciples, like Banzan and Chusai, diverging from their master. In later times we find such masters as Satō Issai, Miwa Shissai, and Ōshio Chusai acknowledging their indebtedness to Tōju, the first two being converted to the Yōmei school through studying him.

After the master's death, the school of Tōju was divided into two branches. One branch emphasized introspection and the cultivation of personal morality, the other tried to apply his ideas to state affairs and the improvement of public morality. One was idealistic and subjective, the other utilitarian and objective. Tōju himself was of a reflective, saintly temper, and hence became the founder rather of the idealistic branch. Banzan was a practical economist and statesman and founded the utilitarian branch.

Character and Influence.—Tōju's personal appearance does not suggest the ascetic sage and philosopher, for his likeness in "Lives of the Old Masters" and the description of him by Oki Geppo agree in representing him as quite fleshy. This may have been one reason why he became such an early victim to bronchial asthma. It was on his second and last voyage back from Ogawa to Ōsu that he had his first attack of the disease, but from that time he had more or less constant trouble, until finally he died from it on August 25, 1648, at the age of forty. His behavior on that last day was characteristic. With reverent composure he seated himself before his table, bade all the women withdraw, and summoned his disciples for

would have become of him. You are all naturally much more gifted. You can do anything you make up your minds to. What you lack is only perseverance." For a while during his later years Tōju yielded to the desire of friends and conducted an institute at Yoshiya-machi, Kyoto, which was revived and continued for several decades by his descendants. But he preferred the quieter life of Ogawa. At no one time did the number of his pupils exceed thirty-five or forty. He was indifferent to numbers; what he loved was to develop men. One of his most important methods of moulding men was by letters to former pupils, a sort of university extension system. These letters, indeed, constitute quite a valuable part of his published works.

With the exception of Banzan, the earlier disciples of Tōju wrote few noteworthy works, Kenshuku's "Zen Jin Ron" is one of the best. But they showed a marked aptitude for administration, in strange contrast with their retiring master. A number of them, including Tōju's three sons, served the Lord of Bizen (Okayama). One of the ablest disciples was Idzumi Hachiemon, generally known as Chuai, the younger brother of Banzan, a calm, silent, clear-headed man. He early rose to the highest post in the Bizen government. In connection with his taciturnity this incident is told: At the council table, even when the discussion waxed hot and views opposed to his own were urged, he spoke but seldom. A fellow councillor, irritated by his very calmness, sputtered: "What moved our Lord to put this tongue-tied fellow over us?" After a pause an elder statesman fierily retorted: "Our Lord is far wiser than other men. For with Chuai in the chair men beware of disorderly, boisterous language and keep a watch on themselves. This means that he is a powerful teacher, and a strong cable for the maintenance of order and government. What can be greater than this? Wherein has our Lord erred?"

Of Tōju's three sons, two died comparatively young. The third lived to the ripe age of sixty-four, serving in turn the Lord of Bizen, and the Lord of Tsushima. Tōju's descendants made no special contributions to his system. But one after another succeeded in keeping up the Institute in Kyoto, so that his

He finally relented and welcomed Banzan into his inner circle. It is safe to say that his formative influence over the future financier and administrator of the powerful Okayama clan during those few months at Ogawa, constitutes one of Tōju's chief contributions to his country[13].

His Disciples.—Tōju's fame steadily grew, drawing to him a large circle of disciples, among whom, next to Banzan, the most noted were Nakagawa Kenshuku, Idzumi Hachiemon, Nakamura Matanojo, Kase Hachibei and Tanikawa Gizaemon, Kenshuku was his very first disciple, having become attached to him at Ōsu and having followed him to Ogawa. Kenshuku married Tōju's niece and served him like a son for many years. But Tōju showed little if any partiality toward his more brilliant pupils. He was singularly patient with dullards, provided they were genuinely earnest, as the following story will show:

One of Tōju's friends at Ōsu had a son, Ryosa, who was a hopeless blockhead. The father was chagrined at the thought of making such a son heir to his samurai position, and determined to put him to a humble occupation. Ryosa, cut to the quick by this humiliation, asked Tōju to tutor him privately in medicine. Out of pure sympathy, Tōju consented and undertook to teach him to read and memorize a certain medical work. The opening two or three sentences were first repeated to him about two hundred times, beginning at ten in the morning. By four in the afternoon the passage seemed to have been roughly committed to memory. But after supper it was found to have been entirely forgotten. Days, months and years were spent over it, but all in vain. When Tōju returned to Ogawa, Ryosa followed him. Being convinced of the futility of the ordinary ways of teaching him, Tōju went so far as to compile a medical book especially for his use, and gave him lectures upon it. His patience was at length rewarded by seeing Ryosa blossom out into a medical practitioner. Tōju told this once to his disciples and said: "I have spent all my energy on Ryosa. If he had not been so diligent, I cannot tell what

13. Uchimura, pp. 155—161.

yours.' I tried to force fifteen pieces, then five, then two, and finally one piece upon him, but in vain. At last he said: "As I am a poor man, pray give me four *mon* for a pair of straw sandals, as I came all the way from my home, ten miles away, to return the bag.' Try as I might, I could only persuade him to take two hundred *mon* (equivalent to perhaps fifty *sen* to-day). He was on the point of going gladly away, when I stopped him and said: 'Pray tell me what made you so honest and unselfish? Such virtue I never thought to find on earth.' 'There lives in my village,' the peasant replied, 'a man named Nakae Tōju, who teaches us villagers these things. He says gain is not the aim of life, but honesty, righteousness and benevolence. We all walk by his teaching.'

Banzan drank in the story. He clapped his knee and exclaimed: "Here is the sage I am seeking. I will go to him to-morrow morning and become his servant and disciple." Accordingly, at daybreak he started for Ogawa, inquired the way to Tōju's house, and found him in. Forthwith he confessed his purpose in coming and humbly begged to be taken in as a disciple. Tōju was surprised—he, a village teacher, sought out by a knight from a distant province! He denied the request, but Banzan was importunate, and refused to move away from his sworn master. Tōju was also obdurate. It became a rivalry between importunity and humility.

As neither arguments nor entreaties availed to move the master, Banzan made up his mind to win his case by sheer perseverance. So by the gate of the master's house he spread his upper garment, and there in the posture befitting a gentleman, swords at his belt and hands on his knees, he sat, exposed to the sun, the dew, and the comments of passers-by. It was summer, and mosquitoes are troublesome in those regions, but nothing could break his dignified posture nor his stedfast resolve. For three days and three nights his mute prayer was thus made, but the master within remained silent and inflexible. It was then that Tōju's mother used her great influence in the youth's behalf. Her appeals to Tōju's sympathy and honour in face of such noble perseverance led him to reconsider the question. Surely his adored mother must after all be right.

life, unknown outside his own county and caring nought for fame. But his virtues could not be hid and pupils flocked to him more and more. His most famous papil came to him in this wise.

A young retainer of the daimyo of Okayama, Banzan by name, set out for a town in Omi not far from Ogawa to study arms and literature. On the way he stopped at a country inn, on the borders of Omi. In the room next to his, separated only by the thin partition, were two travellers, evidently of but recent acquaintance. Their conversation attracted Banzan's attention. One of them, a samurai, was telling his experiences, as follows:

"I had gone up to the capital (Yedo) on my lord's business and was on my way back carrying several hundred pieces of gold. These I usually kept close to my body; but on the day I reached this village, contrary to my custom, I fastened the money bag to the saddle of the horse which I had hired for the afternoon. Arrived at the inn, I forgot the treasure on the saddle and dismissed the horse and groom. Only some time afterward did I discover my fearful loss. I was beside myself I knew neither the groom's name nor his address. Even if I could have found him, of what use would it have been, if he had already squandered or hid the gold! I was tormented with remorse and fear as I tried to think how I could explain the loss to my master. I wrote letters, one for the chancellor, others for my relatives, and prepared for my last hour.

"While in the grip of these agonizing thoughts, suddenly, about midnight, I heard somebody pounding at the hotel gate. In a moment I was told that a peasant wanted to see me. He was shown to my room and, to my astonishment, he was none other than my groom of the afternoon. 'Sir Knight,' he began, 'I believe you left an important parcel upon the saddle. I have come back to hand it to you. Here it is.' I was transported with joy. Collecting myself, I said, 'Man, I owe my life to you. Take a fourth of this as the price of my existence. You are my second father.' But he replied, unmoved, 'I am not entitled to any such thing. The purse is all

It was not till 1641, in his thirty-third year, that Tōju was directly introduced to the Yōmei philosophy by "Oryukei Goroku" 王龍渓語録 (Memorable Words of Oryukei.[10] which was written by a disciple of Yōmei.

Finally, in 1645, Tōju acquired and read the complete works of Oyōmei, a red letter event in his life. The story is best told in his own words: "I had been for many years a devout believer in Shushi. When, by the mercy of Heaven, the 'Collected Works of Oyōmei' were brought for the first time to Japan, I bought and devoured them. Had it not been for the aid of this teaching, my life would have been empty and barren. I am filled with gratitude." This was the greatest turning point in his career. The three remaining years of his life he spent in propagating his new-found gospel by voice and pen, planting the aggressive Yōmei principles deep in the congenial soil of Japan. But with all his enthusiasm for Yōmei, he still saw some good points in Shushi and used them to supplement Yōmei. The effect of Yōmei on his character was to make him more optimistic and liberal and, at the same time, more spiritual[11].

As a Teacher.—Tōju was twenty-eight when, leaving his peddling, he opend a school in his own village. His own house served as lecture-hall, chapel and dormitory, all in one. Confucius' likeness[12] was hung up in the place of honor, and to him incense was burnt by the master and his pupils. The curriculum consisted solely of the Chinese classics, caligraphy, poetics, and history. For years he led a "mute, inglorious"

---

10 The Zen elements in this work may partially account for the Buddhist ideas in Tōju.

11 It would be impossible to say just how much originality Tōju showed, without comparing him in detail with Ōyōmei. This must wait until Ōyōmei has been rendered into some European language or must be done by someone who can read both Japanese and Chinese. It is, however, safe to assert that Tōju's title to greatness rests upon his saintly character far more than upon his philosophical originality.

12 It may have been the kakemono portrait drawn by Tōju's own hand, which is still preserved at Ogawa. Over the portrait this poem or ditty appears. "Confucius: Confucius, Confucius! Great is Confucius: Before thee was none like thee; After thee there has been no successor. Confucius, Confucius, Confucius! Great is Confucius!"

five *sen* in the present currency) left. With it he bought a little sake, and the scholar, turned pedlar, went round the country-side selling it at a slight profit. He also disposed of his sword, "the samurai's soul," getting ten pieces of silver for it, which he lent out at interest to the villagers. For two years he eked out a humble existence in these menial ways, keeping his self-respect and enjoying his mother's smiles.

Intellectual Development.—From his twentieth year Tōju had made the "Four Classics" his daily companions, particularly, the "Analects" and "Great Learning," which were law and gospel to him. Only second to Confucius himself as a formative influence in these earlier years was Shushi, who accentuated Tōju's naturally reflective temper and made him unduly introspective. His first work, "Notes and Comment on Great Learning," written in his twenty-first year, betrays this morbid tendency. His dissatisfaction with himself only drove him to harsher self-discipline, and made him cold and stoical. But the sterner his regimen and the deeper his study became, the fuller of sceptical unrest he grew, until he came to doubt whether the precepts of the masters were not counsels of perfection, after all. He was in this frame of mind, in his thirty-first year, when he began the study of the "Five Classics" 五經. The Books of Odes, of History, of Rites, of Music and of Changes. How deep an impression they made is evident from two volumes they inspired, in which he laments having been engrossed with the outward forms of the teaching of the masters, to the neglect of their inner spirit.

The first definite stage in his conversion to the Yōmei school was marked by the reading, about 1639, of the classic "On Filial Piety" 孝經. He made it a practice to recite it every morning.[8] One of his finest works, "Okina Mondō" 翁問答 (Dialogues with an Old Man), reflects his thought at this period, and contains suggestions of Yōmei views.[9]

---

8 It was with something akin to awe that, on a recent visit to "Toju Shoin," the cellection of relics at Ogawa, I turned the worn leaves of the copy of this classic, in Toju s own handwriting, which he used in his moring orisons.

9 See Dr. G. W. Knox's excellent abridged translation in "The Chrysanthemum.' vol. 2. under the title "A System of Ethics.' With Dr. Knox's kind permission I have used several sections of his translation in this paper. Although written before Toju's conversion to Yomei, "Okina Mando" fairly represents his mature views, for the reasons that it deals chiefly with ethical questions, on which his views changed but slightly.

unlettered samurai is a chattel, a slave. Are you content to be a slave?" Tōju's outburst had its effect. The fellow owned his ignorance and thereafter held his tongue.[7]

In 1625, in his seventeenth year, his father died, and he longed to go home to Ogawa out of respect for him and solicitude for his mother. But his lord objected and he stayed at Osu for nine years more, only making two brief visits to his mother during his fifteen years' absence. We have few data for the later years at Ōsu, knowing only that he was a strict disciple of Shushi and that he grew daily in fame for learning and purity of character. Honors and emoluments were waiting for him, but he could not be content away from his lonely mother.

Finally, in 1634, he made up his mind to leave his lord and cleave to his mother, illustrating in practice what all his life he held in theory, that filial duty takes precedence of loyalty. He reached this decision only after severe struggles, which can best be described in his own words in the letter which he left to explain his departure. "I petitioned for release in part because my poor health prevents me from serving my lord as well as my associates can, and in part because my mother has for ten years lived a lonely life with no one to comfort her. My lord can hire any number of servants such as I, but I am her only son and support. She cannot trust any of her relatives. She pines for me and more than once she has been at the verge of starvation. Last year I planned to bring her hither, but she was too old and feeble to stand the journey, for she can hardly walk. Moreover, being a woman, she cannot bear to go so far from her old home. I have had two fathers and two mothers, but three of them passed into the other world in my youth, and my mother will soon follow them. So I am set on going home to ease her last years. I will return and serve my lord again after she passes away. This is my only motive in deserting. If I have told any lie in this letter, Heaven will surely punish me, and will not let me meet my mother in the next world."

The happy hour that brought him to his mother's side found him with only a hundred *mon* (worth, perhaps, twenty-

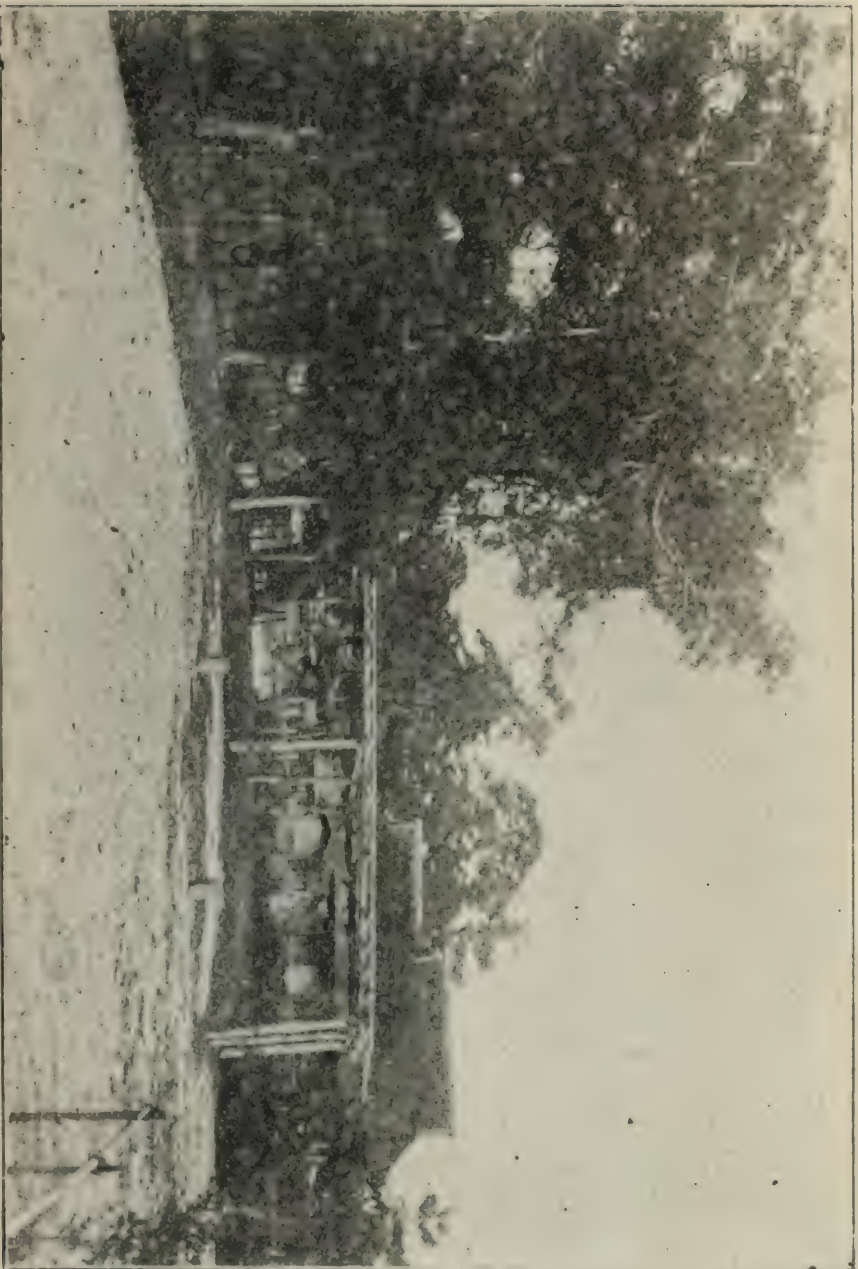
---

7. Uchimura op. cit. p. 148.

about this time to one Tenryo, a Buddhist priest of great learning, to be trained in the arts of poetry and caligraphy. Of the many questions that the precocious youth put to his teacher, the following was characteristic: "You tell me," said Tōju, "that when Buddha was born, he pointed one hand heavenward and the other earthward, and said, 'I alone of all beings in heaven above and under the heavens am worthy of honor.' Was he not the proudest of all men under heaven? How is it possible for my Reverend Master to own such as he as his ideal?" Tōju never liked Buddhism after that. His ideal was perfect humility, and Buddha lacked it.[6]

When he was about sixteen Tōju suffered one of the severest sorrows of his life in the death of his grandfather. But he set himself all the more intently at his books and his duties as a retainer of Lord Katō. Fortunately, in the summer of this year, 1624, a Zen priest was invited to Osu to lecture on the "Analects" of Confucius. Tōju became a regular attendant and almost the only one, for the people in general thought that a samurai's business was to fight and despised book learning as fit only for priests and recluses. After the priest had gone, Tōju, then aged seventeen, was able for the first time to obtain a complete set of Confucius' "Four Books" 四書, showing the scarcity of books at the time. Such was the popular feeling that Tōju had to study in secret, applying himself by day to martial discipline, and by night to his precious books. One day one of his comrades addressed him as "Confucius," in evident derision of his nightly devotion to his books, as well as of his even self-control, a contrast to the ordinary quarrel-loving youths about him. "You ignoramus, you!" was the gentle lad's indignant retort. "Holy Confucius has been dead now two thousand years. Mean you by that epithet to blaspheme the Sage's name, or to deride me for my love of knowledge? Poor fellow! War alone is not the samurai's profession, but the arts of peace as well. An

---

6. Cf. "Representative Men of Japan," by Uchimura Kanzo, p. 147, an interesting appreciation embodying some semi-legendary material, which is, however, so true to life that we shall quote several more passages further on.

The Wistaria Vine (Jap. tōju) to the rear of Tōju Shoin, from which Tōju took his name.

rulers, and the calm and impressive scenery around his father's farm may possibly have fostered in the future sage a reflective, reverent frame of mind.

Although only a farmer's son, Tōju had a quick, retentive mind. Fortunately, perhaps, for his intellectual development, he was adopted in his ninth year by his grandfather, a samurai in service to the daimyō, Lord Katō. Common as adoption has always been in Japan, it seems strange that Tōju's parents should have thus given up their only son. We only know that they did it after a severe struggle with their affections. They may have allowed filial deference to the grandfather's wish to outweigh their parental affection, or they may have seen in it a better opening than they could hope to make for him in the rice fields of Ogawa. Be that as it may, under the encouraging guidance of his grandfather, who regretted keenly his own lack of education, Tōju made rapid progress in learning to read and write.

Within a year or two the grandfather was transferred to Ōsu 大洲 near Matsuyama, and Tōju went, too. It was there that the lad was given Confucius' "Great Learning" 大學 to read for the first time, and he came across those words in the first chapter: "From the Emperor down to the commonest person, the cultivation of character is the chief business of life." It seemed to him like a special revelation. "Heaven be thanked!" he exclaimed, with tears of rapture, "and why cannot I by study and effort become a saint myself!"

Not long after this, while eating in the silence prescribed by Confucius, he was deeply moved, at the thought of the three great blessings given him by Heaven: his parents, his grandfather, and his feudal lord. It is said that whenever he was told of his lord's approach, even when lost in his books, he would kneel and bow toward the point where the lord was expected to pass.

But the boy was by no means a mere sensitive weakling, bent upon books and devotions. When he was but thirteen, and a mob attacked his grandfather's house, he was among the first to rush into their midst, sword in hand, and beat them off; and "then was as calm as before." He was sent

2. Shushi held that the fundamental principles of the universe are two, ri and ki, law and its embodiment, or thought and energy. He was, therefore, a dualist. Yōmei, on the contrary, declared that ri and ki are one and inseparable. He was what we might term a monist.

3. Shushi distinguished between the natural mind or heart, kokoro 心, and eternal law or reason, ri 理, holding kokoro to be dependent upon ki 氣, the active, passionate element in the universe. Yōmei explained kokoro as being the same as ri, that is, if the mind and heart were only clear and bright, reason would be self-evident. Hence, Yōmei did not investigate the outer world to find ri; to him the one thing needful was to make the kokoro clear within.

4. As Shushi held that ri could only be comprehended by a great number of experiments, he tended toward experimentalism 經驗論, whereas Yōmei declared that pure wisdom only existed in kokoro, and therefore tended toward idealism 唯心論.

5. Shushi said: First know, then do. Yōmei would put neither knowing nor doing first, but asserted that they were at bottom identical 知行一致. Hence, Shushi exalted mental culture, but Yōmei deeds. The natural result was for disciples of Shushi to show the broader, more varied learning, often in combination with an oily, devious temperament. Yōmei disciples, on the other hand, however narrow their culture, were apt to be upright and downright, to use a short sword and thrust straight 短刀直入.

NAKAE TŌJU, THE SAGE OF ŌMI.[5]

Youth and Education.—Nakae Tōju was born in the opening years of King James the First's reign, in 1608, in the remote village of Ogawa, Ōmi Province, on the western shore of Lake Biwa, under the shadow of Mount Hira. The country was at peace under Hideyoshi, the first of the Tokugawa

5. Based chiefly upon "Nihon Yōmei Gaku Ha no Tetsugaku," by Dr. T. Inouye, 4th edition, 1903.

Ethics not Philosophy the Central Interest.—The subtle and, to a westerner, almost unintelligible controversies which raged around these categories in both China and Japan were almost as fierce as those between nominalist and realist in Europe. But these controversies may be practically ignored by the ordinary student of Confucianism, for the central interest of the philosophers themselves was after all not in metaphysics but in ethics. And in ethics the differences between Shushi and Yōmei, between Tōju and Kyusō, are insignificant in comparison with their agreements. Indeed, the dominance of the ethical over the metaphysical interest in Japanese Confucian philosophers is only less marked than in the Hebrew prophets. The metaphysical background of all the Confucian schools grew up long after the ethics of the five relations and the five virtues had become the warp and woof of Chinese society. And fortunately, the ethics came to Japan centuries before the metaphysics. So it comes to pass that Shusi and Yōmei champions, spar as they may over ri and ki, are as much at one in their practical ethics as Calvin and Arminius. Individual teachers have their pet terms, e. g. Tōju his Conscience 良知 and Banzan his Humane Government 人政. But all alike exalt obedience to the way 道, the obligations of loyalty 忠 and filial piety, propriety in station and in demeanor 禮, benevolence 仁, righteousness 義, understanding 知, and faith 信, just as unanimously as Bentham and T. H. Green preach self-control, patriotism, honesty and justice. But secondary as the metaphysics is, in order to appreciate fully the lives and teachings of Tōju and his contemporaries we must at least glance at the metaphysical principles of Shushi and Yōmei.

Some Metaphysical Points of Difference.—According to Dr. Inouye, the differences between the Shushi and Yōmei schools were as follows:—

1. Shushi exalted learning, holding that the laws of morality could only be truly discovered through it. Yōmei put morality first and learning second, even going so far at times as to hold that morality itself is the only learning, thus outdoing Matthew Arnold's "Conduct is three-fourths of life."

life for this and other acts of hostility to the Tokugawa Shogunate.[3] Naturally, Shushi was favored and Yōmei repressed by the Tokugawa, for the double purpose of preventing rebellion and of stifling criticism of their shaky title to power. On the other hand, patriots eager to buttress the Imperial throne were for similar reasons also champions of Shushi, so that Shushi would seem to have been impregnable. But the spirit of popular rights, imbibed from Confucius himself, and of freedom of thought imbibed from Yōmei, defied all these barriers and found powerful expression in a chain of Yōmei scholars, statesmen and moralists, whom Dr. Inouye considers superior in loftiness and vigor of character to the exponents of the Shushi teachings. As Prof. Lloyd says, "The tendency of Shushi disciples is to become gentle, humble and truthful." Yōmei, on the other hand, added an infusion of originality and activity, and hence attracted the more virile, aggressive natures. The democratic tendency of Yōmei is seen in the adoption, by Banzan, even more than by Tōju, of a style intelligible to the common people, even at the cost of bitter taunts from the vast majority of the literati, who clung to stilted Chinese.

The Chief Categories the Same in Both Schools.—Differ as the two schools may in their philosophy, they both deal in the same terms or categories, namely, ri 理, ki 氣, ten 天, and taikyoku 太極, for both of them hark back to Mencius. These terms cannot be accurately rendered into English, but approximately, they mean: ri = fundamental and unchanging law and ethical order; ki = the active, passionate element in nature and in man, which determines the embodiment of ri; ten = the impersonal, passionless over-soul, a perfectly just providence and fate combined; taikyoku = literally, the great limit, or more freely, the infinite potentiality of what ri and ki evolve in the universe.[4]

---

3. Dr. Inouye's "Nihon Yomei Gaku Ha," 4th ed. pp. 440–3.

4. For a complete treatment see the admirable essays by Dr. Knox and Mr. Haga in T. A. S. J. Vol. XX, pp. 1–24; 134–192.

THE YŌMEI SCHOOL

THE Yōmei philosophy owes its name to its founder, O-Yō-Mei 王陽明 (Chinese, Wang-Yang-Ming 1472—1528), a contemporary of Sir Thomas More, Tyndale and Descartes. He was thus three hundred years later than Shushi 朱子 (Chinese, Chu Hi 1130—1200), the Martin Luther of Chinese Confucian thought. Like Shushi, O-Yō-Mei dared to think for himself, while believing himself to be loyal to the old masters.

In Japan during the seventeenth and eighteenth centuries the Shushi school was recognized by the Tokugawa rulers for political ends as the orthodox teaching, and all other schools were proscribed.[2] Hence, when Nakae Tōju about 1640 became a convert to Yōmei doctrines, he espoused a branded cause. It is this element of daring to defy the ban of the State and the opposition of the orthodox that gives a dramatic interest to the school. Tōju and his followers rendered a priceless service to Japanese thought, for as Dr. Inouye suggests, they saved it from the deadening clutch of a single school, so baneful in China, and gave it new room and stimulus to growth. One result of the opposition of the officials and literati was to drive Yōmei doctrines through the lower social strata and to make them the vehicle of a sort of gospel of democracy. Shushi stood for the inviolability of the powers that be; Yōmei stood for the rights of the people, especially the right of protest and even of revolt against a bad ruler. It was a noted Yōmei representative, Ōshio Chusai, who was so wroth over the refusal of the officials in Osaka to remit taxes during the scarcity of 1839 that he rifled the Government granaries and distributed rice to the people, paying with his

2 This may have been first suggested to the Tokugawa by the fact that in China it was for centuries forbidden to quote from any school but Shushi in the examination essays

Nakae Tōju, The Sage of Ōmi

BY

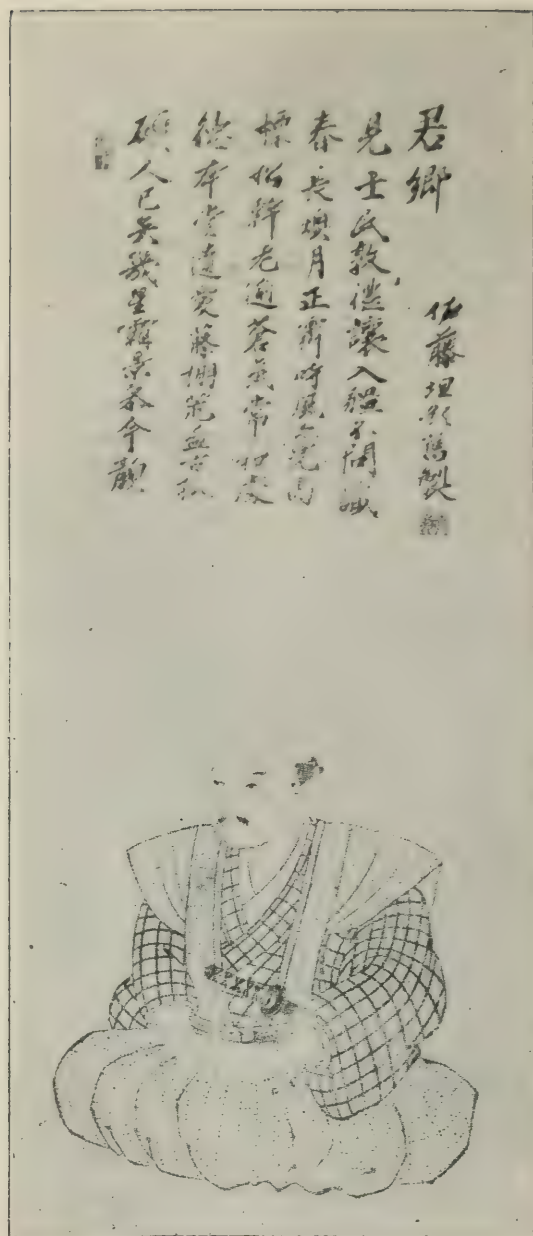
GALEN M. FISHER, M. A.

INTRODUCTION

THE essays by Dr. Knox and Prof. Lloyd in volumes XX and XXXIV of the Transactions of this Society constitute the major part of the comparatively scanty material in English on the Confucian philosophy in Japan Of Confucianism in China we have an abundance of translations, but it is strange, in view of the divergent and varied evolution of Japanese Confucianism and its dominating influence over the nation's modern development, that it has hitherto been so inadequately studied by Europeans. What a godsend it would be if the trilogy of works by Dr. Inouye Tetsujiro, covering the three chief schools of Confucian thought in Japan, Shushi, Yōmei, and Kogaku, could be made accessible to foreign readers![1]

The mention of the Shushi school at once suggests its greatest rival, the Oyōmei, or Yōmei school. It is to be hoped that someone will write an historical sketch of the Yōmei school in Japan corresponding to Prof. Lloyd's sketch of the Shushi School. But meanwhile I propose to present the lives and teachings of the introducer of the school into Japan, Nakae Tōju 中江藤樹, and of his most distinguished disciple, Kumazawa Banzan 熊澤蕃山. For, apart from the high interest of Tōju and Banzan as moulders of the thought and life of the nation, they illustrate the salient ideas of the Yōmei school and thus form a fitting introduction to a fuller study of it. I desire to acknowledge here the expert assistance of Prof. Uraguchi Bunji in preparing this paper.

---

1 Since the above was written, the Society has been fortunate enough to secure for publication reviews of these three volumes by Prof. W. Dening.

Nakae Tōju, drawn by Kanō Yuhō of Kyōto. The inscription is a poetic eulogy of Tōju, composed by Satō Tan.

CONTENTS

I am now commissioned to inform you that the Council is willing to grant the desired permission on the understanding that due acknowledgment is made to the Society.

Yours faithfully,

N. K. Roscoe,

Hon. Treasurer,

The Asiatic Society of Japan.

筆者 G. M. Fisher 氏の履歴及現在について京都基督教青年會總主事梅村英氏より校正委員井上正男君に宛てたる來示あり。併せ附して參考に資す。

G. M. Fisher,

1, Born in Berkley, California, about 1872.

2, Educated, University of California, A. B.; Harvard, M. A.

3, Came to Japan, 1899; departed, 1919.

, Served the National Committee of Y. M. C. A. in Japan as Honorary Secretary.

5, Member of "Asiatic Society" of Tokyo.

6, Now General Secretary of The Institute of Religious and Social Survey, New York, a Rockfeller institution.

印刷に際しては一行中の字數及び一頁中の行數に至る迄原文のまゝに轉載して原本の眞を傳へんことに力めたり。されば明かに原文の誤植なりと斷ずべきもの丶外史實の誤れるものといへども之を訂正せざりき。讀者幸に之を諒とせよ。

底本もと Contents なし。今之を附加す。

昭和三年三月一日　　　加藤盛一　謹識

近江聖人中江藤樹の傳記と教説

解題並凡例

本書の原文は明治四十一年卽ち西紀1908年發行に係るTransactions of the Asiatic Society of Japan vol. XXXVI, Part I に載せられたるものなり。

編者大正十年の比，職を奉じて滋賀縣立今津中學校に在りし時，學校内に設けたる週次研究會に出席せる郡內小學校訓導黑田某氏あり。外國人が藤樹先生を研究したる成績なりとして雜誌一本を示し，且つ語るに編者に寄贈すべきを以てす。就いて觀るに著者G. M. Fisher氏が往昔藤樹書院にdedicateしたるものにして，一時散佚に歸したるものが偶〻前記黑田氏によつて編者の手に入れるは奇緣とも謂ふべし。且つ同氏によつて斯かる研究の存するを知り得たるは，實に編者のみの幸慶に非ざるなり。

內容を檢するに，時に史實を誤りたるもの無きに非ざれども，輕快の筆致を以て，藤樹先生の傳記と其の敎說の大要を解說したるは喜ぶべく，特に他國の言語を以て記載せられたる爲め，熟知の事實にして猶且つ特殊の感興を覺えしむるもの多々これあり。

原文のまゝ全集中に採錄せん爲め昭和二年九月，東京駐在の亞細亞協會會計主任Roscoe氏に書を致し轉載方を懇請したるに次の如き書を寄せて快諾せられたり。

N. K. ROSCOE, B.A.,
P.O. Box 108 Central
Telephones {Office, Ote 4872 (L.D.) / Residence, Aoyama 5073}

HONORARY TREASURER'S OFFICE,
Osaka Building,
3 Uchisaiwai-cho, Itchome,
Kojimachi-ku, Tokyo,
Japan

Morikazu Kato, Esq.,
19 Nishi Machi,
Kita Shirakawa,
KYOTO.

October 6th, 1927.

Dear Sir,

At a Meeting held yesterday I brought before the Society your letter of the 22nd ultimo, applying for permission to reprint Mr. G. M. Fisher's article on "The Life and Teaching of Nakae Toju, the Sage of Omi," which originally appeared in Volume XXXVI, Part I of the Transactions.

THE LIFE AND TEACHING

OF

NAKAE TŌJU, THE SAGE OF ŌMI

BY

GALEN M. FISHER.

昭和十五年十一月二十五日印刷
昭和十五年十一月三十日增訂第一刷發行

藤樹先生全集第五(別)册

著作權者 財團法人 藤樹書院
右代表者 西川伴三郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者 岩波茂雄

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷者 菊地眞次郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所 岩波書店
電話九段(33)一一八七・一一八八番
一一八七・一一八〇番
振替口座東京二六二四〇番

大日本印刷 大森製本

小店出版物中、萬一不完全な品（落丁・亂丁等）がありました節は、御手數乍ら遠慮なく御申出下さる事を御願ひ致します。たとへ御讀後でありましても早速お取替致します。